

可奈美のお兄ちゃんは妹のために最強の剣士を目指す！

黒崎一黒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはアニメの中に実際存在した可奈美のお兄さん。アニメ最終話に一度きり出た情報。そんで。もしお兄さんがメインストーリーに参戦するなら、どうなるのかなという話し。

目次

第0話：失い衛藤家の日常。	1
第一話：妹と甘い味の夜	12
第二話：朝の出会い	21
第三話：守護の末	33
第四話：進学先は……。	43
第五話：可奈美のお兄さん	58
第六話：胸が騒ぐ雨	72
幕間：極普通の女の子、長江ふたば	85
第七話：怒り	91
第八話：賭けと試合	103
第九話：そして、彼女達と……。	121
第十話：第五席候補	135
番外編：妹に最高の誕生日を（前編）	148
番外編：妹に最高の誕生日を（後編）	159
胎動篇	
第1話：ある少女の思い	169
第2話：お兄さんとバイト	179
第3話：共鳴	190
第4話：心の距離	202
第5話：御前試合と再会	214
第6話：親友の思いと逃走	227
第7話：尋問	241
第8話：逃亡した二人と追手	254

第9話：偽りの約束	263
第10話：荒魂は所詮穢れもの	277
第11話：無念無想の少女	290
第12話：貴女の道具ではない	298
第13話：昔の幼馴染	312
第14話：沙耶香の英雄	324
第15話：彼女の意思	335
第16話：鎌倉の夜での激戦	347
第17話：名前の意味	360
第18話：妹との再会と真相	370
第19話：彼女たちを見守る者	384
第20話：恋バナとお祭り	398
幕間：本心をバラす相手	413
第21話：お祭りの後	422
第22話：都の決心	434
第23話：大切な人	445
第24話：明日への決意	458
第25話：希望	471
第26話：月下の一閃1	482
第27話：月下の一閃2	495
第28話：胡蝶の夢	509
第29話：夢（結芽）の果て	524
第30話：決戦	541
第31話：《真の一つの太刀》	556
第32話：新たな嵐の前兆	570

波瀾篇

第33話：次世代の英雄たち

第34話：妹がない四ヶ月

第35話：柳瀬家の場景

第36話：親の愛

第37話：子供の成長

第38話：再会と“ありがとう”

幕間：プールでの遊び（前編）

幕間：プールでの遊び（後篇）

幕間：騒ぎ出す恋心（エレン編）

第39話：群馬の任務

第40話：荒魂と人の狭間

第41話：益子家のケジメ。

第42話：群馬山の激戦

幕間：調査隊との共同任務

第43話：帰還

第44話：誕生日会

第45話：女神の会見

第46話：襲撃

第47話：ノ口を受け入れる者の話、と対決

第48話：面会前の一時

第49話：罪と最後の女神。

第50話：悲劇の夜。

第51話：戦前の準備

第52話：開戦の時

883 871 857 844 831 818 802 788 774 761 745 733 721 709 697 678 669 656 643 631 617 604 591 581

第53話：防衛省の戦い	896
第54話：激闘の夜	907
第55話：連れて戻せぬ者	920
第56話：敗北と悲鳴。	932
第57話：古き約束	943
第58話：覚醒	954
第59話：戦いの後、変わっていく関係	972
第60話：出院、そしてより騒乱の時代へ	989
第61話：波瀾の中、新たな可能性をもたらす者たち。	1002
第62話：特訓開始。	1017

第0話：失い衛藤家の日常。

記憶にある母はいつも笑顔で剣を振りかぶってきた人でした。

毎回、このことをクラスメイト達に話している時、よくどんな家庭なのかって笑われたことがあった。でもそれは俺にとって、衛藤家^ちだけにあつた日常風景なのだ。

小さい頃から、俺と妹二人はよく母の剣術稽古に付き合わされた。今思い返して見ると、毎回は笑顔で剣を振りかけていた母にボコボコされる一方だった。

けどそんな母の教育のおかげで、俺と妹二人は母以外の人と喧嘩ごとに負けることはなかった。多分、あのときの俺たちはそんなバカ親の影響下で日々強くなっていたのかもしれない。

それはもう、寝る時も、ご飯の時も、剣術稽古でボコボコされたときも、幼稚園や小学校を通うときも、母を倒すために剣の振り方をより一層研ぎ澄ましていくことにしか考えていなかった鍛練日々のおかけなのかもしれない。俺や妹はそういう環境下で育てられた。

それでも、俺たちは剣術指導をしてくれた母を一度でも超えることがなかった。それで、負けず嫌いの妹と全く同じ負けず嫌いの俺は毎日諦めず、母を目標にし、剣の道をまっすぐ歩き続けていた。

いつか必ずそんな母を超えられる日々が来ると毎日期待していた。この幸せな日々はずっと終わらないと、ずっとそう思い込んでいた。そしてある日、母は急に謎の病気で入院した。

その日から母との稽古はなくなり、やむを得なく俺と妹だけの稽古日々が始まってしまった。当時、俺より気弱い妹の気持ち配るため、必死に自分の不安を抑え、母が戻ってくる前は一緒に強くなり、母をびつくりさせようと妹にそう提案し、彼女を安心させたが……。今思うと、自分のその提案はとても甘かった。

数カ月後、母が病死した。

その日から、全てが変わった。

信じられない残酷な現実が目の前に起きた。幼い俺達には決して予想するはずがなかった悪夢だ。

母が亡くなった日以来、妹は二度と剣を振ることをしなかった。俺も毎日続くはずの稽古をやめることになった。

母を失うダメージは、最愛の母を失った子供にはとても重かった……もう昔のみたいな生活に戻れない。

こうして、衛藤家はかつての活気を失い、普通の家庭に戻ってしまった。

◇

それから数年が経ち、10月のある日に衛藤^{えとう} 都^{みやこ}はクラスの担任に呼び出されて、放課後の教務員室にやってきた。

「なあ、衛藤。お前、まだ進路決めてないんだって？そんなグズグズしすぎると、あつという間に卒業しちゃうぞ！」

そして相変わらず、進路のことを促く。

毎回そのとき、彼はいつも担任のことを「しぶとい野郎！」と心の中であつさり罵っている。

「でもやりたいことがないですよ、先生。」

「あのなあ……そのやる気がなく、偉そうな態度をやめてくれない？俺は一応お前のクラスの担任なんだ。せめて教師に対する礼儀を努力にしてくれ。」

そして、教師側も彼と同じ。彼のそのやる気ない上に教師を舐め回すその態度に腹立たしくて仕方なくなる。

正直、当面でこの生徒を殴ってもおかしくないほどイカれている。

けど、目の前にいる生徒は衛藤 都という学生だ。成績優秀以外、運動神経、人徳も抜群。また彼を勧誘してきた他の高校学長も少なく

はない。

故に軽く手を出してはいけない。何より、彼は昔近くにいる名高い不良たちを追い払った経歴を持っている。

そんな彼に教師たちでは歯が立たなかつた。彼のおかげでこの一帯は《災害》以外の事は平和だ。

「……まあ、いい。とにかく早く進路を決めないと、お前の未来は真つ黒だ。そんなでいいの?」

「いいんじゃないですか?特にやりたいこともないし、今のままでいい。」

「お前の感覚がどうかは聞いていない!重要なのは学校はこんな軽い結果を受け入れるはずがないのだ!頼むから早く俺を解放してくれ!学長もそろそろ俺に圧をかけてきたんだ!」

いよいよ自分の生徒の前で感情的な発言をぶち放ち、情けない姿を出してしまった担任。何せ、このような状況は、もう数カ月にも続いていた。

進路調査始まって以来、この担任はよく高層の人たちに叱られている。原因は優秀な人材である都の進路は今になつても一切出していないからだ。

それはもう耐えられない担任は、こうして生徒である彼に赦しを求めている。何せ、これから待つのは学校にクビされるだけの道だ。それをなんとか避けたいと担任はそうおもつ……祈っている。

しかし、向こう側の苦情を特に察していた彼はそうしてくれなかつた。むしろイライラする気持ちで怒鳴りする。

「お前の事情なんて知るもんか!解放して欲しいのはこっちなんですけど!いいですか?可奈美が家で一人で待ってるから、俺はちつともここに残りたくないです!早くこの無意味な時間を終わらせろ!」

「おい、担任にその態度でいいのか!」

「知ったことじゃない、俺はもう帰る!」

「おい!待て!……このクソー!」

部屋から出て、ドアを勢い良く閉めた都は、担任の怒鳴り声が終わってないにも関わらず部屋を後にした。

「つたく……時間の無駄だな。」

そう文句言いつつ、都はポケットからスマホを取り出し、メールを送る。

『ごめん、色々あって帰るのを遅くなった。何か買ってきて欲しい物ある?』

そうしたら、すぐ返事してくれた。

『じゃ、今日も稽古してくれる? 私、お兄ちゃんと稽古したくてうずうずする!』

「またかよ……。刀使になってからいつも稽古ばかりだな。可奈美。」

『えへへ、だって面白いじゃん。それにお母さんのような立派な人になりたいから。お兄ちゃんもそう思うでしょう?』

「どうだかな。可奈美が元気ならなんだっていいよ。それはともかく今日も手加減にしろよ。」

『うん! 写しは使わないから安心して。あ、ちなみに舞衣ちゃんも来てるよ。クッキー美味しいんだ。』

(舞衣ちゃんか……。つまり勉強会だな。)

「勉強もしろうよ。もうすぐ中学だろ?」

『……。うっ! 痛いところ突っ込まれた……。』

「帰ったら、舞衣ちゃんと共にお前の勉強に手伝ってもらってから逃げるといいぞ。」

そう返信し、スマホを仕舞う。

「さて、帰るか。」

さつきより機嫌が良くなり、彼は帰路に一步へと踏み出した。

◇

「ただいま。」

「おかえり、都。」

家に戻ったら、真っ先にお父さんの返事が聞こえてきた。

「今日は早いね。仕事は大丈夫?」

「大丈夫、大丈夫。そういえば、都の方はどうなんだ? もう中学三年

生だろ、進路はもう決まったのか？」

「まだ。」

「そうか……………」

息子のその返答を聞いて、なぜかお父さんの方が落ち込んでいるみたいなお声を出してしまった。

もちろん、彼はそんなお父さんの状態を気付いてはいるが何も言わない。だってお互いはもうあれを触れたくはないから。

「そういえば、舞衣ちゃんがさつきうちに来ているよ。ますます美人になっていたなあ、あの子。大事にしろよ！あの子はいい嫁さんになりそうだ。」

気まずい空気を切り替えようと、都のお父さんは自分の娘の親友である舞衣ちゃんの話題に変えた。

だが、都は逆にその話題を持ち出すお父さんにため息をつく。何故ならこの話題は完全にNGだからだ。

「舞衣ちゃんに手を出そうと言うの？最低。」

「な、なにを言うんだ！これも舞衣ちゃんのためだぞ！いつも仲良さげに見えるし、それに弁当も作ってくれる。あれはもう付き合ってもおかしくない関係に見えるぞ！」

「馬鹿言うな、あれはただ舞衣ちゃんが優しいからだ！それに、あの子は可奈美の友達だから、兄として大事にしていただけだ。」

そうだ、彼は初めて柳瀬舞衣やなせまゐという女の子に出会った時から、彼女のことをただの妹いもつとこ友だと思っていた。いつも妹が友達ができていないことに心配かけている兄として、柳瀬舞衣の存在はまさに救いであつた。これで可奈美も学校では寂しくはないと彼はほっとした。

ただ時々彼女のその人思い一倍の優しいとこと、妹に負けないほど天然可愛いとこころに少し心がうごめいている時がある。

いくら健全な思考を全力に意識しても、家族ではない異性に意識しないのは男性としては無理極めることだ。特に今の彼女は成長期で身体が徐々に大人の女性になっていく……………彼女を女性として全く意識しないのは相当無理なことだ。

(それでも舞衣ちゃんは可奈美の親友。その一線を越えてはいけな

い。そう決めたのだ。」

「だからそこはだめなんだよ!」

「なんだよ!」

「あの……………」

そして、都は自分のお父さんと言いつ争っている間、突然一人の女の子がその間に入ってきた。その女の子は、優しい雰囲気ピッタリとした白いワンピースに身を包み、長い黒髪を束ねて結び、肩の前に垂らすルーズサイドテールという髪型をしている。

まるで翡翠のような綺麗な瞳が都とその父の姿を映っている。彼女こそ、話題の中心であったヒロイン。柳瀬やなせ舞衣まいである。

「舞衣ちゃん!?!」

ほぼ同時に驚愕の声を出した親子二人。舞衣はただ困り顔でこの二人のを見守っている。

でも、いつまでも見守っていても仕方ない故、舞衣は彼ら親子より先に挨拶をした。

「えっと…………お兄さん、こんばんは?」

「あ、ああ…………こんばんは、舞衣ちゃん。」

突然のことなのか、都はまだ正気を取り戻せていない。そして…………。

「舞衣ちゃん、都は残念な息子ですが、彼のことはよろしくお願いします。」

「え…ええ?」

彼がまだ反応しないうちに、まるで夫入りのような事をお父さんの方が先に娘の親友である舞衣にお願いをしてしまった。

「お父さん!」

そのことに、少し顔が赤く染めていた都からの抗議の声が飛び込んでいた。

◇

しばらくすると、いつの間にか都と舞衣二人だけとなった。実を言
うと、舞衣は初めからアイスを買に行く予定だったが、行く途中に
都とお父さんとの喧嘩を見てしまった。

それから、若い女の子をこんな夜遅く一人での買い物は危険だとお
父さんからそう言われて、彼はこうして舞衣と二人きりで夜道にを歩
いていた。

けど、こんな時間帯で男と女二人きりというのは流石に恥ずかしい
ので、彼からは一切話を振ってこない。それと同じく、舞衣は男の人
と二人きりになる経験があまりないから、何から話そうかがわからな
いらしい。

(気まずい……まあ、当然といえば当然だな。舞衣ちゃんはあの有
名な柳瀬グループの社長の娘、大企業の令嬢だ。つまりお嬢様。彼女
は自分とはまるで別世界の人間だ。本来は絶対に関わるべきではな
い存在なんだが、可奈美を通じてこうして知り合った。にしても、彼
女を友達にするのもなかなかの出来事だな。流石うちの妹だ。)

いつものように可愛い妹を高く誇る彼は、救いようもないシスコン
であった。

「……えっと、お兄さんは最近どうですか？可奈美ちゃんからたく
さん聞きましたけど、なんか凄いことになってるみたいですね。」

そして、あれから少し歩くと舞衣の方から話しかけてきた。

よく見ると、彼女の顔は少し赤くなっており、おそらく話題を作る
ためにかんりの勇気を絞り出したのだろう。

(であれば、一人の男として自分もそんなに頑張っている彼女の勇
気にちゃんと答えなければならぬ！)

「まあな、でも君達に比べたらそうでもないよ。刀使とじだっけ？選えば
れたんでしょ？凄すごいんじゃないか。」

「いいえ、そんなことはないですよ。お兄さんに比べたら全然……。
可奈美ちゃんから聞きました、写しを使つかってない状態下の可奈美ちや
んが、お兄さんに一度も勝かてなかつたって。」

(可奈美のやつ……全部、舞衣に教えたのか。まあ、別にいいけど。)
「けど、それはもし可奈美が最初から写しを貼はれたら、俺は1秒でも

耐えず試合終了のところだ。やはり君たちのほうが凄^いよ。」

普段と同じくなんともない表情で普通に語る彼だけど、それは舞衣から見てとても悲しそうに見える。

例え剣術がどれほど冴えた人間だとしても、化物退治の専門家たちには永遠比べられない。柳瀬舞衣と衛藤可奈美^{えとうかなみ}はそういう類の人間だ。

彼女たちは刀使という日本刀を持つ女の子。彼女達に与えられた力は御刀から授けられた力だ。そしてその力は化物……荒魂^{あらかま}を退治するための力。

荒魂というのは人間を危害する化物。そしてあいつらを倒すのは刀使しかない。故に可奈美や舞衣などの刀使は、人を危害から救う正義のヒーローなのである。

そして刀使に選ばれるのは女の子しか居ない。故に年上の男の都でも、舞衣の保護が必要になるのだ。

もしかしたら、実の妹である可奈美に守られるという立場にもなるのかもしれない。いや、なるのだろう。

それは実の兄である都にとって、とても受け入れ辛いことだ。本来妹を守るのが兄の役割だから。

「そういえば、舞衣ちゃんの進学先は？もう決まった？」

「え？あ、はい……。美濃関学院です。」

「五箇伝か……」

五箇伝というのは刀使に関する組織で、学校です。刀使や鍛刀師、御刀に関する研究などを教育的に栽培する教育機関であり、そしてその数は5つもある。

美濃関学院、鎌府女学院、綾小路武芸学舎、長船女学園、平城学館。それらの学校で刀使を訓練し、サポートするのがその役割。

でも、その役割の中で最も大きい目的は荒魂の討伐。それは、この組織が作られた時からの最大の目的だ。

「うん、可奈美ちゃんもその学校を目指して頑張っているよ。」

「でもその前に、まずは勉強だね。あの子は昔から可愛いおバカさんなんだから、兄としてかなり悩んでいるんだ。こんな可愛いおバカ

さんがこの世にいるなんて」

「それ、褒め言葉？」

都の言葉になんとも言えない表情をした舞衣。

彼女は都がどれほどのシスコンなのか、ちゃんと理解しているつもりだ。

可奈美に関したらいつもこうだ。小学校の運動会でもあの場で一番応援し、写真を撮りながら感動で泣いているのが印象深い。

遠足のときも勝手に行って行って、何事も可奈美がやる前で用意した。そのおかけでよく先生に叱られた。

でも……舞衣にとつての一番深い印象はやっぱりあのときのことだ。今、思い返すと、彼女の胸のどきめきが止まらない。

「舞衣ちゃん？どうしたの、顔が赤いぞ？」

「………!?なん、なんでもないです！」

都が自分の異常に気づいてしまい、舞衣は慌てて隠す。

でも反応するのが遅く、都の手は既に自分の額にある。

「うん。少し熱い。やっぱり無理しているじゃないか？」

「くく!!!」

言葉すらも出せないくらい、舞衣は今凄く恥ずかしがっている。まさか、彼の手が直接自分の額を触るとは思っていなかった。

(心臓もこんなに速く動いて、もうすぐ爆発しそうなくらいだ。)

「どンドン熱くなっていくな……やっぱ熱……。」

「お、お兄さん！もういいです！早く行きましょう！」

もうこれ以上この状況に耐えられないのか、舞衣は速やかに都から離れ、早足で前方へ歩き出す。

ちなみにこの行動はほぼ一瞬の出来事だ。舞衣はそれほど耐えられないのだ、だってそうしてくれた異性は家族以外で、都は初めの人なので。

「おい、そんなに速く行かなくても……。」

そして置いて行かれた都は急いで舞衣のことを追う。

結局、可奈美のそこへ帰るまで、舞衣はずっと都のことを避け続けている。

◇

「お兄ちゃん！舞衣ちゃんに何をしたの！」

帰った直後、都はすぐ茶色髪の女の子に叱られた。

原因は帰った直後、舞衣は急に可奈美のベットのの上に倒り込み、変な言葉まで発していたからだ。

「もう…だめ……」

「お兄ちゃん……？」

ベットの上に倒れた親友を見て、茶色髪の女の子 衛藤可奈美は冷たい目線で都の方を見る。その視線先に怒りみたいな感情が感じられる。

「何もしてない！俺は舞衣ちゃんに何もしてないんだ！ただ手伝っただけ！ほら、アイスがあっただじゃん？」

「でも舞衣ちゃんがこんなことになってるんだよ！お兄ちゃん一体なにでかしたの!?!」

最愛の妹に質問を迫られて、都はわけのわからない表情をしていた。彼は、自分がどれほどの罪を犯しているのかを自覚していないのだ。

「だから、何もしていない！そ、それより…さつきから何やってたんだ？」

しかしこれ以上まズくなくていく話題を続けさせないためにも、彼は意図的に話を逸らすことに努力し、可奈美の手にある刀について問うことにする。

「ん？これ？あ、お母さんが前に使ってた刀なんだ。お兄ちゃんと舞衣ちゃんが帰ってくるまで少し感じたいと思って。」

(よし、うまく話題を変えた。)

「感じたい？刀の重量のこと？」

「違う違う、これだよ。」

都の話しを否定し、可奈美は立ち、刀を鞘から抜き、刀身を出す。

「結構綺麗な刀だね。」

「でしよう？ 私もこれ、結構気に入ってるんだ。」

まるで自分が褒められたかのように、可奈美は嬉しそうに笑う。その笑顔は都にとっては何よりの癒やしであった。

「お兄ちゃんに見せようっと。」

そう言った可奈美は目を閉じ、暫くするともう一人の可奈美が現れた。しかも、どんどん可奈美と重なり一体となっていく。

最後は白い光が可奈美全体を纏った。

「写しか……。」

刀使が戦闘するときを使う防御術《写し》。御刀を媒介とし、自らの肉体を霊体へ変換させる術。写しが発動状態ならば、受けた傷は現実の肉体に及ばず、少々の痛み程度で済む。

これは荒魂と戦うときにとても役に立つ。例え誰かに斬られても、ただ痛かっただけ。写しを解けば傷なんて一つもない。

「さっきからずっとこの状態を練習してるの。どれくらい維持できるのか。」

「そうか……。」

「お兄ちゃん、スマホ取って何する気？」

「記念写真を撮ろうと思って。大丈夫、三十枚以内で済ませるから」「多すぎー！」

「これは記念写真なんだ！この程度の数ではまだまだ足りないよ！」

「ええ………??」

都の異常さに呆れ始めた可奈美。彼女がいくら兄の行動を昔から見てもようと、いつまでも慣れる事はなかった。

ちなみに、可奈美の写真の数は母がなくなった日からもう一万枚を超えている。他の男子中学生のスマホにある画像の大部分は、エロ写真が多いのだろうが、都は妹に関する写真が圧倒的に多い。

これは世間で言う所謂、シスコンと言うやつだ。

第一話：妹と甘い味の夜

「おかあさん、なんでいなくなっちゃうの？」

あれは俺と可奈美がまだ幼い頃の話。あのとき、お母さんが急になくなったことで俺と可奈美は一時にその創傷ダメージから回復されていなかった。

昔からよく二人でやっていた稽古もやめて、衛藤家は今までもない静かさになっていた。お父さんもその日から二度と笑顔を見せられなかった。

そして、まだ幼い可奈美は俺の手と繋ぎ、俺にまったく触れたくない質問をそのままに投げかけてきた。

その時の俺は一時、彼女の言葉に何も答えてくれなかった……いや、幼い可奈美に答える勇気がなかった。今よく考えたら、多分あれはただの現実逃避というやつだ。

だから、あの事件が来るまで、俺はずっと可奈美の顔を避け続けていた。彼女の顔を見ると、お母さんの姿を思い出せるから。



「えつと……う？」

とある理由で（都のせい）精神的に疲れてしまった舞衣はようやく回復したところ、彼女はすぐ目の前の光景に呆れている。

それは自分の親友、衛藤可奈美が真白の状態で机の前に正座していたからだ。

「舞衣ちゃん、おはよう。」

そして隣にいるのは彼女の兄、衛藤 都。彼は目が覚めたばかりの舞衣に気づき、まず挨拶をした。

「お、おはよう……？そ……その、可奈美ちゃんはどうしてこうなってしまったんですか？」

舞衣は真白になった可奈美を指差し、都はただ笑顔で答えた。

「勉強させた。」

「あ……なるほど。だから真白なんだね……」

一瞬で都が言つてた意味を理解し、舞衣は苦笑していた。

可奈美は昔から勉強が苦手で、いつも舞衣の宿題の写しと都の助けで何とか成績を落とさないようにしていた。今回の勉強会も無事に美濃関学院に進学するために挙げられた事だ。

「うん……剣術はあんなにうまいのに、それ以外はこの様だ。本当に迷惑をかけたな、舞衣ちゃん。」

「いいえ、そんなことないです！可奈美ちゃんは私の大事な友達だから、迷惑なんて全然思つていません！」

「……そうか。いい友達が出来だな、可奈美。」

可奈美の頭を優しく撫でる。その光景は、舞衣から見ればとても微笑ましいものだ。

「そういえば、舞衣ちゃんの成績は大丈夫？可奈美に足を引っ張られてるんじゃないの？」

「いいえ、大丈夫です。」

「そうか……。もし、何か勉強不足ならいつでも俺のところに来てくれ。いつも可奈美がお世話なつているお詫びに勉強教えてやろう」

「……うん。その時はよろしくお願いします。」

「おう！剣術以外は任せておけ！」

胸を張つて、都は元気よく答えた。

でも、それは舞衣に聞いてはそうじゃなかった。

昔、可奈美から聞いた。都は昔、自分と同じレベルくらいに剣術に溺れていた事があり、その時の彼は凄く強くて、剣術をとても楽しんでいたそうだ。

でも、今になつては、彼が可奈美のため以外にその剣を振ることはなかった……。

一度都の全力を見たことがある舞衣はそのことを気になつて仕方がない。あの日の都はすごく強くて、かつこよかった。

今でも可奈美に負けないくらいに強い。おそらくそれは、剣の才能だと思ふ。

可奈美と同じくらいの強さ。例えそれは写しが貼つてない試合で

も都はとても強かった。

「ねえ、お兄さんはもう剣を……」

「稽古やろう!」

舞衣がまだ話が終わってない所、突然復活して興奮し始めた可奈美に中断されてしまった。

「もう復活したのか……」

「可奈美ちゃん!」

「うん!稽古をやろうよ!お兄ちゃん!」

「あ、舞衣ちゃんも一緒にやろうよ!私が勉強を頑張ったご褒美に!」

「えっと……?」

相変わらずなのか、可奈美はいつも剣のことにしか考えていなかった様子。

そして剣のことにしていると、こんなにも目がキラキラした状態になる。断りたいけど、この目を見てしまうと断れなくなってしまう。

「……もう約束してしまったんだが、もしそのせいでさっきの勉強が忘れたなら本末転倒なんだよ。だから俺はやらないぞ!」

「ええ、約束したのに!」

ムツという顔になって、拗ねてる可奈美。救いようのないシスコンである都にとっては、可奈美のその可愛らしい顔は、だんだん彼女の願いを叶えてしまいたくなる魅力がある。

けど時には厳しくなければ、良い兄になれないだろう。都は心を鬼にした。

「だめ!」

「じゃあ……」

「舞衣ちゃんもだめだ。こいつに甘え過ぎたら、きつとこいつは調子が乗るに決まっている!」

心を鬼にした都は、いつも以上に厳しかった。

「ええ、せっかく頑張ったのに……お兄ちゃんの意地悪!」

「……仕方ないよ、可奈美ちゃん。今日はもう諦めよ。進学テスト

が終わるまでね。」

「うん……」

いつもより落ち込んでいた可奈美、その姿はまるで好きな玩具かんぐが奪われた子供みたいに可憐だった。

しかし、これも彼女のためだと都は心を痛めながら自己説得する。

「それより、アイスを食べよう！せっかく買ってきたんだから！」

「アイス！食べる食べる！」

アイスという単語を聞いて、少し元気になった可奈美。そんな彼女を見て、舞衣は少し気楽になった。

(やっぱり、可奈美ちゃんはそうでなくちゃ。)

ずっと友人に笑顔でいてほしい優しい柳瀬舞衣だった。

「おお！私の好物!!」

早速袋の中から、可奈美はいちごアイスを取り出した。

「可奈美ちゃんがそれ好きだから、買ってきたんだ。」

「舞衣ちゃん、ありがとう！」

「お兄さんも食べよう。」

そして、舞衣の手にあるのはヨーグルト味のアイス。舞衣個人的の好物ではないが、この味見をしたいと思いますと思っているようだ。

「いや、俺はいい。」

「でももう一個あるよ。」

「可奈美にあげるよ。」

「でも……」

せっかく買ってきた3つのアイス、本来あれは都のために買ったのだが、本人に断わられて残念そうに思う柳瀬舞衣。

そこで、可奈美が何かいいアイディアを思いついたようで透かさず舞衣の耳に囁く。

「舞衣ちゃん、ここで諦めよ。代わりに……私と一緒に……」

「え!？」

そう耳元で囁くと、舞衣の顔がだんだん赤くなっていく。

「やろうよ!」

「でも……」

「せっかくのアイスを無駄にしたくないでしょ？」
「……わかった。」

どんどん迫ってくる可奈美に敵わない舞衣は仕方なく可奈美の提案に乗って、都の近くに座る。

よく見ると、彼女の顔はまだ赤のまま。さつき可奈美に囁かれていた時はすごく可愛く見えるが……なんだか今、彼女が無理をしていると都にもわかる。

「可奈美、舞衣ちゃんに何か教わったの？」

「ふっふん！後で分かるよ。それよりお兄ちゃん、口を開けてくれない？」

舞衣は都の右側に座っているので、それに対して可奈美は左側に座る。

部屋の中で女子二人に挟まれてるこの状況は、まさに単身どうていにとつていくら神に祈っても絶対に手に入らない状況。

そこで、さらに……。

「なんで？」

「隙すきあり！」

都が可奈美に言われて口を開いた瞬間、冷たい何かが口の中に入ってきた。

「冷たっ！」

「どう？美味しい？」

笑顔をしている可奈美は、いつの間にかいちごアイスの蓋を開けて、スプーンを持って都の方へキラキラした目で見つめていた。

口の中にはいちごドロドロのアイスの味がして来て、まるでいちごの雪が舌の上にとんどん溶けているみたいな感じ。

一言で言うと、美味しい。

「美味しいは美味しいが、なんで口餌すんの？」

「だってお兄ちゃんにそうしないと、食べてくれないでしょう？いつも私だけ優先で不公平じゃん」

確かに一理ありだが、都からしたらそうは行かない。妹を世話するのが兄の責務なのだから。

「それ普通ー」

そうしたら、今度はまた口の中に別の味のアイスが入ってきた。

この味はヨーグルトの味、普通に美味しい。

「……ど、どう？お、美味しい？」

ヨーグルトアイスを持っている張本人は、顔が真紅になつてる状態で都の方を見つめる。

そこで、上目遣いをしていると言う事と羞恥心で顔が赤くなつていた柳瀬舞衣。

そんな赤くなつた彼女を見るその刹那。例えどんだけ鈍った感性を持つている都さえも、彼女を見て心臓をドキツとさせられた。

今の彼女はマジ最高に可愛かった。元々嫁力が高い女子だとは思っていたけど、こんなに可愛い表情もできるなんて……もう正直言葉が出ない。今なら彼女に1000回のプロポーズしても不思議ではないだろう。

「お、美味しかった……」

顔が少し熱くなつていた都も恥ずかしがっていたのか、僅か震えた声で彼女に返答する。

この甘さはある意味確かに美味ではあるが、このアイスの美味しさを増倍したとは言えないだろう。

「……よ、良かった。」

「それじゃ、次は私ね。はい、あん〜」

「私は可奈美ちゃんの次だね……が、頑張る！」

なんのために頑張っている様子の舞衣。

そんなもう少し頑張りますという顔をしないでくれ。さっきの上目遣いの顔をする時点でもう十分な威力なんだ。と心の中で二人からもらった甘さで既にデレデレになつてしまった都からの精一杯のツッコミが走った。

そして、舞衣と都が買ってきたアイスを食べ終わるまで、二人は都の両側でアイスをたっぷり味わっていた。

でも、本当にたっぷり味わっていたのは、二人ではなく二人に挟まれていた彼だった。



「これは個人的な頼みだ。やってくれるか？」

暗い室内で、冷酷な印象を思わせる低音の声が体を震えさせた男性に伝わっていく。

しかし、その声はちつとも男性に伝わってはいなかった。なぜなら彼は目の前の人物にびびり過ぎて、緊張でパニックになってなんの声も耳に入ってこなかったからだ。

「聞いているのか？…聞いてないのか。ならばもう一度言おう」

何せ、目の前に居るのはもはや首相と同じ権利を持っていると言っても過言ではない程の、この国の最高権力者だからだ。彼が緊張して震えてしまうのも当然だろう。

平民風情である彼は本来彼女と関わるはずがなかった。しかし、突然彼は“あの家”に呼び出され、ここに連れ去られたのだ。

「衛藤 都を五箇伝に入らせろ。どんな学校でも構わん。できる限りその妹と一緒に入らせたい。その為に君が彼を説得してやってくれ。」

力強く自分の意志を伝う。目の前の女性は不可能と言わざるおえない命令をくださった。

衛藤都は頑固の優等生、誰の話も聞いてくれない制御不能な生意気なガキだ。その点について男性はよく知っていた。何せ、ここに居る男性は彼の担任なのだから。

「案ずるな。君の…というより学校全体の彼の苦情もよく知っている。もう既にある事を事前に用意していた。」

女はどこかから資料を取り出し、机の上に置いた。

その資料は一人の女子の資料。そこに書かれていた彼女の名前は衛藤可奈美。入学一覧にはもう既にチェックインされていた。

「彼女の入学は確定だ。だがそれは彼女の志望によってどの学校に行くのか決める。この資料を全国入学テスト以後、衛藤都に渡してくれ。きつとこれで彼の志望は決定することになるだろう。」

「……………。そ、そんなに……………あのカギをほしいのですか？」
資料を見ながら、男は震えた声で初めて目の前の相手と話す。

この資料はあまりにも準備万全すぎる。ただの刀使ですらない男のため、わざわざここまで用意しているなんて。あまりにも尋常じゃない。

「ようやく口を出しだな……………。てつきりあまり喋らないタイプだと思っていた。」

「ええ……………例え彼は刀使ではなく、御刀持たないだとしても、彼にはそれほど価値がある。」

強い意志で自分の意思を、目の前の男に伝う。

それでも男には分からなかった。なぜ五箇伝はそんな刀使ですらない、しかも鍛造師でもない彼を欲しがっているのか。

けど、それも数分後、男は思考することをやめた。

「……………わ、わかりました。」

その言葉からはなんの意志も込もっていない、ただ無力の声だった。

男はこの女に聞く勇気がないのだろう。お互いの世界が違いすぎたからだ。

「そうか……………。報酬は依頼を成功させた後に送る。朗報を待っている。」

話が終わり、女は手下の刀使たちにこの男を出口まで送らせる。

そうすると、もう一人の刀使がちょうどこの部屋に訪ねてきた。

その刀使は綺麗な赤い髪を持つ女の子。年齢から推測したら、まだ高校生の年齢なのだろう。

「紫^{ゆかり}様、そろそろ会見のお時間です。」

「わかった、すぐに行く。」

その刀使の口から出している名前はかつて数十年前相模灣大災害の大英雄、折神^{おりがみゆかり}紫の名だ。

今、彼女は刀剣類管理局局長という職務に就いておる。彼女の立場は、先程話していた内容にあった五箇伝の上官にあたる。首相に負けないくらいこの国の最高権力者としてこの日本に彼女は君臨していた。

同時に彼女は現世最強の刀使である。つまり彼女は今、剣の頂点に立つ最強の剣使いである事は、間違いないだろう。

「……衛藤”か。これも宿命か。止めるものならお前のその剣で私を止めてみせろ」

「紫様？」

「いや、なんでもない。行くぞ。」

紫の言葉は誰にも聞こえてはいなかった。そして、その言葉の意味を理解する者は彼女しか居ない。

第二話：朝の出会い

爽やかな朝が好きだ。

なぜなら、こういう爽やかな朝は剣術の朝練にとって絶好な天気である。昔はこの時間帯でよく母とジョギングのあと、剣術の稽古をする。

あのときはとても楽しかった。大好きな母と妹と一緒に朝練をして、疲れて一緒にお風呂に入る。…あの時期は、あの日々は本当に幸せだった。

母が居なくなってしまう後、何もかも意味が失くなって、今はもうただの習慣になってしまった。

「もう朝か……」

いつもの習慣によって早起きをしてしまった都。彼はベッドから起きて窓に通じて外の景色を見る。

まだ日が昇っていない薄暗い景色。スマホの時間によると今はまだ朝4時の所だった。

学生ならこの時間帯では普通にベッドに潜り、眠り続けているのだろう。だが、都は既に朝起きの準備をして、朝練の方へ向かう。

でもこれは決して好きだからやっている訳じゃない。彼にとってはどうただの習慣になった。加えて、朝練は体に良いと新聞に書いてあったから。そんな理由を付けて彼は日課の朝練を続けた。

結果として、都はかなり良い肉体を持つことが出来た。学校でも、殆どの女子たちに好かれている程だ（主に鍛えている男子は人気がある）。

「相変わらずまだ起きてないのか……」

服を着替え終わって、都は可奈美の部屋の方を見る。

いまだに部屋からの動き気配がない、ならばきつと部屋の主である可奈美はまだ寝ているはず。

「あの日以来、可奈美はいつも遅くまで寝ているね……結局、真面目にこれをやり続けたのは俺一人か。」

そう愚痴を言いつつ、都はそのまま一階に降りて朝練の準備をしに

行く。

しかし、彼は知らなかった…。自分の妹が今とんでもない所で”起きている”という事を。

◇

「師匠！今日もよろしくお願いします！」

真白の神社の階段の下、衛藤可奈美は目の前にいる女性に稽古前の挨拶と思われる事をしている。

なぜ本来部屋で寝ていたはずの彼女が今ここにいるのか……。それは、彼女自身もよくわからない。

ただ、ここは彼女にとってはとても心地よい場所だ。なぜなら彼女の剣の師匠に当たる人物は必ずこの場所に居るからだ。

「いいよ。いつでもかかってこい！」

挨拶をすると、可奈美に師匠だと呼ばれた人物が気軽に刀を肩に載せて頷く。

「はい！」

返答が終わり次第、可奈美は直ぐに目の前の女性に斬りかかる。まず手始めに真正面から斬りに行く、しかし振りの溜めが大き過ぎたのか、あっさり避けられてしまった。

でもこれはいつものパターンであり、そんなの彼女は既に予測済みだ。故に可奈美は初撃を完全に振りきる前、速やかに刀を相手が避ける方向へと振り変える。

「お？いいわね。」

ただ、その一撃も師匠と呼ばれた女性に見事防がれた。もちろん可奈美本人もこの相手がそう簡単に倒せる人物じゃないと分かっている。

一度後ろへ距離を取り、相手を見据え脱力する。いつでも攻撃を防御出来るように体制を維持し、刀を構える。

「隙がないね、可奈美は。」

「師匠こそ全く隙がないよね……。流石師匠です。」

お互いのことを褒めてる最中でも、可奈美はこれまでの経験を生かし、精一杯戦法を考えている。どうやったら目の前の彼女から一本取る事が出来るのか。

「そつちが攻めてこないなら、こつちから行くよ！」
「……………」

しかし、彼女は可奈美を待つてはくれない。

相手が可奈美に攻撃し始める、より速く…そして重い一撃の数々。ただそれでも可奈美はぎりぎりでその攻撃を防いでいた。

(師匠の攻撃が重い！)

師匠の攻撃を防ぎながら、可奈美も自分の居る場所から移動しながら技を避け、隙を伺って反撃しながら相手の動きを読み、対応動作を作り変えていく。

これは可奈美の剣法、柳生新陰流の特徴の一つだ。

ちなみに都もこの流派の使い手だが、彼は可奈美よりこの特徴を上手く使いこなし、可奈美を悉く打ち倒し続けてきた。つまり、写しを貼ってない常態の可奈美は一度も彼から一本を取ることがない。

本来、両方の実力と技量的には可奈美のほうが勝っているのだが： 都は自らの流派をより上手く使い、可奈美の技を全て読み、それを全て自分の物にして使ったり、自己流に作り替えて戦う。これが、可奈美がずっと都に勝てなかった理由だ。

(やはり勝てない気がする…。お兄ちゃんの時と全然違う。 お母さん) の動きはまったく読めない！)

そして、今まで数百回以上の立ち合いを行ってきた可奈美は、師匠の数知れない技とぶつかってきた。だが、彼女たち二人の戦いは今一度も勝負がつかないままだ。

けど、これは決して双方の実力が合角だからという理由ではない。相手側がただ可奈美との試合が楽しいという感情から、なかなかこの試合を終わらせたくないと仕込んでいただけなのである。

それと同様、可奈美もこの試合を結構楽しんでるのだが。

「可奈美、また強くなってきたね。」

「師匠こそ、私との試合でかなり強くなってない？」

「あはは、そうかもね。でも最近是我的実力を高める為の手強い相手がなかなか見つからなくてね、そんな時に可奈美を見つけて、こうしてかなりの回数を戦ってきた。今みたいにこうやって戦いの回数を重ねていくと、私は自然と進歩するものなのよ。」

「うわあ……お兄ちゃんと同じタイプだ。」

「あんたが言わないでよ。正直、私が戦った相手の中では、可奈美が二番目怖いのに。」

お互いのことを本気で斬りつけている最中、今みたいに呑気でお話する人間は、もうこの世ではこの二人にしか居ないのかもしれない。そして、あれから何時間か経ち、二人はようやく刀を納め、近くにあった階段の上に座る。

「今日も勝てなかった。師匠は強すぎ！」

「あはは、まあね。あ、そういえば最近例のお兄さんはどうなの？私の息子らしい男。」

「お兄ちゃんのこと？いつもと同じ感じだよ。優しくて、強くて、だいたいs……なんでもない！」

話の途中、可奈美は何かを気づき慌てて話を中止した。良く見てみると、その顔は少し赤くなっていた。

「おおく？可奈美は相変わらずお兄ちゃんのことを大好きなんだね。」

「そ、それは言わないで！」

羞恥心が抑えきれないのか、可奈美は赤い顔のまま師匠に大声で叫んだ。よほど恥ずかしいのだろう。

でもこの穴は可奈美自身が掘ったもの、自ら墓穴を掘ってしまった可奈美の自業自得と言うべきだろう。

しかし、可奈美の師匠は結構この状況を楽しんでいる。いや、この人はいつだってあらゆる物事を楽しむ性格で生きているだけなのだ。ただ、こうやって可奈美の好みを知った時はいつも以上にテンションが高いのだが。

「あはは、悪い悪い。よっぽど好きなんだね、お兄ちゃんのこと。」

「……／／／／」

顔が真紅に染まっている可奈美。その様子はとても愛しく見える。ただ、この姿は決してあの人には見せられない。だってそれは彼女にとつて死ぬほど恥ずかしいことだ。

「わかったわかった。からかうのはやめるから、もつとお兄ちゃんのことを話してくれない？もつと知りたいんだ。」

「本当に？」

まだ先程の件で拗ねている可奈美。彼女の顔はまだ普通の色に戻ってはいない。

「本当の本当！もういくらなんでもお兄ちゃんの事気にし過ぎだよ、可奈美。」

「だって、いつも優しくくてカッコいいんだもん…！剣術もちゃんと付き合ってくれるし、私のことを真剣に見てくれてるし…：私がピッチになったら必ず助けてくれる。…こんなことされたら、好きになるって決まっているよ…：／／／」

まるで恋する乙女ようになった可奈美。今の彼女は完全に兄に惚れた妹。けれどその感情は本人からすれば男女のものとは違い、兄妹間の好きに過ぎない。

そもそも可奈美はまだ彼のことを兄としか認識していないのだ。故にこれは決して恋と言う感情なんかじゃない。

「うわあ…：思ったより重症だね。これはなかなか救いようがないわ…：」

そんな、兄にデレデレになってしまった可奈美を見て、師匠はこれを剣術と同レベルで救いようがない”馬鹿”と名付けた。

◇

朝練をする時には、必ず二時間にかかる事になっている。

これは小さい頃から、母を超えるために増やした鍛錬の時間だ。今になつては、完全に意味が失くなってしまったが…。

それでも彼はそれを毎日続いて、朝練をする事を怠らなかつた。そ

のお陰もあり、運動会では彼を超える身体能力を持つ男子はいなかった。

しかし、これも彼にとつての欠点でもある。それは、優勝したあとには必ず女子に囲まれること。都はそれをあまり好きじゃないのである。むしろ、可奈美や舞衣の方へ速く行きたいという気持ちの方が強かった。

なぜだか、あの二人の周りに居るの時間が一番安心する。なぜだろうか？

その疑問は今になっても、わからないままだ。

「少し喉が渴いたな。」

だいぶ距離を走った都はちょうど、近くにいた販売機を見つけた。喉も走っている最中に「水分補給させろ！」という情報を脳内に送った。

取り敢えず一旦休憩をしようと思い、自販機の方へ向かう。

「ん？先客がいるな。」

ただ、そこには自分ともう一人の客人がいた。

(こんな時間には珍しい……でもそんな事よりその服はー。)

都は視線をその客人の服の方に移す。それは、白がテーマになっている学生制服みたいな服だった……というか学生制服だった。良く見てみると、あれは鎌府女学院の制服のようだ。

(なんで五箇伝の人間がここにいるんだ？しかもこんな時間帯に……)

今は日が登って来るか来ないかくらいの不安定な朝。要は、人気が一番少ない時間だ。それでも、ここにいる人間は朝練のために外に出ていた都以外に、確かにもう一人の少女が居る。

「……………」

その子はただ販売機を見つめていて何もしてこない。

どれも美味しそうだから、なかなか選べないかもしれないとそう推測して、その子が選び終わるまで静かに待っていた。

しかし数分経っても、その子からは一切動きがない。流石に怪しいと思ひ、一応声をかけてみようかと都はそう考えていた。

そして声をかけようとすると、少女からおそらく電話であろうサウンドが鳴り始めた。少女はそれに慌てる事なく、落ち着いて電話を取り、電話に出る。

しかし、その電話に出たところから電話の向こう側からすごい怒り声が聞こえてきた。

「沙耶香！一体どこに居るの！なんで任務が終わってすぐに戻ってこないの！」

電話向こうの声はすごく怒っているようだった。声が大き過ぎで、少し遠くに居るこつちまで伝わってくる。

「……ぶ、ごめんなさい。お腹が少し減ってしまったので……」

すると、叱られていた少女は素早く電話の向こう側の相手に謝りつつ事情を説明する。少女の震えている声から、おそらく向こう側の相手に対して相当怯えているようだ。

「そんな理由？ふさげないで！貴女の空腹なんてどうでもいいから、早くこつちに戻ってきなさい！」

「でも……」

「早く！」

「はい……」

会話が終わり、少女は電話を切った。再び販売機の方を一目だけ見たが、少女は何か落ち込んでるように見える。

その姿は、まるで親に叱られた子猫のように見える。そのとても可哀想な彼女の様子に、都は我慢できる筈もなく、直ぐに立ち去るつもりであろう彼女の手を握った。

「待て、俺が奢るよ。」

「え………？」

自分でもわからない挙動。なぜ自分とは無関係の彼女に声をかけて、手助けをしようとしているのか。

いつも可奈美のためだけに行動をする“可奈美至上主義”である自分が、なぜ名前も知らない彼女に救いの手を差し伸べるのか。

いや、理由は単純明白だ。

ただ、こんな可哀想な少女を放つてはおけないから助けたのだ。そ

れに、なんとなく彼女は自分と多少似ていると思っていたから。



幸い、この自動販売機には飲み物以外にお菓子のようなものも売っている。彼女の空腹を満たす事は容易く出来る事だろう。

しかし、問題なのは都がこの少女の好みを知らない事である。故に仕方なく、都は可奈美が好きそうなものを「全部」買ってしまった（奇行）。

女の子が好きなものなら、きつと同じ女の子である彼女も好きなのではないかと、そう軽く判断する都だった。ただ、だからと言って好きそうな物を全部買うという行為はおかしいのだが。

「ほら、これを食べ。味は食べたことがないから保証はできないけど。」

まるで白雪のような綺麗な髪色を持つ女の子に、都は緑色の缶詰のお菓子を彼女に渡した。

しかし、彼女は理解不能と言ったような顔で彼を見つめる。いや、むしろこの事態にまだ反応しきれていないような顔だ。

（まあ、確かに今は脳が追い付かない状態になる状況なのだろう。突然知らない男にお菓子を押しさえ付けられて、パニックになる以外はあり得なくはない。）

「ごめん。やっぱり知らない人にいきなりこんな事されたら困るよな…あははは。」

苦笑い、都は猛烈自己反省中。

いくらなんでも、こんな小さい女の子に怪しい好意を押し付けては、逆に彼女を困らせるのだろう。もし舞衣が此処に居たら説教されそうな行為だ。

「……………な、なぜ。」

「……………ん？」

そうしたら、女の子の方から小さい声で話し掛けてきた。でも、それもあまりにも小さい声なので都には聞き取る事が出来なかった。

「……なぜ、私を止めるの？ 私は早く戻らなければならないのに、なぜ私の手を強く握っているの？」

（気付けば確かにずっと彼女の手をしっかりと握っていた。……可奈美と舞衣ちゃん以外の人にこんな握っていたのは初めた気がする。とても不思議な気分だ。）

（でも、彼女の言動をちゃんと理解しているつもりだ。彼女をここまでして止める必要はなかった、理由もそこまで重要な事でもなかった。けど……それでも……彼女のことを放つてはおけなかった。例えばそれが一方的なエゴだとしても。）

「逆に聞くけど、君が本当にそう思っているなら、何故写しを使わないで私の手を振らないの？ お前なら、それを簡単にできるはずだよ。」

「……………そ、それは……………」

「はあ……仕方ない。分からないなら教えてやろう。俺には妹がいます。そして君は俺の妹とよく似ている。」

「私と…………？」

「ああ。まあ簡単に説明すると、君は妹と同じように可愛い。そんな妹と似た可愛い子が困っていたのを見てしまったから。だから、そんな君のことを俺は放っておけないんだ。」

都にしてはかなり正直で素直な感想だ。彼女は都が知り合った人の中でも、かなりトップクラスの可愛さを持っている。

「……………私、かわいい？」

「うん、とても。」

そう言うと、彼女の顔が少し赤くなっている。元から可愛いのに、さらに可愛くなった。

「……………ありがとう。でも私は早く戻らなければならない……………あ……………」

もう一度彼女の手を強く握る。例えばその行為が彼女にとって嫌なことでも、都は彼女の手を決して離さない……離させない。

それでも実際、彼は優しく彼女の手を握っている。

「そんなに急いで帰らなくてもいい。あのババアのところに戻ったら、ひどい目しか合わないと思うよ。」

「…………でも…。」

「いいから、まずはこのお菓子を食べよう。」

笑顔をしたまま、都は強引に彼女をこの場に留まらせた。

無論、これは最低だと思われる行為なのだ。彼は自覚している。だが、今はそれを気にする気がない。なぜなら、今の彼は彼女の事を守ることにしか考えていなかったからだ。

そして、それから数十分が経つ。

その間に、何度も電話が鳴ってきたが、全部彼に出ることを止めさせた。

彼は、先程名前を知ったばかりの糸見沙耶香いとみさやかという少女にこう言った。「電話なんで気にしなくてもいい。今は安心してゆっくり過ごそう。」

そうして、彼女の限界の時間が来るまではずっと沙耶香のそばにいてくれた。

そして彼は自分自身を何処の誰よりも最低の男だと、この行為を客観的に見て思っていた。

◇

おかしい、体がやけどしそうな感覚がする。

体が熱い、心が痛い。

なんてこんな辛いのか？手が強く握られたから？でも手は全然痛くない。

じゃあ、なんでこんなに苦しくなるの？

糸見沙耶香はわからなかった。自分の身に起きたこの現象の事が。

とても熱くて胸がドキドキする感覚。これは彼女が生まれてきてから、初めて体験した感覚だ。

でも、こんなにも痛いのに不思議と嫌じゃない。よく分からない感覚だ。

「ゆっくり食べて、自分の思うままでもいい。俺から離れたいのなら、俺は君を止めはしない。だって、お前ならそれが簡単にできるはず

だ。」

糸見沙耶香が本当に彼から離れたいと思っているのなら、簡単に離れることができるはずだ。なぜなら、彼女は普通の人間よりも強い刀使だから。

写しを使えば、八幡力はちまんりきを使えば簡単に彼から離れることができるはずだ。

しかし、沙耶香はそうしなかった。そうしなかった事に沙耶香自身も不思議と思っている。

「糸見さんは剣が好きなのか？うちの妹はそれはもう大好きなんだよ。あいつは剣のことになる、救いようのない剣術馬鹿になれそうだ。」

「ちなみに昔、妹は剣術の事を四六時中考えていて、勉学を疎かにしていたせいでテストがよく赤点だったんだよ……！本当にその件で妹には苦勞をかけられた。」

「そういえば、沙耶香ちゃんほどの流派なんだ？いつ刀使になった？あつたま荒魂を退治するのもきつと苦勞するだろうな……テレビでよく見たよ。」

そして彼から色々な話題を振られた。彼はとても楽しそうに話している。特に、妹の話になると彼の目がキラキラしているように見える。

とても不思議な感覚。でも嫌じゃない。

「もつと聞きたい……」

いつの間にか沙耶香はお菓子を口に運ぶ手を止め、彼の話に夢中になっている。

「……………うん、しつかり聞いとけよ。」

それに気付いて、都も笑って沙耶香という少女と楽しく喋り合う。ただ、楽しい時間はいつも速く過ぎていくという話がある。楽しい時間には、いつか終わりがやってくる。

そして、この楽しい時間を終わらせる邪魔者たちが、ようやく二人の前に現れた。

「沙耶香！そこで何をしているー！」

途轍もない怒りが言葉に含まれている。都がとても気に食わないと思っていた電話の声主が、ようやく沙耶香を迎いに来たようだ。

「高津学長……」

しかし、沙耶香を迎いに来たのはその高津学長という女性だけではなかった。彼女のそばには、何人かの刀使がいた。

どう見てもただお迎いに来たようには見えない。

「ん？なんだその男は……お前、私の沙耶香に近づくな！お前だろ？私の沙耶香を誘拐した怪しい男！」

「……沙耶香ちゃん、御刀をしばらく借りるね。それと、ちよつとの間だけ俺の後ろに隠れてて。」

「え……？」

そう言い、都は沙耶香の御刀を借りて、数人の刀使たちに立ち向かうようにして構える。

「その汚れた手で私の沙耶香の刀を触るな！お前ら、抜刀！あの男を捉えろ！」

一声の命令で、刀使たちは都に対し刀を抜いた。

その光景を見て、都はただ笑った。

「上等だ！クソババァー！沙耶香ちゃんはお前なんかに決して渡さない！」

第三話：守護の末

初めから、これは勝ち目のない戦いだという事を分かっていた。

周りが四人の刀使に囲まれている。四対一という絶望的な局面、誰がどう見ても不利な状況。いや、例え一対一でも彼にとつて勝ち目なんてある筈もない。

なぜなら、刀使は所謂チートのような存在であり、人知を超えたオリピック選手もビックリするほどの身体能力を持つ者達だ。彼女達は、学生でありながら化物退治専門のプロであり、人々の英雄なのだ。

そんな英雄にただの人間では対抗できる訳もない。何せ彼女らは人類の英雄であり、希望であり、救世主なのだから。そんな普通とは違う特別な人間が、簡単に一般人にやられるはずもない。

故に、彼女たちは無謀にも立ち向かった彼の事をその場に居た誰もがバカにしていた。

いや、おそらく都の後ろにいる糸見沙耶香はそこまでは思っていないかっただろう。だが、それでも彼女は彼が刀使に勝つ事を信じてはいなかった。

刀使ですらない彼を相手に、刀使である彼女達が負けるはずもないから。

それでも、都も自分なりに精一杯刀使への対策を考えた。

そして、冷静に考えた結果……。彼は正座で床に座り、相手を待つことにした。この行動に、何か策があるのだろうか。

「何してるだ？あいつ。」

「降参か？でもそうは見えないけど……。」

「何か策があるみたいね。でも、刀使である私達に一般人が勝てると思うだなんて……私達も甘く見られたものね。」

「どちらにしろ、彼は勝ち目はないわ。」

彼女達がそう言った直後、全員が写しを発動し、その状態を維持する。この状態になる以上、都にはもう1%の勝ち目さえもなくなってしまう。

「アハハハ!!何やっているの、あの男。バカにも程があるわ!」
そして、そんな都を大笑いしながら見ているのは、高津雪那という五箇伝の鎌府女学院の学長。

赤い正装を着ている紫髪の人で、容姿はなかなかの美人タイプだ。だが、中身に関してはとても残念な大人の女性なのである。それは、今までの彼女の行動・言動を見ていれば分かるだろう。

そういう人間は、都が最も嫌いなタイプの人間である。

「……………」

「沙耶香、そんな男の後ろに居ていいのかしら?その彼に怪我してほしくなかったら、早くこっちに帰ってきなさい。」

「……私。」

「大丈夫だ、俺を信じよ。決して沙耶香ちゃんを俺の原因であるバアの言うとおりにさせはしない。」

「なっ……………!ババア!?貴様!この私に侮辱の言葉を言うなんて、貴様覚悟は出来てるのかしらね!」

高津雪那の話に動揺した沙耶香に、都が高津雪那に対して挑発的な口調で彼女を安心させるつもりだったが、余計に相手のことを怒らせる結果になってしまったようだ。

「高津学長、少し落ち着いてください。私達は必ず鎌府を侮辱する奴を後悔させます!」

「そうです。必ず糸見さんを連れて戻るので」

「私はあまり弱い者を苛めるのは趣味じゃないのですが…」

「とりあえず目標を無力化する!行くよ!」

「はい!」

激怒した高津学長を落ち着かせるように、刀使たちは改めて戦闘意志を高く上がり、都を完全に囲う。

だが、彼女達に囲まれても都は顔色も変えず、何も動きはしなかった。

「悪く思うなよ!」

そして、彼を囲んだ四人の中の一人が一瞬で姿を消し、都の鼻の先へと移動する。その技は迅移じんいと呼ばれる高速戦闘用の刀使だけが使

える技だ。

彼女が剣を勢い良く振り下ろせば、都は必ず大きい致命的な怪我を負うはず。

しかし、刹那の一瞬…大きな一閃と共に、都に襲いかかった刀使が真つ二つに斬り裂かれ、写しが剥がされた。

彼女はそのまま地面に倒れ込んでしまう。

「な、何が…起きた…?」

先程起きた現象を完全に理解出来ていない都以外のこの場にいる全員。

彼女らは先程、ありえない現象を見てしまった。

刀使ではない彼が、一般人では決して反応が追いつけるはずもない速度の前に彼は綺麗な一閃を放つ。そしてその一閃は見事相手を斬り裂き、写しを外す事に成功した。

「あ……………」

そして、その場で一番早くその現象に反応出来たのは糸見沙耶香だった。

彼女は確実に見たのだ。都が迅移よりも速い速度で相手を斬ったその光景を。

そこに感想を付けるのならば、「刀使をも越えるところでもない速度の一閃だった」としか言い様がないだろう。

「思ってたより良い刀だな、これ。形を見る限りでは村正シリーズの一振りなのだろう。え…って事はこれかなりの名刀じゃん!」

まず刀使の一人目を仕留めた都は、抜いた刀をじっと觀賞し始め、その声でようやく今の状況に反応できた残りの三人の刀使たちは、速やかに都から距離を取り、迎撃体勢に移る。

「なんですか! あれ!」

「写しが剥がされただど!? 信じられない!」

「刀使を相手に何なの! あの速度は!」

三人は目の前で起きた出来事に驚異し、この状況を受け入れられないのか、目をパチパチとしながら都の方を睨むように見つめていた。

この男は見た目より、相当やばい実力を持っていると彼女達は共識

した。

「よし、後でちゃんと元主に返すから、しばらくの間は俺に力を借してくれよ、〃村正〃。」

そこで、刀と会話をし終えた都は、残りの三人を改めて見て、再び〃居合〃の態勢へと戻った。

「あれは……〃居合〃だよ？……確かに反撃最強の技だと呼ばれた剣技ですが……あの男が、そこまでの剣技を本当に繰り出せるの？」
「わからない……でも私達も知っている技なら私達には効かないよ！行くよ！」

「うん！」

間もなくの間、彼の周りに居た刀使二人が同時に左右の両方向から一気に斬りかかる。左右から同時に攻め込めば、正面方向への剣技である居合が効かなくなると彼女達は考えていた。

最低、一人がやられたとしても、もう一人は彼を無力化させることができる。だから、今度こそ仕留める事ができると、彼女らは疑わずに信じていた。

「な……！」

しかし、想定してなかった事態がまた彼女達の目の前で起こることになった。

都は、彼女達の繰り出す剣技を〃彼女達が攻撃するより先に読み〃、まず斬りやすいと思った所に狙いを定め、右の子を下から上に斬り上げる一閃で彼女の写しを剥がす。そして、思いきり左へ弧月型の一閃で左の子の左腕を斬り落とす。そうすると、彼女たちの写しを解除する事に成功した。

これで3人目だ。

ちなみに、都は右利きなので、右から斬りつけてきた攻撃を防げるのが得意中の得意だ。そして、彼が起こした出来事は全て一瞬で考え、一瞬で実行に移して出来た事なのだ。

彼は自分の集中力を限界まで上げる事が出来る〃能力〃のような物を持っている。相手の動きを〃相手が攻撃するより先に全て読む〃。それを先程繰り出す事に成功し、彼女達の攻撃を凌ぐ事が出来た

のだ。幸いの所、相手の剣技は大したものではなかった。彼はこうして初見殺しと言わんばかりの攻撃を成功させる事ができた。

だが、もし相手は写し状態の可奈美だったら話は別だ。自分の妹の剣技は何もかもが化物しすぎる。あいつに勝てる奴はおそらくお母さんだけであろう。

何せ、都はただ写しを貼った普通の相手だけで既に対応が精一杯なのだから。

それにこの集中状態も精神の消？がかなり激しいので、できればもう二度と使いたくない。

ちなみにだが、《居合》という技は舞衣から学んだものである。もちろん、正式に手合わせなんかをしてこの技を習得した訳ではない。ただ、可奈美と舞衣の稽古を彼は常に見ている、自然と舞衣の得意技である《居合》を学んだのだ。

でも、それはただ見ていただけなものなので、その剣技の精髓を完全に理解できない以上、まだまだ舞衣ほどに技を上手く発動させるまでにはいかない。

「都、後ろ……！」

そして、三人目の刀使を仕留めたばかりのところ、沙耶香が急ぎに都に警告の言葉を発する。

しかし、彼女の警告が間に合わず、彼の首先にはもう冷たい鉄のよくな硬い硬質の感触をしてきた。

「卑怯な勝ち方でごめんなさい。」

先程の二人を倒した後、極限まで集中してスタミナをかなり消耗した影響なのか、疲れて周りがあまり見えていなかった都は、残り最後の一人に隙を捉えられた。これはいわば将棋で言う所の「詰み」：チェスで言う所の「チェックメイト」と言ったところだ。

「……までか……！」

自分の今の局面を悟り、彼はこれ以上抗うことを諦めた。

(やはり四人相手では、限界があった。)

「そんな残念そうな顔はしないでください。貴方はもう十分頑張ったと思います。」

そして都と共に、ようやく張り詰めていた緊張感を放ち、最後までに残っていた刀使は都に苦笑いな顔をする。そして、小さい声で都のことを褒めました。それが都に届いていたのかは、分からないが……

「……はっ！よ、よくもここまでやってくれましたわね！あの男をしつかり捉えろ！さあ、沙耶香。大人しく私と一緒に鎌府に帰りましょう。」

そして、都が最初の一人目を打倒してから反応がずいぶん遅くなった高津学長は、ようやく正気に戻ったようで、今の状況をしっかりと反応する事が出来た。

しかし、想定外の事態でこんな結果に導かれる何て言うのは、彼女にとつてもいい気はしないようだ。流石にこの場面で彼女の顔からは完全勝利の感情は感じられない。むしろ、彼女にとつては敗北といった感じだった。

自分の学園の生徒、しかも刀使たる者がただの一般人に半分以上の人数がやられたのだ。

きつとこのような悲惨な勝利は、彼女のプライドを考えれば受け入れられないものだろう。

「……………」

そして、高津学長に呼ばれた沙耶香は高津学長を一瞬見た後、すぐに都の方を見た。

その目は、相当に迷っているように見える。

「沙耶香ちゃん、俺は負けた。君を守れなくて悪かった。」

「ううん、^{みやこ}都はちゃんと私を守ってくれた。ありがとう。」

胸が熱くなり、先程の物より強い痛みがまた沙耶香を襲った。沙耶香はこの感覚がまだ何なのかは分からなかった。でも不思議と、都と喋るときと同じ、沙耶香は嫌じゃなかった。

顔が赤くなり、沙耶香はこの物知れない「嬉しい気持ち」という物を都に抱いた。

「……そうか。沙耶香ちゃん、これを受け取れ。」

都が携帯をポケットから取り出す。そして、ある物を沙耶香の方へ投げた。本当ならここで周りの刀使は動くべきなのだろうが、この挙

動に対し、都を構う刀使は阻止する事はなかった。

「これは……う？」

都が沙耶香に投げたのは、携帯につけるサイズのぬいぐるみだった。その外見は猫の顔に似ているように見えるが、似ているようで似てない。

「お守り。変なものだと思うけど、受け取ってくれれば嬉しい。そして、これを君が握りしめてくれば俺は必ずお前を助けに行く。約束する。」

「うん、大事にする。」

ぬいぐるみを胸に強く抱く沙耶香は、このぬいぐるみのことをとても気に入ったみたいだ。

そんな嬉しそうな沙耶香を見て、都は思わず心の底から微笑んだ。最初に出会った時より可愛くなった、自分が沙耶香を幸せそうな気持ちに出来た。それは彼女にとってはこの上のない幸せだったのだ。

「???」

そして、沙耶香に無視されたまま二人だけの世界へ入っていく都と沙耶香にムカついた高津学長。彼女はまるでその場に居た全員に忘れられたような気持ちを味わった。

「沙耶香ー!!そこで何をしている!もたもたせずに早くこっちに来なさい!」

「うわあ、めっちゃ怒ってるよ、うちの学長は。糸見さん、これ以上学長を怒らせる前に早く帰りましょう。それと、この後の事は私にお任せください。貴方の糸見さんを守りたい気持ちを、私は無駄にはしません。」

「意外といい人だな……お前。」

「貴方ほどではないと思うけど……。ただ糸見さんを守りたいと思う気持ちを目の前で感じた以上、その気持ちを無駄にしたくない思いも強くなりました。」

そう言い、都を抑えつける刀使は彼に笑顔を見せた。その笑顔には偽りが無いようだ。

「それじゃ、この後のことはよろしく頼んでもいい?」

「はい！お任せください！」

その後、彼は沙耶香の刀を刀使の方に返し、沙耶香にも別れを済ました。

◇

鎌府の刀使たちと正面衝突をした幕はようやく無事に終わった。

本来、誘拐犯扱いをされた都は無事に済むはずは無のだが、ある刀使のお陰でこの件はなかったことになったのである。

その無かった事になった原因は、都が三人の刀使を倒したからだ。流石にこんな醜い話を世間に知らせてはいけない。これも鎌府の名誉に関わる問題なのだ。

故に、この話が最終的になかったことにされ、都の身柄も確保されずに済んだのだ。

(まあ、こんな決定を下した高津という女はとても悔しそうな様子だったようだけど、これも仕方のない話だ。名誉を傷づけたくないなら、そうするしかない。ざまあ見ろクソババア。)

ちなみに、別れたときに都を縛っていた刀使は、最後は都にお茶の誘いをした。

「もし鎌府に来る事があったら、一杯奢るよ。」という話だった。まあいつの日かはね…。

「はあ……疲れた。」

沙耶香達と別れた都は疲れた体で家に帰っていた。本来はもつと朝練をする予定だったが、刀使との戦いで集中力を使い過ぎて朝練を切り上げて早めに帰ることになった。

「時間にはまだ早いか……」

家に帰った頃はもう6時10分のところ。そろそろ可奈美たちの朝ごはんを用意する時間だ。

しかし、こんな疲れた体では直ぐに朝食を作ることができない。故に、都は先にお風呂の方へと向かう。

「朝ごはんを準備する前に、まず風呂で疲労を無くさないで。」

そしてどんどん思考能力が落ちていく都は、風呂についた頃にはもう最低レベルまでにしか残せない思考能力になっている。都は「なんにも考えず」に風呂場の扉を開けた。

そこで彼は、今まで生きてきた中で最も美しい光景を見てしまった。

風呂場の中には何も着用していない二人の未成年の少女がいた。

一人は絶好のスタイルを持つ、中学生には思えないくらい豊かな体。もはや妖艶という詞を形容すべきなのかと思ってしまうほど綺麗だった。……いや、これは早めに女性という魅力を最大まで発揮する成熟な体と言っても過言ではないのかもしれない。

しかも、先程お風呂上がりであろうせいかわ、彼女の体には僅か少数の水珠がついていて、顔色も水蒸気のせいで赤くなっている。潤んだ目と赤くなっている頬、さらに大人の女性と言っても過言ではない程の成熟な体の攻勢下で、これに落ちない男はいない！必然的に彼女に惚れてしまうだろう。

「……え？／＼／＼」

「お、お兄ちゃん……!?!／＼／＼」

おっと、一番大切な人を忘れてはいけけない。先程の体には劣っているが、徐々に成長している小さい女性の象徴をしっかりと持つ彼女の体は、ある意味では魅力的と言えるだろう。

贅沢な肉がどこにもなく、きちんと鍛えられたちようどいいバランスが形成されているその肉体美。大きくなりすぎず、小さくもないちようどいい部分。男の憧れは、まさにそこにあるのだ！

そして、その裸が兄に見られて照れさせられたその顔は、しっかりと少女という最大の魅力を発揮している。(可愛かった。)

さて、そろそろ現実にも目を向かなければならない。今の状況はまさに漫画やイケナイ本みたいな展開だ。

お風呂に入った瞬間、狙っていたかの如くお風呂から上がった可奈美と舞衣がそこに居た。恐らく起きたあとはお風呂で眠気を解くつもりだったのだろう。

ならば選択は2つに分かれる。

斬られるか殺されるか2つの選択しかない。それは今の状況からすれば必然だ。男からすればとても理不尽と感じられるが、これは見えてはいけない物を見てしまった代償だ。罪を犯せば、そこに罰が与えられる。

文句なんて言わない、なぜなら自分は勝手に彼女らの裸を見た。
今日二番目で最低だと思われる行為だ。

しかし、都も一応男だ。彼の心は誠実そのものである。故に彼は遺言を先に、二人に言わなければならぬ。

例え後は必ず蹴り飛ばされるとしても。

「可奈美、舞衣ちゃん……お前らちゃんと成長してきたな。」

「~~~~!!／／／／／」

「~~~~!!／／／／／」

そして次の光景は風呂場から蹴り飛ばされた都という光景だった。

第四話：進学先は……。

—2月—

春に差し掛かる、寒いような暖かいような中途半端なこの時期。今はちようど学校では、進学テストの時期に入っていた。可奈美はそのため、毎日の予定が殆ど勉強の時間にされ、剣術も禁じられて勉強に明け暮れる忙しい日々を送っていた。

それがどれほど辛い日々なのかは、彼女にしか分からない。幸いのところ、自分の親友である柳瀬舞衣と兄の衛藤都が彼女のそばで支えている為、やっとこの辛い日々を耐えた。

そして、いよいよテストの日がやって来た。可奈美はいつもより朝早く起きて、都が作った朝ごはんを美味しくいただく。

「今日の朝食はどう？満足できた？」

「うん！お兄ちゃんの料理は学校で食べた料理よりうまい！」

「それはどうも。」

可奈美が自分の料理に対し、大きな賛賞をもらった事に都は今までの努力は無駄じゃないと嬉しく思う。

実のところ、都は可奈美が美味しく食べられるよう、より勉強に集中して料理のことを色々と研究した。そして、なんとなく可奈美が美味しくいただいた程度にたどり着いた。

ちなみに、都に料理を教えたのは柴田という人だ。彼は柳瀬家の執事であり、舞衣直属の執事でもある。ある日に、彼が勝手に都を弟子入りさせて色々教え込んだのだ。

彼が何故そうしたかの理由は、まだ彼は誰にも教えてはいない。けれど、彼は本気で「仕事の仕方」を都に教え込んでいたように見えたので、そこには生半可な意思はなかっただろう。

「お兄ちゃんは食べないの？」

「後で食べる。それより今日は絶対に失敗すんなよ！俺と舞衣ちゃんがあ・れ・だ・けお前の勉強を手伝っていたんだからな。」

「うん！必ずお兄ちゃんと舞衣ちゃんの努力を無駄にしないよ！」

（良い返事だ。俺の妹であるお前なら必ず出来るはずだ。）

元気でやる気満々の可奈美を見て、都は思わず微笑んでいた。

自分の妹は最高に可愛くて、元気いっぱい溢れるその姿は本当に魅力的だといつも彼女を自慢する彼だった。

「よし、今日のテストがうまく行ったら、夜は稽古のフルコースを約束しよう！」

「本当!? やった! お兄ちゃんと思いつき稽古できる!」

万歳と言っている可奈美は、とても喜んでるように見える。そんな彼女を見て、シスコ都は再び自分の妹に癒やされた。

そして朝食の時間が終わり、都が可奈美を学校の方へ送るその道中、同じく可奈美と一緒に学校の方へ向かう予定の舞衣と出会い、そこで成り行きで珍しく三人と一緒に登校をしていた。

しかし、都はまだ知らなかった。この先に、彼にとって過酷な現実が待ち受けていることを。



「可奈美は大丈夫かな……」

岐阜県にある街中で歩きながら、都はたった今テストを受けている最中の妹を、凄く心配している。

いつもなら、可奈美のそばで必死に応援をする筈であるこのバカ兄は、とある理由でここでゆっくり観光をしている。

その理由は、可奈美の学校が彼の進入を拒否してるからだ。毎回の遠足に勝手についてきて、可奈美にたくさん手を貸して、ついでに教師たちに代わって生徒たちを導くその様……こんな問題人物を、流石に学校側の者達は放っておく訳にはいかないのだ。

それで拒否された都はもちろん気に食わない気分で、今もなお心の中がムカついたけど、可奈美と舞衣のためだと強く思い、何とか我慢をしていた。もし自分があの場合で大暴れしたら、きつと彼女たちに迷惑をかけるだろう。

特に柳瀬グループの令嬢である柳瀬舞衣には絶対に迷惑をかけてはいけない。

で、何故岐阜県に居るかつて？理由は簡単。五箇伝の一つである美濃関学院が此処にあるからだ。兄たる者はもちろん「妹が行きたい学校を兄が先に偵察するに決まっているだろう」という非常識を掲げる救いようのない妹思い過ぎるバカ兄なのだ。だからこそ、都は今此処に居るので。

ちなみに、今日は平日。普通にこの時間では大人しい生徒であれば学校の教室にいるはずなのだが、残念ながらそうでない都はこうしてのんびりと岐阜を観光している。

でも、これは決して彼がサボっているわけじゃない。これはきちんとして学校に申し込んで受理された見学なのだ。そして学校方面は彼が見学したい学校は、五箇伝の一つであると聞いたら、学校方面は至急手続きをした。

もし彼があそこへ進学するのなら、きつと本校にもいい宣伝になるだろう。という利益的な理由で彼の行動を学校側は許可したのだ。

「いや、絶対に大丈夫だ！うちの妹だし！……多分。」

そして、妹の件で若干そわそわの気持ちでこの街を観光している都であった。

それから数十分後、都はやつと目的地の美濃関学院に到着した。

駅から相当な距離だったが、途中で色んな商店があつたので、退屈しない結構楽しい道のりでした。

「ここが美濃関学院か……」

都は、目の前にあるいくつもの大きな現代風建物にかなり驚かされていた。彼はここで、改めて五箇伝の力の強さを再認識した。

(いくらなんでもデカすぎるだろう……。こんな見るからに凄い学校を毎日通えるなんて……。本当に夢みたいな話だな。こんな凄い学校に今後可奈美と舞衣が通える可能性があるんだと思うと、なんだか：凄く寂しい気持ち心がの中から湧いてきた。)

所詮、自分は選ばれた人間ではない……。彼女たちと永遠に並べられる事はないんだ。自分の身分と彼女たちの身分の差を悟って、都はこの先のことを嘆いていた。

「あの……貴方は、衛藤 都さんですよ？」

「は、はい?」

そんな時、都の背後からなんとなく優しそうな声がかけてきた。背後に振り向くと、一人の女性がそこに立っていた。

亜麻色の髪色、まるで翡翠のように優しい瞳。彼女は都の反応を見て、礼儀正しく小さく微笑んでいた。

その笑みには、まさに大人の女性にしか示せない魅力が満ちている。

「そんなに緊張しなくてもいいのよ、衛藤さん。」

「は、はい。あの…失礼ながら、どちら様でしょうか?」

ここが五箇伝の一つである美濃関学院という事のせいなのか、都は思わず目の前の女性に対して敬語を使う。柳瀬舞衣の前では普段の自分のままでいられるのに、この女性の前ではなんとなく敬語を使ってしまう。

「私は羽島江麻はしまえまと申します。この学院の学長を務めております。」

「が、学長!?…え、えつと…お、お会いできて光栄です!」

(学長…つまりあの「ババア」と同じ職務の人だ。しかし、この人はあのババアと違って、優しくて温厚そうな人だ。)

「ふふ、無理に敬語を使わなくてもいいのよ。私はそんな大層な人間じゃないから、貴方の好きなように接してくれて構いません。」

「……ど、努力します。」

「それじゃ、早速ですが確認させて頂きますね。単刀直入に言います、貴方は衛藤 都さんですよ? 例の学校から見学の申し込み表が先程こちらに届きました。」

「はい。美濃関学院がどんなところなのか凄く気になったのですが……その理由でダメなんでしょうか?」

「いいえ、本校に興味を持つことはとてもいいことだと思います。それに……ううん、なんでもないわ。」

羽島学長は都のことをじっと見つめていた。さつき彼の顔を見た瞬間、昔の知り合いの影が彼と重なったように見えた。

紫色の髪、顔のパーツ、瞳の色。そのすべてがあの人とよく似ていた。まるで昔のあの人がこのにいるみたいだと羽島学長は思った。

「それじゃ、身分を確認した上で私がご案内します。よろしいですか?」

「は、はい!よろしくお願いします。」

短い会話が終わり、都は羽島学長に連れられて美濃関の校内へと入っていた。

そこで都はさらに驚愕させられた。

まず美濃関学院は、ネットの地図で見たよりかなり広い学院だということを確認できた。おそらく学園内を一周するまでに約一時間かかるのだろうかと言う事が分かっている。

そして、ここにいる学生は女性だけでなく男性もいる。

その何が驚く事なのかと言うと、都が事前に美濃関は五箇伝の中での唯一男女学校だと言う事は聞いていたのだが、まさかこの噂が本当だとは思っていなかった。刀使は女性限定でなれるものだから、都は刀使の学校は女学校だけという認識で固定されていた。

そして、ここにいる学生は刀使でもない人もたくさんいる。その為、その人たちに用意されているのが“刀匠課程”の“作刀課程”や“刀装課程”。これらの課程が、美濃関にたくさん刀使以外の人材が集められるきっかけになったのだ。

研師、鞘師、柄巻師、装剣金工、白銀師、組紐職人などの鍛冶界において有名な今の職人達は、すべて美濃関の出身なのである。なので、刀にこだわる刀使達もよく美濃関の拵師に自分の御刀の刀身以外の部分をオーダーメイドするらしい。

とにかく、彼／彼女らはこの世界の未来に期待された人間なのである。

それを知った時、彼の刀使に対する認識がリセットされ、心が落ち着き、そして少し心が踊っていた。

まさか刀使じゃない人間でも刀使の世界にそんな貢献ができるなんて……。

(もし自分がここに進学して立派な刀匠になれたのなら、少しでも可奈美や舞衣の役に立てるのだろうか……)

少しそんな未来を期待してしまった。彼はずっと可奈美と舞衣を

中心に動いているのだ。

彼女たちのそばにいられることは、彼にとってそれは最大の幸福だ。

「ここが鍛冶科の建物です。さつき紹介した例の課程も、この建物に設置しております。赤羽刀あかばねとうの再生もここで行っています。」

「赤羽刀？」

「あら、ごめんなさい…知らなかったのね。では、歩きながら説明しますね。まず赤羽刀とは、一度荒魂を倒すと落とす『錆びた御刀』のことです。」

「御刀も錆びるんですか？鍛冶師がどこにも居るこの時代に？」

「はい、本来御刀は錆びるはずかない神刀なのですが…例外も存在しているんです。それが、先程言った赤羽刀です。」

（例外があるのか…：てつきり御刀は折れない、錆びれないものだと思っていた。）

「現状では御刀を新たに製造することが出来る技術が現代にない故、こうして赤羽刀を再生する形で御刀を製造していく他ないのです。」

「なるほど。」

赤羽刀の再生の話聞いた時、彼は一瞬で可奈美が持っている御刀ちどりの千鳥のことを思い出す。

（あれは、とても綺麗な刀だった。あの刀も昔、赤羽刀だったのだらうか…。）

「どうやら刀に少しでも興味を持てるようになったのですね。」

心が踊り、嬉しそうにしている都を見て、羽島学長は笑う。

「え？そう見えます？」

「はい、よかったです。この教師を紹介しましょうか？彼女と話したら、多分自分の心境が良くなると思うわよ。」

「いえ、それは結構です。」

だが本人にはまだその自覚がないらしい。何せ、彼は母親がなくなったその日から、既に刀に関する熱意が失われたのだから。

ただ、刀に関する熱意はまだ完全に消えている訳ではない。

「おう？そこにいるのは学長じゃないか？」

そして、先の教室から一人の女性が現れた。

その女性は、綺麗な金髪を持ち、容姿の全体を見る限りはスタイル抜群の外国美人みたいな女性だ。

アレは舞衣と同じレベルかな？…とても失礼な行為だとは都も分かっているのだが、都の視線は思わずアレへと無意識に移った。

「田中先生、こんにちは。どうしたの？授業の時間に教室から出て来るなんて…。」

「自習中だよ。あいつらはまだまだだから、しばらく自己勉強をさせておこうと思ってさ…それより、その紫髪の男の子は？見たことない顔ですけど。」

都の方を見た田中と呼ばれていた教師が両手を腰にあてながら学長に訊く。

「あ、彼は例の学校から見学しに来た中等部三年の衛藤 都さんです。」

「…どうも。」

「へえ。見た感じ結構鍛えてる男ですね。どう？あんた、うちのクラスに来ない？高等部でもあたしの授業を受けられるからさ。」

田中教師は都の腕の方を一瞬だけ観察し、一目で都が鍛えている人間だと分かった。そして流れるように彼を誘っていく。

「いえ、まだこっちに進学するかどうかは決まっていないので…。」

「まあまあ、そう言わずに。じゃあ、もし来ること決まったらうちのところへ来なさい。特別に一对一で教えてあげる。」

「いや…その…マジで遠慮します。」

都は、率直にこの人は姉貴タイプの性格だと思った。そして、それと同時にこの人の会話に対応し辛いとも思っていた…。

中学の頃から、都はずっとそういうタイプの人間に苦手意識を持っていたのだ。主に姉貴タイプの人間は大部分が悪い人ではないから、そんな悪い気せずに接してくれる相手はかなり苦手だ。もし悪い人だったらいつもの対応で良いから楽になれるのに…。そう、都はずっとそう考えていた。

「ふふ、田中先生がそこまで熱心に勧誘するなんて、よほど期待されますわね。」

優しい顔で、都の方を見てくる羽島学長。率直に言っただけの彼女の笑顔は実に甘くて暖かった。

「そんなに褒められても……」

「そうだ、学長。例の赤羽刀はもうこちらに届いてある。今は分析して再生するところの段階だ。後で服部はっとりのやつと連合作業をするから、今夜も教室を借りるよ。」

「ええ、わかりました。赤羽刀の作業をお願いします。」

「おう！それじゃ、あたしはこれから服部のところに行くから学長も無理せずに。」

「ええ、わかりました。」

そう言い、田中先生はそのまま立ち去って行った。

「どう？さっきの田中たなかみょうこ妙子先生。いい人でしょう？彼女はこの学校の刀匠専科先端の一人で、いつも赤羽刀や御刀に関することに走り回っているわ。私よりも忙しい方なんです。」

「……俺はそんなことはないと思います。羽島学長も、きっと自分なりはかなり頑張っていると思います。それは多分……本当に誰よりも……でないと、この学院はここまで壮大にはなれていなかった筈です。」

「衛藤さん……」

「俺が言うのはおかしいですが……それでも言わせてください。いつもお疲れ様です、羽島学長。」

「……ありがとうございます。まさか衛藤さんに褒められる事になるとは……やっぱり似ていますね。」

都の言葉に歓喜し過ぎたからだろうか、羽島学長の瞳から涙が零れ始めた。

「え……!? すみません！俺、何か悪いこと言っちゃいましたか!？」

「いいえ、これは嬉しい涙です。あなたのおかげでまた一歩先へと歩ける気がします。」

涙を拭いて、羽島学長は真正面で都と向き合う。

「衛藤 都さん。私、今回の出会いを忘れません。もし気が向いたら、ぜひ美濃関学院へ進学してください。あなたのことを待っていますから。」

「……………」

優しい笑顔で手を差し出し、正式的に都のことを美濃関学院へと勧誘した彼女。

その時の都は何も答えていなかった。いや、答えることが出来なかったと言った方が正しいだろう。

その後、学園の見学がようやく終わり。都は見学中にずっと勧誘されたことについて考え込んでいた。

その日の夜も、可奈美と稽古する時も、ずっとそのことについて考え続けていた。

一般人の自分が、五箇伝の美濃関へ……刀使の世界へと踏み込んでいいのか、ずっと悩んでいた。

◇

本当に、彼女とそっくりだと思った。

初めて彼と出会った時、てつきりあの人に戻ってきたのかと勘違いしてしまった。

同じ顔で、同じ瞳で同じ髪色。口調と個性は少し違ったが、他のところはとてもそっくりな作りをしていた。

そして、今日で彼に言われた言葉……それは昔、あの人にも同じことと言われた気がする。

「きつと、お前も自分なりにかなり頑張っていたと思う。それは自分……誰よりも……でなきや、私達だけでここまでたどり着けなかったよ。だから本当にお疲れ、江麻。」

その言葉を再び思い出すと、色んな気持ちが心の底から沸き上がってきた。

「いけない、また涙が……」

学務室にて。羽島江麻は涙を拭きながら、ある資料を確認するとこ

ろだった。

その資料は、衛藤家兄妹に関するものが載っていた。その資料に載った写真を見て、またある実感が湧いてきた。

この二人は本当にあの人……藤原ふじわら 美奈都みなととそっくりだ。都は外見で、可奈美は剣術大好きという点。

母、藤原美奈都の特徴は確かにあの兄妹が受け継いでいた。そして、妹の方は強く此方の学園への進学を希望している。

「衛藤 可奈美……名前もそれぞれ受け継いだのね。兄の方は都みやこ。妹は「なみ」ですか……」

そして、彼女の視線が改めて御刀一覽に移る。

「千鳥……やっぱりあの子を選んだのね。」

可奈美の愛用する御刀の千鳥は、昔に美奈都が愛用していた御刀だ。これも、おそらく宿命と言えるのだろう。

「兄の方はやっぱり何も持たないのか……それもそうね、男の子だし。でも彼も彼女の良いところをちゃんと持っているわ。しっかりと美奈都の意志を彼は受け継ぐのでしょうか。」

窓の外の夜空を見ながら、羽島学長は再び都のことを思い出す。

「彼なら、美奈都さんみたいに頼れる人間になれるのでしょうか。刀使たちを支え、妹を支え、最終的にみんなの柱になる……そんな未来も……悪くないわね。」

星空を見て、羽島学長はそんな未来を想像して優しく微笑んでいた。

◇

「可奈美、もう寝た？」

夜の11時に、突然可奈美の部屋の扉が叩かれた。

「ただだけど……どうしたの？お兄ちゃん。」

「少し話があつて……部屋、入ってもいいか？」

「いい……あ……ちよつと待つて！」

「待て」と可奈美に言われたので、おとなしく待とうと思つて扉の前

で待っていた都。だが、可奈美に言われた後の数秒後：部屋の中から
壮大な声が聞こえてきた。主に「痛い！」等の声ばかりが部屋から聞
こえてくる。拗らせたシスコンの都は、当然可奈美の安否を心配す
る。

「お：おい、大丈夫なのか？」

不安そうな声で可奈美に尋ねる都。

「大丈夫だよ！だから絶対に入らないで！」

「お：おう、分かった。」

それから数分が経ち、ようやく可奈美の扉が内側から開き、可奈美
が部屋から顔を出してくる。

「も、もういいよ：ハアハアハア：」

そこには、何故か凄く疲れた様子の可奈美が目の前に居た。一体部
屋の中で何の運動してたのか、凄く気になる。

だが、そんなことよりも可奈美が着ているパジャマの方が都の注意
をそっちへと逸した。そのパジャマは、ピンク色のふわふわ系の可愛
いパジャマだった。可奈美は昔から剣術以外では可愛い物が大好き
で、特にふわふわの物には目がなかったという事を都は思い出す。

そして、いつもよりも可愛く、自分と血の繋がった妹だとは信じら
れないほどのドキドキさせる、妹の頬を赤くしながら上目遣い。これ
はもう、都にとつての即死級萌え攻撃と言っても過言ではない。

部屋に入ると、都はベットよりも先に部屋の中にあつた椅子の方に
座った。流石に今の状態で妹のベッドに座つたらまずいだらう。

ベッドに座ってしまったが最後は一晚中、可奈美の良い匂いやパ
ジャマを着た可愛さのせいで眠れなくなってしまう。（既に手遅れ）

「それで、お兄ちゃんは何を話しに来たの？」

ベットに座つた可奈美が、都の方へ向き合い話し始める。

「可奈美：：さつきお風呂から上がったところか？」

「え：！？／／／」

しかし、都は本題に入るより先に、今この一瞬で可奈美を観察して
気になった方から話し始めた。かなり目を凝らせば分かる事なのだ
が、可奈美の髪は微妙に濡れていた。だが、彼の目は可奈美に関して

の事なら鷹の目にでもなれるので、一瞬見ただけだとしても、簡単に詳細な変化を目視できてしまうのだ。

まあ、彼は別にそこまで可奈美に関して詳細な変化を感じ取れる訳ではないのだが……。ただ可奈美の髪が少し濡れているように見えたから、単純にそう推測してみただけなのだ。それでも可奈美のことを関していると他の人間より何倍も彼女の変化を気付くのだ。

「当たり前か？」

「そ、そうだよ……／＼／＼。さっきお風呂から上がったばかりなんだ……それでタオルを体に巻いたまま部屋で、ついそこで剣術のことを考えちゃって……剣術の事で頭が一杯に……つい着替える事を忘れて……それで……／＼／＼／＼」

羞恥心に悶えているのだろう。顔が真紅に染まり、可奈美は見るからに落ち着かない様子で、「トイレに行きたいのか」と思わせる程にモジモジしていた。

その恥ずかしがり方と赤くなった顔が合わさり、都は何かイケナイものを見ていたような気分になった。「(クツソ可愛いんだが……)」と思いつつながら。

(何その仕草……可愛い過ぎんだろ!!おいおい、ヤベエぞ!マジで可愛い……!ああ、この世界にこんなにかわいい生き物が本当に存在したのか!マジで可愛いすぎんだろ!?抱き締めてもいいですか?頭を撫でてもいいですか?)

「なるほど。さっき部屋の中で焦っていたのはそういう事だったのか……」

「う、うん／＼／＼……それで?お兄ちゃんは私と何か話したいなの?」話題を逸らしたくなるのか、可奈美の顔が赤のまま本題を戻らせた。

「あ、ああ……実は俺は可奈美と一緒に美濃関へ行きたいと思っとな。」

「お兄ちゃんも美濃関へ行きたいの!?!」

「う、うん。色々考えたんだ……。でも凄く迷っているよ。」

視線が床に落ち、都が落ち込んで見えるように見える。こんな都、可奈美は初めて見た。

いつも自分優先で、元気で、凄く頼れる人がこんなに落ち込んでい
るなんて……可奈美には想像しなかった。

恐らくこれは都のもう一面だろう。普段は可奈美の前で展示され
ないはず。

「俺は可奈美のそばにいたい、舞衣ちゃんのそばにいたい、お前らの
役に立ちたい、もつとお世話したい……。けど、俺たちは別の世界なん
だ！刀使と普通の人間は慣れない……。いや、一緒にやいけないだ。俺
はお前らに何もあげられない、助けられないんだ。」

まるで心が刀に斬られる気分だ。まさかお兄ちゃんがそこまで考
えていたんだ……。自分が情けないと思ってしまう可奈美であった。
ずつと一緒にいたのに、どうしてお兄ちゃんがこんな苦しそうな
に、自分が自分のことしか思っていないの？

お兄ちゃんが傷づいた、凄く悩んでいた。自分さえも考えていな
かったことでも先に考えた。

でも、これはきつと普通の人間しかわからない悩みだと思う。

刀使は普通の人間より強い、手助けなんてほぼ必要ない。だから
ずつと自分を助けに、優しくしてくれた一般人のお兄ちゃんがこんな
にも苦しそうだ。

「いつかお前たちは遠くへ行くだろう。もつと先に明るい未来へ
……。これは俺の望みでもある。……。だが同時に俺がそこにいないこ
とを怖がっている。永遠にスタートに立つ俺は刀使であるお前たち
に追いつけない……。そばにいられないんだ。」

(違う。それは違う。)

都が言っているのが確か事実だが、何か違うと勘付いた可奈美。

可奈美が望んだのはこれから先の未来に舞衣ちゃんと一番大好き
なお兄ちゃんがそこにいる。

考えが甘いだが。それがどうした？望んじやいけないのか？それ
は違う。

自分の心に当たって、可奈美は剣をそこに狙う。

そこには救いたい人がいた。

「お兄ちゃん、こっちにおいて」

彼女は外れるはずかない、彼女が見たんだ。

その心の軌跡に乗せて、あそこへ一閃で斬り開く。

「可奈美!?!何を……!?!／／／／」

彼の手を引つ張って、都を自分の懐に迎える。

彼が驚異なのを知っている。彼女も結構恥ずかしいから。

でも、彼を救いたい気持ちももっと大きかった。

(迷うな、そこに斬るのみ!)

「私はお兄ちゃんのそばにいたい。私、お兄ちゃんからたくさんもらった、たくさん優しいもらった。……私はそんなお兄ちゃんが好き。だから離れるなんてさせない。」

「可奈美……」

「もしお兄ちゃんが後ろに止まったら、必ず引つ張ってやる!全力で引つ張ってやる!私はお兄ちゃんと離れるのが嫌。もっとお兄ちゃんといいたい……駄目?」

強く都を抱き締めた可奈美は言葉のまま都と離れるつもりはない。だつて好きだもん、家族だもん。母が失つてからずっとそばで自分を笑顔してほしいと頑張っているお兄ちゃんだもん。

ずっとそんな彼を好きだ。

「……もちろん、いいよ。まったく……こんな兄を粘るかわいい妹の望みなら叶えてやる、どこまでもついていくよ。」

そして、ようやく可奈美の剣が届いた。

「本当?」

「本当。俺はもう迷わない……俺は全力でお前のそばへ行く。どんなことがあつても、俺はお前のそばへ行つて助けてやるよ。」

可奈美の抱き締める力が弱まり、都は自ら彼女の懐から離れ、お互いの息が感じられる距離で。

不思議とこの距離ではちつとも恥ずかしくない。でも可奈美本人がきつと彼より恥ずかしいだろう。いや、お互いの顔が真紅だからきつとお互い様だろう。

「なら、約束して……」

「ああ……」

そして都が千鳥を取って、前のテレビで見た戦国ドラマの武士みたいな真似をして可奈美の前に誓った。

「俺はお前の鞘、お前がどこへ行っても必ずそこへ向かう。どんな困難があっても、あなたとともに立ち向かう。俺たちは絶対離れない／私たちは絶対離れない。」

最後のセリフを彼と可奈美はともに言った。

「なんだが、かつこいいいよね。私とお兄ちゃんは一つの剣で！」

「おい、やめろ！あれは二回言ったらよほど恥ずかしいセリフだろうか！」

「ええ。でも凄くかつこいいよ！私達は兄妹ですし、同じの流派、同じ師匠でもあるー！」

「確かにそうだが……」

「お兄ちゃん、私達は一つの剣だよ。どんな困難があっても二人で迎えましょう。」

可奈美が都の手を強く握り、嬉しいそうに言う。

(どうやら「一つの剣」を気に入ったみたいだ。それは嬉しいことなのですが……やはり気恥ずかしい。でも嫌いではない。可奈美と一緒になら、剣になってもいい。二人で一つの剣……確かに俺たちにはとても似合うことだ。)

(俺は可奈美を守る剣になる。そのためならなんだってやる。俺はこれから先にもっと強くなる。可奈美を守るために俺の剣はもっと強くならなきゃ。)

そう誓って、彼は刀使の世界に入り込むことを決めた。

第五話：可奈美のお兄さん

美濃関学院の入学式当日ー

「お兄ちゃん……流石に見すぎるのでは？／＼／＼」
シスコンの極み
衛藤都がただ今、人生最大の幸福を感じている。

ようやく美濃関に入学できた妹が入学当日、美濃関学院の制服を着ている。

デザインは赤と白のブレザーの制服だ。これは可奈美世界一可愛い妹にしては絶対お似合いそうな格好！鎌府のもそこそこ良い（主に沙耶香がイメージ）のだが、自分の妹が着ていると、もう最高という評価しかないと感想する彼。

（何より、この赤いのミリスカート！もう反則レベルのものじゃない！激しく動くと、太ももも危うく見られてしまいそうだ。）

「やっぱり美濃関に入学してよかった。これで毎日こんな可愛い可奈美が見える！何という至高の幸せなのだろう！」

「お兄ちゃん……／＼／＼」

（ああ、必死にパンツを隠そうとする可奈美がマジ可愛い……。写真一枚撮っても怒られないかな？）

「……はあ！そういえば、舞衣ちゃんも美濃関に入学するだっけ？」

「うん、舞衣ちゃんも一緒なんだ。どうしたの？」

可奈美の制服姿を見た都は急に何か勘付いた様子で、少し心配するような顔になった。

「学院内で、舞衣ちゃんに手出そうな野郎がいないかな？舞衣ちゃんはあんな反則スタイルが持つてる上で、さらにこのミリスカート……」

「舞衣ちゃんは刀使だから大丈夫だよ！それに舞衣ちゃんは強いし！」

「まあ、そこは同感かな。それに、俺は舞衣ちゃんに手を出そうなやつが犯行する前に見つけてきちんと始末する！」

「お兄ちゃん、たまに舞衣ちゃんに甘やかしすぎるんだね……」

兄の発言を聞き、流石の可奈美もドン引いた。

あれは本気の発言だ。確かに悪いのは舞衣に手を出す人だが、都がやりたいことがもつと危険なものだ。

「可奈美の大事な友達だから！」

彼はずつとそれを言い訳にして、舞衣ちゃんのことを守ろうとした。

昔から、彼はずつと二人を中心にして動いた。いつも二人を優先し自分を後にする。

これから先も、ずつと変わらないだろう。

◇

今年的美濃関学院の入学式からはもう数カ月時間が経ち、今年も変わらず色んな噂が立ってしまう。

例えば、美濃関歴年最強の刀使の誕生とかの話。ただ中等部一年生なのに、多くの相手を倒し、不敗伝説がそこに立ってしまったとか。それと、今回の中等部一年生の中でトップクラスの可愛く強い子が入ってしまったって、もう何人か告白しに来たのですが、結局見事に撃沈された話とか。

今年の注目はほとんど中等部に奪われた。もしかすると来年の御前試合ごぜんしあひは美濃関が奪冠なのかもしれないという噂も美濃関内に流れている。

でも、多くの人には知らなかった…。今年的高等部一年生の中で高等部三年生と比べられるほどの天才型優等生が現れたという噂。

これは美濃関鍛冶科内部人員しか知らない噂ですけど。その優等生のおかげで赤羽刀の再生作業が加速され、学院に今までもない利益が産まれた。

今現在、噂されている優等生も順調に赤羽刀の再生作業を終え、昼食を食べに行くところだった。

「流石だね、あんな早い速度で赤羽刀の再生を早めに終わらせるとは……さすが君だ。」

「とんでもない。赤羽刀の再生作法をきちんと分ければ、あとは誰だつてできる簡単な作業なのだ。それに、これもこのコンピュータのおかげだ。分析が早くて助かったよ。」

そして、今の彼と話しているのは高等部二年の服部達夫。はっとりたつお

彼は美濃関随一の研師。刀剣の手入れや赤羽刀の研ぎ出しを学んでいる専門家。でもそれだけじゃない、彼は長船女学園寄りの思考持ち主であるゆえ、長船女学園が誇れる最先端のコンピュータ技術を美濃関へ導入した。

それから長船の技術チームに色々依頼して、美濃関に多くの貢献をしていた。まさに鍛冶科を導く先駆者みたいな人物。

「それはどうも。お前が赤羽刀を再生させる速度は俺でもできないから、あんたの方が凄いよ。」

「いえいえ、これも服部さんと田中先生のご指導のおかげです。本当にありがとうございます。」

美濃関学院鍛冶科に噂されている高等部一年、衛藤 えとう 都 みやこ はその先輩である服部達夫とこの場にいない田中妙子教師に心の底から深く感謝している。

入学してから、あの二人がずっと自分のお世話をしていて色々と学んでいました。都にとっては、あの二人は自分に恩がある人たちなのだ。

「それは大ききだ。あなた達の先輩だし、これくらいは当然だ。それにアンタみたいな優秀な後輩ができて、しっかり鍛えないと駄目だと思う。」

「そうですか……。そういえば、先輩は昼食に行かない？俺は予定があるけど、先輩が一緒なら俺は嬉しいです。」

「いや、それは結構だ。まだ調整してないものがあるって……。それに邪魔しちゃ悪いと思う。アンタはいつも噂の中等部の子と一緒にいるだろう？凄く仲良くって、もう付き合ってるかって、結構噂されてるぞ？」

（そういえば、そんな噂があった気がするなあ。まあ、基本そういうのをあまり気にしていない。特に入学してから、もう刀のことを夢中

にしている噂のことなんかを構う余裕がない。」

「そう？あれはただの妹と妹いもつととも友だよ。別に付き合っていないし、それに舞衣ちゃんは俺と別の世界の人間だ。付き合うわけがないじゃん。」

（そうだ、相手は柳瀬グループのご令嬢。例え彼女にそんな意思を抱かえだとしても、彼女と付き合う確率も高くない。彼女は普通にいられる自分では永遠に触れない相手方なのだ。）

「……それはそうだけど。でもよ、あの子が結構お前のこと気に入ってるように見えただぜ？」

「あれは舞衣ちゃんが優しいから！それに、先輩のそばにも仲良さそうな子がいるんじゃないか？あれは確か中等部の……」

「安桜あさくらのことか？あれは……たまたま知り合っただけだ！別に仲良くなんてない！」

その話題に触れたら、服部は急に慌てた反応をしてきた。……怪しい。

「そう？いつそ彼女に昼飯を誘ったら？嬉しく思うよ。」

「余計なお世話だ！それより俺は先輩だぞ。もつと敬語を使え！」

「先に敬語を捨てて話したいと願ったのが先輩の方じゃないか？」

「ぐぬぬ……！」

悔しそうな服部を見て、都が楽しそうに笑う。

服部は少数すつかり都と仲良くなれる同性友人。前の学校ではそんな人がいなくて、学校ではずっと可奈美のことを考えていて、学校がつまらないところだと思った。

でも美濃関に入ったら、服部と出会ってどんどんこんな時間がいいと思える回数が増えた。都が結構こんな時間が好きだと自覚している。

「それじゃ、俺はそろそろ行くから、先輩分の昼飯も買ってくるので楽しんでくださいね。」

そう言って、都が悔しそうな服部を置いて先に学食の方へ行く。

そこで彼を待っているのは、自分が最も大切にしていた二人の女の

子だ。

◇

美濃関の食堂はとても広い食場だ。

そして、美濃関の学生たちが一番気に入っている場所。

なぜって？見ればわかる。食堂の位置はよく日が当たる位置にある。そしてこの設計では、外から照らてきた日光の温度は容易く散らさないような設計。そのおかげで冬の上きは暖気をつけなくても暖かい。

夏だと、ここが大きなエアコンが設置してて、ここをあまり熱くしないように設計している。道理で学生たちがこの場所を気に入っているわけだ。

しかし、エネルギーを最小限節約にするのはまだまだ先の話。いつかここが電力を使わないように、学院側もそれなりに頑張っている。「えつと……これにしようか。」

食堂に着き、都はすぐ自動販売機の方にカレーライスを選ぶ。そうしたら、販売機の中から食券が落ちる。

でも、これは別にカレー好きというわけではない。ただ、彼はこの学食のすべての料理をじっくり味わって、自分の料理の参考にしたいだけだ。

色々と省略し、都は自分が注文した品を持って彼女たちを探す。

「お兄ちゃん〜こつち、こつちだよ！」

そうしたら、すぐあの子に見つけられて、先に声をかけられた。

とても元気良く手を振っている、明るい性格を持つ可愛い女の子。彼女の名前は衛藤可奈美。

「可奈美ちゃん、声が出しすぎ！／／／／」

そして、彼女の隣で慌てている様子の女の子は彼女の親友柳瀬舞衣。彼女は柳瀬グループの令嬢である、つまりお嬢様だ。その優しい性格と中学生に思えないほどの発育は彼女の特徴である。

ただ今、彼女は親友の可奈美が声出しすぎて周りの視線を集められ

ていたことに恥ずかしがっている。その様子はとても愛おしく見える。

「あれは可奈美のお兄さんなのか……結構イケメン！」

そして、可奈美の正対面に座る子も改めて都を見る。見たことない新顔だから、恐らく可奈美の新しい友達なのだろう。

外見は舞衣ほどの美人ではない、可奈美みたいな可愛さ（都の視点では）もない。ただ普通に見えるタイプだ。

それでも、その黒い色に近い桜色の髪がとても目立つので、つつい顔より髪の方を見る。

あの色の髪は都にとっては、桜並みの綺麗さがあると。

「兄に会いたい気持ちが分かるが、声がもう少し小さくしたほうがいいよ。舞衣ちゃんがそのせいで顔が真っ赤になったから」

「あうう……／＼／＼／＼／＼」

都にそう言われて、舞衣の顔がもつと赤くなった。

そして、これを作った張本人はまだ自覚なし。

「ごめん、舞衣ちゃん。でもそうしないと、お兄ちゃんは私達を見つからないよ？ あんな探し方や昼が特に過ぎちゃう。」

「大きさだ……。それより、可奈美。こっちの子は？」

可奈美の向こうに座っている髪が綺麗な子の方を見る。

「ああ……この子は美炎ちゃん。剣筋は凄く強くて、さっき彼女と立ち合いのときは凄くびっくりした！」

「そこまでじゃないよ。可奈美の方が凄く強くて、私があつという間に倒されちゃった。」

「へえー。」

可奈美の目がキラキラして、美炎という友達を紹介する。どうやら、彼女は実に可奈美に認められるほどの強さがあるらしい。

（それは実に興味があることだ。いつか一回で彼女と写しなしの立ち合いをしたい。）

「美炎さん、失礼ですが隣の席に座ってもいいですか？」

「え……？ あ、はい。どうぞ。」

都に隣席の使用権に問われ、美炎が一瞬に反応できなかつたが……

すぐ頷いてくれた。

「あれ、今日はカレーですか？」

「うん、舞衣ちゃんは和食か。やっぱり似合うよ。」

「それ、褒め言葉？」

「うん、舞衣ちゃんが作った和食が大好きだから似合うって」

「え……!?!?!」

都の言語に顔が赤くなる舞衣。彼女は何度も都の無神経の言葉に照れさせた。

でも、彼女もわかってるんだ。都が言ってる意味は特にそちらの意味ではない。それでも彼のせいでよくドキドキする。

「上級者？」

「お兄ちゃんはたまたまそういう言葉で私と舞衣ちゃんをドキドキさせるんだ。心臓に悪い……」

「あ……不覚か。怖い……」

「お前ら、失礼ね。そういうえば美炎さんの苗字はなんだっけ？まだ聞いてないよ。」

「あ、そうだった。」

都にそう言われて、まだ自己紹介していない美炎が改めて自分を紹介する。

「私は中等部一年の安桜美炎^{あさくらみほの}。可奈美と同じ学年で、座右の銘は《なぜばなる！》」

「意外と可愛いな。」

「え……」

「お兄ちゃん！」

「あはは……」

また都の無神経の言動で被害者が増えたところ、可奈美と舞衣がそれぞれ反応をする。

彼がわざじやないとわかっているにしても、二人はどうしても都が他の女性を褒めるといふ光景が受け入れられないみたいだ。



しばらく、やっと落ち着いて昼食を食べるところ。

「舞衣も大変だね……」

美炎が舞衣の近状を聞いて、その感想を言う。

ちなみに彼女が食べるのは可奈美と同じカツ丼料理。なぜか最近の女の子はそういうカロリーが高いのが好みにしている。

（あんな料理はダイエットの大敵なのに……よく食べるのね。でも可奈美が満足そうに食べていたその表情を見たら、どんどん説教する気がなくなるなあ……。）

説教と妹の可愛さを見守るのをかなり分け辛いと悩む都。一応彼は可奈美に一時甘いものを禁じた時もあった、だがその時の可奈美の落ち込んでいた表情を見たら、見てられずすぐ解禁してあげた。

シスコンにとって、妹の悲しむ姿は見てられないものなのだ。

「うん、舞衣ちゃんが凄い人気なのよ！なんと！一週間で五回くらい告白されたのよ！凄くない!？」

「すごいすごい！私だったら、そんな人気が出ないはず。私、告白されることはないし、舞衣に羨ましいよ。」

「二人共……もうやめよう。もう一回思い出したら、余計に恥ずかしいよ／＼／＼／＼」

自分が告白される話題が盛り上がったことに対して、舞衣の顔がまた赤くなった。

「えへへ、舞衣ちゃんが凄く可愛かったからだよ。クッキーも美味しいし、いつも優しい。お嫁さんにしたい！」

「可奈美ちゃん……／＼／＼／＼」

「私も。って、女同士は駄目だよ。都先輩はどう思いますか？さつきからカレーばかり食べていて、全然話題に入って来なかったけど。」

唐突に、美炎から話題が振ってきた。

（正直こういう話題にすごく苦手だ。全然興味ないし、それにこれは柳瀬舞衣自身が関する問題だ。彼女自身が誰かと付き合うのは完全に彼女の自由。他人では干渉できない、選択を選ぶのも彼女一人自

身だ。)

(一般人である自分は彼女の道を指し示す資格なんてない。元々自分と彼女は別世界に住む人間だ。)

故にこうするしかない。と心からそう決めつけた彼は口を開いた。

「舞衣ちゃんが幸せなら、俺はそれでいい。」

「冷たっ!?!都先輩は舞衣のことをどうでもいいと思ってるの?」

そこで、最速反応してくれたのは美炎。彼女の言葉は少しでも都の心を刺さる。

(別に冷たいわけじゃない。彼女の将来の幸せに関わったことだから、他人では簡単に手を出せないというのがこの世の理だ。)

「まあまあ、美炎ちゃんが少し落ち着いて、お兄ちゃんは悪気がないから。」

「そうですよ!私一人の問題だから、お兄さんは干渉しないのも私もちゃんと理解している。」

「でも……長い付き合いでしょう?関心なんてしないの?」

美炎の話を聞いて、少し落ち込んでいる舞衣は仕方ない表情をしなから話す。

「もう十分お兄さんから、たくさんのお兄さんの関心がもらったの。これでもいいの。」

「舞衣……」

(また心が刺さる。だから、そういうもんじゃない。)

「……………そうりゃ、関心するって」

「え…………?」

都の突然の発言に三人が一気に動きが止まった。

「もし、舞衣ちゃんを傷つくやつがいたら、例え付き合ったとしても裏であいつをぶっ殴ればいいじゃん。別に言うまでもない常識だろう?つたく。」

「……………!」

「お兄ちゃん……………カッコいい!」

「イケメン……………加えてカッコいいセリフ!これはやばいです!」

可奈美と美炎が共に照れた顔でそれぞれの感想を話す。

でも舞衣は違った。表面では微笑みしながら都の発言をツツコんだ。

「裏で人を始末するのが校則違反ですよ。」

「ちえ……！」

舞衣のツツコミに舌打ちする都。どうやら、彼は本当にそうしたいらしい。

けど、舞衣の内心ではよくわかっている。例え都が悪い口をしても、これは彼なりの優しい表現だ。

自分や可奈美ちゃんのために、いつも精一杯する彼は本当に頼もしくて格好良い。小学生頃も自分が誘拐されたとき、自らの安全を構わず格好良く助けに来た都の姿に舞衣はとても嬉しかった。

そして今、自分のために怒るのも嬉しかった。

いつかこんな気持ちで彼の前に「ありがとう」って伝えたい。

「少し可奈美に羨ましいのかも。私もこんな兄あにが欲しい／／／／／

「へえー。美炎ちゃんはお兄ちゃんに惚れた？相手は美炎ちゃんでも渡さないよ。」

軽い口調でそう言いながら微笑む可奈美。見た目では相変わらず可愛いだが、その微笑みはわずかに剣術と同じレベルの本気さを感じられる。

「奪わないよ！あ、そうだ！この後、私と可奈美は立ち合いがあるんだ。よかったら、都先輩も見に行きませんか？」

「あ、ナイスアイディアだ！美炎ちゃん。お兄ちゃんは見に来てよ！舞衣ちゃんの体育服も見えるよ！」

「可奈美ちゃん……！／／／／／」

話題が突然次の授業の方向になっていた。再びこの柔らかい雰囲気に戻って、都はそれが良かったと思う。

彼はこういう雰囲気結構好きだから。

(体育服か……少し見たいのかも。でも……)

「悪い、このあとはまた赤羽刀の再生作業があつて……」

「ええー。」

「また今度の機会です。立ち合いは頑張ってくださいね。」

「うん、お兄ちゃんも頑張ってくださいね。」

衛藤兄妹がお互いのことを見て微笑む。こんな光景は他人から見たら、とても微笑ましい光景だ。

「仲いいよね。これは兄妹というものなのかな？」

「うん……きつとそう……なのよ。」

そして、そんな光景は舞衣が何度でも見た。

きつとこれから先、誰でもこの二人の間に入れないのだろう。そう思うと舞衣の胸が少し何かに刺された感じがしてきた。

しかし、舞衣がまだこんな感情が何なのかは知らなかった。

◇

「あ、不審者発見……。」

昼がもう少し終わるところ、早く鍛冶科に戻る都が教室の前にギョロギョロしていた不審者を見つけた。

いや、不審者というより女の子だ。しかも見たことがない子だ。

(高等部じゃなさそう……少しからかうか。)

突然いたずら心が燃やした都は足音を抑え、ゆつくりと彼女へと近づく。普段はこういうのをやってないけど、突然やる気が出た。

そして――。

「その不審者……そこで何をしている！手を挙げて！」

「はい!？」

都にびつくりされて、女の子が無意識に両手を挙げた。

意外に面白いなあ。というのは彼の初感想。

「わ、わたしは何も悪いことでもしていません！ただ！は、服部先輩とひ、昼食を……！」

「落ち着け、誰もお前を逮捕しないから」

「え……?？」

彼女が頭を振り返すと、そこに紫髪の男性が目の前にいた。

「驚かせて悪かった。お前は先輩の知り合い？さつき彼の苗字が聞

こえたが……聞き間違えじゃないよね？」

「だ、誰……？」

女の子が怯えた声で都のことを警戒している。

原因は言うまでもない、さっきの件のせいだ。

「本当に悪かった……。そんなに怯えなくてもいい。俺は都。衛藤都。」

「衛……藤？まさか可奈美のお兄さん！」

「可奈美と知り合いなの？」

「一応彼女は私のライバルの友達。それと彼女は結構有名な人だから」

衛藤という名を聞いて、少女は警戒心を解いたようで顔はより柔いになった。まさか可奈美がそんな有名な……知らなかった。

「なるほど……俺に用があるじゃなさそうよね？」

「うん……。」

「お名前は聞いてもいい？」

「ながえ長江ふたば、中等部一年。」

（可奈美と同じ年か……。）

「服部先輩になんの用？」

「……お弁当を作っていて、一緒に昼食を……」

「もうすぐ終わっちゃうよ？」

「……」

（外見は美炎より普通な子だけど、そこで無言の姿はなんだが可哀相。）

「服部先輩はあなたにとってどんな存在？」

「格好良くて、優しい人……」

「好き？」

「好き……って何言わせるのよ！／＼／＼」

（ごめん、ついついからかっちゃった。しかし、服部先輩に惚れた後輩か……。）

「好きなのね……。よし、ここで待ってる！」

「え？」

そう言つて、都が早い速度で教室の中に入った。

彼はただ一瞬で、この子の恋を応援する気がしてきた。本来はそういうの興味がないのだが……自分に恩がある先輩に関わつたらそりや助ける。

もし、この子が先輩に幸せをあげられたら、これも一つの恩返しだと彼は思う。

そんな思いを抱かいて、都が服部の姿を見つけて声をかけた。

「先輩、たぐだいま！」

「おう！お帰り。早いな……もつと遅く帰ってもいいのに。」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ、鈍感後輩。」

（なんだが、先輩に叱られた気がする。気のせい？）

「……それより、昼飯買うのが忘れてた。」

「……よほど楽しんでるね。」

（なんだが口調がどんどん冷たくなってきたよ!?気のせいよね？）

「でも、ご安心ください！実は外で先輩のために弁当を作った可愛い後輩ちゃんがあります。いや、モテモテですね。先輩は。」

（ひとまず、そんな雰囲気を見捨てて本番に入ろう。）

「俺に？もうすぐ昼が終わっちゃうのにな？」

「そこは同じ反応ですが……。まあ、でも、あの子はずっと外で先輩を待ち続けているんです。昼飯もまだ食べていないと思うけど。」

「そうなのか……でもこれから先も大事な作業があったんだ。あの子に申し訳ないと……」

「俺がやる。先輩の分を。だからあの子のそばに行つてくれ」

服部の話がまだ終わってないところ、都が先に提案を出す。彼の言語から決意を感じる。

「お前一人に!?無理無理、一人であの量では放課後になつても……！」

「それでもやる。先輩は安心してあの子のところへ行つてくれ！」

都はどうしても放つてなかった。自分^{服部}に慕われる女の子がわざわざ弁当を作つてここまで待ち続けてきた、昼飯もきつとまだ食べてい

ないのだろう。そんな子の気持ちを無駄にしたくない……。

「……………っ！すぐに戻る。悪い……………」

そこで都の決意を感じて、やっと屈された服部は作業を置いて扉の方へ向かう。

実は彼もあの子のところへ行きかけたのだろう……。だって、彼は優しい人だもん。女の子の気持ちを無駄したくないという気持ちが都と同じレベルだ。

「遅く帰っても良いのよ。」

「うるさい！」

照れた服部が教室から出て、都がやっと息を吐き出した。

「なんだが、とても不思議な気分だ。他人の恋を応援するのが初めてなのに、俺も俺なりによくやってくれたね。」

成功感。それは都が今感じた感覚。

とても気持ち良い感覚だが、いつも妹思いの彼は少し可奈美に申し訳ない気分になっちゃう。

「二人分の量が夜までになりそう……」

そうだ。例えば都が最速再生使用と呼ばれたが、それでも赤羽刀の再生にはかなりの作業時間が必要だ。

「可奈美に一声をかけよ。夜までには戻れないかも。」

スマホを取り出し、早速メールで伝う。

「よし、それじゃ頑張ろうか！」

そして、都が家に戻るのもう夜八時の頃だった。

第六話：胸が騒ぐ雨

また、あの夢を見た。

あの人がまた生きているときの夢。

「また勝てなかつた〜!」

「私から一本を取るのがまだまだ早いと思うよ、都。」

傲慢の顔で、ただ六歳の子供を容赦なく叩くのが俺の母、衛藤美奈都。

昔から俺と可奈美はいつも母の剣術指導を受けながら、母に酷く叩かれた。それでも力を抜かれたのか、俺と可奈美は大した怪我をされなかつた。

「むう〜!!母がずるい!……いじめっ子。」

それでも母に負けばなしの状況じゃ、六歳の俺がどうしても受け入れなかつた。

「い、いじめてないよ!ああ〜!!泣いた!」

だから、毎回はわざと泣いて母に心配させる。

「ほら、泣かないで〜。お兄さんでしょう?男でしょう?だから泣かないでよ!!!」

そして、子供を慰めるのが下手クソの母を見て、俺はクスクスと笑った。

母はしつかりした奥さんではなかつた。剣術以外は下手くそ、料理もできないし、すべての家事はほとんどお父さんがやってくれた。

つまり彼女が不器用な人だ。彼女が唯一できるのが俺たちに剣術を教えることだけだつた。

「あー!お母さんを笑つたなあ!いい度胸じゃねえか!」

俺が母を笑うのがバレたら、母はいつも俺のことを優しく抱き上げて、ついでにくすぐりしてくれる。

「あははははは、お母さんくすぐりたいよ〜!」

「これはお母さんをバカにした罰だ!」

俺たちはいつも笑いながら、こんな普通でも楽しい日々を過ごした。

「都……お母さんが言つてたことは本当だよ。あなたは男、私の息子、そして可奈美のお兄さん。簡単に泣いちゃうのが駄目だよ。」

そして、ある日に遊びが終わり。母は俺に膝枕をしてくれた。とても柔らかくて温かい母の足。

小さいの俺は結構あれが好きなんだ。

「なんて泣いちゃいけないの？」

「だって、あなたは私に代わつて可奈美を守るのよ。いつか私はあなたより先に遠いところへ行かなければならない。だから私に代わつてあの子を守るのよ。」

「お母さん、私達を捨てるの？」

「違うのよ、都。……できれば、私もずっとあなた達のそばであなたと可奈美の成長を見てみたい。けど、いつか離れなければならぬと気が来る。」

「嫌だ！私はずっとお母さんと一緒にいたい！！」

「我儘だね、都は……」

泣いてた俺の頭を優しく撫でながら、涙を拭いてくれる。そういうお母さんが好き、優しいお母さんが好き。

「都、お母さんと約束して。何かあつても、その誰よりも素直な剣で可奈美を守つてね。あの子は見た目が強いけど、とても弱い……。だから、何かあつてもあの子のそばにいてね。」

そう言つて、お母さんは今まで見たこともない顔を見せてくれた。

あれは誰よりも優しい顔だ。

「可奈美を託せたぞ、お兄さん都。」



せ……………

せん……………

……………ばい

……………先輩！

「衛藤先輩！」

「……………っ!!」

強い揺れと耳が痛むほどの呼び声が都を夢から醒めさせた。

「良かった、目が覚めた!」

「俺……………寝てた?」

「うん、そうだよ。とても疲れそうに見えるから、そのまま寝かせたのですが……………流石に放課後は……………」

そして目が覚めた先に彼女、長江ふたばという中等部の子が俺の隣にいた。

なんて俺がそんな子と一緒にいるのか…。それはちゃんとした理由がある。

「そうか……………悪かった。作戦を作成する最中に……………」

「いいえ!先輩がこんな忙しいのに……………わざわざ私のために時間を作って、私の恋を応援していた。そんな先輩に悪気なんて言えませんが。」

そうだ、都がふたばの恋を応援すると決まった日以来、常に彼女に手を貸すことにした。

色々相談に乗って、服部との単独時間を作る。そのおかげで、もう名前を呼び捨てという関係になれた。

「うん、それじゃ早速その続きだ。」

「無理しないでくださいね。私はただ先輩が助けに來ただけで十分感激です。」

そう言って、ふたばはすごく心配しそうな顔をする。本当にいい後輩だな。

「そうはいかないだろう?それに明日は週末。例えば刀使でも休暇も取れる。そんなきたな時間を利用して、もっと先輩と一緒にいる時間を稼ぐぞ!」

「本当にいいの?私のような人が服部先輩とデートなんて……………」
「すぐそんなことを心配し始めた彼女。自分の外見にあまり自信がないのね。」

「大丈夫だ。美炎以下だが、ちゃんとした可愛い女の子だよ!」

「なんて美炎と比べるの!それと彼女以下!」

自分の親友、元いライバルである美炎に負けることにムカついたふたば。入学した以来、彼女は勝手に美炎のことをライバルとして見た……あ、ちなみに剣術方面です。

もちろん、この話も美炎から聞いた。まさに单方面のライバル関係。

「うん、美炎は美濃関の中でも普通に可愛いから、お前は彼女以下ということ。」

「釈然しない！」

やっぱりからかうのがやめられないな。

ちなみに都がここまで彼女と仲良くなれたのも、ただからかわれ易いから。

「それより、デートの話に戻ろう。まず、服は一大事のことだ。初手で人にいい印象を与えられるのは服装だ。」

「服か……」

「そんな心配ないって言ったろう？美炎以下……」

「そんな話はどういいから。」

また美炎の話になると、ふたばが再び反応する。マジ面白い。

「とりあえず、『長江さん』の外見では問題なさそう。なら、次に行くのはやっぱりデートの場所。……とりあえず服部先輩が好きそうなどころを紹介……どうした？」

説明の途中、ふたばはなぜか都の顔をじっと見つめた。

「呼び捨てはしないのね……」

「当たり前だ。」

「でも美炎にはそうしないのね、いつ仲良くなったの？あの子と」

おい、突然どうした？

「正直言つて、美炎のことが好き？」

「嫌いではない、可奈美の親友だから。」

「それは言い訳？それとも柳瀬さんのほうが好みなのかしら？」

「……どっちでもない。それよりさっきの続きだ。」

「関心しないのね……まあ、いいわ。先輩は私の恋を応援する同時に、先輩にも自分の幸せを掴んでください。」

「なんの話？」

「別に。デートの話を続きましょう。」

そして、なぜか口調が冷たくなったふたば。彼女が伝えたいことが何なのかわからなかった。

それから暫くの時間が経つと、やっとデートのスケジュールが確定できた。

「これで準備万全……と言いたいことだが、本番は本人次第だ。」

「う、うん……！」

「そんなに不安しなくてもいい、俺が手を貸したから、お前に自信がある！絶対先輩を落とせますよ。」

不安そうなふたばを見て、都がそんな彼女を慰める。

「……ありがとうございます、衛藤先輩。……そうだよね、先輩もデートの誘いも受けてもらったし。なら、先輩の期待に応えなければなりませんわね！」

「その意気だ！長江さん。」

「うん、今日は本当にお世話になりました。私、衛藤先輩から色々助けられました、本当にありがとうございます！」

都にお礼をしたふたばはいつもの元気を取り戻したようで、明るい顔で都に感謝している。

「大げさだ。」

「いいえ！いつか、この恩を先輩にお返します！」

「なら、服部先輩と幸せになってくれ。それは俺の望みだ。」

「……本当にそれでいいんですか？」

「うん、最初も服部先輩に恩返ししたいから、ここまで続けてきた。だから幸せになってほしい。」

「先輩……。ふふ、なんか衛藤先輩はどういう人なのかわかってた気がする。」

「え……？」

クスッと笑い、ふたばは小さく微笑んだ。

「だから衛藤先輩のところには可奈美と柳瀬さんがいるんですね？美炎も薄々気付いたから、ずっと三人で衛藤先輩の周りにくるくると

回っています。」

「それはどういう意味だ？確かにずっと四人で昼飯だが……くるくる回ることはないと思うよ。」

「あ……先輩はそういうタイプなのね。美炎達が可哀相。」

「なんでだよ！」

「なんでもない。とりあえず明日は頑張るから、いいお知らせを待ってくださいね！」

そういう言葉を残して、ふたばは勝手に鞆を持って図書室から出ていた。

「やれやれ……いいお知らせを待とう。」

残された都はやれやれと頭を振って、同じく鞆を持ち上げて図書室から離れる。

「ん？」

そんなところ、スマホから通信が来た。

『今日は荒魂がまた現れたから、お兄ちゃんは先に帰ってね。』と可奈美からの通信だ。

「荒魂が……」

化物の名を見て、都が久々思い出した。そんな化物を退治するのが彼女たち、刀使としての役目。彼女たちは無力な人間を守るために戦ってくれた正義の味方なのだ。

そして、自分もまたその無力の一人だ。

「……………少し勉強してから、帰ろうか。」

鞆を置いて、都が図書室内で勉強し始めた。

少しでも強くなりたいと可奈美を守る刀になりたいという強い思いが都を支えた。

そして、何より……これもお母さんとの約束を守るため。

妹を守り、それは都が今までやり続けてきたことだ。

◇

降り注いで止まらぬ雨。まるで空が泣いているように見える。

今週から正式に梅雨の季節に入った。

毎日はほとんど雨の日なので、どうしても樂觀できない。

特に五箇伝の刀使たちにとってはそうです。雨のせいで普段外で行う授業もできなくなる。

それどころか、こういう時期の荒魂出現は特に頻繁で全国の刀使たちにもっと忙しい毎日を送っていた。

でも刀使だけが影響されたじゃない。雨のせいで、鍛冶科も暇で一般授業を受けている。

原因は荒魂の大量発生で材料の運転が普段より遅かったからだ。でない、一学期の大半は実技授業があつたはず。

「はあ……」

一般授業が一段終わったところ、都が顔を机の上に乗せてため息を吐く。

「おい、衛藤。どうした？今日はやけに元気ないぞ。」

そうしたら、すぐ彼に関心を持つ数人のクラスメイトがやって来た。

面識がある人達だが、彼が言うには名前を覚えてないらしい。

「今日からはこの様だ。雨が嫌いなのか？」

（別に嫌いなわけじゃ……もつと大事な原因があるんだ。）

彼は顔すらクラスメイトに向いていない。この行為は正直、腹立たしいと思わせることなのだが……安く喧嘩を売ったら、ただ打ち返される一方だとクラスの人たちは入学してからよく知っている。

そしてこのクラスにおいて、都を抑えるのは田中先生しかない。なぜだが、都はその先生の話だけを素直に聞く。

「もしかして、普通の授業ではつまらないのか？」

「バカ言うな！このクラスみんなはただ授業を追いつくのが精一杯だぞ！」

「お前の方がバカだろう！あんな成績じゃ卒業できないじゃん！」

「まだ一年生だから大丈夫！」

「留年したいのか……お前。」

ちなみに、このクラスみんなは実技以外ではハガな人間だ。

「それより、衛藤はこのクラスで一番成績優秀の男だぞ！つまらないと感じるのは当たり前じゃない！」

「いや、それはお前たちが不器用すぎる……」
「都が思わず、クラスメイトたちをツッコんだ。」

「彼らはあまり不器用だから、見てられない。」

「それで、一体何かあったんだ？お前がそこまで落ち込んでる姿は見たことがないぞ。」

「……妹……妹がいないんです。最近はずっと荒魂討伐で会えなくて、舞衣ちゃんにも……」

「あ……だからこうなるんだよね。」

「一斉に合うな。」

クラスメイトが一斉に同じことを言う姿に、少し腹立つ彼。

だが、これも彼らが都のことをちゃんと見ていた証だ。いくら彼が理不尽な男だとしても、クラスのみんなもそんな彼を受け入れた。

「衛藤、今は暇だろう？こっちに来い。」

そして、唐突に田中先生は教室の外から都を呼び出す。

「うん。」

そうしたら、都が文句言わずに田中先生の方へ行った。そんな光景を見て、クラスメイトのみんなは再びこのクラスで、唯一都を抑えるのが田中先生以外にはいなかったと思う。

「悪い、衛藤。少し器材室からこれらを持ち出してもらえませんか？このあと、服部も呼ぶから。」

教室の外に呼び出され、田中先生はすぐチェックリストを彼に渡す。

「わかった……これはなんの作業？」

「チェックリストに載っている必要素材を見ながら訊く。」

「作業じゃない。これは長船の人から求めていたものだ。お前も知ってたろ？服部のやつのおかげでアタシ達と長船は長期の交流を結ばれた。そして彼女らは技術提供、アタシ達は材料をあいっつらに渡す。ちなみに長船の重要人物もここに来た。」

「なるほど……つまりよほど重要なことだよな。」

「そういうこと。頼めるか？」

「羽島学長のためなら、任せてください。」

「そこはせめて美濃関のため、と言ってくれ。……まあ、とにかくこの件は任せだぞ。」

また色々言いたいが、田中先生はひとまず頼みことを都に託した。彼ならうまくやれるのだろう。

◇

「なんだが、今日の美濃関が妙に騒がしいな。」

服部と一緒に任せられた素材を持ち歩いて、中等部の館を通る。

器材室から高等部への道は必ず中等部に通っていく。なぜなら外は大雨だから、流石に雨の日は外の道を歩けない。

「なんのイベントかな？ 鍛冶科だから、あまり美濃関に起こることが知らないんだ。」

「まあ、刀使のことだけか関心しないのもわかるけど……でも可愛い子に関わったら、クラスの馬鹿たちはー」

「お前のクラスもか……」

「以前、可奈美がうちのクラスに来たとき、クラスみんなが凄く盛り上がっていた。可奈美が凄く大人気で、みんなは可奈美の周りにいて、色んな質問をして来て……」

「衛藤？ お前の顔がどんどん険しくなったぞ。」

あのときのことを思い返す度に、都の顔が段々と険しくなった。

「その後、全員を平等に叩いた。」

「お前……どんだけ妹のことを大事にするのよ。」

都の異常さに、服部がドン引いた顔。

彼がシスコンなのは知っていたけど、その妹への愛が恐ろしすぎた。

「そういうえば、週末のデートはどうだった？ 服部先輩」

「……………っ!? お前、なんてその話を知っている!」

「……………美炎から聞いた。ほら、彼女は長江さんと友人じゃん?」

ふたばに手を貸すことに隠して、都が適当に理由をつける。

「安桜か……言っておくけど、俺はふたばと付き合っていないよ！ただ一緒に遊んでいるだけ。」

「照れ隠し？」

「違うよ！お前は俺をからかうのがそんなに好きなのか？」

「別にからかってないか……」

（どうやら、告白するのがまだまだ先のようにだ……。）

ふたばの顔を思い返し、都が内心でとても疲れた気分だ。もしかすると、この恋戦こいせんは予想以上に時間を掛かるかも。

「なら、楽しい？」

「うん、楽しかった。まさか俺がお気に入りのお店が知るとは……まるで誰か彼女に教え込んだみたい。」

「……………」

（バレてないよね？）

服部の直感に都の背中が汗をかいた。

「でも、最後別れたときに変な言葉が吹き込んだぞ。俺のために誰にも負けないって……どういう意味だ？」

（ん？長江がそんな言葉を？変だな。デートが終わるときにそんな言葉が出ないはず……。）

「……………」

「衛藤……？」

（それに計画内では、少なくとも「今日は楽しかった、今日のことは絶対忘れません。」と言うはず。何か変だ。）

「ねえ、聞いた？今日は中等部の子が高等部の先輩たちに挑む立ち合いがあったって」

「本当？」

「うん、本当。このあとの授業に体育館にあるって聞いたよ！」

「たんか面白そう！行こう！」

「うん！」

そして、たまたま通りすぎりの中等部の女の子たちの口からある話を聞いた服部と都。

「お前の妹じゃないよな？」

「ないない、彼女が荒魂討伐に行ったから、そんなはずはない。」

「高等部に挑む可能性を否定しないのか……」

「可奈美のことだから、いつか挑むのだろう。」

「高等部の刀使だぞ？ 中等部より多く鍛えられた人材にどうやって勝つの？」

それでも彼女が勝てると都が心の中にそう信じている。

なぜなら自慢の妹だ。彼女が誰かに負けるのは想像がつかない。

「あれ？ あれは安桜？ 雨の中で何してるんだ……？」

そして、たまたま窓側の服部が窓越して、ある人物を見つけた。

その人物は安桜美炎。彼女が雨の下で走り出そうとしている。

「まさか傘を持ってないわけじゃ……おい、衛藤!？」

「しばらく持つてください！ 後で戻るから！」

そして、服部の話に寄って美炎の姿を見た都がすぐ持つてるものを服部に託し、そのまま走り出した。

（なんか、心が妙に騒ぐ。）



（早く行かないと……!）

雨が降りている途中、美炎が傘を持たずに大雨の下で走り続けた。

彼女は、今ある理由で傘をさす余裕なく、医務室の方向へと走っている。

（早く醫務室に行かないと!）

彼女の心の中、ずっとこの望みを繰り返し、一刻早くもあそこへ到達しなければならぬ。

例えば服がびしょびしょで体を粘りついてても、彼女は早くあそこへ行きたい。

早く「ふたば」を助けないと……!）

彼女の心は自分の親友を助けたい気持ちが満ちている。

「うぐっ!？」

そして、ようやく建物の中に入ったとき、彼女がある物体をぶつかった。

(壁にぶつかちやっただ? いや……違う。痛くないし、それところが温かい……)

でも不思議なことに、ぶつかった物体と接触した一瞬温度を感じた。

でも、これも恐らく自分の体が雨のせいで冷たくなったから、そういう錯覚が起こっていたかもしれない。

「あ………ここ……で立ち止まる時間がない! 早く!」

「美炎!」

彼女が立ち上がり。美炎が再び走り出そうとすると、自分の手が誰かに握られ止められた。

「え……?」

「美炎、どうした? そんな慌てて……らしくないぞ。」

手が握られる方向を見ると、あそこにいるのは地面に座っていた紫髪の男性。

彼が美炎とぶつかり、地面に倒れた。

「都……先輩!」

「うおっ! 美炎……っ!？」

相手の身分を一目で確認したあと、美炎がすぐ衛藤都を強く抱いた。

そして、わからないまま抱きしめられた都がとても混乱していた。

美炎の体がとても冷たいけど、柔らかかった……。見た目は大したスタイルが持っていないのに、それでも女の子の体が柔らかい。

一言を言うと、美炎のせいで都が凄くドキドキしている。多分、これも都がまだそんなに女性と触れ合う経験がないから。

「都……先輩……助けてください」

都のことを強く抱きしめ、美炎の声が震えている。

「美炎……?」

そして、さつきまで美炎の体で混乱し続けた都も美炎の異常に気づき、やっと普段の彼に戻った。

今、彼を抱きしむのが何かに怯えている女の子。

いつも元気でバカ発言をした美炎は今、まるで別人みたいだ。

「どうしたの？そんなに怯えて……」

「都先輩、ふたばのことを助けてください！」

「え………？」

「ふたばのことを助けて！」

そんなとき、都がやっと胸が騒ぐ原因を見つけた。

今日は嫌な一日になりそうだ。

幕間：極普通の女の子、長江ふたば

長江ふたばはどこにもある極普通の女の子。

彼女は小学校から成績や外見、交友範囲などは全部平均値。

そして、好みも普通の女の子の範囲から離れない。

可愛いものが好き、甘いものが好き、猫や動物などのものが好き。

彼女はそういう普通の女の子である。

ある日、彼女から刀使としての資格が発見された。彼女はそれを誇り、自分の「特別」を誇っていた。

だって、刀使として選抜されるのが少数人しかない。つまり自分は選ばれた人間だ

これからの未来もきつと輝くのだろう。ヒーローとして人々を守るために戦う。もうこれ以上がない誇りであった。

だが、残酷な現実が彼女の前に現れた。

同じクラスの有名な大馬鹿^{美炎}も刀使として選ばれた。最初は特に気にする必要がないことだけど、彼女の^{美炎}の実力を見たら、ふたばの考えが変わってしまった。

彼女は強かった、自分より遥かに強い。例え自分が選ばれたとしても、同じ選ばれた者たちの中から超越するのも苦勞する。

結果としてなんにも変わっちゃいない。ただ普通のクラスの優等生が優等生クラスに転移されて、そこで比較されただけ。

現実残酷なものである……。そう理解しても、ふたばは諦めていなかった。

馬鹿^{美炎}に置かれるのが彼女^{美炎}より成績優秀の自分が許せなかった。

故にふたばは美炎を目標にし、毎日頑張り続けた。そして、いつの間にか彼女と友達になり、楽しい日々を一緒に過ごしてきた。

最初はそのつもりはなかったけど。彼女と長く過ごして彼女の色々なことを知ったら、段々とバカと友達になるのも、そんな悪い話ではなかったと思い始めた。

彼女は大馬鹿だが、すっかり可愛いところが持っている。自分と大差がない普通の女の子だ。

その後、美濃関に入り、ふたばはそこで初恋の人と出会った。
あれは突然の意外だった。

まだ学院生活に慣れていない自分に手を差し伸ばすのが高等部の先輩であるあの人だ。

彼に色々助けてもらって、自分が学院生活に慣れるまでずっとそばで支えてくれた。

例えば自分はよくミスを起こしても、彼は怒ることもなく、ただ自分に優しくしてくれる。

そんな彼にふたばは初めて恋に落ちた。

初めて好きな人ができたという甘い感覚が彼女の心を満ちていく。
これは極普通の女の子が恋にした気持ちであった。



ある日の昼―

昼が間もなく終わるところ、ふたばはずっと鍛冶科の教室の前で迷っている。手に持っていたお弁当はあの人のために作った初めての手料理。

味はすっかり美炎に味わってもらえたから、味は大丈夫だけど、それでもふたばは彼に誘う勇気がなかった。

もし彼が忙しい途中で邪魔しちゃったらどうしよう。もし弁当箱のセンスが気に入りじゃなかったらどうしよう。もし自分の弁当を食べたくなかったらどうしよう。

彼女はずっと心配で、一步も歩けない。

「その不審者！そこで何をしている！手を挙げろ！」

「はい!?!」

そこで誰かに大声かけられて、ふたばがびつくりして大人しく手を挙げた。

「わ、わたしは何も悪いことでもしていません！ただ！は、服部先輩とひ、昼食を……！」

それと共に、テレビでよく現れるセリフが彼女の口から出された。

その様子はまるで本物の犯人みたい。

「落ち着け、誰もお前を逮捕しないから。」

「え……………」

しかし、あの声は突然優しくなった。そのおかげで、ふたばは多少落ち着いた。

頭を声の方向に振り返すと、そこにいるのは紫髪の男性。

「驚かせて悪かった。お前は先輩の知り合い？さつき彼の苗字が聞こえてきたが…………聞き間違えじゃないよね？」

「だ、誰……………」

ふたばは怯えた声で目の前の男性のことを恐れている。

それもそうか。突然知らない人に声がかけられたら、誰でもそうなる。

「本当に悪かった…………。そんなに怯えなくてもいい。俺は都、衛藤都。」

衛藤？どこかで聞いた苗字だ…………確か同じ中等部の…………。

「衛…………藤？まさか可奈美のお兄さん？」

「可奈美と知り合いなの？」

「二応彼女は私のライバルの友達。それと彼女は結構有名な人だから。」

そこは長江ふたばと衛藤都の初出会いだ。

第一印象としては最悪だが、このあと彼から色々助けてもらって、彼が悪い人ではないと知った。

まあ…口が多少に悪いが、服部先輩と同じくとても優しい人だった。…………ううん、彼より優しい人だとわかっていた。いつも他人を優先して、自分のことはどうでもいいくらい駄目な人だ。

この世間では最も少ないタイプの人間であり、一番自己犠牲が多い人間でもある。

実際、彼も疲れた体で自分の恋を応援し続けてきた。

だから、これ以上彼に迷惑をかけるのがもう嫌だ。

そう決意し、デートに関する会議が終わる日にふたばは決めた。

デートを成功させて、すべてを来週で決着する！

あの日のことを思い返し、ふたばの決意はさらに強くなってきた。

◇

「アンダ、服部さんに近すぎる。」

あの日の午後、長江ふたばは写しの継続鍛錬を終わって、一人で何か冷たい飲み物を買うときに三人の女の子に囲まれた。

彼女らの顔から見て、決して善人のようなものではない。

「何？アンダら私に何の用？」

最初から、ふたばはいい態度を示せなかった。態度悪い人にいい態度で向き合うのが通じないから。

「……………っ！それは先輩に向かう態度ですよ!?!」

「所詮、低レベルの女だわ。アンタは服部さんに似合わないから、早く消え去れ！」

そうしたら、二人はふたばの態度に我慢できないみたい。

「落ち着け二人共、ちゃんと説明しないと、後輩も私達の意図がわからないわ。」

先輩……………つまり自分より上の学年。それと、服部先輩に先輩つけをしない特徴は……………つまりこの三人は高等部の人ね。

ただ短い会話で、ふたばは三人の身分を確認した。

彼女達は高等部の人だ。

刀剣の扱いは自分よりうまい人間だから、彼女たちに反抗しないほうが身の安全にもなる。

しかし、なんて自分が高等部の人たちに狙われているの？別に恨みなんて買っていないと思う。

「失礼しました、後輩。二人は短気の人なので、彼女たちの言動はどうか気にしないでください」

そして三人の中で一番礼儀が正しい方がふたばの前に移した。

しかし、ふたばはまだその警戒を解けていない。

あの二人と一緒にいる人だから、彼女も決して良い人間ではない。

「どうやら、話ができる先輩ですね……………」

それでも話が聞かないあの二人よりマシだ。

「なんですの!」

「落ち着きなさい。私達は喧嘩を売りに来たわけじゃない、ただ警告をしに來ただけ。後輩、これ以上、服部さんに近づかないで欲しい。」

「つまり、あなた達も服部先輩のことを狙っているってこと?」

「うん、ア نداと同じよ。だから譲ってもらえないかしら?」

彼女が微笑んだが、言動からは圧力がある。つまり外見と同じいい人ではない。

そういう相手に強勢のふたばには簡単に負けではいけない、少なくとも氣勢では負けじやいけない。

「お断りします。恋というものは譲るものではない、だから先輩方の要求は応えられません。」

「そうですか。だったら一勝負ひとしょうぶしましょうか。」

「勝負?」

「ええ、刀使らしく戦って誰か服部さんに似合うのを決めつける勝負です。」

「私に不利しすぎるのでは?あんだ達は先輩、どう見ても私が勝てそうもないですけど……後輩いじめですか?」

ふたばは先頭の人を睨んで、自分の不快を相手に示す。

実際一度戦ったら、自分が負けるに決まっている。経験上の差は決して舐めるもんじやない。

「安心しなさい、あのときはあなたが先導させますから、最初の一撃はあなたに譲る。どんな手使ってもいい。」

「待って。本当にそれでいいの?刀使同士の戦闘において、先頭した者が戦況を握るとい話があるわ。」

相手はこんな良い条件を出して、ふたばが逆に怪しいと思ってる。それにこれは、刀使の授業でよく出る内容だ。先手を取る者は優勢が取れるという。

「ええ、私達は先輩だし。これくらいの譲りは当然じゃない?それとも嫌?正々堂々の方が好みでしょうか?」

確かに、正々堂々と勝負をしたいのがある意味では刀使の本能でしょう。しかし、今の状況ではそれを許されない。

「……………わかった。けど、決着日は私が決める。それでいいよね？」
「なんですって！」

「いいとも。でも先に言っておく、私達は先輩としての立場で、アンタに簡単に負ける気がしない。これだけ覚えておきなさい。」

彼女からの言動から、絶対の自信が感じられる。

確かにこれは容易い勝負ではない、ふたばはよく知っている。

今まで中等部が高等部に勝てるやつがこの美濃関にはいなかった。平凡の自分では尚更のことだ。

「うん、それじゃ私はこのあと着換えがあるから……………」

話が終わり、ふたばは再び離れようとした。

「待って……………」

「やめておきなさい！彼女に通らせて」

「……………っ！」

そうしたら、ふたばが何もなくてここから離れた。

今日のこの話は決して誰にも話せない。特に衛藤先輩に……………でないと、余計に何かされそう。

最後、ふたばの頭が都のことを思い浮かべた。彼はきつとこの話を聞いて、また勝手に無茶のことをするのだろう。

「頼れる先輩だけど、頼っちゃいけないなんて……………」

心の中に少し残念そうに思えるふたばはいつの間にか都のことを頼ってしまった。

第七話：怒り

「長江さん!」

美炎にふたばのところへ連れられて、都が先に見てたのは地面に倒れ伏せた長江ふたばの姿だった。

「しっかりしろ!おい!」

彼女の容態はどう見ても優れる顔ではなかった。体も凄い熱が出てきて、息も特に弱い。

こんな長江さんは見たことがない。

「熱っ!クソ!何か起きた!」

彼女を抱きついて顔でも触ろうとしたら、熱のような熱さを感じた。

「衛藤さん。ひとまず彼女から離れてもらえませんか?どうやらここから先は私の仕事みたい。この様子じゃ、あなたでは処理できません。」

同様、ここに連れされた医務室の先生がふたばの様子を大概見たらそう言った。

確かに、医務に関する知識は彼は持っていないかった。

「……………わかりました。」

そう返答し、都がふたばを控え室の椅子の上に座らせる。

少なくとも、これは彼女に唯一できることだ。

「ありがとうございます。さて、安桜さんと衛藤さんは外で待っていてもらいませんか?」

「ふたばは大丈夫なの?助けるの?」

「確かに容態では楽観できないが…………私の全力を持ってなんとか彼女を助けます。」

「……………」

「美炎、ひとまず外で待とう。ここでは俺たちがやれることがない。それに色々聞きたいことがある。」

美炎の頭に手を置いて、優しく撫でる。

「うん…………ありがとう。都先輩。」

照れたなのか、美炎の顔が少し赤くように見える。そして、二人は控え室の外で待機することにした。

「さて、それじゃ説明してもらえないかな？」

「…うん。けどその前に、その手はいつ降りるの？」

ずっと彼女の頭を撫でるといふ動作に、美炎は恥ずかしそうに聞く。

「悪い、思ったより触り心地良くて…それに最近あんまり可奈美の頭を撫でないから…ごめん、嫌だった？」

「嫌…じゃないけど／＼／＼」

顔が赤いまま素直にしている美炎。

「それじゃ、この調子で聞かせてもらおうよ」

「うん…／＼／＼」

「まず、なぜふたばがあそこにいる？それと、控え室は普通に試合のときに使う部屋…なんとなく推測していたけど、ふたばは誰と戦うつもり？」

「それは…」

「言えないのか？」

「ううん、ただ…」

美炎が困った様子に、それを見て、都が優しく彼女の頭を撫でる。

「そんなに言いづらい話なら、無理に聞かない。ただその理由を本当に知りたい。長江さんがあんな様子になったから心配したんだ。」

そうしたら、美炎がちよっと小さい声で口を開いた。

「実は…ふたばは高等部の人たちと戦うんだ。でも、やる前にさつきみたいに倒れたみたい…」

「高等部の人に!?なんて?」

普通、高等部に喧嘩を売れるのは同様高等部の人間…もしや美濃関名高き剣術馬鹿可奈美だけだった。

例え刀使ではない都でもちゃんとわかっている。学院の刀使は刀使に関する授業を受けて、学んだ経験の長さによってその人の強さを決める。

戦闘でどう攻めるか、どう躲すか、どう綺麗に切れるのかは勝負を

決める要因になる。

そして、中等部一年生と高等部は少なくとも三年の経験の差がある。つまりその三年の差によって戦況が大きく変える。

このことは美濃関の刀使自身もよくわかっているはずなのに……なんて長江さんは無謀に彼女らに挑むんだ？その理由はわからない。

「……………相手は服部先輩のことが好きらしい。だから、ふたばは正面で彼女たちと戦うつもり」

「バカか……………あいつ……………」

額に手をつけて、都は頭痛みたいな顔をした。

例えば物理で戦わなくても他の手で先に服部先輩を落とせば相手は先輩だろうか関係ない。彼もそれを全力で応援するつもりだ。なのに、今はなんだ？こんな窮地に落ちて何の得があるというのだ？

「ふたばにそんなこと言わないで！彼女もきつと相当に迷ったはず……………そして、ようやく覚悟を決めて私と相談する時……………ふたばはとも輝いていました！」

頭に置いていた彼の手を振り落とし、美炎は自分の親友が馬鹿された事を許さない顔をしている。

「私はそんなふたばが好き、誰にも彼女の悪口に言わせない！」

「……………そうか。ふふ、美炎馬鹿のくせによく言うね！」

「うわあああー!?都先輩、やめてください!!頭を乱暴に触らないで！」

「俺もそんな選択をしたふたばを尊重する。悪かったな、お前の大事な友達を侮辱するのは。」

再び手を美炎の頭に置いて、思いつき彼女を撫でる。

「都先輩……………分かればそれがいい。あと、もう頭を触るのがやめてくれない？さつき気付いたんだけど……………先輩は私のことを子供扱いしているでしょうー！」

「そんなことないぞ〜。」

「目は泳いでいるぞ、都先輩。」

「……………」

バレたのか……………でも、これは仕方ないじゃないですか！今更だが、

美炎はとても可愛い女の子で、頭の感触もなかなかいいものだ。触れば触るほど癖になる！

浮気？いや、そんなはずはない。ただただ最近妹成分が足りないだけで……そこで、なんとなく可奈美とよく似ていた美炎（同じバカという点）はいける気がする。

「……そ、それよりだ。長江さんが倒れた原因について話そう。ふたばは何か口に入れたものでもあるか？」

「……話題を変えても駄目だよ！都先輩。あ、でも……もつと優しく撫でてくれたら、そんな先輩を許してもいいよ。」

そう言って、美炎は都の手をしっかりと掴んで自分の頭を左右で撫でさせる。

「どうやら彼女も結構これを気に入ってるみたいだ。」

「わかった、優しく撫でてあげる。それで？」

「うん……。実は控え室は飲み物があって、誰か送ってきたのかわからないけど、ふたばはこれをスタッフさんが選手たちに用意したスポーツドリンクだと思って飲んでしまいました。」

「なるほど、問題はあの飲み物か……。保存期間の問題ならまた許せるかもしれない。でも、そうじゃなかった場合は……。」

「……そうじゃなかった場合は？」

「都が自分の推測を美炎に伝うかどうか迷う。」

だって、これはただ根拠がない推測にすぎない。それに相手方はそうする理由もないはずだ。

でもふたばは今、その原因で苦しんでいる。そんな彼女を見て、都がとても辛かった。

何せ、自分と結構付き合ってる後輩だ。彼女が苦しんでいるところは一人の先輩として見てられない。

そう。ただ自分の後輩だから、都がそこまで彼女のことを関心するんだ。

「美炎。この試合は長江さんにとって重要なことですか？」

「え？」

都の突然の質問に、美炎が一瞬に反応が取り遅れた。

「この件には2つ解決方法がある。でも、その前にお前の意見を聞きたい。長江さんのそばに一番近くにいるお前に」

「……………多分重要なことだと思う。だって彼女が決めたことだもん！」

「自分の命より大切？」

「……………っ!？」

「言い方が悪いが、俺はこの試合を中止すべきだと思う。そうすれば長江さんの身の安全も確保できたし、これ以上相手の思いのままにさせない。」

真面目な話をする都はいつの間に撫でる動作を止めて、ただ手を美炎の頭の上に置いている。

「これは一番理想的な結果だ。でも……………それでも長江さんの本物の気持ちを聞きたい。美炎、お前はと思う？」

彼の目から長江ふたばという女の子の決意を尊重する気持ちが伝わってくる。

都からそこまでの意志を感じて、美炎もある決心をした。

「……………多分。ううん、大事だと思う。私はふたばに代わって、この試合を受け立ちたい！」

「……………いや、その気持ちだけで十分だ。その気持ちは俺が引き受けよう。」

しかし、彼は美炎の決心を止めた。

代わりに彼も自分の決心を示した。

「俺が出る。お前は長江さんのところにいてくれ」

「え？都先輩が……………!?駄目ですよ！相手は刀使なんですよ！都先輩が勝てるわけがないよ！」

美炎の言葉が正しい。確かにこれは一般人にとっては勝ちそうもない試合だ。むしろ、これはただ無駄の傷を一方的に受けるだけの自殺行為だ。

しかも相手は相当手慣れた刀使。そんな相手に中等部の刀使でも勝てそうもないのに、一般人である彼はなおさら勝てるはずがない。そして沙耶香の件もあって、結果として彼は相手の刀使に負けた。

あの件以来、都は二度と刀使と戦うのをやめた。
いや、「あの子」以外の刀使にね。

「確かにお前の言う通りだ。御刀が持てない俺は刀使を相手に勝ちそうもない、俺もそう思っていた。……だが、俺は一応服部先輩の後輩であり、長江ふたばの先輩でもある。……大切な後輩が傷がれるのはどうしても見逃すことができない。」

「都先輩……」

美炎の前で、彼は笑顔とも言えない顔を作り上げた。

なぜなら、彼は自分の怒りを隠そうとしている。自分の後輩が傷かれたと思ったら、その怒りがどんどん上がっていく。

流星の美炎でも、都が今怒ってることをわかっている。

「美炎、お前は俺のことを呆れたのかもしれない。だが、俺はどうしても出たいんだ。彼女の先輩として、恋の応援者として、俺は彼女の決意を無駄にしたくない。」

「……都先輩、時には子供っぽいところがあるんですね。誰のために怒って行動を出していく先輩は多分かつこいい……ううん、誰よりもかつこいいと思う！」

そして、都の熱い決意を感じて美炎も同じく決意した顔をする。

「私はそんな先輩が好き。呆れるなんて絶対にしない！だから、私かしゆうきよみつと加州清光は先輩のことを全力で応援するよ！」

「……っ！」

そこで逆に美炎にドキドキさせた彼であった。

彼女の反応は予測よりやばかった。良くもこんな告白みたいなのを平然に言えるな……。まあ、彼も人のことを言えないけど。

「あ、ありがとうな。美、美炎……／＼／＼／」

「絶対勝つね！ふたばのために！」

「おう！でもその前にお前の加州清光を貸してくれない？戦うときは刀が必要だ。」

「……別にいいけど、大切に扱ってくださいね。これはお母さんの御刀なんだ。」

美炎は腰にいる御刀を都に渡し、都は思いながら頷く。

お母さんの御刀か……可奈美と同じだね。

加州清光を見て、都が千鳥のことを思い返し強く握る。

「うん、大切に使う。」

これは自分の母の御刀じゃないとわかっていたけど、それでも彼はこの御刀に通じて感じた。

自分のお母さんがまるで自分のそばにいるみたい。

お母さん、ちゃんと俺を見守ってね。俺はお前が教え込んだ剣で誰かのために戦うよ。

そんな思いを強く抱いて、加州清光はあの一瞬、都と共鳴した。

「あれ？」

その一瞬を感じた美炎は、それを感じたけどただの錯覚だと誤魔化した。

だって、御刀は刀使ではない人間に反応しないはずだ。

◇

「うわぁ……制服がびしょびしょだよ〜」

学院内に戻り、可奈美は着替え室で濡れた自分を見る。

赤と白のブレザーの制服が自分の体に貼りつけて、とても気持ち悪い気分だ。

「うん、雨の中で荒魂討伐は流石旧式のレインコートでは対応できないね。激しく動いたせいで大部濡れたよ。」

そして、可奈美と一緒に着替える舞衣も結構濡れたみたい。

「……………」

「可奈美ちゃん？」

「舞衣ちゃんは結構エロいね……」

「え……!?!?!」

可奈美にそう言われて、舞衣の顔が赤くなってきた。

確かに、今の柳瀬舞衣はとても色っぽく見える。

びしょびしょした制服はちょうどその色っぽい豊かな体を強調していく、それに加えて服を途中まで脱いでいた舞衣の白い肌も特にエロ

服を着替えたあとにスマホを弄っている。

ちなみにスマホの待機画面が小さい頃の彼女と兄と母と一緒に撮った写真。

毎回これを見てみると、まるであの時期に戻ってみたい。

お兄ちゃんは昔から泣き虫でずっとお母さんのそばにくるくると回っていた。お母さんがいないとすぐ泣き出す。誰か年長者なのかは全くわからない。

それでも剣術においてはお兄ちゃんは自分より遥かに強い。小さい頃から一度も彼に勝てなかった。

もちろん、そんなお兄ちゃんもお母さんに一度も勝ってなかった。それでも、私は今も兄を目標にし、自分を磨き続けている。

「ん？先に都先輩を応援していくから、可奈美たちも戻ってきたら一緒に来いよ…って、どういう意味？」

美炎からのメーセージの意味が理解不能の可奈美は頭を傾いてスマホをじつと見つめる。

「うん〜。舞衣ちゃん、これのことはわかる？」

どう考えても、答えが出せないから、可奈美は舞衣に聞く。

しかし、まだ回復してないみたいで、舞衣が荒い息でゆつくり服を着替えてる途中。

彼女の顔も赤のまま、その様子は可奈美が見てもそんな舞衣が愛おしい思う。

「待って、可奈美ちゃん。……ふ、服を着替えさせて、後は美味しいクッキーをあげるから」

彼女の口調からはもう可奈美に質問を答える余裕がなかった。胸がいつぱい揉ませたせいで、体がとても熱い状態だ。

「本当!?じゃ、いい子で待ってるよー!」

そして、舞衣がクッキーをあげると聞いた可奈美は目がキラキラして舞衣のことを待つことにした。

彼女は相当に舞衣のクッキーを楽しみにしている。

それから、さらに数分が経った。予備の制服を着替えた彼女たちは廊下でゆつくり歩いていく。

そこで、舞衣は可奈美のスマホをじっと見つめて、推測できる部分を可奈美に伝う。

ちなみに舞衣は指揮の方に向けるタイプの刀使だから、頭は可奈美よりずっといい。

「恐らくお兄さんは誰と試合の途中なのかもしれない……鍛冶科の高等部にすれば、技術の競うの方が推測しやすいです。」

「そうか……お兄ちゃんはやはりそっちに行くのか」

「可奈美ちゃん？」

少し落ち込んでいた可奈美を見て、舞衣は心配そうに聞く。

「ううん、なんでもない。お兄ちゃんはそっちに行きたいなら、妹である私はちゃんと応援しないと！」

「可奈美ちゃん……まだ諦めていないよね？可奈美ちゃんはずっとお兄さんが剣の道に戻らせたといってそう願っていた。」

でも、長い付き合いの舞衣には誤魔化せなかった。可奈美はずっと兄の剣が好きだから。

それは二人が初めて知り合った日から、可奈美がずっと舞衣にそう言い伝ったことだった。

可奈美にとっては、兄が憧れた存在だ。

「……舞衣ちゃんに隠せないのね。うん、私はずっとお兄さんが剣の道に戻りたいと願っていた。昔はあんなに剣が好きなのに……」

「可奈美ちゃん……大丈夫だよ。お兄さんがきつといつか戻ってくるって私もその日を信じて待っている。だから一緒にお兄さんのことを信じて待ちましよう？」

可奈美の手を繋いで、舞衣は優しい顔で可奈美を見る。

「うん、そうだね。お兄ちゃんを信じない妹なんていないもんね。」

二人は仲良くお互いの手を握り笑う。このような光景は他人から見たらとても尊く見えるだろう。

「あのバカ何やってんだ！」

そんな時、廊下で可奈美と舞衣は慌てた服部の姿を見つけた。

「あの人はお兄ちゃんの友達……」

「凄く慌てた様子ですね。……何かあったのかも」

「聞いてみよう。」

「うん！」

同じ結論を出した二人は仲良く服部のところへ訪ねていく。

そこで、さつき都のメッセージを受けていた服部からある事情が聞こえてきた。

そう聞いて、二人はすぐ廊下から飛び出し、服部を置いていく。

「お兄ちゃん……。／＼お兄さん……。」

二人は都を思いながら体育館の方へ向かった。

◇

「エレン、お前はと思う？」

「そうデスネ……あの男は大バカじゃなければ、こんな賭けのない賭けは成立しないデスネ」

美濃関の体育館近くに二人の女性がいた。

一人は灰髪の大人の女性。着ている服は黄色コートとその下にあって、コーヒースーツ。

肌の色は麦色に近い、日本人では滅多にない女性である。

そして、もう一人は金髪の女性。彼女の胸の部分には山吹色、袖と胸元には白い布地が使われている。これは岡山県にいた^{おさふねじよがくいん}長船女学園の制服の特徴である。

でも、最も特徴と言えるのはその胸の部分。なぜだか長船の女性たちは発育がとても良くて、ほとんどの学生は立派な胸を持つ。

故に、長船はいつも男性に一番好かれている人気の学校だ。ちなみに、二番目は奈良県にある平城^{へいじょうがつかん}学館だ。そこにいる女子たちは立派な胸がないが穏やかなお嬢様生まれた性格だったので、かなり男性に好かれている。

そして残りの3位は美濃関学園。人気になる理由はただここは唯一男性が入れる学校である。しかも、自由恋愛も許されるその点は男性にとつての高ポイントだ。

「だな。けどちよつと懐かしい。」

「懐かしいデスカ？」

何かを遠くへ見ていく灰髪の女の人に金髪の学生がわからない顔で頭を傾く。

「うん。エレン、私はしばらくここにいる。お前は先に羽島学長の方へ行ってくれ」

「どうするつもりデスカ？」

「少しこの賭けを買うつもりだ。無論、あの男を買うさ。」

そう言っつて、女は面白そうに笑う。

久々こんな馬鹿な学生を見た。まるであの人の影がここにいるみたいだ。

「わかりマシタ。それじゃ私もその男を買います。」

「勝ち目が高い刀使の方をやめるの？」

「なんか負けそうなので、そっちへ賭けたいデス。」

「ハハハハッ！わかった、お前の分まで買ってやるよ」

高笑いながら、女の人は体育館の方へ向かった。

そして、残された女性も命令に従ってこの学院の学長のところへ走り出した。

「何かドキドキしますね！早く仕事を終わって、彼とフレンドでも交わしますか！」

胸がドキドキとした少女は今日も元気で物事に興味を持つ態度に楽しんでいた。

第八話：賭けと試合

ねえ、誰を賭ける？

もちろん、刀使の方へ！

そんなの当たり前のことじゃない！

しかし、元々中等部の刀使がかけた勝負じゃない？……いつの間に刀使すらない男と刀使の戦いになってしまった。

マジ!?これは笑える！何考えているんだ。刀使に勝つのは刀使しかないじゃない？

話題になりそうww

まさか美濃関の中にこんな馬鹿なやつがいたなんて……。

しかも噂によると、彼は高等部の人なのよ。鍛冶科の人らしい。

マジ!?まさか刀に関する仕事を触れすぎで頭がおかしくなっちゃった？

いや、そもそもこの試合が大笑いだ！刀使の方に同情するよ。こんな相手がいると、逆に刀使の方が可哀想ww

「これはひどい……」

観客席へ移動した美炎は周りからの評判に心がとても痛い。

まさか周りの学生たちはこんなひどい言葉が出せるとは……美炎は思い付かなかった。

確かに都がする行為は馬鹿とも言える行為だが、あそこまで言わなくても良かった。

同情でもいい、少しでも都を応援してあげて。という願いを抱かえる美炎。

しかし、周りにいるのは冷たい言葉と笑い声。

「怖い……」

周りの評判に全身ビビった美炎はきゅーと都が預けた携帯を胸に締める。

彼女はわからなかった。

なぜ周りの人たちはこんなに怖いんだろう。一緒に同じ学校で同じ生活を過ごしたのに……誰も都の悪い口をひどく言っている。

こんな冷たい環境は美炎が知らなかった……。

「先輩……」

もう一度都の携帯をきゅーとした美炎は都のことを思い出す。

彼はとても優しい人、誰よりも優しい人だ。友達が困った時も精一杯に手を貸す。例えば目の前の困難は追い超えないとしても、彼は勇敢で立ち向かう。

そんな彼はとても格好良くて優しく、とても頼れる人だ。

そんな彼を美炎は好きだ、何もかも好きだ。故に、好きな人に美炎が唯一できるのは……。

「先輩、頑張つて……」

彼を応援しか。



同一時刻。

「間に合った！でもお兄ちゃんに会えないんじゃない！」

急いで体育館に到着した可奈美たちは観客席にいた。本来は直接都に会うつもりだが、スタッフ担当の学生たちに禁じられて、ここまですて連れて来られた。

「落ち着いて、可奈美ちゃん。今慌ても何も変えないよ。」

そして、慌てた可奈美を慰める舞衣は彼女の手をきゅつと握り締める。

「でも、お兄ちゃんは刀使と戦うのよ！いくらお兄ちゃんでも無茶すぎるよ！怪我でもしちゃったらどうするの!？」

こんな泣き出しそうなくらいに慌てた可奈美は舞衣は初めて見た。

可奈美は本当にあの人の^{お兄さん}のことを何より大事にしていたと舞衣は改めて実感した。

「大丈夫だよ！お兄さんならきつと……無事だと思う。」

実のところ、舞衣も都の安全を確定できない。

だって、何の力も持たない一般人は特別な力を持つ刀使に勝てるはずがない。刀使の歴史でもそんな特例が存在しない。故に例え剣術はどんなにすごいでも、刀使には勝てない。

こういう状況だから、舞衣もその自信がない。

現実には想像より酷かった。

「う……………うう……………お兄ちゃん。」

「あ……………」

そして可奈美はいよいよ我慢できないところ、泣き出した。

涙がボロボロ落ちていく。彼女は都が傷つかれるのが嫌だった。だって、大好きのお兄ちゃんだもん。

彼はずっと彼女のそばにいてくれた。

辛いときも理由問わず、助けに来てくれた。誰よりも頼れる大事な人。

「……………可奈美ちゃん。」

試合がまだ始まっていないのに、泣き始まった可奈美。

そんな辛そうな可奈美を見て、舞衣も心辛く可奈美を抱きつく。

彼女も都のことを凄く心配している。でも可奈美の前では泣けちゃいけない。でないと、彼女を支える人がいなくなっちゃう。

「舞衣ちゃん……！」

舞衣の胸の中で泣き出た可奈美は強く舞衣を抱きついた。

そして舞衣も強く抱き返す。

「可奈美ちゃん……………」

とても悲しいそうな可奈美に舞衣は優しく彼女の頭を撫でる。少なくとも彼女の痛みを減らしたい。

「あれ？可奈美と舞衣？来たんだ。」

そこで、彼女たちを発見したのは美炎だった。

◇

「大丈夫だよ！可奈美！なぜばなる！」

「でも……………」

精神状態が今までより弱くなった可奈美に、美炎は元気そうな顔で彼女を慰める。

「そんな彼女とコンピした舞衣も可奈美のそばで元気をつける。

「都先輩のことを信じていますか？」

「信じているけど……相手は刀使よ！いくらお兄ちゃんが強いても、敵わない相手だよ！」

「……………でも、きつと何か策があるかも。そうですね？美炎ちゃん。」

美炎を見て、舞衣は少し冷静を取り戻した。

冷静に考えると、都はそこまで馬鹿な人間ではない。確かに無茶のところがあるが、彼は勝てない戦をしない人だ。

それに、勝負はいくらなんでも都が斬られる時点で決められるものじゃない。きつと峰打ち程度で決める。

ならば、一定の勝ち率がある……と舞衣はそう信じたい。

「そこはわからない……でも、都先輩は俺に任せろって私の加州清光を借りてた。きつと大丈夫だと思う。」

「……………本当にそう言っていたの？」

「うん、だから私はここにいます。都先輩を全力で応援するのが私の役目。例え周りの連中が先輩の悪い口を言っても応援する！」

特に決心していた美炎は微笑んで、自信満々の顔を可奈美に向かう。

そんな美炎を見て、可奈美も少しの勇気が分け貰ったみたいに涙を拭き始めた。

美炎ちゃんがそこまでお兄ちゃんのことを信じていますなら、妹である彼女は自分の兄を信じないのがどうする！

「ありがとう、美炎ちゃん。私はもう大丈夫です！」

「そうか、それは良かった。元の可奈美に戻って……」

可奈美が元の調子に戻った様子を見て、美炎は微笑んだ。やっぱり元気の可奈美が可奈美に似合う。

「うん！舞衣ちゃんもありがとう。私を慰めてくれて」

「ううん、私はただ可奈美ちゃんを抱きつくだけだよ。」

「でも舞衣ちゃんがそばにいなかったら、私がどうなるかは知らないよ。だから、ありがとう。」

「可奈美ちゃん……」

「二人とも本当に仲がいいんだね。」

凄く仲良い二人を見て、美炎は素直に感想を付く。

二人はまるで自分とちい姉みたいな凄く仲良い関係。そういえば彼女が長船へ行った後、全く連絡が取れない……忙しいのかな？

長船に関する噂について、美炎が少し知っている。あそこは五箇伝の中で、刀使の装備に関する最新技術を持つ技術学校であり、ネット上では自称長船の学生の「休暇をくれ」というネットネームをつけた人が長船の学長の悪口をばかり言っている噂がある。

「どうやら、あそこは大変そうな学校だと美炎がそう認識している。『でしよう？舞衣ちゃんは小学校からの付き合い、作ったクツキもすごく美味しいんだ！』」

「うん！それもわかる！ちい姉のも美味しいけど、舞衣のも悪くない。」

「もう、二人共。そろそろ試合が始まるところだよ！ほら、相手の刀使も出たところなのよ……あれ？三人？」

三人の刀使が場内に現れ、舞衣が理解不能の顔をしている。

普通には相手が一人のはず、なんて三人が同時に出たなの……？

「あ、それは……」

舞衣の困惑を聞いて、美炎は言い辛そうな表情をする。

「何かを知っているの？美炎ちゃん。」

「……うん。少し事情があつて……先輩はこの三人と三回試合を行うつもり……」

「え……？」

美炎の話を聞いて、可奈美と舞衣は固まった。

だって、こんな話は普通にはありえない。

そして、この場の中心になる話題人物衛藤 都がやっと出場した。

◇

周りの人たちの反応が特に予測済みだ。
なんだあいつは……馬鹿じゃないの？

刀使に挑むなんて頭がおかしい！普通にはありえないでしょう！
笑えるよwwあいつ、大金で自分を賭けるなんて……頭がおかしい

w

美濃関随一の大馬鹿さんの出場だ！

さつさと負けて、金を払え！

冷たい無情の評判が観客席から伝わって来た。ほとんどの人は自分の虐めを見るためにここに来た。

とても心痛むことだ。同じ学校に通う学生なのに、こうして他人に痛みをつけて嘲笑う。

この行為はまるで昔に戻ったみたい。とても懐かしくて憎しい。
思い返そうと思ったら、全員をぶっ殴りたい気分だ。

でも今は昔と比べたら、この程度は大したことじゃない。昔は特に酷かった……母がなくなつたあの時期にたつぷり虐められた。

だから、今のはまだまだ痒いレベルの悪言だ。

都にとつて、気にすることではない。

それに、美炎が今でも味方として自分のことを応援してくれた。ただ一人で自分を応援してくれる女の子だ。

彼女の御刀を握ると、まるで彼女がそばにいるみたい……いや、彼女だけじゃない。お母さんもいる。

なぜか、お母さんがそばにいる気がする。

だから一人じゃない。それを知れば何も怖くない。

「あら？ようやく出場したのね。美濃関随一の大馬鹿さん。」

一步を進んで、試合場に入った都はすぐ周りの人からひどい言葉に飲み込まれた。

それに加えて、目の前にいる向こうの相手も都を舐めた口で偉そうにそう言う。

正直、周りの評判はどうでもいい。けど、いつも真面目で自分なりに頑張っていた長江を傷つける元凶のその口ぶりは都が許せなかつ

た。

今、心の中でも静かな怒りの炎が燃え続けている。

「てつきり今日はあの女と決着をつけると思ったのに……まさか、途中で大馬鹿と交代するとは思わなかったわ。」

「きつと逃げたのよ！ 私達に負けたくないから、こんな男を犠牲して、自分の名誉を守ろうとした。所詮あの程度の女だわ！」

「しかし、彼女の代わりに出場するとは、よほどあの女のが好きだね。可哀相だけど、お似合いですよあなた達。」

三人は一人一人、ふたばの悪い口を言っている。それを聞いた都の顔がどんどん険しくなっていた。

逃げる？ いや、長江さんはそういう人じゃない。それに彼女も人を犠牲にするやつじゃない。

俺は自分の欲望でここに来た。好きとかは関係ない、ただ彼女に代わってお前たちの顔を泥まみれるに来た。

せいぜい刀使すらない俺にやられて、その屈辱を味わえ！ 何せ、俺は一般人だから。

沙耶香の件も十分証明してくれた。

ただ一人の男に刀使三人がやられるのはとても醜い話であった。世間に知られたら刀使に関する名誉が地に落ちる。

俺は喧嘩を売ってるやつには容赦なく叩き潰す。特に偉そうに、心が汚いやつを絶対に許さない。

「長江さんは逃げるんじゃない、ただ俺のわがままに乗って俺に任せただけだ。」

「……つまり彼女はあなたの欲望に大人しく聞いてくれた女と理解してもいいのかしら？」

「あはははは、相当ビーチの女だね。男の言いなりに従つ……」

「それは違う。俺を信用したから俺に任せた。それより、お前らはもう長江さんには謝る覚悟ができたか？」

「誰がそんな女に！ まるでお前が勝つのは当然のような言い方！」

「そうだ。」

「……………っ！」

都の自信満々な口ぶりにムカついた三人衆。彼女たちはそれぞれ刀使の誇りを持つている人間だ。

そんな誇りがただ無力の人間に屈辱されて、彼女たちのプライドは許さなかった。

「貴様……！あの女と同じ、先輩を尊敬する心が持っていないのか！一応私達は高等部二年の先輩方ですよ！あなたの先輩ですよ！」

「先輩だからなんだ？お前らは俺が尊敬する価値がない。」

「なんだとー！」

「あいつは放っておけ。頭がおかしい男にどう言っても私達に勝てるはずがない。それに彼が出場した時点で学園生活が終わった。可哀相に。」

一番冷静な女が言ってるのは確かな事実だ。都もそれをちゃんと理解しているつもり。

周りの人間は殆ど都の悪い口しか言っていない。何せ、都が刀使を挑んだから、それに自分の勝利を賭けた。

これほどのバカは、例え今日が終わるとしても、今後の日々もそういう評判を抱かいて過ごすしかない。

これからの三年間も周りに笑われ続けられ、その環境で過ごすのだ。

もちろん、都もそれを承知していた上で彼女たちに挑んだ。前も言ったとおり、都が評判などは気にしていない。

この程度は大したことじゃない、あの頃に比べたら……。

「……そろそろ始めようか。裁判さん、公平の裁判はよろしくお願いします。」

「あ………は、はい。強いんだね、あんたは」

周りの人の評判を無視する都にさつきずつとここにおいて、顔が優れない裁判はそんな彼を感心する。

ここまでひどく言われて、平気にいられるのが彼一人だ。

「それでは、今回限定の勝負条件を説明します！この試合で写しの使用が可能だ。つまり御刀で戦うことになります。しかし、傷員を防ぐために刀使の方は峰打ちの形で勝負を決められております。」

「……………よかった。」

勝負条件を聞いて、可奈美と舞衣はともに息を吐いた。これで負けたとしても、都が傷つけずに済む。

ちなみに美炎の方は先に知っている。なぜならその条件は都からの提案だ。相手がこの挑みを受け入れるために用意した作戦だ。

「そして、もう一人の方は刀で相手の写しを剥がるのが勝利条件だ。異論がないよな？」

「ない。」

一斉に両方が条件を承った。

「なんの？あの御刀は……“先端がない”？」

御刀を抜き始めた都に相手の三人の一人も御刀を抜いて、写しを貼っている。

二人は一定の距離を保て、対峙する。

これは刀使の立ち合いにおいてよくある礼儀の表現。

相手を尊重して、公平に戦う。これは古い時代から流れた伝統である。

そして都と対峙する相手は都が握っている刀の方へ注目する。その刀は綺麗な刀身ですが、“先端がない”。

つまりあの御刀は虎の牙がない折れた御刀である。

「ふ、ふふふふ……アハハハハハハ!! あんたは勝ち目が見えない勝負を挑む大馬鹿だけではなく、持つてる刀も同じ格なのね! もしかして笑わせるために、ここに来たの? 折れた御刀でどうやって私達に勝つのか!」

そして彼女はまた都のことを大笑う。

いいえ、彼女だけではなく、それを見た観客も一斉に彼を嘲笑うことにした。

こんなひどい場面を見た裁判も心痛く、視線を彼から逸した。これ以上は見られてられない。

「よし! 条件付きた。俺が勝ったら、長江さんだけじゃなく、この御刀の元主人にも謝れ!」

しかし、また平氣にいられる都がさらに賭け事を。

「それはあんたが勝ったらの話だわ。一瞬で終わらせてあげる」
もうこれ以上無駄話をしたくない相手がようやく戦闘態勢に入る。
都も同じく、柳生新陰流の構えで向かう。

両方は早くこれを終わらせたいと希望している。

「……始め！」

両方が戦闘態勢に入るところを見て、裁判は試合開始の合図を放った。

「……迅移！」

試合の合図が放った数秒。刀使の方から迅移を使い、一瞬で都に近づく。狙い通りに彼女は一瞬で終わらせるつもりだ。

その速度に目が追いつく可奈美は緊張の心を持ちながら、都の無事を祈る。

しかし、彼女の目は次にありえない現象を見た。

「……………っ!？」

ただの一瞬。

綺麗な一閃とともに、刀使が両断されて、写しが見事に剥がされた。

「何か……………起きた……………」

ありえない現象を見て、この場にいる都以外の全員は驚愕の声が漏れた。

何せ、予測外のことが起きてしまったのだ。

「これで一人目。……………裁判さん、よろしくお願いします。」

「え……………あ、はい！しよ、勝者ー衛藤 都！」

あんまり予測外の結果に呆れられた観客たち。その中に可奈美たちの姿がいる。

「あれは……………舞衣ちゃんの居合……………」

その場で最初、その現象に反応できたのは衛藤可奈美だった。彼女はあの一瞬の出来事を見逃せなかった。

あの一瞬で都が居合の構えに変えて、迅移よりも早い速度で相手を切った。

普通にはありえない、信じてられないはず……………けど、可奈美は不思議とそれを受け入れた。

彼と小さい頃から稽古し続けてきた衛藤可奈美は「その現象を知っている」から。

あれは□□全集中□□なのか……？

《全集》、あれは都が自ら作り出した自分だけが使える得意技。集中力を限界までに上がり、柳生新陰流の剣技をさらなるの高みへと上がるチート技。

「……………」

そして、その件を知るのは可奈美だけではない。柳瀬舞衣もそれを知っている。

でも可奈美よりは詳しくない。

彼女が知るのは自分が誘拐されたときに、都がそれを使い、周囲にいる数十人の大人たちを斬り倒したこと。

「……強っ！都先輩めっちゃ強っ！あんなに強かったの!?!あの人！」最後に反応遅れたのは美炎だった。

可奈美たちより都への認識が少ない彼女は結構の時間をかかった。

◇

何なの！さっきのは!?!

刀使が倒されただど!?!ありえない！

一目の勝負が終わったところ、スタッフたちが気絶された刀使を場外へと運ぶ。

この間、観客たちは次々と意識を取り戻していく。

そして、さっきの結果に次々と信じてられない反応をした。

き、きつと運だけだよ！たまたま斬っただけ！

そうだよ！そう解析しないと、話が通じない！

次は負けない！俺は刀使たちに賭けたから。

頼む、勝ってくれ！

一部の人は現実逃避が始めた、だって今まで刀使が一般人に敗れる記録がないから。

普通の人間や刀使は長い間に一般人では絶対に刀使に勝てないと

いう常識に囚われていた。

「さあ、次だ！早く来い！」

倒された刀使が場外に運ばれた後、都は相手のことを促す。うなが

「……………きつと、たまたま。そうよ！でないと、負けるはずがない試合でこんな可笑しいな発展になったのはありえないわ！」

そうしたら、次の相手が震えた声で自己を慰めながら、場内へと移動する。

彼女の目はもう前の余裕を感じない。

「油断しちや駄目よ！これ以上の屈辱はもう耐えられません……………！」

場外にいる最後の一人も自分の仲間に見目にと指示をした。恐らく、あの一番落ち着いた女は三人の中で一番強いだと都がそう認識した。

でもー

「どうしたの？めっちゃくちや怯えているんじゃない！自分の仲間がこの“一般人”である俺に“このような刀”で敗れたことに怖いのか？前の強勢はどこに行った！」

「都は相手のことを挑発し、態度はとても悪かった。」

「都が長江と美炎が屈辱されたことに、まだ許していない。」

特に美炎の方。彼女はただ一人で自分を応援してる。そんないい子が虐められるのは都が許さない。

「うるさい！すぐアランダをここで打ち止めてみせる！」

「それは無理だ。お前らが俺を怒らせた以上、もう勝ち目がない。容赦なくお前のプライドと名誉を踏みつぶしてやる！」

「流石に言い過ぎ……………紳士としての面子がないですか？」

「紳士？何それ？最初はそれを持ってなかった。」

女でも口が容赦しない都に対して、裁判は苦笑い。

確かに、これまでの待遇においてはこういう反応は普通のことだが、少なくとも礼儀正しく向かうのもいいじゃないかと裁判はそう思っている。

「まあ、お前がそっちのほうが好きなら……………では両方、構え！」

裁判の指示に従って、二人はそれぞれの流派の構えをした。いよいよ、二回目の立ち合いが始まるどころ。

この場にいる大部の人は都が負けることを望んでいる。

この場で唯一そう思わない可奈美たちはずっと都のことを応援している。

「……………始め！」

試合開始の合図とともに、刀使はとんでもない速度で都に近づく。見た目はさっきのと変わらない正面攻撃ですが、彼女は都の前に消えて、一瞬背後に回った。

これで彼がどう早くても、背後からの攻撃には防げないのだろう。速度では刀使の方が圧倒的な有利。

それに彼女は都の攻撃範囲に入ったその一瞬で背後に回る。つまり彼女はうまく彼の目を欺く^{あざむ}ためにわざわざ正面突撃の態勢を取った。

一応彼女は高等部の刀使。心がどう腐れたとしても、実力は中等部の普通程度の子には負けられない。

しかし、彼女の思いは特に「予測された」。

「なっ……………!?ば、馬鹿な！」

彼女が刀は都の頭に僅かの距離で止まらせた。そうしたら、彼女の写しが剥がれて、後ろの方へ無力に倒れた。

「これで二人目だ……。これは加州清光を嘲笑う結果だ。せいぜい後悔するが良い。」

「しよ、勝者——衛藤 都！」

また勝利の宣言が上げる同時に観客席の方は実感が無い雰囲気だ。漂っている。

これは二回目、一瞬で終わらせた試合だ。とてもぎこちない発展である。

これはもう試合でも呼ばれない、ただ一方的にやられただけだ。

そしてほとんどの人はさっきの動きを見えなかった。いや、見えないうか、どうやって背後の刀使の写しを剥がすのかは知らなかった。

彼はただ正面だけを見ているのに、なぜわざわざ背後に回った刀使が逆にやられた？その不思議な真相を知ったのがただの数人だ。

「可奈美ちゃん……あれを見た？」

「うん、ちゃんと見た。お兄ちゃんは相手が目の前に消える前に刀の先端を『先に後ろに向けた』。」

「え……!?!?どういう意味？見たって……まさか、見たの？」

「うん………」

観客席にいる舞衣は信じられない表情で、さっき見たものを理解してない美炎に説明する。

「本来、これはありえないことですが……でも、相手の位置を計算したら可能になる。」

「え……?とでも複雑!」

「わからなくてもいい、お兄さんの行動は既に私達の想像に超えたから。」

つまり相手の動きを読み、相手が背後に回ることを知り。それを対応するために相手の位置と到着時間を計算する。

理屈がわかるが……実現するのは難しい。これは事前に相手の思いを知らなければ、実現できないことだ。

そうなったら、彼はきつと試合が始まる前に相手がそのような行動を取るのを予測していて、先に対応をした。

「お兄ちゃんは……さらなる高みへ至った。」

理屈がわかってしまった可奈美はうずうずした体で都の方へ見つめる。

これは強者を見て、稽古狂人の血が昂ぶっている現象。

二人の刀使が彼に瞬殺されたことに可奈美はとても嬉しかった。

なぜなら、都がさらなるの高みへと辿り着いた。本来倒すことがありえない刀使が彼に敗れた。

これは偶然ではない、彼の實力によることだ。

剣術馬鹿妹にとって、彼が示した異常くらいの強さはまるで輝いている星。いつか自分もその星に近づきたい。

例えお兄ちゃんが剣術への熱情が消えたとしても……お兄ちゃん

は止まることもなく、自分の剣を磨き続けていた。私もこのままじゃ
いられないね。

ドキドキしてしまった心に、可奈美はあることに決心した。

いつか私はお兄ちゃんのように強くなりたい。置かれてはいかな
い、必ずそばに行く！

バキーン

その時、千鳥もそんな可奈美を応えて彼女と共鳴した。

「うん、一緒に追いつこう。千鳥。」

◇

「さあ、お前は最後だ。」

二人目の刀使が場外に運ばれた後、都が場内に入った最後の刀使を
睨んでいる。

「アンダがここまでに行くのは流石に予測外でした……どうやら、
アンタは本気で私達の名誉を踏みつぶすつもりね。」

しかし、彼女からあの嫌な雰囲気が消えた。態度も前より柔らかく
なった。

「当たり前だ。長江さんにあんなことをして……私の大事な後輩の
刀を侮辱するのが許さない。」

「……悪かった。確かに彼女たちの悪意的な行動に目を閉じたの
はこの私わたくしですが、結果としてあの女を傷つくことになりました。そし
てその因果がアンタをここに連れてきた。」

「やっぱり提案者がお前じゃないな。あの二人より、お前のほうが
よっぽど大人しい。」

「ええ、それでも私はあの女を傷ついた。彼女に申し訳ないことを
した……」

彼女から反省している気配を感じた。見た目はそれほど悪い人
じゃないな……。

なら、悪いのはさつき倒されたあの二人だ。

「謝りたいなら、俺と戦って負けて、彼女に謝れ。」

「…………ええ、私が一人に残された時は既にそのつもりだわ。……後輩君、あの女、“長江さん”のためにここまでにする必要がある吗？例え私に勝っても周りの人間から大量に恨みを買ってしまったアンタは、これからの生活はただじゃ済まないと思うよ。」

逆に心配されてしまう都は笑って、御刀を抜く。

「大事な後輩だからな、それと服部先輩の未来の彼女さんでもある。いわゆる恩返しのもんだ。」

「そんなもんじゃないのよ……けど、相手が後輩君で良かった。」
彼女は刀を抜いて、都の方に向かう。

「これで全力で戦えそう。私は一応先輩ですし、後輩君に負けるつもりがないわ。」

「俺も。けど、一っだけ先輩を侮辱する機会をもらえますか？でないと、このモヤモヤの気持ちしが払えないですよ。」

そう言っ、都が抜いたばかりの加州清光を鞘に収まって、御刀を地面においていく。

「どういうつもり？」

彼女が都のことをすごく睨んでいく、流石にこの行為は彼女のプライドの線を触れた。

「俺は自分の流派の無手の型で戦いたい。裁判さん……俺の我儘、聞いてくれます？」

「写しが剥がれるなら、やって見ろう」

都の我儘に聞いて、裁判は何かを諦めのような顔で都の行為を許した。

「…………ふふっ、いいでしょう。けど負けたら、後悔しないわよ。」
裁判の反応を見て、小さく笑ってしまう先輩。なんだ、いい顔でもできるじゃん。

「後悔しませんよ。」

都が上半身を前に傾けて、左足を前に、右足を後ろに。

この待機姿勢を見て、理解しまうのがこの場ではただ二人しか。

彼女たちはこれが新陰流の無手型ではないと知っていた。

「それでは……………始め！」

試合開始の合図。最初に両方がお互いの出手を探る。と思いきや、刀使のほうに先に動き出していく。そして、彼女の姿が消えた。

「二段迅移……！」

迅移は階段性が分けている。段階が多ければ速度がもつと早くなる、今では4段迅移は最大の限界。これ以上の段階は誰でも使えてこない。

例え、あの折神紫でも5段にたどり着かない。

ちなみに、4段迅移の速度はライフルが撃つときの弾の速度と同様の速度である。

初期の速度で、可奈美と舞衣がこれを二段の迅移だと判断した。

これは一人目刀使が使うのより、もつと早い速度の技。都がこれを防ぐかどうかは可奈美さえも予測できない。

しかし、試合の結果はすぐ彼女達に示した。

「絶空ぜっく……！」

相手が二段迅移を使うとともに、都は可奈美たちの反応より早い速度で相手の方に走り出す。

そしてただ二秒の誤差で、都が拳で相手を突き飛ばす。

「クツはあ!？」

相手が飛ばされたと同時に写しも、うまく解除できた。

そして、相手はかなりの距離に飛ばされて地面に倒れていた。

「勝者——衛藤 都！」

嘘だろう!？」

何か起きた!？」

なんてまたこの局面なのかい——!!!

高等部二年の刀使三人が倒された——!!!?

賭けた金が無くなったよ——!!!?

勝利宣言とともに、場内が一瞬に賑やかとなってきた。

いや、賑やかというか……ほとんど悲しいと怒りの悲鳴だ。そんな雰囲気の下で都が気持ち良さそうに観客席の方にこう言った。

「皆さん、賭け事は程々にね。」と言った直後に彼は先輩の方へ行った。

そして背後はすぐに怒りの悲鳴が一斉にかけてきた。
ふざけんなー！金を返せ！

この野郎！絶対に許さない！
俺はいくら賭けたのか知らないのかー!!?

「…………見事だ、後輩君。これは君の勝利だ…………と言いたいことだが…………この状況においてはどうするつもり？」

地面に倒れ込んだ先輩がまた意識が保っているようで彼のことを見る。しかし、周りから伝えてきた怒り声で逆に彼を心配する。

「また秘密。けど、ひどいよね。周りの人が俺を敵として見てないとは…………冷たいよ。」

「自業自得という言葉意味を調べて見たらどうですか？」

「先輩までもか…………」

「ふふつ…………でも、すべての人じゃないのよ。あんたを心底から信じて応援する人もちゃんというと思うわ。聞こえているでしょう？」

「ああ…………恥ずかしいくらいに聞こえたよ。」

恥ずかしい顔で、都がちゃんと聞こえてきた。

この場にいるただ三人の女の子たちが自分の勝利に揚げた歓声を。

「お兄ちゃんが勝ったよ！舞衣ちゃん！」

「うん、大勝利です（泣きながら）。」

「都先輩、三連勝おめでとうー!!」

それを聞いて、都が両手で自分の照れた顔を隠す。

「……………本当に俺には勿体無いくらいに最高の妹と友達だぜ。」

ちなみに、都の耳が他の人間より何倍も可奈美の声を感知取れているから、当然として可奈美たちの声が聞こえている。

これもまたシスコンの極みと言えるのだろう。

第九話：そして、彼女達と……。

「これはこの事件の始末か……。流石、藤原美奈都の息子と言ったところか……」

美濃関の学務室に二人の女性がいた。

一人はこの学園の学長羽島江麻、もう一人は灰髪的女性。

そして灰髪的女性はある資料を読みながら、ある人物の名前を口に出した。

「まさか、学園内であんなことが起きるなんて……。学長としては失格ですよね。」

「そう言うな、私も少し驚いた。まさか荒魂以外に、こんな危険な事件が五箇伝に起きるなんて……。前代未聞だ。誰でも予測できないことだ。」

同じく書類資料の内容を知り、羽島学長の気分がすごく落ち込んでいる。

平和の学院内で毒入り事件。これは五箇伝において前代未聞のことだ。

立ち合いの相手選手に毒入り。しかも、高等部の人たちが中等部の一年生にあんなひどいことを……。

幸いのところ、毒は適量に入れているから被害者は大した被害が起きていなかった。それでも、念のために彼女を家に休ませた。

「しかし、それだけではない。当日ではギャンブル行動も起きてしまった……。その行いは良くないが……。気分が最高だ！」

「『長船の学長』としては少し自重してください！自分まで足入れではどうする！幸い、衛藤さんは自分が賭けでもらった大金を食堂に送ったから、一部の料理が一段無料になったおかげで、少しでも金が困る生徒を助けたのです！」

灰髪的女性は長船の学長である、彼女は取り引きの最終確定のために美濃関へ参りました。そして一週間前のギャンブル事件にも足を踏み入りました。

「その件については私も深刻反省している。でも、これもあの人の

息子から彼女の影が見えたから………つい………」

「それは言い訳になりません！全く………君はもつと思考が深い学長のはず………」

でもそれはきつとあの人、藤原美奈都の影が懐かしすぎるから。あの人と“もう一人”、それとあの“もういないあの大方”はかつて彼女達の柱であった。

でも19年前のあの件以後は、全てが変わってしまった。

「本当に悪かったよ。それより彼の異常についてどう思う？彼が入学してから、何か感じた？」

異常というのは彼が刀使を倒したことだ。ほぼそれは不可能のことだが、彼が簡単にできた。

故に、長船の学長は“念の為に”それを調べたい。

「彼は“荒魂ではありません”！彼は入学してからはとてもいい子で、成績も含めて彼はとても優秀の生徒です！」

「わかった、わかった!!そう怒るなよ。ただの念入りだ。」

長船の学長が都のことを疑うと、羽島は珍しく怒ってしまった。

確かに、彼女はとても生徒思いのいい学長ですが、そこまで怒るのは滅多がない。

これも美奈都先輩の息子である故か？確かに彼女の子供に対し私たちはどうしても償ってほしい。

「それより、あの件はどうするつもり？やっぱりあの三人を退学する？」

「その件について………医務室の先生がこのことを隠したほうがいいとおっしゃいました。」

「お？それはなぜ？」

「彼女がおっしゃいました、ある生徒にそう頼まれたって………」

「誰？」

そう聞かれて、羽島学長はある申請書を長船の学長に見せられた。

「衛藤 都!?なぜ彼が退学申請書を………」

それを見て、長船の学長が驚愕の声を漏れた。

「ギャンブル事件で彼はかなりの恨みを買ってしまった。それで、

あの三人を退学しないを条件に自分が退学する。」

「いじめられるのが怖いのか？そもそもなんであの三人を助けるのだ？」

「きっと彼が自分のせいで妹に迷惑をかけるのが怖かったので、そうしたと思います。それと、彼はこの件で美濃関の名誉に傷つけさせたくないという理由も含めていると思います。」

「滅茶苦茶だよ……自分の利益はどうでもいいと言うの？」

都の行動に頭が痛くなる長船の学長。いくらなんでも、都の自己損失が多すぎる。

「彼はそういう人なのよ……。他人優先で、自分はどうでもいいと思うタイプなんです。私もこの件で彼があいう人だと知りました。」

そう言って、羽島学長は悲しい顔をしていた。

まあ、彼女の気持ちもわからなくもない。彼女は自分の生徒を何より大切にしている優しい人なんですから。

「もちろん、そんな自分勝手の理由で彼の退学受理は受けいりません。個人にも彼がこの学校にいてほしい。ただ環境としては私一人ではどうにもなりません。」

そう言って、羽島学長が苦笑う。よほど自分の無力を憎むのだろう。

美奈都先輩の件もずっと気にしているみたい。

「分かった、この件は一応折神家に報告する。」

「え……？報告って……でも『舞草』……」

長船学長の話を聞いて、羽島学長は呆れた表情。

「確かに『舞草』としては惜しい人材だが、我々だけでは環境を変えられない。だから折神家に任せる。」

「それに、衛藤 都は『親衛隊』の連中と違う気がする。きっと彼女の駒にならないと思う。」

「……そうですね。それじゃ、この件は折神家にお任せします。」

また何か言い出そうが、羽島学長はその衝動を飲み込んだ。

きっと美奈都の息子なら、大丈夫のはず。



「お前……そろそろいい加減にしろ」

昼、鍛冶科棟の二年A組のクラスに服部がため息を吐きながら、教室のロッカーと会話している。

なぜ、彼はいきなりロッカーと会話しているという異常の行為を取っていたのか……これはちゃんとした理由があった。

「嫌だ、ここは一番安心する！この時間だけでここにいさせてくれ！」

「お前な……毎日ここで隠れても問題解決にならないと思う。それにやりたいなら自分の教室にやれよ！」衛藤」

そう、その理由はロッカーの中にあの有名の高等部一年生衛藤 都が隠れているから。

なぜ、彼はロッカーの中に隠れていたのか……それも彼個人的な理由もあった……。

「嫌だ！あそこは怖い！皆、可奈美と舞衣ちゃん側の人間だ。隠れてもすぐ俺の位置を迷わずバレて裏切るんだ！」

「それは可哀相に……って、じゃない！お前はな……なんで正直に彼女達と会わないか？もう一週間だぞ！彼女達はずっとお前を必死に探しているぞ。」

都がこの一週間、ずっと可奈美たちのことを避け続けていた。

さて、質問が来た。シスコンたる都がなぜわざわざ妹を避けているのか？普段の彼なら避けるより彼女を探るはず。

けど、今の彼は怯えているながら妹を一週間続けて避けている。

まさに太陽が東に落ちるほど不思議の現象。

「だって……やっちゃったもん……ギャンブルを。恨みが買いきすぎたのだ!!」

「それは完全の自業自得だ！なんで事前にそのリスクを考えてないの！馬鹿じゃないの！」

「うう……ひどく言わないで。俺もちゃんと反省しているから、こうして隠れているのよ……。可奈美達に迷惑をかけたくない。」

一週間前、都がある立ち合いで刀使を一方的に倒して、成立しないはずのギャンブルで大金をもらった。

あのときの賭け率は3対500、とても成立しかねないギャンブルである。

そして彼が賭けを勝ったせいで、多くの恨みを買って過ぎってしまった。

もちろん最初の都自身がそれを気にしていなかった。けど、後でゆっくり考えたら……もし、自分のせいで可奈美達の名誉にも悪い影響が与えられたら、お兄さんとしては許さない。

だから、都は彼女たちとの接触をやめて、彼女たちを避け続けた。

自分と関わったら、妹の学院生活も潰されるから。

「いや、今お前がやっていることは十分彼女達に迷惑なんだよ？何せ、彼女達は本気であなたに会いたいと色々と探し回っているのよ!？」

「……………心がとても痛い。ですが、それも彼女達のため！先輩、今日は先輩の家に泊まってもいい？」

「お前、自家があるじゃん？自家に帰れ」

「お願い〜！泊まらせて〜!!最近、可奈美は夜遅くまで俺を待ち伏せている。俺はわざわざ夜遅くまで帰っていくのに、このままじや待ち伏せられてしまうよ!」

都の声はどんどん弱気になっていく。声も震えているように聞こえる。

こんな都は滅多が見えない。主に妹のことでこうなってしまう。

何しろ、彼は高等部有名のシスコンだから、この件を知る人達は彼の弱点は妹である”という点しか知らない。

しかし、その点を利用するやつがいなかった。

主の理由は都を怒らせたなら、一方的に殴られそうだから。それと、もう一つは妹の方は中等部最強と呼ばれる剣術馬鹿……都さえも歯が立たなかった相手だ。

この兄妹に迷惑をかけたいやつはこの美濃関にはいなかった。特

に一週間前のことで、都を恐れる刀使が増えていた。

ただ一瞬で刀使を倒せた実力持ち主。彼の噂はこの美濃関に広がっている。けど、外には知れてはいけないから、今だに学院内で噂されている。

「知るか！逃げずに彼女に会って、ちゃんと話すのがどうですか？お前の大事の妹だろう？彼女を避けて、どうする！」

「うっ……！先輩が言ってることは心痛むほどわかっている！でも、可奈美はきつと俺を説得して一緒にいようって願うから……！」
なぜだが、とても苦しそうな声がロッカーから聞こえてきた。

会話の内容はただ少し甘い兄妹喧嘩に聞こえているだけ……。

「良かったじゃない？妹の方はちゃんとあなたを愛している。例えばお前は救いようがない馬鹿としても。」

「良くない！俺と一緒に駄目だ！学園生活が潰されるのは俺一人
でいいから！」

「お前はDMか？どんだけ人思いのだよ！少しでも自分のことも考え！」

「俺より可奈美の方がよほど重要だ！そこは譲らない！」

「頑固な奴め……！」

くぬぬという顔で、服部は妹至上の都のことシスコにどうしようもない。

「ん？おい、衛藤。お前の着信がついたぞ！」

そんなとき、服部の机の上に都の携帯が鳴った。

この携帯も可奈美たちから避けるために、服部に預けたものだ。都が曰く：舞衣ちゃんは最近GPSを利用して、俺の位置を探している……念の為に、これをしばらく先輩に預かってもらいたい。

まさか、柳瀬舞衣はあそこまでするとは……服部も予測がつかなかった。でも、これも柳瀬の令嬢があやつの事を異常に重視している証拠。

でないと、国内一大グループの人間は普通に平民のためにそこまで関わるはずがない。その点について、服部は衛藤 都の凄さを感じしている。

「可奈美や舞衣ちゃんからの着信なら出ないぞ！俺は一生ここから

出ない！」

「いや、出ろうよ。学院長に迷惑をかけるから」

子供っぽく我儘の都に、服部は冷静にツツコミ。

「ん？ふたばから……？どれどれ……」

ドンーー！！

「……………っ!?!……………返せ！」

ふたばという名を聞いて、都は速攻にロッカーから出てスマホを取り返し。

「うおっ!?!なんだよ！人に見せられないものなのか？」

「うるせっ！乙女の秘密を知りたいなら、長江さんに聞け！」

「お前は乙女じゃないけどな！」

スマホを服部の手から取り返し、都はこっそりスマホの着信を見る。

危うく自分が長江さんに手を貸している証拠が服部先輩にバレるところだ。

最近ふたばは家に休んでいて、時にメールで都にあの日のことを謝る。

実際、迷惑なんでかけられていない……………ただ、自分が気分発散のためにやっただけだ。このことも何度も彼女に申し込んだ。

そして、今日のメール内容は異様におかしい。

主の内容は「学校に戻った日に服部先輩ともう一度デートしたいです。服部先輩とうまくデートするために、今週は先輩と一緒に出かけたいです。データ収集のために……………時間が良ければ、私とデータ収集に行きませんか？」こうでした。

これは普段の彼女と少し違う気がする。いつの間に彼女が積極になつていたのか……………。昨日はまた先週の件で謝っていたけど。

「それはいいけど、体の方は大丈夫？」と都は心配そうに返信する。

そうしたらすぐ次の着信が来た。

「もう大丈夫。それはともかく、あの日は格好いい服装で来てね。大事のデート……………じゃなくて、データ収集日なんだから。」

ん？格好いい服装？どういう意味？

またふたばが言っている意味がわからない都が疑問を抱かえたまま週末までに可奈美たちのことを避け続けた。

ちなみに、結果として都は交換条件で服部を仕方なく自分を彼の家
に泊まらせた。

とても痛い代償だけど、妹の名誉を守るためなら、これくらいは造
様もない。

これで一ヶ月分の食費がきれいになくなっちゃった。

◇

週末の日――

原宿はらじゆくの駅前に都が服部から借りた私服で待ち合わせの時間より先
に待ち合わせの地点に到着した。

ここの近くには有名な刀剣拵え専門店がある。噂ではかの店長は
美濃関出身の大先輩らしい。

彼の腕前は鍛冶科の誰でも知っている。彼の手に作られた御刀や
鞘は最高品質であり、多くの刀使や鍛冶科の人間もわざわざ原宿に
行つて彼を依頼する。

いつか自分も彼の指導にも受けてもらいたいです。より立派な刀
匠になるためにも……それで、都の情報では服部はまだそっちへ行つ
てないので、ふたばにその情報を教えた。いつか役に立てると思う。

まさか、すぐ運用したいとは……なかなかの成長ぶりだ。

まるで親が娘の成長を見ているみたいに都が昨日危うく感動し過
ぎで、泣き出しそうだ。

そういえば、ふたばはあるいは都の弟子みたいの関係。まあ、恋に
関するの類だけど……。

そもそも、都が持つてる知識は本屋やネットで調べてきただけのも
の。実際のところは都が恋に一切興味が持たない。必要ないから。

「しかし……今日は異常に人が少ないですね。なんか嫌な感じ
……」

今の頃はちょうど朝の七時、この時間ではラッシュの時期のはず。でも、ここにいる人が少なすぎる……この付近では特に荒魂出現の情報がないはず……それと避難通報もない。

一体何か……。

「……………?!」

一瞬だけ気配を感じた。

悪意の類が感じないが、後ろから何者がすごい速度で接近中……!

「……………避けられた!? 舞衣ちゃん! お願ひ!」

無意識に、都はすぐ感じた謎の気配を躲す。

しかし、避けられる方向にすぐ何か柔らかいものが都の腕を掴んだ。だ。

「しつかり掴みました! 今度は逃げられません!」

柔らかい感触と共に、聞き慣れた声が都の耳に入った。

声の方向に向かうと、そこにいるのは自分の腕をしつかり掴んだ私服姿の柳瀬舞衣。

「舞衣ちゃん!? なんでここに!」

驚愕を隠れず、都は突然現れた妹友の出現に予測がつかなかった。

そして、最も予測がつかなかったのは舞衣の胸は自分の腕に押し込んでいたこと。

これは中学生だと思わないくらいのビッグサイズのおっぱいの柔らかさ。ただこの柔らかい感触を感じただけで理性がとんでもなく暴れ始めた。

「お兄さんを掴むために、可奈美ちゃんと美炎ちゃんと一緒にやってきました。逃げさせません!」

舞衣に力強く抱きつく、都はさらにその凶暴の胸の凶暴さを感じさせられた。

これは流星にやばい……! ずっと前から思っただけど、舞衣のその体がエロすぎる!

特にその胸は反則だ! 中学生なのに、もう大人の魅力がぶんぶん発散している!

「柔らかい! じゃなくて……可奈美もー!」

悲鳴とともに、都が左腕の方に注目する。

そこにいるのは都が最愛する対象衛藤可奈美が自分の腕を組んでる光景。

舞衣ほどではないけど、しつかり成長している柔らかさが感じられる。

「舞衣ちゃん、ナイスキャッチ！よし、絶対に逃げさせませんよ！お兄ちゃん！」

そこも力強く抱きついて、都を逃さないように……。

そのおかげで、都の両手が幸せに包み込んだ。

「可奈美!!舞衣ちゃん!!お前ら、なんでここにいる！」

「お兄ちゃんを掴むためにやってきた!この間、ずっと私達を避け続けているのでしよう！」

「正直とても悲しい気持ちです……。お兄さんはわざわざ私達を避けていて……。とても不満でした。」

両方が同時にムツという表情。それを見て、都は思わず心がドキドキする。

なぜなら、この二人は可愛すぎるからだ。

可奈美はともかく、舞衣ちゃんのその滅多が見ない表情もすげえ可愛い!

できれば、写真で永続保存したいくらい。

「そ、それは……。」

「理由もちちゃんと服部先輩から聞きました。なんで勝手にそんなことを決めるのですか？」

「私達はそんなことを全然望んでいません!名誉より私はずっとお兄ちゃんと一緒にいたい……!」

「私もお兄さんと一緒にいたいです。お兄さんがいない学園生活は全然楽しくないです……。寂しいです。」

可奈美と舞衣は力強く都を抱きつく。彼女たちの悲しい顔を見ると、今度は逃れられないと都がそれを理解した。

彼女達は自分と離れたくないから、強く抱きついた。そんな彼女の意思を理解して、都の心がとても痛い。

まさか自分勝手な行動で大事な二人を傷つくとは……都がそんな自分を許さない。

しかし、都がまた自分のミスを気付いていない。

悪い名誉の学園生活は本当に幸せと言えるのでしょうか？自分のせいで、可奈美達の名誉を傷つくのは本当に大丈夫なのでしょうか？人間は名誉が傷つくと、不幸になる生物。なぜならこの世界はそういうに組まれたから。

だから、都がわからない。自分はいつも正しいことをやって続けた。妹のためにも頑張り続けた。

ちゃんとお母さんの遺志を果たすつもりで動いていた。しかし、なぜ可奈美と舞衣はそんな寂しい顔で自分を抱きついてくるの？これは最善の選択と言えるはずじゃないのか？

都がわからない。自分は、これからどうするのか。

「お兄ちゃん、私たちは約束したでしょう？ずっと一緒にいるって

……。あれは嘘なの？」

……………っ！

「嘘じゃない！でも、俺と一緒に良かったのか？」

「一緒にいたい……。お兄ちゃんと一緒にいるのがとても幸せですから」

「……………私も、お兄さんと一緒に話すのがとても楽しくて幸せです。」

「本当に……。？」

「うん！」

二人は最高の笑顔で頷く。

そこまでに言われると、流石……頑固の都も恥ずかしい顔を隠せなかった。

自分は二人のことを大事するように、自分も二人に大事された。このとき、都がようやくわかってしまった。この二人はただ自分と一緒にいたかっただけ。

そういえば、この前はまだ小学生だったような……このような単純な願いでも、都がとても嬉しかった。

「なら、一緒にいてもいいのか？」
「もちろん！」

今度は悲しいや寂しい顔ではなく、二人は嬉しい気持ちで都を力強く抱きつく。

多少肉体の接触……元い胸との密着接触でいろいろまずいけど、今頃はどうでもいい。

この二人は喜んでくれたら、なんだっていい。

「うわあ……予測以上にラブラブ……」

「あ、美炎ちゃん！」

「おはよう、美炎ちゃん。」

そして、こんなときに美炎が駅から出ていて、こっちまで走ってきた。

「遅くなってごめん！待った？」

「いいえ、ただ今、お兄さんと分かり合いのところなんです。」

「美炎ちゃん、可愛い!!その服！」

「そう？ありがとう／／／／／／／／／／」

私服姿の美炎はいつもより可愛く見える。褒められて照れてた彼女もとても可愛い。

都でも思わずそんな彼女の私服をじっと見つめた。

「都先輩……そんなにじっと見つめないで、恥ずかしいから：／／／／／／／／／／」

「あ、悪い。とても似合ってるから、つい……」

そして、そんな都の視線を感じてた美炎がとても恥ずかしいそうで可愛かった。

「……お兄ちゃん、こっちも見て」

自分の腕から離れて、美炎のそばに行く可奈美はわざわざ自分の私服姿を都に示してみた。

恐らく、これは嫉妬心で美炎に負けたくないからその行為を取ったのかも。

そして今日のためにも可奈美はしっかり準備してきた。普段は可愛いものばかり着ているけど、今回は少女雰囲気の衣装でした。

いつもの可奈美と違って、とても魅力的だった。

「と、とても似合いますよ／＼／＼／＼。二人共。」

「……お兄さん、私のも見てください／＼／＼／＼」

「舞衣ちゃん？」

そして舞衣も都から離れ、彼の前に自分の私服を披露するところ。

普段の彼女と似合う雰囲気のパステル色の洋服。まさに嫁力MAXを強調するための衣装！これを見てみると、これを耐えられない男性はきつとそんな舞衣に惚れられるに違いがない！

「ど、どうですか？似合ってます／＼／＼／＼？」

そこでさらに照れてた顔で……もう滅茶苦茶可愛すぎで心臓の脈搏が止まりそう。

「う、うん／＼／……三人ともすげえ可愛かった：／／／／／」

さらに三人の女の子がベツタリお互いを粘りついているその光景も尊い……。

「ありがとう。そうだ、お兄ちゃん！いい機会だし、四人のデートにしましょうー！」

「……………／＼／＼／＼」

「……………／＼／＼／＼」

都に褒められた直後、可奈美はさらにとんでもないことを口に出した。

そこで、舞衣と美炎は恥ずかしい顔で視線を地面に落ちる。

どうやら、この三人は言い合わせてここに来たみたい。つまり彼女達は最初から都とデートのつもり。

けど、あいにく都は先に長江さんとの先約がある。

そもそも四人のデートはデートではない。ただの遊びだ。

「デートはともかく……俺は先約があるんだ。」

「そ、それは多分心配がないと思う。」

自分の携帯を都に見せる美炎。

上に載っているのは「ゆっくり美炎達とデートして来い！これは私なりの恩返しです。拒否は認めないから、覚悟してください(笑)。」というメール内容でした。

「何やってんだ……恩返しなんで必要ないじゃないか……」

「確かにそうだけど……都先輩とデ、デートするのも悪くないと思う／＼／」

モジモジした美炎はまじ可愛い……（本気にそう思う）

何！その可愛さは可奈美に近い生き物は！いや！この場にいる三人の可愛さは半端ないわ……。

大部は私服が滅茶苦茶可愛いのせいだ！

「私も……デートするのも初めてだけど、お兄さんなら大丈夫……かも／＼／」

やめろ！俺を萌え死するつもり！

クソかわいいんだけど！

「少し恥ずかしいですが……久々お兄ちゃんと遊ぶのが楽しみ！」
そこで、唯一恥ずかしくない可奈美が笑顔で都を見る。

これも兄妹の故と言えるだろうか？まあ、久々可奈美と出かけるのも悪くない。

しかし、他の二人はデートという認識で……本当に俺で良かったのか？

「………なら、長江さんの好意に乗って、四人で遊ぼうか。」

いや、これは良かったと思う。

何にせ彼女達の誘いだ。乗らない男はいないだろう。

「うん！私はこっち！」

「こっち………かな／＼／／？」

「なら、私は背中を押しますね。」

都の返答を聞いて、三人は仲良く都の両手を繋いで、一人は都の背中を押して前へ進む。

こんな温かい光景は現代でも滅多が見えない。

三人の女子が男性一人とのデート。誰が見ても羨ましい光景だった。

第十話：第五席候補

折神本家――。

「以上は今度の報告です。」

「刀使を倒す一般人か……」

現世最強の刀使、折神紫。彼女は親衛隊の報告を聞いて、再び机の上に乗っている資料を見る。

資料に載っているのは衛藤 都に関する報告書だ。ただ一人で刀使三人を見事打ち倒した一般人。まさに前代未聞の事件だ。

「信じがたい話ですが……証人が多すぎて、認めざるを得ないですわ。」

「刀使を倒す人間か……」

「どうしたの？ 『真希』さん。」

何かを考えているように見える親衛隊第一席獅童真希しどうまきに同じ第二席の此花寿々花このはなすずかが彼女に問う。

「いや、ただの考えことだ。この男は確かに怪しい……刀使に勝る人間は一度までもない。けど美濃関の学長からの報告によると、彼は確かに普通の学生でした。」

「そうですね……。美濃関の学長も嘘を付く人間には見えません。だとしたら、彼自身が何を隠している方向に考えるのが妥当でしょう。」

都のことを疑っている此花寿々花が何故か彼に強い敵意を抱いているように見える。

でも、これは普通の反応だと思われる。何せ、刀使を敗れる人間が歴史上は一人もいないから、彼が怪しまれたのも仕方ない話だ。

「紫様、率直言わせていただきます。もし彼の腕前が本当だとしたら、彼を親衛隊に入らせていただきたい。」

「ほお………？」

「真希さん!？」

そして、獅童真希は唐突に折神紫に都を親衛隊の入隊に推薦した。この行為に驚かせているのは獅童以外の者たち。最も、この部屋に

いるのはこの三人だけ。

「今の親衛隊は人不足です。最高戦力としては僕と寿々花、夜見^{よみ}結芽^{ゆめ}しかいない。このような人数だけでは親衛隊に多いな負担がかかる。そこで優秀の人材を入手させてほしい。」

「なるほど、理由がわかった…。」

「真希さん！親衛隊は確かにそういう問題がありますが…：だからと言って、知らない人に入らせるのが少々問題があります！」

「確かに君の言うとおりだ。…でも、最初の僕たちも同じじゃないのか？特に結芽が暴れ回したあの時期は苦労をかけた。」

親衛隊が結成されたときのことを思い返し、獅童は懐かしい顔をしてきた。

「まあ…：確かに。でも、これは別として、相手は刀使ではないですよ！そんな人に紫様の安全を託すの？」

「それは…：」

「もう良い、此花。お前が不満の原因はわかった。」

そこで此花を止めるのが折神紫。彼女は相変わらず覇気を常に身に宿っている。

折神の話を聞いて、親衛隊の二人は無言になった。

そして数分が経ち、紫がやつと口に出した。

「獅童、お前の提案を乗る。確かに親衛隊の人員不足という問題が大きい。それを解決するために、彼を第五席として入らせてもらう。」

「第五席！」

同時に、獅童と此花は驚いた。それはつまり…：最高戦力はもう一人が増える。

それを判断するのは折神紫。

「紫様、本当にこの人を第五席になるおつもり？」

「ええ、彼の実力が本物だ。そこも夜見からの極機密の報告も証明してくれた。ある日に彼は鎌府の特別祭祀機動隊と衝突した。結果として制服されたが、四人のうちにある三人が彼にやられた。」

「そんな馬鹿な…：!?!」

その話を聞いて、二人は驚愕の声を漏れた。

特別祭祀機動隊は荒魂討伐のために結成された警察機関所属の刀使部隊。

あれに所属した刀使たちの腕は一般の刀使より強い、特に鎌府の刀使たちは精鋭中の精鋭だ。

そんな精鋭刀使部隊が三人ほどがやられるとは……改めて衛藤都の異常さを証明する。

「獅童、彼は今までもない逸材だ。これほどの剣の才能を持つ人間はお前は一番わかるはずだ。」

一瞬だけ、獅童の脳内にある少女の映像が流された。

桃色髪の少女、史上最年少の彼女は圧倒的の才能を持つ。彼女の實力は紫以外に二番目強い。

獅童も一度彼女と手合わせをしていたが、全く歯が立たなかった……。

「紫様の意思はこの男は結芽と同じレベル？」

「少なくとも才能は同じくらいだ。彼が刀使だったら、恐らく全力の燕つばくらと互角するなのかもしれない。」

「それほどの実力者なんですの……？」

それを聞いて、此花は今でも信じられない顔だ。

あの燕 結芽と互角する刀使は誰一人もなかった。

ちなみに折神紫は現世最強の刀使であるゆえ、結芽と戦える列に入っていない。そもそも二人の實力はかなり離れかけている。

「……そんな人が第五席としては相応しいと紫様の意思がわかりました。僕は……異論がない。」

「私も……」

親衛隊の二人は都の異常さをある程度に知り、彼を第五席の位に賛成した。

「では、彼を第五席の第一候補を立ち。それと、この件は燕に知られてはいけない。」

「承知いたしました。」

結芽に知られたら、彼女はすぐにでも美濃関に喧嘩を売るのでろう。あの子は強者にしか興味持たないという悪い癖がある。故に紫

も親衛隊もこの事を強く重視する。

「それと、彼にしばらくの自由を与えてくれ。彼が第五席に入るまではそうさせてくれ。」

「承知しました。では僕と壽々花は別の任務があるので、失礼いたします。」

報告と命令を受けるのが終わり、親衛隊の二人は部屋から出ていた。

残された折神紫は外の夜月を見て、一人の言葉を始めた。

「さて、美奈都の息子よ……お前のその剣は『神を殺せる』のか？
彼女の心は多少の期待が残っている。『彼女を殺せる』人間が現れるのか……。」

◇

「結芽と同じ格の人間か……まさか紫様があそこまで彼を買うとは……。」

親衛隊第五席第一候補が決められた数日後。

親衛隊の第二席である此花寿々花はパーティー用のドレスを着換える途中。

彼女は一応京都の名門出身のお嬢様。いくら親衛隊の仕事が忙しくでも実家の頼みは断れない。

「はあ……面倒ですわ。」

そもそもこれも折神紫の指示だ。たまに実家に帰って休もうという指示。

あの方は威厳があるが、部下に対して優しいすぎるところがある。

「真希さんも任務の途中……つまらないですわ。」

良かったら、彼女は第一席の獅童真希とパーティーを出たいところ。

そうすれば、少なくともパーティーがつまらなくなる。

実のところ、彼女は庶民という生活に憧れる変わったお嬢様。実家から離れて、親衛隊に入る原因はそれもある。

実家というよりも学校の方が楽しい、普通の女の子らしく生きるのが彼女の憧れだった。まあ、親衛隊に入ってた時点で普通から遠くに離れたが。

それでも、獅童真希と一緒に仕事をするのは悪くないと思う。

「そろそろ出ましようか……。」

着換えが終わって、彼女が鏡の前に立つ。

綺麗な赤いドレスが身に纏う、彼女の赤い髪にピッタリの雰囲気が出ている。

最も、彼女は美人の類だ。スタイルと顔が良く、性格もそこそこ悪くない。もし彼女と婚約したら、いい嫁さんを取ったと同様。でも残念なことに彼女は好きな相手がいた。

しかも、相手は男性ではない。

「……………」

「……………」

「寿々花様、今日も花の妖精さんみたいに綺麗ですね。」

「お褒めいただきありがとうございます。私はこれから会場にいる皆さんにご挨拶をしますので、会場の警備はよろしくお願いいたしますわ。」

パーティー会場に出たところ、すぐ実家の執事が迎えに来た。

彼は相変わらず口が上手で、嫌いではないが……そういう言葉はもう聞き慣れた。

「かしこまりました。ちなみに柳瀬グループの方もいらっしゃったので、良かったらそちらにもいい関係を築けたいと旦那様のご意思で……。」

「わかりましたわ。お父様の期待を裏切りません。」

そう言い残して、寿々花が会場にご挨拶を回り始めた。

そして二時間後……

多くの名門と挨拶し終わって、寿々花は中庭に向かって休憩を求めた。

「流石に疲れたわね……荒魂討伐より疲れる。」

中庭にある椅子を座り、寿々花は弱音を吐く。

彼女の疲れた顔は隠せない。何せ、名門というやらは常に面倒くさい性格が持っているから、対応するだけで疲れる。

やっぱりこんなことをしているより親衛隊の方が楽しいですわ……。

「そういえば、まだ柳瀬グループの人にご挨拶をしていませんよね……噂によると、相手は話を通じるお嬢様らしい。」

突然柳瀬家の評価を思い出し、寿々花はその情報をまとめて脳内で整理する。

柳瀬グループのお嬢様は礼儀正しく、性格が優しいタイプの人。噂によると、彼女と婚約を求める相手が多い、しかし全部断れちゃった。そういえば、彼女は今中学生でしたっけ？ただその年齢で追求されるのも流石といったところが……まあ、自分も人のことを言えないけど。

多くの人は地位と体を狙いに来た。その点を考えると、彼女と仲間入りなのかもしれない。

「柴田さん……厳しいすぎ……」

「まあまあ、落ち込まないで」

そして、突然誰かの声が聞こえてきた。そっちに向かうとそこには男女二人がいる。見た目では一人は中学生……？一人は高校生。

「なんですの？あれは……」

そして寿々花が見た光景は綺麗なピンク色の礼服を着ている女の子が男の頭を撫でるといふ異様の光景。

見た目ではお嬢様が執事を慰めるところ。

「舞衣ちゃんが優しい……ずっとここにいて」

「そうしたいけど、挨拶がまだ終わってないから……後で膝枕するから、我慢してくださいね。」

「ひ……!?!」

「ふふっ……それじゃ、私はそろそろ行くね。」

何かしらの会話をしてきた二人。

男のほうが真っ赤の顔になっている、女の子の方は彼に微笑んでその場から離れた。

「なんですの？禁忌の関係？」

あれはどう見ても、純粹の主従関係には見えない。

それよりさつきは膝枕という詞を聞いたけど。執事に膝枕をする主人がいるのか？

「変な人もいますわね……ここは。」

「ん？あの……ご休憩中ですか？お嬢様。」

そして、突然寿々花が声をかけられた。

さつき自分の主人に照れた執事の方がこつちに向かつて声をかけた。

「ええ……そうですわ。」

簡単に返答し、寿々花は彼と長く交流する気がない。

あの光景を見たあと、平氣にいられる貴族がいません。

「そうでしたか……。あの……失礼ですが、ここで一緒に休憩してもよろしいですか？散々おじいさん……じゃなくて、執事の先輩にビシバシ鍛えられてとても疲れしました……」

「構いせんけど、私の休憩を邪魔しないでくださいまし。」

そう言つて、寿々花は隣の席を譲つて彼に座らせた。

「ありがとうございます！それじゃお嬢様に邪魔ならないように、俺は休眠します。」

すぐ寿々花の隣に座り、男の方は疲れた顔で目を閉じた。

「よほど疲れたご様子ですね。」

「ソウデスネ、俺のために怒る舞衣ちゃんを止めるのが流石に疲れたよ。」

「どうやら事情があるですね。」

それより彼の顔がどこかに見たような……。

よく彼を見ると、彼は誰と似ている。

「聞いてくれますか？あ、でも大事の休憩を邪魔したら、お嬢様に悪い……」

「構いません。一人の休憩は心地よいことですが、誰と話すのも悪くありません。少なくともあなたはあの連中と違うように見えません。」

あの連中というのはあの名門達だ。

「……………何となくわかった気がする。それじゃ、話しますので、止めたいなら言ってください」

「……………気遣いが上手ですね。」

「……………舞衣ちゃんにも同じことでも言われた。」

そして、彼は文句を挟んで事情を話す。

お主のことは執事である彼は平民出身という身分で名門貴族たちに嘲笑われたことが逆に柳瀬グループの令嬢を怒らせた。自分が彼女に大事されているのが嬉しいけど、このままじゃまずいと判断して、彼女を落ち着かせようと色々してきた。

しかし、不思議なことに彼の話を聞いて、文句を聞かれてもあの不愉快な雰囲気などが感じられなかった。

恐らく彼は寿々花の方に気遣って、雰囲気の調整をうまくしていただろう。

とても気持ち良い時間でした。

「いい執事になりそうですわ。あなたは。」

「いいえ、今だにおじい……………柴田さんに叱られたから、まだ一人前になれないと思う。」

「それでもあなたのおかげで、いい時間を過ごしましたわ。あなたのことを嫌いではないですよ。こう見ても私は結構執事を嫌いのタイプです。」

苦笑い。寿々花は昔、執事を無視することがあった。その原因は実家のことが嫌いだからだ。

ちなみにパーティーにいるのはお父様の専属の執事ですので、お父様の面子に免じて無視しないように扱った。

それでも向く態度が冷たい。

「そこまでの評価をお褒めいただきありがとうございます。俺……………そういうえば、名前が聞いていませんでしたね?」

「私は此花寿々花と言います。苗字くらいは特に知っていますが、特別扱いは結構です。そういうのあまり好きじゃありません。」

「それじゃ、此花さんと呼ばせていただきます。あの……………パー

ティーが終わるまでにここで居てもいいですか？俺は会場に行ったら、また舞衣ちゃんに迷惑をかけられるかもしれない。」

主人に思ういい執事ですね……少し欲しくなってきましたわ。

寿々花が彼を見て、思わずそう思った。例え能力が劣っても、その主を思う心は素晴らしい。

これは此花家が長年に欠けた人種だ。

「ええ、それは構いませんわ。その代わりにあなたの主人を私に紹介してね。まだ挨拶してきませんので……」

「わかりました、必ず此花さんにご紹介します。あ、ちなみに俺は衛藤 都と申します。今頃は柳瀬の新人執事（強制された）をやっています。」

「……………っ!？」

一瞬彼の名前を聞いていた時、寿々花はすぐさっきの感覚を掴んだ。

どこか見たような感じだけど、実際に見てた。

資料に載っている写真ですけど。それでも寿々花はこの人の正体を知っていた。

親衛隊第五席第一候補。ただ人間の身でありながら数人の刀使を斬り倒して、結芽と同じ格の才能を持つ男。

まさか第五席がここに……!?!油断しましたわね……髪が整ったせいで、見分けなかった……。

「どうしたの？此花さん。そんな怖い顔をして……貴女様に似合いませんよ。」

そして彼……都が寿々花の顔を見て、心配しそうに聞く。

「……………っ!失礼いたしました、少しあなたを驚かせてしまいましたわね。」

寿々花も自分の動揺を気づき、すぐ元の様子に戻っていく。

流星に彼の前で動揺しすぎるのはよくない。彼はまだ何も知らないのだ。自分が折神紫に選ばれたことを……故に彼はまだ敵ではない。

「いいえ、此花さんもそういう顔も出来ているのかって……ちよっ

と新鮮です。」

「見苦しいところを見せてしまつて申し訳ございません……」

再び都に謝る寿々花。同じ親衛隊に所属人間でも、彼は一応このパーティー客人である。

主催者側として、彼に無礼するのはいけない。

「いいえ！謝らないでください！むしろ光栄です！言い方はおかしいですが、此花さんの一面を見られるのが嬉しいです！」

「………本当におかしい言い方ですね。でも、ありがとうございます。あなたは本当にお優しい方ですね。」

「よく妹と舞衣ちゃんと後輩に言われています……。俺はそう思わないのですが、俺はただ大切の人たちだけに優しい人なんだ。」

「それでも十分ですよ、衛藤さん。誰でも大切の人を守るために戦っています。あなたもそうでしょう？」

資料に載る内容から、寿々花は特に知っていた。

彼は誰かを守るために戦うタイプ。決して悪人ではありません。

しかし、彼の異常には受け入れませんでした。これは刀使が無知の強さに対する対抗心なのかもしれません。

彼はどんだけの強い意志を持って、こんなに強くなったのだろう……。

「うん……そう言われると、心が少し軽くなってきた。此花さん、今夜は本当にありがとうございます！俺、あなたと出会って良かったと思います！」

無意識なのか、それともわざなのか、都が距離を無視して寿々花に近づく。

「そ、そう……？／／／／／」

彼がわざじやないのはわかっているんだけど、それでも寿々花の顔が赤くなった。

胸もドキドキした。

そういえば、男とこんな距離にいられるのが人生初めてかも。

最初はこんな意識をしなかったのは、きっと自分が親衛隊だから、刀使なんだから。

誇り高く刀使は男を目に映らない。そして普段はいつも御刀を持つているから、襲われないという印象が心に深く刻んでいる。

けど彼女は今、御刀を持っていない。なぜならここはパーティーだから。

「うん！だから決めた！以後此花さんが困ることがあったら、遠慮なく美濃関に行ってください。俺、その生徒ですから」

「え、ええ……その時は、そうさせてもらいます。ですから、少し離れてもらいませんか？／／／／」

「あ、失礼しました！」

距離を取って、都も恥ずかしい顔で元の位置に戻る。

全く……大胆すぎますわ／／／。真希さんでもないし、なんであんな大胆の行動を取るのよ／／／。

実のところ、獅童真希も何回もやってくれた。でも彼女は女性なので、そうされるのが別に変な思いが浮かばない……それでも彼女の行為が寿々花の心臓に悪い。

それとも彼は男性版の真希さんなの？

都を見て、寿々花は思わずそう思ってしまった。

◇

それから数時間が経ち。

パーティーがようやく幕が降りたところ。

「お兄……うちの執事がお世話されました。ありがとうございます。」

寿々花はようやく柳瀬グループの令嬢とお会見。

「こちらこそ、私は彼と会話して結構楽しい時間を過ごしました。」
「それは良かったです。ちなみにお兄……彼が失礼なことでもしましたか？」

一瞬だけ、寿々花が前のことを思い出し。顔が少し赤くなってきた。

「……………いいえ、とても礼儀正しい執事さんでした。うちのよりよほどいい方ですわ。」

「寿々花お嬢様!」

もちろん、両方の執事がこの場にいる。

「ソウデスカ……ソレハヨカツタデスネ。」

なんとかなかで、舞衣の笑顔はとても冷たく都の方へ向かった。彼女は寿々花の表情変化を見逃さなかった。彼女の反応からすると、都はきつと何かをやらかした。

「……………」

それを感じて、都は無言に寿々花の方を見る。

でも、ただ笑顔で返してくれた。(可愛いけど……)

「柳瀬さん、良かったら、これからもうちと交流いたしませんか? お父様もあなた達と手組みしたいと仰っていました。」

「うん、お父様もちょうどそのつもりで。今後ともいい関係で築けましょう。」

そして、なんとか二人は笑顔で握手する。

さっきのは怖いが……結果オツライで問題ないと都は少し安心した。

「ええ、それと……大事にしてくださいね。衛藤さんはとてもいい執事ですから」

都が安心した途端、寿々花は舞衣の耳近くに囁く。

そうしたら、舞衣はすぐ笑顔で返してくれた。

「うん、大事にするよ。誰にも渡しませんから」

そう、舞衣はまだ恋という気持ちかわからないが、都は可奈美と同じくらい大切だと舞衣は前からそう認識している。

「よろしい。それじゃ、お帰りはお気を付けてくださいませ。」

「はい!」

その後、パーティーは無事に終わらせた。

ちなみに、このあと舞衣は都に膝枕してくれた。しかも一夜でした……。

それを知っていた舞衣のお父さんは諦めた表情で曰く：拗ねた娘は

可愛かったが……流石にやりすぎだと。



「衛藤さんでしたか……實力以外にはいい人なのかもしれませんね。」

パーティーが終わり、一度実家に戻ってお風呂でもしてきた此花
寿々花はちょうどいい熱さのお湯に入り。

心の中で衛藤 都の評価を再認識した。

「親衛隊第五席か……悪くありませんね。」

思わぬ微笑み、寿々花は彼の着任を楽しみにしていた。

番外編：妹に最高の誕生日を（前編）

爽やかな朝が好きだ。

なぜなら、八月は夏。暑いお天気なので、できるなら寒い天気をお願いしたい。

それはさておき、今日は八月十三日。我が可愛い妹の誕生日なんだ。今日のため、朝早く原宿に足を歩いた。

とはいえ、現在時刻は朝の4時。まだ人気がないが……それはそれとしては動きやすい。

そして、彼の目的地は数多くの刀使や刀好きの一般人などの御用達である、刀剣・刀装具専門店『青砥館』。

あそこの店主は青砥陽司氏あおとひょうじは、伍箇伝の人間からも目を付けられるほどの腕前をもつ刀工技師でもある。そして、都の師匠の師匠でもある。

なぜと言うならば、その看板娘で、可憐な青髪を靡かせる青砥陽菜あおとひなは都の師匠だ。

六月頃、都は誠意を持ってそちらへ弟子入りしたが、ナンバーおじ……陽司さんは「弟子は可愛い子が大歓迎ですが、男なら出てけ。」という理由で都を断った。

ですが、それは都が諦める理由にならない。彼は毎日同じ時間であるそこへ弟子入りをお願い申した。彼は自分が日本一の刀匠になりたいという強いお願いを抱かえてぜひここで勉強したい。その動力源はただ二人の刀使の専属刀匠として二人を支えたいという単純の欲望。

そして、六月下旬の時、彼は陽菜とたまたま出会った。

あの時の彼女もまた、父の陽司さんの背中を見て育ち、同じ道へと進む選択をしたのである。現在は鎌府女学院の刀匠課に所属し、日々技術の研鑽に励んでいる。最も、高等部一年生でもあるため、色々迷う時期である。何にせ五箇伝の学校なんだから、ストレスがたまりやすいのです。

そこで、都が彼女の相談対象になり。彼女の助力になった。その後、彼女も都の事情を知り、彼を弟子として入れさせた。

さて、紹介は一段終わりにしよう。とにかく、都はそちらにオーダーメイドを依頼……元い、作るという予定だ。

可奈美は剣が好き。それは剣術だけではなく、御刀を一目にしていれば、何の刀なのかわかるくらい剣の狂人。

因みに、綾小路にも可奈美と異なる変態狂人がいる。外見はすげえ美人なのに、御刀のことになると変態になる。

さて、話が少しズレた。都は可奈美の御刀……千鳥の鞘にオーダーメイドをしたい。彼女に誕生日最高のプレゼントとして贈りたいんだ。

そのため、千鳥を借りた。本人の許可はないが、メーセージは一応残してあるから、彼女も彼が千鳥を悪用しないのもわかるはずだ。

「店はやっぱり開いていませんね……それもそうだ。営業時間は八時から……また四時間がある。その間は伝説の納豆を探すか……ネットでは原宿に眠っているはず」

『青砥館』に到着し、都は最新買った新しいスマホを弄って、スケジュールをプランBに移る。

納豆ご飯が可奈美の大大好物。それを知っている都はもちろん、あれを最高のプレゼントの一つとして贈りたい。いつまでも可奈美に最高の品を用意するのはこの究極のシスコン。

「さあ、我が愛おしい妹に最高の誕生日を贈る計画」を始めよ。」
そう言って、彼は千鳥を持って凄まじい速度で移動した。



9時頃——『青砥館』にて、

土曜日なのか、営業始めた一時間内で五箇伝各校の生徒達多数にやって来る。多くは鎌府の生徒なのだが、比較的距離の近い美濃関や綾小路、中には長船の生徒の姿もあった。

「陽菜、どんな感じだ?」

「オトン、結構人が来だしてるよ。だいたいは刀使の皆さんみたいだけれど」

店舗奥の作業場で、預かった御刀の手入れや柄の調整などを行っていた陽司が、彼女に店内の様子を聞く。

因みに「オトン」は陽菜がお父さんへの通称。

「すみませ〜ん。」

「あつ、はい!すぐ行きます!」

店内で手を上げて、陽菜を呼ぶ刀使。仲間も一緒のようである。

「この商品で、もう売り切れちゃいましたか?」

「この色の柄糸ですか…。そうですね、先ほど買われていったお客様がいらしたので、この商品は完売ですね。」

「そうですか……」

「あ、でも同じ会社でこの商品に近い色のものは、うちにもありますが、どうなさいますか?少しはお安くできますが」

「じゃあ、お願いしてもいいですか?」

「はい!お任せください!」

そうして彼女はまた一人、商売を成り立たせていった。

「やっぱり、一人前になっちゃったな。これで彼女がいつ開店してもおかしくもないが……」

娘の商売力を見て、陽司は娘が立派になったことに喜んでいる。

「さて、俺も立ってられないね。」

彼は仕事に戻り。店番はしばらく陽菜に任せる。

「相変わらず大人気だね。」

その時、一人の青年が入店してくる。

「いらっしやいませ〜、…あれ、都くん!」

驚いた彼女の視界には、都の姿があった。

「今日もお疲れ様、師匠!陽司さんに用があつて、ここに来るだけど……忙しそうだな。」

店を一周回って、お客様がたくさんいる。

「オトンに用ですか?なんのことですか?」

「そんなところだったんだが……というか師匠、俺と話して大丈夫なのか？」

「今のところは大丈夫ですよ。ほら、刀使の皆さんで、慎重な方も多いじゃないですか。商品選びに時間をかけてくださっているなら、こつちもありがたいですよ。」

そう言つて微笑む彼女だったが、レジの方に目をやると、そろそろ会計しようかとソワソワして待つ、多くの客達の姿を捉えた。

「師匠、俺が師匠に代わつて会計や商売をやってます。この刀にオーダーメイドしてもらいませんか？自分でやれなくては残念ですが……師匠なら、俺よりうまくやれると信じます！」

「え……？これは御刀？なんで都くんはこれを……」

都が渡した御刀を受け取り、陽菜は少し驚かされた顔だ。彼は刀使ではないから、御刀を持っているはずがない。

「うちの妹の物だ。今日は彼女の誕生日なので、彼女の御刀にオーダーメイドしたいです。」

「なるほど……都くんは妹思いのいいお兄さんですね。わかりました。お任せしてください」

「因みに可愛く、千鳥という名前通りのデザインをしてくださいね。俺は彼女に最高の誕生日を贈りたいですから」

「うん。それじゃ、店番をお願いしますね。」

「おうー」

彼がどれほど妹思いのお兄さんなのかを理解していた陽菜。彼の気持ちを無駄にしないように、彼女は店の奥へ行き、店番を都に任せ

た。普通ならば、店の金を他人に扱わせていいものかと思ひそうになるが……彼は彼女の弟子だから、加えて彼は売上金を盗むような人間ではないことを陽菜に深く理解されていたこともあり、このあたりはすんなり合意がいった。

それから数時間が経ち。

会計や商品紹介や商売を一気にやる都は休み無しで働く。この間

は400人近いお客様が来ていて、都は一人で何とかオーダーメイドが終わるまでに耐えた。

「都、ここは一応俺に任せよう。お前は奥へ休んでくれ」

「いいえ、またまた行きます……それと、陽司さんに刀使たちの相手をしてはいけません。向こうは危険ですから」

「おめえさん、俺のことをどう見てるの?」

「ナンパクソ爺。その点がなければ、師匠も苦労しませんよ。」

都の代わりにやってきた陽司に都は容赦がない態度。何にせ、彼は可愛い子を見たら、すぐナンパする。

これも彼が可奈美をここに連れて行かない理由であった。

「おめえだけに言われたくねよ!早く奥へ行ってくれ!モテ男!」

「誰かモテ男ですか!このエロい爺!」

彼に強く叩かれて、都は仕方なく彼と交代した。でも、確かに、今は休憩が必要なところ……少し無茶すぎた。

「都くん、お疲れ様です。オーダーメイドは……結構疲れた顔ですね……無茶しましたか?」

奥へ行き、陽菜はちょうど作業が終わるところだ。本来彼女は微笑んで都を迎えるが、彼の優れない顔を見て、逆に心配の顔になった。

「はい……無茶しました。一時間があれば、大丈夫なはず」

「私の経験上、大丈夫って言う人ほど大丈夫じゃないですよ?…そのまま、私に体を預けてもらっても平気ですから、じっとしててください」

「……いいえ、この後は晩御飯の用意があるんですけど」

「いいから、師匠の話をちゃんと聞いて。都くんは効率な人だとよく知っていますが、同時にとても無茶な人だともわかります。」

「……………」

「妹さんもそんな無茶する都くんを見たくないですよ。都くんから聞いた話限り、あの子も都くんのことを大切にしています。」

見破れたが……流石師匠。

そうして彼女は、ゆっくり彼の体を傾けつつ、ポフツという感覚が頭に伝わる彼。

この感触はまさか……。

「取り敢えず、私の太股に頭を置かせてもらいましたけれど、どうですか？」

「……………凄く気持ちいいです。でも、いいですか？俺なんか膝枕を……………」

「いえ。乗せたのは私の意思ですから。しばらく都くんは私の膝を堪能して休んでください」

優しい笑顔をする陽菜。彼女は自分の知り合いの中でも普通に可愛くて、仲良い女の子。正直、彼女とこんなに親しくなるとはなんか凄く罪悪感が湧きます。

だって、膝枕は舞衣ちゃんの特権……………いや、特権ではない。ただ舞衣ちゃんに申し訳ない気分で……………。

しかも、師匠も良い女の子です。可愛い外見はともかく、性格も接しやすいタイプなんて全然嫌いじゃない。

「それより、千鳥はもうできたのですか？師匠。」

「うん、これを。」

陽菜は隣に置いておく御刀を都に見せつける。

「おお……………これは……………」

都は目をパクパクと刀の方をじっと見つめる。

鞘部分には可愛いピンク色と白い花がデザインにし、鞘の末部分にも花と同じ色をした。柄部分は小細工に調整しており、恐らく前よりも使いやすいのでしょうか。

「都くんの頼みにより、このようなデザインを採用したのだけれど……………どうですか？」

「とても可愛いです！流石、師匠！」

これで、可奈美に最高のプレゼントを贈られる！

「ふふっ、お気に入ってくれて良かったです。……………正直、都くんの期待に応えられるかどうか不安でした……………だって、オーダーメイドの頼みは都くんが初めなんだろうまくやれるのかなと思ってしまいました。」

なるほど、師匠はそういう気持ちで俺の頼みを作業するのか……………

まあ、俺と同じ歳だし。

「それでも師匠は応えた。俺、ずっと師匠のことを憧れています。」

「憧れ？私に？」

「ああ……師匠は技術が俺より優れているだけではなく。……師匠が刀使達に整備し終えた御刀を渡す時、刀使が喜ぶ姿を見た自然な笑顔が、俺には印象深くてな。いつか師匠みたいな人になりたいくて、ずっと憧れていた。」

「そうだったんですか……」

「だからいくら言おうと、師匠は俺の師匠である。俺の目指す先の星であり、憧れです。」

「……………憧れですか／＼／＼／」

都の熱意を感じて、陽菜はそう呟いて顔が赤くなる。こんな彼女はとても可愛く見えます。

それから数十秒後、彼女は赤い色に染まれた顔で都に訊く。

「……ねっ、もし都くんがよろしければですけど、鎌府に来た時でも私の作業風景くらいならお見せできるかもしれませんが、構いませんか？」

ん？それって誘い？

「いいのか？」

「私でよければ、都くんに師匠の凄いところを見せつけたい……駄目？」

舞衣ちゃんのような言い方はずるいぞ。俺ってそういうの弱いんだよ。

「なら、また今度見させてもらおうかな。…何時になるかは分からんけれど」

「その時は都くんにとっておきの特等席を用意するから！」
彼女の純粹の好意に都はすぐ応えようとした。

◇

一方ー。

二人の姿をこっそり覗く陽司は、なにやら意味深な表情を浮かべていた。

「……けつ、見せつけてくれるじゃねえか。…まあ、責任取って陽菜をもらっていくならば、目を瞑っておくとするか」

一人の父親として、彼は陽菜が都に好感を抱かえることを知っている。本人は極めて隠そうとしたが……彼女はずっと都を甘やかす。

それにしても、陽菜も大胆になったな。膝枕は恋人の間をする行為なのに、そんな簡単にやるとは流石、青春期の娘といったところ。

彼女も都と親しくしたいと思ったのでしようか……いや、多分忙しい仕事の中に、彼の出現にあまりの喜びにこうしたのだろう。

欲望不満か……まあ、とりあえず娘の恋道を応援し続けよう。//他の娘”に負けないように。



「ただいま……」

「お帰り、お兄ちゃん！」

「おっとー！ただいま、可奈美」

家に帰って直後、可奈美は都に飛び付いて抱きつく。こんないきなりお兄ちゃんを抱きつく可奈美が滅多に見えない。どうしたのかな？

「お兄ちゃんの匂いがするく〜」

「嗅ぐんな。というか、どうしたの？突然。」

「だって、お兄ちゃんはほぼ丸一日いないもん！私は一日お兄ちゃんとゴロゴロしたいと思ったのに、朝早く家から出でずとお兄ちゃん成分が足りないですよー！」

お兄ちゃん成分ってなんだよ！そんなブラコン発言は少し控えろ、妹よ。

「えへへ……お兄ちゃんの匂い……好き。」

「だから嗅ぐんな！ん……この匂いは酒？」

途中に可奈美の身体から酒らしい匂いがしてきた。まさかと思うが……。

「お前はお酒を飲んだの!？」

「なんの話……？わかんない！」

可奈美はもつと力強く都を抱き締めた。そのせいでほとんど感じられない胸の感触はここで強調された。大きすぎず、小さすぎず、まだまだ成長していく胸の感触はかなり危ないです。

「可奈美……!?!おい!／／／／／」

「えへへ……お兄ちゃんが暖かい……」

クソ……可愛い……!!!だが、この体勢はまずいよ!

「やっぱり……こうなってしまったか……」

「ちよつと、お父さん！なに、可奈美にお酒を飲ませるの！未成年だろー！」

その時、お父さんはちよつと疲れた顔で現れた。都は速攻で彼を叱る。

「私のせいじゃないよ！近所の夫婦は可奈美の誕生日の話を聞いてチョコを贈ったのだ。それで、可奈美はあれをいくつ食べたなら、こうなってしまった……」

「チョコなの!?!」

「微量のアルコール入れるチョコです。量から見れば大丈夫だと思います。可奈美に甘やかした。」

「駄目な親父だね！」

「はい、すみません……」

とりあえず、原因がわかった。さて、これからはどうする？酔っている状態の可奈美は俺を手放せるつもりがないみたい。

「親父、ひとまず水を可奈美に飲ませろ」

「わかつ………待って！俺はいつ親父になったの!?!元のお父さんは!?!」

「さつき死んだよ。」

「お父さんの待遇酷すぎない!？」

「お兄ちゃん……お父さんをばかり構えて、私のことをちゃんと見てよ……くすっ……」

ああああ……!!泣き出したよ!涙がポロポロに落ちていたよ!

「も、も、もちろん!見ているさ!可奈美のことをいつまでも見ていて、思っているよ!!」

「都……」

そんな視線をしないで、これは真実だけど、可奈美の涙を止まらせる策なんだよ!

「ホント……?」

「うん、本当だよ!」

「なら、どれくらい?」

「はい?」

「一日どれくらい私のことを思っているの?」

「……」

答えられない。お父さんの前に流石にその数はバラすわけにはいかない。

「……くすっ……うう……お兄ちゃんは私のことを見ているって嘘だったの……?」

都が無言になるところを見て、可奈美は再び泣き出した。あああゝゝゝ俺にどうしろってんだ!!

「……125回です。」

結局、都は直ちに素直に答えた。

「お前……重症だな。」

見ないで!ドン引かれた目で俺を見ないで!可奈美を中心に動く俺には仕方ないことじゃないですか!

「なら、私もこれから同じ数でお兄ちゃんのことを思います!」

「お……おう……」

笑顔でそう言ってくれる可奈美。なんか初めて酔っている可奈美が怖くなってきた……。

ブラコンしすぎないか!?!うちの妹は!

「けんじゅっ……剣術もちやんと思えよ！大好きだろう？」

「うん！大好き。お兄ちゃんと同じくらい好き！」

これは喜ぶべきことなのか？俺の価値は剣術と同レベルになったよ。

その後、約二時間くらいに可奈美がずっと都のことを甘え尽くした。

番外編：妹に最高の誕生日を（後編）

「……すう……すう……」

「眠った妹って可愛い……」

自分の膝を可奈美に乗せられ、彼女に膝枕をする。

二時間くらいの時間内で、可奈美は妹らしく俺に甘え尽くした。それを応えるため、こっちも羞恥心を捨てて、道徳範囲内に彼女の我儘を受け止めた。

幸い、一緒にお風呂とか寝るとかの要求が出さなかった。でなければ、本当に理性が可愛すぎた妹に吹き飛ばされる。

「お疲れ、都。お前も大変だな」

「自分に部外者扱いをしないでください。お父さんのせいで、可奈美は大暴れだぞー！」

「それに関しては申し訳ない。でもこんな甘える可奈美も久々に見たじゃない？彼女も……美奈都がいなくなつた日からずっと強がっているぞ。」

「そうだね……」

「……………」

けど、お前ももつと強がっていると……お父さんは自分の息子にそう言えなかった。彼は可奈美以上にお母さんのことが好きだといふのに……ずっとその涙を心の中に封じてた。

「料理は私がやる。都は可奈美のそばにいてくれ。あの子は……私よりお前のことが必要なんだから」

「納豆料理はできるの？」

「私が何年のお父さんをやっていると思ってる？可奈美とお前の好みだけが得意なんだよ。」

そう言つて、お父さんは厨房の方へ行つた。久々彼がこの家の食事担当なんだね……前回やるのは母がまだ生きられた時だっけ？懐かしい。

「それは心強いね。で、俺の好物は？」

「和食だろう？だから、舞衣の和食だけに手放せなかつたな」

「その話はもういいから！／＼／＼／＼」

初めて料理に恋しくなるのは舞衣ちゃんの手料理。味はとても美味しい以外に、その料理は俺にあの地獄から立ち上がる勇気をくれた。

しかし、覚えていたんだ……俺の好物を。

「因みに、ケーキはー」

「んっく、ふわぁ……」

そんな時、膝から可愛い眠い姫が長い眠いから覚めた。

「おはよう、眠い姫。」

「……おはよう……お兄ちゃん。」

まだ意識が朦朧している可奈美は実に可愛い。……いや、シスコンである俺が言えば、どんな可奈美でも可愛く見える。

小さい頃からずっと見てきた家族なんだから、彼女の可愛さは十分知っている。

「あれ……？お兄ちゃんの顔は……なんて？」

「膝の感触どうだった？」

「……私……お兄ちゃんの膝に眠っていたの？」

「うん。可奈美の寝顔は凄く可愛くて、お兄ちゃんは可奈美成分をたっぷり満喫したよ。」

「くくく!!／＼／＼／＼」

急ぎに膝から離れる可奈美。彼女の顔は真っ赤になっていた。やっぱり恥ずかしいんだ。

「お兄ちゃんの破廉恥……！／＼／＼／＼」

理不尽。俺はただ家族の寝顔を堪能していただけ、別に変なことじゃないよね？そうだよね？

「なんて勝手に私の寝顔を見るのですか！／＼／＼／＼／ううく!!」

お兄ちゃんに変な顔をしなかつたよね？大丈夫よね？」

「大丈夫、大丈夫。いつも通り可愛い可奈美だよ。世界一番可愛い自慢の妹！」

なにか心配するのかわかりませんが、いつも通りに妹を褒めよ。可愛いのは事実ですから。

「ううううお兄ちゃんはいつもそう言って……ずるいです／＼／＼／」
シスコンの愛に可奈美は照れている。

彼はいつも可奈美のことを可愛い可愛いと言って、そのせいで可奈美はずっとお兄ちゃんに照れ照れ状態である。

お兄ちゃんのせいで、可奈美の目は彼以外の男性が入れなかった。何にせ、お兄ちゃんは最高のお兄ちゃんだもん。

「可奈美、おはよう。早く顔を洗おう。そろそろお前の誕生日会だ。」

そんな時、お父さんの声が厨房から伝わってきた。恐らく、可奈美の声が大き過ぎでお父さんに彼女が起きたことを伝えた。

「え……？お父さん……厨房にいたの？」

「都の代わりに私が料理をする。料理ができる前に顔を洗って来い」

「へえううお父さんが料理なんて久々だね。いつもお兄ちゃんが忙しいお父さんの代わりにやるのに……」

「いつまでも都に家事を任せちゃだめだからね。ほら、可奈美は顔を洗いに、都は誕生日の準備を」

「は、はいー」

「了解。」

お父さんの指示で都と可奈美はそれぞれの準備を行う。

それにしても、母がいた時も両親にそう命令されたことがありますね……やっぱり家族と一緒にいると色々と思いつく。



「ハッピーバースデー！」

二発のクラッカーが鳴らされ、パンツという軽快な音と紙テープが空中に舞う。

可奈美は兄の都と父の二人から盛大な誕生日祝いを受けていた。

「誕生日おめでとう、可奈美」

「おめでとう、可奈美」

「うん、ありがとう。お兄ちゃん、お父さん」

クラツカー斉射を浴びた可奈美は満面の笑みで応えた。

衛藤家の食卓では、夕食後の誕生日パーティーが開かれていた。生クリームでコーティングされた円筒状のケーキ、その上面の外縁に沿う形で等間隔でイチゴが配置されている。その隙間を埋めるように十三本の小さくカラフルな蠟燭に灯された火。可奈美は願いを願った後、フーツと息を蠟燭の火に吹きかけ、消した。

因みに、納豆ご飯は大成功だ。彼女が幸せそうに食べていた顔を見て、都が今日の苦労が無駄じゃないと実感した。

「はい。じゃあこれ、お父さんからのプレゼントだ。」

お父さんは自分の椅子の下に隠していた紙袋をテーブルに置き、可奈美に差し出した。

「……なんだろう〜ドキドキする」

可奈美はわくわくと紙袋の中から包装紙とリボンでラッピングされた箱を取り出す。丁寧にそれを解き、中身を確認する。

「これは……綿棒と布？」

中にいるのはただの綿棒と綺麗な布。

「ああ……そろそろ御刀の手入れする道具も新品に変えなくちゃと思ったんだ。可奈美はずっとうちの使ってたでしよう？美奈……母の時期から使ったものだから、もう使えないと思って」

「ん〜確かに綿棒はもう汚れていて、手入れする時は少し迷っていますね。ありがとう、お父さん。大事にするよ」

可奈美はお父さんからのプレゼントをもらい。そうしたら、次の視線は自然に都の方へ向かう。その目は期待した目だ。

まあ、毎年最高のプレゼントを贈ったから、今年もきつと彼女の好みを合わせるプレゼントかなと思っただろう。

けど、俺よりあの二人のを優先したい。

「俺のプレゼントは後にする。その前に、これは舞衣ちゃんと美炎に渡された可奈美へのプレゼントだ。」

「二人から？」

「うん。二人は家が事情があつて来なかつたけど、先にプレゼントを俺に渡した。」

お父さんと同じく2つの手袋を可奈美に渡す。そして、同じ流れて解くと、

「舞衣ちゃんのクッキー!と手合わせ券!」

2つの箱の中にはクッキーと何かしらの紙と手紙。一枚の手紙の内容は『可奈美へ、誕生日おめでとう。可奈美の誕生日をお祝いに行きたいけど、うちは少し面倒ことがあつて、手伝いに行かなくちゃ。可奈美の誕生日会が参加できなくて凄く残念ですが、プレゼントを用意したよ。学校に戻つて、これを使つたら、何度でも可奈美と手合わせするよ。』こうつて書いてある。

「美炎ちゃん……ありがとう。気持ちが嬉しいよ。」

「また二枚があるよ。」

二枚目を可奈美に渡し。可奈美はさっきのように読む。

『最後。うまく都先輩と素敵な夜を過ごしますように祈つております。一応うちは神社だから、可奈美の恋……じゃなくて、気持ちを応援しますね。』

「えつと……う……どういう意味?美炎ちゃん」

最後の手紙の意味がわからない顔をした可奈美。何の応援なのか、彼女は知らない。そもそも、なんてお兄ちゃんのことを特別に指したの?

「どうしたの?可奈美」

「ううん、なんでもない。とにかく、二人の気持ちはすごく嬉しいよ!」

「後、電話で感謝しよう。さて、俺も自分のプレゼントを持ってくるから、お父さんとゆつくりケーキを食べよう」

席から外して、都はこの場から立ち去る。

「……あ、……お兄ちゃん。せめてケーキを……」

「後で食べるから、先に食べて」

「……あつ。」

都がそのまま立ち去った後、可奈美は落ち込んだ顔でケーキを見つめる。毎回はいいいことを彼女ばかり押し付けて、自分には何の褒美や利益を求めていない、その自己犠牲心は妹にしては見てられない。彼は幸せすべきだと可奈美は思っていた……が、彼を縛る者はもしいや自分なのかもしれない。

だって、自分はお兄ちゃんに甘える自己本位の我儘な妹だから。

「可奈美、これは都の分と貴女の分だ。彼のところへ行つて来い」

ケーキを切り分けて、2つのお皿の上に乗せる2つのケーキ。可奈美のお父さんは可奈美に渡しながらそう言う。

「え……っ？じゃ、お父さんは？」

「私はここで片付けをする。可奈美はお兄さんの方へ行きなさい。今夜は一緒にいたかったのだろうか？」

「なんて、わかるの？」

「お父さんだからわかる。さっきの願いも大体予想がついた。」

「~~~~~!!?/~/~/~/~/」

あまりの羞恥心で顔が真っ赤になった可奈美。彼女は時にわかりやすい。彼女の母のように。

「ほら、早く行け。あの子……都の方へ行け！でなければ、来年のお年玉は千円になりますよ」

「千円……!!?それだけはやめてください。お父さん!!わ、わかった！すぐ行くよ！」

慌てて席から外す可奈美は急ぎにケーキ2つを持って、リビングから出ていた。

そして、部屋に静寂が訪れる。それを即座に破ったのはお父さんの大きなため息だった。

「面倒な兄妹なんですね……どつちも強がり屋さんで苦労するよ。あの二人を救える貴女もいなくなつたし……」

テレビ近くにいる棚の方へ見ると、そこにいるのは彼の妻の写眞。色々のだめな人妻だったが、それとも愛していた。

彼女の可愛さをちゃんと理解している異性は多分自分しかいない。何にせ、彼女にプロポーズしたのは自分だし。彼女と夫婦になる時

間、子供と一緒にいる時間はとても幸せだった。

「貴女がいなくなった後。あの二人はずっとお互いのことを支えたのよ……。都がシスコンになるのも妹に執著したから。可奈美も馬鹿な兄のことを夢中になって、ずっと彼のそばにゴロゴロ回したぞ。これで彼氏がうまくできるかな？あはは……」

「……………」

「これは完全の解決策じゃないのもわかる。けど、先に逃避した私はもうあの二人のことを介入する資格がないんだ……。私って駄目な父親だね。美奈都」

ずっとそのことを気にしていた可奈美たちのお父さん。彼は妻がいなくなった後は、仕事ばかりに潜り込んで、結果的に子供との関係はどんどん離れていく。都の大事な時もそばにいらなくて……。そのせいで、彼は辛かった、痛かった、泣きたかったけど泣けなかった。彼にもう一度向き合わせる顔がない。だから、彼の支えになった可奈美に任せたのだ。本当に駄目な親なのね。私は。

◇

「お兄ちゃん、部屋にいる？」

可奈美は都の部屋の扉をノックする。

そうしたら、中から「可奈美？なんて来たのよ？」と返事が返ってくる。

「お兄ちゃんに話したいことがあって……。入っていい？」

「どうぞ。軽く押したら、開けられるよ。」

都の返事をもらって、可奈美がそのまま入ってきた。にしても、全然防備がない扉ですね……。まあ、お兄ちゃんのことなんだから、賊が入っても即秒で制圧するのだろう。

「お邪魔します。」

部屋に入って、都は既に地面に座る状態で自分を迎える。

「ケーキが持ってきたのか……。いらなと言ったのに」

「お兄ちゃんにどうしても食べさせたいから……。それで、あれは？」

よく見れば、彼の隣には御刀といくつ工具がいる。それらは鍛冶科の物だと推測できる。

「…………千鳥の最終チェックだ。師匠の腕が安心しますが、刀匠の魂がどうしても落ち着かなくて」

そう言つて、彼は急ぎに工具を片付け、御刀を鞘に収まる。そういうお兄ちゃんはちよつと可愛く見える。

「そういえば、お兄ちゃんは私の千鳥を借りて、何をしたの？私に聞かずに借りるなんて…………らしくないですよ。お兄ちゃん」

「そのことについては…………まずケーキを机に置いてくれ。」

可奈美に尋ねられると、都はちよつと何かを隠そうとする態度。それを当たり前に気付いた可奈美だが、彼女はお兄ちゃんを信じてケーキを机に置いた。

「可奈美、俺の誕生日プレゼントは舞衣ちゃんや美炎のような実用の物じゃないかもしれませんが、それでも受け取って欲しい」

「これは……………」

背後から隠した御刀を可奈美に見させる。それを見て、可奈美は驚く顔が隠せなかった。

御刀は前より可愛く見える。いや、主に鞘部分が凄く可愛い。

ピンク色で白花がついている鞘はとても可愛らしい。

「はい、オーダーメイドで作られた千鳥です。刀身以外は小細工で調整したので、外観だけではなく、実用性もかなり上がったと思う。」

「使つてもいい？」

「元々貴女の御刀です。どうぞ」

お兄ちゃんから御刀をもらい。可奈美は御刀を鞘から抜け出すと、次の瞬間は目が追いつけないほどの速度で綺麗な一閃を放った。

「見事な一振りです。」

「凄い…………千鳥は以前より使いやすい！」

自分でも驚くくらい使い心地良い。これなら、もつと早く斬れる気がする。

「それは良かった。苦勞した甲斐がありますね。」

「…………お兄ちゃん。今までありがとう。」

「……………うおっ!?!……………可奈美……………急に抱きつくな」

刀を鞘に収まつて、大好きな彼に感謝を伝えながら彼を抱きつく。毎年の誕生日に彼はずっと可奈美の好みに合わせるプレゼントを贈ってくれた。時に高そうな物、時にレアなもの、時に簡単なもの。どれもお兄ちゃんの愛がたっぷり込めていて、可奈美はとても幸せだった。もし、誕生日プレゼントランキングがあったら、お兄ちゃんは常連のランキング一位だ。

「だって、嬉しいもん〜。」

「……………全く。今日は異常に甘いなあ」

優しく可奈美を撫でる。こういう尊い光景はこの兄妹にとっては日常にすぎない。

「だって、私は今日の主役だもん。」

「そうだね。もうたくさん甘やかしたが……………ええ……………そうですね」
何か悪夢でも見た都の顔が優れない。

酔っ払い可奈美はブラコン全開で恐ろしかった。

あれは都シスコと同じレベルのブラコンでした。何かをやっても、可奈美は都を離さずに甘える。

とても可愛けど、肉体の接触は流石に意識しちゃう。

「お兄ちゃん?何かとても疲れそうな表情ですよ?」

「大丈夫、大丈夫。酔わなければ、あんな我儘の妹は出てきません。」

「それって、私のこと?私は酔っていたっけ?」

しかも、記憶なし。以後はアルコールが含まれた料理を禁じよと思っていた都。

「それより、お兄ちゃん……………今晚、一緒に寝てもいい?」

「え……………?」

懐の中にいる可奈美の突然の発言に反応が追いつけぬ都。そして、懐の中にいる可奈美も自分の甘え発言に恥ずかしかっている。

なんてお兄ちゃんにそんな大胆の要求をするのか、自分でもわからない。けど、今日一日は大好きなお兄ちゃんと一緒にいたい願望が強い。

それに、自分の誕生日だし。多少我儘しても許されるよね?

「私はお兄ちゃんと一緒に寝たい……昔みたいに。」

「そ、それは……」

「やっぱり駄目？」

「駄目なわけじゃないけど……可奈美はもう中学生だよ。色々ま
ずいのでは？」

「確かに……そうですね。私はお兄ちゃんなら、大丈夫
……と思う。／／／／」

「……今日……だけだよ。／／／／」

「えへへ……ありがとう！お兄ちゃん。／／／／大好き。／／／／」
最終的に妹の我儘に敵わない都はこうして妹と同じベッドで寝る
ことをした。

そして、可奈美の最後の言葉は都に聞けない音量をした。この気持
ちはお兄ちゃんの前に言うのはやっぱりかなりの勇気が必要……別
に告白なんかじゃない。

ただ、最近になってお兄ちゃんの前になんか言えなくなってきた。理由は
よくわかりませんが……それでも、お兄ちゃんのことを誰よりも好き
なのは確かである。

お兄ちゃんは世界一番かっこよくて、一番強くて、一番優しくて、私
のことを真面目に見るお兄ちゃんは世界一のお兄ちゃんだと自慢し
ている。

彼以上のお兄ちゃんはいない。私のただ一人のお兄ちゃんなん
です。

胎動篇

第1話：ある少女の思い

古来、この国を長年に脅かす荒ぶる神がいた。

人々はそれを《荒魂》と名付けた。

出現時期が不明、出現条件が不明、謎の怪物。

あいつらのことを知られるのは古来の人が残された記録から推測しか。

あいつらのことは人々が荒ぶる神と呼ぶ。つまり天災のようなもの。

そしてどんな兵器を使っても、あいつらに傷一つも入れない。

それを払うのは、神刀に選ばれた神薙かんなぎの巫女みこ、人々は彼女たちを刀使とじと呼ぶ。

◇

朝、四時頃の東京都特別区の足立区はいつも通りに静かに、人気がない。

爽やかな空気に白い霧がこの街を満ちている。

もしここでゆっくり散歩したら最高の気分になるのだろう。

爽やかな空気を感じながら、この街を静かに堪能できる。何という素晴らしいことなのでしょう。

しかし、今日の朝は少し騒がしいようだ。

ドンーーー！

何か破壊された音は足立区の何ヶ所でも起きた。

異形のもの達はその大きな体でこの街を破壊し続けた……。いや、破壊というよりただ走るだけで街に大いな被害を引きつけた。

オオンンンンー！！

耳鳴りが起こさせるほどの異形の声。

ただ聞いていただけで恐怖そのものを与えられる。

荒魂が来るぞー！！

そして東京都区の江戸橋に完全武装した特別祭祀機動隊の人たちが暴動盾を構えて陣を取り、ムガテみたいな超巨大の異形《荒魂》と対峙する。

彼らはの任務はここで防衛線を築けて、〃あの子達〃の到着するまで時間を稼ぐこと。

しかし、あの巨体は流石に小さいの盾ではどうにもならない。あの巨体が彼らをつっ込んだら、何十人以上の死傷が現れるのだろう。

何せ、あのムガテ形の荒魂は電車が走るみたいな速度で走っている、人の身ではどうにも塞げない。

オオンンンンー！！

もうすぐ怪物と接触する距離で怪物は大きな前身を空に上げて突撃の予備動作を構えた。

衝撃が来るぞ！構えろう！

話が終え、怪物は突撃した。

しかし、衝撃の音が確かに鳴ってきたけど、飛ばされた衝撃がなかった。

あれはー！！？

特別祭祀機動隊の前に〃白髪の小さい女の子〃があのかぶツの体を受け止めた。

ただ〃小さいの刀〃であのかぶツを止めさせた。

「守備手遊撃士はツーマンセルで散開、攻撃手はS装備の到着を待て」

そうしたら、数人の女の子が現れて、怪物の両方に走っていた。

全員は鎌府の制服を着ている鎌府の女子学生。彼女たちこそはこ

の特別祭祀機動隊の主力部隊である。

「抜刀ー！写しー！」

リーダっぽい人の命令を聞いて、女の子達は一斉に腰につけた刀を抜き出し、体が白い光を纏う。

そして怪物の注意が彼女たちに逸し、彼女たちを攻撃し始めた。

凄い……あれは刀使というものか？女子学生しか見えないけど。

盾を構えた一員の一人は見た感想をつける。

確かに彼の言うとおり、外見はただの女の子にしか見えない。けど、彼女たちに宿った力は間違えなく人類の希望である。

お前は新入り？確かに驚いたよ……あの怪物を受け止める力が持ちながら、我々に負けなくらい無駄がない動きである怪物と戦っている。

彼女達はこの機動部隊の主力部隊であり、無駄の動きがなく、手慣れである怪物と戦っている。

ただ力を持ちではなく、技術もちゃんと身につけた。

「S装備到着まであと五秒！」

そう言つて、空が何かをこつちまで飛んでいく。

ドーンー！

そうしたら、巨大の何かがさつき怪物を止めさせた白髪の子の前に落ちた。

しかし、女の子は恐れなくそのものに近づき、剣の柄部分を丸黒の部分に触れさせ、そのものを起動させる。

大きな黒いものが真つ二つに開き、少女の前にあるのは手が入られるくらいの穴が現れた。

「……………」

少女は迷いなく、その穴に手を入れる。

そうしたら、穴から赤い炎が彼女の全身を包み込み。炎と共に、彼女の身から装備みたいなものがついている。

あれはストームアーマーと呼ばれた特殊戦闘用スーツ。通称S装備。

効果は刀使の様々な能力を向上させる鎧。ゲームの言語を言うと、

いわゆるパワードスーツ。

しかし、そのスーツには時間制限がある。

時間が切れたら、そのスーツは自動消滅する。

「糸見さん……！気を付けて！荒魂はそちらに向かっています！」

チームのメンバーが大声で少女に警告する。

「大丈夫……。」

ただ一声で少女は一閃で突っ込んできた荒魂の角を切り落とし、そして横切で荒魂の口みたいのものを切り裂く。

しかし、少女の攻勢はまだ終わってない、むしろ始まるどころ。

彼女は早い速度を繰り返し、荒魂の長い体を次々と切り裂いていく、これは完全に荒魂を払うための行為である。

特にこの荒魂は中BOSレベルの種類、決して油断してはならない相手だ。

綺麗な高速連閃と共に、少女は巨大の荒魂をバラバラしていく。

「……ッ！」

そして最後の一閃。彼女は地面に降りて、体勢を立て直し、荒魂の残骸に向かう。

「終了……。」

相手が完全沈黙を確認したら、少女は刀を鞘に収まり……写しを解除した。

「流石糸見さん！剣筋は相変わらず凄いだね。」

「当然だ！彼女は鎌府最強の刀使だもん！今年の御前試合も出るのだろう。」

「ただの中等部一年生で鎌府代表か。今年から次世代の時代になったわい（#関西弁）。」

荒魂を見事に討伐した鎌府の女子達はさつき戦闘の緊張を解けて楽しく白髪の少女を中心に喋る。

これは外人から見れば、彼女達がさつき怪物と戦うその光景はまるで嘘みたい。

「ほら、もう喋らないで。さつきと撤収するぞ！糸見さん、今回もよくやってくれた。高津学長もきつと喜んでるよ。」

「うん。」

軽くリーダーみたいの人に応答して、白髪少女 糸見沙耶香いとみさやかは携帯を持ち出して、その携帯につけた猫形のぬいぐるみをじっと見つめる。あれはある人に送られた守り。沙耶香をここまで支えてくれたもの。

これを見てみると、あのとときの感触が目の前にいるみたい。

体が……熱い。でも……嫌いではない。

「やっぱりあの人と会いたいもんね。糸見さんは。」

「……………」

沙耶香に近づいた女の子は優しい雰囲気彼女と会話する。

「あれから、もう一年以上に経っているからね。あの方は今頃何しているだろう……………」

懐かしい顔で、女の子はあのときを思い返す。

一年前に彼は糸見沙耶香を助けるために三人の刀使を倒した。最後は鎮圧されたが、今でも彼は沙耶香を守り続けている。

「……………」

沙耶香は何も答えて来ない。想定内のことだ。

彼女はほとんど無口で、表情変化もほとんどない人だ。前回彼女の表情変化を見られるのがちょうど一年前のあの件だ。

「そういえば、糸見さんは御前試合に出る予定ですよ？ 私は出場ができないのは残念ですけど……糸見さんのことを観客席で応援します！」

「……………」

相変わらずの無口。

「……………あの人も出るのかもしれないよ。ぬいぐるみの持ち主。」

「……………っ！」

名前を出していないが、誰のことを指したのを察した沙耶香から僅かな反応を感じ取れた。

やはり、唯一彼女の心を動かすのはあの人しかない。

あの事件以来、自分は積極的に彼女の世話をしていた。しかし、全く一つの反応が返ってこない。

ただあの人のことに少しでも関わったら、凄い反応をしてくれる。そう、今みたいにぬいぐるみを握り締めて赤い顔になった沙耶香。もしかして彼は糸見さんの初恋の人かな……？

「……そこでモダモダしないで、撤収だ！」

会話が長すぎたのか、リーダーに怒られた……。

「行こう、糸見さん。」

「うん。」

携帯をポケットの中に収まり、沙耶香は隣の女の子と一緒に早く現場から撤収した。

「糸見さん、さっきの話題だが……」

「頑張る……」

撤収しながら、女の子はさっきの話題を続けたいと思ったときに沙耶香の方から話をかけた。

「え……」

「御前試合は頑張る……」

沙耶香の頬は少し赤くなつたように見える。

うわぁ……恋だわ。間違えなく。

女の直感は彼女にそう伝えた。ここまで照れてしまった沙耶香は実に可愛くて抱きしめたい。

そんな可愛い糸見さんを作るのがあの人。つまり恋だね。

「うん、応援しますから。優勝を目指そうね。」

「うん。」

これは沙耶香が初めて誰かのために頑張る。それ以前はただ命令に従って動いている人形だ。

◇

「糸見さん、この力で大丈夫？」

鎌府に戻り、沙耶香と女の子二人は自室の風呂場でお互いの背中を流す。

「うん、大丈夫。」

今頃は朝五時のところ。荒魂を討伐報告を済ませた後、そろそろこんな時間帯になる。

そして女の子は荒魂討伐でかいた汗を流すために糸見沙耶香と一緒に風呂にした。

二人はいつも一緒に仲良く毎日を過ごした。沙耶香の方は特に何も考えていなかったが、女の子の方は自分と沙耶香が仲良い友達だと思っっている。

最初は彼女に友達意識を持ってなかった。だって、彼女は自分とまるで別の世界の人間だ。

学長に特別重視されたはともかく、その剣筋は鎌府の中で一番早く綺麗な剣だ。普通にいられる自分は本来彼女とそこまで関わるべきじゃなかった……。

けど一年前のあの件のきっかけで彼女とこうして触れ合うことができた。

本当にあの人に感謝しなければならぬ。こうして楽しい時間を過ごせるのは……。

「糸見さんの肌はつるつるで綺麗だね。少し羨ましいです。」

少女は沙耶香の裸の方へ見る。

「そう……？」

しかし、沙耶香本人は気付いていないらしい。自分がどれほどいい体を持つなのか。

まず糸見沙耶香は美少女の類に入る女子だ。ただ外見だけで、その可愛さが鎌府の一とは過言ではない。

そして雪みたいに綺麗な白髪、雪みたくのつるつるの肌。それと、何より徐々に成長していくこの幼い体！

確かに今は小さいか……小さくても、十分の魅力が伝わってくる！これら全ては普通の女子にとって、悔しい程欲しかったもの。

「うん！だから糸見さんはもつと自分を大事にしてね！でないと、嫁に行くときは行けなくなるよ？」

「……………よくわからないけど、わかった。」

沙耶香の返事を聞いて、女の子は小さく笑う。

「ふふっ……それじゃ、髪も洗っておくね。動いちゃ駄目だよ。」
「うん……。」

そして、二人はこの穏やかな時間をゆっくり過ごす。

「こうしていると、まるで妹ができているみたい。」

「妹?。」

「うん!良かったら、私にお姉ちゃんと呼んで。糸見さんのお姉ちゃんになってあげる。」

女の子は嬉しいそうに彼女の幻想を語る。

糸見沙耶香のような可愛い子が妹できたら、それはもうここまでに生きるの甲斐があった。

「……………」

「あら、今じゃ無理みたい……。でも、私はいつもお姉ちゃん気分だよ!いつか糸見さんが振り返ったら、お姉ちゃんになってあげる!」
女の子は元気そうで語る。

そして少女は再び無口に戻る、それでも基本の反応がある。

「あ、少し目を瞑ってね。お湯で泡を流すから」

「うん。」

パシャー

優しく沙耶香の髪を綺麗にして、女の子は突然ある話題を振り込む。

「糸見さん、私は糸見さんと出会って良かったと思います。こうして一緒にいると、毎日楽しく過ごしました。糸見さんの方はわかんないけど、私は結構こういう生活を楽しんでるよ。」

女の子の話を聞いて、沙耶香は再びあの時の感覚を感じた。

とても暖かくて、痛くて、でも嫌いではない感覚。

私……どうしちゃったのかな?

未知の感覚に沙耶香は戸惑っている。

なんて痛いのに、嫌ではないのだろう……。心がおかしくなる。

「そして、こんな生活を送らせたのはあの人。名前は知らないけど、私は彼を凄く感謝している。いつか会ってその恩を返したい!糸見さんもあの人に会いたいですよう?。」

会いたい？わからない……胸がまた痛くなる。

「……………」

「……………さあ、次は私の番だね！糸見さん、私の背中を任せだぞ。」
沈黙した沙耶香を見て、女の子が急ぎ話題を変える。

そして、自分の背中を沙耶香に見せつける。

「……………」

沙耶香は自分と同じ中学生レベルのつるつる背中を見て、ずっと考えていた。

あの人は自分に暖かい感覚をくれた。彼の話を聞いていると心がおかしくなり、痛くなる。

けど嫌じゃない。嫌じゃないんだ……。

沙耶香は知らなかった……こんな「嬉しい気持ち」を。

「……………多分、会いたい。会って、もう一度話したい……」

沙耶香は小さい声で自分の願望を女の子に伝う。彼女の声から不安定の感覚も伝わって来る。

けど、それは十分だ。

だって、彼女は十分に自分の気持ちを伝わった。

「そう……それが糸見さんの願いなら、私も頑張って彼を見つけ出します。」

「……………なんで……？」

「だって、友人だもん！私は糸見さん……ううん、沙耶香さんのことが好き！」

「……………っ！」

胸がまた絞まる……痛い、暖かい、辛い。三種の感覚が沙耶香の心を襲う。

困惑の表情が沙耶香の顔に通じて示していた。

それを鏡に通じて見ていた女の子は最初慌てたが、すぐ平常心を取り戻して優しく彼女に囁く。

「今は理解しなくてもいい。例えば片思いだとしても、私は沙耶香さんのことを友人として見ているよ。」

「……………わからない。」

「ゆっくりしていいから、沙耶香さん。」

困惑していた彼女の頭を優しく撫でながら、女の子はあることを誓った。

必ず沙耶香をあの人に会わせると、自分だけじゃ沙耶香を救えない。

ならば、彼に任せて沙耶香にもう一度あのと時の笑顔を……！

その後、彼女達は風呂上がり、御前試合の準備を行う。

運命の日 御前試合に至るまでは、あと2日。

第2話：お兄さんとバイト

15月1

春が終わり、夏がもうすぐ始まるこの季節。

美濃関学院は再びこの一大事いちだいじな時期を迎えた。

そんな時期に刀使はともかく、鍛冶科も忙しくなる。

なぜなら、学院内では御前試合のために選抜試合を行っている。

選抜試合とは学院の代表刀使を選抜するためのイベント。つまり学院最強の刀使を決める試合である。

選抜された刀使は最高の名誉と最強という名をもらい、代表として御前試合に出る。

全ての刀使は今日のために自分をビシバシに鍛えて、御刀をいつも以上に手入れしている。

そんな手入れは時おり御刀専門家である鍛冶科の生徒たちに依頼する。

普段学校の行事に一向に向いてない鍛冶科でも、このイベントで御刀の手入れで忙しくなる。

そして、ようやく選抜本日に迎え、鍛冶科のみんなは一息を抜いたところ。

「衛藤えとう、お前は見に行かないのか？大事の試合だぞ。」

鍛冶科三年生の服部達夫はっとりたつおがわざわざ三年生の教室から二年生の教室へやってきた。

まあ、実際二年生と三年生は同じ教師で、お互いは先輩、後輩という関係より同じ仕事仲間のほうが親しい。

そして彼が会話している相手は少数の親友であり、この高等部で最も有名の変人シスコン——衛藤都えとう みやこ。

彼はただ一年生のとき、鍛冶科トップクラスの位に上がる将来有望の人材。同じ刀匠に目指す仲間として、彼はまさに優等生のような存在。

でも、それだけでは彼の名が高等部に響かない。

彼が有名人になったのは一年前、彼が刀使との勝ち目が無い試合に勝利したこと。あの件以来、高等部の刀使も軽く彼に喧嘩を売れない。売ったら、名誉や顔の面子はあのとときの三人のように踏み潰される。そのリスクをわかっていた以上、自然に迷惑をかける人がいない。

そんな人物に、服部は変わらず彼と普通にお喋りする。

「行かない。どうせ、御前試合に出るのは可奈美と舞衣ちゃん二人だけ。それ以外の刀使はあの二人を相手では勝ち目がない。例えば高等部でも（笑）。」

そう言って、都は携帯弄り続ける。

最後の鼻笑いは流石に高等部の刀使たちに失礼すぎる。

「お前、高等部の全刀使達を敵に回すぞ。」

「良いぞ〜！名誉とやらを踏み潰してやる。」

「爽やかな笑顔で怖い話をやめろ！お前、喧嘩が好きなのか？」

「喧嘩を売られたら、叩き潰すというのは世間の常識じゃないですか？」

「お前の常識はやっぱりおかしい……」

再び都の異常と無礼さに頭が痛くなる服部。

彼はとても有能の人材だが、個性的に問題がある。

特に彼はとんでもないシスコンである。妹のためならなんだってやる。……この一年間、たつぷり都という人を知り尽くした服部であつた。

「それより、美炎の方は応援しに行かないのか？彼女と仲がいいだろう？」

「いいんだ。それに彼女に言われたよ。忙しいなら、無理に来なくてもいいって……めっちゃ先輩思いのいい子じゃん！」

「そうだね。馬鹿だけど、結構人思い馬鹿だぜ。あの子を大切にしろよー」

「お前は俺のお父さんか！同じ言葉でも言われた気がする。」

あれは確かに舞衣ちゃんがうちに来たときに、お父さんに言われた

言葉。意味がわかんないけど。

「それより、お前は長江さんの応援しに行かないのか？ 彼氏さんだろ？」

「彼氏じゃねえー！ 俺とふたばはただの友達！ それに彼女は初戦で負けたよ。下手な真似ことをしたら、逆に彼女の精神を傷つける可能性がある。」

あ……確かに彼女のプライドならありえる……。

しかし、初戦で負けたのか……彼女はそんな弱いやつには見えないけど。

「もしかすると、相当やばい相手と出会った？」

「そこまでは詳しくない……ただ安桜と相当戦いたかったらしい。」

つまり、単純に運悪く初戦でということか……。

「なあ、さつきからお前がずっと携帯を弄っているんだが……何しているだ？」

都と会話している途中に、服部は都がずっと携帯を弄りっぱなしという様子を気になって。

普段の彼はそんなに携帯に夢中にならないはず……。

「面接のお知らせを待っている」

「面接？ もしかして、バイトのこと？」

それはちよつと珍しい……。 都は普段そういうのと関わらない人間だと知っている。

それに鍛冶科の仕事だけで、目が回らないくらい忙しいのに、よく余った時間でバイトを……。

「うん、あまり受けたくないが……孝則おじいさんの頼みだから、受けちゃった。」

「何それ？ 誰？」

知らない名前を聞いて、服部は都に聞く。
そうしたら、すぐ後悔した。

「柳瀬グループの社長、柳瀬孝則やなせたかのりさん。舞衣ちゃんのお父さんだよ。」

「あの柳瀬グループの……!? お前、また何かをやらかしたのか!? そ

れとも柳瀬舞衣と付き合ってる?」

服部は驚いた顔で都に聞く。

毎回、彼は都のことで驚かされた。

特に彼は中等部の有名人たちと知り合い。しかも、仲もすごくいい。

ただそれだけで、彼は男子たちからかなりの恨みを買ってしまった。

特に柳瀬のファンでは都という存在は許さない。

「付き合っていないよ!俺と孝則おじいさんはただ数回の面会しか合っていない。詳しいのは執事の柴田さんの方だ!」

「では、なんで彼に頼まれたの!」

「知らん!けど、小さい頃はかなり彼にお世話されたから、その恩を返したい!」

「……………そう。」

都の理由を聞いて、服部は力抜くな目で都を見る。

「服部先輩?なんでそんな目で俺を見るんだ?」

「お前の馬鹿さにどうしようもないと認めたよ……………。無理するなよ、衛藤」

「まるで俺が必ず無理する前提みたいな言い方だね……………まあ、先輩の気遣いはあるがたくいたたくよ。」

それから、二人はいつもの雑談をして、この穏やかな時間をゆっくり過ごしている。

ちなみに、この間の美濃関は授業がない。特に刀使の方は、大体の学生達は選抜試合の方へ参加している。

そして鍛冶科も同じこの日に授業がない。なぜなら、鍛冶科の学生達は昨日までに徹夜して寮に住んでいる刀使たちの御刀を丁寧に手入れしてた。

故に、先生は特別に鍛冶科の子たちに一日の自習をさせた。

「お?美炎からのメールだ!……………可奈美に負けたのか!」

「それは無理もないね……………お前の妹は異常すぎる。」

美炎からのメールが届いて、都は早速メールを開いて読んで見る。

そうしたら、どうやら可奈美との対戦で負けちゃったみたい。
気分も凄く落ち込んでいるように見える。

仕方ない……彼女を慰めよう。

「まあ、落ち込むなよ。岐阜駅近くのデザート屋のスペシャルメ
ニューを奢ってやるから。」という内容を返信する。

そうしたら、すぐ向こうからの着信が鳴ってきた。

「返信が早いな……」

「そうだね……女の子って怖い……」

あの返信速度ではオリンピック選手でもびっくりする速度だろう。

『本当!? あ……でも、今日はちい姉が美濃関へ要件を済ませるため
に来たから、今日は無理かも……』

ちい姉? 確か美炎の幼馴染みの名前だよな……。

全名は瀬戸内智恵さん。彼女は長船の学生みたい。

そして、彼女達は入学した日以来一度も会ってないらしい。

「わかった。それじゃ、ゆっくり彼女と昔話でもして来い! デザ
トの件はあとでいいから」つと返信する。

『わかった。いつか、ちい姉のことを都先輩に紹介するよ! あ
……でも、惚れ惚れしちや駄目だぞ! ちい姉は凄い美人だから! 特
に胸は舞衣より大きい!』

舞衣ちゃんより大きい!? そんな化物がいるのか!

都是全く想像つかなかった。自分の知り合いの中で舞衣の胸は一
番でかいだと認識している。

まさかそれ以上のカップがいるとは……。

今日、都是新しい世界を認識した。

「長船……恐るべし。」

「お前、いきなり何言い出すだ……」

そこで、服部は都の謎の言動にツツコミ。

◇

夜、美濃関学院女子寮――。

選抜試合が終わり、見事優勝した女の子が部屋で誰かと電話している。

彼女の顔を見ると、かなり上機嫌みたい。

ちなみに彼女は御刀の手入れをしながら、誰かと電話をしていた。様子はとても危なっかしいですが、彼女なら問題なさそうだ。

そして今、彼女が電話を通じる相手は彼女のお兄さん。

彼は寮に住んでいないから、毎晩はこうして電話をかける。

「さっきお父さんにちゃんと電話してきたよ。お父さんに凄く心配されて……え!? もう……お兄ちゃんまで不安の声して……私は立派の刀使なんだよ! いくら私でも違う駅に降りないよ!」

そして、向こうに凄く心配されそうな様子。

「そんなの関係ないって? もう……いつもその口調で」

でも、女の子は少し嬉しそうな顔をしている。

もちろん、子供扱いは多少に不満だが……彼に大切されていると思うと心が嬉しくなる。

「え!? 来なくてもいいよ! 恥ずかしいから!」

顔がさらに赤くなって、女の子はとても恥ずかしい反応。

会話内容から推測すれば、多分相手は一緒にいていくのだろう。

昔、遠足のときも勝手についていて自分をお姫様扱いをしている。

そのせいで、クラスメイトに恋バナとかの話に振られた。

確かにお兄ちゃんはかつこよくて、誰よりも頼れる男だけど……流

石、友達の前では恥ずかしい。

「もう……気持ち嬉しいけど、私はもう子供じゃー」

ドンドンー

そんな時、ドアが叩かれた音が響いた。

「可奈美ちゃん。」

「……あつ。ごめん、舞衣ちゃんだ。それじゃ、電話を切るね。」

そう言って、可奈美という女の子は電話を切って、手入れた御刀を鞘に収まる。

鏡の方へ自分の顔を確認すると、

鏡に映った自分の顔は凄く赤くなっている。これもあの人……お兄ちゃんのせいだ。

「……………流石、これじゃ舞衣ちゃんに見せられないよね。」

可奈美は深呼吸して、ひとまず心を落ち着かせる。

完全に落ち着かせたら、いつもの顔で扉を開く。

「舞衣ちゃん、なんの用?」

「可奈美ちゃん、明日の準備はできた?」

扉の前で待っていたのは黒い髪の子。

彼女は可奈美の親友柳瀬舞衣。

パジャマを着た原因なのか、それともいつもより優しい雰囲気を出しているのか……彼女はいつもより可愛く見える。

そして、彼女の言動から親友がちゃんと明日の準備しているかどうかの確認。

「まだ途中。今、お兄ちゃんと電話してて……」

舞衣はちらと部屋の奥へ確認する、その視線に追って、可奈美も自室の方へ見た。

あれは誰かに意図的に雑乱された部屋とも言えるお部屋……服などの衣装が地面で小山みたいな形で畳まれている。

ベットに置いてある明日用の鞆の中でも、数本の木剣が鞆の中に入れようとしている。

一体どこへ行ったら、そんな数の木剣が必要なのだ?普通の人では全く理解できない。

そもそも御前試合は遠足みたいのものじゃない。強いて言うとなだ鎌倉にて2日ほど泊まるだけ。

いくら剣が好きでも、やりすぎだ。

「新幹線のチケットをもらってきただけど、私が預かっておくね……」
部屋の状況を見て、舞衣は苦笑の顔だ。

流石お兄さんがそばにいないと、生活力がゼロの妹。

「うん……お願い……」

同じく、自分の生活力のやばさを自覚している可奈美も弱音を上げた。いつも彼を頼ったばかりに、そばにいないと……駄目駄目な娘に

なっっちゃう。

これは流石にまずいと二人が共感している。
早くお兄ちゃんから卒業しないと……。

「……………あの……………可奈美ちゃん。」

その時、舞衣から話をかけてきた。

きっと他の用もあって、ここに来るのだろう。

「うん……………」

「……………やっぱいい……………ごめんね、お休みなさい。」

「お休み……………」

しかし、彼女が話そうとする途端、彼女の顔が一瞬に何かを迷っている顔だ。

言うか言わないか……………舞衣は珍しく元気なさその顔をしている。

そして、言い出すのをやめようとする舞衣はなんでもない顔で可奈美にお休みてって言ってここから立ち去った。

もちろん、舞衣の異常が気付いた可奈美は何かを言おうとするだが、彼女もその勇気が出せなかった……………。

なんでだろう……………“あの日”から、舞衣ちゃんの心と直視できなくなっっちゃう。

あの日とは四人でデートした日。あの日に舞衣と都が凄く仲良くなっている光景を見ると、時々胸が刺さられたみたいに痛くなる。

前までは全然思わなかったけど……………でも、その日から舞衣と一緒に楽しく笑う彼を見てたら心が痛いのだ。

なんだろう……………この気持ち。

まだ自分の気持ちを気付いてない可奈美は初めて“嫉妬”という気持ちを味わった。

何かを恐れているような……………私は舞衣ちゃんのことを“恐れている”？

「私……………どうしちゃったのかな……………」

◇

「お久しぶりだね、都くん。」

柳瀬グループの本社に辿り着いた都は目の前の男に一礼。

ちなみに都は珍しく黒いスーツを着ている。

「お久しぶりです、孝則おじいさん。あの件以来ですね。」

「礼はいい、私は今仕事が終わったところなので、もう柳瀬社長ではない。」

「わかりました……車も柴田さんがご用意しましたので、そちらへ移動してください」

「相変わらずだね……君は」

そう言つて、二人は黒い高級車に乗る。もちろん、先に柳瀬孝則を載せられた後、都が次に乗車する。

そして、運転手は柴田さん。

「ただ数年ぶりで、もうこんなに大きくなっていたとはね……。流石、成長期と言うべきだろうか……」

今の都の様子を見て、孝則はその感想を拭く。

あのときの幼い顔がなくなつて、身体もあのときより大きくなつた。立派な青年姿に成長した。

「それにしても、珍しく執事服を着ているね。昔は嫌いとか言うばかりに」

「これでも柴田さんのせいだ。」

「おい、聞こえるぞ！小僧。」

「ハハハハ、本当に変わつてないな……君は。あの悪口も久しぶりという感じですね。」

都が変わらないところを見て、孝則は思わず笑う。

何もかも懐かしい。

「俺は昔から特にならなつてない。俺はいつもこの調子で気に食わないやつをぶつ殴るだけだ。」

「おい！旦那様の前にその口ぶりは！」

「彼を許せ。彼と会話しただけでも、私はとても楽しい。」

「はい……」

「フン……」

孝則に止められた柴田さんを見て、都は鼻笑いをした。態度はとても悪いけど、孝則にとってそんな彼こそ舞衣が救われた。

「舞衣のことは、今でもちゃんと守っている？」

「ちゃんと守っているよ。彼女は俺の……大切な妹友だから。」

またその言い訳か……まあ、彼らしいというものもある。

「そうか……舞衣は君のような『フレンド』がいてくれて良かった。君は何かあっても彼女を守ってくれるよね？あの時みたいに」

「当たり前だ。彼女を傷つけるやつは俺が許さない、必ず叩き潰す！」

「……………旦那様……………」

都の言葉を聞いて、顔色が白くなる柴田。

いくらなんでもその用詞はやりすぎだ。……もう少し丁寧にしたほうがいいじゃないかと柴田はそう思う。

「そうか……それじゃ、明日から舞衣の安全を君に託す。あなた以上のボディーカーがこの日本にはいない……いや、執事と言うべきか。」

「そのために柴田さんを？」

「ええ……彼が君のような人材を選んでくれたし。それに君の実力も『あの件』でちゃんと見ていた。」

そう言って、孝則さんは懐かしい目で都を見る。

「あの件」……自分の娘、柳瀬舞衣とその友である衛藤可奈美が誘拐された件。あの件で柳瀬グループはなんにもできなかつた……いや、むしろ動けなかつた。

人質が傷つけられる恐れがある以上、軽く手を出してはいけない。警察も動けないまま誘拐犯たちと交渉していた。

だがその最中、顔が激怒している少年が現れ、ただ一本の木刀を持ってただ一人で誘拐集団に挑発する。

無論、それはあまりにも愚かな行為であった。

もしかすると、彼も傷つけられるかもしれませぬ。彼を止まるやつがいたが、彼に容赦なく叩き倒された。

なんの恐れもなく、怯える表情すらも見えない。彼はそのまま彼を見下す誘拐集団と戦って見事に勝利した。

酷い傷を負ったが……彼はそれほどあの大切な二人を救いたかったのだろ。

その決意に呆れられた私達は何もしなかった……ただ彼が戦った様子をこの目で見ていた。

「……わかりました、この仕事を受けさせていただきます。給料はいらん、あの二人の笑顔が何よりの報酬だ。」

「……やっぱり君は最高の執事だね。給料はちゃんと払ってあげる。彼女の執事としてそばにいさせてくれ」

「旦那様……それは……」

都に頭を伏せて、孝則は誠心誠意に都を依頼する。

それを見て、柴田さんは驚愕の顔を隠せなかった。

「これは柳瀬グループの社長の身分としたではない、一人のお父さんとして君に娘のことを頼みます。」

「……………」

「旦那様……………」

「そう言われなくても、俺は必ず舞衣ちゃんを守る。だから孝則おじいさんは顔を上げてください」

「都くん……………」

顔を上げ、彼は都が決意を満ちていた目を見えた。

あのとぎの目と同じだ……。

「あなたはいいいお父さんだ。その敬意を含めて、俺は柳瀬の執事として、彼女の親友のお兄さんとして必ず守ってみせる！」

その宣言に孝則は自分が見間違えなかったことに喜んでいる。

彼なら、柳瀬舞衣を幸せにするのだろう。

例え彼はその意がないとしても、孝則は自分の娘をただ高校生の都に託した。

第3話：共鳴

鎌倉に出発する日ー。

すぐでも各学校の代表刀使と戦いたくて仕方ない衛藤可奈美は興奮しすぎたせいか……昨日の夜はほとんど寝ていなかった。

それでも彼女は今、元気100%の状態で美濃関の制服を着替える。

どんな相手と戦うのか、どんな剣技を見られるのか、どんな激戦になるのか……彼女は想像するだけで身体がうずうずしちゃう。

「よしー」

鏡の前に可奈美は着替えた自分を見て、満足そうに笑う。

鏡に映った彼女はいつもみたいに可愛い。都シスコの言葉を借りると、最高に犯則レベルの可愛い妹である！

「千鳥、明日はよろしくね。」

制服を着替えた後、可奈美はすぐ自分の御刀千鳥を手に持って、腰あたりにつけた部分に御刀を固定する。

これは御刀を便利に連れ出すための装備。正式の名前はないが……これがあると、手で持たなくて済んだ。

そして、可奈美が使うその部分は兄が作ったもの。一般品より頑丈で、動きやすい点は多くの刀使からの好評こうひょうがあったらしい。

「服部先輩以外に俺の作品を超えるやつがない！精々悔しそうな顔で使え！」つと……彼を嫌がる刀使全員に偉そうに言ってたような……。

とにかく、これは美濃関随一のものだ。可奈美はこれをつけるたびに大切にするように撫でる。

ちなみに、御前試合は明日から始まる。今日はただ鎌倉へ行つて、その旅館に泊まる予定です。

「さて、そろそろ行くこうか」

準備が終わり、可奈美が部屋から出て、そのまま出発した。



「ん？何か騒がしいな……」

駅に到着してきた可奈美は自分の友達が騒いでいる姿を見て近付こうとした。

「みんなくどうしたーえっ？」

そうしたら、彼女はまず友達が囲んでいる黒い執事服の紫髪の男を目に付けた。

「ん？おはよう、可奈美。」

「お、お兄ちゃんー!?」

彼女はすぐその人の正体を知り、名前もつい口に漏れ出した。

しかし、そこはとんでもないミスであった……。

「お兄ちゃんって……可奈美のお兄さんなの!？」

「うわあ……イケメン！可奈美がこんなかつこいいお兄さんがいるとはー!」

「美炎、なんでさつき言わなかったの!」

「……」

友達たちにこの人が可奈美のお兄さんと知られて、この場にいる美炎と舞衣以外の女の子が凄く盛り上がっている。

「え!?ちよつ……!」

友達が盛り上がった様子を見て、可奈美の顔は赤くなっていく。

本来可奈美はできた新しい友達にお兄ちゃん存在を知られたくないつもりだ。だって凄く恥ずかしいもん!

「ねえねえ、可奈美って昔はどんな様子なの?やっぱりいつも剣を振るよね?」

「剣術馬鹿だしくそういえば、可奈美が大好きなものは?それとも好きなのはお兄さんの方?」

「そこは一番ドキドキする問題!禁断の兄妹愛!」

「三人共……!!」

そこで友達にからかわれる可奈美の恥ずかしい姿に尊く感じた都はこの仕事を受けたことが良かったと思っていた。

「賑やかな友達だな。」

そうしたら、彼は無関係の口調でこの尊い光景を見守る。できれば、写真も撮りたい。

「無関係の口にしないでください」

「あはは……」

舞衣と美炎はそれぞれの反応に返す。

それから数分が経ち。ようやく落ち着いたところに可奈美は拗ねた顔で、頭が都に撫でられた。

無論、顔も赤くて可愛い。

「どう？落ち着いた？」

「全然……」

「まあ、とりあえず俺の妹をからかうのがやめよう？可愛すぎで心臓が止まりそうだから」

「お兄ちゃん……!」

都の言動に抗議する可奈美ですが、彼に撫でられたらかなり落ち着いた様子。

「予想より落ちたわね……可奈美は……」

「写真撮ってもいい？可奈美がお兄さんに撫でられたその顔は尊いすぎで我慢できない!」

「こんな可奈美は初めて見たのかも……」

三人の名前さえも知らない友人がそれぞれの反応を示す。彼女達はいつも自分たちに見せられない可奈美の姿にドキドキさせられた。

この時期に限って、可奈美は凄く乙女ぽい。

「うう……恥ずかしい。友達に妹を愛する兄がいることがバレた。」

「ふふ、いいじゃない？事実だし。それより俺たちは時間通りに来たから。早くお別れを済ませよ。」

そう言い、可奈美の頭から手を離れて、都が柴田の方へ荷物整理の準備をする。

「流石、お兄さんだね。時間の整理はしっかりしています。私も手伝います。」

舞衣も時間を確認した後、彼に手伝おうと彼の後ろについていく。

「あ、そういえば、はしやぎすぎで全然時間が気付かなかった……」

「可奈美！明日は必ず応援しに行くから」

「頑張ってるね！」

「……うん！」

反応が少し遅れたのか、可奈美は友達に強く頷く。

「優勝……」

「え？」

そして、可奈美を見送りに来た一人の美炎が笑顔で拳を可奈美の前に伸ばした。

「優勝してきてよね。私に勝ったんだから。あと……楽しんできて」

その顔はちつとも可奈美に負けて落ち込む様子ではなく。むしろ、爽やかな気分で自分の親友を心の底から応援し、彼女を見送るように見える。

「……うん。楽しんでくる！」

そんな美炎に応援されて、さつき恥ずかしい感覚が不思議となくなった。

「私も応援のみんなと一緒に、このあと鎌倉に向う。一応は補差だしね。あ、だからって、私の出番とか作ったら許さないから！」

「わかった！頑張る！あと、帰ってきたらまたやろうね。立ち会い！美炎ちゃんとの試合……準決勝、凄くわくわくした！」

「とても凄かった……お兄ちゃんみたいに、流派に縛られない動きが突然飛び出してきて！どこにこんな技の引き出しがあるんだろう……！」

美炎は美濃関の中でトップクラスの強さが持っている。もし彼女の集中力があそこで途切れなかったら……選抜試合での対決は本当にやばかった。

「……っ！って、照れちゃうん、じゃん……！あーもうわかった！じゃあ再戦の約束、しよう！」

そしてこの一年間、舞衣以外に彼女は可奈美のもう一人の親友となった。

ライブルであり、親友でもある。

そんな彼女に祝福されて、可奈美はとても嬉しかった。

「うん、約束だよー!」

お互いの拳をぶつかって、二人は再戦の約束を誓った。

この後、可奈美達は新幹線に乗って鎌倉へ向かった。

◇

「え!?お兄ちゃんは舞衣ちゃんの執事に!」

新幹線の車内で都が可奈美に自分がなんてここにいるのか説明する。

ちなみに舞衣は事前に知っていた。それでも彼女は都にお嬢様扱いされたことを恥ずかしている。

いつもより優しかった彼に舞衣はいつもよりドキドキする。

「うん、これは利益が十分にあるバイトだ。給料も多いし、お前たちと一緒にいられる。」

「そうか……お兄ちゃんはいつものお兄ちゃんだよかった。突然執事服を着て、びっくりしたよ!」

「俺はいつも俺のままだ。ただ仕事のために舞衣ちゃんのことをお嬢様と呼ぶわ」

「お嬢……!」

聞き慣れない呼び方が耳に入り、舞衣の顔がさらに赤くなった。本当にどうしようもなく可愛い人だね。

「舞衣ちゃん、顔が真っ赤になってて凄く可愛い!お兄ちゃんもっと呼んで!」

「おう!」

「もう〜!二人共ツ!!」

そして、ようやく恥ずかしさに耐えられない舞衣は二人にやめさせてほしいと願った。

「おおお。」

いつも三人のパターンに、都はたつぷりこの時間を楽しんでいた。これは彼にとつて替えようがない大切の日常。

この二人と一緒にいるだけで、彼はもう一生の幸福を感じた。例えば世界が滅んでも、この二人と一緒になら悔いがないだろう。

「そういえば、この弁当はお兄ちゃんを作ったもの?」

「うん。でも昼はまだ早いから、食べちゃ駄目よ。」

「……わかったよ!」

可奈美がお弁当を食べたい欲望が顔に示し、都が心痛く彼女を止めようとした。

正直、可奈美が毎回何か欲しいという顔が現れた時、それを見たシスコンたる都がついそれを叶えたくなくなっちゃう悪い癖がある。

だって世界一番可愛い妹の願う顔を見て、それを実現しない兄はいない!

しかし、甘やかしすぎないようにも彼女の成長にもなれる!故に妹のために都は頑張つてシスコンの一面を抑える。

「……可奈美ちゃん、良かったらこれを」

「舞衣ちゃんのクッキー!ありがとう!」

可奈美が都に断られたそのとき、舞衣は自製のクッキーを持ち出した。

可奈美は嬉しそうな笑顔で舞衣のクッキーをもらった。

「舞衣お嬢様、可奈美に甘やかし過ぎ!……」

「お兄さんだけに言われたくないけど……」

「美味しい!」

舞衣のクッキーを早速食べ始めた可奈美はすぐその感想をつく。

おい、俺の料理と同じレベルの反応かよ。

「良かった。昨日が緊張でなかなか寝付けなくて、気が付いたら作っちゃった。」

「夜に? (食べながら)」

「うん。小麦粉を振ったり、記事を伸したり、オーブンで焼けていくと落ち着くんだ。」

「舞衣ちゃ……お嬢様は相変わらず嫁力が高いな……」

都は本気にそう思っている。彼女以上に嫁力が高い女子がいない。少なくとも、料理ができる優しい彼女は誰でも夢見る理想の嫁！しかも、胸もでかい！

いや、そこはポイントではない……貧乳でも十分魅力がある。そう！可奈美の胸は小さいけど、大好き！

そこは救いがたいシンスコン都が保証する！反対するやつは問答無用叩き潰す！

でも、舞衣と幸せになるかどうかは柳瀬グループの意思と関係ない。例え彼女はお嬢様ではないとしても普通の幸せも理想の一つだ。そう思うと、都が心の中で舞衣のその身分と身体と関係なく彼女を愛するやつの出現を祈る。

都は彼女を幸せにしたい。

「ありがとう。でも、お兄さんも結構高いと思うよ？その嫁力。」

「そうかな？」

「学食の料理よりうまい料理は流石に高級レストラン以外では見つからないと思うよ。」

「わかる……！私もついお兄ちゃんの料理に魅了されていて他の料理では満足できなくなつたよ。……呪い？」

「失礼な！俺はただ可奈美のために腕を上げるだけだ。」

「そういえば、お兄さんの料理は柴田さん……」

「キツかった……あの鬼めえ！」

「あはは……」

嫌な思いを思い返し、都は辛い顔をする。

それを見て、舞衣は苦笑している。柴田さんはかなり厳しい人……特に都に対して。

おそらく、都を次期任執事として育てようと思っていたのだろう。それで都の料理腕もかなり上げた。

「鎌倉に着くのがあと二時間くらい？（また食べている）」

「うん、新横浜の乗り換えだよ。」

スマホで確認したあと、舞衣はそう答えた。

「折神家で御前試合か！楽しみだな！」

「可奈美ちゃんは緊張より楽しみなんだね。」

「だって色んな剣術が見られるんだよ！お兄ちゃんもそう思うでしょう？」

「別に……俺はただ執事の身分でお前たちと付き合ってるだけだ。お前が楽しめるなら、俺はそれでいい。」

明るく顔で可奈美に向う。見た目はいつもの都だが、可奈美から見たら、都はまだ昔のような剣術への熱情が取り戻せない。

小さい頃のお兄ちゃんはある時期に鹿島新当流を興味津々学んでいたのに、今のお兄ちゃんはその熱情さえも失った。

「……………」

「まあまあ、鎌倉の観光地点も多くて、降りたら一緒に歩こう？」

「そうだね。そうだ、またデートしよう！三人で！」

「俺は執事だが……………」

「そこは気にしない気にしない。舞衣ちゃんも何か話しあげて」

「私もお兄さんとデートしたいです……駄目でしょうか？」

おい、そこはズルいぞ！照れた顔で求めるんじゃない！つい甘やかしちゃうじゃないか！

「お兄ちゃんとのデートも楽しみ！」

「私も。」

……………だからそんな表情で求めんな！本当に甘やかしちゃうぞ！

「柴田さんや孝則おじいさんにバレたら、殺されそう……………」

けど、最後に都が二人の甘い要求に負けた。

「やったー！」

「ではどこから観光するのが調べよう」

そう言って、舞衣はスマホで調べる。

美濃関に入った日から都はいつも二人にそうされて、楽しく過ごした。

まあ、二人はそれがいいと思えるなら、それがいいのですが……彼女の周りには異性は俺しかないみたいだ。

ん？待て……これってまずくない？彼女達の彼氏はどうやって探すの？

可奈美達の未来を少し心配となった都。しかし、彼が気付かなかつたのは、あの二人がどんな感情で自分と向き合うのか……そもそも三人はまだ学生で、その感情すらも気付いていない。

「でも、やっぱり先に行きたいのは折神家！」

「そうだね、先に道を探すのも明日を備えるため。」

「折神家か……確かに権力では日本首相と同じレベルの古い家だよね。」

「うん、当主の折神紫様も刀剣管理局の局長であり、私達五箇伝を管理しているみたい。」

「つまり大物だね……」

都はあまりそういう地位が高いやつが好かん。でも、羽島学長みたいないい人なら許せる。

「うん、彼女は20年前の大英雄。御刀を手にすれば、今でも最強の刀使という噂だよ。」

「最強か……」

「二人共？」

最強という名を口に繰り返してた衛藤兄妹を見て、舞衣は少し嫌な予感をしてきた……。

「悪い、最強という名を聞いて身体がつい反応しちゃった。」

「私も。」

「………紫様に喧嘩を売っちゃ駄目だよ。」

「………」

「本当に喧嘩を売ってる気!?!」

一瞬黙った衛藤兄妹を見て、舞衣は呆れる表情になった。けど、これも仕方ないことだ。

この兄妹二人は美奈都の子供。例え都が剣への熱情が失っても、最強という名を聞いてつい身体が反応する。

それに小さい頃から、都はずっと信じていた。

自分の母が一番強いと……。

◇

「ひゃあ、おつきい〜！」

鎌倉へ到着したあと、可奈美三人達はすぐ折神家に到着した。

大きな門が構えられた屋敷の前に、三人は立っていた。建物は由緒正しき日本の武家屋敷という造りで、日本に生まれた都はそれを日本での権力の象徴みたいなものだと示した。

「ここが折神家……御刀の管理を国から一任されてるお家だよね。」

「流石権力者の家だよね……これくらいは嫌くらいに普通よ。」

「その話は決して親衛隊の前に言っちゃ駄目だよ！」

言葉が毒に入れた都に舞衣は丁寧に警告する。

そうしたら、都はただ「はい、舞衣お嬢様。」と答えた。

その権力者への嫌味は長い付き合いの舞衣はよくわかっているけど、今はできる限り彼に我慢してほしい。

「……………」

「どうしたの？可奈美。」

「可奈美ちゃん？」

その時、可奈美の視線が扉から道の方へ見る。その視線を追うと、そこには一人の少女が少し離れた位置に立っていることに気付いた。

「あの制服は平城学館へいじょうがっかんの？」

舞衣が彼女の制服を見ながら呟く。

緑を基調とした丈がやや長い制服、あれは平城学館の制服の特徴である。

制服の外観では都が好きそうなタイプ。やっぱり日本出身の人は大和撫子みたいな風格が好き。

そういえば、前から学長から聞いた話から、あそこの学長は大和撫子の人。そうなれば、彼女は悪い人ではない！という特殊偏見を持っている都である。

ちなみに平城学館は奈良県にいる五箇伝の一つ訓練学校。今回の御前試合の出場校の一つだ。彼女も可奈美や舞衣と同様に御刀を持っているだとすると、出場するかもしれない相手だ。

「……………」

腰まで下ろした烏の濡れ羽色とも呼ぶべき黒い髪に、端正な顔立ちと感情を現していない表情。冷静で理知的な雰囲気少女。彼女を見て、都は彼女のことを何処かて見たような感じ。けど、思いつけない。

そして、彼女は無言でこっちに歩いてきた。

「ね、ねえ！　あなたも明日の試合に出るの!？」

「……………」

でも、彼女を無視した。

そんな態度に都はすげえイライラする。

良くも、俺の妹を無視しようなんて……………！いい度胸だ！

シスコンとして、妹が無視される程度は許さない。

「おい！おま……………！」

キイイイイ——

都はあの平城の学生に喧嘩を売ると思っている一瞬、耳障りでよく響く音が脳を反応させた。その場にいた舞衣を除く三人はそれを感じた。

「……………！」

「……………！」

「……………！」

平城学館の少女はすぐ振り向き、御刀の柄を右手で握り、抜刀の構えを取ったのだ。それに一瞬遅れて可奈美も少女と同じように振り向き、抜刀しようとする。

そして、都も反射的に柳生新陰流無手型の構えを取った。

「……………！」

三人共の行動は反射的なものだった上に、それ以上のおかしな出来事もなかった……………あの音以外に何も起きなかったのだ。

平城学館の少女は軽く可奈美と都の方へ見て、構えを解く。そして、何事もなかったかのように立ち去った。

「どうしたの？可奈美ちゃん、お兄さん？」

舞衣は何も感じなかったのか、それでも彼女二人の異常の行動に尋ねる。

きつと何かあったのだろう。

「ううん、なんでもない。」

「ええ、どうやら気のせいのようなだ。さあ、行きましよう。舞衣お嬢様。」

二人は同時に適当に誤魔化し、都が二人を宿の方へ連れて行く。しかし、さっきの現象で都の心中に不安と混乱が生まれていく。

なんだろう……変な感じ。

それに……それを反応するのは俺一人じゃなかった。可奈美とあの見覚えがありそうな少女。

彼女達は自分と「同じ現象を感じた」のは間違えない。なら……共通点はなんだろう？なんで「刀使でもない俺でも感じたの」？

「今回の御前試合は何か起きそうだ」。

不安の勘でそう推測する都は結構当たりそう。

そうなる前に、ちゃんと準備をしないと……。

第4話：心の距離

夜――

「んんん!!」

温泉の中、可奈美は身体を伸ばし、気持ちがいい声を漏らした。今、彼女は親友の舞衣と共に、この広い温泉風呂場を使っている。そして可奈美は先にお湯に入り、この気持ちがいいお湯を堪能している。

「いいお湯だね、流石折神家!」

舞衣に向かって、可奈美は直接の感想をつく。

「そうだね、お兄さんからもいい評価も出たよ。民間用なのかな?」

可奈美たちが使ったのは折神家に所属した民間用旅館の温泉風呂場。

ここでの施設はどれも豪華そうに見える。

この風呂場もとても広くて、露天風呂の景色とお湯もとても良い。普段こういう豪華そうなところが嫌いな都さえも珍しくいい評価をつけた。

ちなみに、舞衣は髪をすっかり手入れしている。綺麗な黒い髪の保養は彼女にとって毎日の課題。

小さい頃から髪が綺麗だと都に褒められたことがある。だから舞衣は自分の髪を大事にしている。

「多分ね、お兄ちゃんも平民風が好きだから。それより、舞衣ちゃん。背中を洗ってあげようか。」

突然思ってしまったことなのか、可奈美は自分の親友の背中を洗ってあげたいという欲望が出ていた。

そして、彼女は温かいお湯から起きて、舞衣のところへ歩く。

「……えっ!?で、でも……」

「いいからいいから。えい!行くよ!」

早速、舞衣の体に纏うタオルを強引に引っ張って、可奈美は舞衣の背中を洗い始めた。

「~~~~!!」

もちろん、親友に背中を洗われるのがよほど恥ずかしいことだ。

それでも、舞衣はそんな可奈美を止めなかった。彼女は好意的に自分の背中を洗ってくれたから。

このとても仲良くする光景は誰が見ても、尊いと感じるのだろう。

◇

「お待ちしております。舞衣様と可奈美様」

しばらくの時間が立ち、可奈美達がお風呂から上がり、この旅館の浴衣姿で部屋に戻った時、目の前に執事姿の都が正座で二人を迎える。

「うん、ただいま。お兄さん」

「可奈美様って……恥ずかしいな」

仕事に慣れたのか、都はどんどん執事っぽく見える。

そして、その様付けの呼び方に恥ずかしがっているのは平民風情の可奈美だった。

「照れてた可奈美様も最高に可愛かったので、写真を取らせてください。100枚内で収まります。」

「あ……元のお兄ちゃんだ。」

「例え執事モードでも可奈美ちゃんのことを夢中する点は変わらないですね。」

相変わらずシスコンの極みを貫く都を見て、二人は少し安心した。

「それより、二人共の浴衣姿は凄く似合っていますよ。」

「うん、ありがとう。」

「お兄ちゃんは着ないの？確か、お兄ちゃんは先に風呂上がったところだったよな？熱くないの？」

都の執事服姿を見て、可奈美はその暑さを感じる。

「もちろん暑いけど……。柳瀬家の教訓は俺の体を縛っておりま
す。主人の前にだらだら格好は厳禁だ。」

そう言つて、僅かに都の表情から嫌そうに見える。

彼の心はいつの間に柴田さんが作つた教訓にすっかり刻まれた。

「それじゃ、これは命令です。お兄さんも浴衣を着替えて。暑そう
なお兄さんを見て、こつちも心配です。」

「浴衣姿のお兄ちゃんか……。見たい！」

「……。わかりました。舞衣様のご命令と可奈美様のご希望なら従
います。……。ありがとうございます、舞衣様。」

感謝を言い残して、都は立ち上がり。すぐ部屋から出ていた。

彼もこの暑そうな服を一刻も早く脱ぎたいなんだろう。

それから、しばらくの時間を経ち。

同じく浴衣姿の都が二人の元に戻っていた。

「お兄ちゃん、格好いい！」

「うん、凄く似合っていますよ。お兄さん」

「お褒めいただき光栄です。」

二人に褒められて、少し照れた都。

けどその様子は長く続けなく、彼はすぐ仕事の姿に戻った。

「それより、さつき着替える途中に二人の夕食も用意しました。一
部は俺の手製なので、思う存分楽しんでください」

二回の拍手をして、すぐ旅館の人達が次々に部屋に入り、料理を
テーブルの上に乗る。

この様子はまるで都がこの旅館の経営者で、大事の客様たちをご招
待している姿である。

「お兄さん……。これは？」

それを見て、流石に舞衣も呆れられた。

ちなみに、可奈美も同じくこのような異様に呆れられた。

「俺の弟子みたいの方達でございます。浴衣着替えた後、二人に自
分の手料理を食べさせたいと思つて、厨房の方へ行きました。そこで
いつの間に手料理を振る舞いて、彼らから弟子入りと求められた。」

「……………えっ？」

「…………お兄ちゃんって、たまたま理解不能の行動をするのよね。そういうば、毎回はそうだった……」

都の異状さに何度でも見た彼女達ですが、今でもその異状さに慣れてない。

「これも大事の二人のためです。」

そして、その異状の原動力はこの二人からです。都はいつも彼女たちのために全力を尽くす覚悟が持っている。

◇

「食べた、食べた。」

食事が終わり、可奈美はお腹をポンポンと叩く。

その様子はこの年頃の少女がすることには見えない。それでも凄く可愛い。

「舞衣様、これをどうぞ。」

「ありがとう、お兄さん。」

舞衣も食事を終わり、都は綺麗なハンカチを彼女に渡す。

結局、料理が凄く美味しくて全然手が止められなかった。これも都の指示の下で作られた料理が原因なのかな。

「お兄ちゃんはどうして本物の執事に見えたね。このまま舞衣ちゃんの専属執事にする？」

「可奈美ちゃん……!?!」

親友から意外の発言に顔が赤くなった舞衣。彼女の心の中も少しあんな未来を期待している。

「いいえ、今回の仕事が終わったらやめます。俺は二人の専属刀匠を目指している。いつかお前達の役に立ちたい。」

「お兄さん……／お兄ちゃん……」

だが、都はその理由で断った。

それを聞いた可奈美は少し心がほっとする。

彼はどんなときでも彼女たちのことを最優先考えている。

例え彼の才能が世間に期待されても、その才能が二人のために使う。これは衛藤 都という人間だ。

「ですから、今夜は御刀の手入れをさせていただきたい。特に舞衣様の孫六兼元^{まじろくかねもと}。」

「わかった、しばらくお兄さんに預かっておくね。」

「私は？」

「可奈美様なら結構です。毎日丁寧に千鳥を手入れする可奈美様^{剣の狂人}は俺がその御刀を手入れの必要がない。」

「え〜!! 私は千鳥をお兄ちゃんに手入れさせてほしいなのに!」

ムツという顔をして、拗ねている可奈美は実に可愛い。

けど、御刀は過度の手入れしちやいけない。これは刀匠をやっている人の禁忌だから。

「ふふっ……今回は諦めよう、可奈美ちゃん。」

「ムツ〜」

「……それじゃあ、御前試合が終わったら、手入れしてあげましょう。」

「本当!? やった!」

そして、つい可奈美を甘やかす都に舞衣は苦笑する。結局この人は一番可奈美を甘やかしている。

「……ねえ、可奈美ちゃん。明日の試合、緊張している？」

「ん? もちろん緊張しているよ。だって色んな強者と戦えるのよ!」

「ふふっ……可奈美ちゃんらしいの答えだね。でも私はちよつと不安かも、明日は刀での試合なのかな。もし、写しが失敗しちゃったらどうしよう。」

舞衣は凄く不安そうな顔を示していた。

この子は時々弱き部分を信頼できる相手しか見せられない。

全く、仕方ない妹友だ。

「そんな心配はごいけません、舞衣様。俺はずっとあなた様の剣を見ているんですから、あなた様の強さが存分に刻んでおります。」

「お兄さん……」

そう、あの居合はあなたから学んだ技だ。あれがないと、今の俺がない。居合は強い、二回も居合のおかげで救われた。

けど俺が学んだのは心がない偽技。あなたのような本物と比べられない。居合の対決していけば、例えば全集中を使っても勝てないだろう。

だから柳瀬舞衣は強い。俺より強い。

「あなたは強い。俺の知り合いの中で三番目強い。ちなみに一番はお母さん、そこは譲れません。ですが、今ではあなたが二番目強いのです。」

「……………」

「俺はそう思うのです。」

都は意志を舞衣に強く示す。

彼女に理解させたい、彼女が持つ強さは本物だと。

「私もだよ、舞衣ちゃん。私はずっと舞衣ちゃんを頼ったばかりに、ずっと舞衣ちゃんの剣が好き。だから明日は舞衣ちゃんと戦いたい。」

「可奈美ちゃん……」

「お兄ちゃん、ここお留守してもいい？ 私は庭で舞衣ちゃんと写しの練習を」

そう言って、可奈美は自分の御刀を取って立ちました。

「今から？」

「うん。」

肯定の答えを出して、可奈美の目から彼女の本気を感じる。

「わかった。ここは俺一人に任せてください。食器も俺が片付ける。」

「行こう、舞衣ちゃん。」

「……………うん！」

多少の迷いがあるが、自分の親友から差し伸ばした手に舞衣は接する。

そして、同じく自分の御刀を持ち出し、二人はともに庭の方に向

かった。

「このあとのことは可奈美に任せよう。さて、この大量の皿を片づけとするか!」

一人残された都は三人分の食器の片付けを始めた。

◇

「ん?」

宿が用意した布団から目を覚まし、都は携帯の振動で起こされた。

「誰だ…この時間は。」

現在時刻は深夜の23時。明日の試合のことを考えるともう就寝しておくべき時間なのに、この時間で誰か電話をかけてくる。

本来、ここでは怒るべきところだったが、都の連絡先は自分がお気に入り人間しか登録していないので、彼は特に怒っていない。

画面に表示されている名前を見て、わずか残っている眠い気は一瞬消え去った。発信者が舞衣だからである。

「え?舞衣ちゃんから!」

発信者は舞衣だと知り、都は慌てて電話を出す。

例えこの時間で電話がかけられた事態は異状のことだが、それでも都は電話を出す。

「舞衣ちゃん!?どうした!」

執事としての冷静さを失い、都は元の口調に戻った。

「よかった、お兄さんはちゃんと起きてたんだね。夜遅くにごめんね。ちよつと話があつて……。今、お兄さんの部屋に行ってもいい?」

「俺の部屋?相談があつたら構わないが……。」

問題なのはこの時間帯に女子中学生が男の部屋に来る行為である。少し不健全……な。

『わかった。じゃあ、今から行くね。』

それだけ言って通話が切れた。そして都は深呼吸して、携帯をテーブルの上に置く。

そうしたら、彼は急ぎに着換え始める。まず明日用のスーツを着替えて、ネクタイを締める。さつき着ていた浴衣をしばらく鞆の中に収まり、舞衣の目の届かない場所に置く。

無意識に都は主人の前にだらだらしないという教訓を守ろうとした。

数十分後。扉が軽く叩かれた。

「し、失礼します。入る……よ？」

「ええ、どうぞ。」

扉が開き、そこにいるのはさつきと同じ浴衣姿の舞衣だった。

ただ食事のときと違い、何かいい匂いを漂ってきた。恐らく、さつきはお入浴のところかな。

「お兄さん、なんてまたその格好を？熱くないですか？」

舞衣は意外そうな顔で都を見る。

確かにこの姿ではこの天気で流石に寝れない暑さだ。

「……………俺に聞くな。体が勝手に馴染んできたんだよ！悔しいけど！」

「ええ…………？」

都の反応にどう反応するのがわからない舞衣である。

「…………それより、舞衣様の方こそ、その格好じゃ男の部屋にいらっしやるのは少し危機感が足りません。」

「え？でもさつきもその格好で……」

都に指摘された舞衣は視線を下に向け、今の自分の服装を確認する。舞衣が今身に付けているのはさつき食事のときも使うこの旅館の浴衣だ。浴衣自体はおかしくはないが、問題なのは舞衣のその成熟した身体である。

その浴衣さえも隠しきれない身体の曲線は男に無限の幻想を与えられる魅力がある。この浴衣の下に隠すのは乙女……成熟した大人の身体。それを気にしない男がない。

「これはこれ、それはそれ。ひとまず相手は俺で良かった……ただ、

その格好は俺以外の男性に示さないことをお約束していただきたい。
ご自身の安全のためにも。」

「わ、わかった／＼／＼／＼」

都の警告を聞いて、舞衣は恥ずかしいそうな顔で頷く。きつと、彼女にうまく伝わったのだろう。

しかし、これはすれ違いの認識なのかもしれない。舞衣はこれを「俺以外の男に見せるな」と理解した。

そのせいで、舞衣の胸はいつも以上にドキドキした。顔も凄く赤くなっている。

無論、その様子はとても可愛かった。それでも、都は舞衣のことを心配で、そんな可愛い舞衣を気にしていない。

「ところで、舞衣様は何の要件できたの?」

本題に入り、都は正座で自分の主人に向かう。

「うん……その前に、失礼します。」

舞衣は都が正座の姿で、自分が立ったままには少し彼に申し訳ない気分が生み出した。

少なくとも都は年上の人。例え彼は執事という仕事をやっても、最低限の年上への尊重をしたい。

故に、舞衣も同じく正座で都と向き合う。

そして――

「――昼間、あの平城学館の人のこと。」

――!?

舞衣が昼の出来事を口に出す。その時、都の心が一瞬動揺した。

いつ、この件が聞かれるのが予測していたが、まさか舞衣の行動がこんなに早い。

「あのとき、可奈美ちゃんとお兄さんと、あの平城の人も突然様子がおかしくなったでしょ? 何かあったのかなって思ってた」

流星にあのとき三人の動作がおかしいと思われる。

自分も無手型の構えを取ったから。

「明日の試合のことを意識するあまり、彼女たちも気を張り詰めていたのでしょうかね。可奈美様も緊張していると仰っております。」

私もあの雰囲気です。いい反応が出しちゃった。お恥ずかしいです。」

「そ、そう？ うーん……」

流石に納得させるのが難しい。可奈美の普段の行いを考えたら、流石にあの場であいう行動は取れない。

やっぱり舞衣ちゃんに真相を言うのか？ いや、余計に心配をかけただけ。この件は俺一人で片付ける。もうあの二人を巻き込まれたくない……。

あんな思いは嫌なんだ。

「お兄さん……？ 顔色が悪いですよ。」

「……!？」

「やっぱり昼間のことはお兄さんが何か知っていますのよね。」

やばい！ただ昔のことを考えて、気分が悪くなっただけで、舞衣ちゃんに勘違いされそう。

「いいえ！俺は……そう！初めての正式執事仕事と慣れない土地での行動に少し疲れていただけです！今夜はちゃんと休めば問題ないはず！」

都は慌てて理由を見つけて、この話題を回避する。流石にあんなに攻められたらバレル。

「そうなんだ……じゃあ、膝枕する？」

「……え？今、何と？」

舞衣が言っている言葉が理解できなくて、都の目がバクバクと舞衣を見つめる。

「膝枕。疲れたのでしょう？だから、お兄さんに膝枕をしたいと思います。」

「いやいや、理屈が全然わかりません。それと明日の御前試合のためにも、舞衣様が早く休ませておかねば……。」

「私はいいいよ。お兄さんのほうが大事です。いつも私達の我儘を聞いて、ずっと頑張っていたお兄さんにご褒美をあげたい。……それに、お兄さんの役にも立てられるし。」

そう言っ、舞衣は笑顔にする。

あれは天使……いや、女神という形容の方が彼女に似合う笑顔だ。

「こつちのセリフだよ。俺はもつとお前たちの役に立ちたいと思つて……あつ。」

「お兄さんは十分私達の役に立つてたと思うよ。こうしてそばにいてくれただけで、私は凄く安心するのよ。」

話がまだ終わってない途中に、舞衣は都の左のほうへ座り。彼の頭を自分の足の方へ押し込む。

そうしたら、後頭部からとても柔らかい太ももの感触が感じたと同時に、舞衣の手が優しく都の頭を撫でる。

「舞衣ちゃん……」

「ゆっくり私の膝で休ませてください。お兄さん。そうしたほうが、私も休められる。」

「この態勢で休めるって言うの？」

「うん。なんだか、こうしてお兄さんを感じたことで、明日の試合への緊張感も消える気がします。少し恥ずかしいですが」

舞衣は恥ずかしいそうに苦笑い。

そんな可愛い彼女を見て、都が思わずドキドキした。

舞衣は魅力が満ちた女の子だ。自分とは似合わないくらいに……彼女は柳瀬グループの令嬢であり、美濃関の女神であり、多くの人に告白された人気者。

そんな彼女に優しく接しられて、そばにいさせられて、デートも一緒にやって、何回の膝枕もされた。

都はこれを幸運だと思う。だって、こんないい女の子は可奈美を除いて、どこにもいなかった。

こうして舞衣ちゃんと一緒にいるだけで、今生の運を使い切ったみたい。

「本当に俺っていいのか？舞衣ちゃん。」

舞衣も聞こえられない小声で、都は舞衣に聞く。

自分は特に魅力なんかない。成績が優秀以外にいるのは妹への熱情しか……妹のために生き続けた自分と他に夢のために一生懸命追いつくやつと比べられない。あんなやつらのほうが舞衣ちゃんに似合う。

だってあいつらは輝いているよ！夢のために、将来のために頑張りが続けてきたんだから。あんな連中はきつと自分より舞衣のそばに相應しい人種。

自分はただ妹のために未来が知らず、偉い目標が持たず……ただ、いたずら妹の背後を追いつくシスコン。

そして今は彼女たちの願いで、そばに居させられた。理由は今でもわからない。

もちろん彼女たちと一緒にいるのが楽しいけど、嬉しいけど……将来のことを考えると、“そうは行かない”。

いつか彼女達はさらなるの高みへ行く。もちろん、自分も可奈美との約束があつて、必ず彼女を追いつくけど、舞衣とそんな約束がない。都是舞衣を止められる権利がない。いつか彼女は自分から離れ、誰かと結婚するのだろう。

……そうした方がいい。これも彼女の幸せになれる。自分の原因で彼女を自分のそばに居させちゃ駄目だ。

「舞衣ちゃん……今までありがとうな。」

「……こっちこそ、私の我儘を聞いてくれてありがとう、お兄さん。」

すれ違った思いが、この夜に回り。

そして、明日の日が上がり。御前運命の日試合の朝を迎えた。

第5話：御前試合と再会

御前試合当日ー。

「うわあく……すつごい！」

昨日の折神邸の前のときのように可奈美は感嘆の声を上げた。確かに驚くところだった。

この場、御前試合の会場に多くの人々が集まり、歓声や応援の音が飛び交っている。その中にも各学校の選手たちもいる。

ちなみに、中央は正八角形の吹き抜けのようになり、二階の観客席には各校の応援団、下の階の大きな壇上は試合のスペースになっている。

「あれが試合する人たちかあ……うん、やっぱり強そう！」

可奈美がわくわくしながら、各学校の選手達に一人ずつ視線を移していく。

気持ちがわかるが、少し落ち着け。

可奈美と同じく少しわくわくしている都。彼もこの場にいる選手達の気圧に気分が上がったところ。

もし、これは母の血なのかな？ 強者への興奮感？

この場にいる各学校の選手達はかなり強い。

まずは京都府の綾小路武芸学舎^{あやのこうじぶげいがくしや}。全体的に灰色で、スカートの丈の長い制服だ。代表は茶髪、黒髪の生徒の二人組。見たところ仲が良さそうだ。

見た目ではかなり強いが……多分「ミルヤ」さんより弱い。

ちなみにミルヤさんは鍛冶科の研修で出会った綾小路武芸学舎の刀使です。見た目は灰色髪の美人スタイルの人だが、彼女は刀に関する変態になる。(字面の意味ですよ)

それでも、都は彼女に好感がある。原因は彼女が持っている刀知識が多くて、研修期間で彼女に刀のことをいっぱい教われた。

しかし、やっぱり彼女は出場しないのね……。まあ、彼女の個性を考えると、試合より刀や作戦の方が重要なのでしよう。

そして、都は次の学校の選手に視線を移す。

次なのは都とかなり縁が深い学院。神奈川県れんぶしよがくいんの鎌府女学院。

白のブレザーに青色の襟、同じく青色のスカートという制服。代表は長い黒髪を纏めた生徒と色素の薄い、白髪に近い生徒。

——沙耶香。

一目で都はすぐあの白髪の少女の名前を心の中で叫んでいた。

一年前と全然変わってない顔と髪。身長も層々変わってない。

彼女——糸見沙耶香。彼女の姿を見て、都は一年前のことを思い返す。

一年前、彼女を守るために刀使と大喧嘩をした。その結果は負けが……それでも彼女と再会の約束をした。

沙耶香……代表になったのか……。

親が娘の成長を見たような感じて、都は泣きそうな顔であの少女を見る。

あの日以来彼女は強くなり、ここまでに辿り着いた。正直今はすぐ彼女の頭を撫でて褒めてあげたい。

しかし、ここで都が知らなかったのは一年前の沙耶香の強さは特に鎌府のトップに近い。つまり滅茶苦茶強いということ。

そして、三番目の学校は岡山県おきかふねじよがくえんの長船女学園。代表は桃色のツインテールの小柄な生徒と金髪ロングの生徒だ。桃色の髪の生徒は気だるそうに、金髪の生徒は対称的に陽気な素振りを披露している。

それにしても、胸が大きくないか？……外国人なのかな？

金髪の生徒の胸の方に視線を移す。あの大きさは舞衣より大きい。

「お兄さん？」

そこで、舞衣は都の視線先を感じたのか……彼女は冷たい目で都の方へ見る。言語も冷たく、殺気も感じる。

怖っ！ごめん！わざじやないです！おっぱいに視線が吸い込まれたのは男性では仕方ないことだ！

そんな舞衣にビビった都はすぐ舞衣の方へ向き。

「舞衣ちゃんのほうが一番スキダヨ（声震える）。」

「そう？…ありがとう」

なぜだか、そこで照れてしまった舞衣。その笑顔は可愛いですが、さっきのは怖かった……。

「あの子、やはり試合の出場者だったんだ！」

可奈美の声に引き連れられて、都は可奈美の視線先を追うと、そこにいるのは昨日出会った平城学館の黒髪の少女。そして、彼女の隣にいるのは人懐っこい雰囲気の人だ。

黒髪の少女……可奈美と俺と同じくあの現象を体験した女の子。あれは一体どんな現象なのかは知らんが……きつと彼女は何かを起こす。

彼女を注目する都。

しかし、彼がそうした原因はこれだけではない。

彼は彼女から底に見えない強さを感じた。この子は強い……認めたくないが、彼女は可奈美と同じレベル……もしや、それ以上なのかもしれない。

——強い、こんな感じは久々。

ゾクゾクした心を押さえ、都は久々興奮してきた。あれは強者への興奮感だ。

「可奈美、あの子と戦うときは気をつけろ。あの子はこの場で一番強い……」

「……うん！」

都からの警告を受けて、可奈美は慎重に応じる。

可奈美がお兄ちゃんに「相手を気をつける」という警告を受けるのは今まで一度もなかった。つまり相手は相当強い。

可奈美は平城の黒髪の子を見て、一刻早くも彼女と戦いたい気分が段々と増えた。

「それじゃ、二人共は頑張れよ。俺は誰よりも君たちのことを応援するつもりだ。」

さっきのゾクゾク感を隠して、都は可奈美と舞衣の頭を撫でる。

そうしたら、二人は少し赤い顔で都に強く頷く。

「うん！お兄ちゃんはちゃんと見ててね。」

「頑張るから。」

「うん！それじゃ、俺は先に観客席へ回します。」

大事の二人と別れ、一度外に出て、都は別の方向に向かう。確か……観客席の入り口は外に設置したような……。

観客席の入り口設置に都は面倒くさい感じを感じる。中にいる階段は試合の裁判の司会が通る道らしい。

だから都は外で入る道を探す。

「ね、そこの君。」

会場を半周回ったところ、彼はある人物に呼ばれた。

いや、正確いうと声に反応し、声主の方に向かう。

「俺のこと？」

「そう、少し付き合ってもらえないかな？」

青年……いや、中性的な顔立ちの少女というべきか。

褐色の短髪にその中性的な顔立ちと凜々しい表情。顔だけ見れば男に見えるだろう。しかし、幸いのことには彼女の胸が見える。

結構膨らんだ胸なので、男ではないのが確かだ。

そんな彼女が都を誘う。その光景はまるで王子様が自分を迎える光景だった。

うわあ……やばっ！イケメンだ！

そこまで都に讚える人が早々にいない。しかも、女性をイケメンと……これだけ見ると、あの女性はどれほどイケメンなのかわかる。

「悪い、俺は早く観客席へ行かねば。王子様の誘いは断らせていただきます。」

「大丈夫、僕も同じ場所を目指すから。よろしかったら、一緒に歩きましょうか？」

凜々しい顔で手を都の方に差し伸ばす、この光景は言うまでもなく第三者から見ればバラ色の背景が見えそう。

「……………そこまで言うなら、乗ってやるよ。」

今日、都が苦手のタイプが増えた。

イケメンの女性の誘いは可愛い女性の誘いより断り辛い。

「ありがとう。僕の名前は獅童真希。」

「美濃関学院……じゃなくて、柳瀬グループの執事の衛藤 都だ。」

「執事もやっているのか……凄く似合っているよ。」

「それはどうも。」

自分より似合う人間に褒められたのは心情には複雑。それより彼女の名前はどこから……聞いたような。

そして、都は彼女と一緒に観客席の方に向かった。

そこで彼も彼女が親衛隊第一席獅童真希だと思い出した。

◇

「俺は第五席？なんの冗談？」

獅童真希に特別観客席に連れられて、そこで彼女から御前試合が終わるとすぐ彼を第五席への昇進という話を聞かれた。

「君は紫様に選ばれた人材だ。あなたの剣技と実力も紫様に認められたのよ。」

「だからなんの冗談なんだよ！俺、刀使ではないのよ？そんな人間に親衛隊に入らせたら、折神家も色々な文句をつけられるのよ！」

「……そうだね。けど君の才能が必要なんだ。さっきのことを聞いて、すぐそのリスクを察する能力は実に素晴らしいものだ。」

「……それは普通よ。それはともかく、折神家はどうする！いや……折神家がどうやるのかわかるんだけど、俺にはやりたいことがあるんだ。」

そう言っつて、都は観客席の方へ見る。正確いうと美濃席代表の休憩区の方へ。

あそこにいるのは何より大切の二人がいる。

「それでも、構わない。例えばあなたが昇進されても、紫様はあなたの意願を尊重する。僕もあなたがどれほどあの二人を大事しているのかわかる。」

「………例えば第五席になっても俺はあの二人のことを最優先する。命令なんて聞かないよ」

「………」

流石の獅童真希でも、彼の口に出した決意に黙らせた。

都の決意は誰よりも強い。ただあの二人のこのために、折神家に恐れずその態度に獅童は尊重する。

そして、彼女が思うんだ。

もしその決意が紫様に向けば、彼は最高の親衛隊のメンバーになる。

「……………なら、あの二人が卒業後、あなたの部隊に入らせたなら、どうですか?」

そこでもう一人の女性がこの特別観客席に入った。

都がその女性を見て驚いた。

「……………此花さん!^{このはな}なんて……………お前は親衛隊なのか?」

彼女が着ている制服が獅童真希が着ている制服と同じデザイン。

それはつまり……………彼女は親衛隊の一人だ。

「もう知り合ってたのか? 寿々花^{すずか}。」

「ええ、あるパーティーでたまたま。それより、さつき私の提案はいかがです? なかなかいい提案だと思うけど」

完璧……………いや、ほとんど返す文句がない。

刀使がやっている以上に、その仕事が諦めるわけにはいかない。つまり未来がどうあれ彼女がやりたいことなんで影響しない。

「いい提案だと思う。……………しかし、まさか此花さんが親衛隊の者だなんて……………」

「気に入らないのです?」

「いいえ、ただ前で見たあのドレス姿の寿々花が恋しいと思って……………」

確か、あのときドレスを着ている此花はとてもきれいだった。

もちろん今の制服姿も素敵だと思うけど、やっぱり一番好きなのはドレス姿の彼女。

「あなたは羞恥心がないのです?」

僅かだが、寿々花の顔が赤くように見える。

「いや、俺はただ素直に言っただけ。」

「男性版の真希さんですか……………」

「どうしてそこで僕の名を?」

「自分の胸を触って、よく考えてください。それと、そろそろ始まりますわよ。」

寿々花が獅童の左に、都が獅童の右に。三人一斉に綾小路の代表と平城学館の代表が場内に入ること注目した。

これは御前試合の初回戦。しかも、ちょうど良かったのはあの二人は獅童と寿々花の後輩である。

自分の後輩の表現を注目しない先輩なんではない。

「私の後輩とあなたの後輩との勝負ですね。」

「……」

試合に注目した獅童と都が同じ人物を見た。

理由が大部に近いけど、すれ違いだ。

「礼、双方構え。」

司会の合図に応え、お互いが礼をした後、御刀を抜く。

「小烏丸……!?!」

平城学館の人が抜いた御刀を見て、都が口に滑べた言葉に注意が彼に逸らせた獅童。

「知っているのか？あの刀を」

「……俺は一応鍛冶科の人なので、御刀に関する知識は誰にも負けない自信がある。」

「そうか……頼もしい第五席だね。」

「ご冗談を。」

本当になんの冗談なのよ！なんてあの子が持っているはずの御刀があそこに……！それとも……あの子は。

都は一度あの御刀をこの目で見ていたことを獅童に教えられなかった。

本能なのか、彼は他の人にあの子のことを教えたくない。

お前はあの「和」なの？

名前が同じなら、ただの偶然。でも彼女は本人だとしたら、彼女は……。

「写し。」

双方が写しを使って、それぞれ流派の構えを取った。

やっぱりあの子だ……十条^{じゅうじょう}？和だ。あの鹿島新当流は何よりの証。彼女以外の使い手はいない！

？和という平城学館の代表の構えを見て、都は一瞬確信した。これはあの子と十年以上ぶりの再会だ。

「始め！」

試合開始の合図。最初の数秒はお互いの出方を探る。そして、姫和が御刀を刺突の構えに変えた瞬間、彼女の身体が刹那の間に消えた。彼女は一瞬に綾小路の生徒の懐へと移動した。そのまま大きく一閃。綾小路の生徒の胴体を真つ二つに切り裂き、写シを剥がした。

「勝者——平城学館、十条姫和。」

勝負宣言とともに場内が大きく……主に平城学館の歓声が上がった。

圧倒的、華麗とも言える試合だった。けど？和の表情が何かおかしい。

それを気付いたのがこの場には都一人だった。

彼女は昔にはこういう表情ではなかった……確かに冷静で、少し冷たい子だが、あんな表情で試合に勝利したのはおかしい。そもそも、あれは対戦者を「相手にしていない」。試合に勝つことよりも、別の目的のために戦っていたような。

？和……この十年何か起きた……。

「……結構レベルが高い迅移でしたわね。」

「そうだな。小烏丸の使い手か……適合者がなかったはず」

「真希さん？」

「いいえ、なんでもなし。それより、さっきの迅移を見たか？」

獅童から質問が投げた。恐らく彼女に試されている。

「見たところは何も、一瞬で試合を終わらせたのよ。確かに剣筋はきれいだけど、あれは刀使の能力で勝負を決めたのよ。」

まあ、相手はそこそ弱くないけど……。

「そうだね、悪かった。あなたを試すような真似を」

「いいえ、むしろこれは普通よ。俺のような人を親衛隊に入らせる事態で多少実力の面が心配なんですよ。」

「いい観察なんだね。」

「だから普通って……。」

そう、俺がすることはただ一般人の視点から考えてただけだ。特に特別のことなんじゃない。

都が考えてたうちに、もうすぐ第二試合が始まり。そこで都と他の二人がこの試合を集中する。

「あの子は鎌府の糸見沙耶香でしたかしら。」

「ああ、そうだ、高津学長がよく自慢気に話している子だな。」

「沙耶香……可奈美。」

第二試合は沙耶香と可奈美との勝負。都の心境ではとても複雑。

どっちでも応援したい気持ちがある胸の中から湧き出した。

よりによつて、早速あの二人が対決するとは……。

「……まあ、彼女が勝つだろうけどな……。」

「そうですね。任務達成率100%の子が紫様の右腕に相應しい刀使でしたわね。」

そこで都と違つて、親衛隊の二人は沙耶香だけを注目する。彼女はどんな任務でも達成できる優秀の刀使。前々から獅童も彼女のことを注目していた。彼女なら第六席の位置に相應しいのだろう。まあ、自分の思いが知る寿々花の態度があまり良くないけど。

彼女が入隊した後にも寿々花をうまく説得すれば、すぐ和解するのだろう。それに、結芽とも仲良くしてもくれそうだと楽観的なことも考えてもいた獅童。

「……………それはどうだろう？うちの妹を舐めんなよ。」

二人の会話を聞いて、都は少しイライラの態度。しかし、その声はわざと二人に聞けないようにしてた。

どっちにしろ、可奈美は負けない。

「頑張れよ、二人。」

◇

わくわくする気持ちが止まらない。

さつき第一試合を見た可奈美の身体はゾクゾクしてきた。まだ判断するのが早いですが、確かにお兄ちゃんの言う通りあの子が強い。

そして、目の前にいる対戦相手もきつととても強い。本能が可奈美にそう教わった。

「礼、双方構え。」

強者に向けたわくわくした高ぶる気分が可奈美の顔さえも示されていた。

それを見て、観客席にいる都もわかる。あの子とてもわくわくした状態だ。流石、世界一番誇る妹剣術馬鹿。

「写し。」

陰剣（#御方のこと）……一刀流？

相手の初期構えを見て、可奈美は思わず相手の流派を推測する。

「始め。」

試合が始まった合図と共に、相手は凄まじい迅移を使い可奈美を襲う。

迅移……早い！

口でも反応できない速度に可奈美はぎりぎり初撃を防げた。でも相手が流れるような怒涛の連撃で可奈美を倒そうと動く。

この子強い！

感想をつけながら、最低限の動きで相手の攻撃を避けて、避けられない斬撃を防げる。

見るだけで可奈美の知り合いの人にヒヤヒヤさせられた激しいの攻防戦で可奈美は冷静で相手の動きを読み、対応動作を作り変えていく。

ただ一方的な防衛だが、可奈美は自分の流派をうまく扱う。そして、彼女は今まで都との数百回の立ち会いで聞いたことを思い返す。

「強い相手を倒すには、相手の動きをよく見ることに。それは柳生新陰流の特徴だ。」

「しかし、それだけでは足りない。目に頼っぱなしじゃ相手を倒せ

ない。目が見えない状況に落ちれば、負ける。」

「故に、相手の呼吸と剣が空気を裂く音もよく聞くんだった。そして、相手のこともよく感じるんだ。そうすれば、剣の先へ一歩進める！」

よく見る、よく聞く！よく感じ取る！

まるで踊るような動きで、相手の斬撃を何度も避けて。

そして相手の一瞬の隙を突いて、下から掬い上げるような斬撃で御刀を持つ相手の左腕を斬り飛ばす。

「……………あつ。」

左腕が切り飛ばされて、対戦相手は思わず驚愕の声を漏れた。

そして、意外な試合結果に観客は驚き、会場内は大きな歓声を上げていた。

この勝利は可奈美側の人間以外に彼女を見ていない状況下の勝利である。

◇

「楽しかった。沙耶香ちゃんだったっけ？今日はありがとう！凄い剣技を見れたよ！」

試合終了後、可奈美は御刀を収まり、対戦相手の糸見沙耶香に楽しそうな表情を見せた。

そして彼女はすぐ美濃関の休憩場に戻って、自分の親友に勝利のタッチを。

けど、沙耶香はただ無口で地面に挿された御刀を抜いて鞘の中に収まる。

その鞘に猫のぬいぐるみの飾りがつけていた。

負けた……あの人が見えたのかな。

負けたという感情に襲われて、沙耶香は凄く落ち込んでいるように見える。

これであの人の期待に応えられない……。

ぬいぐるみをきゅーと握って、沙耶香はこんな気持ちを抱かいて鎌

府の元に戻る。

今日は特に胸が痛いー。

そんな時にー。

「ん？これは？」

こんな歓声に包囲された環境で誰でも気付かない何か沙耶香の頭をぶつかった。

そして、それを常人を超える反応で地面に落ちる前に手で接する。

あれは小さい飴と箸だ。

ん？箸？

飴はともかく、箸はこの場にはいなかったはず。

「ーあつ。」

そして、沙耶香はその箸に刻んでいた小さい文字を発見した。

「おつかれ、サヤカ。」と書いてある。

それを見て、沙耶香は急ぎにこの会場を見回る。

沙耶香は体がなぜその行動を取るの分からない。けど、彼女はわかるんだ。これを投げた人は。

そして、やっと見つけた。

特別観客席に紫髪の男がいた。彼は間違えなくそこで自分を見ている。

ーさっきの試合を見てくれた。お疲れと言ってくれた。

そこで、胸が急に熱くなり、辛くなってきた。

けど沙耶香は嫌いじゃない。やっと会えたから。

ー都。

心の中に彼の名を叫んだ、そして沙耶香は初めて小さく笑った。

◇

「…これは、また意外な結果になりましたわね。」

意外な試合結果に驚いた顔が隠せない寿々花。まさか美濃関はそのような実力者があると思わなかった。

それとも…彼女は衛藤 都の妹という故か？

「あの子の名前は…衛藤 可奈美か…覚えておこう」

「うちの妹を親衛隊に入るつもり？」

さつきのおかしいの投げ動作が終わった都はある方向に向き続けて、獅童に話をかける。

「それは、この大会が終わってから考える。しかし、お前の妹は凄いや。お前の教えか？」

「いや、母の。俺たちの剣技は母に鍛えられたもの。可奈美はそれを進化させたのよ。」

実は都もそれを進化させ、さらなるの境界へ至った。しかし、本人はそれを認めていない。

特に昔からはもう剣を手放したから。

「そうか…。」と応えた獅童は勝利した美濃関の可奈美の方へ見る。

第五席の妹か…：仲間の家族を疑うのが良くないが、「舞草」との繋がりがいいのかどうか、ちゃんと調べなければ。

彼女の实力はもう親衛隊に入れる資格がある。あの糸見沙耶香を倒せるほどの実力なら、親衛隊にとっては大事な戦力だ。

もし彼女と舞草との繋がりがなければ、紫様に彼女の親衛隊入りを強く推薦したい。それに、彼女が入ることで、多少第五席の評価も変えられる。同じく美濃関出身の二人が親衛隊の隊員だと世間の刀使達に知られたら、例え衛藤 都は刀使じゃなくても、彼を受け入れる人間も現れるのだろう。

それに、結芽も喜ぶの难道？第五席はともかく、他の二人もかなり強いから、これで少しでも彼女の退屈が消せるかも。

それから御前試合がうまく進み、途中にまた？和の表現に驚いた三人だが。都の方はすぐその冷静さを取り戻した。

彼の予測通りにあの子は問答なく可奈美の最大の対戦相手として出るのだろう。

そして、その後はすぐ準決勝までに進み。同じ準決勝の美濃関同士
の柳瀬 舞衣と衛藤 可奈美の試合がやって来た。

第6話：親友の思いと逃走

初めて可奈美ちゃんと出会ったのは小学校の頃だった。

あの頃はまた小学校一年生。慣れない学校生活に色々忙しく回っていた時に、可奈美ちゃんは私を見つけた。

「まいちゃん、なにしてるの?」

「クッキーさんにリボンを、かわいいでしょう?」

あの頃の私は友達がいなくて、毎日自分が作った外見がボロボロのクッキーを綺麗な飾りをつける。

よく考えたら、私の最初の友達はクッキーなのかもしれません。小さい頃、お父さんとお母さんが仕事の原因で常に私のそばにいない、私はよくクッキーさんとお喋りしてた。

「カワ（・▽・）イイ!!でもたべニヤいの?」

「たべるよ、ただ……ともたち。」

リボンにつけたクッキーを見て、幼い舞衣の目はまるで友達を見る目だ。

このクッキーさんは舞衣の友達。だから食べるのが勿体無いと思ってた。でも食べないと、せっかく作ったクッキーが無駄になる。

そんなときに、可奈美ちゃんが突然あの言葉を口に出した。決して一生忘れられない言葉を。

「まいちゃん!ともたち!わたしともたちにやろう!」

「え?」

「ともたち!だから、もうクッキーさんはいらない。」

元気で、天真爛漫、うまく言葉を話せない可奈美ちゃんはその時、私の友達になると宣言した。まあ、クッキーさんが食べたいという意図も感じますが……それでも、彼女から私に友達を誘うことはとても嬉しかった。

だって、初めての友達だもん。

「いいの?」

「うん!」

笑顔で私を返した可奈美ちゃんは本当に可愛くて、愛おしい。

その時の私はあまりの嬉しさで、彼女と友達になった。

友達になった日々はとても楽しくて、幸せだった。もちろん、時々可奈美ちゃんが頻繁に稽古を求められて、困ったのですが……それでも、そんなに楽しそうな可奈美ちゃんを見て、つい彼女を甘やかしちゃう。

こうして、私と可奈美ちゃんは誰よりも仲良い親友となった。

けど、あの事件が起こり、私は自分が可奈美のそばにいられるかどうか迷っていた。

可奈美ちゃんは私のせいで、一緒に誘拐されて怪我でもされた。

あの時の私達はまだ刀使ではない、私達より強い大人たちにどうしようもなかった。

私を守るために可奈美は怪我された。

怪我された彼女を見て、私はとても怖くて、後悔している。

もし可奈美ちゃんは私の友達になれなかったら、こんな目に遭わないかも。

その後、事件が可奈美のお兄さんの活躍で、無事に終わらせた。

けど、可奈美ちゃんによる生み出された罪悪感と後悔があのまま私の中に積っていた。

それ以後、私はずっと可奈美ちゃんのことを避け続けている。もう可奈美ちゃんに辛い思い出をさせたくないから。

そして――ある日。

「舞衣お嬢様、お客人です。」

執事をやっている柴田さんが部屋に籠っている私にあることを伝う。

そして、扉が開き、声と共に私は誰かに抑えた。

いいえ、抱かれた。

「まいちゃん！あいたかったよ〜」

「かなみちゃん!?!」

私を抱きつく女の子は私の友達――可奈美。

彼女は泣きながら、私を強く抱きしめた。

「……………では、ご友人と良いお時間を過ごせよう。失礼いたしました

す。」

そう言つて、柴田さんは部屋から離れ、扉を閉めていた。

「かなみちゃん、なんでここに？私は……。」

「ううう……さびしかったから。まいちゃんとあえなくてさびしかった。」

「かなみちゃん……。」

何か言い出す前に、可奈美ちゃんは先に言い出した。

「しつている！おにいちゃんからおそわった、だから、まいちゃんにわたしのきもちをつたう！」

私から離れ、可奈美ちゃんは初めて真面目な顔で私と向き合う。

「わたしはまいちゃんといっしょに遊びたい、けいこでもしたい。もういちどまいちゃんのクッキーをたべたい！」

「でも、わたしのせいで、かなみちゃんがまたきずつけられたら……。」

「だいじょうぶ！おにいちゃんがいる！わたしもつよくなる！だから、ともたちにならう！」

私の手を繋いで、可奈美ちゃんはまた泣いていた顔だ。

「いいの？わたしはかなみちゃんのもたちになれるの？」

「うん！なれる！ずっといっしょにいたい。」

「うう……くすつ……！」

そして、私も可奈美と共に泣いてた。

もしかすると、その時の私はずっとこの言葉を待っていたのかもしれない。私も可奈美ちゃんと一緒にずっと友達に続けたいと願っているのかもしれない。

「まいちゃん、ともに剣のみちをあるきましょう。」

「……うん！わたしもがんばってかなみちゃんの剣を追い付く。」

「やくそくだよー！」

笑顔でそう言ってくれた可奈美ちゃん。その日から、私は決めた。

私はこれからも可奈美ちゃんのそばに行き、ずっと彼女の親友として、彼女を追い付く。

それは私の新たな剣の道――親友のために進化する剣。

◇

運命のいたずらなのかもしれない。

御前試合の準決勝に同じ美濃関である柳瀬舞衣が自分の親友衛藤可奈美と対峙することになりました。

それを見た可奈美と舞衣の友達がこのような展開を受け入れない。だってお互いは仲良い親友で同じ美濃関の仲間だから。

ちなみに、美濃関中等部一の仲良い三人組の安桜美炎はある理由で来なくなっている。彼女からのメッセージではどうやら付近には荒魂が出現らしい。

彼女と何人の刀使たちは既に対処するために向かいに行った。

「礼、双方構え……写し！」

場内に立った二人は司会の指示を従い。試合が始まる前にお互いの出方を探る。

可奈美ちゃん、今まで何百回を持ち上げてきた。お互いの手の内はよく知っているからー。

舞衣ちゃんの正眼は簡単に崩せない、技を誘って……。

お互いは数百回の試合を行っていた。その数は都より多くて、彼より可奈美の剣をよく知っている。

そして、可奈美も舞衣の強さがよく知っている。

刀使の中に少数特殊能力が持つ刀使がいた。舞衣はその中の一人だった。しかも、二つの能力が持っている。

一つは《明眼》みょうがんという視覚を変質させ肉眼で望遠、暗視、熱探知などが行える能力。

もう一つは《透覚》とうかくという聴覚を変質させ集音、ノイズカットなどを行える能力。

この二つの能力は機械のレーダより頼られる。これも一般人が刀使に勝ってない理由の一つだ。

ちなみに都が全集中を使っても、透覚のような程度には及ばない。だから本人は舞衣に勝ってないと言った。

とりあえず、それを知っている可奈美も舞衣との毎回の試合に結構本気で戦っている。それでも舞衣は知っている……可奈美はまだ全力を出せていない。

可奈美に全力を出せられる刀使は多分美炎しかない。彼女の集中力が切れやすい問題がなかったら、間違えなく彼女と可奈美は美濃関最強の刀使だろう。

「……………っ！」

その時、舞衣は両足の膝を地面に着く。御刀をいつまでも抜け出せる姿勢を取った。

あれは、最高レベルの居合である。

——私は私のやり方で可奈美ちゃんを追い付く。

◇

準決勝の試合が始まる直前、舞衣の挙動は会場全体に驚かせることにした。

「居合いなんて……！」

寿々花はあれを見て、驚愕の声を上げた。

そう、舞衣は居合の構えを取ってしまった。しかも、結構レベルが高い居合である。

居合か……！しかも、結構高レベルの……流石、舞衣ちゃん。

心の中に彼女を褒めた都は高レベルの居合を見て心がわくわくしてきた。何せ、自分も居合の使い手だから。

そして、都も舞衣がこうするの一番の理由が知っている。

すべてを出して、可奈美と真剣勝負をつきたい。それは舞衣が自分のやり方で可奈美を追い付く証である。

「ごうやら、君の知り合いの思い切りがいいな。」

獅童もそれを見て、都に話をかけた。彼女の口調はどうやら舞衣のやることを讃えているように聞こえる。

「ああ……自慢の妹友だから！」

「そこは自慢なの？普通は“友達”でしょう？」

寿々花は冷静で都の言動にツツコミ。

「……始め！」

そして、試合が開始した一瞬、可奈美は迅移を使わず早い速度で舞衣の方へ走る。彼女の攻撃範囲に入る前に迅移へ変え、一瞬に彼女の左から背後に回り、右の位置にそこで攻撃する。

それを反応し、舞衣はそこへ一撃一殺の早い一閃を放った。これは全集中を使った自分でも防げない速度であった。

「……………っ！」

しかし、可奈美は舞衣の居合いを「片手」で押さえて止めていた。そうしたら、可奈美は刀を下ろし、舞衣の写しが剥がれた。

準決勝は可奈美と十条？和の勝ちで決勝へ進んだ。

可奈美「ーまた強くなつたね。これではいつか超えられるかも……それにしても、仲良いだよな。あの二人。

倒された舞衣を引っ張って、可奈美と舞衣はともに笑った。

そんな光景に尊く感じる都は出口の方へ歩く。

「どこへ行く？」

さっきの試合に驚愕状態から戻った獅童はこの場から離れるつもの都の方へ向く。

「大事の妹友を慰めて、妹を褒める。それは俺の責務だ。」

そう言つて、都はこの場から離れた。

「本当にあの二人を大事にしているんだな。自分勝手の行動を取つただけ。」

「そうですね……あの人は結芽のようなタイプですね。これでは少し苦勞をかけますわね。」

ここから先の未来を考えて、親衛隊の第五席は優秀の人材だけど、行動が掴みにくい点は結芽と同様レベル。そこは頭が痛む点でもある。

◇

「お兄ちゃんは舞衣ちゃんに甘やかしすぎ！」

準決勝が終わり、昼休憩時間に入った。

美濃関側の休憩スペースのテーブルで都が旅館で作った弁当をこ馳走する可奈美と舞衣ちゃんの頭を撫で続けた都たちの姿。

「そう？これは試合に負けた舞衣様への特別サービスだぞ」

そう言つて、彼がやつていることは執事の様子には見えない。どこ
の執事は昼食のときにいたずら主人の頭を撫でるですか！

けど、舞衣は結構これをお気に入りらしい。本人は恥ずかしい反応
だけど。

「……決勝でわざと負けるか」

そこでなぜかその結論を出した可奈美。

「おい、そうしたら許さんぞー！」

「そうだよ！可奈美ちゃん。せつかく決勝まで進んだから……」

そんな可奈美に困らせた二人はそれぞれの反応を示す。

ちなみに、可奈美の友達もここで昼食を。ただし、この三人はイ
チャイチャしすぎて入り辛い。

「わかったよ。いくら羨ま……私でも試合でそんな考えてないよ
！」

「あはは……お兄さん。このあと可奈美ちゃんを応援してあげ
て。私だけじゃ不公平だし。」

可奈美のことをいつも想っている舞衣がやっぱり天使！いや……
女神か。

「なら、決勝に勝ったら。頭でも撫であげる。」

「三時間……。」

「うん？」

「三時間、私の頭を撫でたら、全力で勝つ。」

おい、その理由で決勝を取るのが流石にないわ！

可奈美以外の全員は共識でそう思ってしまった。

「冗談です。私はあの子……？和ちゃんと戦いたい。だから本気で
行く。」

「………そうか。」

「………可奈美ちゃん。」

どの道、可奈美は可奈美のままだ。高く誇れる俺の妹である！

「でも私が勝ったら、三時間のなでなでサービスは本気で言ったのだからーその後、頭を撫てくださいね！お兄ちゃん！」

「……わ、わかった。たっぷり可愛がってあげるから、勝ってこい！」

「うん！」

◇

決勝場は折神家本殿の白州にて行われる。

都と可奈美たち及び美濃関の生徒たちがしばらくの準備を行われている。

「美炎、結構遅れているな。」

「ごめん……荒魂が多くて、なんとなく決勝までに間に合った！」
そこで都がよくやく出現した美炎を出迎える。

「……そうか、ちなみに彼女は誰？」

しかし、そこには彼女一人ではなかった。彼女の隣に長船制服を着ている女性がいる。

「初めまして、私は長船女学園高等部三年の瀬戸内智恵せとうちちえと言います。美炎ちゃんのお姉さんです。」

笑顔で自己紹介する女性。

見た目では青い短い髪の美人。見たところは優しい性格をしているお姉さん。

確かに前に美炎は彼女が美人だと言われた気がする……それにしても、胸大きい。

見たところはあの金髪の女性と同レベル……長船恐ろしい。

……つと、胸に関する思いはここまでにしておこう。舞衣ちゃんに怒らせちゃだめ。

「初めまして、美濃関学院高等部二年の衛藤 都と申します。美炎からもあなたの噂をー」

「お姉ちゃんを呼んでもいいのよ……？」

「……………えっ?」

「ちょうど可愛い弟が欲しいかも。」

笑顔でわけわかんないことを言ってしまった智恵に都は美炎の方に尋ねる。

「……………諦めよう。ちい姉はああいう性格なんだ。」

そこで何か諦めた顔をした美炎。

「何か怖いな……………」

「もう……何も怖くないですよ。私は待っているから、心の底から私をお姉ちゃんを呼んでいる日を。そんなときは絶対可愛がつてあげるね!」

「……………絶対呼ばないから」

この日、都が苦手のものがまた増えた。

お姉ちゃん自称する美人が怖い。

その後、決勝戦が間もなく始まる。

都は速やかに舞衣の方へ「避難する」。

絶対あの長船の自称お姉さんと隣席にしたくない。絶対に弟扱いされそう。

「これより、折神家御前試合、決勝戦を行います」

そして、いよいよ決勝戦の幕があげたところ。そこで、とある人物の出現で現場が騒ぎ出した。

「御当主の紫様よ! 私初めて見た!」

「私も!」

観客席の刀使たちの視線が一気に試合会場横の寝殿造の建物の方へと注がれる。あそこにいる人物は折神家当主、折神紫だ。今回は決勝戦の場のみ立ち会うらしい。

そして四人の親衛隊と共に現れた彼女は、多くの刀使にとっての憧れの対象であるためか、観客席からは羨望や歓喜の声がひしめいている。

親衛隊の他の二人か……………一人は中等部みたいな子だね。

都の視線が小さい女の子の方へ注目する。薄い桜色髪の女の子……………彼女が親衛隊の一員だったら、一定の実力が持っているだろう。

少なくとも、可奈美たちに及べる程の実力者。

「礼、双方構え……写し！」

場内に可奈美と姫和が抜刀、正眼の構え、そして写シと流れるような動作で試合の準備をする。

可奈美……頑張れ。

間もなく始まる試合に、都も緊張の心持ちで可奈美を応援する。

「始め！」

試合開始。可奈美はいつものように相手の出方を探っている。元々柳生新陰流は後手を取る流派である、都でも間違えなく後手を取るだろう。

姫和もさっきの試合で、可奈美の実力を知っているはず。いきなり迅移を使うのではなく隙を狙っている……ように見えますが……。

何かおかしい……。

この観客席の誰よりも先に違和感を感じた都。彼女は構えこそしているが、その目は可奈美を捉えていない。別の何かを狙っている”。

「まさか……」

そして、ようやく彼女が狙っている方向に気付いた都は前々から感じたその何か起こる感覚が再び感じていた。

あのバカ！どこを狙って……。

都がまだ口に滑ったことを完全に出していない瞬間に、十条？和の姿が消えていた。

いや、消えたわけじゃない。彼女はあそこ、折神紫の元へ三段階の迅移を使って彼女を殺そうとしに行った。

◇

稲妻が走ったかのような音圧と衝撃と同時に姫和の姿が消える。可奈美が呆気にとられるのも束の間、姫和の身体が視線の先にいる人物——折神紫の眼前に出現した。

「それが——」

姫和の鋭い眼差しと共に放たれた小鳥丸の刺突。その刀身が紫の身体を刺し貫く――はずだった。

「お前の、『一つの太刀』か？」

あと寸前のところなのに、姫和を嘲笑うかのように、紫の両手に「何も無い空間」から「二本の御刀が現れ」、それを使って攻撃を弾く。

「……っ!？」

その場にいた紫以外の多くの親衛隊以外の者がその行動に言葉を失い、硬直する。中には動揺と恐怖で悲鳴を上げる者もいた。

当然、最も驚いたのは絶好の一撃を難なく弾かれた姫和だろう。彼女も困惑していたようだが、瞬く間に構えを直し、もう一度紫に切りかかろうとした。

「がっ……!？」

しかし、今度は紫ではなく背後から御刀に胸元を貫かれた。この場に？和の写しが一瞬解けられていた。それをやったのは親衛隊第一席の獅童真希である。彼女は最速の反応で？和を無力化する。

彼女は例え相手が後輩であろうと、容赦なく御刀を上段切りの構えで、写しなし生身の？和を斬り殺そうとしてた。

これは紫様を反逆する罪。誰であろうと、彼女と敵対する敵は容赦なく斬り殺す。それは親衛隊の役割ですから。

「はあっ!？」

獅童の御刀が？和ちゃんに斬り殺す……と、その瞬間に誰かに邪魔されて攻撃が弾かれた。

その者は彼女の決勝相手――衛藤可奈美だ。

「迅移!？」

可奈美は真希の斬撃を受け止めたまま、背後の姫和に向かって叫ぶ。姫和は可奈美の乱入に困惑こそしたものの、一旦引くべきだと判断したのか、再び迅移を発動させ門の出口へと駆ける。可奈美もそれに続いて出口へと向かう。

「追っな。」

その二人を追いつこうと思っている親衛隊を止めて、折神紫は逃げ

た二人を見つめた。

「あはっ！」

「待て！結芽！」

その時、親衛隊一番控えしにくい燕つばくろ 結芽ゆめが命令に聞かずにあの二人を追うことにした。

◇

本殿から逃げ出した可奈美と？和の二人を見て、舞衣と多数の学生たちはこの突発の発展にまだ反応してこない。

バカ！なんて彼女を助けようとしているの！いや、そもそもなんてこんなことになってんだよ！

唯一この場に状況を掴むのが都一人だった。

「私も混ぐぜて！」

そして、すぐ可奈美と？和の前に親衛隊の人が現れた。その人はあの年齢が一番小さい女の子だ。

「悪い、借りるぜ！」

「ちよつと……!?!」

名前さえも知らない刀使の腰部分の御刀固定設備を解除させ、都はそのまま彼女の御刀を持ち出し、観客席へ飛び降りた。

これくらいの解除作業は鍛冶科の人にとって毎日の朝飯くらいのことだ。

「お兄さん!?!」

舞衣の叫びを無視して、都は最大速度で可奈美たちより先にあの親衛隊のところへ走った。

最初は全力で彼女を止める！全集中！

「……………」

都は御刀を綺麗な一閃で、迷いなく彼女を斬りかかる。

そして、予測通りに彼女に避けられた。

「おにーさんは誰？邪魔しないで！」

「悪いが、うちの妹に通らせてもらうぜ。」

「お兄ちゃん!？」

「……………一般人っ!？」

もちろんその行動が逃亡した二人に気付かれた。そんなところで都は大声で出す。

「?和、可奈美!この隙にここから離れよ!俺がこいつを抑えられる間に…………っ!？」

「へえくくやるじゃない。お兄さん。」

まだ話がまだ終わってない途中、結芽が突然都と距離を縮まり、刺突の攻撃をした。

それをギリギリに防げた都だった。

なんですか!危うく反応ができないその攻撃は!？」

全集中の状態で都が初めて危機感を感じた。本来彼は相手の動きを先に読み、その初撃を完璧に防ぐはずだった。

けど、今回はギリギリの感じ。

「お兄ちゃん!」

「いいから走れ!」

自分が長く持たないと自覚していた都は急ぎに可奈美と?和をここから送り出したい。

目の前にいる女の子が強すぎた。写しが使ったとはいえ、あんな強さは都が初めて見た。

もしくは、彼女は可奈美より上の強者なのかもしれない。

「……………?和ちゃん!せーのー!」

都の決意を感じて、都があの子を止めるその隙に可奈美は姫和と共に、御刀を媒介として筋力を強化する術、八幡力はちまんりきを使って跳躍し大門の上を越えて逃走した。

よし、うまくここから逃げたみたい。けど…………。

「おにーさん、おねーさんたちと代わりに私と遊ぶの?おにーさんは結構強いよね?」

目の前にまた大きな問題がある。

「別の遊びなら、付き合ってもいいよ。」

「なら！」

彼女が動いた一瞬、突然何者か介入してきた。

「結芽！彼を殺す気か！」

その者は第一席の獅童真希だ。

「全く然く！おにーさんはきつと私の斬撃を防げるから、大丈夫よ。」

「……………っ!？」

「動かないでね。動いたら殺します。」

その時、もう一人の親衛隊の此花寿々花は都の後ろに刀を首にかけた。

ちようどその一瞬全集中が切れられたから、全然気付かなかった。

「チエ〜！つまんない。」

残念そうな表情で示した結芽は御刀を収まり、敵意を収まった。

それを感じて、獅童真希も一息を吐いて、御刀を収まり、都の方へ見る。

「さて、さっきの件でじつくりと説明させてもらうぞ。第五席。」

親衛隊の二人に捉えて、都はこれを最悪の状態だと呼ぶ。

どっちにしる。これでただじや済まないと思う。

そして……方が一舞衣ちゃんにも自分や可奈美のせいで危ない目で遭わせられたらまずい。

なんとか次の段階で、舞衣を無罪にしてほしい。

第7話：尋問

「ここまでだ、別れよ。」

御前試合の決勝戦で起こった折神紫暗殺未遂事件からわずか一時間後、犯行者である？和は可奈美とある神社の前にしばらくの休憩をする。

この距離ではすぐ追手が追いつかないのだろう。だが見つけられるのも時間の問題だ。

そこで、？和は一緒にここまで逃げてきた可奈美に別れを求める。

「ちよつと、それは無理だよ。一人じゃ……。あんな凄い迅移を使つて、写しはまだ貼れない状態なのに……。えっ!?ちよつ、ちよつと……。!?」

可奈美に向かって抜刀の構えを取った？和の瞳から敵意と不信用感が感じられる。

「……………さつき決着をつけたいと言ったな。なら今、相手をしてやろう。」

まあ、それも極普通の反応だ。自分か殺される存前になんの関係もない彼女に助けられ、一緒にここまで逃げていた。

普通にはありえない。だってこの事態においては自分と関わつたら、彼女も折神家に五箇伝の人たちに犯罪者扱いされる。

この件から彼女がこうする利益や意味さを感じない。故に？和は彼女を信用しない。

「だから、駄目だつてば!!」

「これ以上付き纏われるのが迷惑だ。ここで切り合うか、でなければ去れ。」

彼女の強い敵意を感じて少し慌てた可奈美。

しかし、可奈美の勘は自分にこう教わつた。このまま彼女を放つておけるわけには行かない。その理由はうまく説明できないが……。

「……………和ちゃんはこれからどうする?」

「私にはやらなければならぬことがある。」

「やりたいこと?」

「お前と関係ないことだ。それで、どうする？ 斬るかここから去るか。」

「……………もちろん、一緒に行くよ！ 今更、あなたと別れるわけにもいかないし……………それに、お兄ちゃんもわざわざと私達のため、あの親衛隊の人を止まらせた。」

そう、あの人は立場を関わらず親衛隊と戦って、可奈美たちがあの場から逃げ抜けるチャンスを作った。

そうするリスクもあの人はちゃんとわかっているはず。それでも彼は最愛の妹のために協力してくれた。

今更、彼の犠牲を無駄にするわけにはいかない。

「……………あの人はお前のお兄さんなのか？」

「うん、世界一番かっこいいお兄ちゃんだよ。私はどうあれ、必ず助けに来る私のお兄ちゃん。」

「……………馬鹿の男だね。」

「あ……………!!お兄ちゃんの悪い口を言わないで!?!和ちゃんにも彼に助けられたのでしよう!」

「別に助けられたか助けられない何も、彼は一般人だぞ! あんな身体で親衛隊に挑むとは命知らずに!」

確かに、流石に親衛隊の人と敵対するのはあまりにも無茶すぎた。けど彼なら大丈夫だと可奈美はそう信じている。

「……………それでも、お兄ちゃんは大丈夫! 約束してだもん! ずっと一緒にいるって!」

「子供だな。」

「?和ちゃんも同じじゃない!」

「私は中等部三年だが」

「え? 私より年上!?!」

「……………茶番はおいといて、お前の本当の目的はなんだ。」

目が細めて、?和は可奈美を睨む。今だに彼女の警戒が解けていない。

「え……………?だから安全の場所まで、一緒に逃げて……………」

「なんのために?」

「だから、力がちゃんと元に戻ったら、また試合をしてもらいたいから」

可奈美が？和に質問が迫られて、ちよつと困った顔で答える。

なんのだめなのかは自分でもわからない。けど、彼女と試合の決着をしたいという気持ちは確かだ。

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙に二人はお互いのことを見つめ合う。

そして、？和から先に可奈美との共通行動を妥協した。

「はあ……何か目的かは知らないが、邪魔になったら見捨てる」

こんな馬鹿な理由を持つしつこい人は彼女では二番目。一番目は小さい頃知り合ったあの男子。

構えを解け、？和は先より警戒心が薄くなった。

「それって……………」一緒にいいってこと？」

「好きにしろ」

「…………っ！うん！好きにする！」

嬉しい表情が顔に隠さない可奈美に？和は呆れられている。

この子はあまりにもわかりやすい…………あいつのように。

それから、？和は神社の下に入り、ある手紙を回収する。それで可奈美に警戒の任を任せた。

まさか、これを取り返す機があるとは…………元からは生きて帰れないと思つてた。

手紙を見て、？和は思わずそう思っている。

そして、手紙の上を書いてある文字は「十条 篝様」という？和にとつて何より大切なもの。

「あつ！私の荷物と携帯が宿舎に置きっぱなしだ！」

？和が私物を回収するところを見て、突然それを思い出した可奈美。

これつてお兄ちゃんや舞衣ちゃんに連絡が取れない！

「諦める。どの道、刀剣管理局から支給された携帯は居場所をバレる。だから私も元々携帯を持ち出してない。」

「それはそうですね……」

これってお兄ちゃんが勝手に暴走しないのかな？お兄ちゃんのことだし、きつと無茶をするのだろう。

都が無茶するところを心配していた可奈美であった。

◇

「それで、妹と十条？和の両名の犯行の動機はわからないまま手を貸したと？」

「はい。」

可奈美と姫和が逃亡した後、会場の喧騒は折神紫と親衛隊によって鎮められ、生徒たちは宿舎で待機となった。そこで、犯行者の協力役の容疑者たる衛藤 都は別室に設けられた椅子に向かい合って座った状態で、親衛隊の一人である寿々花から取り調べを受けている。

理由は簡単だ。彼はさつき犯行者たちの逃亡に手を貸したのである。

ちなみに、柳瀬舞衣も別室で取り調べられている。彼女は可奈美と同じ大会の出場者であり、親友でもある。そして、現在彼女は衛藤 都の主人である故にも、彼女から衛藤兄妹の動機を探る。

「馬鹿にも程があるですね……。あなたもそんな衝動的な人間には見えないのですが、少しでも自分の身分を考えてください」

身分とは都が第五席に昇進することです。

本来試合終了後、彼を第五席として迎えてくるんですが、彼がさつきやったことで無駄になった。

これで、例え無理矢理昇進させても、周りの人間に認められない。

「柳瀬家の執事としては少しでも考え不足でした。」

「そうじゃなくて！一応それも正しいのですが……あなたは本当に何も知らないのですか？」

「存じ上げませんね。そもそも、可奈美はともかく“十条さん”と

はほぼ初対面です。彼女の目的については知るはずありません。」

「和のことをわざと苗字だけを呼ぶ。それは彼女と無関係だと強調したい。それと、できるだけ妹の容疑を消したい。」

「……ですが、あの二人の連携。あれはどう説明しますの？ 我々から逃げおおせたほどの手際よき、初対面とは思えませんわ。」

「お二人が示し合わせていたとでも？」

「そう考えるのが自然でしょう？」

「そうですね……」

確かに、あれは都から見てもあの二人の連携は初対面だと思えない。都も可奈美に連携の重要さを教えてない。

さて……ここからどう撃ち返すのか。

都はこの尋問をただのゲームだと認識している。誰の弁論が一番強いのか試すゲームだ。

都は才能が溢れる人だ。学んでいたものは少しの間でうまく使い回す。

本来これは剣術に用いる才能ですが、母が死んだあとはその努力と才能を妹のために使った。

「仮にそうだととしても、俺にはそれを立証できるだけの情報はありません。」

寿々花は目を細めて都を睨む。さつきから彼の態度にイライラする。確かにさつきの会話は嘘に見えませんが、何も知らないとはおかしい。

「もう一つの質問。妹さんはともかく……十条？ 和に関する事は本当に知らないの？ 今朝彼女の御刀を見てたあの態度は些かに怪しいのですが」

問題方向を変え、彼を迫る。人は自分が疑われたときに些かの動作に慌てられる表現がある。つまりそれを見極めて、彼と十条？ 和の関連性を見つける。

しかし、都は極普通に応じた。

「あれは鍛冶科の人間では極普通の反応でございます。毎日御刀の研究を振る舞う人間はいつか御刀に特別の感情を生み出しているの

です。刀身が綺麗な御刀に興奮するのが我々の癖です。」

そう言つて、都は携帯を取り出しテーブルの上に置いていく。

「証拠を求めていただけたいなら、うちの鍛冶科の人間に聞いても構いません。私の無罪を証明できるなら」

「……………」

寿々花の目がさらに険しくなった。彼女はさつきイライラする原因は理解できた。彼がああ余裕ぶりの態度で次々の質問をうまく回避したから。

全く自分の質問攻めに影響されていないみたい。そこが一番ムカつくところ。寿々花は一応親衛隊の頭脳担当の軍師、心理方面や論破方面では親衛隊高く誇れる能力。

しかし、衛藤 都からは一つの間が見えない。彼の反応は冷静過ぎたから、心が何かを考えているのかは全く見透かせない。

これが第五席が隠した実力ですの？ 剣の腕前はともかく心理方面も専門しているようですよ……恐ろしい。

「俺からもいくつか質問をしても構いませんか？」

都は寿々花が無言になったところで、取り調べ中に生じた疑問について尋ねることにした。

「何ですか？」

「舞衣ちゃん……美濃関学院の柳瀬舞衣様にも、このような取り調べが行われているのですか？」

「ええ、今は真希さんが彼女からも情報提供をいただいている最中で——」

「舞衣様を疑われる理屈はわかります。が、不確かな状況にも関わらずあの方に尋問をしているのでしたら黙っているわけにはいきません。俺は一応そういうの嫌いなタイプですので」

「……気持ちわかりますが、これも我々の仕事ですので」

「——でしたら、なぜ扉の外に刀使方々を用意された」のですか？俺も舞衣様も危害を加えることなどありませんよ。」

「——！！」

流石の寿々花も都の発言に初めての動揺を見せた。なぜなら、彼が

外にある刀使たちの気配を感じたのだから。

「あまり俺を舐めないでいただきたい。一応第五席候補の人間であるゆえ、これくらいの気配察知は朝飯ですよ。」

「……………わかりました。」

寿々花は観念したのか、携帯で誰かと連絡を取る。二、三言話したところで通話を終え、直後に締め切られた扉の向こう側から複数の気配が消える。

「流石紫様に選ばれた人材ですわ。第五席……………よほど相応しい実力ですね。」

「それほどでも、俺はただ感知しやすいタイプですので」

「それは絶対に嘘ですわね。」

苦笑し、寿々花は都が持つっている実力さに驚かされた。さつき外で配置された刀使は結構手馴れた使い手で、気配などは簡単に気づかないはず……………それでも、都に察知された。

これは敵対したら、かなりまずい敵に違いない。

「ええ、ですが。これだけは絶対に嘘ではありませんよ。」

一瞬、都の目は険しくなつて、寿々花を睨む。

「柳瀬舞衣様は俺にとって替えようがない大事な方です。彼女に手荒な真似をしないでいただきたい。でないと、俺は全力でこの仇を取り返します。何倍もな。」

「……………折神家と敵対するつもり？」

「それはあなた達次第です。俺は喧嘩を売られたら、何倍をやり返すタイプです。そこはご了承ください」

「……………わかりました。柳瀬舞衣に手を出さないようにこちらがご注意します。それと、彼女の安全もこちらに保証します。」

都の警告を聞き、寿々花は珍しく相手に条件を譲る。

今のところは彼と敵対しないほうがいいと、寿々花がそう判断した。

「それはありがたい選択でございます。」

「……………あなたはいつもその調子である二人のことを大事にしたの？」

寿々花は調書を閉じて、呆れ顔で話を切り上げた。

この様子じゃ、どうやら尋問が終わったみたい。

「ええ、誰よりも大切の二方ですので。あの二人に手を出さない以上、俺は面倒ごとに入らない。」

「そう……幸せな方々ですわね。あなたは少し狂気しすぎたところもー」

ここで、寿々花の携帯端末が震えた。寿々花は「失礼」と一言挟んで電話に応答する。

「ええ、ええ……わかりましたわ。こちらも収穫なしですわね。衛藤 都もシロのようです。はい、ではまた後で」

寿々花は通話を終え、再び都に向き直る。

「今、真希さんの方も終わったようですよ。柳瀬さんは今回の件には無関係と結論が出たようですよ」

「そうですか。流石王子様。」

心の中で少し安堵していた都。柳瀬舞衣の安全は何よりも大切なのだ。

「それ、真希さんのこと？それと、元の口調に戻れましたわ。」

「あはは……それはつい……執事モードが結構きつかった。それと、あれはどう見てもイケメンの王子じゃない？俺が女だったら、全力で惚れちゃうよ。」

「まあ……女子のファンも多かったですわね。王子という称号は彼女にピッタリですわ。」

苦笑し、同じ親衛隊の寿々花もそれを理解している。

「マジか……」

「とりあえず今日のところはお二人に宿泊用の部屋を用意いたしますから、そこで休んでください。何かあれば、またお話を聞かせていただきますわ。」

「わかりました。では、失礼します。」

都は椅子から立ち上がり、扉を開ける。そのまま退室しようとしたが、一歩踏み出して止まった。

「その前に、さっきの警告の無礼に申し訳ない。此花さんは悪い人

じゃないのはわかります。俺って結構此花さんのことをお気に入りでしょ。俺は偉そうな連中が大嫌いですが、あなたはそうじゃないみたいです。」

それだけを言い残して、都は速やかに部屋から出ていた。

部屋の中に残された寿々花は力抜きて笑う。

「……………全く、どっちかあなたの本音なのか」

衛藤 都は初対面ではとても優しい人の印象。けど、さっきなのは大切な人のために悪人になってもいい凶悪の印象。

ますます真希さんに似ていますね。

あの人も大切なものを守るため、強くなるために、
“汚れた力でも借りた”。

◇

「舞衣様！」

「あ…………お兄さん。」

都は礼儀を失わないように早足で舞衣の元へ辿り着く。けど、舞衣の表情は酷く沈んでいた。

「お兄さん、大丈夫？何かされてない？」

「ご覧の通りに、無事だ。そつちこそ大丈夫？」

「……………ね、可奈美ちゃんは平気なのかな」

やっぱり、可奈美のことで気持ちが沈んだのね。舞衣ちゃんは俺のように心が強くわけじゃないですし。

親友である可奈美が犯行者を協力して、ともに逃走したから。それを心配するのが当たり前のこと。

「どうか、気を落とさないでください。可奈美のことだし、きっと平気さ。」

「…………あ」

舞衣の頭が都に優しく撫でられた。彼にこうされると、不思議と心が落ち着く。

「それに、俺も自分なりにこの事態を解決するつもり。ですから

……」

「……私も行く。絶対にお兄さんを無理しないように、お兄さんはいつも無理しているから。」

都が事態を解決すると言ったら、舞衣はすぐ都の手を握って真剣の顔を都を見つめる。

さつき曇った表情より明るくなったみたいで、良かったと思うけど、俺が必ず無理する前提の会話だね。俺ってどう誤解されたのでしょうか？

自分の無理やりに自覚がない都。

「それに、私も可奈美ちゃんを助けてやりたい。」

「うん。とりあえず、もう夕暮れですので今日はお部屋でお休みにしよう。明日から二人で捜索に加わりましょう。」

「……………っ！はい！」

嬉しい表情で頷いた舞衣。彼女の顔を見て都も少し安心した。

「それじゃ、部屋に戻ろう。」

そして、二人は折神家の敷地内に設けられた宿舎へと向かう。

その途中に――

「舞衣様、お電話が……………」

「え？ うん、誰だろう――」

刀剣類管理局から支給された刀使たち用の…………元い舞衣の携帯端末がポケットの中から電話の呼び出し音が鳴らす。舞衣は少しぼつとしているように見えだが、都に言われて数秒遅れて携帯端末を取り出し、画面の発信者を確認する。

「これって…………」

舞衣の携帯端末に表示されている名前は『公衆電話』。発信者が誰なのか知らんが、二人の頭には共通の人物が浮かんだ。

「まさか…………」

「可奈美ちゃん…………かも」

可奈美の性格から考えて、親友である舞衣に何の連絡もなしというのは考えにくい。かといって、逃走の際に可奈美は荷物を宿舎に預けていた。その荷物には彼女の携帯端末もある。となれば、潜伏してい

る場所から公衆電話で一報入れるというのが妥当だ。

これって……追跡できるかも。

そう計算して、都は全集中の用意をする。

舞衣ほどの能力ではないが……それでも、可奈美のためならなんだってやり見せる！

「舞衣様、近くには誰もいません。スピーカーを」

都は周囲の人影と気配を探る。盗み聞きされるような位置には誰もいない。音量に気をつければ大丈夫だろう。

舞衣は頷いて応答の後にスピーカーのアイコンもタップする。

「もしもし……っ？」

「舞衣ちゃん？ 私。可奈美だよ」

——来た。

電話口から聞こえてきたのは間違いなく可奈美最愛の妹の声だ。

「可奈美ちゃん、今どこ？」

「どこって……えっと、どこなんだろ……ここ」

困ったような声。計画的に移動しているわけではないらしい。全く……彼女らしいというか。

そういえば、そばに？和もいったつけ？彼女も無計画に？

流石にあの人はそういうタイプじゃない……でも、たまに頼りがないところもある。

「舞衣ちゃん、その……どうしても言っておきたかったんだ。迷惑かけてごめんね……それから、私は大丈夫だから」

「……………」

いつもの可奈美だ。間違えなく彼女が舞衣たちを騙していたなどということはない。その事実には都は吐息を抑えながら安心する。

少なくとも、彼女は無事だ。

——さて、そろそろ始めようか。

可奈美の安全を確認した都は全集中を使って、全感官を最大限に上げる。

特に聴覚を集中する。

——僅かな人の喧騒、車の通る音……

思考も加速する。人は思考に集中するときには膨大の情報量が秒的に脳内に出現する。

環境から受けた情報を一瞬に脳内で掴まう、それを整理する。これは都の異能——全集中。

けど、この技は脳内に大きな負担がかかるため、いつも使うわけにはいかない。

一日10回はその限界だ。そして、全集中よりもっと上の段階がある。それを使えば、一日に思考が停止させられて、生活に大きく負担がかかる。

屋外のそれなりに人が通る場所……人の目と逃走資金、休息のことを考えれば、小規模のホテルでしょうか。それは妥当かと……。

「あつ、ごめん！ 小銭ないからもう切れちゃう」

可奈美が慌てて電話を切ろうとするが、その一瞬に彼女とは違う声が混じって聞こえてきた。

『「こちらは防災台東です。子供たちの見守りを第一に……」』

「—————」

遠くまで響く拡声器越しの声。これは可奈美の近くの人の声ではない。放送の声だ。

——今の放送は台東区近く。ならば、その近くに搜索していれば……

「それじゃあね、舞衣ちゃん！」

「ちよつ……可奈美ちゃん！」

舞衣が呼びかけるが、一方的に通話が切れる。可奈美が切ったのか、それとも小銭を追加で入れなかったのかはわからないが、それは関係ない。

今の電話だけで「都には十分だった」。

「……舞衣様。申し訳ありませんが、お一人で宿舎へと向かえますか？」

「行けるけど……どうしたの？」

「実は今日お祝いするために、宿のネットで買った食材のことを思い出した。俺は先に受け取り場所へ行くけど……舞衣様の身体を考

えると、先に宿の方へ戻っておきたい。」
もちろん、これは嘘だ。

例え舞衣と一緒に行きたいと言っても、都は一人でやり過ごしたい。

それに……？和と色々話しがしたい。

「……………わかった。ちなみに量が多い？」

「はい、宿の人に預金がもらっているので、たくさん買っちゃった。彼らのためにもそれくらいのも量も買っちゃいました。」

「うん……………それじゃ、私は先に戻るね。」

「お気をつけて……………」

都がついた嘘を全く疑われない舞衣が彼と別れ、そのまま宿舎の方へ戻っていく。

それじゃ……………

都は冷静に脳内で情報を整理しながら台東区の方へ向かう。

必ずお前を見つげ出す。可奈美。

第8話：逃亡した二人と追手

こんなことは予測ができなかった……。

自分の全力を込めた《一つの太刀》にそれなりの自信があるのに……見事に防がれた。

折神紫の暗殺失敗について、？和は濡れた髪を拭きながら反省する。

今、彼女たちはなんとか身分を隠して、できるだけ遠くまでに行き、そしてようやく住所を確保した。当然、使ったのは？和のお金だが。まさか、何も無いところから両本の御刀を取り出すとは思わなかった……。

「あれも大荒魂の能力なのか？」

厄介だな、これでは暗殺は不可能。正面では太刀打ちもできなさそう。

最強の技さえも防がれたからな。これからはどうすれば……。

「……………」

誰かこの宿の部屋に近づく気配を感じて、？和は頭を拭くという動作を止めて、速やかそばに置いてある御刀を手に入れ、抜刀の構えを取った。

「ただいま、弁当も買ってきた……あつ。」

そして扉が開かれ、弁当を買って来た可奈美はぼつとした様子で警戒している？和を見た。

「……………」

相手の身分を確認した？和は構えを解け、一息を吐いた。

幸いのことには追手ではない。

それから、しばらく弁当を食べたら、可奈美もコインシャワーを使っ戻ってきた。

「コインシャワーって初めて使ったよ。制限された時間内で終わらせるのは結構きついかも。」

そこで、コインシャワーに感想をつく可奈美。確かに、あれは風呂が好きそうな女の子にとって結構きついもの。

「緊張感がないやつだな。」

「えへへ、お兄ちゃんにもそう褒められたよ。お兄ちゃんはそういうところは可奈美らしくて、可愛いと言ったよ。」

「……………やっぱり変なお兄さんだね。それと、褒めてないから。」

「私にとつて褒め言葉です！えっへん！」

胸を張って自慢する可奈美。やっぱりこいつは馬鹿なのか？それともあの兄の影響なのか…………。

「……………」

御刀を抜いて、？和は御刀に集中する。彼女は自分の状態が戻れるかどうかの確認。

折神紫を殺すために使った《一つの太刀》は3段迅移を使った突刺攻撃である。その副作用は二、三日に体を弱体化させる。

けど、十条？和にとつてあの副作用は大したことじゃない。あの技を使ったあとに親衛隊の人に刺された影響の方が大きい。

「……………どう？」

可奈美は慎重に聞く。彼女も刀使であるゆえ、こういう動作もよくわかる。

「……写しくらいは貼れると思う。」

「…………それは良かった。写しは大事ですよね。」

「ああ…………そうだな。追手も刀使が含まれる可能性も高い。」

そもそも相手が刀使である以上、平和で解決したいなら刀使に任せれば死傷も抑える。

「……………それより、あの御刀の切っ先の峰側にも刃があるね。」

そんな時、可奈美はキラキラした目で小烏丸を見つめた。どうやらその構造に興味を持っているみたい。

まあ……………わからないもないが、あの人もかつてそんな目もしてた。

「鋒両刃（きりびきりせうりょうば）という昔の造りだ。小烏丸造（こがらすまるづくり）でも呼ばれている。」

「へえくなるほど。それであの時に突き技だったんだ…………」

「あの時？」

「ほら、ご当主様に止められた時——」

「——っ！お前、あの突きを見えたのか！」

「うん、なんとか。あんなに早い迅移は見たことがないよ！あの技も凄かったけど、他の新当流の技も見てみたい！小さい頃はお兄ちゃんから僅かしか見てないから、ずっと気になって……」

「お前のお兄さんも鹿島新当流の使い手？」

「ううん、私と同じ柳生新陰流の使い手だよ。ただ、たまたま新当流の技も示すんだ。まあ、小さい頃の話だけどー？和ちゃん？」

突然沈黙した？和を見て、可奈美は話をかける。

「……なんでもない。それより早く休もう。特にやることもないなら、まず身体を休ませたい。」

「ええ、まだ早いよ！」

「ならお前のお兄さんの話題でもしようか？よほど彼のことが好きだな。」

「うん！大すーやっぱり寝ましょう。」

話の途中に、可奈美の顔が僅かに赤くなった。

「わかりやすいだな。お前。」

「えっ!?それ、どういう意味!」

「そのままの意味だ。では、お休み。」

「早っ!?!」

いつの間に、布団を取り出して畳の上に置く？和は寝る体勢を取る。

それを遅れた可奈美も急ぐ布団を取り出し、畳の上に置く。

「灯りを消すのも忘れないで」

「わかったよ!?!和ちゃんは冷たい人だね。」

「ーそうでもないと思いたいけど。実際は冷たいかも……。」

今回の件で、岩倉さんにも迷惑をかけたし……大丈夫かな？あの子。

同じ平城学館の代表のことを心配してた？和。彼女にとって岩倉早苗は少し特別な子だ。

頑張り屋さんで、いつも樂觀で、何より自分より女の子ぽくて可愛い。

学校の時にもずっと馴れ馴れしい態度で近付こうとしてた不思議。

議の子。確かに、彼女は私を憧れたと言っていたな……この件で幻滅されたのかな……。

まあ、そつちのほうがいい。私は今、追われている悪者。彼女と今までの関係の修復を望まない。

にしても、可奈美のお兄さんは私と同じ新当流の使い手か……。

可奈美の言葉を思い返すと、？和の脳内は一瞬ある男の子の顔が現れた。

いや……ないな。そんな奇遇のことじゃあるまいし。それに、彼に自分のせいで巻き込まれたくない。

今頃、彼はどこで何をやっているのだろう……。

思い出の男の子を思い、？和は目を閉じ夢の世界へ落ちた。

◇

台東区の近辺。都は夜間に小規模な宿泊施設に狙いを定めて地図の検索にかける。

「……………大部、掴んだな。」

商店街の中に備えられた格安のホテル、条件に一致するのはその一つだけだった。決勝戦の時間から可奈美の電話までの時間から考えれば車であっても、移動できる距離はある程度に短い。制服や御刀を隠すための偽装のことも考えるとさらに短くなる。

「ならば、このホテルにいる可能性が一番高いという……はずれなければいいのですが……。」

掴んだ位置情報を見ながら、都は気配を消してホテルの方へ歩く。

これは彼女たちが察知されて逃げられないように用意する行動だ。

そして、彼は今この推測がはずられたことに心配している。だが、さつき電話で放送の声が聞こえてきたということはあの時、台東区近くにいたことは確かだ。可奈美も舞衣を騙すような行いは絶対にしない。ならば、唯一不安定の要素は彼女のそばにいる？和。

彼女は可奈美より慎重な人だ。なんにせ、この事態を作った張本人ですから。

まあ、この事態になっているのは彼女が望んだ状態ではないのが知っている。

だからこそ、そこは彼女より慎重にしないと。彼女はきつとこういう困境でなんとなくを抜け出したいと思う。

信じている人間も多分可奈美だけ。

「失礼します、少しお尋ねしたいことが」

ホテルに入り、フロントに座っている四、五十代の女性に声をかける。

「は、はい」

そこで、都の冷たい雰囲気になんかの怯えを見せている女性。だが、そんなことは些細な問題だ。早く聞きたいことを聞かなければ。

「こちらに、この写真に写っている中学生くらいの少女二人が宿泊していませんか？」

「えっ？ ええと……」

都は操作資料にあった可奈美と姫和の顔写真を見せながら尋ねる。

女性は慣れない質問に答えあぐねていたが、すぐに表情を切り替えてマニュアル通りの返答をする。

「失礼ですが、どちら様ですか？ お客様の個人情報はお教えできないんですが……」

「申し訳ありません、先に言い忘れました。俺はこの二人のお兄さんなんです。彼女たちが近くにいて聞いて、せっかくなので会いに行くと思って……ちなみに黒髪の方は別の母との子供です。これは俺の身分証です。」

身分証を渡し、都は冷静でこういう人生初めてのこの状況をうまく嘘で誤魔化す。

女性は少しの猶予だが、すぐ彼女たちがいる部屋を都に伝わった。

「ありがとうございます。」

感謝という言葉を残して、都は彼女たち——可奈美たちにいる部屋に向かった。

けど、そこにいるのは人がない空の部屋だった。

◇

「追手は意外に早いな……どうして、ここを特定できたんだ？」

深夜に？和は足音を抑え、裏道に移動する。

さつき彼女はたまたま喉が渴いたから起きて、窓の外に黒いスーツの男が宿に入っている姿を気付いた。

そこで急いで可奈美を起こし、一緒に窓から逃げた。

「ごめん……私のせいかも……」

「はあ？」

「……多分、あの時……公衆電話で友達に連絡しちゃったせいかも……」
可奈美の告白を聞き、じとくと見つめる？和に可奈美は何度もごめんと呟いていた。

「まあ、どうせそんなところだろうと思った。おかしな奴だと思って
いたが、普通に友人を気に掛けるところはあるんだな。」

「………これから、どうする？」

なんか許された雰囲気にか奈美は？和に尋ねる。

「そうだな……人が多い所の方がかえって人に紛れて目立たないかも
知れないな……」

そう言つて、？和は気配を察知しながら、可奈美と移動する。

ーそれにも………相手は手馴れているな。気配はほとんど隠
したが、完全に感じられないじゃない。

わざなのか？それとも技術不足？

そう推測して、？和は朝か迎える前にずっと後ろについている気配
に胸がドキドキした。

こんなにしつこい追手は？和には初めて見た。

◇

「いつの間に朝になったか……」

一夜中に都は可奈美たちを探し回っていた。けど、その結果はご覧のとおりにゼロだ。

本来は朝までは可奈美たちを掴むつもりだったが、こういう考えが甘かったのようだ……。

そして、都は原宿で朝食を済ませた後、一夜中に走り回った身体を休ませるために代々木の近くで休む。

流石にこんな疲れた身体では長く持たない。

それに、全集中を使いすぎたせいで消費した精神力も回復させないと……。

「舞衣ちゃんに叱られるかも……」

流石にこの時間では舞衣にバレるだろう。元々あんな嘘じや時間が長く続くほど、バレる確率が上がる最低の言い訳。

きつと、舞衣も今頃自分が可奈美たちを追うことに気付かれたのでしよう。

本来は気付かないうちに解決すると思っていたのに……これは叱られる確定だね。

「はあ……それにしてもこんな疲れは人生初めてかも。」

可奈美たちを追跡するために、何回の全集中を使った。そのせいで、身体に非常の負担がかかっている。

「……とりあえず、休もん。この状態じゃ、追跡は不可能とー」

休憩と思つて、目を閉じる都は突然悲鳴みたいな声が聞こえた。

声の大きさから考えると、ここから結構距離がある。

「あの悲鳴は……この付近には荒魂か？」

早速、その可能性を考えついた都。

もちろん、それ以外の可能性もある。けど、都には荒魂の方が信じたい。

だって、もしそれが殺人事件や犯罪事件だったら、滅茶苦茶怖い。それに、巻き込まれたくない。

「……とりあえず、一段ここから離れよう……間もなく避難警報で

もーいや、むしろこれは好機かも。」

ペンチから上がり、避難しようと思っていた都が突然ある可能性が思いついた。

可奈美はこの近くにいたら、きつと化物を放っているわけがない。きつと祓う為にそちらへ向かっていくはず！

もちろん、これはただの推測に過ぎない。それでも、都はその推測を載せたい。

妹のためなら、やれるものが全部やる。それは都の信念だ。

「さてー特別に荒魂の見学でもしようか」

◇

「特別祭祀機動隊です！ 早く避難してください！」

蠅のような羽と体躯、全長3メートルはあろう荒魂が町の神社の境内に出現していた。

そこに避難指示を出した二人の逃亡者ー可奈美と姫和は羽織っていた黒いパーカーを脱ぎ捨て、御刀を仕舞っていたギターケースを放り出し、抜刀、写シを張る。

昨晚、宿を特定された二人は人の多い原宿まで移動し、時間を潰しながら今後の作戦を立てていた。そんな折、姫和のスペクトラム計がこの荒魂を感知したのだ。

ちなみに、スペクトラム計は「ノロ」という荒魂の一部を利用して、荒魂を感知する旧型の荒魂探索器だ。しかし、あれはノロを利用した故に多少の危険性があるから、大部は回収されて、新型に取り替えた。

「私から行くから、追い込んで！」

「了解！」

「へええやあつ！」

可奈美は荒魂に突進し、御刀で斬りかかる。しかし、荒魂はその動きを察知し、羽を振動させて空中に舞い上がる。

「飛行型!?!」

そして、それに驚かせた可奈美。彼女は初めて飛行系の荒魂を見た。

「……………はぁ!」

荒魂が空に飛んで、?和の方に突っ込む。それを対応するため、?和は八幡力を使い、その身を引き裂くつもり。

けど、まるでダメージが通じないみたいで、僅かのかす傷しか与えられない。そして、荒魂は再び空へ避難した。

「ー浅い!可奈美、やつを頼む!」

「了解。八幡力ー!」

八幡力を運用して、高く飛び込んで、可奈美は綺麗の一閃を放ち、その荒魂を払った。

墜落した荒魂は地面に落ちて、そのまま動かなかった。

「やったー!」

「ふう……………見事な動きだな。」

御刀を収め、二人は御刀を鞘に収まった。

「えへへ、?和ちゃんに褒められた。」

「それくらいは当然だから、あまり自慢しなー!」

「ーようやく見つけたよ。二人共。」

一瞬、?和は声に反応し、速やかに抜刀の構えを後ろに向けた。

「ー流石、?和。反応が早いな。」

?和の目線に入るの黒いスーツを着た紫髪の青年。

「お前はー!」

?和と違って、ゆっくり声に反応していた可奈美はそこにいる人物に驚かされた。

「お兄ちゃん!」

その人物は彼女の兄ー衛藤 都だ。

第9話：偽りの約束

「可奈美、無事のようで何よりだ。」

青年——衛藤 都は安心した顔で可奈美親愛の妹の方へ見る。

「お兄ちゃん、どうしてここに!? 逮捕されたじゃなかったの?」

「もちろん、あんなことをやって長い時間に尋問されたが、シロだと判明されて無事に解放された。心配してくれてありがとう。」

「——そうか、良かった。」

安堵した表情、可奈美は兄の無事に息を吐く。

「可奈美、警戒を解けるな!」

しかし、そこには都のことを警戒し続けている? 和がいる。

「え? でも、お兄ちゃん……」

「お前、なぜ私達の居場所を知っている! それと、何しに来た!」

抜刀の構えを取り、? 和は相手を脅すよう強い敵意を示す。これは一つの心理戦法である。

相手に例え無力な人間だとしても、御刀で斬ることができず知らせる。そうすれば相手も強引な行動を取れない。

「——まず、居場所から説明する。俺は可奈美との認識から彼女はちよつと正義感が強い子で、荒魂が出現したら、放っておけないという可能性が高いと推測してやってきた」

「……………そうだな。」

「二人共!」

横目で可奈美を見て、? 和は都の推測に認めた。

本来、? 和は荒魂を他の刀使に任せているつもりだが、可奈美に無理矢理説得された。

「それから、ここに来る理由についてはただお前が折神紫を狙った理由を知りたい。」

「……………悪いが、教えることができない。」

「……………信用しないのもわかる。でも俺はお前たちに手助けをした
い!」

「なぜ? お前はお前の立場をちゃんとわかっているだろう! また、

あの時のようなことをすると、お前はまた折神家に疑われるよ。」

「――心配してくれてありがとう。けど、そんなことより妹の方が重要なんだ！」

可奈美の方へ見て、都は真面目の顔をした。

「彼女のためなら、折神家でも喧嘩を売れる覚悟がある。決して誰にも彼女を傷つけさせはしない。」

「お兄ちゃん……」

「――お前、狂っているのか？」

都の発言に呆れられた？和。

彼女から見ると、きつと目の前の男は狂っているように見えるのだろう。折神家に敵を回すということはこの国全体と敵に回るということだ。

ただ妹を守る程度のことでのこの国全体と敵に回すのは普通ではありえない。

「……俺はただ妹を大事したいだけの兄だ。そして、お前のことも助けてやりたい。」

「なぜ――」

警戒がさらに上がった。

「………可奈美はお前のことを信用しているからだよ。」

「そんな理由で……」

「ああ、だから言っただろう？妹のためになんだってやるさ」

「………」

「？和ちゃん、お兄ちゃんを信じよう。そこまで言うから、私達に危害を加えないよ。」

「………わかった。ひとまずお前のことを信じよう。」

構えを解け、？和はいつもの態勢を戻す。

「ありがとう、？和」。早速ですが、ここから離れよう、でないと折神家――」

「お兄さん！下がって――」

そこで、いよいよ事態がうまく行くときに予測外の一声がこの三人の耳に入り、三人はそれぞれの反応をした。

「……ッ!?」

「……ッ!」

「舞衣ちゃん!?」

そして、その声主は都を庇う態勢で? 和と対峙する。

「お兄さん、怪我はない?」

「舞衣様、どうして……」

舞衣は御刀を抜く状態で都を庇う。

なんて……お前はここにいるのよ。

例え携帯端末に備えられているスペクトラムファインダーを使つて、この場所に荒魂が出現したことを知ったとしても、他の刀使たちよりも早く到着したということはおかしい。

もしや、彼女はこの近くにいるから? いや、でも……なんでここを知っている?

「昨日の可奈美ちゃんとの電話、その音声データを柴田さんに解析してもらったの。そして、スペクトラムファインダーでここに荒魂がいるのがわかったから。」

「ークソ爺、余計なことをしないでください……」

都は心の中で先輩執事を叱っている。本来、舞衣に来て欲しくないと思つたのけれど。

「それと、お仕置きはあとですから……そこでじっと待ってて」

「………えっ?」

お仕置き? 俺に? それとも可奈美に?

舞衣の少し怒っている様子に都は僅かの寒気を感じた。

「また、お前の知り合いか?」

「うん、舞衣ちゃんは私の親友で……」

「親友だと言うなら、なぜ御刀を向けている?」

「私は可奈美ちゃんの親友です。親友だから、可奈美ちゃんは私が助けます。」

写しを纏って、舞衣は臨戦状態だ。

「ちよっと、二人共。なんで御刀を!」

そして、? 和も写しを使い、臨戦状態を保つ。そのせいで、この場

の雰囲気がまずくなつた。

「舞衣様……」

「お兄さんは黙ってて」

都を黙らせて、舞衣は可奈美の説得を始めた。

きつと彼女も可奈美と戦いたくないだろう。

「可奈美ちゃん、聞いて。私、羽島学長と約束したの。今戻れば罪が少しでも軽くなるよう全力で助けてくれるってー」

「……………」

「可奈美、これはいい機会だ。お前は帰れ」

「そんな!?和ちゃん……」

「ずつと考えてた、お前に迷惑をかけたくない。お前のお兄さんと友達もお前のことが心配している。」

「?和ちゃん……」

そして、向こうもどうやら可奈美をこちらに戻らせると考えている。

でもー。

「それと、もう一つの条件がある。十条さん、あなたも一緒に折神家に同行させてもらえます。」

舞衣の一言にそんな希望が破れた。

「残念だが、それは協力でできない。」

?和は鹿島新当流の構えを取る。彼女はさつきより戦闘意識が高くなる。

「協力しなくてもいいです。私が力づくであなたを制服します!」

「やってみろー」

そして、現場での緊張の雰囲気が最高点に至る。舞衣から先攻を取った。

「舞衣様ー!」

声が届かず、舞衣は?和と交戦始めた。

お互いは迅移を使って、数回の攻防を行っていく。

そして、ただの数回の剣と剣のやり合いで都はあることを気付いた。十条?和は明らかに劣勢に落ちていること。

御前試合の彼女なら、そこまで弱くないのに……もしかすると、決勝戦ときの傷はまだ治ってない？

「くっ……！」

「私はこの一年半……うん、可奈美ちゃんと知り合った日から、ずっと可奈美ちゃんの剣を受けてきました。」

「十条さん、あなたの剣は鋭いですが、可奈美ちゃんよりまっすぐで見やすいです。それに、昨日見た剣筋は……足りません！」

舞衣の動きがさつきより早くなり、その速度は？和にも反応が取るのは遅れている。

しまっー

舞衣の攻撃が？和に届くその瞬間——舞衣の攻撃が弾けられた。

「——ッ！」

彼女の攻撃を弾けたのは可奈美。

そして、彼女はとても悲しい顔だった。

「可奈美ちゃん……なぜ？」

そして、舞衣も同じ悲しい顔だ。

それを見た都も心が痛くて仕方ない。

「舞衣ちゃん、ごめん……私はまだ帰っちゃダメ。私見たの。あのとき……姫和ちゃんが御当主様に斬りかかったとき。何もないところから二本の御刀を取り出して……そのときに、御当主様の背後に……荒魂の目がある！」

「え……」

舞衣はその『荒魂』という単語に疑問と、驚愕、そして半信半疑とあった風の表情に染められる。もちろん、都も同じ反応だ。

ご当主様は荒魂？冗談じゃない。見た目は普通の人間に見えるのよ！

けど、もしそう解釈したら？和の行為は話を通じられる。

でも、荒魂が人間の姿にはあまりにも……。

「お前にも見えていたんだな。」

「うん、僅かの一瞬ですけど……」

「？和、それはお前の理由なの？」

「そうだ……。信じられない話だけど、あの折神紫は大荒魂だ。」
偽りが無い瞳とその口調……。都にはわかる。？和が言っていることはたぶん本当だ。

けど、よりによってあの大英雄は大荒魂とは……。つまり、日本はずっと大荒魂の支配下にいるってこと？

そう思うと、気分が悪くなる。

「何を……。言ってるの？可奈美ちゃん。御当主様が荒魂だなんて

……。あの人は大荒魂討伐の大英雄で——」

もちろん、刀使にとってはそれはあまりにも荒繆のことだ。だって、彼女——折神紫は刀使達の憧れ、頂点に立つ大方だから。

「違うー！」

困惑する舞衣の言葉を遮って叫ぶ姫和。

「奴は二十年前の、その討伐されたはずの大荒魂だ！」

彼女は憤りと悔しさが^{なймаせ}絢交になったような表情で訴えかける。可奈美も真剣な表情でそれに同意する。

「じゃあ……。刀剣類管理局も、伍箇伝も……」

「ああ、荒魂に支配されている状態だ」

舞衣は未だ半信半疑の状態は解けていない。けど、さっきも言ったように、姫和が全身全霊で紫を討とうとした理由も、可奈美がここまですべて必死になって姫和と一緒に逃げている理由も、折神紫の強さの理由もそれを解釈したら話が通じる。

「お兄さんは……。知ってたの？このこと……」

舞衣は助けを求めるかのように都に尋ねる。都は数秒黙っていたが、やがて口を開いた。

「いいえ、舞衣様と同じくさっきまでは知らなかった。」

それは本当の話だ。けど、舞衣ちゃんと違って彼は姫和が言っていたことを受け入れる。

なぜなら、？和のその表情は……。哀れくらいに助けてやりたい。

この十年間は彼女はそれを知っていて、一人で悩み続けた。そんな大事なときに……。自分は彼女のそばにいなかった。

「けど、俺はそれを信じる。十条さんのその表情は何よりの証拠

だ。」

「そっか……お兄さんもそう思うなら。わかった、可奈美ちゃん、行つて。後のことは私がなんとかするから。」

「うん。ありがとう、舞衣ちゃん！」

舞衣を諫めたところで、遠くからサイレンの音が響いてくる。刀使とノロの回収班がこの場に近づいているのだ。ならば、可奈美と姫和が今この場にいるのは危険すぎる。

「舞衣様、じきに折神家に勘づかれます。」

「う、うん。可奈美ちゃん、これ。持って行って」

舞衣はポケットからクツキーの入った袋を取り出し、可奈美に手渡す。

「これ、舞衣ちゃんのクツキー!? ありがとう、後で姫和ちゃんと食べるね！」

お気に入りの舞衣の手作りクツキーにはしゃいでいる可奈美。それに対して、姫和は放り捨てていたパーカーやギターケースを拾い、逃走の準備をしていた。

「早く行くぞ。長居はまずい」

「お待ちください、十条さん」

「ーおっと、これはなんだ?」

?和は都から投げられたものをキャッチして、それを訊く。

「後ろに書いてあります。では、お気を付けて」

「……………わかった。ありがとう、あの時も助けてもらって…………」

あの時……御前試合の時か。

「いいえ……お礼を言うほどの礼じゃありません。ええ、本当に…………」

悔しくて、都は拳を強く握る。

できれば、あの時のお前のそばにいたい、助けてい。

そして、?和たちと別れを済ませた後。彼女達はすぐこの場から離れた。

「お兄さん、さつき渡したのは?」

「秘密は執事の神秘の魅力ですよ。舞衣様。」

「……………そう。では次は『お仕置き』の時間ですね。」

「はい……………はい?」

「お兄さんは私を騙して、一人で可奈美ちゃんたちを捜索することは私はまだ許していませんよ。」

「……………」

怖っ！御前試合より怖い！

今は笑顔だが、滅茶苦茶怖いー!!!

「逃げることも許しませんから。」

腕が組まれて、腕は舞衣の胸に当たった。

けど、その幸せの感触は今だに感じられない。なぜなら彼女は滅茶苦茶怒っている。

そういう感触はそんな恐怖感に抑えられた。

「……………モウシワケゴザイマセン」

「謝っても、許しません♡」

この日、都はよくわかった。舞衣はこの世、一番怒っちゃいけない人間だと。

◇

「先程渋谷区代々木神園町に出現した荒魂を、衛藤可奈美、十条姫和の両名と共に討伐。しかし、あと一步のところを取り逃がしました。報告は以上です。申し訳ございません。」

「……………時間の無駄でしたわね。」

可奈美と姫和を見送った数時間後、舞衣と都は刀剣類管理局の捜査本部に戻り、今回の件の報告をしていた。

無論、本当のことを話すわけにはいかない。荒魂の討伐に向かい、確保しようとしたが逃げられたという筋書きにしておいた。報告を受けた親衛隊の此花寿々花は残念そうにため息をつく。

「居場所を特定できただけでも十分よ。二人とも休んでいて」

同じく、捜査本部のモニター席に座っていた美濃関の羽島学長からは労いの言葉を貰ったが、親衛隊の二人、真希と寿々花の顔は苦々し

い。ようやく掴んだ二人の手がかりが、またなくなったのだ。まあ、このくらいは予測済みだ。なににせ^{第五席}スコンも当场にいるから、私情で彼女たちを見逃せる可能性があるかもしれない。

それにしても、逃走の翌日で早速彼女たちを見つけ出す能力は人材としては、都はかなり優秀の類だ。

「はい。では、失礼いたします。」

「待って、衛藤 都。」

「……………なんでしよう?」

突然親衛隊の獅童に呼ばれ、都は彼女の方へ睨む。

そして、隣の舞衣は不安そうな顔をした。

「この件は紫様に^ご報告いたします。あなたの任職については少し待っていてくれ」

「真希さん……………」

獅童はまだ都の勧誘に諦めていないようだ。そして、彼女の思いを知っていた寿々花は小さくため息をついた。

確かに彼は優秀の人材ですが、彼が叛逆者達を掴んでいない限り、外から彼に対する評価は変わらない。

「……………わかりました。舞衣様、行きましようか」

「う、うん!」

都と舞衣は一礼して部屋から出ようと思っていた。が、向かおうとした出口のドアがノックもなしに乱暴に開けられ、思わず足が止まる。

「何をやっている、親衛隊!!」

一人の女性が声を荒げながら入室する。紫髪に赤いスーツ、ヒールを履いているせいか結構な長身に見える。年齢は三十代半ばといったところか。

そして、何よりその高圧的な態度と口調だ。部屋中のほとんどの人間の表情が一気に嫌悪感を含んだものになる。

また、この「ババア」か……………。

彼女を見て、都も嫌悪感を表情に強く表した。そして、一年前の嫌な記憶も脳内に浮かべた。

一年前、彼女は沙耶香に精神的の痛みを与えた(多分)。そんな怯えた沙耶香を見つけ、都は衝動的に彼女を守ろうとした。

あんな小さい女の子をビビらせるのは都は許されなかった。あの時、彼女はお腹が空いているのよ！少し彼女の我が儘を聞いても良かったのに、そんな悪そうな口調で彼女をまるで道具みたいに呼び使うのは納得いかない。

「高津学長、いらしていたんですか」

真希がその女性の名前を呼ぶ。高津雪那たかつゆきな、彼女は鎌府の学長だ。

「当然です！私は一応現場の指揮官ですから。それより、叛逆者達はまだ捕まらないですよー！」

「ただ今は追跡中です。それと、紫様のご命令は親衛隊をしばらく待機ですので、今のところは指揮代理の任を」

「チエ……使えない奴らだ。」

小声で文句を口に漏れた、そんな声は都と獅童は見逃さなかった。

それでも、獅童は彼女を無視した。恐らく慣れていたのかもしれない。流石、王子様。

そして、高津学長は舞衣を一瞥すると、早足で詰め寄り問い質す。

「ん？貴様が報告にあった刀使だな!? なぜすぐに応援の要請をしなかった！」

舞衣は責めるような高津学長に気圧されてしまうが、咄嗟にそれらしい理由を述べた。

「それは……ノロの回収を優先すべきだと判断したので」

「ノロなど放置しろ！」

「……………」

都は横でそれを聞いていた。もちろん、彼は「あの時」みたいに凄く怒っている。

沙耶香の件とはいいい、今度はもつと大切の人が彼女にあんな態度で叱られるなんて……すぐ我慢の限界に近い。

けど、この場は羽島学長がいる。彼女の前に失礼の挙動はできない。

それと、獅童からの目線も我慢してほしいと伝わってきた。

「あろうことか、荒魂の鎮圧に協力するなど……まさか、逃亡を幫助ほうじょしたのであるまいな!？」

「いえ……そんなことは……」

高津学長は舞衣の眼前でギラギラした目つきと罵声で彼女を威圧する。舞衣もまだ中学生の少女だ。大人から暴力的な姿勢で怒鳴られれば萎縮してしまう。

そんな怯えていた舞衣を見て、隣に我慢続けた都はもう我慢ができなくなる。

悪い、獅童さんー どうしても見逃せないだ”。

「そろそろいい加減にしたら、どうですか。クソババア」

「クソツ……!?!? 貴様……!?!? 誰とあんな口調でー?!?」

都は二人の間に立ち、話を中断させた。

「貴様っ! あの時!」

そして、クソババアという良くない言葉に怒らせた高津学長は舞衣から注意を都に移した一瞬に彼を見ていて息を呑んだ。

「ああ、お久しぶりです。一年前でしたっけ? あの時はお世話になりました。」

「なんて貴様がここに!」

「この度は柳瀬舞衣様の執事を勤めさせていただいた衛藤 都と申します。それと、さつき舞衣様への無礼は執事として見逃しません。彼女に謝っていただきたい」

「なんで、私はこの小娘に謝らなければならない! 彼女のせい……待って、衛藤……貴様はあの叛逆者の親族ですね! つまり貴方と後ろにいる娘があの人を逃したということですよ!」

「あまり舞衣様を責めないでください。舞衣様は市民の方々の安全と荒魂の再出現の危険性を踏まえた上での行動を取られたまです。刀使としては正しい行動です。」

「正しいだど? 刀使として本当に正しい行動というのはな、紫様のために動くことだ! 貴様たちの今回の失態は明らかだろう!」

「それは理不尽な言動でございます。刀使一人と一般人一人では御前試合決勝選までに進む決勝選手の二人を制圧するには難しいかと

……」

「それでも、隙をついて連絡する程度は——」

「それは俺一人の責任ということですよ」

「……！ お兄さん!?!」

隣の舞衣がようやく反応し、割って入ろうとするが、都は優しくそれを制し、話を続ける。

「俺は確かにあの逃亡者の親族です。多少に私情で彼女たちを見逃す可能性がある。実際はそうでした……俺はわざと彼女たちに人質を捉えられ、舞衣様に救援の要請を遅らせた。」

「そんなこと——」

「ですから、俺の責任です。舞衣様は何も悪くない。」

「——ッ！」

都の自己犠牲を見て、舞衣は苦しそうだった。

いや、彼女だけではない。親衛隊の人もそうだった。

いくら彼が怒っても、その怒りを抑えて、まず最愛の人の無罪をして欲しいという気持ちは獅童と寿々花は見てられなかった。

「そこまでしておこう、衛藤 都と高津学長。」

「な、何を——！」

「少し黙ってほしいです。高津学長。今すべきことは御当主紫様のために逃亡者の行方を突き止めることです。ここは貴方の喧嘩売り場じゃないですよ。」

気圧が一瞬に獅童に抑えられて、高津学長の偉そうな態度は少しでも弱くなった。

「それと、彼の説明した通りに彼が人質として捉えられて、救援要請を遅らせた。つまり、これは仕方がないことです。」

「刀使ではない人間は刀使に逆らうことができない。それはこの世の常識ですよ。」

「た、確かに……まあ、いいわ。この度の件はなかったことにしましょう。お前ら、さっさと宿舍で待機している！もう要件が済んだ！」

なんてお前はすぐ偉そうな態度なの？お前のプライドはどんだけ

強いんだ。

またその態度を示す高津学長を見て、都は心の中に彼女をひどく罵った。

けど、このままでは行かねえ。

「謝り……俺の、大切な主人柳瀬舞衣様はまだ貴女の謝りを聞いてないのですけど」

「お、お兄さん。そ、それは!」

「私はなぜ謝らなきゃならない!よく聞け、あなた達は所詮刀使と一般の人間に過ぎないのだ。そして、この件はー」

「謝ってください……でないと、次回は一年前のような失態だけじゃ済まない。俺は徹底に貴女のプライドを踏み潰します。」

「……………っ!」

都は本気のみで高津学長のことを睨む。

それを感じ取った親衛隊の二人は何の動作もない。

それを知り、都は少し彼女たちに感謝の意をする。

「……………すみません。」

「大声で!」

「ぐっ……………!申し訳ありません!」

悔しそうな、屈辱に塗れた表情をされた高津学長の顔に都は満足そうに微笑む。

「……………では、失礼いたします。それと、親衛隊の方々、礼を言います。」

そして、都は舞衣の手を繋ぐ。

「気にしないで、貴方はよく耐えていましたから」

「これからのことは私達に任せましょう。」

「はい。」

その後、都と舞衣がこの場から離れていた。

「この程度で収まってよかった……」

「そうですね。彼は拳まで震えていますわ。」

そして、この場にいる親衛隊の二人は彼がこの場で暴れなかったことによかったと思う。

特に獅童は未来の仕事仲間を傷つけないからだ。



「……………また、お仕置きか？」

部屋で正座でさっきの態度と全然違う、凄くビビっている都。

彼はお仕置きされた後、もう身体がそんな怖い経験に刻まれた。

もう舞衣のお仕置きは嫌だと、彼は泣きそうな顔。

「そんなひどいことはもうしません！それより、さっきのこと……何であんな風に高津学長に反抗してたの？ 私は別に……」

けど、彼女がそれを否定して、都の正面に座った。

「え？だって許さないもん。舞衣様は俺にとって何より大切な人だから」

「それは知っている。けど、お兄さんに一人で背負わせたくない。私も一緒に背負いたいだ。」

「いい？お兄さんも私にとって大事の人。だから、もう無理しないで欲しい……」

舞衣はとても心配そうな表情を都に晒した。

これは何度目だろう？ずっと彼女に心配されたばかりに……。

やっぱり、彼女はとても優しい人だ。誰よりも。

「わかったー約束する。」

偽りの約束をして、都は舞衣を慰めるように頭をなでる。

ごめん、舞衣ちゃん。貴女達を守るにはまた多少のリスクを背負わなければならぬ。

——俺はもう大事なものを失うのが嫌なんだから……。

第10話：荒魂は所詮穢れもの

「ん？」

舞衣と都の二人と別れた後、十条？和は可奈美と一緒に舞衣がクツキーに隠した手紙により、現在は協力者たる恩田おんだ 累るいの住んでいるアパートに転がり込んでいた。

彼女は美濃関の卒業生。そして、彼女は羽島学長の指示により、可奈美達に住む住所を与えた。おかげで、姫和たちはしばしの休憩がもらった。

ちなみに、今の？和はお風呂上がったばかり状態であった。

彼女のような年頃の少女のつるつる肌を隠すのはただ単着の薄着しかない。見た目は相当にエロく見えるが、その地平線みたいな身体のせいで、そのエロさの魅力が少々足りない気がする。

それでも、貧乳には貧乳だけの魅力がある。男って生き物は女の子が可愛ければ、それを簡単に受け入れる生物である。

実際十条？和はスタイルはともかく、外見ではとんでもない美人で、可愛く見える。結論を言うと、彼女は十分魅力がある女の子である。

そして、彼女は髪を乾くまで拭いた後、視線がベットのの上に置いてある黒い携帯の方へ移る。

これは彼に渡されたものだ。？和は彼が携帯の背後に貼った手紙の内容通り、風呂のあとにすぐ電話がかけられるのを待っている。

それにしても、2つ目の条件はおかしい……。妹にこのことを知らせるなどという条件。

まるで、妹さえも教えられない秘密みたいな話……。

一体何を企んでいるのだろうかー。

しばしの間を待つと、電話がぶると鳴った。？和は慌てず周囲を確認し、平常心で電話を出す。

『こんばんは、十条さん。』

そうしたら、電話の向こうから彼の声が伝わってきた。その声主は可奈美の兄さんー衛藤 都だ。

『電話に出る余裕があるということは、恩田累さんとは接触できたようですね。良かったです。』

「お前は何かを企んでいる。なぜ可奈美にこのことを知らせたくな
いんだ？」

圧を込めて電話口の向こうにいる都に問い質す。

『こつち個人的な話ですが……可奈美の声を聞こえると、集中がで
きなくなるのがその原因だ。』

「……………そっか。」

一瞬だけ、？和はこの事を聞かなくてよかったと少し後悔した。ど
うやら、彼はかなりのシスコン重症のようだ。

『さて、冗談はさっておき本題に入ろう。十条さん、私は貴女たちの
協力者です。』

「どういうつもりだ。」

『ですから、私が貴女達の逃亡に手助けをするということですよ。』

「また会えるのか？」

その質問をすると、電話の向こうからとても残念そうな声だった。

『いえ、現状では難しいかと。俺は仕事の原因と約束の件であまり
長い間舞衣様の近くを離れるわけにはいけないので。代わりに、こち
らの情報を送ります。』

「情報だと？」

それを聞いて、？和は少し驚かされた。なぜなら、都の身分では折
神家の追跡情報を探すのがほぼ不可能。

『はい。刀剣類管理局の捜査の進行状況——追っ手の規模、貴女方
の居場所の掴み具合、協力機関に至るまで可能な限りの情報だけど。』
しかし、彼の口調から大した問題ではないみたいだ。

「お前、そんなことをして大丈夫なのか？」

『心配してくれてありがとうございます。でも大丈夫です。こつち
も注意しながら、情報を探しますのでご心配なく。』

？和に心配されたことに、向こうからなぜか少し嬉しそうな声が

薄々と伝わってくる。

『それと……こっちはさつきほどおかしいなことを気付きました。長い話になるかもしれませんが、そちらも少し心の準備を』

「大丈夫。可奈美はしばらくお風呂に楽しんでいるから、時間的には大丈夫。」

『…お風呂の可奈美か……』

「おい、何勝手に妹の裸を妄想するの！切るぞ！」

『失礼しました。』

都はすぐ自分の失態を気付き謝る。

まったく……っただけ妹が好きなのやら。

これは例え嫌でも、彼の性癖を知られてしまう。

『では、改めて言います。十条？和さん、貴女は決して可奈美と一緒に折神家に捕まられるわけにはいかない。必ず命の安全がないと思えます。』

「なぜ、そこまで断定できる」

？和は都が言っていた命の保証がないという点は気になる。一般的に犯罪を犯した逃亡者の命はそう簡単に取れないはず、日本は法律がある国だ。どんな罪を犯しても、まず法律から通らなければならぬ。

例えば、刀剣類管理局でも自分勝手の行動で国家機関を無視できないはず。

『今回の件、刀剣類管理局は警察はおろか政府からの介入も全て拒否しています。おかしいと思いませんか？』

「確かに妙だな。私たちをすぐにも捕まるつもりなら協力を要請するのが自然のはずだ。」

『そうです。今回十条さんが起こした一件は第三者から見れば殺人未遂。それも刀剣類管理局局長となれば警察機構や政府要人にも顔が利く立場です。協力を要請する理由としては十分のはず。それをしないのは何故か……』

？和は無言に都の話の話を聞く。どうやら彼は答えがある。

『これからはただの個人的な推測です。もしも警察機関に協力を要

請すれば、警察側は必ず犯行の動機——怨恨などの線も視野に入れて捜査するはずです。ましてや、あの衆人環視の中で殺害に走る動機となれば並大抵のものではないと普通は考えます。』

『仮に、折神紫や親衛隊に関する調査が警察によって行われれば、彼女の正体がバレる恐れがある。それを警戒しているのでしょうか？』
「なるほど、確かに一理がある。」

まさか、自分が失敗しても折神家に大きなリスクが与えられるなんて、？和は思わなかった。

それで、自分と可奈美がうまく逃げられるのはそのリスクに縛られて、国の力を借りない折神家。

もし警察が介入したら、ここまで逃げられないはず。

『これが確かであれば、折神紫は貴女達を捕らえた後、何としてでもその口を塞ぎにかかるでしょうね。』

「……………」

間違えなく殺されるだろう。それは一番簡単なやり方だ。

昨日も危うく親衛隊の人に殺されそう。よく考えれば、真相をバレないように彼女はこうして猶予なく写しが貼れない自分を斬り殺すと思うのだろう。

そう思うと、また酷い拷問をされると別の恐怖が心の中から産み出してしまふ。

『最低でも記憶を失わせる程度のこと。悪ければ拷問や終身刑、最悪の場合は殺処分されるかと。そうなれば真相は闇の中となり、荒魂に世界が支配されることになる。』

『どの道、俺は妹にそんな恐ろしいことを遭わせるわけにはいかない。ですから、こちらが全力で貴女達の逃走に手を貸します。』

「……………わかった。先に礼を言う。」

都の動機を理解し、？和は彼への警戒を完全に解けた。

彼は妹を愛する強い気持ちは決して彼女を危険に遭わさせない。ならば、彼は決して敵ではない。

『礼を言いたいなら、また一緒に チョコミントを食べましょう。』

「……………」

そしてその一瞬、？和は動揺した。

なぜ、私の好きなものが知っている!?そして、
“また”とは…?

「おい！お前、なぜ私の好みを知ってー！」

『…そろそろ時間です。また伝えたいことがあつたら、こちらから連絡いたします。では……』

？和が都に訊くと、向こうは急ぎに言いたいことを伝え終わって電話を切った。

静かになった部屋の中、？和は疑問を満ちた顔で疑問を口に漏れた。

「お前ー何者だ。」

自分の好みを知り、初対面のときに親しいの呼び方。あれはどう見ても初対面ではない。少なくとも、相手は自分のことを知っている。

「何処かで会ってー！」

「久々の風呂は気持ちいいね。そして、お風呂後のアイスも超美味しい！」

そんなとき、お風呂が終わった可奈美は部屋に入り、アイスを持って目がキラキラしている。

「……………」

「ん??和ちゃん?どうしたの」

「ーなんでもない。それより服を着れよ!そんな格好じゃ恥ずかしくないのか!」

「えへへ、同じ女同士なんだから。そんなことは気にしない気にならない」

？和に指摘されても、可奈美は気にしていない態度で？和に近づく。

ちなみに彼女は一件のタオルを巻いただけの格好。外見はどう見てもアウトなエロい格好だ。

「気にするよ!それと私に近づくな!」

「ええ、なんて?」

「斬るぞ!貴様!」

「今、御刀はリビングに置いてあったから……えいつ！」

「うわあ!!抱きつくな！」

「暖かいな〜?和ちゃん。」

「ちよつ……!アイスが……うわあ!!」

こうして、可奈美の突然の行為で?和はしばらく注意が逸らされて、この2日目の夜をイチヤイチャ過ごした。

けど、?和が気づけなかったのは可奈美がそうした理由は――ただ自分の不安を逸すためだった。

◇

「そっかく。大変だね」

「うん、私のせいで舞衣ちゃんとお兄ちゃんに困らせちゃったのかも」

白い夢の世界。ここは可奈美だけかたどり着く世界である。そんな世界で彼女は落ち込んだ顔で自分の悩みを自分の師匠――元い彼女の母にバラす。

「けど、その可奈美の行動はもう一人の友達を助けた。違う?」

「……………」

「可奈美の行動は本当に可奈美らしいと思うよ。そんな可奈美だから、友達とお兄さんは何も問わずに送り出しているだよ」

「そうかな……」

まだ不安の表情でいられる可奈美。そんな彼女を見て、師匠もよくわかる。

衛藤可奈美はどこにでもある普通の女の子だって。普通に悩んで、普通に考えて、普通に笑って、普通の妹みたいに大好きなお兄ちゃんに甘える。彼女はそういう普通の女の子。

例え、彼女の外見はどれだけ強いか、剣術がどれほど強いのか。それでも、彼女はまだ中学生年齢の女の子。

精神は外見より脆かった。

まるで、過去の自分みたい……。

「うん。それに、可奈美も前に言ってたよね？私の息子はいつも理由を問わずに可奈美を助けたって。きつと今も同じだよ。」

「そうだね……いつもお兄ちゃんに迷惑をかけたばかりに……何にもしてあげられなくて」

「何を言っている？私の息子だったら、貴女がそばにいただけで満足だと思うよ！それと、舞衣という女の子もきつとそう思うよ」

「お兄ちゃん、舞衣ちゃん……」

「それより、稽古をやろう！そんな気持ちじゃ、剣が錆びるから！」
階段から立ち上がり、そのまま階段から飛び降りた。

「もう……それ、ばかり」

そんな元気なもう一人の剣術バカ母を見て、可奈美は仕方なく笑って同じく階段

から降りた。

母のおかげで、少し気分が治った。

「だって、私はこれしかないから」

「……師匠は昔のお兄ちゃんみたいだね。昔は稽古、稽古って言っただけ……。元に戻るのかな」

「それ、わかんないけど、彼ならきつとまだあるよ。可奈美に一度も負けないでその進化し続ける剣はその証拠。彼はきつとその熱があつて、可奈美を退屈させないために何処かで頑張り続けている。」

「……………」

「フン……そこで照れるとは、こっちはご馳走されるご気分だ。」

「お母さん……」

照れてた可奈美からの恥ずかしい反応に楽しんでいる可奈美のお母さん。彼女は今日も楽しく可奈美と戦い続けた。

◇

？和達と別れた翌日――

「皆、それぞれの学校に帰っちゃうんだね……」

「皆さんの容疑は晴れたようですし、拘束されている理由はありません」

せんからね。」

荷物を抱えてバスに向かっていく刀使たちを遠目からぼんやりと舞衣は見ていたが、都はそれとは別の視点で観察していた。

——綾小路は全員、長船は代表二人以外、平城、美濃関も長船と同様。

冷静にバスに乗る各校の刀使たちの顔を確認していた。見たところ鎌府の者は一人もいない。刀剣類管理局としては折神紫の警護に当たっている親衛隊の代わりに鎌府女学院の刀使に搜索をさせている。というか、鎌府の高津学長が出しやばったと言った方が正しい。そういえば、美炎の様子が見なかったな……。

確か、別の隊に配属されたという話だっけ？確かに、電話から「調査隊」という赤羽刀を探す特殊小隊に配属されたみたい。

よくこんなおかしいな任務小隊に配属されますわね。

「あれ、あの子……」

ふと、舞衣が左のスペースに駐車してある白塗りの車の方へ目を向ける。正確には、その車に乗り込んでいる少女に。

「鎌府の……」

「糸見沙耶香……か……」

あの白髪の少女を見て、都の感情が波のように動き出す。

彼女もあのババアの指示で、可奈美たちを追跡するのだろうか……。でない、車に乗るではなく、バスに乗って鎌府女学園に帰るところはずだった。

——後で？和と連絡して、あの子と遭遇したら、傷つけないようにしないと……。

沙耶香のことを無意識に大事にしていた都。彼にとって沙耶香も守らなければならぬ対象だ。

「ハイ、レディ柳瀬！」

突然、背後から声をかけられた。振り返ると、二人の少女が目に入った。一人は長身で長い金髪の美少女、もう一方は対称的に背丈の低い、小学生と言って差し支えないほど小柄な少女だ。

二人の顔には見覚えがあった。長船の代表二人だ。バスに乗る姿

が見えなかったが、ここにいたのか。

「あなたたちは確か、長船の……」

「古波蔵エレンデース！」

「益子ましこ 薫かおるだ」

外国美少女の方はエレン、小柄な少女は薫というらしい。それにしても、二人とも御刀を差しておらず、どころか着ているものは制服ではない。つばの広い帽子、薄手の半袖シャツ、円輪状の浮輪など、まるでこれから海かプールにでも向かうような格好だ。

このあまりにも異常な光景に都は思わず彼女達から視線を逸して、沙耶香の方へ見る。

やっぱり御前試合で “本気の実力を持ち出してない” 選手方々は変なタイプの人。

「ワタシの両親とアナタのパパは仕事のパートナーなんデスよ！」

「えっ……？ 父と、ですか？」

「お友達のことで大変でしょうけど、落ち込まないでクダサイね！」

「おーい、エレン。そろそろ行こうぜ」

舞衣の手を取っているエレンを横目に、薫は後方の車を親指で差す。

「お二人はこれから休暇ですか？」

「イエス！ 真夏のバケーションデース！」

「絶好の海日和だからな」

やっぱり、何かおかしいですよ。

遠く行く沙耶香が載せている車を見送った後、都は心の中でツツコム。

この季節は確か夏に近いですが、まだ夏ではない。それところが、折神紫暗殺未遂事件が起きたばかりに良くも遊べるとは流石、この二人は無神経なのでは？

「ねねー！」

「？」

「え……」

薫の頭部の影に隠れていた何かの姿を突然現した。大きさは子犬

程度、茶色い体毛と緑色の尻尾、大きく生えた耳は兎のようだ。

その外観は危うく何処かの電気系の黄色ネズミと見間違えのころだった。

「それ、荒魂……！」

「……」

その生き物の正体を薄々気づき、警戒する二人に対して、エレンと薫は慣れた様子で説明してきた。

「こいつはオレのペットだ。安心しろ、荒魂だが襲ったりしない」

「そうデスよ、ねねは友達みたいなものデスから」

つもりボ○モン？というか、ペットが荒魂とは流石におかしい。

ん？名前さえもつけたのか!? 電気系のネズミさんの間違えなんじゃ？

「どうやら、ただのペットみたいだ……おかしいけど」

「うん……敵意も感じられないし」

改めてねねの方を見て、都はそこで何かを僅かに気づいた。その生物の——彼か彼女かは不明だが……そもそも性別あんの？ 荒魂の生態についてはまだ謎だらけ。

とにかく『奴』の視線の先に何か嫌らしい気配を感じる。

これは美濃関でも感じられる視線だ……。確か、舞衣が体操服を着て、可奈美の応援に大きな動きを取っていたときにも感じられている感覚——

「……!!」

やっと、それを気付いた都。

彼はあのねねが目を輝かせながら釘付けになっているものをわかってしまった。

その視線先は——舞衣の胸だ。

中学二年生にしては大きい、いや、大人でもこのサイズは中々ないだろうと思えるほど豊かな胸。

あれは反則レベルで、男ならば誰もが弄ぶ妄想をしたことがある。

例え都でも一日中に彼女の胸に注意が逸したことがある。なぜなら、男というものはおっぱいに吸い込まれる生物である。

これは自然現象！本能である！胸に憧れるのは仕方ないことだ！
そして、都の隣に年下の知り合いの中で舞衣が一番アカイ。いつも彼女との不意との接触到何度もその幸せを感じた。

そして、それは男性だけならず。同級生の女子からも羨ましがられるらしい。

本人は剣術の邪魔になるからと良く思っていないと可奈美から聞いていたが。そこがいい！と都は私心的に親指を心の中に何度も立った。

「ねねーっ！」

そこで、薫の頭部から跳躍し、ねねは視線の先——舞衣の胸目掛けて空中で手を伸ばしてしがみつこうとする。

薫はそれを察知してねねを止めようとするが、遅い。刹那の遅れがねねの侵略を許してしまう。

「ねーっ！」

朗らかな鳴き声を発しながら無邪気、無垢ともいえる荒魂は舞衣の白い布地に包まれた双丘へと辿り着いていく。

「ねっ!?!」

っと、その前に都がその獣を捕まった。

「やっぱり荒魂は邪意の塊ですね。こんな嫌らしいケタモノごときの生き物はよくも舞衣ちゃんに邪意を放つとは……千切りでも許しません。」

「お、お兄さん!?!」

目が全然笑っていない都を見て、舞衣は驚かされた。

「おい、確かにお前の言うとおりでだが、あいつ一応は俺のペットだ。返して。」

そして、主人たる薫はどうやら都の話聞いて、ペットの方を心配しているようだ。

いい主人持ちですね。とても残念なことだ……。

大人しく手を放し、ねねは薫に尻尾を引っ張られて回収された。

「つたく、ねね。巨乳と見るなり飛び付くのはやめろって言ったろ」「ねね……」

回収したねねに説教をしている薫。

こいつ、巨乳が好きなのか？やっぱり穢れたのケダモノだ。

「あと、流石に彼氏持ちはマズい。一番話がややこしくなる」

「ねっ！」

ピシッと敬礼するねね。ちゃんと了承したのだろう。

それはそれとして、舞衣は薫の発言によって顔が赤くなった。

「か、彼氏……って／＼／＼」

「違うのデスか？」

「ち、違います！」

都の方を横目でチラチラ見ながら否定する舞衣。

その意をわかってしまった都は舞衣のたれに対応する。

そしてー再び執事モードを。

「俺はあくまで舞衣様のご親友のお兄さんです。現在は彼女の執事をやっていますが、俺達の関係はただの妹友のご関係で、そこはご了承ください」

「ワーオ、複雑デスね。」

「はい。それと、舞衣様は素晴らしい女性方ですので、恋人などは俺のようなものだと言われ多いことです。」

ーそうだ。俺は舞衣ちゃんと相応しくない。彼女の恋人なら、もつと優秀な優しい方がいい。

「……………」

「舞衣様？」

そこで、なぜか納得がいけない拗ねた顔をしていた舞衣。

俺は何かをしたの？ちゃんと空気を読んだよ。

「なんでもありません……」

「そう……？」

「なんか複雑デスね。」

「まるで鈍感主人公とそのヒロインだ。」

「ねっ！」

一体何を言っているんですか？二人と一匹のケダモノが言っている意味がわからない。

「あ、そろそろ時間だぞ。 エレン」

「ワーオ！ そうデスね。」

時間を確認し、薫はエレンに注意する。

「それじゃな。 鈍感主人公とそのヒロイン。」

「シィーユー、 マイマイと……」

「衛藤 都だ。」

「なら、 ミヤミヤデスね！ また会うことに期待してマース！」

ミヤミヤ!? それは俺のあだ名？

薫とエレンは手を振りながら車に向かい、去っていった。 エレンが去りに放った呼び名に若干の不気味感は浮かんだが。

ミヤミヤ……精神的に受け入れられないみたい。

せめて、都と呼んで欲しいな。

「舞衣様、そろそろ戻りましょう。 お部屋まで同行します。」

「う、うん。 ありがとう」

同じ美濃関の生徒達の見送りは終わったので、二人で宿舎に帰るところにした。

そろそろ姫和に連絡を入れなければならない。 時間の隙間を見つけて二人のサポートをしなければ。

「私たち……やっぱりそういう風に見えるのかなあ……」

斜め前を歩く舞衣が小声で呟く。

彼女は恋人だと見間違えてたことで喜んでいる。 なぜだろう……お兄さんと恋人されるのは特に嫌ではない、むしろ嬉しい。

もしやー！ 私はお兄さんのことを……?!

もうすぐ答えが見つけ出す舞衣。 彼女は今回の出会いのおかげで、自分の気持ちの確かめにもう一歩へ進んだ。

第11話：無念無想の少女

任務は私のすべて。

それは生きる意味、刀使とした使命です。

——私は最強になれなければならない、あの人の期待を裏切らないように任務を見事に完成させます。

それは糸見沙耶香という道具の存在意味だから。

「糸見沙耶香さん。このあとのことはよろしくお願いします」

「わかった。」

目的地に到着し、運転手に呼ばれ、沙耶香は車に降りて、運転手に頷く。

そして、彼女の視線は大きなアパートの方へ移る。そこは彼女の目的、ターゲットがそこにいる。

「任務を開始。」

抜刀、写しを発動し。彼女の目が虹色の色に変わった。

これは柳瀬舞衣みたいな特殊能力者の特徴。

そして、彼女のその能力は《無念無想》という自分に催眠状態をかけて、迅移を一瞬に加速して、連続に使うチート技。一般の刀使では必ずそんな状態の彼女と太刀打ちできない。

「……………」

八幡力を使って、彼女は一気に目的へ飛び込んだ。

今日も、うまく任務をやり遂げられるでしょう。



沙耶香が突入する数分前——

「ハハハハハ。」

「私の……………仕事場所とも言えるところ。」

ここに住む2日目。恩田 累は晩ごはんの後、？和達に「いいものを見せよう」と言い、彼女たちをパソコンルームに連れて来た。

「ちよつと待ってね。ちなみに、二人はもうお風呂した？」

ただパソコンだけの部屋に、累はパソコンにパスワードを入力しながら、二人に聞く。

「うん、した。」

そうしたら、二人は頷く。

「よし、二人共。パソコンの前に来て」

「うん。これはなんですか？」

「私は機械にあまり得意ではない……」

二人はチャット画面に疑問をする。彼女達はあまりパソコンを使う経験がないからだ。

「メールみたいの操作でいいから。返事して」

《ようこそ。グラデイのご友人達。我々は君達を歓迎する。》と可奈美は画面のFinemanと名乗る謎の人物のメッセージを読み返す。

「……これは、一体？」

「好きに答えてみて」

「グラデイ？」

「私のこと。」

自分に指差し、累はそう答えた。

確か、これは古代ローマの闘技場での剣闘士の呼び方。でも、累さんからはそんな雰囲気が見えないが……。

《あなたは？》と？和はそう返事すると、向こうからは《A l l y》と返ってきた。

「えつと……？」

「味方という意味だ。お前はもう少し勉強をしろ」

「すみません……」

途中で？和に説教された可奈美は「すみません」と呟く。

《たった二人の謀反者達。》

《手紙は持っているな》

Fine manが次々とメッセージを送ってくる。

《立ち向かう覚悟はいいね?》

《Yes / No》

手紙……?まさか!

?和は自分が持っている手紙を思い返し、そしてまた疑問する。

なぜ、私が持っているこれの存在を知っているんだ?誰にも見せてないはず……。

「……………大丈夫、本当にあなたの味方よ。」

躊躇した?和を見て、累は自信満々に笑う。

「……………」

ポケットに隠した黒い携帯の存在を感じて、?和はあの人と柳瀬舞衣が自分達を託した人を信じて、自分の意思で《Yes》と返信する。

《今日という日は完璧になった!》

《以下の場所へー》

「これは……………」

?和と可奈美はそれを注目する。その場所はー。

「……………っ!」

しかしその時、彼女たちを狩る侵入者がやってきた。

◇

「可奈美、千鳥を持って来い!あなたは奥へ!」

見事に襲撃者の奇襲攻撃を防げて、?和は冷静で先に知った鎌府の襲撃者ー糸見沙耶香と交戦中。

「了解!」

「はい!」

?和にそう言われて、可奈美は急ぎに御刀を取りに行く。そして、協力者の累も奥へ隠れていた。

この子は可奈美のお兄さんが言ってた子なのか?手加減をしたいが……何なの、その速度は!

ぎりぎり沙耶香の斬撃を避けて、防いでいる？和は彼女の速度に驚いている。

「……これは2段階の迅移！」

これを使える刀使が多くにいるけど、こんなに連続使うのが見たことがない。

「うっ……！」

ベランダから追い出されて、？和は同じく追い付く沙耶香と落下中で刀と刀をぶつけ合い。

そして、地面に落ちる瞬間、？和は速やかに距離を取って、彼女と離れる。

しかし、彼女はすぐ？和を追い付く。

しつこくすぎる……！この子の速度は異常だ。

これでは手加減などはできない……！彼はあんなに頼んだのに……。

彼と秘密通話の後、彼からメールが届いた。主に折神家が新たな追う手を配った情報でした……しかし、その内容は追う手である糸見沙耶香との戦いに手加減してほしいと頼まれた。

最初はそんな甘い考えを持った彼を叱るつもりだが、つい彼の頼みを受け取った。

ただの予感だけど、彼はもしやあの子なのかもしれない。

「どういうことだ……迅移は一瞬に加速する技ではなかったのか？」

けど、彼女沙耶香は加速の状態を続けて攻めてきた。

「しまっ……！」

隙が捉えられ、？和は彼女の斬撃を受けて、写しが剥がれた。

「うっ……！」

？和は膝が地面に崩して、目の前の白髪の女の子を睨む。

このまま、負けるわけにはいかない。私はまだやらなければならぬことがある！

？和は再び写しを被った。

「はぁぁー！」

そして、同じく迅移を使って、突刺攻撃をする。

「……………」

けど、簡単に背後に回された。

早っ！けどー。

「そうはさせない！」

もっと高い段階の迅移を使って、攻撃を回避し、？和は攻撃で隙だらけの沙耶香に刀で振り落とし、彼女の写しを解除させた。

「これで、一応彼との約束をーっなっ!？」

？和が安心したところに、彼女はまた立ち上がり、沙耶香という子は再び構えを取る。

またやるつもりか!? 写しなしで？いや、あの目ーっ能力の影響なのか？

彼女の目を気づき、あの光った虹色の目はどう見ても怪しい。

そして、彼女は再び襲ってくる。

「ーっーっ！」

危うくのところ、？和はぎりぎり彼女の攻撃を回避する。

今の速度はーっ〴〵ぎっきのと全然変わらない〴〵。

「写しなしで、迅移を使えるの!？」

？和は目の前に起きた異常現象に驚かされた。迅移を連続に使うのが、もう滅多にないことだが、さらに写しなしの状態で迅移を使うとは…………。

あまりにも非常識だ。

「……………くっ！」

避け、防げて。ただ一方的の防衛で？和はどんどん沙耶香に迫られた。

これが刀使の中で少数にいる能力者なのか、厄介すぎる！

けど、もっと厄介なのは彼女の能力ではない。〴〵彼女を斬れるのに斬れないのだ〴〵。

彼との約束のせいで、？和は得意の攻めをやめて、防衛に集中する。けど、このままじゃ、いずれ敗れる。

「やはり斬るしかーっ！」

あまりにも心が痛む選択だ。？和は彼との約束を破れたくない。けど、このままではどうしようもない……なら、ここは――。

「駄目!?和ちゃん、次は私がやる。下がって」

そんな時に、可奈美は写しの状態でやっと参戦した。

◇

「お前――」

「私が沙耶香ちゃんの相手をする!」

「彼女を斬る覚悟があるのか」

「――斬らない!」

「――!」

可奈美が決意を込めた言葉に驚愕する？和。彼女は可奈美がどうやって、相手を切らない条件でこの場から抜け出す方法が思い付かない。

「……………」

「……………!」

さつきと同じように、沙耶香という子はすぐ襲ってきた。そしてその目標はどうやら可奈美に変えたみたい。

「ふむっ!」

当然のように、可奈美は初撃を簡単に防げた。

そして、沙耶香から次々の攻撃を可奈美は冷静に読み対応する。

この子の剣はどこかおかしい……前はこんなじゃなかった。

ただ数回の攻防で可奈美は何かを気付いた。

糸見沙耶香の「攻撃が単調すぎた」。前の御前試合の対決より読みやすい。これはまるで魂が剣に籠ってないみたい。

魂が剣に籠ってない？

そういえば、お兄ちゃんの剣も魂が籠もっていない……あるのは鍛えられた剣の技術のみ。

「……………」

何なの、こんなの……認めない。

お兄ちゃんみたいに剣を熱が籠もってない剣は認めない！もう見てられない！

長年、都の剣を見続けていた可奈美は我慢できず、初めて兄への不満を放った。

彼女はずっとそんな剣を見てられなかった。そして、第二目の使い手の出現で完全に可奈美を怒らせた。

「こんな……魂が籠もってない剣じゃー何も斬れない！」

簡単に攻撃を避け、隙を狙った可奈美は無手型で沙耶香の御刀を奪い捨てる。

この行為はまるで、兄への怒り。

「……………あつ。」

「御刀を……………」

御刀が奪われ、沙耶香は攻撃手段を失うと同時に、目に光る不気味な虹色の光も消えて元の瞳色に戻った。

どうやら、御刀がその能力の発動原因だ。

「覚えてる？沙耶香ちゃん。私はこの前の一回戦の衛藤可奈美だよ。」

「……………」

「あの時、あなたと対決して凄く楽しかった。できれば、またあなたと戦いたい！だからー」

「……………！」

写しを解除し、可奈美は少し悲しいような笑顔で沙耶香の手を優しく握る。

「もうそんな魂が籠もってない剣を使わないでね、約束だよ。」

「……………あつ」

その時に沙耶香はまたあの感触を味わった。あの人からもらった感触と同じ、心がとても苦しくて、温かい……なんて？

沙耶香はわからない……彼女はずっと都を自分の特別だと思っていた。

「可奈美……………お前……」

結局――私には「斬る」という選択肢しかなかった。……だが、可奈美は……。

さつき、自分が実行しようとした選択に？和は情けないと感じる。もし可奈美がいなかったら……私は……あの子を殺すだろう。

手が震えて、？和はこの件で初めて人を殺す恐怖が心に刻んでいった。

第12話：貴女の道具ではない

「そうか……あまり気を落とさないでください。十条さんがそう思っていただけで、もう十分あなたを懲りたと思います。」

翌日の朝。都は管理局のエントランスを訪れていた。今は壁に寄りかかりながら携帯端末で通話している。

そして、彼が通話している相手は十条？和。彼女から昨夜の事情を聞かせてもらった。沙耶香を退けた後、途中までは累の車で移動、検問で別れ、その後にトラックに乗せてもらったらしい。因みに、沙耶香は途中で車から下ろして所轄に保護してもらったのだとか。とにかく、無事で良かったと思う。

けど、？和の口調からかなり落ち込んでいるみたい。まあ、それも無理もないか……。彼女は昨夜危うく沙耶香を殺すところだった。

「……………今回の件は結果オーライだし、あまり自分を責めないでいただきたい。むしろ、俺のせいで貴女に迷惑を……はい、貴女は優しい人ですね。……照れなくてもいいです。とにかく、これからはもっと慎重にしてください。次は親衛隊が直接に貴女達を追うのかもしれない……そこはくれぐれもお気をつけて」

電話を切り、彼女との交流が終わったら都は長い息を吐いた。

昨夜は本当に危なかったらしい……。自分の要求で？和を沙耶香との戦いで深く彼女の思想を変えた。……それを作った原因は間違えなく自分だ。

？和に余計な意識をさせてしまった。本来、彼女を自分自身の思うのままにやらせてほしいと思ったのだけ……本末転倒だ。

「やはり私情を挟むのが良くないことだ。……そこは反省しないと」

「……………あつ」

「ん？あ……………」

その時、エントランスの自動ドアが開き、一人の少女が踏み入ってくる。白い髪に華奢な体躯、身を包んでいる鎌府女学院の制服と腰に差した刀。

その子を見た瞬間、都もあまりの驚きに口が開かれてしまった。その子も自分を見て、同じ反応だ。

「……………っ」

てっきり彼女は挨拶をしてくると思っていたが、彼女はわざと自分の顔を避け、何も言わずに去っていく。

「待って！沙耶香」

彼女の名前を呼び、急ぎに彼女の手を引っ張る。

何かあった。？和でも察せない彼女の心の変化。

「何かあったのですか？ 見たところは凄く疲れたように見えるが……………」

「……………どうしてわかるの？」

「目元に少々隈ができていますし、身体の重心もずれています。それに、制服の皺も寄っている。昨晚はあまり寝ておらず、ずっと制服を着ていたのではないのか？」

「……………」

「何かあった？教えて、ここは俺とお前二人だけだ」

都は優しい口調で、一歩ずつ沙耶香の心の防衛を解かしていく。

そうしたら、彼女の小さい手が震え始め、小声で話した。

「私、失敗した。失敗ができないのに……………」

失敗？つまり昨晚…………いや、それだけじゃ彼女がそんなに怯えないはず、他の何かが…………。

「失敗できない、とは？」

沙耶香の眩きに引つ掛かりを感じた都は掘り下げて聞いてみた。

「どんな任務でも遂行する…………しなきゃいけない、から」

「…………あのババア…………高津学長に言われたのですか？」

小さく頷く。

その反応を見て、都は少し怒った。

もちろん、表情に現れはしない。けど心が確実に燃え始めた。

「あのバ…………高津学長は貴女のことを何と言っているのですか？」

「……………」

「大丈夫、俺はちゃんと聞くから」

数秒経ち、沙耶香はやつと口を開いた。

「……私の後継者で、最強の刀使だって」

「どういう意味？」

「私の御刀は妙法村正^{みょうほうむらまき}。かつて、高津学長の御刀。」

つまり、あの人は元刀使か……。

それより、あのババアの御刀を受け継いだ沙耶香。まさかと思うが……あのババアは自分の理想を沙耶香に押し付けてない？

自分が最強になれるから、そこで沙耶香にその理想を押し付けた。何という自己勝手の人だ。

ますます、彼女への嫌悪感が濃くなってきたよ。

けど……現在最強の刀使は折神紫。この20年間渡って、誰でも彼女を超える刀使がいなかった。例えば、あれは大荒魂でも……人の前でその力をあまり出せないはず。つまり、少なくともは実技で勝負する。

あれ？そう思うと、あの人強くない？滅茶苦茶強いじゃん！
いや、今はそれを気にするところじゃない。

つまり理想という話はその理由になれないということ？なら、あのババアは沙耶香に一体何を押し付けたのか。

「沙耶香ー」

そんな時、怒鳴り声が入トランスに響く。ツカツカとヒールで床を鳴らしながら近づいてくる足音と、先程の声で誰なのか判別できなかった。

噂をすれば……と、まさかこの言葉を使う日が来るとは。

「……高津学長」

怯えた声である女の名を呟く沙耶香。

そして、入トランス上の階段から降りてくる高津学長の姿がそこにあつた。わざわざここまで出向いてくる辺りに。それと、先程の沙耶香との会話から普通の関係ではないことくらい察しはつく。

そういえば、一年前は沙耶香のことを何もわからないまま彼女を守ってしまったな。よく思えば、あの時の俺は無謀すぎだ。

でも、それはきつとあのババアのせいだと思う。俺を怒らせたか

ら。

「所轄に保護されるとはどういうことだ!? 任務に失敗して、よくもおめおめと戻ってこれたな!」

「……申し訳、ありません」

詰め寄り、顔の近くで強烈な剣幕で怒鳴る高津学長に沙耶香はすっかり萎縮している。

その様子は先日でも見た。舞衣ちゃんもあいつに……。

「ババア……じゃなかった。高津学長、少し言い過ぎではありませんか?」

「何……? 貴様、一先日の……何故貴様がここにいる!まさか、また私の沙耶香を誘拐するつもり!」

一体どこから、その結論が出る……。

「勝手に人の名誉を汚れるな!俺はたまたまここで友達と電話しているところで、たまたま沙耶香さんと出会っただけ。」

高津学長は予期せぬ介入に苛立ち、視線を都の方へ向ける。そこでもう一度怒りが上塗りされた。

都は淡々と、静かに自分の通話記録を高津に見せつけた。これは自分が疑われないように示す行動。

そして、上に載っているのは「チョココミント大好き後輩」や「からかう甲斐がある後輩」と、最近の連絡者。

因みにに連絡者の名前だが……これは都が万が一に自分の携帯が他人に見られた場合に用意した対応策。

まあ、一部は趣味によってつけた名前ですが……そのおかげで、都はただ変人にしか見えない。

「それより、手練れの刀使二人を相手に無傷で帰還できたのですから。まずは、そこは喜ぶべきではないですか?結構凄いよ、沙耶香さんは」

「喜ぶだど!? 寝言は寝て言え、愚か者が! 私の言い渡した任務は達成できて当然。失敗した者を叱責して何が悪い!!」

「たった一人に成功する見込みの少ない任務を与えた、貴女にも落ち度があるのではないですか?」

「貴様……！」

齒軋りして威圧しながら距離を詰めてくる高津学長。普通の人ならば多少なりとも恐れ慄いてしまおうだろうが、都の心にあるのは嫌悪感だけだった。

——自分の失敗も、他人の安否も認められない。何なんでしょう、この人は……。

それより、少しでも彼女のことをわかった気がする。そこまで任務にこだわるその態度は……。

「それとも、貴女は沙耶香さんの功績を利用して、ご当主……局長に媚を売りたいですか？」

「な、何を言う？」

「先日からの貴女の言動から推測すると、貴女は局長に異常の執著心と忠誠心が持つているかと……。そこで、尊敬する人に貢ぎ物をしたい。それが自分の功績であると認めてもらいたい。だから沙耶香さん一人に任せた。違いはありませんか？」

「……黙れ」

その反応……どうやら、間違えではなさそう。ますます、彼女の反応から真相が見えてきた。

「それと、沙耶香さんからは彼女が貴女の後継者であることを聞きました。つまり、彼女を育てた自分を称賛してほしい、局長の側近の座を手に入れるため、点数稼ぎに沙耶香さんを利用した。違いはありませんか？」

「黙れ……黙れ、黙れッ!!」

「……！」

高津学長はあまりの怒りで理性が飛ばされて、右手で都の胸ぐらを掴む。元刀使のせい、女性にしては中々腕力がある。

隣の沙耶香は息を呑んで固まっているが、都は眉一つ動かさずにその右手首を左手で掴み返す。

「もはや、一つの反論もできませんか？クズ女」

「……っ！」

都は高津学長を強く睨み、そして左手に力を入れる。確かに腕力で

は刀使に遥かに及ばないが、少しの痛みくらいは作られる。そのおかげで、高津学長は一瞬だけ痛みで顔を歪ませた。

「貴女は沙耶香さんのことをどうでもいいと、彼女を道具しか扱えないクズ中のクズ女。俺はそんな貴女を許せない……沙耶香は貴女の道具じゃない！彼女は生身の人間！女の子！彼女の学長なら、ちゃんと彼女を大切にしろ！」

都もあまりの怒りに、ずっと隠してた感情を漏れた。それは糸見沙耶香のために、怒った感情である。

「ぐっ……！」

少し力を入れ過ぎたのか、それとも都の怒りを理解したのか。高津という女は自ら手を離れた。

「くれぐれも忘れんなよ……沙耶香は貴女のものじゃない。彼女を利用するな」

「ぐっ……！いい、行くぞ、沙耶香。」

「……………はい」

高津学長は悔しそうに目を細め、エントランスの出口へと向かう。沙耶香は少し遅れるが、軽く頷き、その後を追ってゆつくり歩いていく。が、二、三步のところまで都の方に振り返った。

「……………」

けど、そこには何かを言い出そうで迷っている様子の沙耶香。きつと、どういう反応をするかを迷っていますね。

「ゆつくりでいいから、落ち着いて。そして、冷静で、自分がしたいことを心の中に決めつけよ」

優しく、彼女にそのことを伝う。急かして言葉よりも、整理がつかまで待つてあげることの方が大切だ。

「……………うん、わかった」

「それと、誰に邪魔されて、力不足の場合は、あれを握り締め。そうすれば、俺は必ずお前を助けに行く。」

ふと、何かを思い返そうな沙耶香はすぐ御刀を固定装置から取り出して、その鞘につけるぬいぐるみを見つめる。

そうしたら、彼女はそれを大切そうに握り締めて再び都の方へ見

る。

「……………絶対？」

「……………ああ……………絶対だ」

「……………うん。ありがとう、都」

そこで、彼女は僅かに笑った。これは彼女なりの変化なのかもしれない。

彼女は元々感情が薄い女の子だからな。

「お礼を言うなら、助けた時に言え」

「うん、わかった」

それから、都と沙耶香とお互いが別れた後、都は再び舞衣の元へ歩き出していく。

そろそろ、羽島学長との相談が終わったところだ。

◇

「騎士や王子というよりは物語の主人公みたいですね」

さっきのことを全部見てしまった、同じ鎌府女子学生は隠れながら、その感想を述べる。

「素敵ですね〜糸見さんの英雄！騎士……………いや、英雄でいいや。とにかく！やっぱ彼は唯一糸見さんを救えた英雄！」

キラキラした目で、彼女は都の姿をじっと見つめる。

彼は常識に囚われない男。口は少々汚いですが、それでも糸見沙耶香のために怒ったその様子はかっこよかった。

「それにしても……………高津学長はあんな風に糸見さんを見ているとは……………お姉さんとしては許しません。」

そして、さっきの都から口に出した件に女の子は今までもない怒りに顔か歪んだ。

学長とはいえ、そんな道具扱いは流石に受け入れない。特に糸見沙耶香は可愛くて、小動物みたいな妹。

そんな妹がいじめられたら、お姉さんとしては黙ってられない。

「糸見さん。大丈夫。私は英雄さんを連れて、あなたを救います！」

それがお姉さんの役目ですから！」

そんな決心をして、彼女はどこかに行ってしまった。

ちなみに、彼女の名前は竹島たけしま雅みやび。鎌府高等部一年生。彼女は糸見沙耶香の義理お姉さんとして、ずっと彼女を見守っていた。

そして、彼女は一年前の件により、都のことを知り、彼を代わって沙耶香を守っていた。

◇

「会いに行くんですか？」

沙耶香と別れた後、舞衣と合流。日はとうに沈み、時刻は七時を過ぎていく。今度は作戦本部へと足を運んでいた。

「確か鎌府の人が可奈美ちゃんたちと会ったって鎌府の子から聞きましたから、話を聞きに行こうと思って」

朝は会ったばかりなのに……。

都が舞衣が指している鎌府の人物を知っている。それは糸見沙耶香という女の子。

「それにしても、結構親切な方ですね。舞衣様にそんな機密情報を」
任務のことはともかく、居場所まで舞衣に教えてくれた……何なの、鎌府は沙耶香派とババア派に分けているの？

なら、私は間違えなく沙耶香派だね！

「ええ、少し変な子ですけど……最後は彼女のお姉さん（義理）と名乗っている。」

ビクッ！

「お兄さん？」

自称お姉さんを聞いて、都は身体が恐怖で震えた。

「申し訳ありません……少し自称お姉さんに苦手で……」

「そ、そう？」

ええ……精神的には駄目。

おっぱいが好きだけど、あくいうタイプは無理だ。

「それより、早速参りましょうか。舞衣様」

「うん、そうだね……確かに取調室にいると聞きました」

取調室か……なんて彼女があそこに待機させたのか……軟禁？いや、流石に人道的に腐っているから、そこまではしないはず……それに、ちゃんと警告もしたし。

そして、数分歩くところー

「ねーねー、ちよつといい？」

「ん？」

取調室に向かう途中に、都たちは誰かに声をかけられた。

「こつちこつちー」

声の主は廊下の壁に背中を寄りかからせて立っている。

歳は舞衣や可奈美よりも下だろうか、沙耶香と同じくらいだとすると中等部一年生といったところか。ピンク色に近い紫髪……元い薄桃色の長髪に小柄な体躯。身長は沙耶香より僅かに低い程度。何よりも目を引いたのは腰に差した御刀とコーヒー色の制服。

「最悪だ……」

舞衣より先に口が滑った都は少女を見た一瞬に、嫌な表情をした。彼女のことを知っている。

彼女のことを知っている。

彼女はあの御前試合の決勝選で少し手合わせした相手。あの時はまだ彼女の名前を知らないが、この後獅童さんから聞いた話によるとー

「……あなたは、親衛隊の……」

「親衛隊第四席、つばくろ燕 ゆめ結芽さんですね。」

燕 結芽は史上最年少で親衛隊入りを果たした刀使であり、現在第一席の彼女をも上回るほどの実力者という触れ込みの少女。

しかも、初めての一撃で都にもこう讚えたー可奈美より上回る剣士かもしれない。

「やっぱり覚えてたんだ。おにーさん。もしかして、ロリコン？」
「シスコンです。」

「ふうん……」

親衛隊の少女——結芽は興味深そうに都をジロジロ見つめる。不躰な視線ではない。無邪気、無垢とも言える純粋な好奇心や観察欲だ。

「えつと……私たちに何か用があるんですか？」

「ああ、そうそう」

都の答えに苦笑した舞衣は燕 結芽に尋ねる。結芽はようやく思いついたと言わんばかりに右手の握り拳を左手の平にポンと置く。

仕草が可愛いな。

「お姉さんは犯人の二人を見つけて、逃げられちゃったって聞いたけど、それホント？」

「それに関しては言い逃れのしようがありませんね。私の實力不足としか言えません」

「ふうん、そーなんだー」

結芽は一瞬だけ相對している都から視線を別の方向へずらす。都の左に立つ舞衣の方向へと。

「……!!?」

『それ』を先に読んでいた都は思考速度、聴覚、視覚を最大限界を上げ、行動を出す。床を蹴り、一足飛びに舞衣の正面へ移動。

それと同時に結芽も迅移を使って舞衣の方に。御刀の柄を右手で握り締め、左手の親指で鯉口を切る。抜刀の勢いに任せて斬撃へと繋げる——抜刀術だ。

そして、その先は——舞衣の首。

「……っ!!」

可奈美が舞衣にやったように刀を握る右手を掴んで止めることができるかと思ったが、都が結芽に遅れをとっている以上、もう間に合わない。ならば、とるべき行動は一つ。

“無理矢理にでも止める”。

「へえ……」

「お、お兄……さん？」

“ただ一瞬の出来事”。都は空手で刀の刀身の鏝元を左手の掌で

衝撃し、抜刀する方向とは逆向きの方向にその抜刀による産まれた強い力を押し殺した。

その結果、うまくその軌跡を改変した。けど、都の手の平の皮膚が裂け、血が床に滴り落ちる。

それでも、他の部位よりよかったと都はそう思う。鏢元は刀身の中で最も切れ味が悪い部位だから。

横から掴んだだけならば傷は骨にまでは至らないと授業のときはよく現れる内容。だから、都はそこを選んだのだ。

「すつごいねー、おにーさん！寸止めしようとは思ってたけど、こんなことされたの初めて！」

結芽はそう褒めながら、御刀に付着した都の油脂を布で拭い取り、鞘に納めた。

「お前、さつき何をするつもりだ……」

「おにーさんの強さを確かめるんだ。そうしないと、おにーさんは全然手を出せない」

煽るような表情とその好奇心に満ちた目。彼女から悪意そのものを感じないが……多分人を斬るときは絶対に容赦しないタイプだと感じる。

「ふさげんな……！俺が間に合わなかったらどうする！」

「怒らないでよく。私はおにーさんのことを信じているからそうしたのです。結果的におねーさんも傷一つもついてないじゃん」

「おまえー！！」

「お兄さん！手を見せて、早く！」

「舞衣ちゃん!?……うっ！」

舞衣はさつきのことに呆れられたが、すぐ反応して、慌てながら都の左手首を掴んで自分の方へと引き寄せる。ちゃんと患部に触れないようにしている辺り、彼女の優しさが窺える。

都の掌には大きな裂傷が一本の線となって引かれており、そこから鮮血が溢れ出ている。

「酷い怪我……早く医務室に行かないと。でも、その前に何か巻いて……」

舞衣はポケットから白いハンカチを取り出し、掌に巻き付けていく。

「駄目！舞衣ちゃん、ハンカチが汚れてしまいます！」

「静かにしてて」

ぴしやりと舞衣に言われ、睨まれる。都は萎縮しながらも言われるがまま応急処置を受ける。白かったハンカチは都の血が滲み、赤く変色していく。きつく縛ったおかげで出血は抑えられた。

「俺のせいで汚れた……」

「そんなのどうでもいい！お兄さんが私の私物を大事にするのを知っていますけど、そんなことよりお兄さんの方がずっと大切だから……！」

舞衣は悲しげな表情で都の手を優しく包み込んでいる。

よほど心配をかけた……昔からずつとそうでした。

「終わったの、おにーさん？」

横で見っていた結芽がニヤニヤしながら此方に声をかけてきた。

「何？わざわざ待っててくれた？」

そうしたら、都は不機嫌の顔で結芽の方へ睨む。

それはそうだ。大切な人を傷つけようとした人間に柔らかい態度ではありえない。

特に、都にとつて舞衣と可奈美は最優先対象なんだから。

「うん。今のでわかったよ、おにーさんがあの二人に手加減したのでしょう？」

ニヤニヤしながら、結芽はまるで玩具を見つけた子供みたいに都のことを見つめる。

「何のことでしょう？俺は報告通り、あの二人に人質として捕らえられて救援要請を遅らせた」

「それは嘘ですよね？おにーさんが本気だったら、あの二人の一人を抑えることができるじゃない？」

「…………それはどうだろう、俺はただの一般人だ。刀使なんか全然及ばない」

「一般人？ 私の攻撃を止めてたのにそれはないんじゃない？ ホ

ントはすつごく強いんじゃないの?」

「燕さん、いい加減にしてください。さつき、お兄さんを傷つくこと、私はまだ許しません」

都の手当を終えた舞衣は見てられなく、つい自分より年下の結芽を叱った。

「フンくやるの?でもおねーさんはおにーさんより弱いから多分私の相手にならないと思う」

「……………」

まるで彼女の言葉に当てられたみたいに、舞衣は悔しそうな表情をしている。

さつきの抜刀は彼女全く見えなかった……けど、都はそれを見て止めらせた。つまり都の実力は彼女より、上回っている。

「そんなことはない。俺はただ初撃を止めるのが得意だけ。長期戦になると舞衣ちゃんところが、普通の刀使を相手に負ける気がします。ですから、あまり舞衣ちゃんのことを舐めないでもらいたい」

「お兄さん…………」

「ふーん…………わかった。今回はここまでしておく」

都を興味津々見た後、結芽はすぐつまらなさそうな顔をして後ろに向いて立ち去ろうとする。

そして数歩のところ、足を止めた。

「次はもっと楽しく遊ぼう、二人つきりで」

「…………別の遊びならね」

それから、結芽も特に何か言うこともなく、この場から去っていった。

「お兄さん…………さつき燕さんが言ってたことなんだけど、私…………」

そうしたら、舞衣は何かを思い込んだ表情で都に聞く。多分結芽が彼女の實力を笑うことをすごく気にしているのだろう。

「本気さ…………俺は燕さんが言っていたようにそこまで強くはない。

迅移とか八幡力とか金剛身こんごうしんを全部使えこなすお前たちに俺はどれだけ技術を籠もっても、太刀打ちができない」

そう、速度を拳銃が発砲するみたいな速度に加速する力と腕力など

を増幅する力。それと、身体に鎧みたいなものをつけられる力。

それらの力の前では一般人は太刀打ちができない。

今までの相手は俺を油断したから、うまく倒せた。もし迅移を3段に上がりや他の2つの能力を使えたら、間違えなく一方的にはボコボコされる一方になる。

「これは決して慰めるもんじゃない。俺はお前たち刀使を尊敬しているから、特にお前と可奈美になあ」

優しく、いつもの都。さっきの衝撃事件で執事モードもバラバラされていた。

「……………うん。やっぱりこういうお兄さんが好き……………お兄さん、もう執事モードやめよう。私は元のお兄さんが好きだから」

「それは……………できません。これは孝則さんからもらった大事な仕事ですから。それに、舞衣ちゃんを大事にする理由も正当化もできるし」

「もう……………またそんなことを言って」

都からいつもの言動に少し呆れるけど、舞衣は少し嬉しそうに笑う。彼に大切されるのはすごく嬉しい。

「あ、それより早く医務室に行かないと!」

そして、急に都の怪我を思い出した舞衣は急ぎに都の右腕を引っ張り出す。けど、すぐ都に止められた。

「俺一人で行けるから、舞衣ちゃんはそのまま沙耶香さんのところへ行ってくれ」

「え?でもお兄さんの傷は」

「大丈夫、俺より沙耶香さんを会いに行つてあげて。あの子に尋ねたいこと、気にすることもあつたじゃないか?」

「でも……………」

「大丈夫。俺は高校生なんだし、一人でも保健室に行ける」

「…なら、気をつけてね。可奈美ちゃん達のことを聞いたあとに、すぐ迎えに行くから!」

「うん。」

それから、都は舞衣と別れ医務室の方へと足を進んだ。

第13話：昔の幼馴染

自分の人生を思えば、幸せな人生だと思う。

悲しい、痛い、苦しいことが一杯あるけど。結論から言うと、相応の無理矢理の努力を払ったあとと幸せに変えた。

こうして彼女にお世話されて、優しくされて、ずっとそばにいさせた彼女――柳瀬舞衣に無数の感謝しか抱かえない。

けど、そんな幸せを続けたためには相応の犠牲を払わなければならぬ。

だから、自分の才能と努力と時間と体力を彼女と――大事な妹のために使いきると覚悟した。

全てはこの三人だけの日常を守るためである。

◇

守備は二人一組制か……

舞衣が熟睡したところ、都は執事の仕事を終えてこっそりと取調室の近くにやってきて偵察する。

実はわざわざそうする理由がなかった。ただ沙耶香はまだ中にいることと舞衣が結構沙耶香のことを関心していることに、都が妙に気になる。

故に念のため、彼は偵察しに来た。

一時間で交代か……しかも、隙がない。いや……刀使二人ならやれるかもしれないけど、騒ぎを起こしたくない。

とりあえず、今日はここままでしておきましょうか。

美濃関に帰るまでにあと数日、この間にここを定期的に偵察にしよう。舞衣のためにも、沙耶香のためにもなる。

そう計算して、都は誰も気付かずここから去っていた。

◇

燕 結芽と接触した翌日の夜に――

朝と午後は特に何なの変化がなかったので、都はいつものように舞衣をお仕えする。

ただ今日の彼女はずっと沙耶香のことを気にしてて、彼女好みに合わせるクッキーでもわざわざ勉強してきた。

これはいいことだ。少なくとも可奈美のことをばかり心配しない。まあ、心配する対象が変わったけど……それでも、いいことだ。

そうすると、こっちもやりやすいし。

そして、今日は何もなく幕が降りた。

その夜に、都は舞衣が熟睡したあと、久々に？和達に電話をかけた。

「こんばんは、十条さん」

『結構遅かったわね。どうした？』

「少し個人的な事情が……それより、今は近くに誰かいらっしゃいますか？」

『……それに関しては、ごめん。』

「ん？」

？和の唐突の謝りに、都はまだ反応が掴まらない。

そうしたら、電話の向こうからは？和以外の人声が聞こえてきた。

『お、何だ？ 彼氏から電話か？』

『お、おい！ 勝手に話すな馬鹿者！』

何だか？和は凄く怒っているみたいだ……。

『あつ、駄目だよ薫ちゃん。今姫和ちゃんが秘密の電話の最中だから。』

『秘密？ それって誰とデスカ、カナミン。』

『え、えーと……それは……』

この声は……。

「可奈美にバレたのか……」

『すまない……』

一瞬、可奈美の声を耳に掴んだ都はすぐ事情を理解した。いつかバレるかは覚悟ができていたか……予測より早い。

「それより、可奈美以外の声が聞こえているんだが……新たな協力

者？」

『うん、可奈美と他の二人がいる。二人は紹介しておいた方がいいと思う。』

「でしたら、テレビモードにしてもらっても構いませんか？ 画面の左上にアイコンがあります」

『ああ、わかった。』

「あと、出来ればその場にいる全員がフレーム内に映るようになりたい。それなら、その場の状況を正確に把握しておきたいので」

『わかった。それもやってみる。』

十数秒ほど経ち、都の通話画面にテレビモードへの変更を許可するかどうかのメッセージが表示される。『許可する』を押すと、画面の九割以上が相手の携帯端末のカメラからの映像に切り替わる。

『切り替えたぞ、見えますか？』

「ええ、ちゃんと見えています」

画面右側の姫和がカメラに顔を覗かせながら聞いてくる。その左隣には手をこちらに振って可愛く座っている可奈美（都視点）。

ああ……可愛い……癒やされる。

そして、さらにその左隣にいるのは先日の朝に会った長船の二人。見た感じではさつき激しい戦いがあった……今は包帯で身体を纏う様子。

「古波蔵さんと薫さんか……休暇ではなかったのか？」

『そこも俺も聞きたい！クソお婆……学長』

『あはは……突然任務が押さえられて……』

刀使って大変だね……鍛冶科だから、そういうの知らないけど……。

『というか、お前らどういう関係なんだ？ そのエターナルホライズンの知り合いとかか？』

『……！』

ピクツ、と姫和が反応する。その顔は怒気と羞恥で真っ赤に染まっている。

『貴様、今私のことを指差して何と言った！』

凄く激昂している姫和だが、薫はあつけらかなとした表情で返した。

『今のお前の胸は地平線のごとくペツタンコ、そしてねねが懐かないということは将来の可能性もない。つまりはエターナルなんだ。』

ああ……そういうこと。だから、？和はあんなに怒っていて、恥ずかしがっているんだ。

ていうか、あのケタモノは胸の成長の可能性を見つけるんだ……やっぱり穢れ物だ。

『ゆ、許さんぞ貴様！』

しかし、あんなに怒っている？和はちよつと新鮮かも……。

「あはは……落ち着いて、？和ちゃん」

『そうデスよ、ヒヨヨン。』

またおかしいなあだ名をつけたな……この人。

それより、突然争いが止まった姫和と薫はなぜか可奈美の胸元を見る。

『……………』

『……………』

そこには年相応に膨らんだ胸が制服のシャツを押し上げている光景がある。大きすぎず、小さすぎず、手のひらに収まるサイズ。都の話を借りると、それは夢のような物！

よくわからないが……あの二人の顔が曇っているね。まさか、自分より大きな胸を見て絶望したのか？

なら仕方ないね！うちの妹はちゃんと希望が持っているよ！流石我が愛おしい妹！

いくら見ても、いつ見ても、可愛くて仕方ない！

『……………！?』

『……………！?』

そこで、彼女二人は次にエレンの胸に視線を移ると、さらに絶望したのである。

まあ、わかるだよな。

あんなビックサイズのおっぱいも人生初めて見たよ。初対面のと

きも夢中しすぎて、舞衣ちゃんにお仕置きされちゃうところだった。でもね、？和。小さいのも十分魅力があるよ！

可奈美のような大きすぎず、小さすぎず、手のひらに収めるサイズは素敵だと思わない？

あなたはそれ以下が……それでも可愛いと思うよ。

「十条さん。女性の価値は胸の大きさによって決まるわけではありません。たとえ胸が慎ましやかであっても、十条さんは十分すぎるほどの魅力を持っていらっしやる。自信を持ってください！」

『……！ そうか、そうだな！』

姫和の表情が綻び、暗雲に希望の光条が差し込む。

よし、我ながらよく言うね！

『でも、お前が仕える主人って巨乳じゃなかったか？』

だが、しかし。差し込んだ光は刹那の間に積み重なる黒い雲に塗り潰され、遮られてしまう。薫の一言によって事態がさつきよりややこしいことに。

『なん……だと……？』

裏切られたのような目で、？和は都を睨む。

『確かに舞衣ちゃんのが結構大きいよな……』

そこで天使のように純粹に語る可奈美。

『ワーオー・ミヤミヤも男ダネ。』

そして、エレンはニヤニヤとからかう。

『なんだ……ムネか、ムネなのか……やっぱお前も巨乳派か？』

最後は薫からは悔しそうに睨まれている。

「別にそうじゃないですけど……」

俺はどっち派でも受け入れるのよ。

『嘘をつくな！お前は巨乳派か！それとも貧乳派か！』

『男なら正直に答えろ!!』

『ふふ、なんか修羅場みたいデスネ。』

違います。

『それは私も聞きたい！答えて、お兄ちゃん！』

あれ？味方は？さつき唯一の味方はどこに？

ていうか、このぐだぐだ展開はなんだ!?

『『答える!!』』

四人の真面目の尋問……一人はからかう態度を除く、都は三人の攻めに仕方なく可奈美の胸の素晴らしさを伝う。

それを三十分くらいを語った。

そこで、照れ照れの可奈美以外の人間がそういうキモいシスコンに引かれた。

◇

『これはシスコンなのか……キモい。』

『カナミンがミヤミヤに凄く愛されますワネ。』

『もう……お兄ちゃんのバカ……／＼／＼／＼／』

『つまり貧乳派だな……よし、味方だ。』

なんか、嬉しいような嬉しくないような……。

とりあえず、一応自分と可奈美との関係から話して、そして彼女達に手を貸すことを話した。そちらからもそちらのことを聞かせてもらった。

「とりあえず、俺は可奈美のお兄さんとして二人の逃走に手貸している状況で……それと、お前たち舞草もくぎの方々はこの二人を歓迎して、一緒に折神紫を反旗することでしょうか?」

『まあ、大体そうだね。しかし、意外に冷静だな。お前』

「可奈美の未来に関わるんだから、そこはしっかりしないと、妹のためにならないと思います。」

『重度デスネ』

『ねっ!』

おい、そこ! 可奈美の胸に突っ込むなら、次はないぞ!

都が可奈美の胸の方へじっと見つめるねねの方へ睨むと、薫はすぐその視線を感じて、ねねを回収した。

「それより、良くも親衛隊の三人……獅童さんと寿々花さん、まだ見知らない皐月さつきさんを上手く退けるとは流石ですね……最後の方は

存じませんが、他の二人はとんでもなく強いですよ」

『うん、これもお前が事前にお知らせたお陰で突然現れた二人を対応する心構えができた。ありがとう』

『ありがとう！お兄ちゃん』

？和と可奈美の感謝に少し照れてた都はなるべくバレないように冷静で説明する。

「ただの推測ですよ。鎌府の勝手な動きによって、せつかく居場所が特定されたターゲットが逃げられた。ならば、完全に逃げられる前に全力で捕まうしかない」

とはいえ、彼女に褒められたことに都は本当に嬉しかった。小さい頃はそういうのあまり聞こえてないから。

そして、可奈美の手助けになることは都にとって何よりのお返し。

『軍師か？お前……』

『有能しすぎてヤバイデスネ！』

「褒めてくださって、ありがとうございます。」

『それで、私達が舞草に行った後はどうするつもり？』

「………明後日、羽島学長はどうやら美濃関に帰るという予定です。そこで舞衣様と美濃関へ帰る。あそこはもう特に学長に用がないからな」

『……そっか、舞衣ちゃん、帰っちゃうんだ。』

可奈美が寂しそうに呟く。自分の意思で姫和についていくことを選んだとはいえ、親友である舞衣に対して申し訳なく思う気持ちがあるのだ。

「うん、彼女は大丈夫。俺はずっと彼女のそばにいるからだ」

『うん……ありがとう、お兄ちゃん。』

少し顔が良くなる可奈美に微笑む都。彼女が良くしてくれば、それでいい。

「それから、舞衣様を送ったあとは俺も執事の仕事をやめて、貴女達とともに行動します。」

『やはり柳瀬舞衣はお前をそこに残せた理由か……』

「彼女の安全を確保するのは可奈美への保証と自分の意識で彼女を

守りたいだけだ」

『うーん……聞いた話によると、ミヤミヤは結構力ナミンとマイマイのことを大切にシマスネ』

「うん、何より大切な人だから」

『お兄ちゃん……』

『それで、どうやって合流する気?』

いい雰囲気の中、薫は現実的な質問をした。

まあ、今はそういう雰囲気じゃないのも分かる。

「明日の夕方までに舞草の拠点へのルートのデータをこの携帯に送っていただけますか? 勿論、人目につかないルートをお願いします。それからここちがメールを偽装しますので」

『わかりマシタ、グランパに頼んでおきマスね!』

『なんか手慣れてない? お前』

「これも妹のためですので、妹を危険に晒すわけにはいきけません」
都がそう笑って、あの場にいる三人は良く都はどれほど妹思いのバカ兄なのか知ってしまった。

『……なあ、切る前に一言でいいか?』

「なんででしょう?」

そして、話が大部分が終わったところに? 和はなんか真面目そうな顔をした。

『この前で聞いた話ですが……お前は昔の私を知っていますよね? まさかと思うが……お前、まさか……』

「……? 和、全てが終わったら話す。お前は自分の意のままに折神紫を倒してください」

『……っ!!』

「俺はちゃんとお前の背中を押すから、それじゃ……」
そうだけ言って、都は急ぎに電話を切った。

「さっきのは……」

「なんか事情がありマスワネ」

「……」

? 和の反応を見て、三人は一斉に? 和の方を見る。

「…………折神紫を倒すか…………やっぱりお前はあいつか…………」

「あいつ…………？和ちゃんはお兄ちゃんと知り合い？」

「？和から漏らした言葉に可奈美は我慢せずに聞く。

そして、？和は何も隠さずに話した。

「ああ…………私はお前のお兄さんとは昔の幼馴染なんだ」

◇

「この子は私の息子。そっちは？和だっけ？可愛いじゃん！」

あれはお母さんがまだ生きていた頃の話だった。

ある日にお母さんの知り合いみたいな女が自分の息子を持ってきた。

お母さんの話によると、向こうはただ夏休みの間に遊びに来ただけ。

そこで、私はあの子…………都お兄さんと出会った。

「ええ、自慢の娘ですもの。ほら、？和、挨拶をして」

「こんにちは…………」

「こつちもー」

「けいこー」

いきなり表した言葉に当场で私を驚かせた。多分向こうは男の子ですから、その声の大きさにびっくりされたのかも。

「……………」

「おう!?早速？和と立ち会いがしたいのか？流石私自慢の息子！」

「そこは…………確かに美奈都先輩に似ていますわね…………」

お母さんが苦笑している。どうやらこういうのを慣れていない。い。

「けいこー」

「いいよね？篝」

「別にいいですけど…………？和は私と旦那以外の人と交流するのか苦

手で……」

「大丈夫！私の息子は人と交流するのが得意なのよ！さあ！行けっ
！都！」

「ラジャー！」

「……………」

人に迷惑をかけるのが得意の向こうの母親は息子にそう命令して、
初対面の彼はすぐ私を追い突っ込む。

あのとときの私はびっくりされて、すぐ逃げたか……彼の足が早すぎ
で、まるでお母さんが言う鬼が私を追っているみたい。

その後、私はやむ得なく隠れた。

あの時の私は剣が得意だけじゃなく、隠れんぼも異常に得意。

でも、そのせいで同年齢の子と遊ぶときにいつも私を見つからなく
て、最後は私を忘れて、勝手にゲームを終わらせた。

その時の私は何も知らず、お母さんを心配させてしまい、私を見つ
かるまで一人で最後までに隠れた。

だから、今回もうまく彼を放棄させられて、逃げ切れるのでしよ
うか。

「みつけたー！ひ　よ　りをー！」

「え……………」

けど、その考えが甘かった……。

彼は笑顔で私を見つけてくれた。

「けいこー！やりましょうー！」

「なんて…………わたしをみつけるの？」

「ん？」

あの時の私はあまりの動揺でつい彼をじっと見つめた。

「だって、あしあとあるんじゃない？それをみて、ひくよりをみつけた
！」

「あ…………ほんとうだ」

よく見れば、確かに地面は私の足跡がある。

「けいこ、いっしょにやろうー！」

「え？」

「やろっ？」

笑顔でそう言った彼は私に手を差し伸べた。彼の言語から稽古を
したい気持ちがこっちに強く伝わる。

何なんだ、この人……なんてそんなに私を相手にしたいの？

「……………いやです。」

「ショックッ!？」

あの時の私はあまりの恐怖で、彼を拒否した。

だって、私にそうしてくれる友達がいないの。それに、お母さんだ
けで十分だから。

それから、彼があの日にかんりのショックを受けられたが……それ
でも、ずっと諦めないで、私に稽古を求め続いた。

その時の彼は確かに可奈美と変わらぬ稽古バカだ。流石に兄妹と
いうことか……。とりあえず、あの夏休みの間に私はずっと彼に追わ
れて、稽古を求められて……いつの間に、私は彼という友達ができた。
よく思えば、彼がストーカーという行為をずっとやっているぞ
……………。

そして、その日の夜。

彼は自分のお母さんと同じ部屋で暮らしていて、私は自分のお母さ
んと一緒に寝ている。

その時——お母さんは寝る前に私の髪を拭くながら、優しく今日の
状況を聞く。

「どう？今日は楽しかった？」

「怖かった……」

「……………えっ？」

そして、私の感想を聞き、表情が固まったわたしのお母さん。きつ
とこんな予測できないのでしょうか。

「はじめてみた……わたしをみつけるひと……」

「それで、隠れんぼ？」

「うん……いくらかくれてもみつけれられる……お父様がいつている
ヘンタイさんなんでしょうか？」

「？和、その言葉は決して相手の前に話しちゃいけないのよ。そし

て、お父さんの前にもだよ。」

震えた声で、私に話した母親はなぜか蒼白いの顔色で私の髪をきれいにしてた。

「うん……………わかった」

「どうやら先はまだまだあるだよね……………大丈夫かな……………」

この先のことを心配していた母親は遥かの何かを見ている気がしてきた。

「それと、けいこのやくそくもむりやりにしてた……………」

「……………え？それって」

「あしたは鬼退治！」

「……………私の教育が間違えなのかな？」

「まします？和のことを心配する筈であつた。」

でも、その心配がいらぬ……………だって、都お兄さんは私の初めての友達だから。

第14話：沙耶香の英雄

「柳瀬さん〜こっち、こっち〜！」

可奈美達と連絡を取った翌日、都はいつも通りに舞衣のご奉仕をしながら彼女のそばにつく。

ますます、執事の仕事を慣れてきた。

そして、美濃関に帰る前日に舞衣は誰かと約束があつて、鎌府女学園の料理の調理場へやって来た。話によると、帰る前に美味しいクッキーを作つて沙耶香に送りたいと仰つた。

それを尊重する都はもちろん、彼女の意のままに従う。

そして、調理場へたどり着く一瞬に一人の女の子がこっちに手を振りながら、舞衣達を歓迎する。

あれ？この子は……。

彼女の顔を見た都は見覚えがある感覚がする。

何処かで会つたような……。

「竹島さん！待たせてごめんなさい」

「いえいえ、気にしないで。私は学園の宿舎に住んでいるから、柳瀬さんより早くここにいるのは当然の話です。それと、雅っていいよ」

「うん、わかつた。雅さん」

「ちゃん付け。」

「うん。雅ちゃん」

二人が仲良く笑っている姿を舞衣の後ろから見て、都は尊く感じる。

舞衣は元々友達作るのが得意なので、この短期間で仲良くする友達ができたのは不思議ではない。

しかし、良くも別の学園の娘と仲良くできるとは……流石、舞衣ちゃん。

「……………柳瀬さん、さつきからずっと気になったけど……………後ろにいるのはあなたの執事さんですか？」

そして、視線に向かわれて、女の子は都の方へ気になる目線を投げる。

けど……最初の視線は少し獲物を見つかるような眼だ。

「うん、彼は私の執事です。」

「初めまして、俺は柳瀬舞衣様の執事をさせていただいております、衛藤 都と申します。以後、お見知り置きを」

舞衣のペースに合わせて、都は丁寧の挨拶を行った。

「初めか……うわあ！本物の執事さんですね！そういうセリフは漫画しか読めなかったよ！柳瀬さんはお嬢様なの!？」

「あはは……まあ、うん……」

女の子の反応に困らせた舞衣は少し照れてた顔だった。しかし、都はさつきが彼女の口から漏れた「初めか……」を見逃さなかった。

あれはまるで、自分のことを知っている口ぶり。

やっぱり、さつきのは錯覚じゃなかった……。

「凄いね！えつと……どうしよう。私はこんな凄い人と料理を作れるのかな!!？」

そして、彼女は自然と慌てるふりをして、舞衣も慌てて彼女を落ち着くように話す。

「だい、大丈夫だよ！私はそういうの気にしないから。それに、私は今日のことを期待していますよ！雅ちゃんと一緒に沙耶香ちゃんへのクッキーを作るとか……」

「そうですね？ありかど、柳瀬さん」

「ううん、気にしないで」

「それじゃ、早速作るか！糸見さんへのプレゼント。」

「うん、そうだね。」

女同士が可愛い年下女の子のためにクッキーを作る光景。本来では素晴らしい光景ですが、彼女はただ舞衣と一緒にクッキーを作るのが目的ではない……何か別の……。

「あ、やばっ！小麦粉が足りない！」

「えっ!？」

そして、いよいよクッキーを作り始めの二人はまず材料をテーブルに用意するところに、意外のことが起きてしまった。

「多分最近逃亡者の件で皆が忙しすぎて補充するのが忘れたのかも

……」

「ど、どうしよう……これじゃ、クッキーを作れないかも！」

「舞衣様、落ち着いてください。確か、食材置き場はこの近くにいるはず、そこへ小麦粉を取っていれば問題がないはず」

慌てた舞衣に都はすぐ彼女を落ち着かせる。

「うん！そうだね。ごめんなさい……慌てすぎで」

「いいえ、それじゃ私は取って行きますから、舞衣様はそこでー」

「駄目。お兄さんの手はまだ傷があるでしょう？私が取りに行く」

「そんな！そんな労働は俺がやれば……」

「……私の言うことをちゃんと聞いて。お兄さんはこの前、私を守ったのだから、今回は私がお兄さんの手を守る……」

優しく傷つけられた左手を握って、舞衣は都に優しく微笑む。

その微笑みは可奈美に負けなくらいに温かい。

そのせいで、都は思わずにドキドキした。

「うわあ……ラブラブ」

おい、そこ！感想つけるな！恥ずかしいのだろう！

「それじゃ、私は行ってくるね。雅ちゃん、お兄さんをよろしく／＼

／＼

そう言って、舞衣は都の手を放ち、急ぎにこの場から離れた。

よく見れば、さっきの舞衣の耳ところまでが赤くなつて……きつと

さっきの感想を聞いて、恥ずかしがっているのだろう。

どうしよう……舞衣ちゃんが可愛すぎで、心臓がバクバクと爆発し

そう。

特に最近はずつと舞衣のそばにいる原因で、こんなドキドキ感がどんどん増えた。

多分彼女によく大事されたのからかな？そこで男としては嬉しくて、恥ずかしくて……。

「いつもあんな感じ？普通の主従に見えないのですが……まさか付き合ってる？」

「ご冗談を……俺のような者は舞衣様のような素晴らしい方には似合わない」

これは二回目恋人だと誤解された。本当にそんな関係に見えるのか？

そこで、全く自覚がしない都である。なにせ、彼は舞衣や可奈美にあんな意識がないからだ。

だって、彼女たちは自分に勿体無い最高の女の子だと、ずっとそう認識しているんだ、彼は。

「そう……。それじゃ、また会えて嬉しいです」。英雄様」

「やっぱり俺のことを知っているんだ。それと、英雄様とは？」

そこで、女の子は被った一面を放ち。彼女は都の隣に行つて正体をバラす。

恐らく、舞衣がいないこの時点を狙ったのかもしれない。

「糸見沙耶香の英雄つてこと。覚えている？一年前のこと」

「貴女でしたか……」

すぐ彼女のことを思い返し、都は彼女の顔を再び見る。どうも、何処かで見たような……。

彼女はあの時、自分と対決していた刀使たちの生き残り者。いや、言い方は悪い……。

正確言うと、彼女に隙が突っ込まれて、負けちゃった。その後は彼女の助けによって、あの件は何もなく幕が降りた。

「うん。その日から私はずっと糸見さんの世話をしていた。そして、いつの間にか仲良い友達になった」

「そうでしたか……。めでたい話ですね」

そっか……。沙耶香は友達ができたんだ。よかつたじゃないか。

「これも貴方のお陰だよ。あの件がなければ、私は糸見さんのことを避け続けているのかもしれない……。だから、ずっとありがとって伝えなかった」

「そうか……」

彼女の話の聞いて、都の心がポカポカと暖かくなる。

自分の勝手の行いで、ちゃんといいいことに導きになったのね……。

「でも、このままじゃ糸見さんが危険に落ちるかもしれません。あなたの助けが必要よ。」

「どっぴいっぴいっ？」

沙耶香が危険？つまりあのババアはまた彼女に何をする気？

「こう見えても、私は特祭隊の副隊長。情報収集方面は鎌府最強だと少し自慢している。……まあ、あまり意味がないけどね。荒魂討伐にもあまり役に立たないだし」

「これを伝うために、舞衣様を利用したの？」

「ううん。同じ糸見さんを愛する姉キャラ同士だから、仲良くしたいと思つてた。まあ、あなたと接触したいのはメインだけど」

そう言つた彼女は申し訳ない表情をした。

つまり彼女は舞衣ちゃんと仲良くしたい上に、ついでに彼女を利用して、俺と接触か……。

そこで、罪悪感の顔か……。

「今度とも舞衣様と良い関係を築けるなら、許してあげる。それで、沙耶香に関する事情が聞きたい。」

「……うん。やっぱり優しいんだね。だから、あなたは英雄です……あの子の特別になつた。」

彼女の顔が緩んで微笑んだが、すぐ正顔で事情を話す。

「それじゃー私が『勝手』に収集した情報から話そう。糸見沙耶香の任務が失敗したあとは、学長の情緒が不安定になつた。それから、さらに伊豆追跡戦の失敗で……元い親衛隊第三席の皐月夜見^{さつきよみ}さんの敗北により、学長がさらに迫られた。」

「親衛隊第三席？何の関連性がありますか？」

「第三席の皐月さんは元々学長が局長に媚を売るために局長のそばに置いてあつた駒である。彼女が局長の貢献により、自分の評価が上がると思つたのでしよう」

そう言い度^どに彼女の顔が悲しくなつてきた。

「皐月さんは元々存在感が低い子で。でもちゃんと可愛いところも持っているいい子だよ！私もあの人^{ひと}がまだ学園にいる時に彼女と楽しく過ごしました。けど、ある日に『ノロ投入実験』をされて、親衛隊として選ばれた」

「ノロ投入実験……？それは……」

名前から聞くと、嫌な予感しかない……。

「これからは極秘密の情報です。この件がバレたら、十条？和さんと衛藤可奈美さんのような困境に落ちます。覚悟がありますか？」

「お願いします。」

都の決意が満ちた顔を見ると、雅は続きを話す。

「あれはノロを刀使の身体に注入して、実験体を一般の刀使よりさらに強くなる実験。簡単に言うと、荒魂と刀使の融合実験です。けど、成功率が高くない故に……」

つまり……”そういうことね”。

あの野郎ババアが自分の学生を危険の実験に犯して、それを局長たる折神紫に捧げる。全ては自分の評価を上げるため。

ふざけるな！馬鹿野郎！

お前は自分のため、生徒たちの命をどうでもいいと思ってるのか！

あまりの怒りで傷つけられた左手はまた痛くなる。

でも、それはどうでもいい……だってこのくらいの痛みは実験された女の子達の痛みと比べられない。

「……そこで、皐月さんが奇跡的に実験成功されて、親衛隊として選ばれた。ちなみに、親衛隊の全員はその実験体です。許されなくてすよね？」

彼女から関心の言葉。

ああ……確かに、許されない。

獅童さん、寿々花さん、燕さんは全員その実験者。なぜ実験を受け入れる理由が知らんが……荒魂の力を借りては駄目だと気がしていた。

小さい頃からの教育なんでしょうか……荒魂は悪、人類の敵。だからそんな簡単に受け入れられない。

「続けて……舞衣様が戻る前に……全部！」

もう怒って仕方ないか……都はもう執事モードから切れた。そして、顔は怒りと苦しみに混じり合っている。

きつと親衛隊の人と多少の知り合いなんでしょうか……と雅はそう推測していた。

「本題に入ります。 梶月さんの失敗により、学長が迫られて……そして、今晩は必ずそれを糸見さんに……投入する。彼女を最強の刀使だと……」

「くだらない……。 『竹島さん』」

「はい……」

彼女の名前を初めて呼び。彼女はただ一言で答える。

彼女は知っている。目の前の男はもう顔を見なくても分かる。

彼はすごく激怒している。

実験の真相への悲しみと糸見沙耶香の道具扱いへの怒りは目の前の男に決意を与えた。

「計画があんだろう？聞かせてくれ」

「……後戻りができなくなりますよ。あなたの主人にも迷惑を……」

「なら、俺の代わりに彼女を守ってくれ。情報屋さんなら、『それくらいの情報』が得意だろう？彼女の無罪をお願いします」

「……わかりました。この命をかけても、柳瀬さんを守りたいします。その代わりに糸見さんはよろしくお願いします」

「ああ……任せよう。」

自分の勝手はいつも他人に迷惑をかけたばかり。

そこには自覚があるんだ……今、選択した選択も……舞衣が悲しむのだろう。

悪い、俺はいい男じゃない。お前に幸せを与えられないんだ。だから、わざと距離を取ったんだ。

迷惑者と一緒にいると、ただ不幸になる。だから……俺の我が儘を許してくれ。舞衣ちゃん。

そして、その後は計画を聞き。舞衣が戻った後は何もなかったふりをして、彼女のクツキー作りに手助けした。

情報の操作がうまいのと関係があるのか……竹島さんはまるでさっきの記憶がないように舞衣と楽しくクツキー作りをした。

これは、流石にうまいよな？自分の感情さえもうまくコントロールできるなんて……俺なら、無理かも。

◇

寒く、暗い部屋に二人の人物がいた。一人の少女は寝台に横たわり、視線を天井に向けたまま動かない。もう一人の女性はその傍らに立ち、鋭い眼光で少女を睨む。

「沙耶香」

「はい」

傍らに立つ女性——高津学長は自分の直属の部下であり、生徒でもある少女——沙耶香に諭すように語りかける。

「お前は我が妙法村正を受け継ぎ、そして私が見出だした最強の刀使。親衛隊のような欠陥品とは一線を画する力を持つ、私の最高傑作よ」

「……はい」

沙耶香は目元に逡巡と憂いを乗せた表情で了承の意を示す。

高津学長は近くのテーブルに置かれたケースの中から一つの注射器を取り出す。中は赤黒い液体で満たされており、沙耶香は一目にそれがノ口だと理解した。

「これは紫様が直々に鎌府——いや、私が賜った研究の成果。これを受け入れれば、お前は名実ともに何者をも上回る最強の刀使へと生まれ変わる」

「………」

沙耶香は何も声を発さない。胡乱な瞳で高津学長の持つ注射器を見つめている。

「紫様のためだけに動く、私の下僕になることができる。喜ぶといわ」

「……はい」

思考が回らない頭で、渴いた口で言葉を紡いだ。

「……？ 何だ、これは」

「……あ」

高津学長は沙耶香の左頬を、正確にはそこに貼られた絆創膏に目を

つける。これは柳瀬舞衣が彼女にくれたもの。不思議と都がくれたぬいぐるみと同じ感じがする。

そして、高津学長は先日自分がつけた傷を外気から遮断するために貼られたそれに苛立ちを覚え、乱暴な手つきで剥ぎ取った。

「邪魔だっ」

「いつ……」

勢いよく頬から剥がされたせいで傷口にピリツと痛みが走る。沙耶香にとっては大した痛みではなかったが、物理的な痛みとは別の感覚が彼女の胸に波紋のように広がる。

——舞衣の、絆創膏……

ほぼ初対面の自分に姉のように接してくれた少女。舞衣の穏やかな顔が脳裏に浮かぶ。高津学長に可愛がられ、鼻屑にされてきたためか、学院における居場所は少なかった。沙耶香が刀使になり、妙法村正を手にしてからはそれが顕著になっていた。

事情を知らなかったとはいえ、何の打算も偏見もなく優しくしてくれた初めての相手。楽しそうに話してくれたときも、傷を絆創膏の上から優しく撫でてくれたときも、胸の奥が温かくなるのを感じた。

——これは、あの人と彼女と同じ暖かさだ。

無意識の中に衛藤兄妹と柳瀬舞衣に暖かさに与えられた沙耶香は彼女達に影響を受けた。

空だったはずの沙耶香に暖かさをくれた。

「沙耶香、お前は少々勝手に始まり始めているわ」

「……え」

「あの衛藤 都とかいう男に会って以来、妙に調子が狂ってるのよ。どういうつもり？」

「そ、れは……」

沙耶香の頭にもう一人の顔が浮かぶ。いつも自分に優しくしてくれて、自分のために怒ってくれてた紫髪の青年——都の顔だ。

「まあいい。それもこれも、どうでもよくなることなのだから」

「……」

高津学長は無言を言わず沙耶香の左の首筋に注射針を近づける。

体内に差し込んだ針の先からノロを注入するつもりだ。

「……………うっ」

よくわからない、声にならない声が口から漏れる。どうかした。今、目の前の人物の言う通り、これを受け入れることを考えると胸がズキツとする。

言葉にできない、嫌なのかどうか表現しづらい。ただ確実なのは、これが入ってくれば自分が自分ではなくなるということ——

「……………っ！」

バチンッ——

乾いた音が暗い部屋に響く。直前まで肌に迫っていた注射針は床に転がっている。

「沙耶香……………なにを」

「……………」

注射器を自分の左手で払い、沙耶香は寝台から降りてすぐ御刀の方に……………正確言うと、あのぬいぐるみを手で強く握る。

高津学長が困惑と怒りを含んだ表情で問い詰めてくる。

説明できない。何故こんな行動に走ったのか、納得できるような理由を話すことができない。

直感か、反射か、モヤモヤした感覚が渦巻いている。

混乱の沙耶香はただいたずら誰かに助けを求める……………あのぬいぐるみの元の持ち主に——沙耶香は助けてと心の中に叫んだ。

もちろん、これは意味がない。これはただのぬいぐるみだと沙耶香は知っている……………けど、あの人が約束してくれた。

——絶対に関に助けに来るって。

「沙耶香！私を反抗する気か——」

「それは沙耶香ご自身の意識ですよ。クズ女よ」

二人だけの空間に全く別の声が割って入る。

「だ、誰だっ!？」

出入口に一人の青年が直接に入ってくる。この部屋は元々暗いせいいか、入っている青年の顔はよく見えない。が、一歩ずつ歩み寄ってくるたびに顔の輪郭や髪の色が露わになっていく。

「貴様ツーー!?なんてツーー!」

「入り口近くの刀使は全部倒したよ。ただ二人の刀使は俺に対抗できない」

薄暗い部屋の照明の光を目映く反射する紫髪、黒いスーツとネクタイ、その端正な顔に浮かべているのは自信満々の表情だ。

「……………あ…」

会いたかった顔、会いたかった人。

「遅くなりました、沙耶香。約束通りに助けに来た。あなたの英雄はツーーここにあり!」

衛藤 都がそこにいた。

第15話：彼女の意思

「……………沙耶香、そこで少し待ってくれ。」

その場にいた都を除く誰もが沈黙していた。沙耶香と高津学長の視線は入り口に倒れていた刀使の方へ移っていた。彼はまたただ一人で刀使を倒した。

そして、彼は部屋中を見渡しながら一言も発さない。一通り見渡した後、床に転がった注射器で目の動きが止まった。

「これだね。」

都は冷静、無言で高津学長と沙耶香の横を通り過ぎ、床に落ちた注射器に手を伸ばす。

「貴様……………待て!! それは——」

「没収だよ。これは危険すぎだ。」

高津学長が慌てて止めようと掴みかかってくるが、都は傷がある左手で逆に彼女の手を掴んで空いた右手で注射器を拾い上げた。

「ぐ……………き、さまあ!!」

「お前は、沙耶香をノロの新しい被験者にするつもりだね。もう既に警告したのに、あなたって教訓が知らない大人だね。」

高津学長は歯噛みしながら都の手を振りほどき、距離をとる。別に彼女を力強く掴むわけではないから、手が振られるのが予測中だ。

「何故……………!」

「……………?」

「何故お前は……………まで沙耶香に固執する!? 何故ことあるごとに私を邪魔する!」

「……………」

まだわからないのが……………可哀相。反省しろとも言ったし。彼女に哀れと憐憫の顔を向け、本来都の中にある怒りがどんどん収まった。

これくらいのことかわからないとは……………人間関係はどうなっているの?というか良くも学長に成り上がったな。

「私がお前の主人に怒鳴ったからか!」

「……………」

「沙耶香に入れ込んでいるからか!？」

「……………」

「それとも、私に何か恨みでもあったか!? 答えろ! さつきから黙っているだけか!!」

「……………」

都の思いなどを知らず、高津学長はどんどん声を荒げる。

「説教でも無駄な気がする……警告もちゃんとしたし」

「……何?」

舞衣に暴言を吐いたから、沙耶香を道具扱いするところがあつたから、実験のこともあつたから、高津学長の人格や行動に物申したいことがあつたから、どれも都が怒っている理由だ。

けど、最大なのはー

「俺は最初からお前を気に食わないだ。沙耶香を道具扱いすることとお前が散々やっていることも全部気に食わないから」

この人の勝手の行動により、多くの人が苦しむことだ。

「……ふん、だからと言って沙耶香を助けていい理由になるか?」

この子は私の学校の生徒だ。貴様の気持ちなどは知らんが、部外者にどうこう言われる筋合いはないな!」

高津学長の顔に余裕が戻る。突破口を見つけたとでも思っているのだろう。

残念、お前は最初から救わないのだ。

親衛隊と口論ごっここのほうが楽しい。お前を相手ではつまらないのよ。

「ええ、確かに理論上では俺は部外者だ。一年前からはずつとー」

「そうだろう! だったらー」

「ですが、それは糸見さんが『自分の意思で貴女に付き従っている』場合です。」

高津学長の顔が固まる。やがてゆっくりと、潤滑油が切れた機械人形の如く首を沙耶香の方へと回す。

その反応……自覚があつたんだな。沙耶香はもうお前の命令を聞

かない。

「彼女がご自身の意思で貴女の指示に従っているのなら俺はこれ以上干渉するつもりがない。しかし、彼女の反対を無視し、あるいは意思の確認をしていないのなら……俺は全力で彼女を守るために、お前たちと対抗する！」

「わ、私は紫様をお守りする使命がある！ 全ての刀使と伍箇伝はあの方のために存在しているのだ！ ならば私の生徒である沙耶香を戦わせることの何が悪い!? それと、貴様は彼女に何の権利がある！」

駄目息を吐いて、なんて俺は彼女とここで口喧嘩しなければならぬかと思っていた都。

正直すぐここから沙耶香を連れ出す、逃げたいところだった。

「あのさ……前も言ったのようね？ いや、法律でも読んで見ろうよ！ 人権というかさ……本人の意願を問わずに人権外れなんだぜ？」

「黙れ！ 貴様はそれを言うな！ お前も命令で従うのだろう？ あなたの主人、あの柳瀬という小娘の命令の下を……！」

「……………はあ？」

「あんな半人前の小娘に従えるわけがないだろう？ 刀使としての腕も、状況判断の能力もない！ ロクに逃亡者を捕らえられなかったのだからな！」

お前——本気で俺を怒らせたいのか？

「大方、あの小娘の家の金目当てだろう!? 意思に反しているのはお前も同じではないか！ そんな貴様が何様のつもりでここにいる!? 恥を知れ、俗物——」

「お前、この先に舞衣ちゃんの悪い口を言うのがやめたほうがいいよ……………」

ただ一瞬に都は借りた御刀を抜け出す、目が追いつけない速度でその刀を高津学長の首にかけた。

そして、僅かに赤い鮮血が傷口から流れ込んだ。

「さ……………やか、はやく……………たすけ……………ろ」

「……………！」

早速恐怖に味わえたのか、高津学長は絞り出した言葉で沙耶香に助けを請う。都の後ろにいる沙耶香は驚いて口を開けたままだったが、元の位置から離れて彼女を助けようとした。

「大丈夫、俺は命を取れない主義なんだよ。『命はなあ』……だから、入り口の方に注意してくれると助かる」

「……………殺さない……………」

「約束する。」

「わかった……………」

沙耶香は頷いて、元の体勢に戻って静かに入り口の方へ注意する。まあ、ここは一時間交代だから、それにここに通る人間はあまりないからな。ゆっくりしてもいい……………。

しかし、本当にいい子だな。そんないい子を大事にしないやつは目がない……………いや、頭がない。

「さて、撤回させてもらいますよ、先程の言葉を」

力を調整して、刀に力を入れる……………大動脈を切らない深さで……………そして、彼女に痛みを与える。

「俺に対してはいくらでも、どんな悪口を言っても構わない。そういうの慣れていきますから。ですがー」

都は普段ならば絶対に見せないような憎しみに満ちた表情になっている。なぜならこの女はさつき、都に向かって堂々と禁句を言ったのだ。

大切な人への侮辱はどうしても禁句だ。それは許さない。

あんなに頑張っている彼女を侮辱するのがいつも守られる側としては我慢ができない。

「舞衣ちゃんやうちの妹などの対象に対する誹謗中傷を俺は見逃しません。たとえ伍箇伝の学長であろうとも、俺は許せない。」

「……………く、くそ……………」

痛みによつて歪んだ顔。彼女の声も痛みで震えている。

「舞衣ちゃんは自分の大切な家族や友達、市民達を守るために日々鍛練を積み、荒魂と戦ってくれた。そして、人の思いを包み、正しく導く力を持っている。とても優しく、努力家で、思いやりの女の子

です。」

「貴女は彼女のどこかを知っているのですか！ 欠片程度しか知らない、理解しようともしていないのに勝手なことを言わないで欲しい。俺はそれを見逃さないのよ……」

「さあ……早く言えよ。そろそろ大動脈の近くにいますよ。そこを軽く斬れば、貴女は死にます。先程言うのはただ沙耶香を安心させるための嘘です。俺は大切な人のために人を殺せる。あ……もし、助けを求めたいなら、俺は即刻斬ります。」

沙耶香にも聞こえてない声で、都は彼女に最後の警告をした。

そして――

「わ……わか……た」

僅かに聞こえる声。彼女が妥協しているのは知っているのが、大事の言葉がまだ出せてないから、

「ん？ 聞こえませんか、もっと大きな声で、はっきり言え。さもないと――」

彼女の首に刀を迫る。

「わかつ……た……てっかい……する……から……」

彼女がようやく妥協して、素直に謝った。まあ、顔はあの時に屈辱された顔だったけど。

「……少々誠意が足りないのですが、これくらいにしておきましょう……」

少し不本意ですが、ここまで彼女と無駄の時間をしたくない。

刀を彼女の首から離れ、そして持っているままに彼女に刀を向かう。

そして、高津学長はようやく自由を取り戻して、無力で地面に座った。

死ぬかもしれないという緊張から解けると、普通の人間ではそういう反応が取る。

「沙耶香、話が終わった……次はお前の本意を聞かせてほしい」

「え……？」

そして、都がそんな高津学長を無視して沙耶香に向かって、彼女を

訊く。

「お前はここにいたいのか、それとも俺と一緒にここから離れるのか？お前の本意を聞きたい……誰の命令や俺の期待やあのババアの思いなどを気にするな！お前はどうしたい？」

「わたし……どうしたい……？」

聞きたいのだ。彼女の意思を、本音を、本心を。ババアの人形でも、伍箇伝に従う刀使でもない、糸見沙耶香という一人の少女の思いを。

「ふざけるな！貴様っ……！」

「誰かお前を迫るなら、俺はそれを斬る。だから迷うな！遠慮なく言って、俺はお前の思いを尊重するから」

「わたし、は……」

沙耶香は困惑し、頭を抱えて押し黙る。高津学長の顔に笑みか戻りかけるが、都は全く慌てずに沙耶香の言葉を待った。

「ここに、いたくない」

「なっ……」

高津学長の顔が一変。一気に余裕がなくなる。沙耶香は制服の胸元に手を当てながら滔々と呟き続ける。

「舞衣や、都と一緒にの方が……あつたかくて、全然嫌な感じしない、から」

沙耶香は目をそらさない、自分の胸に抱いた感覚を吐露する。

「私は、都と一緒にいたい！私を……連れていて、ください！」

「……かしこまりました、我がプリセスよ。」

彼女が自らの意思で決めることに、都は微笑んで彼女へ近づく。

「貴女は自由です。自分の言葉で人に伝えられたのですから、意思のない人形ではありません」

「……うん」

「さあ、一緒に逃げましょー」

「貴様ア、沙耶香に何をした!!」

都が沙耶香の頭を撫でようとしたときに、高津学長が都を鋭く指差して怒鳴る。

「いいときに、邪魔しないでくれる？もうこれ以上付き合うのがウ

ザいから」

「うるさい！ 元はと言えば貴様が——」

高津学長はポケットから折り畳み式のナイフを取り出し、構える。そしてそのまま突進し、都の胸目掛けて刃を突き立てようとしてきた。

「——貴様が全て仕組んだせいだろうかああ!!」

「都……………」

「はあ…………だから、ウザいって言っているでしょうか。」

緊張する沙耶香を後ろに隠れさせて、都は軽く御刀で自分に向かうナイフを弾けた。

「なっ……………」

そして、足で彼女を向こうの壁までに蹴る。彼女はそのまま意識が途切れた。

「……………」

「大丈夫、ちゃんと手加減してた。俺は殺さない主義って言っただろう?」

今度こそ、彼女の頭を優しく撫でる。

「……………うん、温かい。」

うわあ……………なんだ!この感触は!

彼女の頭が触り心地良すぎだろう!?まさか……………美炎以外にこんな持ち主があるとは……………!

「……………都?」

都が自分の頭を夢中しすぎるところに、沙耶香は彼の名前を呟く。

「ああ……………悪い!それじゃ、ここから離れましょうか」

「……………うん」

沙耶香のおかげで、一時に現実へ戻った都は急ぐ沙耶香を連れてここから逃げ出した。

やばっ……………!沙耶香は単なるの可愛いだけじゃなく、頭も触り心地良……………これはやばくない?」

沙耶香の頭を撫でた都は欲望の暴走(頭を撫でること)が制御できるかどうかは心配した。

◇

「派手にやっていますね。でも、予測より早く騒ぎを起こすのは不本意ですけど……あの人、ちゃんと分かるんですか？」

自分の部隊を待機させ、竹島 雅は仲間のお知らせにより、どうやら犯人が鎌府の学長を襲って、沙耶香を攫い出した。

それを追跡するために、彼女らの救援を求めた。

そこまではまだ計画の内に行くんだけど、騒ぎを起こすのタイミングが悪すぎる。そのせいで、今鎌府の生徒たちは全員が都たちの方へ追いた。

このままじゃ、彼らが掴まれるのが時間の問題……。

そろそろ次の手を打たないと……しかし、私ができるのはあくまでこの部隊を止めらせること。ならどうすれば……。

あ……ある。けど、彼に叱られそう。

雅の脳内に浮かんだある人物。自分の知り合いの中で最もこの場合を切り開く有能な人物。

彼女なら彼らの力になれると思う……けど、彼の意願に逆らうのかもしれない。

「……けど、彼女以上の手助けはいないし……。英雄様に申し訳ないけど、許して欲しいな。」

そう言っつて、彼女は携帯を持ち上げて、あの人——柳瀬舞衣に電話をした。

◇

「屈辱！あの男は良くも私を侮辱して、私の沙耶香を盗むとは！」

鎌府の生徒に見つけられて、意識が取り戻したのはちょうど気絶された30分後の話。

鎌府の高津学長は屈辱と憎いしいが満ちた顔ですぐ自分の学園の生徒達に沙耶香の奪還命令を下さった。

彼女は自分をここまで侮辱して、邪魔しているあの男のことを憎んで仕方ない。彼を捕まった次第は簡単に容赦はしない、必ず死ぬほどの痛みを与えてやる！

そうだ！あの柳瀬の小娘に痛みをつければ、彼はきつと苦しいのだろう。

――必ず、この仇を取ってやる！この屈辱は決して忘れませんわ！
そう思つて、彼女は作戦本部の方へ参りました。

◇

作戦本部の扉が乱暴に開けられて、その現場の人はすぐその音に惹きつけられて、あの……全員の嫌味が集まられた人物に目を向けた。

またお前か……と、ただいま伊豆から戻っていた獅童真希は珍しく面倒な顔を表した。

そこで同様、此花寿々花も疲れた顔で駄目息を吐いた。あれは相手にしたくない顔だ。

彼女達は衛藤可奈美と十条？和に負けた件で、気分がもう谷底に落ちているのに……さらに、彼女の相手をするとは勘弁してほしい……。

「親衛隊！すぐ人員を派遣せよ！あの叛逆者の親族を追撃しろ！」

「高津学長、何の要件でここに？ご覧の通り、僕達は紫様に刃を振る叛逆者達を追跡でいそがしー」

「その件はしばらく置いて、今はあの叛逆者衛藤可奈美の親族であるあの忌々しい男の追跡の方が重要だ！彼は紫様に仕えるこの私を襲つて、私の沙耶香を盗んだ！断じて許さん！」

彼女の顔から怒りと感じる。

それと……衛藤可奈美の親族といえ、あの男――衛藤 都にしか
思い浮かばない。

彼はまた何かをやらかしたのか……。

「落ち着いてください。高津学長。さつき言っていたことは何のこと？衛藤 都とまた衝突したのか？」

「そうよーあの男はいきなり私を侮辱して、わけわからない理由で私の沙耶香を盗んだ！早く彼を追跡せよ！一刻早くも沙耶香を取り戻さなければ！」

うるさいわね……この人は礼儀が知らないのですの？とそこで感想を付く疲れた顔の寿々花。

「つまり彼は糸見沙耶香と共同行動ということでしょうか？」

「盗んだのよ！彼は私の沙耶香を誘拐して、彼女を盗んだ！」

そこで、さらに怒った高津学長は顔があまりの怒りに顔が歪んだ。

せつかくの美人顔なのに……いや、性格は駄目駄目だから、美人顔でも救えないよ。この人。

それより、まさか第五席はあの糸見沙耶香と関連があるとは……思わなかった。

これで、親衛隊に入らせれば、衛藤 都第五席と沙耶香第六席はきつと仲良くなるでしょう。まだあの二人の入隊勧誘が諦めない獅童。

衛藤 都は妹と違って、今だに紫様を反抗する意思がない。それと、彼は意外といい人だと獅童は彼にそんな高評価を下さった。

きつと結芽や糸見沙耶香の面倒を見るタイプだと思う。

「貴女は個人的の理由を去っておき、今だに僕達は衛藤可奈美と十条？和と他の舞草の二人の追跡の方が最優先している。貴女の個人的の頼みで彼女たちの手がかりを手放すわけには行かない。」

「なんだと！あの男はもう十分に紫様に叛逆する気が満々だよ！それを見逃すとは……貴女達、親衛隊はどれだけ役に立たないというのか！」

流石にそこまで言われると、獅童も不満の顔だ。

「貴女が言うの？勝手の行動を取って、あの二人を逃したのよ！確かに糸見沙耶香に期待する私わたくしもその責任がありますけど……結論を言うと、貴女は彼女一人に任せて、包囲などの準備をしていないから、そのまま簡単に叛逆者達に逃げられたのよ！」

けど、彼女以上に不満があるのは隣に立っている寿々花。

「はあ？貴女達、親衛隊こそ伊豆で派手な陣を取って、彼女を捉えるつもりだったけど。結局は逃げられたじゃない！何という無能なんでしょう！」

「あれは確かに私達が彼女達を舐め過ぎました。その責任もちやんと取っているつもりですわ。だから私と真希さんはこうして徹夜で彼女達を探ろうとしようと思ったんです。けど、貴女は突然個人的理由で私達を邪魔する気？」

「個人的な理由じゃない！沙耶香は紫様の隣に立つ一番相応しい刀使です！彼女をここで失うのが五箇伝……いいえ、紫様の損失ですわ！」

「何の口でー」

「もう良い、寿々花。この女とこれ以上に関わるべきじゃない。」

二人の喧嘩に見てられない獅童は寿々花を止めた。

これ以上、誰が悪いかどうかを比べる茶番はもう見てられない。

「ですがー」

「高津学長、僕達の決意は変わらない。僕達は貴女の事情で叛逆者の搜索を止めるわけには行かない。あの人ー衛藤 都の勝手な行動は紫様は直々に許している。」

「紫様が……!?!」

「ああ……あの人は紫様が直接に選ばれた親衛隊第五席の人材ですから。彼の行動に紫様は目を閉じている。」

「だい……せき……ば、馬鹿な！あの男はなぜ……!?!」

信じられない事実が高津学長が信じられない顔だ。

その反応はわかるが……何にせ彼は刀使すらない男。そんな男は紫様の護衛に任せるもんか！

けど、彼は剣の実力と頭脳は一般人より優れるところを見た二人はそんな彼を認めた。

どの方面も親衛隊に負けなくらいに優れている。性格も接しやすいタイプですので、第五席の席は彼に相応しい。

「事実だ。さあ、僕達の邪魔をしないでいただきたい。ここから離

れてください。高津学長」

冷たい顔と目で獅童はもうこの人と付き合うのが欲しくない。

それと同じ反応を取る寿々花。

こうして、高津学長の命令が無下にされてしまった。

◇

「いいことを聞いてもらった。」

作戦本部の扉の前に薄桃色髪の少女はたまたま通りすがれっいてる。そこで、彼女はあることを耳に入っった。

「あのおにーさんは第五席だったんだ……道理も強いというわけ。まあ、私より弱いに決まっているけどね。」

手が持っているのは沙耶香と同様のぬいぐるみを遊んでいる少女はさつき耳に入ったことで喜んでる。

何にせ、おにーさんの強さが確認ができた。少なくとも実力が最弱の夜見おねーさん以上の実力者。

でも、自分の初撃を止めるというのはきつと真希おねーさんに負けないくらいに強いのだろう。そう思うと、彼女はうずうずで仕方ない。

彼に自分の強さを示したい、脳内に刻みたい。

「それにしても……沙耶香ちゃんは確かに同じ天才と言われた子だっけ？」

ぬいぐるみを弄り遊ぶ少女ー燕結芽は何かを企んでいる子供みたいな顔を示した。

「彼女を捕まえたら、みんながびっくりするかな？」

そう計算して、結芽はまた勝手に一人の行動を始めた。

凄いや強者二人がいるなら、退屈にならないと思う。

それに、これは一気に自分のすごいところを両方に知らせるいいチャンス。

もつと自分の凄いやところを見させないと……もつと覚えさせたいと。

第16話：鎌倉の夜での激戦

「はい、これ。寒いだろう?」

まだ5月の夜に、沙耶香と都は商業地区の路地裏に身を潜め、地面に座り込んでいる。

彼は沙耶香の身体の調子を考えて、暫しの休憩を取る。

そして、彼はさつきコンビニで買った暖かい飲み物とおにぎりを沙耶香に渡す。

「うん……ありがとう」

彼の好意を受け取り、沙耶香は早速おにぎりを食べ始める。

ちょうど良い温度で包まれた白いご飯が美味しい。

「美味しい? まあ、コンビニで売ったやつだから、学園の食事と比べられないけど……」

「美味しい……学園よりも暖かくて、美味しい。」

小さい口でゆっくりおにぎりを食べている沙耶香。その様子はまるでハムスターみたい。

「へえ、初耳だな。その食事はそんなにやばいなの?」

「ううん、違う……おいしいけど、暖かくない。」

「熱食がないの?」

「……違う、この暖かさは都がくれた物。」

「そう……」

なんかそう言われると、恥ずかしい。

「……ねえ、何で助けてくれたの? さつきも、この前も。私、何もしてないのに……」

一段食事を終え、沙耶香から質問してきた。

恐らく、何となく気になったことを聞きたいのだろう。それにしても、理由か……今更、聞かれても思い浮かばない。

「なぜ……でしょうか。何となくそうしたのよ。俺も自分がなぜ手を貸したのがわからないんだ……」

「そう……」

消え入るような声で相づちを打つ沙耶香。納得はしていないよう

だ。都も自分が言っているけど言っていないのと同じことをよく理解している。

なぜだろう……自分はただ彼女を助けたいという欲望に従っている。もしか、正義感？いや……そんな大層のやつじゃない。自分はそんな偉い人なんかじゃない。

ならば、なぜ手を貸したんだ？

ーいや、ちゃんとした理由がある。

一年前と同じ理由なんだ……彼女は昔の俺と重ねていた。

都は少し迷いながら、もう一つの理由を口にした。

「貴女に、少しだけ昔の自分を重ねていたんです」

「え……？」

沙耶香の顔が上がり、都を見上げる形になる。都は視線を一瞬だけ沙耶香に移し、すぐにそらした。

「貴女があんなにいじめられたところを見て、まるで昔の自分を見ているような気分になった……」

「都も、同じようなことがされたの？」

「あなたのような道具扱いされるのと違うけどね。……でも少し似ているのよ。」

そう言い、都は小学校の時を思い返す。

あの時は母が亡くなったばかりに、大好きだったはずの剣を恐れ始めた時期。弱くなった俺はすぐ周りの悪いやつに散々いじめられて、色んなひどいことをされた。

あの時から俺は知った。この世界には光がないことを……。

「……もしか、俺は貴女に同情し、憐れんでいたのかもしれない。そこで、あなたを救うことを利用して、自分の憂さ晴らしのようなことをしたのかもしれない……」

よく考えれば、自分も最低最悪の人間なのかもしれない。彼女を救うことで自己満足に浸っていたとは……これはまるで俺がしたことあの女がやっていることと全然変わらないじゃない？

人間としては最低の思いを取ってしまった俺はやっぱり人間のクズだろう。

「……別に怒ってない。優しくしてもらって嬉しかった。」
ゆつくりと沙耶香は言う。哀しみや苦々しさはない、微かに笑みも感じられる表情で。

そんな表情を見て、少しでも心が救われた気がする。

彼女はとてもいい子だ。可奈美達と同じくらしいの良い子だ。

「本当、俺に勿体無い子がばかりいるんだな……。沙耶香、そばにいてもいいのかな？」

答えは既に知った。それでも聞きたい……。俺のような救いがない人間は彼女のそばにいる資格があるかどうかは……。

「いて欲しい。」

そうしたら、彼女は都の服を掴んで、純粹の目と顔を都に向かう。

そっか……。いいんだよな。

彼女の答えに、涙が危うく溢れ出す。

本当にありがとう、沙耶香。

「……。うん。それじゃ、そろそろ移動しましょうか。ここでグズグズしすぎると、見つけられるし……。飲み物は俺がお持ちしますね。」

「うん。」

沙耶香は小さく頷いて、飲み物を都に渡す。

温度はまだあるが……。このあとは暖めておかなくちゃ。

そう思うと、二人は再び行動し始めたところで、二人の目の前にとある人物が駆け付けてきた。

「いたっ！ 沙耶香ちゃん……。お兄さんも！」

「舞衣ちゃん……。!?」

「舞衣……」

柳瀬舞衣は息を切らせて路地に佇む二人の前に顔を出した。美濃関の制服に着替え、腰には御刀を差している。額に汗をかき、頬も少し赤くなっている。まるで二人を必死に捜して走り回っていたみたい。

「舞衣ちゃんはなぜここに……。!?」

思わぬ人物の出現に都は驚いている。

そして、舞衣はほっぺを膨らんで怒っているように話す。

「私はここに居るか何も、お兄さんはまた勝手の行動を取ってたからだよ！」

「え……？」

「お父さんに執事の仕事をやめて、沙耶香ちゃんを守るために一人で鎌府の人に喧嘩を売っているのよ！なんていつも自分勝手にやっているのですか！」

「そこまで怒る舞衣は見たことがない!?それに、なぜ事情が知っている?」

「雅ちゃんが電話ですべてを話したの。お兄さんは沙耶香ちゃんを守るために、一人で彼女を助け出すことと私を守るために彼女に頼むことを」

あの野郎、せっかくお前を信じているのに……舞衣ちゃんに危険を晒したくないから、貴女に頼んだのに……!」

「どれくらい知っていますか?」

「沙耶香ちゃんがどんな危険に落ちるかは聞いていませんが……それより、なんていつも私を置いて自ら危険事に入るの?約束したじゃない!一緒に背負って……」

舞衣の怒っている顔がどんどん悲しい顔になっていく。

言うまでもない、それを作ったのは俺だ。約束を破って、一人で無茶をするから。

「…………ごめん、舞衣ちゃん。俺はどうしてもお前を守りたかった。こんなことをしたら、また可奈美のような状況に落ちるから。……お前だけは無実の罪を背負わせたくない」

舞衣に自分の思いを必死に伝っていく都。彼はただ舞衣を危険から去らしたいだけ。

「そんなの求めてないから!私はお兄さんにそんなの求めていない!私はただお兄さんのそばにいて欲しいだけ……だめ?」

彼女が都に近づき、彼のスーツを強く掴んで、そのまま頭を都の胸あたりに押し込んだ。

そうしたら、熱い感触がしてきた。ヌルヌルで熱いもの……涙だ。また彼女を泣かせた……辛い、痛い。

これは何度目だろう……また彼女を辛い思いをさせてしまった……。

「舞衣ちゃん……俺と一緒にいると不幸になるよ」
思わぬ言葉が口に漏らした。ずっと胸に隠した言葉だ。

「……それでもいい。私はお兄さんと可奈美ちゃんと沙耶香ちゃん
というだけで、もう十分幸せですから。だから、私の我が儘を聞いてー」

視線を都と向く、彼女が泣いたばかりの様子はとても愛おしくて、
可憐だった。

いつもそんな彼女に何回のドキドキをさせられた。

多分、俺はいつの間にか、彼女に惹きつけられたのかもしれない。

「ああ……聞かなくても、わかったから。いいよ、三人で逃げよう。」
「………うん！」

そんな彼女の視線に負けて、都は彼女の我が儘を聞いた。

そうしたら、舞衣はようやく笑顔を見せてくれた。

これは彼女が望んだことだ。ただ一緒にいるだけで……全く、
どんだけ俺の心をドキドキさせるんだよ！恥ずかしいだろう！

「よし、それじゃ移動を再開だ。ひとまず撤退地点までに行こう！
そこで車が用意しているから」

「都と舞衣の顔が赤い……」

「ふふっ、なんかちよつと恥ずかしいな／＼／＼／＼」

沙耶香に指摘されて、舞衣はちよつと恥ずかしい反応。

そして彼は照れ隠して逃亡ルートの確認。そんな彼に後ろにいる
女子二人はそれぞれの反応を取る。

沙耶香は無表情で、舞衣は赤い顔で微笑む。

それから、徒歩で二分ほど経ち、舞衣が沙耶香に話を切り出す。

「私ね、沙耶香ちゃんと同い年の妹がいるの。前に言った、上の妹な
んだけど」

「うん……覚えてる」

舞衣には現在中学一年生の妹、美結がいる。舞衣が実家に帰った折
には彼女を頻繁に注意している。何にせ、妹というものは我が儘の生

き物。舞衣は何度も彼女の世話を焼けた。

ちなみに、都はただ一度妹達の世話をしているが……すぐ舞衣に追い出された。彼女が曰く：このままじゃ、妹達は可奈美になる。

あれ？これは褒め言葉じゃないの？可奈美のような可愛い子は増えれば、この世はもつと素晴らしい世界に変わるのよ。

というのが駄目なシスコンの発言である。

「普段はすつごくワガママで自分勝手なんだけど、本当大変なときに限って助けてって言わないの。私はお見通しなのに、変だよね？」

「お見通し……何でわかるの？」

「だって、私はお姉ちゃんだから」

舞衣は沙耶香の白い髪をすくように優しく撫でる。沙耶香はくすぐったそうにしながらもそれを受け入れていた。そして、都がしたようにいい顔になった。

「……………」

後ろの光景を少し覗けている都は自然とほっぺが緩んでいた。微笑ましくて愛おしいというのはこの場に使用するのでしょうか。

「沙耶香ちゃん、みーっけ！」

「!？」

唐突に何処からともなく、陽気な声が響いた。一瞬前までの穏やかな気分が一変。都は反射的に警戒心を強め、感覚を研ぎ澄ませる。

「こつちこつちー！」

月明かりに照らされ、頭上に揺らめく少女の姿がそこにあった。左に見える高層ビルの屋上に彼女がいた。そう、燕結芽だ。

「やっと思つけたー、捜したんだよつと！」

結芽は屋上の手すりに足を乗せ、跳躍。都たちの目の前に華麗に降り立った。

これは普通の人間では真似できないことだ。これが刀使……普通の人間では絶対に対抗できない存在。

「そんな危ないところから飛び降りると、危ないですよ。」

冷や汗を流して、都はできるだけ冷静の様子を保って彼女と直面する。

「そーだねー。でも、そっちの方が格好良いじゃん！」

「……そうですか」

結芽は不敵に笑っているが、都は対称的に細目で睨み付けている。警戒を怠らないよう、結芽の一挙手一投足に注意を配る。

彼女とここで出会うのはこっちの本意ではない……むしろ最悪。

「んじゃ、帰ろっか沙耶香ちゃん。高津のおばちゃんが待つてるよ？」

「……うん」

沙耶香は怯えて、後ずさりする。それを見た結芽は不思議そうに目を丸くした。

「あれ？ 帰りたくないの？ うーん、どうしよう！」

「……沙耶香ちゃん」

舞衣は横目で沙耶香を見つめる。沙耶香の目にはまだ迷いが見える。自分一人ならともかく、舞衣と都を危険に巻き込むことを考慮すると踏ん切りがつかないのかもしれない。

「わ、私は……」

「沙耶香ちゃん」

舞衣は沙耶香の両肩に手を乗せ、正面から向き合う形で問う。

「沙耶香ちゃんはどうしたいの？ 私たちのこととかは抜きにして、教えてほしいの。本当の沙耶香ちゃんの気持ちを」

「舞衣……」

沙耶香の視線が都へと移動する。都にも確認したいのだろう。でも、そうする必要がない。

「お前の思うのままがいい。誰か、お前の思いを邪魔しちややつは俺が斬る」

「へえ、そっなんだ。」

結芽からは今度敵意が満ちた目で送られている。もちろん、身体が本能的に彼女のことを怖がっているが……沙耶香のためにここで退くわけにはいかない。

彼女は強い……全力を出しても、勝算がゼロに近い。

「……うん。」

舞衣はゆつくりと手を戻し、沙耶香は結芽に向き直る。今度彼女、沙耶香は決意が込められた表情に引き寄せられる。

「私は……帰りたいくない。舞衣と、都と……一緒にいたい。だから……帰るのが嫌。」

「……うん、わかった!」

舞衣は沙耶香の手を握り、同じく決意を固める。一方、沙耶香の口から出た言葉に結芽は面白そうに口を歪めていた。

「へー、そういうこと言っちゃうんだー」

醜悪な笑みを浮かべた後、結芽は何かを思いついたように人差し指を立てる。

「じゃあこうしょっか! 今から十数えるから、その間に私から逃げ切れたらここでのこと、見なかったことにしてあげる。」

結芽は腰の御刀を抜き、正眼に構えた。口で足りぬなら実力行使というわけだ。舞衣と沙耶香の表情が強張り抜刀しようとするが、都がそんな二人の前に立ち、結芽との間に割って入った。

「二人はそのままに逃げてください。さつきメールで逃走ルートを舞衣ちゃんの携帯に送っているから。そこで、俺が雇っている運転手がそこにいる。」

「そんな……お兄さんは!」

「俺は燕さんを食い止めます。」

「無茶だよ! 一人でなんて……私も一緒に——」

「ここで彼女を受け止めるのは俺しか……言い方は悪いが、舞衣ちゃんは瞬殺される分だけだ。」

「……っ!」

「それに、沙耶香を逃がさせるのが今の目的。敵の目的は彼女だから」

「都……」

沙耶香は自分の制服を強く握り締めて心配そうな顔。前はまだそんな表情ができてないのに、これは成長すると言えらるだろう。

「大丈夫。約束通りお前を邪魔するやつを斬って、お前たちのところへ行く」

「……………」

「早く、行つて……………」

彼が必死の様子を見て、舞衣も切迫した状況と結芽の脅威を理解した。

彼女を相手にお兄さんさえも倒す自信がない…………。

舞衣は渋々と首を縦に振る。

「…………死なないで、絶対に」

「…………はい。」

舞衣は沙耶香の手を取り、迅移の高速移動を駆使して姿をくらし
た。

意外にも、結芽はぼんやりとその行動を見ていただけで引き止める
ことも、後を追うこともない。

「やっぱり狙いはこっちか……………」

借りた御刀を抜いて、都は柳生新陰流の構えを取った。

「半分正解のところかな。沙耶香ちゃんは天才って言われるのにも
興味が引くけど…………第五席のおにーさんとやり合うのも楽しみにし
ているよ」

「だったら、ここに残るのは正解なんだね。良かった。」

互いに不敵な笑みを浮かべながら対峙する。

相手は最強と呼ばれる刀使、手を抜くわけにはいかない…………何より
自分はただの一般人だ。だったら、この戦いには全力でしかない。

「…………可奈美さえも見せない技はここで使うか…………いいだろう。こ
こでー俺の本気を見せてあげる」

「へえ、少しおにーさんを期待できそうだ。」

対峙した二人は構えを取って、この大通りで最強対最弱の対決を始
まった。

◇

「へえ、予測通りだね！」

最初の一撃を防げて、都はすぐ彼女に反撃の一閃を浴びる。けど、

彼女は見事に後ろへと回避し、その一撃を避ける。

「なら、こっちから行くよー!」

そうしたら、彼女はすぐこっちに攻め入れ。都はその動きを捉え、ぎりぎりに横に避けられて御刀で次の攻撃を防げる。

そうしたら、彼は隙を見て足で蹴り攻撃する。

「うっ!」

当たったようで、彼女は都に蹴られて飛ばされたが、すぐ立て直した。

「足!?おにーさんは剣だけじゃないんだ。」

「言っただろう?全力でいくって……すべてが武器になるやつを使う……それは俺の全力だ!」

もちろん、そうではない。都の全力はそれだけではない。

「へえ〜おもしろーい!」

再び彼女から3度目が攻めてきた、今回は迅移を使う。

「……………」

刀と刀とのぶつけ合い。結芽は驚きの顔をしながら、連続迅移を使って攻撃する。

迅移状態下の彼女の攻撃が確かに彼にダメージ与えた。肉を斬る感触があった。血も斬撃で傷口から飛ばした。

けど、そんな彼女の迅移の初撃は「いつも読まれて、防げられた」。

本来は誰もそんな状態の彼女の攻撃を耐えられないというのに……彼は耐え続けた。

どんどん増えた傷口と血がどんどん彼の服を染み込んで、顔も手も足も腹も結芽に手加減の攻撃で浅い傷が作られた。

結芽は生身の人間を殺したくないと思いつつ、ただ要害を避けて攻撃するというのが……彼は痛みを恐れずに必死に結芽の攻撃を防げる。

「おにーさんは思ったより強いね……傷だらけだけど、私の攻撃をたまたま防げるのを褒めてあげる」

そう、都は傷だらけの状態だ。ただ数分の攻防にいくつのところが出血している。

流石に最強か……今までの相手と違い、全く追い付かない。

大部分を読んでいるか、それでも身体の反応は思考に追い付かない。

これは刀使との差だ。人体を超える速度での斬撃は流石に一般人速度の人間にはどうにもならない。

例え相手はどういう動きを取るのを知り、脳内で対応動作を作るとしても、身体が重くて、追い付けない。

防げて、斬られて、避けても、次は斬られる。そういう悪グループに回された都はどんどん自分の困境を知っている。

「お褒め預かりありがとうございます。それと、手加減してくれてありがとうございます」

「当たり前じゃん！私が本気を出したら、おにーさんは死ぬよ？」
ああ……それはよく知っている。彼女はまた少しの本気でも入っていない。彼女にとって、これはただの遊びだ。

“そこまでの差があるんだ”……。

「なら、続けようか」

「ああ……第四ラウンドだっけ？いつの間にか“コンビニが隣にいるね”……。迷惑をかけられるのかな？」

冗談を言っただけ、都は再び重くなる両手をあげて刀を結芽に向かう。

……もうかなりやばい状況だ。……手が重い、身体が重い。出血しすぎたせいかな？

確かに、彼女は手加減したが、これほどの出血量では流石に命の危険になるかも。

……十分の時間を稼げたはず。舞衣ちゃんたちの迅移なら、これくらいの時間が足りる。

ならば、これ以上彼女と付き合うのがごめんだ。

「大丈夫！気を付けながらおにーさんと遊ぶから、迷惑をかけられないよ。さあ、続けよ！遊びを！」

結芽は楽しそうに迅移を使っただけ、速度をさらに加速した。

これはやばい、追い付かないのかもしれない……けど、この時を待っていた。

「……超集中！」

自分の限界を超えて、彼女の初撃を横に避けた。

けど、彼女の攻撃はこのままでは止まらないのだろう。突刺攻撃を避けた一瞬、彼女はうっかり八幡力を使って横切りをした。

「へえ〜」

ただ一瞬の反応。彼女はまさか自分の第二撃が彼に防げられたとは思わなかった。

「うっがあ……!」

そして、彼女からの人体を超える力で振り来る斬撃に都はそのままコンビニの方へ飛ばされた。

カラッー

コンビニのガラスはその衝撃に耐えられなくて、割れた。

彼がそのまま、中にぶっ飛ばされた。

「えっ!?!嘘!私の責任!」

子供が悪いことをうっかりやっちゃったみたいな反応をする結芽は流石に自分のせいで、コンビニのガラスを割るところに罪悪感が生み出す。

きつと報償は高いだろう……真希おねーさん達にも叱られそう。

「うわあ……どうしよう……とりあえず、おにーさんを見つけて、店の人に謝ろうか!」

あとのことに考えるのをやめて、結芽は「ごめんなさい〜」と店の中に入った。

けど、そこにいるのはただ血に汚れた地面ガラスの欠片と血に汚れたスーツしかない。

「あれ?まさか……逃げられちゃった……?」

その光景を見て、結芽はすぐその可能性を思い浮かぶ。

その後、店の人がすぐ結芽を見つけ、彼女を叱ってくる。

◇

意識がもうすぐ途切れするところ。

都は傷だらけの体で目的地までに移動する。

彼女との戦闘から離脱するのは数十分前のところ。どうやら計算通りにコンビニの人たちに叱られるみたい。

けど、その結果までにたどり着くため、身体がこんなにボロボロ。それどころが、余った力で周りを警戒しながら、移動したせいで体力もほとんど残されていない。

ここはどこだろう……いや、わからない。

《超集中》を使ったせいかな、思考がだるい。

この技は自分の集中力は限界を超える技だ。一度解除すると、脳に大いなる負担をかけるため、使う機会がほとんどいない。

けど、この技のおかげで何とか燕 結芽の3段迅移攻撃の対応ができた。

「うっ……！」

口から大量の血が出てきた。さっきの攻撃の衝撃のせいかな……。

「ここで……止まる……わけに……はいかない……」

最愛の人のことを思い、それを原動力とする都は自分の身体を無理矢理を動かす。

また会いたい、話がしたい、抱きたい、頭を撫でたい。

彼の脳内はもうそれしか残さない。

最愛の妹と舞衣とイチヤイチャしたい……もつと触れ合いたい。

彼女達に……自分の思いを伝えたい。

それから、いつ経つかわからない時間を経ち。都は力尽きで倒れた。

彼はこのまま寝ちやうのがまずいと知っているが、それでも身体はもう動けない……そして、意識もいつの間にか途切れた。

第17話：名前の意味

幻聴さえも聞こえた気がする。

聞き覚えがない声だ。

「『愛宕』の意識に選ばれた人間よ……このままに死ぬのが困る。」
この声は女性の声だ。でも全く知らない……。

「ーだから、私の力をあなたに貸します。ほんの少しの力ですけど、カナヤマヒメの討伐のためならば、あなたの力はどうしても必要です。」

何か言っているのか、わからない……カナヤマヒメ？討伐？なんの事でしょう？

「わからなくてもいい。ただ、どうか、私の末裔を長年私にかけられた呪いから救ってほしい……この世から大荒魂の脅威から解放してほしい」

そして、突然強力の光が俺を包み込まれている。

この光は暖かくて、気持ちがいい。

「さあ、ここに立ち止まるな。前に進んでーまずこの世からあのタギツヒメという脅威から解放してあげて」

その言葉とともに、俺という意識がこの世界に閉じる。新たな意識が別の世界に目覚める。



意識が戻れた一瞬、俺はすぐ目の前の状況を掴んだ。

ここはさつき倒れ込んだ場所、地面には致命量ほどの血跡が残っている。

一般的に、ここは死んで幽霊になっている展開だけど。不思議のことに生きている実感がする。

あんな大量の血が流されたのに……俺は何もなかったのようによく生きている。

身体もさっさきの疲労や痛みなどを感じない。

「これはどういうことだ……?」

今に起きた不思議の現象が知らない……俺、どうやって生き返るの？ 全く覚えてないですけど。

「……………そうだ、舞衣ちゃんと沙耶香はまだ俺を待っている!」

そして、ちょうど一分が経ったところ。俺、衛藤 都はやっとあみずつと自分を待っている女性二人のことを思い返し、すぐこの場所はどこなのかを確認する。

「ここは……離脱地点に遠くない……よし!」

居場所を掴んだところで、都は支障なく走り出した。

今は一刻早く彼女たちのそばに行かないと!

そして、彼は全くさっさきの夢のことを思い返せなかった。

◇

「お兄さん、無事?!」

「都……!」

目的地に到着するのはもう朝の六時頃、ここは海岸辺りにひっそりと立つ駐車場。そこで彼を待っていた二人の女の子がずっとそこで待っている。

彼を気付いた一瞬、彼女達は彼のところに走ってそこで彼を強く抱き締める。

「うお!? 二人共! 服が汚いから、近づかないで!」

彼の最初の反応はただ自分が血塗れた白い服が彼女たちに汚れるのが心配。

しかし、彼女達はそれを気にしないまま五分続けて彼をいたずら抱き続けた。

その間にもう一度舞衣の泣き声が聞こえた気がする。きつと凄く心配したんだよね……。

そして、沙耶香はただ無言で自分から離さない力で自分を強く抱きつく。彼女にも心配をかけた……感情の表現が下手でも、その行動は

十分にそれを示した。

「俺を待つていてくれて、ありがとう。二人共。

彼女たちに抱かれて、心が暖かくなる。自分が本当に大事されていた。

それから、少し落ち着いたところに――。

「つて、ボロボロになってるよ！ 燕さんにやられたの!？」

やっと冷静を取り戻した舞衣は再びボロボロの血塗れた服を着ている都を見て、そこでツツコミ。

「いえ、これは――」

「都……死んだりしない？ 早く病院に行かないと……」

「ですから、大丈夫です。」

二人は心配そうに都に聞く、そこで都は自分が大丈夫だと強く伝う。

しかし、不思議と、本来は燕結芽に斬られた無数の傷口がこのまま綺麗に消えた。まるで何もなかったのような……。

結局何なのか……あの長い夜は。

「俺はなんとか燕さんの攻撃を耐えて、隙を見つけて、何となく逃げ出した。まあ、ボロボロだけど……」

「うん、凄い血だね……後で病院でも行く？」

「いいえ、もう止血しているし、このまま二人を舞草までに送る。」

流石に二人にあの自分でもわからない現象に話せないよね……。「舞草？」

「確か……日本刀の発源地と呼ばれる場所だよね？」

舞草という単語を聞いて、舞衣はすぐにその刀に関する知識を口に出した。

流石、優等生。

「ええ、あれは折神紫を倒すための組織の名前です。だから名前を舞草とつけた。」

「ご当主様に反抗する組織ですか……まさか、そんな組織が実在していますね」

「ええ……俺も初めて聞いたときはその反応だ。それで、俺はそつ

ちに行く、可奈美もそつちにいるから」

「可奈美ちゃんがあそこ……わかった。私も一緒に行く」

舞衣はまだ信じられない顔ですが、可奈美がそこにいることを知り、すぐその話を信じていた。

「うん。当然、沙耶香も一緒に」

「うん、最初はそのつもり」

沙耶香は頷いて、彼女の目は昨晚より強い意志を感じる。

「それじゃ、車に乗って行きましょう。運転手さんも随分待っていましたが」

「そうだね。」

「うん。」

そして、鎌府と燕結芽の追跡から逃げ出した都たちは車に乗って、舞草へと向かった。そこには可奈美と？和がいる。

よく考えれば、御前試合の時から随分の時間が経ちましたわね。この間はずっと彼女たちのことと沙耶香と舞衣のことを夢中になって、ここまで頑張ってきました。

けど、ここからは本番だ。折神紫を倒すために、五箇伝と親衛隊を相手にしなければならぬ。

その中に一番手ごわい相手は第四席の燕結芽。彼女は間違えなく折神紫以外の最強の壁だ。

正直自分では彼女に対抗ができない……。ならば、期待できる戦力は可奈美と？和しかない。……彼女達は一度親衛隊の人を撃退したから、きつと自分より遙か強くなっているのだろう。

自分の剣はまだまだだ……。特にあの頃から止まったけどね。止まったものは成長にならない、いつか超えられる。

「……………んっ…ふふ……」

車を発車してから、十五分ほど経過した。都は数百メートルのストリートを通っている途中の数秒の間、チラツと後部座席を覗く。

舞衣と沙耶香がウトウトと眠気をこらえている様子がそこにあった。二人とも安心して眠れるような心境ではなかったためか、今になって睡魔が襲ってきたようだ。都はその光景に思わず笑みをこぼしてし

まう。

「仮眠をとっていただいて構いませんよ。まだ目的地までは時間がありますから。そうだろう？運転手さん」

「……………はい。」

お喋りが少ない運転手が都の対応にやっと口に出した。正直、この方が舞草かたの方だと知り、びっくりした。

意外に無口だね。

「え……………うん……………ありがとう。」

「……………ありがとう。」

そして、都の提案を聞き入れ、二人とも睡魔に身を任せて眠りに入った。

お二人は可愛らしく、手を握り合い、寄り添いながら眠っていた。

この光景に都は尊さを感じる。

「あなたも仮眠を取っても構いませんよ。一夜中であんな騒ぎを起こってしまい、さらに親衛隊を相手にして、良くも無事に戻られるとは……………」

「そこで黙ってくれる？俺はこの二人の尊さを感じるところなんだ。それと、さつきも十分休憩を取ったし。」

あまりの失血で気絶した俺は謎の現象によってすべての疲労と受けた傷が消えた。本来一日中に思考さえもできないくらいに疲労するだろうに……………今はそんな気が感じない。

「それに、もうすぐ可奈美と会える……………」

都の口から漏れた言葉は誰にも聞けないふりをした。

彼は妹との再会にうずうずで仕方がない。



「むっく、もういつかいー！」

ほっぺを膨らんで、？和は悔しそうに目の前の男の子にもう一回勝負を求める。

「ふっふー！」

そうしたら、相手はすぐ爽やかな顔で受けて立つ。そして、二人は木剣で立ち向かって剣の試合を行う。

「珍しいね……？和はあんなに勝負を拘るとは……。」

「うちの息子はすごいでしょう！最高に可愛くて、強くて」

そんな二人の子供を見守っているのは彼女たちの母親達。一人は礼儀正しき座り、一人は男らしく座る。

これだけを見て、どっちの女子力が高いのは簡単に見極める。

「ええ……あなたらしいというか。それにしても、なんでいきなり家族を連れてここに？」

「ああ……それは町中にうちの息子に勝てる子が誰一人もないから、ここに連れてきた」

「だから、私の娘いじめに？」

視線を細めて、黒髪の女性はもう一人の紫髪の母親に睨む。

彼女は自分の娘がいじめられるのが許さないらしい。

「違うって！主に都が楽しくやり合う相手がいなくなっ！」

そこに慌てて解釈する都の母親。

「ホント……？」

「本当だよ!?もう信用されてないな……」

「当たり前です！あなたが今までやっていることを反省してください。いつも無茶をして……あの時も……なんて助けたのよ」

しばらく楽しく会話しているところ、突然黒髪の母親は重い雰囲気
で都の母親に尋ねる。

彼女はずっとその件を気にしていた。

「親友だから。親友だから、私は自分の半分をあなたにあげた」

そうしたら、相手は迷いなくこう言った。

「何それ、バカじゃないの？」

「バカを言うな！確かに、夫にそんな私は最高に可愛いだと自慢しているけど……私は納得いかないのよー！」

「はあ……良くも、結婚できましたわね。あなた」

「仕方ないだろう！相手から……むっ……思い返すと恥ずかしい!!

／／／／／／

自分勝手に恥ずかしがっている都の母親に、？和の母親は駄目息を吐いて、そうしたらすぐ笑顔で向く。

「とりあえず、あなたが幸せで何よりです。私もおにい……あの人と結婚して、？和を産んで良かったと思います」

「……うん、お互いはいいい子供を産んだね。うちにはまた一人の娘がいるんですけど、今は夫が世話を焼いている」

「そうなんだ……」

「なあ、篝。私はあの時の選択を後悔していない……こうして生きて子供の成長を見ることは何よりの幸せだよ。」

「あなたは幸せですか？」

「うん！すぐくー！」

「そう……良かった。」

少し微笑む？和の母親はなんだか、何かを重い石をようやく地面に置いた気がする。

ずっと気になっているんだね。あの件のことを。

ならば……ここで、話さなければならないことがある。

「……篝、あのさあ……もし、私がいなくなったとしても、絶対に悲しむなー」

「なんのことう？」

「うわあ!?!都!?!」

何かを篝に伝う時に、突然自分の息子がいつの間にか、自分のお腹を抱きついた。

そして、その好奇心が満ちた目で彼女を見つめる。

「うわあ!?!和!?!」

「なにかおもしろいはなし？わたしもききたいー」

それと同様、幼い？和も自分の母親を抱きついた。

「あのなあ、私達は大事の話をしているところだよ！剣はもういいのか？」

「じかいでやる！それよりききたいー！」

「うん！しょうふはあした！」

「ええ……??でも、面白い話がないわよ」

「なら、たっ……」

二人の子供が共同に自分の母親達にそんな甘やかすの要求をして、困った二人の母親はお互いの顔を見つめ合って、仕方なく可愛い娘や息子を抱きしめた。

きつと未来の話より、現在の幸せの方が重要だと。

何より、自分の子供を自分の原因で悪い思い出を残したくない。なら……このときだけを何もかも忘れて、ただ可愛い子供達を可愛がってあげたほうがいい。

「なあ、篝。これからも？和をうちの息子と仲良くさせてね」

「いきなりなんですか？そんなの、当たり前じゃない。？和もあなたの息子を結構気に入っているようですし」

「何なら、婚約でもしようか？」

「子供の未来は親によって決めるものじゃない！もうくくあなたつて人は……」

「あはは……」

「そこで笑うじゃない！」

再び怒っている篝。そんな生き生きしている彼女を見て、都の母親は自分の息子の頭を撫で始めた。

きつと、うまく行くのよね。と、彼女はまだ母親から卒業していない泣き虫の息子に少しの期待を与えた。

何にせ、〃都〃という名を名付けたのは自分の息子に都市みたいに皆を集めて、幸せにしてほしいという希望の意味が含まれている。

最初の子供、剣術バカ、妹思いのいいのお兄さん。

これからのことも彼に任せれば、多分大丈夫。少し辛いけど……頑張ってるね。私の自慢の息子よ。

「あら？寝ちゃった」

「こつちもね。本当に、子供って可愛い。」

母の温もりで眠ってしまった二人の子供を見て、篝と都の母は共に微笑んだ。

「うん。強くなれよ、都。妹は貴方しか守れないんだ。もちろん、？和にも貴方が必要なのよ」

「何を言っているんですか。？和はいつか刀使になれる、保護は出来ないでしょう？」

「それはそうですけど、可愛い女の子を支える男も格好いいと思うよ。私達の旦那のように」

「……………それもそうだね。弱いでも、一生懸命の姿はとても素敵だと思います。」

「ほおくく？惚れ言葉？」

「からかわないでください！／＼／＼／＼／＼」

顔が赤くなつた篝。その反応は実に面白い。

つい、彼女をからかった。

「でも、私も自分の旦那は世界一番格好いい男だと思うよ。いつか都もそんな男になれる気がする。誰かの柱になれるのか……………もしや、？和のー」

「それはどうかな。でも、彼女の支えになるなら私も嬉しいです。この子は口に言わない寂し屋なんだから」

？和の頭を撫でる篝は優しく微笑む。娘は最高に可愛けど、いつも一人でした。

それを心配する篝だが、？和が都との接触によって、少しずついい方面に変わった気がする。偶に、変なことを口に出すけど……………。

「きつとなれるよ。うちの息子は年下思いだから、兄として彼女たちを支えるに違いない。」

「そんな未来があったら、いいのだけど」

「大丈夫。何にせ彼は『都』。私の名前の一つを取り、希望の意味を持つ大事な息子なんだぜ。」

「希望？」

「うん。周りの人たちを集まり、幸せにするという意味。彼はそんな男になれると思う」

「……………いい名前だね。美奈都先輩は意外にしっかりしていますね」

「それはもちろん！何にせ、私の大事な子供だから。可奈美も都も私のお宝です。」

そう言つて、美奈都の表情は柔らかくなつた。これもママになつてからの変化なのでしょうか。

「私も。？和やあの人も貴女と『紫様』にも私のお宝です。」

「うん、篝も私にとって大事なお宝なんですよ。だから……強くなつて篝」

「え……？あ、うん。」

美奈都が言っている意味をわからない篝。こういう時の彼女はただこの先のことを知らない。

「ー都、私がかあつたら、篝もよろしくね。」

自分の可愛い息子にそんな期待を託す美奈都。彼女はずっと彼の頭を撫でた。

第18話：妹との再会と真相

「皆様、ご到着いたしました。」

夕方頃に、ようやく舞草の拠点にたどり着いた。入口を通過しようとしたときに呼び止められたが、運転手の顔を確認した後、すぐ入らせた。

結構有名の人なんだろうか？

そして、車が止まったあとに都は後部座席の二人を優しく起こし、外に移動させる。

「ん、んーっ！」

「ふあ……」

数時間眠っていたせいで舞衣も沙耶香も伸びや欠伸をして身体の調子を整えている。

嫌だ、可愛すぎるだろう……！

そんな彼女たちの無防備なところを見て、都が再び癒やされた。

そんなときに、何かを急いだ足音がこっちに速く走ってきた。

そしてー

「舞衣ちゃん、おにーちゃん!!」

「え、可奈美ちゃ……わっ！」

「うおっ!？」

興奮、というかはしやいだ様子の可奈美が舞衣と都に突進し、勢いのまま二人を抱き着いてきた。

久々の体温と匂いと妹の柔らかい身体の感触に、都はこの再会に感動している。

やっと……やっと会えた。可奈美。

ただ数日に妹から離れたけど、連絡でも取っているが、それでもこうして会えたことに良かったと思う。

特にあの困境から乗り越えたから、妹は昔より大切だと実感してきた。

「舞衣ちゃん、お兄ちゃん、良かったあー！ あのね、私、舞衣ちゃ

んとお兄ちゃんにいっぱい話したいことあるの!」

「私も安心したよ、可奈美ちゃんが無事で良かった。うん、じゃあ後でいっぱいお話ししよう」

「あ、沙耶香ちゃんも一緒だ! 聞いた通りだ、舞衣ちゃんとお兄ちゃんと一緒に来るって!」

可奈美は二人から離れて、沙耶香の手を取って上下にブンブン振る。沙耶香は動揺しているものの、嫌がっているわけではないようだ。

舞衣と沙耶香が同行してくることは運転中に連絡してある。渋られるかと思っただが、可奈美や姫和の口添えもあって許可をとることができた。

「つて、お兄ちゃんがボロボロ!?何かあったの!?それと、血まで!」
そして、沙耶香との挨拶をしたあと、可奈美は再び都の方へ見ると、その惨めな格好にびっくりした。

「少し親衛隊の人と遊びがあつて……もう止血しているから、心配しないで」

「親衛隊と!?お兄ちゃんは親衛隊の人と喧嘩していたの!」

あ……やばい、これは言っちゃいけないことだ。

「それより、?和……十条さんは?」

話題を変えようと思っただ都。なるべくせつかくの再会で妹に余計な心配をかけたくない。

「?和ちゃんなら、私とお兄ちゃんとの再会に邪魔したくないから、

拠点で待っているよ。」

「そうか……」

あの子もいたんだ……当たり前のことだが、あの子との再会にはどんな顔がいいのかな……。

少し?和との再会に緊張している都。

「お兄ちゃんは緊張している?」

「なんてわかったの!」

そんな都の反応を探す可奈美は都にそう尋ねた。

「だって、お兄ちゃんの妹だもん!えっへん!」

「おおお!!よくわからないが、可愛い!」

そして、相変わらずシスコンの流れに入ったパターン。

「あの……少し、よろしいですか?」

都が妹に興奮している最中に、ある女性が話をこの兄妹の間に入れた。

見た目は黒髪の落ち着いた雰囲気の女性。年齢は二十代から三代前半程度。身につけている服装から見れば、それなりに位の高い人物だろう。

「朱音様!」

「え?誰?」

可奈美がすぐその女性の名前を呼び出していたが、都はわからない顔で聞く。

それと同様、都が連れてきた二人も分からない顔だ。

「初めまして、折神朱音おりがみあかねと申します。あなたたちの到来にご歓迎いたします。」

「折神!」

すぐ可奈美を庇って、抜刀するつもり新都。

彼に対して、折神朱音と申す者の隣にいる刀使も抜刀するつもりが……彼女に止められた。

「おやめなさい。彼のその反応は普通です。」

「はい……」

彼女の命令に長船の刀使は元の態勢に戻った。

「お兄ちゃん!!朱音様は悪い人じゃないです!だから御刀を……え?なんて御刀持っているの?」

そこで妹がさらに朱音という人を庇っているが……注意がすぐ都が借りていた御刀の方へ逸らした。

「借りたものだ。……それと、さっきのご無礼に失礼しました。」

抜刀の構えを解け、都は彼女の前に身体を伏せて謝る。

可奈美の反応から、彼女は味方。なら、敵意を消して謝ったほうがいい。いい。

「いいえ、あなたは噂の通りにいい人ですね。衛藤さんからいろいろ

ろ聞きましたよ。自慢のお兄ー」

「朱音様、それはー!!」

大声を出して、可奈美はすぐ恥ずかしい顔で彼女のこれ以上の発言を止めた。

「ふふっ、わかりました。それでは、中に参りましょうか。舞草もご紹介していただきたいですし」

可奈美に温かい微笑みをして、朱音は都たちを舞草の中へと案内していく。

舞草はどうやら山中にいます。自然に囲まれて、集落や農作物が入り口からたくさん見えています。

何より、ここでの皆はいい顔で朱音とご挨拶をしている。どうやら、彼女はこの地にかなり人気を持っているらしい。

それから数十分歩いたところ、警備をしている長船の刀使と少し豪華そうな屋敷が見えてきた。

おそらく、あそこは目的地だろう。

「長船の人が多いようだね……」

都は思わず口に漏らした。

「ええ……五箇伝の中に、彼女達は最大の協力者です。お気に入りの子がありますか？」

「……………!?!」

「……………!!」

「……………?」

冗談を言うつもりで朱音ですが、そこで三人の女子はそれぞれの反応を示した。

「ごめんなさい、さっきのは冗談……あら?どうしたの、皆様?」

彼女たちの意外な反応で、逆にびっくりされている朱音。

視線は主に可奈美と舞衣の方へ。

「な、なんでもないです!／／／／／／」

「(づ)冗談ですね!あはは……／／／／／」

「……………なんか、舞衣がおかしい……」

「まだ疲れているのかな?中に入ってゆっくり休もんか。舞衣ちや

ん」

「いいえ！私は見たの通りに元気です！ほらっ」

大きな動作を取って、自分が元気のように示す舞衣。

「そうか……無理しなくてもいいのよ」

「う、うん／＼／＼／＼／＼」

「なんか、そちらの女性達と凄く仲良いですね。妹だけじゃなくって」

しばらく事態が収まるところに、そこで朱音は無自覚で意味深の話
題でも振り込んだ。

「ええ、大事の方たちですのぞ」

けど、そこは都の無自覚の答えにうまく丸くに収まった。

それを見て緊張している長船の生徒達はなぜか駄目息を吐いて、可
奈美たちに同情の視線を。

おい、一体さっきのは何なんだろう。

◇

都、可奈美、姫和、舞衣、沙耶香、薫、エレンの7人は広間の座敷
に集められていた。広間には既に朱音が正座している、そこで、彼女
は改めて集まった全員に自己紹介を行う。

「皆さん、初めまして。折神朱音と申します。舞草へようこそ」

7人ともそれぞれ……主に都から自己紹介が始まり、皆は次々と自
己紹介する。

一段終わったところに、朱音はすぐ本題に入った。

「早速ですが、今から二十年前の事件——相模湾岸大災厄の真実を
話します。」

相模湾岸大災厄。

二十年前、相模湾岸に大荒魂が突如出現し、大きな大災害を起こし
てしまった。その時の死傷者が一万人以上に超えた。まさに大災害
だ。

それを当時の折神紫と伍箇伝の学長たち計六名による特務隊によって討伐された、という事件だ。その事件を機に折神紫は大荒魂討伐の大英雄、最強の刀使として二年後に折神家当主に就任し、伍箇伝が設立された。

朱音はここまで説明したところで『ですが』と一度言葉を区切る。

「このとき、大荒魂——タギツヒメの討伐に加わっていた刀使は他にもいたのです。」

「え……」

？と朱音以外のメンバーはその記録していない事実には驚愕の顔をしていた。

そして、なぜだか、朱音は言いづらい目線で都と可奈美と？和の方へ向かう。

それから、しばらくの沈黙が経ち。彼女はようやく続きを話した。

「その名は^{ひいらぎ}柊^{かがり} 篝^{ふじ}と^{わら}藤原^{みなと}美奈都。十条さんと衛藤さんのお母様です。」

「なっ……そうなのか!？」

姫和が明らかに動揺し可奈美の方を向く。可奈美は特に気にした様子もなく答えた。

「うん……」

「なぜ言わなかった!」

「だって、聞かれなかったし。それに、お母さんは刀使だったときのこととか話さなかったから……」

そして、？和の視線はさらに都の方へ向く。そこで都は可奈美の反応と同じ。

「可奈美と同じだよ。全然話さなかったし、あの頃はただいたずらに母に甘えた。」

思わぬところで入った情報に可奈美、朱音、都以外の五人は戸惑ったが、すぐに話は戻った。

「何故お二人の名前——いえ、存在そのものが『なかったこと』にされていたのですか。それは——」

「十条さんのお母様、篝さんは大荒魂を鎮める責務を担っています」

た。……………命と、引き換えに」

「え……………」

今度は都が動揺した目線で思わず？和の方へ向かう。けど、彼女はただ聞き慣れない単語を口に出した。

「鎮めの儀、ですか」

「はい、これからは鎮めの儀とういうものをご説明します。これは柊家に伝わる奥義です。皆さんは迅移を知っていますね？」

全員が首を縦に振る。

迅移とは刀使の戦術の一つ。御刀から神力を得て高速で移動する技だ。原理は隠世と現世の時間の違いを利用したもので、隠世の時間の流れの早い層に到達し、強大なエネルギーを得ることによって可能としている。

「迅移によって隠世の深い層に潜れば、より速く移動することが可能となります。ですが、それが現世と隠世との境界である五段階目の層まで到達してしまうと——」

「二瞬の時間が無限に引き延ばされ、隠世から戻れなくなるという意味ですね？」

そこで朱音に代わって、先に話すのは都。

「ご存知ですか？」

「ただ簡単な推理ですよ。つまり、ひよ……………十条さんの母親は20年前で五段階の迅移を使って、あの大荒魂を自分とともに隠世に封じ込むつもりなんでしょう」

「……………流石です。」

「それって……………」

流石にこの話では感情の波動が起きやすい舞衣はその事実には恐れた顔だ。

もちろん、俺も危うくその表情だった。だってあれは？和の母親、そして母と仲良い友達……………そんな自己犠牲は受けるものか！

なるべく、自分を落ち着く表情で次の話を向かう都。

「篝さんは理論上最高速の迅移を使うことのできる唯一の刀使でした。そのため、荒魂による大災厄の際には自らの命を捧げる覚悟だっ

たんです。」

「心中技じゃねーか、それ」

薫が苦虫を噛み潰したような表情で呟く。

「事の真相を知ったのは、七年前……美奈都さんが逝去されたとき。私は篝さんにそれを電話で伝えました。電話の向こうで篝さんは泣きながらに訴えていました。美奈都さんが亡くなったのは自分のせいだ、と」

「……………」

「お兄さん……大丈夫？」

「……………」

都の異常を先に察した可奈美と舞衣はそんな彼に心配そうな目で見つめる。

「……………大丈夫ですか？都さん」

そして、朱音……いや、他の皆も一気に視線を都の方へ集まる。

「だ、大丈夫だ……朱音様。続けてくだ……あつ。」

「大丈夫。」

「大丈夫。」

可奈美と舞衣はすぐ都のそばに座り、彼が震えた両手を握る。そして、「大丈夫」と……。

二人はきつと彼が我慢していると、察したのだろう。

「ご、ごめんなさい……母の死はまだ……俺っ……」

涙が泣き出しそうな感じ。もう母の件で泣かないと決めたのに……妹の前に泣くのは嫌なのに……。

「泣きたいならいいよ、お兄さん」

「お兄ちゃんは昔から泣き虫だから、お母さんのことになるよ、そうなる。だからー泣いてもいいよ。笑ったりしない」

この世に何もかも優しい二人はこうしてそばにいる、俺を優しく包まれている。

これじゃ、我慢できないよ……。

「ごめんなさい……少し抱いてもいい？」

「うん。」

「わかった。」

二人は両側から都を優しく抱きしめた。

二人の温もりを感じて、俺は我慢できず泣き出した。

この悲しみは母に向けるだけじゃない。？和の母にも向けるのだ。

彼女も泣いた。母の死に自分のせいだと自己責めながら泣いていた。

そんなの悲しいすぎるのだ。あんなに優しくかった彼女が悲しいと思えば、心が痛くて、仕方がない。

「お前……」

「都……」

「ミヤミヤ……」

「……」

◇

それから、何時か経つのが知らないか、俺はようやく冷静を取り戻して、二人と手を繋いで席に座る。

しかし、そこで妙な恥ずかしい気持ちが生み出した。

「あの……二人共、そろそろ手を……」

「嫌です。」

「絶対離さない。」

都の提案に二人は即秒に笑顔で断った。

「……………いや、恥ずかしいですけど／＼／＼／＼」

「……………」

それでも、二人は手を離さないままに繋いでいる。

「まあ、都さんのことを心配しているから。そこは妥協しましょう。」

「そうデス！ミヤミヤ、観念してクダサイ」

「まあ、そのほうがお前のためにもなる」

「っねー！」

「舞衣の温もりは気持ちいいですよ」

「……………」

おい、なんで全員はその温かい視線でこっちに見るの!?

確かに、さつきは泣いたけど。そこまでされたら、また泣いちゃうよ!

「ーでは、都さん。これからの話もあなたの母にも関わるから、退席してもー」

「大丈夫……恥ずかしいけど、そばは二人がいます。」

そう断言して、都はここに残りたいという気持ちを強く示す。

「絶対離さないよ、お兄ちゃん。」

「私も。偶に私達を頼っていいのよ」

「はい……………」

二人は都を優しく手を握って、いい表情を示す。

この二人がそばにいるなら、大丈夫……………」

「わかりました……………では続きを。篝さんが美奈都さんの死を自分のせいだとする理由については、「鎮めの儀を行った際に、美奈都さんがギリギリのところまで篝さんの命を救ったのです。篝さんの失うはずだった命を半分肩代わりする形で……………」

なるほど。本来は篝さん一人で済むはずだった犠牲を二人に増やしたようだ。

けど、きっとこれは最善の選択だと思う。母があのとときに何もしなければ彼女だけでも生きられたら、きっと自分のせいだと嘆くのだろう。

そんな母を見たくない。

「そして、篝さんと美奈都さんは刀使としての力を失い、数年後には命すらも……………」

最後辺りは消え入りそうなほど弱々しい声だった。朱音の言葉から数秒後、今度はエレンが疑問を投げ掛けた。

「おかしいデスね。だったら何故隠世に追いやったはずのタギツヒメがここにいるんデスか?」

「鎮め切れていなかったんだ、母は。一時的にタギツヒメの力を削

ぐごとしかできなかつた。そして、折神紫として生き続けた。」

それは母の介入によつて作られた隙か……。

「ちよつと待つて。そもそも、今の御当主様は何者なの？ タギツヒメになつちやつたつてこと？」

「それは――」

「可奈美。あくまでの推測ですが……あの場でタギツヒメは母たちによつて大ダメージを喰らつた。おそらくですが……タギツヒメはその回復のために折神紫と取り引きをしたと思う。母たちの命を引き換えに……」

「……えっ？」

都の推測に全員の視線は都の方へ向く。

「ただの推測だけどね……鎮みの儀式のせいで戦闘不能になる母と篝さんがいつでもタギツヒメに殺される困境に落ちている。そこで、折神紫は自分の身体を引き換えにあの二人の命を救つた。」

「それは……」

「私達はあそこまでに推測していなかつた……」

都の推測に朱音は呆れた顔。

そして、二人の手で冷静でいられる都は続きを話す。

「楽観的な考えですけどね。俺はあの人――折神紫をいい人だと思う」

「………っ！」

「何故にそう思う？」

？和は少し納得行かない表情だ。

それはそうだね……けど、この場でこの推測を言わなければ。

「この20年の出来事からだ。彼女が大英雄になつて、ご当主になつて、刀剣類管理局を作り、五箇伝を整理する。それから色んな技術を発展させ、荒魂という災厄を最小限に抑えた。」

「これはただの荒魂の出来事じゃない。人類の敵なら人類をより良い未来へ向かうじゃない？おかしすぎる。だから、これは折神紫自身のご意思と思う。」

「言われみれば、確かに……」

「姉の意思……」

「お前、探偵に向いているな」

「冗談を言うな、薫さん。」

薫からの冗談付きの発言に都はそう返事して、すぐ？和の方に向かう。

「ひよ……十条さん、さっきの推理を気に食わなかったら、謝ります。貴女が折神紫への恨みはよくわかりますから……」

苦虫を噛み潰す表情になった都。誰も彼が？和の気持ちを真剣に考えていることがわかる。でないと、そんな表情が出せないはず。

「……お前は恨まないのか？母を殺す犯人。」

そこで、？和は重そうな顔で都に尋ねる。

「恨まないよ。だって、母が死ぬ瞬間まで幸せそうだったから、俺はタギツヒメを恨まない。母を失った時はとても辛いけどね」

苦笑する都。彼の顔は少し悲しくなる。

「……そうか」

「私も恨まない。理由はお兄ちゃんと同じだけど、こうして？和ちゃんと出会うのはそのおかげ。」

可奈美は都の手をきゅっと握って、都に加勢する。

「俺は何でも許せる聖人ではないけど、悪いのは大荒魂、折神紫ではないと思います。」

数秒の沈黙が経ち、？和は駄目息を吐いて、重そうな表情から柔らかくなる。

「……あなたはいつもそうだった。昔からは人思いの馬鹿だから、付き合おうのが苦労する。」

「それはすみませんでした……」

「けど、私はお前のそういうところは嫌いじゃない。少し時間がかかりますが、信じるのを頑張る。」

「十条さん……」

「それと、もういい加減にその呼び方をやめたほうがいい。私のことをひよー」

「……」

「?和ちゃん……?」

「十条さん……?」

「……………少し夜風に当たってくる!」

彼の隣にいる二人を見て、なぜか拗ねたように見える?和は早足でここから離れる。

「俺もいつしょ……」

「付いてくるな!」

そして、?和は襖を開けて部屋の外へ踏み出した。

「俺、まさか嫌われた?」

「そこまでは見えないけど……」

「なんかツンデレヒロインが鈍感主人公に呼び捨て欲しいと求めた時に、他のヒロインが主人公のそばにいる光景を見て、恥ずかしくてここから逃げ出したシーンみたい。」

「薫、流石にないですよ……確かにミヤマヤがモテモテですけど」

ちよつと、二人共。なぜ、そのような目で俺を見るの?そもそも言っていることは全然わかりませんけど……。

それからは朱音から解散してもらって、その後も彼女にお礼を言われた。「姉をいい人だと言ってくれて」

きつと、彼女もその姉を好きなんだろう。たとえば、彼女は化物に取り憑かれたとしても……。



私は本当にバカ……。

外の夜風に当たって、ほっぺに染みた熱さを少しでも冷やした。

十条?和はあそこから逃げ出した。ただ小さいの理由で逃げ出した。

ただ名前を呼ばれてほしいと伝えたいのに……なぜ、言えなかったのか。

そう、彼女はただ都に「?和」と呼んでほしい。彼もその呼び方に遠慮しているみたいだし。

これからはどうすれば……いや、待つて!なんで私はいきなりあいつのことを考えているの!私は今すべきことは折神紫を討つはずなのに……脳内は今、彼のことをばかり考えている。

それに胸もこんなにドキドキしている、顔も熱い……。

病気なのかな?でも休憩もちゃんと取ったし……おかしい。

根本的に勘違いしていた?和はこの気持ちを理解できなかつた。

それから、少し夜風を当たって、彼女は可奈美たちの元へ戻った。

第19話：彼女たちを見守る者

「そっか……それを知ったんだね。」

白い神社しか写せない世界。可奈美は再びここに参って、あの噂の人物と会うことにする。

彼女が着ている服装は黒いを基調にした鎌府高等部旧式制服。そして、その髪は自分の大好きなお兄ちゃんと同じ色の髪だ。

彼女――藤原美奈都。可奈美と都の師匠であり、母でもあり、自分の親友を救うために命の半分を無くした記録されていない英雄。

「やっぱり、あれはお母さんだったわね。」

「つて言われても、私は17歳までのことしか知らないし。可奈美の記憶にある母とは違う私と思ったね……」

「確かに、剣術以外のお母さんはとても優しくかったね。ずっと私達のワガママを聞いてくれて、そのせいで、昔のお兄ちゃんはお母さんがいないと、すぐ泣き出すだから。」

階段の上に座っている可奈美は懐かしそうな顔で、小さい頃の話を見守るに話す。

お母さんの話だと、今のお母さんは17歳以後の記憶がないらしい。それはつまり彼女の時間は大災害の時に止まった。

「へえ〜情けないな。男なのに」

「お母さんの教育のせいだよ。ずっとお兄ちゃんのことを甘やかす……」

「それは嫉妬？」

「ちよつとね……けど、今はずるいと思っている。」

そう言つて、可奈美が落ち込んでいる顔。

「お兄ちゃんはずつとお母さんと会いたいのには、毎日我慢続けているのに、私は毎日お母さんを独占している……今日もお母さんのことで久々に泣いちゃった。」

ただ母のことを聞いていると、あんな弱い一面を晒すお兄ちゃん。見ているだけで、心が苦しい。

「……………そんなこと思わないで、これは可奈美のせいじゃない。それに、これも母親から卒業する大チャンスじゃない？」

純粹で笑うお母さん、いつもそういう彼女の樂觀的の一面に救われた。

お母さんはお母さんのままだ。ずっと変わらない。

「うまくいかないみたいですけどね。それより、前に言ってた友達って篝さんの娘さんです。？和ちゃんって言うの」

話題が変え、今度は？和の話題にする。でないと、ずっとお兄ちゃんの話題ってなんだか悲しい。

でも、？和ちゃんもお兄ちゃんの幼馴染なんだね……………あの時の夏で知り合ってたみたい。

「え!?あの篝が結婚できたの!?って、私もだけど…………」

それより、可奈美からそんな真実を聞いて、可奈美のお母さんは凄くびっくりする顔。でもすぐに自己笑いする。

何にせ、彼女も自分が結婚して、二人の子を産む未来を思わなかった。

「そういえば、私はまだ可奈美のお父さんが誰なのかは聞いてなかったっけ?」

「それは今度の話にしよう。でないと、お母さんはきつと恥ずかしくすぎて、今日はこのままに終わっちゃうから」

「え!?それはどういう意味?気になるだけど!」

「それはまた今度」

「え〜」

笑って、可奈美とそのお母さんは階段から降りて、今までのようにする。

「今日もよろしくね、美奈都師匠!」

改めて、可奈美は千鳥を鞘から抜き出して、構えを取る。

「おう!今日もビシバシにやるぞ!」

「うん!そういえば、前から気になるんだけど……………その持ち構えるやつ、未来のお母さんにもやってた。癖?それとも意味があるの?」

刀を遊んでいるように、左手から軽く右手の方に投げてキャッチす

るその持ち構えについて娘である可奈美はつい自分のお母さんに尋ねる。

一応お兄ちゃんにも聞いていたが、彼も分からないと言ってた。

「ん？ああ……これか？場合によってはね。でも真似しないほうがいいよ。」

「お兄ちゃんも真似しないほうがいいって言われた。」

それと、小さい頃からお兄ちゃんはいくら技を真似しようと、その構えを絶対に真似しないようにしてた。

「へえ〜流石、私の息子だね。もつと彼を自慢してもいいよ。可奈美。」

「え？うん……」

何かを納得してみたみたいに、可奈美のお母さんは笑ってそう言った。

何かの特殊意味があるの？今度、お兄ちゃんに聞いてみようか。

いや……ここから目を覚めたら、このことを忘れる。技は身体に刻んでいるのに、記憶がきれいに無くす。

夢……なのかな…？



「もつと、こうじゃなきや……」

朝4時。誰よりも早く起きて、一人で朝練をする都は借りた動きやすい服装で神社の前で珍しく刀を振る。

普段、可奈美との稽古や誰かを助ける以外に剣を振るしかない彼ですが、あの鎌倉の夜のことを経験した彼は今の自分じゃだめだと思い始め、こんな朝早く自分の剣技を改めて鍛え直す。

「こうするなら、当たる……もつと柔らかくの動きで」

そして彼は今、メタルトレーニングで燕 結芽をメタル相手にする。彼女は強い、実力の差を知る時点で彼女から逃げる術しかない。そこでなぜか、心がとても悔しくて、立っていられないくらい。

もつと強くなりたいたい……せめて、引き分けの程度で。

不自覚に都は妹以外の理由で剣をさらなるの境地へ参ろうとする。

「綺麗な剣筋だね。こんな朝早く起きるのは私と貴方しかない。」

「……………」

声に惹きつけられて、都は無意識で声の方向に剣を向く。

そして、そこにいるのは青い髪の女の子が立っている。制服を着ている時点で、彼女が長船の学生だと理解した。

「失礼しました。少し夢中しすぎで……」

御刀を鞘に納めて、自分がわざわざ作った自己用の御刀固定装置に固定する。

「いいえ、こっちこそ貴方の剣の捌きがあまりにも綺麗だといじロジロって見つめてしまった。」

「お恥ずかしい言葉です。俺は別のところでやるから、ここをどうぞお使いください。」

礼儀正しい口調で言っ、都は彼女から通りすがり、階段から降りる時に彼女に呼ばれた。

「私は米村孝子こめむらたかこと言います。良かったら、私と立ち合いしない？あなたはまだ満足できなさそうに見える。」

「…………それは女性から男性への誘い？」

冗談を言うつもりだった都。彼はちよつとこの誘いにドキドキする。

ずっと相手がいなくて、メタルトレーニングをしたんだけど。彼も実際にやってみたい。ただ考えているだけじゃなくて、実の相手と戦いたい。

そうすれば、自分はきつと今よりもつと強くなるだろう。

「そうよ、嫌？私はちよつとモテモテだけどね」

「それ、自分言うの？というか、女子学校じゃない？」

「バレたか……でも、やりたいでしょう？その顔から丸見えた。」

「ああ……やりたくて仕方がない。」

素直に応じる都。

「なら、上でやろう。」

「その前に写し状態でよろしく。俺はそうしなきゃ、満足できないです。」

「え？本気？」

あ、この呆れた反応はわかる。

都も多少に自分の異常に気付いた。彼は唯一生身で刀使と戦える存在だから。

「そうしないと、米村さんただ瞬殺されただけ。」

「へえ〜よく言うね。本当に写シでやるよ。」

都の挑発的な言葉を聞いて、少し相手が怒らせた。

でも都が言っているのが事実。普通の人間に都は決して負けない。母以外にな……あれはもう別の次元の話だ。

「うん。全力の方へよろしくお願いします。」

不敵な微笑みで、都はさつき知ったばかりの女の子と二時間ほど近いの立ち合いを続けていた。

◇

「なんじゃ……あれ。」

「嘘でしょう……刀使と互角戦えるなんで……」

「しかも、あの孝子と戦っている……」

朝六時に近い頃。ここで可奈美たちに剣術指導をするつもりのみ村孝子の仲間たちはここに来て、不思議の現象を見た。

それは一人の男が写し状態の刀使の攻撃を次々と防げて、避けて、反撃して、隙を見て攻撃する光景。これは普段見られない異常な光景だ。

「剣筋は凄いですけど、あの何もかもを見透かせる目も恐ろしい……あれは本当に人間なの？」

米村孝子の親友、小川聡美こかわさとみはそれを見て、冷静で分析しながら目がバクバクと二人の交戦を見つめる。

異常……と、彼女達はその感想しかない。

「……までにしようか……そろそろ時間だし。」

一段二人は距離を取って、離れるところに孝子からそういう提案をした。

よく見れば、彼女が荒い息という状態。制服も汗でびしょびしょ、ちよつとエロく見える。

「はあ〜休憩!」

そうしたら、都の方は後ろに倒れ。とても疲れたように見える。

「米村さんはとても強くて、全然手が抜けないわ……」

地面に大きな呼吸運動を行った都はもう起きる力が残さない。何にせ、全集中を二時間ほど続けたのだから、身体にも大きな負担をかけた。

「貴方がそれを言うの!?確かに迅移だけを使ったんだけど、それを追いつく貴方に何度も驚かされたのよ!生身の人間が刀使とここまでにやり合うのが前代未聞だぞ!」

周囲の彼女の仲間は強く頷く。

彼女がここまで迫られるのが初めて見た。例え、御前試合に出る^{米村孝子}ちび」とエレンでも彼女から一本を取るのが難しい。

もちろん、相手も彼女から一本すらも取られないが……都から一本を取るのも易いことじゃない。

「お褒め預かりありますがどうございます……あの、引つ張ってくれる?さつきは集中しすぎで、もう力が出せないのよ……」

「どんだけ必死なんだよ、お前は……」

苦笑いしながら、孝子はそんな彼を引つ張った。

けど、彼は立てなくてそのまま孝子の身体の方に倒れ込む。

「つと……大丈夫?」

「もう、申し訳ない……」

女の子の身体の柔らかさにドキドキした都は彼女に謝る。彼女の身体はすげえ柔らかい……特に胸がでかい。

やっぱり長船は恐ろしい連中の集まり……胸の成長はすげえ……。

「聡美、しばらく後で来る子たちの指導を頼めるのかな?私はしばらくこいつを休憩できる場所へ」

「え／＼／＼!?!わ、わかりました／＼／＼」

仲間に向け、なぜかそこに照れてた仲間がいる。

「あ、変な想像しないでね。彼は私の好みではないから、そういう意識がしないのだ。」

それを察し、孝子は都と密着の体勢で仲間と言う。

でない、きつとこれを話題で勝手に恋バナが始まる。

「それに……この子に好感が持つ子達もいるでしょう？」

「あ……そうでした。」

孝子にそう言われて、全員は納得する様子。

おい、なにかを納得するんだ！それと、俺に好意を持つ子がいるの？

特に思い浮かべる対象がないし……舞衣ちゃん……ないない。いくら仲良くても、俺のことを恋の意識がしないのだろう。

何にせ、俺はただの友達の兄だから。

まだ近くにいる女性の好意を気付いてない都。

その後、孝子に屋敷までに送って、都はそこで半日くらいに休憩した。

◇

「妹の表現を見に来たのですか？」

午後の時、都は再び神社へ向かう。そこでたまたま朱音に出会った。

「ええ、ついでに全員分のお茶とおにぎりを作ってきた。全然本館に戻って来なかったから、少し心配だよ。」

「ふふっ、いいお兄さん持ちですね。衛藤さんは」

優しい微笑みをした朱音。この人は初対面からは優しい雰囲気が続いている、本当にあの折神紫の妹だと思わない。

「それより、朱音様はどちらに？」

「真庭学長の方へ行く予定です。あそこは重大の発見が見つかったみたい。」

「あれ、確か長船の学長の苗字ですね？」

全名は真庭紗南^{まにわさな}。彼女は長船の学長であり、舞草の中心メンバーであり、ここの指揮官役にも務めている。

「ええ、真庭紗南はうちの中心メンバーの一人。彼女が舞草への貢献はどう感謝するのか、わからないくらいに多い方です。」

「そうですか……」

「興味なさそうな顔ですね。もう邪魔しませんから、都さんはそのまま妹の方へ行ってください。」

自分が思っていたことが朱音に気付かれて、一瞬ビツクとする都。

まさか、彼女に見透かせられるとは……面目ない。

「申し訳ありません……せつかく紹介してくれたのに……」

「いいえ、こつちこそ興味がない話を押しちやつて……」

再び朱音に謝って、都は神社の方へ走った。今は一刻早くも妹に会いたい気持ちは朱音に見破った。

この世の安全より、彼は妹の方へ関心する。それは衛藤 都という男だ。

◇

神社へ到着した後、そこに向けられる光景は長船の生徒達は可奈美達六人に剣術指導をするところ。

しかも、これはただ自分が知る一对一の剣術指導じゃない。これは連携攻撃、団体チームに向ける剣術指導だ。

確かに、これからの戦闘は一对一ではかなりきつい。折神家と戦うならば多人数で向かうほうがいい。

「これで、全く役に立たないよね……」

都が口に出した話は完全に自分に向ける話。今まで、彼は可奈美に教えるのは御前試合みたいな一对一の剣術しかない。

それはつまり、自分がこの場では何の役に立たない。ただ弁当を送っただけ。

「うっ……!」

「こら! 注意を逸らすな!」

どうやら、こつちを気付いたみたいに白髪の少女はこつちに向く瞬間、相手に隙が捉えられた。

そのせいで、怒られた。

ごめん、沙耶香。

心の中で彼女に謝り、都は神社の一番人気がないところに座り、彼女達を見守る。

それから、さらに数分が経ち。

沙耶香はこつちに向かつて走ってきた。

「沙耶香？どうしたの？続きやらないのか？」

「うん。頑張つて、相手を倒した。それから、しばらくの休憩を許可された……」

「そうか……」

本当に頑張つたね。相手達はかなり強かつたし……ていうか、長船の人間強くない？御前試合でも出ればいい成績が取れるはず。

とにかく、沙耶香は本当に頑張つた。

「隣、座つていい？」

「どうぞ。」

許可がもらつて、沙耶香は静かに都の隣に座つた。

「おにぎりとお茶があるよ。手製だけど、お気に入りだったら、嬉しいです。」

「うん。」

早速、おにぎりを食べ始め、沙耶香は驚いた顔で中に含められた隠し味に驚いている。

「梅の中に入れた。どう？」

「おいしい……」

「良かった。ゆつくり食べていい、お茶もいる。」

「うん……」

小さく頷く、おにぎりを小さいな一口一口と食べ続ける生き物。その様子は本当に可愛くて、愛おしい。

「沙耶香、本当に頑張つたな。」

思わず彼女の頭を撫で撫でした。

そうしたら、彼女の顔が赤くなりさらに可愛くなった。そういえば、このような穏やかな幸せの時間は昔にもあった気がする。確か……あれは初めて彼女と出会った時の話。

今思い返すと、ちよつと懐かしい気がする。

「都、今日は一緒に寝れない?」

突然、沙耶香から変な質問が突撃された。そのせいで、都も危うく沙耶香へのお茶をこぼれそうだ。

「え? 何言っているの? 沙耶香」

「昨日は舞衣と皆と一緒に寝てた……でも、都がない。」

「当たり前だろう! 俺、男性だぞ!」

「寂しくないの? 仲間はずれ」

沙耶香は自分なりに都のことを心配している。心配する方向は間違ったけど……。

とりあえず、ここは一番問題を起こさない返答をする。

「全然。だって、寝起きしたら沙耶香と皆と会えるから」

「うん、そうだね。会えて嬉しい。」

小さく笑う彼女。マジ可愛かった……沙耶香はいつも可愛くて、つい彼女を甘やかすわよね。

それから、幸せの時間が早く過ぎちゃって、沙耶香は再び訓練の方に戻っていく。

彼女の調子から見ると、さつきよりいい感じ。

けど、その時はなぜか彼女の相手は照れた顔でチラチラとこつちを見ながら温かい目で沙耶香に向かう。

一体なんの話をしたのだろう。

そして、次がこつちに来るのは舞衣ちゃん。

彼女にもさつきの対応で招待する。

「塩味って結構おいしいですね……」

「うん、頑張って作ったよ。」

ええ……二時間続けて試したのだから。

「ふふっ、そういえば、さつき沙耶香ちゃんを褒めたのよね?」

「ええ……」

なんだ、見てたのか……ちよつと恥ずかしいな。

「なら、私にもそうしてくれる?」

「え?」

「駄目?」

上目遣いで自分に甘える舞衣。

よく見たら、彼女の顔も少し赤くなり、さらに可愛くなる。

毎回、彼女にそんな目で見つめられて、余計に胸がドキドキする。

本当にずるいぞ……／＼／＼／＼

「わかった。舞衣ちゃんもよく頑張ったね。」

「えへへ……お兄さんの手が温かい／＼／＼／＼」

自分に甘えた舞衣は本当に可愛くて仕方がない。普段はそんな彼女があまり見えないから。

それからもお互いが軽くお喋りして、こんな穏やかなの時間もあつという間に終わって、舞衣も元気満々の状態で訓練に戻った。

その際に、たまに長船の人にチラチラと見つめられる。

一体何なんだろう、お前ら。

そして、次々にエレンや薫がこつちに来て、少し雑談をしながら、食事を済ませる。

それから……?和にも休憩が入った。

「お世話が好きだな、お前。」

彼女も都の隣に普通に座った。てつきり避けられると思つたのだけど。

「お前もな。さつき沙耶香が来るまでに、お前もこつちに何度もチラツとこつちを見たのでしょうか?心配してくれたの?」

「なっ……／＼／＼／＼!いつ気づいたの!?!／＼／＼」

都に指摘されて、?和の顔が少し赤くなってきた。

どうやら、本当にこつちを見ているらしい。

「最初から。俺は視線に敏感だから……」

「そう……いい、言っておくけど!別にあなたのことを心配してないよ!お前一人がここで子猫捨てられるように見えるから、ちよつと可哀想と思っただけ!でも……どうやら、そうではないみたいだ。」

「うん、沙耶香と舞衣ちゃんも薫さんとエレンさんもこっちに来てくれた。つてか、お前もその必要がないのに、それでも俺の隣にいてくれたのね。」

「うるさい、少し養分を取りたいだけだ。」

「恥ずかしさを隠したいなのか、？和はおにぎりを口に入れた。」

「結構うまいな……」

そして、すぐその感想をつけた。

「頑張った甲斐がありますね。あなたたちの口に合うかどうかはずつと悩んでた。」

「……そんなことしなくてもいいのに、本当に世話が好きだな。昔から全然変わってない」。

「その言い方……俺のことを覚えていたんだ。いつ気付いたの？」

「舞草に来る前……。お久しぶりだね、都お兄さん。」

「その呼び方も覚えてだんだ。」

「うん……あなたと可奈美の母親の件については……」

「気にしないで、もう過ぎたことだから……。それより、こっちこそごめん……。大切なときに、お前のそばにいないくて。」

「私の方がごめん。お前があんなに苦しいのに……。結局、俺は去年まで〃はずつとうちの母と一緒に暮らした。」

そう言つて、？和の顔は悲しい顔になった。

きつと、この悲しみは俺と可奈美に対したただけではなく、自分の母にも……。

「篝さんが亡くなったのですね……」

「うん、去年でずつと後悔したまま亡くなった……」

「そうか……。あの人、優しかったもんね。」

「お前の母もだ。」

二人は昔のことを思い返し、しばらく沈黙したままにこの時間を流れ込む。

あの時は本当に楽しかった。母二人と一緒に遊んでいて、甘やかされて、抱きつかれて……。あんな楽しい日々は決して忘れられない。

それから、数分が経ち。

?和は立ち上がり、どうやらもう行くみたい。

「そろそろ戻ろうか。」

「そうだね、このままじゃただの時間の無駄だね……頑張ってください。〱十条さん〱。」

「?和……」

「え……?」

突然、自分の名前を強調する?和。

都は一時に彼女の意図がわからなかった。

「?和って呼んでほしい。」

「………いいの?」

「嫌なら、さっきの呼び方でもいい。」

「なら、改めて………頑張ってください。?和。」

「………ああ。」

ただ簡単な応答しかしない?和。彼女が都に背を向けたせいで、あまり彼女の顔を見えなかったがその耳は少し赤い色に染めた。

そして、彼女はそのまま訓練に戻った。

最後、可奈美も笑顔で都の隣に休む。その度に、彼の隣で楽しささっきの指導の話をして、おにぎりとお茶をご馳走する。

自分の妹は本当に最高に可愛い妹だと思い、都はつい彼女の頭を撫でながら彼女と楽しく剣のことをいつぱい喋った。

第三者から見れば、とても尊い光景だった。見るだけで、思わずこの仲良い兄妹に微笑む。



彼に申し訳ない気分が胸にいっぱいある

あの時、彼が可奈美と柳瀬舞衣の懷で泣いた時、私は何もしていなかった……ずっと彼に何もしてあげられなかった。

彼の母が私の母より六年前になくなってた時、私はただ自分のお母

さんの世話を続けて、彼女と平凡の日常を過ごせた。

けど、この間、彼はどれだけ辛く過ごしていたのかは全く考えていなかった……。

彼は私より早く大好きの母を失っていて、私より母と一緒にいる時間が少なかった。

もちろん、可奈美も同じ気持ちだろう。けど、彼はきつと可奈美の分までに背負った。彼はそういう人なんだ。

だから、彼はあの時、耐えられずに泣き出した。母を失った痛みは子供にとつて癒やされない傷。私にはわかる……母がなくなつたときも同じ気持ちだ。

そして、悲しい私を支えられるのは復讐だ。朱音様が母に送られた真実の手紙を読んで、私は折神紫へ復讐に誓った。

けど、彼は違った。普通の人間みたいに自分の母の死を強制に受け入れられて、この七年を耐え続けてきた。

そして、昨日に至って真実を聞いて耐えれずに泣き出した。でも、きつとあの二人がいるからこそだろう。

男の弱みは信頼できる相手にしか見せられない……母がなくなつた日にお父さんも珍しく母の遺体の前に一人で泣いた。あんな辛いお父さんが初めてみた。

それはつまり、彼はそこまで母のことを愛していて、信じている証
拠。

それと同様、可奈美と柳瀬舞衣は彼の柱みたいのもの。

少し羨ましいと思っているが……私は復讐を選んだ以上、その考えはやめたほうがいい。

——それにしても。

彼に自分の名前を呼ばただけで、少し……いや、凄く嬉しいこの気分はなぜだろう？心臓もバクバクしている……変だな。

疲れすぎたのかな？

根本的に、それを勘違いしていた？和である。

第20話：恋バナとお祭り

「沙耶香ちゃん、そっち引つ張って」

「いっ……？」

一日の鍛錬が終え、可奈美たち六人は広めの寝室に集まって就寝の準備をしていた。

舞衣と沙耶香は相変わらず仲良く敷き布団にシーツを被せ、その上に掛け布団と枕を置いていく。

「よっこらせつと」

「あつ、薫、駄目デスよ。まだ横になつては」

「いーだろ、別に。ほつといても準備してくれんだから」

用意された寝具に大の字になる薫に、それを諫めるエレン。

「姫和ちゃん、枕投げしない？」

「馬鹿か。修学旅行じゃないんだぞ」

「えー、大勢で寝るんだつたら定番だと思っただけだな」

枕を握る可奈美の手からそれを奪う姫和。

「もう、二人とも早く寝ないと駄目だよ」

「明日も頼んでもないのに舞草の刀使先輩が稽古つけてくれるんだからな。クソタレか！」

「薫、そんな態度じゃダメだよ」

「ちえ……」

昨日は色々なことが聞いたせいで全員泥のように眠っていたが、今日は良くも悪くも昨日より刺激の少ない日だったので、比較的目が冴えていた。

何より、先輩と鍛錬するのは楽しい！というのは可奈美剣術バカ一人の感想だった。

「ちよつとくらい起きてても大丈夫だよ、まだ時間あるし。何かお話でもしない？」

いつもより元気な可奈美に言われ、時計を確認する五人。確かに明

日の起床時間を考えるといくらか時間に余裕がある。

「ふっ……なら、あれをしようか。女子会やこの時の定番！恋バナ！」

「何でそんなに得意なんだ、お前は」

薫が布団に潜った姿勢のままやたらとドヤ顔で言う。姫和からのツッコミが飛ぶが、それも何処吹く風といった様子だ。

それはさておき、恋バナという話題に一同は自分の恋愛歴を振り返り始めた。

何にせ、これは女子の特権なんだ。

「うーん、私はあんまりそういう経験ないかなあ。興味ない訳じゃないけど、剣術のことばかりしてたと思う」

「私もそうだな。元々、そういうった類のことに気を回す余裕もなかったが」

早速のところは可奈美と？和はアウト。

「待て、ペツタンコ女。お前は幼馴染がいるだろう？少し前に聞いたことがある気がするんだけど」

「誰かペツタンコ女だ！斬るぞ！」

けど、薫はそんな？和を見逃されなかった。彼女は一番からかいがある女だから。

そう、今怒っているところも滅茶苦茶面白い。

「確かに、？和ちゃんとお兄ちゃんは昔の知り合いだったようね？前も聞いてた。」

「そうなの？」

そして、可奈美の助けがあつて、この話題が完全に？和に向けた。「まあ……とは言っても小さい頃の遊び相手だ。人による感覚は可奈美という形容は適当だろう。」

「さすが兄妹デスね！」

「つまり剣術馬鹿か？今はそう見えないけどな」
「色々あつてな……」

「可奈美はハガ……？」

「沙耶香ちゃん、それは言っちゃだめだよ！」

「そこは否定しないんだ……舞衣ちゃん……」

そして、恋バナの話題が何気なく続く。

「ワタシと薫もそんな感じデスね。長船は女子校デスから出会いもほぼナツシングなんデス」

「おい、さりげなくオレを同じ扱いにするな」

「違うのデスカ？」

「……いや、違わないけど」

薫、エレンも同じく。前者の二人ほど個性による淡白ではないが、生活環境なども関係しているのだろう。

「……私は、よくわからない。考えたこともないから」

「無口少女のタイプだからな。それが普通なんだろう。」

そして、沙耶香も見事空振りだった。

「私もまだそういう経験がないかな。告白されたことがありますか……全部断っちゃった。」

「告白されたことがあんのか……流石あんな性格と胸があるからモテモテするだろう……誰かさんと違って」

そう言つて、薫の視線が？和の胸に移る。

しかし、彼女はただ冷静で「お前もな。」と言り返す。薫は自分が投げ出すナイフに撃ち返された。

「しかし、マイマイの隣にミヤマヤがいるだろう？いつも仲良くするところが見たのデスヨ」

「……………え？　つて、えええええっ!?!?!?!?!」

都の名前と今の話題との関連性を瞬時に理解した舞衣は、間の抜けた声が口から漏れると同時に羞恥と動揺で顔を赤く染めて絶叫した。

「あ……確かに、お兄ちゃんは結構舞衣ちゃんのことを構うね〜」

「カナミンも人のことを言えないんデスヨ。」

「え…………?」

「そうだな……あれは普通の兄妹に見えないし。ていうか、お前二人は彼と仲良すぎ〜」

可奈美は何気ない振りのつもりだったが、すぐエレンと薫に舞衣と一緒に扱い。

「確かに……そう見える」

「沙耶香ちゃん!?!／／／／／／／／／／／／／／／／」

それと攻撃手一員追加。現在の話題は都、可奈美、舞衣を中心にしている。

「そうかな……?わ、私と舞衣ちゃんはいつもお兄ちゃんとそんな感じだよ!ね?」

少し慌てた可奈美はすぐ舞衣の救援を求める。

「う、うん……ふ、普通だよね?／／／／／／／／／／／／」

「いや、普通ではないだろう!どう見ても。午後の時も二人は結構彼とイチャイチャしているのだろう!まるでカップルみたい」

「確かに……皆はミヤマミヤをジロジロ見ているネ。」

「……………」

少し冷やし汗をかいいた?和。彼女はこの話題に巻き込まれるのが嫌。

「それは心配だから……!エレンちゃんと薫ちゃんと彼の隣に行くじゃないですか!／／／／／／／／／／／／」

「俺はただ無料の食い物を求める!」

「日本のおにぎりの味は気になりマスから」

二人は自然と答える。正直すぎるい。

「それより、お前ら二人は彼の何をどう思う?好きなのか?あいつのことを」

「それは……………／／／／／／／／／／／／」

正直、二人は全くそんな気持ちを感じなかったわけではない。彼女たちのことを大切に思っているという台詞も度々聞いた。自惚れるわけではないが、都にとって自分たちが特別な存在だという自覚はあった。そこで、二人はとても嬉しかった。

けど、それは恋と言うべきだろうか?一人は血が?がついている兄妹。兄として、妹のことを大切するのが当たり前のこと。

だから、いくら自分に優しくしてもそれはただの兄からの愛だけだ。恋ではない。

そもそも、実の兄に恋しちゃいけない。

あ……いけないんだ。

心の中でそれを気付き、可奈美はとても残念そうな気持ち。なぜそんな気持ちになるのかわからない。

けど、そうよね。なんでここはお兄ちゃんのこととこんなにも照れているんだろう？ 私とお兄ちゃんはただの兄妹だ。それ以外ではない。私が妹だから、こんなに優しいしてくれた、守ってくれた、助けてくれた。何勝手にお兄ちゃんのことと照れ照れするのよ。

「お兄ちゃんはまだお兄ちゃんだよ……兄妹として、普通の好き」。舞衣ちゃんは？ どう思う？」

舞衣より先に結論を出した可奈美はまだ迷っている舞衣に聞く。可奈美のお兄さんは確かに自分の特別なのもかもしれません。いつも自分を優しくしてくれて、一生懸命守ってくれて、自分のために怒ってくれた。

そんな彼が柳瀬舞衣は好きだ。けど、それが恋なのかは彼女が知らない。初体験だから……そういう大事のことはもつと確定しないと、だめ。

でないと、自分とはもかく、お兄さんも自分のせいで傷つけられるから。

「私も同じ。お兄さんは大事な友達だから」

二人はそこでセーフの答えを出した。

「つままない……エレン。もう寝るか」

「もうデスか？」

「うん。」

その答えを聞いて、薫はそのまま布団の中に潜る。

「え？ もう終わったの？」

あっさり終わった恋バナに可奈美は一時に反応が取れない。それと同様に舞衣と？ 和と沙耶香も同じ。

「そうだ。」

そんな彼女たちに返したのは息がない答えだ。

「まあ、薫はいつもこんな感じだし。彼女を許してくダサイネ」

「うるさいぞ、エレンー！」

「ハイ。」

そんな自己勝手に始め、あっさり終わらせる薫に長い付き合いのエンは仕方ない顔を示す。

「……………仕方ない、寝るか。」

「そうだね……………」

「うん……………」

「もう少し枕投げ……………」

「お前はまだ諦めないのか……………」

そして、この二人に続け、この場にいる四人が電気を消して、次々と布団の中に入る。

そして、そろそろ静かになるところに。薫はまだ起きたまま、さつき言いたかった言葉を呟く。

「……たく。好きなくせに、良くも自分を騙したな。」

もう面識が豊かの彼女に、可奈美と舞衣は自分の心に正直しないのは一目でわかる。

まあ、わからなくてもないが……………好きなら、正直な方がいい。それで、人生が楽しくなる。

「まあ……………いい。自分が気づく時が来るだろう。そんな時に……あいつにも気付けど欲しいな」

あいつとは都のこと。初対面のときは鈍感主人公の匂いがしてきた。

あれじゃ、真正面で言わなければわからないタイプだ。

「それにしても、眠い……………クソ。俺に心配させんなよ」

ブツブツ言って、薫は目を閉じ、夢の世界へ落ちた。



「とても、お似合いです。」

「そう？ていうか、わざわざ貴女がここに来る必要がないじゃないですか？朱音様。」

舞草に泊まった三日目。舞草の長である折神朱音はわざわざここに訪ねて来て、ある服装を都に着替えさせてみた。

それは浴衣です。デザインは白を基調とした紫色の花をメインにする浴衣。

「いいえ、ちょうど仕事も一段終わったところだし。都さんにも今日のお祭りを楽しんでもらいたいです。」

「お祭りかー」

舞草を拠点にしたこの近くの集落は一年二回の祭りがあるらしい。そして、今日はちょうどその日なんです。

「俺は別にここで遊びたいから、わざわざ舞草に来るじゃないですよ。俺、もつと朱音様たち……元い可奈美たちのお役に立ちたいですよ。」

「ふふっ、あなたの熱心さは私にも感じているんですよ。でも、せっかくのお祭りだし。妹たちと楽しんでいただきたい。」

「いや……俺はいいから……」

「そうなんですか……ごめんささい、迷惑をかけましたわね。」

「いや、それは……！別に迷惑なんて……！ただ自分が遊ぶと頑張っている朱音様たちに罪悪感というか……申し訳ない気分というか……」

朱音が申し訳ない表情をしていると、都は慌て始めた。

本能的にはあまりこの人を困らせたくない。妹属性なのかな？一応彼女は折神紫の妹だし。

「大丈夫ですよ。あなた達はまだ子供ですから、辛いことは私達に任せればいい。」

笑顔でそう言ってくれた朱音。

何とこういういい大人だ……その笑顔は眩しい！

「……わかりました。けど、今日だけだよ！明日から俺は舞草妹たちのため頑張る！」

「はこ。」

そして、やっと朱音の頼みに屈した都は乗った。

「そういえば、これを渡すのが忘れてた。」

都は突然ある物を思い付き、舞草に到着した初日着た上着のポケットからある物を持ち出した。

それを見て朱音も驚愕の顔を隠さずの口で都に訊く。

「これは……ノロのアンプル!?どこかに……」

「色々あつて言えない。けど、これを舞草に渡したい。」

どうせ、使えないから。興味もない。

しかも、気持ち悪い……これを持っていると、誰かに見られるよ
うな”。

「それはありがたい。これがあれば折神家の非法証拠になれるので
しよう。」

「それは良かった……これを朱音様に渡しますね。」

都はアンプルを彼女に渡す。

多少胸が騒ぐ感がまた心に残っているが、専門の舞草に任せれば、
大丈夫だろう。

「それでは、朱音様の好意に乗ってお祭りを参加しますね。朝から
夜までにですね?」

「ええ、メインイベントは夜からですので、朝は普通のお祭りです
よ。」

「イベント?」

「その時のお楽しみ。」

朱音が指を唇に触れるその仕草がとても可愛く見える。

これはもう大人ではなくて、可愛い少女しか見えない。

そういえば、年齢も聞いていないだっけ?まあ、聞かないほうがい
い。女子はそういうの敏感なんだから。

そう思いながら、都は朱音と別れて、お祭りの方へ向かった。

◇

朝から賑やかなの人氣と雰囲気は漂って、広場に色んな屋台が立ち
並び、大勢の人々がひしめいている。

こういうのもいいかもだと都はこれを見て、新鮮感が湧き出す。

彼はあまりお祭りという挙式を参加したことがない。彼の人生はずっと剣術や可奈美のことをばかり考えている。

自分が遊ぶ時間も層々にいない。？和以外に遊べる相手もいないし、学校では勉強ばかりやって、クラスメイトと雑談をして過ごす。

もちろん、カラオケや海辺のイベントもほぼ無縁のまま、新年参拝もただ妹と舞衣と付き合っていて、心が全然そういう雰囲気を楽しんでいない。

まあ、興味もないしな……。

「あ！お兄ちゃんだ！おっくうい！！」

そんな時、都の後ろからは誰かに彼を呼ばれている。もちろん、誰なのかは知っている。

「可奈美ちゃん！声が大すぎ！！／／／／／／／／／／」

「都がいる。」

「お前も来たのか……」

「ミヤミヤ、その格好はとても似合ってます！」

「やっぱり来たのか、このシスコン。」

そして、次々と他の五人の声も聞こえてきた。後ろに向くと、そこにいるのは青、橙、桃などの鮮やかな色の浴衣姿の六人の美少女達。彼女達が並んでいる姿を見て、流石の都でも妹だけシスコンに注目している。

特に舞衣と沙耶香は可奈美と負けなくらいの可愛さが持っている。

他の長船の二人もよく似合っている格好。エレンの前向きの笑顔と日本の浴衣にもピッタリくらいに似合う。

それから……？和もよく似合ってるな。

「お兄ちゃん、どう？似合っている？」

「お兄さんもよくお似合いそうな格好だね。」

「私のセリフをコピーしないでグダサイ！」

「都、どう？」

「見惚れたのか？仕方ない。俺は美少女だもんな！」

「そこは自分に言うことか？って、どうしたの？さつきからずっぽつとして……やっぱり似合わないのか？」

都がぼつとしてしている様子に？和は先に関心するが、すぐ自分の浴衣が似合わないことに心配し始めた。

元々彼女は服装にあまり関心してない女の子ですから、そういう面があまり自信がないのかも。

やっぱり「見過ぎたのか」。

「いや、とても似合ってるよ。皆さんはとても可愛くて、華やかなの感じて、なかなか褒め言葉が見つからなくて」

「そう……？ありがとう／＼／＼／＼／」

あ……照れてた様子の可奈美も可愛い。やっぱり妹が一番かも。

ちなみに可奈美は白と赤い花の浴衣。普段より少女という雰囲気が出しているので、少しドキドキした。

「お兄さんがお気に入って良かったです。」

「なんか胸がムズムズする……」

ああ〜沙耶香の反応もかわいいな。舞衣も穏やかなの雰囲気です。笑うのもいい。

「結構口がうまいな〜ミヤミヤ」

「おいおい、ヒヨコンはエターナル胸ペツタンなんだからそりやあ似合うだろ。和服の似合う体系ってやつだな」

「はあ!?なんだと!」

相変わらず薫は？和にからかっているな。まあ、学院内にもからかいがある後輩がいるから、その気持ちかわかるけど。

「まあまあ、？和」に似合うのが事実だし。そこまですておこ。今日は楽しいお祭りだよ。」

「……………いいだろう／＼／＼／」

突然、都の言いなりに大人しくなった？和。

？和ちゃん…………？

そして、彼女の異変に気付くのがこの場には可奈美と舞衣しかいない。そして、彼女たちも都が彼女の呼び方が親しくなったところも気付いた。

この二人はいつ仲良くなるのだろうか？

「それじゃ、夜までにまだ時間があるから……適当に回すか」

「甘いな、都。こういう時は全屋台を制圧するのが定番じゃないですか！」

て、定番なの？

お祭りの初心者のはわからぬ顔でエレンに聞く。

「これは薫の個性の一つですカラ、気にしない気にしない。」

そして、すぐ答えがもらった。

「そこ！そこそそ喋らないで！早く行こう！」

「ハイハイ！それじゃ、ミヤミヤあとで会おうネ！」

そう言つて、エレンはすぐ薫に追い付く。そういえば、あの二人はずつと一緒にいるね。

「テジョンが高いな……薫さんは」

「あはは……そういえば、お兄さんは一人で？よかったら、一緒に回します？」

「そうだね！一緒に回ろう！お兄ちゃん！」

「……？？和と沙耶香はどうする？」

二人の誘いに都はとても嬉しいが、残る二人の気持ちが見たい。

「私はどっちでもいい。」

「私は一人で適当に回します。」

「よし、じゃあ。？和と沙耶香と一緒に……俺はしばらく可奈美たちと行動する。」

「なんて私は……！」

「？和は……私と、嫌？」

「………っ!？」

沙耶香は寂しい表情が現すと、？和は明らかに動揺した。

まあ、気持ちがわかる。こんな小動物のような沙耶香を悲しませるのは人としてはだめだね。

「べ、別に嫌じゃない！行こう、沙耶香。」

「………うん。」

そして、そんな彼女に負けた？和はすぐ彼女を連れて行く。

いつの間に、この場に残るのは都たち三人。

「なんか、お兄ちゃんはそのうのがうまいよな」

「うん、沙耶香ちゃんにもっと他の人と仲良くしたいという心持ちは素敵だと思いますよ。」

舞衣ちゃんにもバレたのか……………。

「……………とりあえず、行こう。」

照れ隠しのように、都はすぐ可奈美たちの手を繋いで屋台の方へ向かう。

しかし、その照れた様子はあの二人にうまく隠せないみたい。

◇

もう一度申す。

説教と妹を甘やかしたい両方が分け辛い……………。

都は可奈美たちといくつかの屋台を回したあと、すぐ一人となった？
和と合流。

一応彼女のそばにいるはずの沙耶香はどこにいるのかって聞いたんだけど、彼女はどうかやら薫と一緒に行動しているらしい。

そして、？和と合流したあとは四人の共同行動となり、そこから……………都があることを気付いた。

「甘いものが好きなのはわかるけど……………食べすぎない？」

かき氷を食べながら、都はその事実を気付いた。

これまでに回した屋台は甘いものばかりいる。そこで女の子よりダイエツトのことを心配するバカ兄は妹の身体を健康を心配し始めた。

今、可奈美はキラキラした目で超特大の綿飴を見つめている。そんな可奈美はたまらないくらいに可愛かったが……………兄としては心配です。

「そうかな？私はそんな可奈美ちゃんが可愛いと思うよ。」

舞衣はいちご味のかき氷を持ちながら、笑顔でそう言う。

どうやら、可奈美を甘やかすのがバカ兄^都だけじゃなかった……………。

「そんなに心配するなら、彼女を止めたら？」

そこで、舞衣と違って冷静な？和はそういう提案を出した。

「無理だよ！彼女があんなに綿飴が好きなのよ！しかも、そんなに可愛い可奈美を止めるものか！」

しかし、シスコン 都はこんな可愛い可奈美を止める勇気がなかった。なぜなら……滅茶苦茶可愛いから。

「お前って面倒くさいな。」

「自覚ある……」

説教と妹を甘やかしたい気持ちって、結構分け辛いです……。

それから、かき氷を食べたあと、沙耶香もこっちまでに合流してきた。

しかし、そこも問題があったようだ。

「沙耶香ちゃん、そのハンバーグは？」

「薫と、一緒に買った……」

「結構大きいよ。大丈夫？」

「うん……」

どうやら彼女はこの間に薫と熱食屋台を回したようだ。しかし、あのハンバーグは結構大きいようだ……カロリーとしては大丈夫かな？

「お前っていつも他人ことを心配しているんだな。」

都が沙耶香を見つめていた関心の目を気付き、？和はチョココメントバナナを食べながら、そう聞く。

「そうでもない。ただ身近い人間のことを心配しているだけだ！」

「それはいつも他人ことを心配しているって言うの。」

マジ？知らなかった……。

「全く、少し落ち着いたらどうだ？もっと気楽で過ごした方がいいと思うよ。」

「お前の口からこんな言葉が出るのが予測できなかった……お前こそ、もっと気楽に生きろっ！昔のように我儘でもいいのよ。」

「……それは無理だ。私の復讐はまだ終わってない限りは気楽に生きられない。」

そう言つて、彼女はしばらくチョコミントバナナを食べる口を止めた。

一瞬だが、隣から見た横顔は少し辛そうな顔だ。
こんな彼女は少し放っておけない。

「なら、せめて俺の前に気楽に生きろよ！」

「え……？」

「俺の我が儘かもしれないけど、お前のその表情が嫌いだ。だから、もつと笑え！昔のように笑って欲しい！」

「な、何を……言う……!?!」

突然、彼の言葉に驚かされた？和。

「もし、背負うものが重すぎで笑えないなら、俺が半分を背負うよ。もうお前一人にしない。」

彼女の赤い瞳をじつと見つめて、都は自分の決意を彼女に伝う。

ただ一人で真実を知つて、母の仇を取りたい彼女は無謀で折神紫に挑んだ。そして、失敗して……今は追われる身になった。

もし、可奈美が彼女のそばにいなければ、彼女はきつと一人で戦うつもり……。

幼馴染としてそんな彼女を放っておけない……必ず彼女に手を貸す。

「……………はあ……………」

それから数秒経ち、？和はただそこで駄目息をつく。

あれ？なんてそこでそんな反応取るの？

予測外のこと、都は呆れた表情だ。

そして、さらに数秒後に？和はようやく笑つて口に出す。

「本当に兄妹だな。可奈美も同じことを言った……重そうだから、半分を持つって」

可奈美があんなことを……。

「馬鹿だな、彼女は」

「うちの妹の悪い口を言わないで」

「お前もだ。」

「今度はこつち……!?!」

? 和の辛辣の言葉で少し心が傷つけた都。

まさか、彼女から見れば、自分は馬鹿なのか。昔はあんなにお兄さん、お兄さんって呼ぶのに……。

「都、お前は彼女可奈美だけに集中すればいい……私が背負うものの半分は可奈美が勝手に背負うから、あなたの心配が入らない。」

「そう……」

じゃ、さっきの話は無駄なの？結構格好良く言ったのに!?

そして、? 和の視線は沙耶香に綿飴の良さを教えこむ楽しそうな可奈美の方へ見る。

その視線を追って、都もそんな可愛い妹の姿を見守る。

「可奈美は単純で、お人好しで、時に甘い考え方が持っている馬鹿だ。正直、呆れる……でも私は彼女のそういうところは嫌いではない。」

「これはお願いだ。私より彼女を守ってくれ。いつか彼女はどこかに転ぶのだろう。その時はー」

「……必ず引つ張ってやる。お前に言われなくてもそうするよ。」

ああ……大事な妹だから。どんなことがあっても彼女のことは最優先だ。

「うん……彼女のことをよろしくな。都」

「……こつちこそ、あんまり彼女に心配させんなよ。それと……折神紫を討つか、タギツヒメだけを討つか……どちらにしろ、俺はお前の背中を押します。ありのままにやったほうがやりやすいし」

「お前……」

「それくらい*の我儘*をさせてくれ」

「わかった。」

可奈美のことで共識した二人。

本来、都は? 和のことも守ってやりたいと思っただけど、彼女に拒否された。

その代わりに可奈美を大事して欲しいと頼まれた。

ならば、せめて彼女の背中を押すだけは許したい。いいな??和。

そのせいで街の住人たちに今日は舞衣ちゃんとデートなのか？今日は妹とデートなのか？と意味不明に聞かれた。

「ミヤミヤは鈍感しすぎますから、ヒヨヨンもかなり悩むデスヨ」

「え……？それはどういう意味？」

「それより、行きましようか。他のカップルに先回されたら、嫌デス」

「うわあ!? エレンさん、待って!?!?!?!」

都の腕を引っ張って目標屋台に進むエレン。歩くたびに柔らかい胸が都の身体を押し歩いていく、かなりやばいです。

それに、エレンからも凄く良い匂いがしてきた。これが女の子、男性を魅了する生き物。まだ彼女がいない都でもエレンとの密着でかなりドキドキした。

「ん？あれはエレンと……都？何やってんだ？あいつら」

たまにエレンと都が親しい光景を見た薫は？和の勧めによりチョコミント味のバナナを食べている。

やはり渋いな味だ。なんであいつの好みはこれなんだ？

「……まあ、きつとエレンが無理矢理彼を押しのだろう。都は主導する男では見えないし、それに可奈美たちしか見てないから、エレンに手を出さないのだろう」

二人のことをよくわかった薫は早速事態を理解し、次の屋台を攻略しに行く。



それから、数分渡ったところで都とエレンは目的の屋台に辿り着いた。

「お？きつっきのお嬢ちゃんじゃねか？隣にいるのは彼氏？」

「イエス、マイ・ダーリン デース！」

満開の笑顔でそう答えたエレン。実に可愛いですが、そのダーリンというのはどういうこと？確か、あれは外国人が恋人への呼び方だよ
ね!?

俺たちは偽恋人だけど、その言葉を聞かれると、流石に恥ずかしいです。

「アンちゃんやるじゃない！こんな美人な彼女ができるかよ！羨ましいぜ。」

「どう、どうも……。」

射的屋台の親父さんの熱情に都は元気なさそうな返事をする。

何にせ、理性をできるだけ保つ都はずっとエレンの胸の感触から我慢していた。そのせいでかなり疲れた心持ちだ。

「それで？まさか、あれがほしいのか？」

「そうデース！今度はダーリンを連れて挑戦しに参りマシタ！」

「わかりました。それじゃ、これを受け取りな。それと、お金。」

お金を親父さんに渡すために、エレンは一時に都を掴む両手を離す。おかげで、都は一時の自由を取り返した。

良かった〜あの天国のような地獄から離脱するなんて……！かなりやばいです！胸がやばいです！

基本おっぱいを好みにする都はいくらおっぱいが好きでも、柔らかいおっぱいから理性を保つのは辛かった。

「ん？これは弓？銃じゃなくて？」

「ああ、これは創新っていうやつ。私たち日本人は昔頃は弓で戦をする。これを私たちの戦友と呼ぶのもおかしくもない。」

「なるほど……。」

確かに火縄銃が日本に伝わるまで、弓はかなりの強武器。昔からも何人の弓の名手が現れて、歴史に名前が刻まれた。

「とりあえず、これを使ってパンダさんを撃ち落とします！」

手を守るために用意した手袋を装着して、弓と矢を拾え、エレンは矢を弓に構えて、弓の糸を引っ張る。狙い先は大きなパンダさん。

「あのぬいぐるみが欲しいのか？」

「ハイ！アメリカでも見えない動物なので、それが欲しいのデース。」

「そうか……頑張れよ。応援するから」

「ハイ！」

しっかりと目標を狙っているエレン、彼女は糸を限界までに引っ張

る。それを見守る都は彼女を応援しながら、あのパンダの方に向く。あまりのデカさなので、落とすのはかなり無理みたいだけど……頭を狙えば、落せるかもしれない。それに、エレンは刀使。一般人より強い女の子なら、力は男に負けないはず。

「せやああアアア……！」

「当たった！あれ……？」

矢を放ち、パンダの頭部を当たった。が、パンダは少し揺れる程度で穏やかなに座る。

「残念！うちの大宗商品は大きさの故、落とすのは簡単ではないですよ！」

「まあ、それもそうだね……エレー！」

「むう……もう一回！今度は必ず落せマス！」

ほっぺが膨らんで、悔しそうな顔をするエレン。彼女はもう一回の挑戦を求めたいらしい。

「おうっよー！」

そうしたら、再び金を渡し、二回目の挑戦を行う。

彼女の目はさつきより細く、全身の注意をパンタに集まる。今度こそは落せるのだろうと思ってしまう都。

しかし、そこは叫び声と共に矢を放ったエレンですが、パンタの頭が命中されても、棚の上に座っている。

「うう……！」

二回目の失敗に少し落ち込んでいたエレン。彼女もきつとかなりの自信であるパンダを狙っているのだろう。

それを失敗して、こんな落ち込んでいるんだ。

「お嬢ちゃん、落ち込まないで、これは店一番の品ですから、簡単に落させないのよ。」

「まあ、わかるだよな。それが商売というもの……エレンさん？」

彼女は再び金を射的の親父さんに渡す。

「もう一回！」

「エレンさん、無理しなくてもいいよ。」

「無理していない！このまま空手で帰るのは何かムカつく。今度は

落します！ワタシを信じてダーリン」

彼女にじっと見つめられて、彼女の我儘を見せつけた。普段穏やかか、元氣一杯の彼女ですが、こうして我儘をする姿もとても可愛らしくと思う。

「わかった。付き合おうよ。」

「ありがとう！ダーリン♡」

彼女は嬉しく笑って、すぐ注意を屋台の方に戻る。

「頑張れ、エレンさん。」

彼女を応援し続けて見守る。なんか、何もかも大きな妹ができた気分だ。

それから、エレンは三回目の挑戦を挑んだが、失敗に終わった。でも、彼女は諦めずに持っている金がなくなる前に挑戦し続けた。

「うう……」

「……………」

何回の挑戦を挑んで、失敗するほど落ち込んでいくエレンは最後までに失敗した。持っている金も全部なくなり、かなりショックしたようだ。

「ごめんね、お嬢ちゃん。やっぱりこれのハードルが高すぎたのかもしれない。他のを狙って……」

「……………」でも、金がなくなりマシタ」

「それは気の毒ですね……アンちゃん。彼女を慰めてね。彼氏だろう？」

「言わなくてもそうするよ。けど……俺もかなりイライラするのよ」

自分の金を払い、弓と矢を取る。さっきエレンがやったように弓を引っ張る。

「……………」ダーリン？何をやる気？」

都を見て、エレンは元氣なさそうに聞く。

「見ればわかるだろう？最高に可愛い彼女の前に格好つけるんだ。」

「……………」え？／／／／／／／／／／」

顔が赤くなり、エレンは都の言葉に照れてしまった。

「まあまあ、気にすんな。」

店が都のせいで乱れてしまった。本人は自覚がないが、これは正真正銘の店に迷惑をかけるお客様だ。

「とりあえず、パンダを渡せ。他の商品はいらん。」

「渡すもんか！早く出て行け！いや、補償しろ！」

「理不尽だな。」

「こっちのセリフだ！」

大騒ぎになり、多くの観客客や村人が集まり、それぞれの感想をヒソヒソに話す。

何？店に迷惑をするお客様？

うわあ、なんか態度が悪そう……

店主が可哀相……店がああ若者に滅茶苦茶された。

やっぱり不良なんでしょうか？その紫髪はなんか不良……。

早くこいつを何とかしないと……

朱音様に通報しましょうか。

「〴〵ミヤミヤ〴〵……」

それを耳に入れたエレンは我慢できずに都の手を握る。

「待って、エレン。もう少しパンダを手に入れー」

「逃げましょう、二人で」

「はあ？何言っているの？大事のパンダがまだ……」

「いいからー！」

結構心配そうな顔をしているエレンは強く都の手を引っ張る。

「……………うん。」

それを気付いた都はしばらくエレンの話に従って、二人が混乱の場から速やかに退場する。幸い、二人は身動きがよくて、すぐ安全の場所まで走った。

そして、人が少ないところで都は直接エレンに謝る。彼も逃げる途中に自分が何かをしたのか、反省した。

「〴〵エレンさん〴〵……………ごめん。迷惑をかけちゃって……」

「ううん、こっちこそ……ミヤミヤはただ私のためにやろうと思っただけですヨネ？少しやり過ぎたけど、私は嬉しいです」

笑顔でそう慰めてくれたエレンは本当にとってもいい子だ。なのに、俺は彼女に迷惑を……。

「パンダ……結局取れなかった。」

「それはいいデス。ミヤミヤの方が重要だよ。周りの人はミヤミヤの悪い口を言つて、ワタシには我慢ができません」

「俺は耐えられます。」

「ワタシには無・理。ミヤミヤは私の大切な友達だから、誰にもいじめさせられマセン！それと、エレンっていいよ。ミヤミヤ」

「え……？」

都に近づき、彼の頭を自分の胸に抑え込む。

「待って!?む、胸が……!／／／／／／／／」

「これはご褒美デス。ワタシのワガママを聞いてくれて、ワタシのために動いてくれて、ワタシを……恋人だつて言ってくれてありがとう。ミヤミヤ／／／／／／／／」

都はエレンの胸の中に幸福の感触を感じられた。とても柔らかくて、良い匂いがしてきて、さつきより腕が包まれたよりやばい。何より、彼女の声が耳の近くに囁く。

彼の理性がどんどんエレンに奪っていく。

「抵抗しちや無駄だよ。ご褒美タイムはしばらく続くから」

「~~~~~!!!／／／／／／／／」

強く抱き締めて、彼を胸の中に押し込む。少し恥ずかしいのですが、カナミンのお兄さんなら大丈夫。

「ふふっ……なんか、初めてだね。薫以外に甘えた相手は……」

エレンはブツブツ言つて、顔はとても幸せそうに見える。不思議のことに彼は薫以外に本心をバラす相手。彼はお兄さんキャラなのか？つい彼に甘えた。

「ちよつとカナミンに羨ましいのかも……」

自分の本心をバラす相手。エレンはずつとそんな相手を欲しかったのかもしれない。だから、いつも薫のそばに回す。だって、彼女はその一人だから。

辛いときは薫が必ず助けに来る。本人は素直じゃないけど……薫

はこの世に何より大切な友達。

ミヤミヤにもそうなのかな？なら、カナミンたちは凄く大変そうになる。

その時、マイマイたちと一緒にこの人を守るとしましょうか。もう友達になる以上、放っておくわけにはいけませんから。

都を優しく抱きつくエレンは笑いながら、このような穏やかな時を楽しんでいた。

第21話：お祭りの後

日が沈め、夜になり。

街灯が消え、代わりに灯籠に灯された火が道を照らしている。

そんな道に都を含めた七人が境内に向かっていく。そこにはメイ
ンイベントがあるらしい。

「お兄ちゃん……もういいから／＼／＼／＼／＼」

「だめだ！こんな照明が薄いところで転んだら、ただじやすまない
よ！」

けど灯籠に灯された火の温度より、こっちはもつと熱いものがい
る。

それは妹の手を丁寧に繋ぐバカ兄が妹を心配で、日が暮れた現在に
彼女の手を繋いだままに階段を登る。

「うう……恥ずかしい／＼／＼／＼／」

そして、この状態はもう何人の村人に見られて、顔が真っ赤の可奈
美であった。

自分の兄に関心されるのが嬉しいけど、流石にこんなたくさん人が
歩いている場所では羞恥心が半端ない！

「流石シスコンだわ……」

「ミヤミヤのその愛がアツイ」

「流石にやりすぎだ……」

「沙耶香ちゃんにもそう思ってたのか……」

「今日言ってた『転ぶ』は物理のものではないですよ。」

そんな重度のシスコンに五人は呆れた。

こんな兄がいたから、可奈美は成長ができてないのでは？と五人は
そう思いながら、こいつをなんとかしないと考えてた。

それから、やつと境内にたどり着き。都はやつと可奈美と繋ぐ手を
離れた。

そこで、折神紫襲撃事件の容疑者として逮捕されて、羽島学長によ
り解放された恩田 累と出会い。一緒に奉納の儀の観賞をする。

八人が観客席の最後部席に座ると、その横にフリードマンが座る。

やがて席が一杯になると奥の空間で奉納の儀が執り行われ始めた。

御刀を持った米村孝子さんと小川聡美さん二人の刀使が華麗な儀式剣舞を披露し、それに合わせて奥の間の観音開きが開かれ、小さな木製の箱が表れる。

「あれか御神体……？何か入っているんだろう？」

ふと、可奈美が小声で呟く。

「ノロだよ。」

聞こえていたのか、フリードマンが答えた。

ちなみにフリードマンという外国のおじいさんはエレンの祖父であり、刀使に関する技術開発施設の筆頭技術者であり、舞草の専属科学班に所属している。

都もこの2日間に彼の住所に住んでいたおり、彼からS装備のことなどを教われた。

本題に戻り、彼の答えを聞いて累さん以外の七人は驚いた顔だ。

現在ノロは折神家に集中して管理されたはず……。

「え!？」

「まだ折神家に回収されてないノロがいるのか？」

「数は前より少ないけど、昔からは人々はノロを神として祀るんだ。

可奈美くんはノロがどうやって生まれるか知っているかい？」

「え？ えっと……」

「珠鋼を加工して御刀を精錬する際に分離されて発生する不純物——ですよね？」

答えに詰まった可奈美の後ろから都が代わりに答える。

「その通りです。流石鍛冶科出身の人間ね。」

「基本の知識ですよ。」

「あれ？ でも、ノロを放置しておくで荒魂になるから折神家が集めて管理してるんじゃない……」

可奈美が新たな疑問に頭を悩ませるが、フリードマンがそれを簡単に払った。

「うん、不正解だね。」

「うええっ!？」

思わず大声を出してしまう可奈美。当然、その声は近くの席の人々にも聞こえているわけで、一斉に視線が可奈美の元へ集まる。あたふたと慌てる可奈美だが、フリードマンは優しく笑い「少し場所を変えようか」と七人を壇上の外へと促した。

「ここにいいだろう」

境内の真ん中では篝火が焚かれており、パチパチと火花の散る音、闇を照らすオレンジ色の暖かな光が堂々とした存在感を見せている。

移動する途中、一行に気付いた朱音も話しに加わるべく9人に合流。フリードマンは話し始めた。

「明治の終わり頃、ノロの管理体制は変革された。ノロを日本の各地に分散させておくよりも折神家に一局集中させて管理した方が合理的かつ安全だとね」

「しかし、ノロが一ヶ所に大量に集まればスペクトラム化——荒魂の発生に繋がります。ですから、折神家はノロの量を厳密に調整し続けていたんです。ですが、それを崩壊させる出来事がありました」

「戦争……つまり、ノロの軍事利用だ」

「戦争……」

フリードマン、朱音二人の口からその名詞が出る時、都も嫌な顔でその口に漏らした。

戦争というのは人間の争い。土地、権力、欲望そのものによって奪い合い広範囲の殺傷行為。その中に必ず数百人から数百万人の死亡に向けられる。

平和の時代に出身とはいえ、都はあまり戦争が好きじゃない。教科書から、それはあまりにも愚かな行為だと知っていた。けど、戦争のおかげで人類の科学技術もより一層に進んだ。

本当に戦争はいいことや悪いことやらの区別が難しい。

「ノロを持つ神性。つまり隠世に干渉する力を増幅させ、君たち刀使しか使えない力を解明し、それを戦争に使うとしたのさ……」

「馬鹿馬鹿しい……」と、都は小さい声でブツブツと呟く。

それを僅かに聞いた朱音も悲しいと顔を地面に向く。

確かにその真実は刀使を尊敬する人間にしては、あまり受け入れな

いことだ。

守護の力で人を殺すために使うとは……悲しい。

「戦後、米軍が研究に加えたことでノロの収集も加速した。表向きは「ノロを分散させず、一ヶ所に集まった方が安全。」だと日本中のノロが集まっていた……しかし、そこで思わぬ現象が起きてしまった」
「思わぬ現象？」

エレンの質問でしばらく沈黙したフリードマンですが、数秒後に彼は言い知れない感情を含めた口調でより一層残酷の真実を都たちに伝わった。

「相模湾岸大災厄。あの災厄、実はノロをアメリカ本国に送るために輸送用タンカーに満載した結果、起きてしまった事故。膨大な量のノロが結合し、彼らの眠りを覚まし、怒りの業火に薪をくべてしまったんだ。」

フリードマンは当時そのタンカーに乗船していたらしく、タギツヒメの誕生の瞬間を目撃しているように話す。

「……………っ!？」

その真実を知り、都を含めた刀使七人が驚愕していた。

しかし、フリードマンはまだ話を続ける。

「先程の都くんの説明の通り、ノロは人々が御刀を手にしたことで生み出された犠牲者。だから、本来はこうして丁重に祀り、敬うべきだと私は思っている。」

「犠牲者……荒魂が……だど？」

姫和の眉間に皺が寄る。姫和にとってタギツヒメは自分の母親に死に追いやった存在だ。その荒魂が被害を被っている側であるなど彼女に納得させるのは困難だろう。

俺でもそれを受け入れるのが難しい、だって荒魂が悪だと昔からそう教わったのだから。

「ーだから昔から刀使が必要なのか。刀使は神聖の神刀御刀を振り、人類への憎しみより生み出された荒魂を払う。それは奴らをせめて自分の母みたいな存在に鎮められて欲しいということですね。」

「うん、理解が早いな都くん。刀使の起源は社に務める巫女さんだ

と伝承から伝わった。神の力を使役し、魔を祓う女性。そして、御刀には意思のようなものがあり、自分に適した主を選ぶ」

「ーだから、昔からの刀使は神薙の巫女だと呼ばれた。そして、現在になって、お前たちはその義務を受け継いだのだ。」

つまり、可奈美たちは神薙の巫女であり、人類によつて生み出された被害者を鎮めるのが彼女たちの使命。

思ってた以上に刀使は重い役目ですね。

◇

静かな夜に包まれていた中庭。

ここにいと、さつきまで賑やかなお祭りがまるで昨日みたいなものだ。

「俺は結構ここをお気に入ったけど、二人もそうなのか？」

そして、中庭まで歩いていて少し頭を冷やして欲しいと静かな環境を求めたいと思うところ。彼はそこで浴衣から制服に着替えた十条？と衛藤可奈美が廊下の辺りに座っている光景を見た。

「お兄ちゃん！なんてここに？」

「少し気持ちがいい夜風を当たってほしいと来たのよ。隣でいいか??和」

「どうぞ……」

彼女の許可をもらって、都はそのまま？和の右に座る。因みに、可奈美は？和の左に座っている。

「さつきのお祭り楽しかったなく。最後はチョコミント味の屋台を全部制圧できたし！」

「ほお〜？お前もようやくチョコミントの素晴らしさを理解できたのか！」

「え!?!あの歯磨き味の味が好きなのか？お兄ちゃん」

可奈美が驚いた顔でそう聞くけど、すぐ？和に睨まれて黙らせた。相変わらず、チョコミントに異常の執着があるなあ……？和は。

「まあな。お前の好きな味だから、俺も試したのよ。結構いけるよ

！それ！」

「そう……か……それは良かったな。」

なぜか、そこで顔が赤くなる？和。

そして、可奈美から痛い視線が伝わる。

俺、何かをやらかしたのか？とにかく、話題を替えよう！

「そ、そういえば！二人の浴衣は凄く可愛かったな。」

「お兄ちゃん。それ、最初から褒めたやつだよな？」

「そうだな。」

「ぐっ！」

そう思い、都は話題を替えようとしたんだけど。二人に痛いところに突っ込まれた。

やっぱり長年の知り合いの前にそういうの効かないのか……。

それから、しばらく沈黙がこの三人を包まれていた。

何かを話しようか、わからない。あんな話を聞かされて、脳にも静かに考える環境が欲しい。

可奈美たちの役割は都が思っている以上に大きかった。彼女達がやるべきことは荒魂を鎮め、人類が作った罪を償うすること。

正直イライラする。なんて彼女達は我々の罪を償わなければならぬのだ。彼女達はまだ中学生、楽しく遊ぶ年齢だぞ！なのに、今は人類が作った史上最大の災厄を止めるため、ここで特訓して、悩み続けた。

確かに彼女達は刀使。特殊の役目を持っている女の子。母もその刀使の役割を果たすために、大荒魂に挑んだ。

あれは胸を高く誇れる役割だと思う。けど、そのせいで母の死因を作ったと思うと……俺、ちよつと人類を許せないのかも。

「お母さん達も一緒にお祭りを楽しむのかな？」

その時、可奈美が先に長い沈黙を破った。

「それはどうだろうな……」

それに付き合うのが？和。

「母の浴衣姿も一度も見てないし……あ、でもお父さんなら、見たのかも。お父さんはいつも自慢げに母のことを可愛い可愛いとか言っ

てたし。」

「あ……そうかも！今度聞いてみるか！そういえば、？和ちゃんのお父さんは？どんな人？」

「いつも母と仲良く笑うイメージしかないな。母が病気になっても、いつもより早く帰って母と一緒に昔話をして、母を笑わせるためにいつも笑顔だった」

「そういえば、一度も彼を見たことがない気がするね。」

「あの時は忙しいからな。彼は母を幸せをするため、かなり仕事に頭を入った。」

「そうか……いいお父さんだね。」

「そうだな……本当にどうしようもないお父さんですね。」

？和は空に向けて、何も思っていない顔でした。

けど、きつと心の中にも彼のことを思ったのだろう。

「うちのも同じだよ。子供二人が行方不明の状態、電話も一度も家にかけていない……つまり、俺達三人は同じ仲間だね！」

都は馬鹿みたいな微笑みで？和に向かう。彼女一人に自己責めにはいれないからな。

「私に馬鹿仲間の列に入れさせるな。」

「え！入らないの!？」

「お前、馬鹿にするつもり？」

？和が残念そうな可奈美に突っ込む。やっぱりこれが好き。こういう穏やかな時間は……。

「あはは……馬鹿っていいじゃん！ん？待って、これって俺も馬鹿ってこと!？」

「今更、気付いたか？」

「ふふ、私とお兄ちゃんは一緒だね。」

「そこは嬉しい顔をやめろ！」

こうして、なんの意味がない雑談をした俺達はいつの間にか笑った。こういう光景は第三者から見れば、尊く見えるかもしれない。

きつと彼女たちも同じ楽しい気持ちなんだろう。

その一瞬、耳障りでよく響く音が脳を反応させた。

「小鳥丸……」

「千鳥……」

「これは共鳴か……」

あの時の音はこの二振りの刀の共鳴。きっとこれは運命なのかもしれない。

この二振りは母と篝さんがかつて持っている御刀なんだから。

「……お前、聞こえるのか?」

「そうなの……?」

そして、?和と可奈美は少し驚いた顔で都を見る。

あ………そういえば、俺は刀使でなかったっけ?でも、なぜか俺にもその音を聞こえた。そこはまだわからない謎。

「うん、なぜか聞こえる。これは運命……なのかもしれないね。俺達三人がこうして話し合うのも」

「運命か……私とお兄ちゃんと同じ母ですもんね。」

「………そうかもな」

そう言つて、二人共はなぜか顔が赤くなつて、凄く可愛く見える。

まあ、俺も自分が言い出した運命に少し恥ずかしがっている。

もし、それが運命なら……俺はこれまでのことに感謝しなければならぬ。こうして、この二人と舞衣ちゃんと沙耶香と薫さんとエレン……もつと多くの人と出会つて、本当に楽しかった。

これは母が失ったばかりの俺には思い浮かばない未来なのかもしれない。……

そんなとき、ちょうど良かったなところに花火が空に爆散して真っ黒の夜に明けた。

それを見て、都三人たちの目がその輝く存在に奪った。

あまりにも綺麗な美しい花火に彼たち三人はただただいたずらにそれを見つめる。

「………」

一瞬、都は花火から視線を逸して、彼女たち二人方へ見た。

夜空に爆散する花火の光の照らしたに彼女たちの顔は最高に可愛くて、尊く見える。ただ見るだけで、幸せ感が胸にいっぱい溢れてくる。

守りたい、彼女たちを。

例え弱くでも……力がなくても、そんな大事な彼女たちを守りたい。

改めてそう決心すると、都が腰につけた御刀はその一瞬彼の決心を応じるように綺麗な音を鳴った。



「では、あなた達は我々と共に行動するということですね？」

花火の時間が終わり、都と他の六人は再び広間に集合した。そこで彼は彼女たちの決心を朱音に伝う。

「はい。歪みを正しい、刀使本来の役割に戻すということは目的が同じです。私はその元凶折神紫を取り憑かれているタギツヒメを倒す。」

？和の決意を聞いて、朱音が横目で隣にいるフリードマンの意見を求める。

きつと、この人は都たちを誘っているが、ずっとこの選択が正しいのかを迷っている。

「優秀の刀使が増えることは喜ばしいことだと思いますか」

「あなたは……」

フリードマンの意見を聞いて、朱音は力なきの顔で何かを決めた。「貴女たちの気持ちがありました。舞草はあなた達のことを歓迎します」

「ありがとうございます——」

彼女の入会許可？いや、組織に入らせることに喜んでいる都たちは

朱音に感謝すると、荒いた足音が外の廊下から伝わってきた。

そして、襖が開けられて、米村孝子が緊張した表情で現れた。

「米村さん？ どうしー」

「大変です！ 刀剣類管理局の襲撃だ！」

「……!!？」

息を呑んで、その唐突な報告に全員は同じく顔が固まった。そして一早く反応をしたのは朱音たちだった。

「皆さん、撤退の準備をお願いします！ 御刀もちゃんと持ってください

さー！」

「あ、はいー！」

その命令を聞いて、米村を含む六人も急いで御刀を取り始める。

(どういうこと？…ここはどうしてバレたの?)

そして、御刀をいつも手持っている都も朱音たちと一緒に撤退の準備をする。

しかし彼の心はどうして急にこのような事態になってしまったのかをわからない。いや、特にわかっていたのかもしれない……ただその可能性をずっと予想していなかったのだ。

……やはりあれか？ あのババアから奪ったアンプルか！ クソ！ あれでバレたのか!?

前々からは気持ち悪い視線を感じたのはその原因らしい。

おそらくですが、折神紫の一部があのアンプルの中にいる。そして、彼女はそれを利用して、ずっとずっと監視している！

クソ！ 俺のミスだ！ なんとか償うしないと！

自分のせいにする彼はまだ気付かれなかった。この件は例え、彼がアンプルを持ち出せなくても、同じものが同じくここに送られている。

それは都が予測できない、予測外の事故だ。



「こちらは特別祭祀機動隊です。この一帯は特別災害予想区域に指定されました。我々の指示に従い、速やかに行動してください。繰り返します——」

舞草の里の出入口、その全てに脱出を阻むように機動隊の隊員が陣取っている。隊長と思われる男性がスピーカー越しに祭りに集まっていた市民たちに指示を出している。

「な、なんだあ……」

「なんだって機動隊がこんなことに……」

「荒魂でも出たってのか？」

「馬鹿言え、だったらもつと騒ぎになってるだろ」

騒ぎ始めた市民たち。彼ら彼女らはこの事態を全く理解していない。

「我々は既に荒魂扱いか……流石、折神家」

遠くにいる屋台が並んでいるところに、もう数人の刀使が反抗の意を消して投降した。よく見れば、後ろに市民たちがいる。つまり、彼らの安全を守るためにこうした。

あれじゃ反抗したら、市民が巻き込まれるだろう……糞タレか！

「この村にいる全員を拘束しようとするのデスか!？」

「恐らく。朱音様、これからはどこへ撤退するのでしょうか？」

「潜水艦を使おう。元々あれはこの時のために用意したもの。所属はまだ米軍の海軍のままだ。警察組織でも軽く手を出さないのだから。」

「了解。」

朱音の指示を受け、これからやることは決まっているようだ。

勝利条件はあそこへの脱出。

「私達たちは朱音様たちの護衛を」

「私達は足止めにする」

「気をつけろ、聡美。」

「うん。」

そして、刀使二人の先輩たちもそれぞれの対応行動を決めた。流

石、可奈美たちの先輩ということか。

「私達は？」

刀使先輩達が決めたあと、そろそろ可奈美たちもこれからはどうするのかを先輩たちに聞く。

「お前たちも朱音様の護衛です。都くんは朱音様の背後を守ってください。貴方の実力は信頼できる。」

「それは嬉しいことだ！朱音様、必ず貴女様を守る！」

「はい！よろしくお願いします。」

指示を受け、都たちは朱音と一緒に撤退すると決めた。

第22話：都の決心

「気をつけろ！彼女は親衛隊の人間だ！」

都たちが撤退し始めた数分後、村の上空に徘徊するへりから飛び降りた薄桃色髪の女の子が不敵な微笑みで長船の刀使たちと対峙する。

彼女は――親衛隊最強の一席、燕 結芽。

「私は第四席ですけど、この中で一番強いのも、にっかり青江。」
御刀の名前を呼び出し、最強の一席はただ今最強の鍰を抜け出した。

「いゝくゝよー！」

迅移を使い、彼女はただの8秒内で神速な斬撃を繰り返し、八人の腕が薫たちに劣らないほどの先輩刀使たちを斬り伏せた。

それは彼女の強さ。最強を示す強さである。

「何という強さ……！」

いつの間にか、ここに残っているのは聡美一人だった。

「おねーさん達が弱すぎ……！」

凶悪の顔を示して、最強が聡美に襲ってきた。

――孝子、朱音様のことを頼む。

必死に決心した聡美はできるだけ時間を稼ぐと決めた。

そして、そこには戦いすらもない、ただ一方的の蹂躪しゅうりんだった。



潜水艦の停泊場――

「米村さん、大丈夫ですか？」

さつき、特別祭祀機動隊との激戦により長船刀使達は数人戦闘不能の状態になった。

そして、米村孝子さんもその対刀使戦用の矢に当たれた。幸いなところ、彼女はまだ写し維持する状態。解除しなければ、身体に大きな影響がない。

「都くん、心配はいらない。お前も早く中に入れ」

大したことがない余裕がぶりの顔。彼女のことだから、本当に大丈夫だろう。

「すみません……さっきの戦いで何もしてあげなくて……」

そして、さっきからだただ彼女達が戦っている様子を見ていた都は申し訳ない表情をする。

本来彼は一般人をするつもりで、機動隊の人を騙して一気に片付けるつもりだったか……。

彼を心配していた舞衣と可奈美達に止められた。何にせ、いくら都でもマシンガンの銃撃を避けるのが無理だろう。

それに、刀使は写しという防衛手段があり、例え当たれたとしても肉体に影響が残されない。

ならば、その場に長船の刀使たちに任せるのが一番だと……都もよく知っていた。

けど、彼はこのような状況が起きて、何もできない自分を許せない。

「気にしないで、これも私達の役割ですから」

笑って、都たちに心配させたくない顔をする孝子。やはり彼女はいつも不安がる人に安心させる優しく強い心を持っている。

「うん、分かっ……っ!？」

その時、唯一の出入口である洞窟の穴の部分から漏れ出る……そもそも隠してすらいないであろう闘気。都はそちらの方に注意を向けることにした。

「ひっさしぶりー、また会えて嬉しいよ、おにーさん」

「燕さん……」

不敵な笑みとともに現れる小柄な人影。親衛隊の制服、腰に差した御刀、薄桃色の長髪。

言わずと知れた最強の刺客——燕結芽がそこにいた。

「彼女は私一人で受け止める……！早く行け！」

一人で殿するつもり孝子。彼女からかなりの決意を感じていたが……あれじゃ、勝てないと都は知っている。

「へえ……おねーさんは私を受け止めるつもりなんーだ。」

「神社にいた刀使はどうした？」

親友のことを案じた孝子が結芽に訊く。

「刀使？あれか？全然手ごたえ無かったんだけど。でもこの御刀持ってた人はちよつとはマシだったかな。」

結芽は孝子の言葉を聞き、いつも通り自分が凄い人だと覚えてもらうため、煽るように言い、聡美の御刀を放り投げる。

燕さんにやられたのか……。

「孝子さん、彼女の仇は俺が取る。舞衣ちゃんと可奈美のことをよろしく」

「お前!?!どうするつもり！いくらお前が強いでも、相手は親衛隊——うっ！」

孝子の胸あたりにいる矢を強引に引っ張って、彼女の写しを解除させる。

「ごめん、彼女を止めるのは俺だけだと思う。そして狙いもたぶん俺だ」

孝子の前に立つ都は御刀を抜き出し、構えを取る。

「お前……あの二人を悲しむつもりか！あの二人はあんたのことを——」

「知っているさ……凄く大事されているのが知っている。だから、ここで彼女を止めて、可奈美たちがうまく逃げられるようにしたい！

頼む……あの二人のことを」

「お前……絶対に生きて帰るのよ。あの二人のためにも！」

「ああ……」

都の決意を感じて、孝子は辛い顔で潜水艦の方に走って、中に入り込む。やがて、ハッチが閉じられて水中に黒い金属の塊が沈んでいく。

「別れを済ませたみたいだね。」

「待っていてくれてありがとう。」

「うん、私はちゃんと空気を読めるいい子だよ。それに、そうしたほうがおにーさんが全力を出せるじゃない？」

「何を言っている？俺は既に全力を出せだよ。」

「それは嘘だね。前回はおにーさんが全力で逃げたみたい。つまり

私と本気で戦ってくれない……けど、今なら出せるよね？あの技を」
不敵な微笑み、彼女の目から自分が見透かせるようだ。やはりこの子は危険すぎる。

「ああ……今度こそは勝負をつけるー！」

「……………につひーそれじゃ、行くよ。おにーさんー！」

再び、最強と最弱の対決が始まってしまった。

◇

最初の一撃は見事に防げた。

かなりギリギリだけど、それでも見える！

「はあー！」

彼女の剣に延びて、彼女を斬りかかる。

もちろん、避けられた。

そして、予測通りに彼女は迅移を使つてすぐ距離を縮まり、最速の攻撃でこつちが空振りの攻撃で作られた隙に攻めてきた。

「うわあー危ないー！」

けど、すぐ流れるような斬撃で結芽を退ける。

「前より、強かったね。おにーさん……。やっぱりあときは全力じゃなかったのよね。」

「これは特訓の成果なんだよ。」

米村孝子さんの一時間の立ち会いで、俺はようやく刀使との戦いに慣れてきた。いや、どうやって戦うのが学んでいた。

それは攻撃を止まらずに、舞を踊っているような流れでこの先に見える攻撃を防げて避ける。

もちろん、それは現実的にはとても難しい出来事だ。自分より遙か超えた相手との戦闘で、流水のような動きで相手の動きを読み、対応するのは易いことではない。

けど、衛藤 都にとって全集中を使った場合はそれを簡単にできる。

ただ数秒で、彼は相手の動きを「読んで」、すぐ対応する実力が

持っている。

「あつはー！」

燕 結芽は楽しそうに衛藤 都に近づき彼を攻撃しながら、彼の實力を探る。

しかし、前回より突っ込める隙が少ないため、結芽は彼と互角に戦っている。

いや、完全に互角に戦ったわけではない。燕結芽は天然理心流の達人であり、対してまだまだ柳生新陰流を中途半端の程度しか至らない都では齒が立たない相手だ。

その實力の差によって、都は前回のように身体の何ヶ所が斬られて、傷口が結芽の攻撃で出来てきた。

「……………ッ！」

一瞬背後に回されたが、都は最小限の動きでぎりぎり避けて刀で要害に狙った斬撃を防げた。

「へえ、背後攻撃にも防げるんだね。」

斬撃がとても重くて、時間が経つほどぎりぎり防げる感が増えてきた。

この子はどんどん本気になっていく。

一体どんだけ強いんだ！今までは全力じゃなかったのか！

「はっ！」

彼女の刀を全力で弾けて、都は僅かの時間で立て直して彼女と対峙する。

いや、〃そうさせてくれた〃。彼女はまだ余裕でこの戦闘を楽しんでいる。これはまるで母のように…………。

くっ……………！強い……………！例え特訓しても全集中の限界はこれだ。

ならば、これからは超集中……………いや、そうしたら、この場から逃げる力さえも失われる。

あれはリスクが高すぎた技だ。

「やっぱりおにーさんはさっきの駄目駄目なおねーさんたちより強い。おにーさんをここで倒せば、私はきつとー！」

また不敵の微笑みで彼女の口から出した煽っている言葉にムカつ

く。

「小川さんたちのことですか？貴女はなんていつも煽っているような言い方なんだ？とてもムカつくけど」

別に彼女たちと仲良くしているわけではない、彼女たちのために怒るわけでもない。ただあの煽っている口ぶりにムカつくだけ。

「え〜でも弱いんじゃない！弱いだからいけないのよ！そんなおねーさんたちは誰かに『覚えられる』はずがない！」

さつきより感情が激昂した結芽。

一瞬だけど、彼女の表情から僅かに『苦しんでいる』ように見える。

けど、そんなことは都が関心するところではない。

「さあー早速第三ラウンド始めようか！」

高速迅移を使って、再び距離を縮まる。

第三ラウンドの始まり、彼女はさつきより早くなった。

「……………ッ!？」

けど、彼女が本能的にぎりぎり攻撃をやめて、後ろへ飛び回った。そして、さつきいたところに綺麗な一閃が残っている。

「弱いでもいいんじゃない。俺も弱いんだ…………だから、お前との戦いで必死だった。」

居合を放った後の体勢から元の体勢に戻らせた都はさつきの雰囲気と違う。

あれは…………あの時、都が結芽から逃げるために使った技による剣士としての雰囲気だ！

「見せてやる。俺の弱さをお前の脳に刻んでみせる！弱者でも他人に覚えられる価値がある！」

「やっど…………やっど本気なのね！おにーさん！」

とても嬉しそうな表情を浮かべた結芽。彼女はやっど自分の強さを彼に示すチャンスが待っていた。

彼が全力じゃないと、意味がない。自分の強さは彼より強いと結芽は狂気になるくらいに示しかつた。

「ああ…………全部君に見せるよ。俺の全力を！」

もう後戻りができない。この状態が解除されたら、一日中は動けなくなる。

もちろん、この状態では何となく逃げられるかもしれない。けど、この子と決着をつけたい。彼女と手合わせすると、胸のこの高鳴りが止まらない。

——彼女に勝ちたい！

「なら、私も少し本気を出せるかな……おにーさんが死れない程度で！」

そう言つて、彼女は攻めてきた。そうしたら、都はすぐ対応して、避けて反撃する。

自分が学んだすべてをこの子に捧げる。

「——！」

読み、避け、反撃、読み、避け、防げて、反撃。

都は柳生新陰流の特徴を最大限界に引き出した。もちろん、舞衣の居合も最強反撃技として使う。

都はこの二人を中心にする剣技で今までに戦ってきた。自分なりに学んだ古い武術や体術も隠せずに使った。

それでも、数十分ほどに続けていた第三ラウンドは終わりに近い。なぜなら刀使と一般人の力の差がただの才能と努力では覆せない。

都は超集中を使つても、身体の傷口がどんどん増える。

結芽もどんどん手加減を諦めたせいで、前回より受けたダメージが多くなつていく。

都の身体全身は激痛が走る、普通ならもうこれ以上耐えることがないはずだ。それでも、彼はその痛みを無視し、彼女との立ち会いに集中している。

痛い……身体もとても重い！鮮血も地面にたくさんこぼれている。だが、今はまだ倒れるわけにはいかない！

「そろそろ終わるね。これ以上は、おにーさんが死ぬから」

彼女の宣言と共に、都は彼女の重い一撃を無理矢理防げた。けど、そのせいで重心を失い、彼はそのまま結芽に隙を捉えられた。

「しまっ——」

次の瞬間、痛みが肩から強く脳に伝わってくる。都の肩が結芽の御刀につきり青江に貫かれた。

「うあああああああー！」

肉と骨が刀に貫かれて、その痛みは絶大なもの。それを耐えられない都は、超集中が強制に解除された。

「これで、もう戦えないのよね？私よりよくわいおにーさん。しっかり私の凄いところ覚えているのよね？まあ、早く助けを求めないと、死んちゃうと困るけどね……覚えさせなきゃ……」

彼女は都の身体の上に乗っ取る。そして特別祭祀機動隊に連絡を取って「こちらには重傷者一名、早く治療しなければならぬ状況」などの内容を伝う。

これでは間違えなく都が折神家に捕まえられる。

都の身体はもうどこでも動けない。これは超集中と出血しすぎたのは原因だ。

ーごめんね、心配をかけたかもしれない。可奈美、舞衣ちゃん……本当に……ごめん。

そして、約束を破って……ごめんなさい、？和。

都はまだ痛みと意識がある限りにずっとあの三人のことを思っていた。

もしかすると、俺は彼女たちにー。

数秒経ち、彼は意識を失った。

◇

「……けほっ……けほ……」

都との戦いのあとは、燕結芽は彼が医療班に連れられる光景を見守った後。神社に戻り、そこで酷い咳をした。

「うっ……い！」

彼女の手は真っ赤の鮮血がある。だが、それは都との戦いのせいではない、彼女に残された時間がないからです。

それを知り、彼女の顔が痛みで歪んだ。

まだ足りない……おにーさんだけじゃ足りない。あの千鳥のおねーさんと戦いたい……彼女を倒せば、自分はきつと一番強いと皆に示すのだろう。

もつと……皆に自分が一番凄いとところを見せないと、もつと覚えさせないと……！

彼女の執念はとても強い。それは彼女の強さの理由の一つ。

「時間が無い」から、彼女は都との戦いにも急ぎ過ぎで、手加減さえも忘れた。

もつと覚えさせたい……それは私の望み、私の願い。他はいらない……誰か、私を覚えて。

少女、燕結芽は弱まった身体でゆっくり神社から降りていく。

そんな弱そうな背後は今まで、誰にも見せられなかった。

◇

「私を殴ってもいい……ごめん、柳瀬と衛藤」

折神家の襲撃からうまく逃げられた舞草のメンバーが乗っている潜水艦の中に、叱られる覚悟ができた孝子は可奈美たちの前で都のことを彼女たちに伝わった。

「お兄ちゃん……そんな……」

「……」

可奈美は力を失い、倒れるところが、エレンに優しく支えられた。

そして、舞衣もそのことを聞いてとても悲しそうな顔だった。

「舞衣……」

もちろん、沙耶香もそんな顔だったけど、舞衣の方がよっぽど心配だ。

「いくら殴ってもいい……頼む！でないと……私は自分を許せない！」

苦しそうな顔をしている孝子。彼女も都に殿を任せたことに凄く後悔している。ただ刀使すらない男にあんな重大なことを任せるとは……彼女が自分の頭がおかしくなった気がする。

「おい、やめろ。この件はお前の責任ではない。どう聞いても、彼が自ら決めたことだから、あまり自分を責めるじゃない！」

「薫くんの言うとおり、ひとまず休もう。それと、可奈美くんと舞衣くんにもしばらくの休憩が必要だ。」

孝子のこの惨めな様子を見てられない薫は口に出した。彼女に続いて、フリードマンも声をかけた。

「お兄ちゃん……」

「お兄さん……」

舞衣と可奈美の状態はもう限界に近いみたい。これだけを見てみると、都は彼女たちの精神を支える柱に見える。

「とりあえず、沙耶香は舞衣を部屋に連れてきて、ペツタ……ヒヨヨンとエレンは可奈美を頼む」

「うん……」

「わかった。」

「薫はどうするデスか？」

「俺は先輩を殴るから、回避してくれ」

「それは冗談デスね。じゃ、先輩のことは頼みます！」

「任せろ」

こんな状況下で薫から指示を送り出し、刀使三人（孝子を除く）は可奈美と舞衣をそれぞれの部屋に送る。

現在、あの二人には少し落ち着く場所が必要と判断した薫。

しかし、舞草襲撃されたばかりにこの事態が起こるとは……実に面倒くさい。特に都の勝手の行動は既に何人を影響された。

？和は落ち着く顔だけど、彼女もさっきの話しを聞いて、一瞬可奈美と同じ顔だ。

あいつも都のことを相当に重視しているようだ。

「流石真庭学長が重視する生徒ですな。見事な指揮能力だ。」

薫の指示を耳に入り、フリードマンは笑ってそんな彼女を褒める。

「いや……全然嬉しくないけど。それに、俺より舞衣の方が適任だろう？こう見えても、彼女はかなり指揮タイプの刀使だぞ！」

剣術指導の時も、彼女はよく戦況を見て、対応の動きを取った。あ

れはかなり凄かった。

「それでも、貴女もよく彼女を見た。しかし、都くんの影響はかなり大きい……この件も朱音様に知らなければならぬ。」

「そうだな。何やってんだ、あいつ」

文句を言いつつ、薫はまず孝子を部屋までに連れて行く。

人を慰めるのが別に得意じゃないけど。今の可奈美達はヒヨヨンたちが必要だ。なら、一番簡単なやつは俺がやり遂げるしか……。

そして、そんなぶつぶつ文句を言っているけど、ちゃんとやっていく薫を見て、フリードマンは彼女が自分の孫娘の親友だと良かったと思う。

そして、彼もこれからどうすればいいのかを、考えている。

第23話：大切な人

衛藤 都は私のお兄ちゃん。

小さい頃からずっと私に優しくしてくれた、稽古も喜んで付き合ってくれたもう一人の剣術馬鹿。

お母さんがまだ生きている頃はよくお兄ちゃんと一緒にお母さんへの対応策を作って、二人かかりでお母さんを倒せようとしたが、結局なんの意味もなくお母さんにボコボコされる。

けど毎回私とお兄ちゃんが失敗した後、お兄ちゃんはいつも私の前に格好をつけて私の頭を優しくなでなでする。

そのおかげで、危うく泣き出す私は再び元気をつけられた。よく思えば、いつもお兄ちゃんがそばにいるから、私はこうして楽しく毎日過ごしてきた。

でも、あの日……お母さんがいなくなった日にそんな楽しい日々が一瞬にいらなくなってしまうた。

「おかあさん、なんていなくなったの？」

思わず口に漏れた言葉。私は大好きなお母さんの死をわからなかった……ううん、受け入れなかった。

そこで私のお兄ちゃんは私の手を繋ぎ、何も言わないまま私の頭を優しく撫でる。やがて、数分経ち、彼が私にこう言った。

「かなみ、私は必ずお前を守る。だから、もう我慢しなくてもいいよ。涙が私が全部受けてやる」

彼がこう言って、幼い私はつい彼に甘えた。彼の胸に飛び込んで悲しい気持ちをそのまま放った。お兄ちゃんはこうして私を抱きしめながら、私の悲しみを全部受け止めた。

けど、その日からお兄ちゃんは泣くことをやめた。

きつと、これは私のせいだと思う。お兄ちゃんは私を悲しませないように、自分の感情を殺し、私の何もかもを受け止めた。

大好きな剣術も、驚くほどの才能、時間、体力と明るい未来も、すべて私にくれた。そんなの全然いらぬのに……私は自分の欲望に

従って大好きな彼にいたずらに甘えていた。

私はお兄ちゃんが思うほどいい妹じゃなかった……ただ妹という身分を使って彼の関心をもらうだけ。

私はかなり自分本位で冷たい内面も秘めている妹なんだ。ずっと、ずっとお兄ちゃんを独り占めていた。

その後、私の生活は舞衣ちゃんと美炎ちゃんが入った。毎日ほととも楽しかったけど、お兄ちゃんが彼女たちと仲良くする光景を見て、私の胸は痛くなる。

私一人に向けた関心は私一人だけのものじゃなくなった。多分私は嫉妬するのかもしれない……だって、お兄ちゃんは私一人だけのお兄ちゃんなんだ！他の人のものにしちや嫌だ。

けど、私はそれを伝える勇気がなかった……舞衣ちゃんと美炎ちゃんが凄く幸せそうに見えるから。

私みたい……彼に救われたのかもしれない”。

◇

「もう大丈夫ですか？カナミン」

どれくらい泣いていたのか正直覚えていない。けど、身体がとても疲れた気がする。きっと力任せに泣いていたのかも。

「うん、もう大丈夫だよ。」

私のことを心配してくれるエレンちゃんに私は大丈夫だと伝い、嘘まみれる笑顔を作った。

大丈夫なわけがない……お兄ちゃんが一人で親衛隊の人と戦った。あれは伊豆の時にギリギリで退けるレベルなのに……お兄ちゃんは写し、迅移や金剛身と八幡力がない状態で挑んだ。

きっと大きな傷が負うに違いない。最低の場合は殺される、だって機動隊の人たちも容赦なく孝子さんたちに銃で撃った。なら、お兄ちゃんも……命が落とされるかもしれない。

そう思うと、心が痛い……もう大事な人を失いたくない。

「そうデスか？カナミンはまだ元気なさそうに見えるデスか

……」

「それは泣いたから、疲れたのよ……少し時間をくれれば、いつも通りで感じ！」

「……………」

「……………？和ちゃん。なんてそこで黙るの？それともこれはあなたのベットなの!?すみません！すぐどいてあげます。」

慌てて、可奈美はベッドから離れた。

けど、？和の瞳からそんな意思を感じない。

「そういえば、舞衣ちゃんは大丈夫かな？お兄ちゃんのこと、とても辛そうな顔をしたし……私が彼女を慰めー」

「もういいから、可奈美。……お前は隠すことが下手だから、強がらなくてもいい。」

「え？和ちゃん、何言っているんですか？私は大丈夫だよ！少し休めれば……」

可奈美は急ぎに舞衣のところへ向かうと、？和に止められた。

彼女はどうかやら可奈美を見抜いたようだ。流石、長い間で一緒に行動した仲間と言ったところか……。

「カナミン。ヒヨコンの言う通り、強がらなくてもいいデスよ。ワタシ達は貴女の気持ちがあわかっていマスから。」

わかっていた？ふぎけん……私がお兄ちゃんに抱かえた感情は部外者にはわかるはずがない！

「わかっています？エレンちゃん、それは違いますよ……貴女は大切な家族を失ったことがありますか！」

「……………っ!？」

「おい、可奈美………！言い過ぎだ！」

可奈美の失言に、？和は怒鳴した。

確かに血の繋がりが無い、しかも知り合っただのはこの数日間しかない人間にはそれを理解するのは難しい。

しかも、可奈美は大事なお母さんを失った経験者だ。非経験者であるエレンはその家族を失う気持ちをわかるような口が良くないけど……流石に言い過ぎだ。

「私は間違っていない……エレンちゃんは何も失っていないくせに、わかるような口を……！私は大事な二人の家族を失ったのよ！」
「だからエレンに怒るの!?彼女はただお前のことを心配しているだけだ！お前もわかるんだろう！」

「ヒョヨン……」

「わかっている！でも、エレンちゃんはわかるものか！大切な人がそばから離れた喪失感を……！」

「……………それは……」

可奈美の悲しげの顔に、エレンは何も返せこない。

彼女はわかるんだ。可奈美が辛かっているんだ。家族を失う痛みはこの年頃の女の子にしては、あまりにも残酷なことだ。

だから年長者として彼女のストレス発散を受け止めるのがエレンの役割。もし、それで可奈美が良くなれば、彼女はいくら酷く言われなくても構わない。

「……………」

エレンの意図を察した？和が彼女を尊重して、口を閉じる。

「約束……したのに、ずっと一緒に……お兄ちゃんのバカ！」

涙がボロボロに地面に落ちてた可奈美。そんな弱そうな彼女は滅多に見えない。？和でもさっきのと加えると、二回くらいにしか見えない。

普段は元気で、女の子らしくて、思考があまりにも理想付きの可奈美剣術馬鹿だけど、こういう弱そうな一面もちゃんと持っている。

彼女はいつも明るさという仮面をかぶって、自分の悲しさを隠している。それを癒やすのは都であった。

彼は可奈美のすべてを引き受けた、彼女に幸せをくれた。だからいくら辛くても、彼がそばにいる限り可奈美が隠している痛みも少しでも軽くなる。

けど、今は彼がいらない。彼女の痛みを分け受ける対象がいなくなった。そこで彼女はこの痛みを耐えられず自己本位の一部を示した。

とんでもなく我儘で冷たい内面を持つのは可奈美の正体。ずっと彼を愛していたから、彼を手放さなかった。

「可奈美…………お兄さんのことが好き？」

「……………うん、大好き。」

迷いなく可奈美はそう答えた。好きに決まっているじゃないですか。小さい頃から、お兄ちゃんはいつも自分に目一杯の幸せをくれた、いつも傷だらけの身体で自分を守ってくれた、助けてくれた、いつも自分に優しくかった。

彼は可奈美の憧れの対象、一番身近い対象。そして…………彼女の初恋の対象でもある。

そうか…………私はお兄ちゃんのことを好きなんだ。だからそんなに辛いんだ。

兄を失った上に、？和の質問で可奈美はやっと自分が都に対する感情を気付いた。

ただの兄妹愛だけではなく。可奈美は衛藤 都という男を恋にしている。

けど、こんな恋は許すものなのか？血が繋がっているから、お兄ちゃんにそんな気持ちを抱いてもいいのか？

ううん、今はそんなことを拘るじゃない。彼は今、生死不明の状態だ。結論を出しても意味がない。

しかも、これは失ったから気付いた感情。そう思うと、もつと悲しくなる。

「……………そう。なら、今は立ち上がり彼を救わなければならない！」

「……………え？…………和ちゃん？」

「レヨヨン…………？」

可奈美の両手を握って、？和は初めて真正面で彼女と向き合う気がする。今まではただ会話するために、向き合うためだった。

でも、今は違う。今度は彼女の心と瞳と向き合う。

「私は彼がお前を簡単に見捨てる人間には見えない。一応彼の幼馴染なんだし…………彼はどんなやつなのかは私にはわかる。きつと折神本家にいると思う。」

もし死ななければ、きつとそこで監禁されている。むしろそう思った

い。

それと、？和個人的にも彼と色々話したいことがたくさんある。

「折神家……………」

柔いの顔になった？和を見て、可奈美は少し呆れた顔でそう呟く。

「ああ…………お前が前に「重そうだから、半分を持つよう」って言ったな。なら今度は私の番だ。」

「お前の半分も私が持つ。だから彼を救い、〃ついでに〃折神紫を討つー！」

「いいの…………？和ちゃんは紫様のことを憎むじやなかったの？」

「ああ…………とても憎んだ。けど、あいつはお前を悲しませて心配させたんだ。どうやってもあいつを連れて帰ってお前と舞衣の前に謝らせてやる。」

大真面目に、それでいて穏やかに姫和はこう言った。照れ隠しなのか何なのか、きつと彼女なりの表現なのだろう。

「……………うっ……………！ありがとう！和ちゃん！」

「おい……………まあ……………今日だけは許すか」

また涙が溢れ出す可奈美は？和を強く抱き締めた。それに対して、いつもこんな行為に拒否する？和は珍しく妥協した。

たまにはあいつのように、可奈美の我儘を聞いてもやる。一応彼女より一年上なんだし。

「ふふっ、ヒヨオンは優しいだな。」

「……………!?!?!／／／うるさい。エレン、ここでの話は話すなよ。でなければ、斬るからな。」

エレンにニヤニヤ見られて、恥ずかしくなる？和は彼女が見たことを他の人に話すなど脅威した。

「はい、地獄まで連れて行きマスから、ご安心グダサイ」

少し冗談のように聞こえているが、彼女は薰よりマシだから、彼女が言わないのだろう。

「……………エレンちゃん、さっきのはごめん。私はエレンちゃんに酷い言葉を言っちゃった……………」

少し？和の胸に泣いた後、可奈美はエレンに向かって申し訳ない表

情でさっきの件で謝る。

彼女はまだ自分を心配しているのに、自分があんな酷いことを……。

「気にしないで、カナミン。貴女はミヤミヤのことを大事にするのがわかっていマスよ。家族だもん。ワタシもグランパとパパとママのことが大好きなので、刀使をやりました。」

「ワタシは家族のことを守りたいから、刀使になったのよ。別に人々を守るためやっているわけじゃないんのデス。」

そう言つて、エレンは珍しく苦笑つた。恐らく、その単純な理由で刀使をやることをずっと気にしているだろう。

多くの刀使は人々を守るために戦つた。だから、大きな志望もなく家族を守ることが理由のエレンがその事をずっと気にしていたのだろう。

「いいじゃないか？ 私は復讐のために刀使をやつた。私よりお前は百倍マシだな。」

「私も最初はただもつともつと色々な剣術を見たくて、手合わせしたくて、お母さんの御刀を受け継ぎたくて、お兄ちゃんの誇れになりたくて、刀使をやつたのだよ。」

「可奈美……お前つてやつは……私より駄目ね。」

「ええ〜!!?」

エレンを慰めるつもりは二人だが、？和はすぐ可奈美のろくでなしの理由で呆れた。

「プツ！ハハハハ……流石カナミンデスね。でも、ありがとう二人とも。」

二人の反応を見て、エレンは思わず笑つた。やっぱり彼女たちはそうじゃなきや、例えミヤミヤがいなくても、元気でいたい。

「カナミン。ワタシも貴女たちの手を貸します。ミヤミヤもワタシの大事な友人なんデスから。」

「うん！ありがとう、エレンちゃん。」

「私からもお礼を言う。」

「いえいえ、二人共もミヤミヤのことを大事そうに見えますから。」

特にヒヨヨンは折神紫よりミヤミヤのほうが心配しそうだから。」

「な……………／＼／＼／＼!?!」

ニヤニヤとエレンは姫和を軽くからかう。そこで顔が赤くなる？
和は急ぎにそれを反論するが、彼女の反応からはバレバレよ。

ー？和ちゃんもお兄ちゃんのことを好きなのかな？幼馴染なん
だし。そんな意識もないとは言い切れないみたいだし。

？和ちゃんはお兄ちゃんのことをどう思っているのかな…………。

？和がエレンの発言に反論するところを見て、可奈美は少し不安そ
うな顔。だって、さつきまで可奈美は自分の恋を気付いてたから。

？和が恋のライバルになったら、その時はどうなる？



お兄さんは大丈夫なのかな…………不安の感覚がずっと胸あたりに
回っている。

簡易ベッドに腰掛けていた舞衣はずっと都のことを心配している。

なぜなら、孝子さんからお兄さんは再び親衛隊の燕結芽と戦った。

前回はボロボロの姿で無事に戻ったみたいだけど…………今回は逃げら
れる確率が少ない戦場で彼女を足止めをする。

どう考えてもかなり無茶の行為だった。

なんてお兄さんはいつも、いつもこんな無茶の行動を取るのかな？

あの時は一緒に逃げられるのに…………

舞衣はずっと彼の行動理由を探る。けど、どう考えても答えが出な
い。それところが、心臓もバクバクしている。

なんでだろう…………なんでこんなにドキドキするのだろう。

「舞衣？大丈夫？」

外から水を持ってきた沙耶香が心配そうな様子で舞衣を覗う。

彼女はさつき舞衣が水が欲しいと聞いて、すぐ水を取りに行った。

「沙耶香ちゃん…………ありがとう、私はもう平気よ。」

沙耶香からペットボトルを受け取り、舞衣は笑顔で返す。

けど、その笑顔はいつもの元気がない。感情が少ない沙耶香でもわかる。舞衣は強がっている。

「舞衣……都のことを心配している？」

「……………うん。沙耶香ちゃんは？」

「私も……でも、舞衣はずっとずっと心配している。」

沙耶香は舞衣の隣に座って、舞衣の気持ちを全部察した。

「うん……お兄さんは私の大事な人だから。それに、彼はずっと無理していたから、いつも無意識に心配してた。」

「うん……それはわかる。都はいつも勝てないはずがない人たちに挑んだ。」

沙耶香は今までの経緯を思い返す、彼は彼女のためはかなり無茶な行動をしていた。

「そうだね……美濃関にでも後輩のために刀使の先輩方々にも挑んだのよ！私と可奈美ちゃんは彼を心配したけど……最後は無事に解決したのよ。」

「そう……？都、凄い。」

この世、刀使に挑む人間は多分彼一人しかない。

「うん。それからは私達を考えて、私達を避け……あれ？」

「舞衣？」

舞衣のおかしいの反応に沙耶香は頭を傾いた。その様子はとても可愛い。

「お兄さんが……無茶する理由って……」

さっきの会話で一瞬何かを思い返した舞衣。

彼女は僅かに都が戦った理由がわかった気がする。

それは、彼女たちを守るために戦ったから。いつもそうでした……。いつも彼女たちのために無茶の行為を取ってしまった。

誘拐の時も、御前試合の時も、可奈美たちを追うときも、結芽の一撃を止めるときも、沙耶香と舞衣を守るために燕結芽と戦ったのも舞衣たちを中心に守るためだ。

だから、心臓がこんなにバクバクと加速するんだ……だって、わか

るんだ。お兄さんはそういう理由でかなり無茶をした。

いつもあんなに優しく、格好良く戦ってくれたお兄さんに舞衣は好きだ。けど、やっぱり無茶するのが受け入れない。

彼女は彼が傷つけられるのが嫌いだ。して欲しくないんだ。

だって……柳瀬舞衣という女の子は彼のことを――

「舞衣……もう考えた？」

「え……？何？」

舞衣の服を引っ張って、沙耶香は真剣で舞衣のことを見つめる。そのおかげで、舞衣は一時に現実へ戻った。

「都、言ってた。ゆっくりでいいから、落ち着いて、自分がしたいことを心の中で決める……」

「お兄さんが沙耶香ちゃんにそんなことを？」

「うん、おかげで言えた。ちゃんと学長を拒否した……そうすると、都は私をあそこから救い出した。」

「そうなんだ……」

沙耶香が言っていることは舞衣が知らない。けど、彼は沙耶香に自由の選択をさせた……だから、あの時も彼女の意願を尊重して、燕結芽と戦った。

「舞衣はどうしたい？」

「私は……」

昔、都が沙耶香に問う質問が彼女から舞衣の方へ訊く。彼女は都と接触したおかげで、ちゃんと成長した。

大事なのは自分がどうしたい。他人に決めつけられるじゃなくて、自分の気持ちが一番なんだ。

都は沙耶香にそう教わった。だから、沙耶香はここで温かいものをたくさん見つけた。これも都のおかけ。

そして彼女は都が自分にそうしたように舞衣を助けたい。

「私はお兄さんを助けたい。今まではあの人に支えられて、助けられたばかりだったけど、今度は私がお兄さんをちゃんと助けてやりたい。お兄さんだって助けられていいんだって気づかせてあげたい！」

「うん。私の剣……よかったら、使ってほしい。」
舞衣のしたいことを聞いて、沙耶香は御刀を舞衣の前に示す。

「沙耶香ちゃん……それって」

「一緒に都を助ける。今度は私達の番。」

小さく笑って、彼女の瞳から決意を感じる。

彼女は戦う理由を見つけた。

今度は彼女が都を助ける。

「……………うん！ そうだね。いつも守れられてたまるものか！ 一緒にお兄さん……うん、”都くん”に教えよう。たまに助けられてもいいって」

沙耶香と同じく立ち上がって、舞衣もやっとな決心した。

もう迷わない。

——私は大切な人を見捨てたりなんかしない。

——お兄……都くんが助けてほしいと思ったら、それだけで私は何度だってあの人を支えて、助けたい。

彼が身の安全を捨てて舞衣を助けてくれても、それは命を救っているだけだ。それでは、舞衣の心が死ぬ。決して本当の幸せではない。

舞衣はただ彼を助けたいわけじゃない。大切な友達と、大切な人と添い遂げたい。

——だって、私は都くんが好きだから。



「どうやら、もう大丈夫のようだね。」

舞草襲撃の翌日に孝子を除いた六人の刀使は再び集合して、お互いの決意を示す。

その前に、薫は他の五人の表情を一目で見た時から心が僅か安心した。

どうやら一晩で問題が解決されたようだ。

「うん。これも？ 和ちゃんとエレンちゃんのおかげだね。」

「ホお〜？ ペツタンコ女のくせによくやるな。」

「よし、すぐここでお前を斬る。止まるじやないぞ、可奈美。」
相変わらず薫の挑発に乗った？和。実は彼女もこの茶番を楽しんでいるのでは？と、あの二人以外の全員がそう思った。

「まあまあ、お兄ちゃんにも？和ちゃんの胸が魅力があるって言ったし。落ち着いて、？和ちゃん。」

「……………次は必ず斬る。」

可奈美の慰めにより、？和はやっと御刀を鞘に収める。

やっぱり前言撤回だ。この人はやる気満々だ。

「サンキュ、可奈美。で、そつちはもう平気？」

可奈美のおかげで事態が少し収まった。そして、薫は次に舞衣たちの方へ確認。

「沙耶香ちゃんのおかげだよ。私はやりたいことでもできた。」

「私も。」

「相変わらず仲良いだな。ちなみに俺も何となく先輩を説得した……………そこで、彼女からの頼みがあった。でも、その前に……………お前たちもあるようだな。」

全員が決意を満ちた目を見て、薫はまず話の主導権を彼女たちに譲る。

そうしたら、可奈美から。

「私はお兄ちゃんを助けたい！大好きな家族を救いたい！」

「私もだよ、可奈美ちゃん。私も“都くん”を助けたい。」

「舞衣ちゃん……………」

二人はそれぞれの決意を示した。けど、そこでエレンから疑問を投げた。

「マイマイ。その“都くん”とは？いつもお兄さんじゃなかったの？」

「うん、私もそろそろお兄さんから卒業したいと思って。もう彼だけを頼っちゃいけないと決めだから。それにー彼は大切な人だから」

「舞衣ちゃん……………ありがとう！」

「ワオ~~~~！マイマイ格好いい！」

「えへへ、ちよつと恥ずかしいけど……／＼／＼／＼／＼」

「これで、一応前へ進んだのか」

「どういう意味？薫。」

「なんでもない。沙耶香にはわからないことだな。」

これで一応皆の共同意識が揃ったか……こつちも都を助けたいと頼まれたからな。ねねもそう頼んだのよ……つたく、好かれているね。あのシスコンは。

「皆さんはどうやら、気持ちが収まったのですね……」

「朱音様！」

そして、穏やかなふわふわの雰囲気になった空間で、突然朱音が入ってきた。

けど、彼女の顔色からは良くないと皆はすぐそれを察した。

「朱音様、どうしたの？顔色が悪いのよ……」

「もしかして、酔っている？」

「バカ言うな、可奈美。」

「朱音様……大丈夫？」

皆がそれぞれの反応で彼女を心配している。そうしたら、彼女はただ一言で「まず、奥で説明するから、こちらへ来てください」と言い。顔色からは相当良くないように見える。

——何か悪いことでも起きたのか？

全員は心を絞って、朱音についていく。

そこで、彼女たちは五箇伝の美濃関と平城と長船が刀剣類管理局に強制捜査されたことを知った。

舞草襲撃の悪夢がまだまだ終わっていないようだ。

第24話：明日への決意

美濃関学院――

「なあ！服部、これはどういうことだ？」

朝のホーム時間から数時間経ち、服部達夫は警察からの調査からようやく解放されたところ。鍛冶科二年生の生徒たちはすぐ彼のところへ行き、不安そうな顔で尋ねる。

「なんて刀使たちと関わっていない俺達は警察の捜査を受けなければならぬのだ！」

「それに、なんで警察はいきなり学校に強制捜査をするの!?怖いよ！」

「俺達は何もしてないよな？」

「落ち着け、お前ら。事情はよくわからないが……とりあえず、俺達の無実を証明してくれば、警察はこれから何もしないはず。」

そんな彼らを慰める服部は平穩の息で向う。こんな突発状況はできるだけ冷静しなければ。

「そうだよな！俺達は別に怪しいことでもしてないよな？」

「うん、うん！きつとそうだよ！」

「でも、さっき新聞を見たのよ……うちの学院は大規模テロの疑いで各県警に強制捜査されたのよ！なんて平和の美濃関はテロの疑いに被られているの!？」

三人の一人はまだ凄く不安そうな顔だ。そして彼の口から出すのは事実。

今朝から美濃関はその理由で警察に強制捜査された。本来は刀使たちだけが疑われているが、突然なんの関係もない鍛冶科も突入された。

今朝からはずっと調査されて、全然仕事や授業がやってられない。学長も警察たちに連れされた……最悪。

こういう時は「あいつ」はどこに行った！彼なら絶対無理でもなんとかしてくれるはず。

あの人がそばにいないせいで、服部もかなりイライラの状態。

「わからない、とにかく落ち着けば何もなく終わるに決まる。」

「まさか……『衛藤』の野郎は何かをやらかしたのか!?最近全然姿が見えないんですけど……」

そして、三人の一人は唐突にあの人のことを口に出した。それを話題に他の二人も次々と話す。

「中等部の彼の妹 可奈美とあの柳瀬舞衣も行方不明のまま……」

「まさか……あの三人はテロのー」

「それはないだろう?衛藤はそんなやつじゃないですよ。シスコンだよ!それに妹さんもすげえ可愛かったし。兄の前にあんなに浮かれているだぞー!」

「でもあの衛藤だよ!高等部の刀使にも喧嘩を売る美濃関随一の大馬鹿さん!それに、妹の方も色々面倒ことをしたのよ!可愛いけど!」

「まさか……御前試合でご当主様と手合わせしたの!?あの衛藤の妹ならあり得る……」

「確かに、あれからあの三人は戻ってこない。」

「やっぱり衛藤の野郎はいつも面倒ごとを起こす災厄だよ!学院内でも無茶のこともー」

「いい加減にしろ!……衛藤はそんな面倒を好きそうなやつじゃない!お前らもちやんとわかっているんだらう!」

この状況を見てられない服部は少し怒っていた。都と一番仲良くする男性の友人は彼一人だった。

「それは……そうですけど。」

「………なら、彼は一体どこにいるの?早く戻ってくれよ!でないと、俺らようなバカは何かをしようかわかんないよ!」

「うん……よく考えれば、彼がいけないときはそんな不安になるとは……そのせいで、冷静が失った。」

三人は不安そうな顔。

どうやら衛藤の存在は彼らにとって柱のようなものだ。それもそうか……彼は鍛冶科一番強いやつ、高等部の中に一番強い男。そし

て、一番頼れる男だ。

なのに、関心な時はこの場にいない。

まあ、きつと妹の面倒を見るため何処かに走り回ったのだろう……無理し過ぎで、倒さなければいいのだけだ。

「とにかく、彼が戻ってくるまでは、何とかこの場から乗り越えよう！でないよ、彼はあのムカつくの顔でお前たちを嘲笑うのよ！」

「それは絶対嫌だ！」

「あの野郎のその顔を見たくない！」

「クソ！あいつはとんでもない強いから、殴れないよ！」

不安の後輩たちを慰めながら、服部はあの馬美濃関のシスコ鹿のことを心配している。

知り始めから彼が相当無茶なことをする男だと知った。後輩の件も精一杯手助けした、おかげでふたばも笑顔で学院生活を楽しんでいった。

けど、その代償も大きかった。彼は美濃関では悪名が高い人物であり、刀使科の高等部クラスに行けば、彼の悪い噂が天井までに飛んでいく。

本人は気にしてないけど、彼の仲間としては見過ごせない。だから、あの時は彼の妹とその妹友に彼のことを託せた。

「ははは、そうならないように何とかこの場から抜き出すよ！俺達的美濃関は俺たちが守る！」

「おうー！！！！」

彼らの士気を上がり、服部はいつもより積極的にやる気が出る。

彼の代わりにここを守らなければ。あいつがボロボロになって疲れる時は、帰る場所が必要なんだろう？なら、ここはその場所だ。

大事な妹とその妹友を守り尽くし。すべてが解決したら、ここに帰れ。お前のうちはここにいます！

ー待ってるよ、衛藤。



同一時刻――美濃関腹地。

「大丈夫……衛藤先輩なら、大丈夫！」

自己に元気をつけようとするなのか、長江ふたばが自分の御刀を特祭隊に提出した後、ブツブツと呟く。

彼女は御前試合決勝戦を見届けた可奈美の友達から可奈美がご当主様を襲う襲撃者と共に逃げたことを聞いた日以来、ずっと彼女のことを心配している。

別に彼女と仲が良い友達関係じゃないけど、一応彼女は美炎の親友だから、彼女のことを友達だと意識している。

そして、彼女が最も心配するのは彼女の兄――衛藤 都だ。学院内悪名高いシスコンは決して妹を放っておけるわけがない、きっと無茶なことをして、彼女を守るのだろう。

都の素性を知り尽くした一人として、彼の無茶苦茶の行為はよく知っている。だから心配していた。

そして、数日前で本来学院に戻るはずの柳瀬舞衣が失踪した。そのことでこの心配する気持ちはますます増えた。

どっちでもあの人の大切な人。きっと今まで以上の無茶なことをやるのだろうか……心配だ。

でも、さらなる心配は美濃関がテロ行為の疑いで警察の人たちに強制捜査をされたこと。これはどう見ても、普通じゃない。

そして、可奈美たちとの関係性はないとは限らない……ううん、絶対関連があるに違いない。

あの美濃関随一の迷惑をかけるのが得意の衛藤兄妹なら、今でも面倒ことに巻き込まれて、この場面を作ったのだ。

……本当に、迷惑なんだよ。あの二人。

けど、無事において欲しいとふたばは心の中にそう願っている。

なぜなら、中等部の誰でも可奈美とその兄のラブラブ交流が好きだから。

「だから無事に帰ってきて、美炎も先輩のことを待っていますから……」

この場にはいない美炎と代わって、ふたばはそう祈っていた。



同一時刻・鎌府女学院学長室――。

「長船、美濃関、平城の刀使の帯刀権の一時的な剥奪、武装を解除しました。また、折神朱音の行方は海上保安庁が全力で……」

「……糸見沙耶香と柳瀬舞衣と衛藤 都の行方はどうなっている？」

鎌府女学院職員からの報告を遮った高津学長はあの三人の安否をまず第一に尋ねていた。

「以上の三人方たちは現在鋭意捜索中とのこと……」

「甘い！海自にも圧力をかけて捜査させなさい。」

それを聞いた高津学長は海自にも圧力を掛けてでも協力させるように指示していた。

「ですが……」

「これまで我々がどれだけ連中に貸しを作ってきたと思う？それに、むしろ今まで静観して来た奴らの防衛力とやらを見せて欲しいものだと思わんか？」

高津学長は若干苛立っていた。彼女はまだ叛逆者の二人を許していない。特に衛藤 都はあれだけの屈辱を彼女に与えたから、死ぬほどの痛みと苦しみを与えないと気分が済ませない。

「ハッ……失礼致します！」

そのことを理解した鎌府女学院職員は、足早く部屋から退室した。そして、学長室に一人残った高津学長は指先を噛みながら一人事を呟く。

「沙耶香……あなたの居場所はここだけなのよ……決してあの男に奪うものか！」

「……………」

けど、その言葉はちょうど扉の外にある誰かに聞こえた。

◇

「反省の気がないですね……あのババア。」

学長室の前に竹島 雅は盗み耳をしていた。彼女は一応「結果」を確認しに来たのだから。

「幸い、衛藤 都に関する情報が全部私が事前に受け止めた。が、まさか彼がああ燕結芽と戦うとは……流石英雄様だね。」

扉から離れ、彼女は昨日深夜で耳に入った情報を思い返す。

ただ一夜で舞草を壊滅する情報は彼女の眠気を一気に覚ました。舞草は全国に広がっている対折神家の叛逆組織である。

情報専門の彼女も多少この組織のことを知っている、そして足も中に入っていた。まあ、正式に入るのは数日前の沙耶香の件で、舞草と関わったけどね。

入る条件として鎌府の情報提供と偽り情報を鎌府の邪魔にする。これくらいの情報操作は彼女にとって大したことではないので、それを交換条件だけ……まさか、ただ数日で組織が壊滅するとは……。

流石ご当主様……いや、何処かの偽りの何かという方が正しい。だって舞草の情報コントロールは完璧のものだ。向こうから連絡しなければ、絶対にその組織の動きを掴められない。

なのに、ご当主様は何かしらの方法で組織を見つけて潰した。さらに、早速五箇伝3つの学校の封鎖は見事の一手という。これは長年の計画じゃなければ、実現できないこと。

これまでの計画なのに、情報一切こっちに振ってこないのが怪しい……いや、例え情報を探るとしても見つからない。

ご当主様は一体何者なのかな……？自慢ではないが、情報収集とコントロールは私以上に回すものがない。

例え20年前の大英雄でも、そこまで万能ではないはず……。

「とにかく、折神家の動きを注意しながら、英雄様の居場所を探しま

すか！」

実のところ、雅はまだ都の居場所を捕まっていな。彼女が知っているのは彼が重傷で綾小路武芸学舎に一時に転移されて、それ以後の情報が途切れた。

「まずはしばらくの休暇だね。みなきさんに私の職務を代わろ！少し心配だけど……鎌府のほどんとはババアの言うことを聞く人間なんだから。」

そう決めて、彼女は早速秘密行動を始まってしまおうと――

「――！？」

その時はちょうど奇妙の現象は日本全土に広がり、刀使たちのみはその現象に影響されていた。

この現象はまるで幽体離脱のように、自分が身体から離れている謎の現象。

「これは……かなりまずいわね。」

第一反応に彼女はすぐ事態のヤバさを理解している。

これは「決して普通ではない」だと。

◇

奇妙の現象が起きる数分前・舞草逃亡用潜水艦内――

可奈美たちは朱音たちから今の現状を聞いて、六人揃って寝るところに戻ってそこで沈黙する。

美濃関、平城、長船が封鎖されて、学長さえも連れ去られた。さらに各地に潜伏中の舞草の人たちも身動きが取れない。

絶大の絶望感に抑えられた彼女たちですが、舞衣だけは決心が揺るがない。

「私は……やっぱり都くんを助けない。」

「舞衣ちゃん……」

「舞衣……」

「お前、状況をちゃんとわかっているのか？もう打つ手がないです

よ。」

「ね……」

舞衣の決意にペットで横にする薫はわざと彼女と対論する。

「それでも助けます。前からはもうたくさん助けられたのだから、今度は私が彼を助けます！」

自分の決心を示して、彼女は？和に向けた。

「十条さん。私は、前からあなたに戦い理由がないなら戦わないほうがいいと聞きました。確かに、それを聞いたあとの私はこの戦いに参加する理由が見つけれなかった。理由がないなら、戦わない方がいいんじゃないかとも思ってた。でも、気づいたの。」

以前、姫和から受けた提案だ。可奈美と姫和にはタギツヒメと因縁があり、薫とエレンには舞草としての目的を遂げる理由がある。だが、舞衣と沙耶香は結果的に舞草と関わりを持っただけだ。タギツヒメと強く敵対する理由はない。迷いを抱えたまま戦うくらいならいつそのこと関わらなければいいと。

「私には全ての人を救う力はない。でも、目の前で大切な人が傷つくのには堪えられない。だったら、目に見える範囲の人たちくらいは何とか助けたい——助けられるって思ったから。だから私は……」

言葉が途切れる。舞衣は一度唇を引き結び、再び開く。

「都くんを助けます。何があっても彼を助けたいのです！これまでに散々に助かれましたから、今度は私が彼に助けられてもいいって伝えたい！」

「……………そうか」

姫和は表情を崩すことなく簡素な返答をする

「……………うん、やっぱり舞衣ちゃんは強いな。そうだね、何を決心を揺れるものか！お兄ちゃん私の大事な家族だもん！何かあっても助けたい！」

「私も、たくさん暖かさがもったから……彼を助けたい。」

一度絶望感に抑えられた可奈美と沙耶香ですが、舞衣の決心に染まられて同じ決心を示した。一方、薫、エレン、ねねは……

「俺は一応先輩に頼まれたからな。それに、ねねも口うるさくて彼

を助けたいと言っていた。」

「ねねーっ！」

「ワタシもデス！理由はカナミンとヒヨヨンとこの前に言っただけ、ミヤミヤはワタシの初めての異性フレンドなんですから、どうしても助けたいのデス！」

「みんな……ありがとう！」

迷うことなく承諾してくれた。そうなれば、自然と全員の視線は目を閉じた？和に収束されていく。

「………？和ちゃん。」

「言うまでもないでしょう、可奈美。お前の半分を持ちたいのは本気です。それに、お前を悲しませて、心配させたあいつに説教したいだし。」

そう言つて、？和は目を開き、柔らかい表情をみんなの前で示した。それは、つまり彼女もついていくということ。

「？和ちゃん！ありがとう！」

「来るな！抱いていいのは昨日だけだ！」

また？和に抱きつこうとする可奈美に、彼女は速やかに回避する。よく見れば、彼女の顔は僅かに赤く染まる。

「これで六人が共同意識を揃っているな。ならば、早速朱音様に俺達の決意をー」

薫がそう言っている間に、突然奇妙の現象が起こり。全員が幽体離脱のような現象に襲われた。

「こ、これは……!?!」

「私が身体と分離された!?!」

「………」

「what!?!」

「ねっ………」

「なんだ……これは……」

当然のところ、全員はこの奇妙の現象に驚かされた。あまりの唐突の事態だから、全員は混乱している。

いや……全日本の刀使や元刀使たちにもその現象にも襲われて混

乱している。まさに大事態だ。

「朱音様……朱音様に聞いてみる！」

そして、この場に一番行動を取るのは可奈美。直感だけど、折神家の人間たる彼女がきつとこの現象を知っているはず。

「私も行くー！」

「全員行くぞー！」

まだ混乱しているが、五人は可奈美についていく。

そこで、同じ現象に襲われた混乱している累と冷静いられる朱音と他にも起きなかったフリードマンが部屋に座っている。

「朱音様……これは……？」

「始まってしまった……20年前と同じ現象を」

「それって……」

「ああ……これは大荒魂の復活の前兆だ。」

可奈美たちの疑問にフリードマンが朱音の代わりに答える。

「ーいよいよ、行動し始めたのか……禍神^{まがかみ}よ。」

◇

「これは国家レベルの災害です。一刻の猶予もありません。この事をすぐにでも人々に知らせなければ！」

「けど、どうするんですか？」

奇妙の現象が終わり、朱音はすぐ決断を下す。このままでは日本は大荒魂によって滅ぼされる。一億を超えるの死傷者が必ず出るのだろう。

「まっすぐ横須賀へ向かって下さい。報道陣を集められれば、私が全てを話します。折神家が隠していたことを、タギツヒメのことを全て」

朱音は何が起ころうとも自分の姿を曝し、自らが知っている全ての真実を明かそうとしていた。

けど、それは最良の策とは言えない。リクスが高すぎる。

「……それが明らかになれば、最早この国だけで済む問題ではなく

なるかもしれないな。だが、折神紫がそれを許すとは思えん。最悪の場合もあり得ます。」

紫の中に居るタギツヒメが黙って見ているだけとは思えなかったフリードマンは、朱音を制止しようとする。きつと、この場にいらない都くんもそうするのだろうか。

「私に何が起きようと、舞草には協力者がたくさんいます。」

しかし、朱音はそれで黙って言うとおりにせず、行動しようとする。

「駄目です！朱音様の代わりはいません！」

「逆に言えば、貴女さえ無事ならチェックメイトにはならない。」

「ですが……！」

累も朱音を制止する方に加わり、どうにか朱音を抑えようとする。

そして、数秒の沈黙に？和からこの沈黙を破る。

「…ならば、横須賀から私達は別行動をとります。折神紫の中に潜っているタギツヒメを討てば全てが終わる」

姫和はそう言って、他の五人も次々に自分の決意を語る。

「それに、ミヤミヤもきつとそこにいます。」

「うん、何にせ可奈美の親族だし。いざという時は利用して、我々を脅かすのだろう。そうされる前に奪い返さなければ」

「都を、取り戻したい。」

「私も……大事な人を取り戻すために、折神家と戦います。」

「なんだか、紫様は、ついでに」になったのですけど……私もお兄ちゃんを取り戻して、紫様の中にあるタギツヒメを斬る！」

「うん……私はいつこのことを信じる。彼が折神紫をいやつだと思っていたなら、私は中にいるタギツヒメを討つのみ！」

あいつは私の選択を尊重してくれた。折神紫を討つか、タギツヒメだけを討つか……私のありのままに、背中から優しく押せられた。

ならば、今度は私がいっつの信じていることを尊重する。

「貴女たち……」

六人の刀使は決意の目で朱音たち三人に示す。

彼女たちにとって取り戻したいのはただ一人の男だ。

「全く……都くんは幸せものですね。六人の女の子は彼のことを相

当に大事するとは……男としては嫉妬するよ」

「ふふっ……そうですね。古波蔵さんと益子さんはともかく他の四人は前からそう感じています。」

冗談を言うフリードマンと微笑みで可奈美たちを見る朱音。

「まあ……家族だし／＼／＼」

「一応彼とは幼馴染関係だし……／＼／＼」

「大事の人ですから／＼／＼／＼」

「うん、大事。」

そこで、沙耶香を除くデレデレ反応を取る三人。あれはどう見ても、“あれ”ですよ。

一応乙女心が残っている朱音にとって、これは大人にしてはやらなければならぬこと。彼女たちを応援したい。

「わかりました。でも、せめて手伝わせてください。貴女たちが戦えやすいように、できるだけ多くの敵は私が惹きつけます。」

「それって……」

「ええ……さつき話したことです。いいですね？フリードマンさん。」

「孫娘がそうしたいなら、私は異論なしだよ。」

「グランパ……」

「そろそろ私達だけではなく、家族以外の人も守れ、エレン」

「うん！ありがとつグランパ！」

嬉しく笑うエレン。彼女の笑顔は何より眩しい。

「ところで、どうやって折神紫の元へたどり着く？」

不意に薫が一番大事の事を聞かれた。

「え？それは……確かに重大の問題だよね……」

言葉に詰まる舞衣。確かに、移動手段はまだ考えなかった……。

「……ねえ。アレ、使えないかな？」

舞衣の代わりに答える可奈美。

「……アレって何だ？」

しかし、抽象的過ぎる可奈美の答えに薫は何を言いたいのかわからなかった。

「ええと、その、S装備のコンテナで屋敷まで飛ばしてもらおうのが良
いかなって思ったから……。」

「え……………」

可奈美の意外な返答に一同は驚くとともに、一筋の光明が差したか
のような気持ちになっていた。

「S装備のコンテナを使って折神家の屋敷に乗り込むとは思いつか
なかった。だが、可奈美くんがそれを思いついてくれたお陰で紫を倒
すことができるかも知れん。」

フリードマンは素直に可奈美の発想に称賛する。

ミサイルのような速度なら、確か最速の移動手段になるかもしれ
ない。そして、S装備もついにつけられる。流石、都くんの妹。そ
の発想は兄に劣つてないようだ。

「ならば、早速その準備を。それと、姉のこともよろしくお願いし
ます……十条さん、衛藤さん。」

頭を下げて、朱音は誠意の姿を彼女二人に向き合う。

「うん、朱音様のためにもあの人を解放します！」

「……………うん。わかりました。」

朱音のお願いする態度から、彼女が紫を姉として愛することを感じ
た？和も謹んで彼女の頼みを引き受ける。

自分の母の仇は折神紫。

どうしても復讐したい対象。けど、そんな彼女を愛する人も存在し
ている。彼女のおかげで出会った仲間がこうしてそばにいる。

彼女を憎んだが、感謝する気もある。ならば、できることはただ一
つ、折神紫を殺さずに体内にある大荒魂を倒す！

これは彼女十条、和が選んだ選択だ。

お前のおかげで、私は少しでも変わった……だから、説教と共にあ
なたに感謝の意を伝えなければ。

ーだから、死ぬなよ。都。

第25話：希望

夜、作戦指揮部――

「お帰り、寿々花。彼の様子は？」

「幸いのところは平穏というところかしら？安らかに眠っている顔は可愛かった。」

親衛隊第一席獅童真希は作戦指揮部に戻ってきた同じく第二席の此花寿々花を迎える。

彼女はさつき第五席の衛藤 都の安否を伺ってきた。彼は現在折神本家に治療の名目で折神家に監視されている。

今だに意識が戻ってこないのですが、彼の實力は親衛隊の二人でも手を抜けないほど手強かった。噂によると、彼は結芽との対決で十分間以上に戦った。

傷が負われたのはほとんど彼ですが、それでも写しなしの状態で結芽とあんな長時間で戦うのは、お二人の想像に越えた。

あまりにも異常な強さ。これは第五席が隠した本当の力。唯一刀使と対抗できる一般人。

「それは僕も見てみたいな。とはいえ、彼が無事で良かった……さつきの『妙の現象』で機械も影響された。もし、彼の生命維持装置も影響されたら、危ないのかも。」

「そうですね……。今は平穏の状態ですけど、意識が戻ってこない限り油断が禁物ですわね。」

特に昨夜は危なかった、結芽の斬撃により傷口はどれも酷かった。お医者さんたちも彼が生きられることはまさに奇跡のようだ。

それだけ結芽がどれほど真面目なのかはわかる。本人はまだ全力を出せないと言っていたか……。

やっぱりは敵の戦力として非常の脅威になる。味方にすれば、凄く心強いというのに……。

今になって、獅童も都の勧誘を諦めた。彼が舞草と関わった以上は、もうそつちの人間になるという話。

「それより、寿々花。さつきから舞草から変な情報が来た。折神朱音の投降要請が……」

「え？今更そのようなことをして、何になりますの？」

獅童からの情報で早速考え込む彼女。彼女が知っている折神朱音はどんな状況でも諦めない人だと知っている。

だから、普段と違った行動を取り出す朱音に対する疑う態度の寿々花であった。

「それと、さつきの現象といい。一体何かを起こっているのかしら。」

機械が一時に妨害されて、彼女たちの身体に起きた現象について、寿々花はまだ答えを出せない。

唯一出せるのは異常事態という形容しかない。

「すぐ判断を掴めないな……とはいえ、折神朱音を無視することもできないし、衛藤 都はいつ目を覚めるかはわからない。」

「ふふつ、主に我々を脅威するのは後者ですかね？」

「うん。寿々花さえも彼の本意を掴めない限り、彼の動きを予測するのは難しいから、彼が何かをしようか全くわからない。」

結芽の遊びから逃げられるほどの実力、彼女の足止めをできる実力。今だに衛藤 都の脅威は彼の妹と同様レベル。

「悔しいけど……そうですわね。でも彼は案外に単純な人ですよ。」

「そうですね……本当に惜しい人材だ。」

駄目息を吐いて、都が仲間になれなかったことに残念と思う獅童。

彼はただ妹思いのいいお兄さんなのに、立場が違ったその結果はこうだ。

「それで、ここで待機するの？」

「うん、流石に彼を放っておけないしね。折神朱音のことを高津学長に任せろ」

「わかりました。高津学長に連絡を」

寿々花が獅童の判断を信じて、連絡役の人員に命令を下す。そうしたら、すぐ「はい」と実行しているが、彼から「高津学長は既に行動を取り出し、横浜港に向かっていると報告が来ました」との報告。

「行動が早いな……」

「そうですね……でも、なんか嫌な予感がしてきましたわ。あの人のことを聞かれるとそんな気がしてきましたわ……。嫌味なのかしら？」

「それは……時々、僕もそう思う。」

親衛隊二人は高津学長に同じ印象を持っている。正直、衛藤 都が前に柳瀬舞衣を庇うために、やったことは気持ちよかった。少しやりすぎただけど……。

◇

「そっか、六人で行くんだ。」

真白の神社の階段に可奈美と衛藤美奈都がそっちに座っている。

「うん、みんながお兄ちゃんを助けるって言ってくれた。」

「意外にモテモテだね。我が息子は……にしても名前は『都』か……いいセンスだな。未来の私。」

「うん？ どういう意味？」

「なんでもない。それより、紫は強いよ。」

立ち上がり、話題を変える美奈都は可奈美に最低の警告をした。

彼女は一応自分と箒と長年戦った三人組なんだから、どんな荒魂が現れようと、負ける気がしない。

でも……可奈美の口から出る情報は、タギツヒメは違う。紫と三人かかっても勝ってない相手……。

そして、可奈美はこれからそんな相手と戦う。

母親としたの感覚がないが……彼女は可奈美を死なせたくない。

「分かってる……御刀を持つてるところを一回見たから……」
ただの一回でわかる。？ 和の三段階迅移攻撃を簡単に防げた。正直、化物レベル……。

だから、みんなで行く。でないと、勝算がない。

「そっか、まあ強いついていってもわたし程じゃないけどね。」

「え、自分で言うそれ？」

「あつ、信用してないな?この〜」

そして、可奈美は久々に自分のお母さんとお互いに笑っていた。こういうのも懐かしい……昔もお兄ちゃんとお母さんと一緒に笑いながら遊んでいた。

そういえば、まだお兄ちゃんのことを好きということをお母さんに伝えてなかったっけ?

「ねえ……お母さん。私はお兄ちゃんのが好き。」

「ん?何それ?仲がいいのは私でも知っているよ。」

可奈美が伝えたいことをまだわからない美奈都が頭を傾く。

「違う、違う。何というか……私はお兄ちゃんに……恋しちゃったの／＼／＼／＼／」

顔が赤くなる可奈美。こういうことをお母さんの前に言うのが結構恥ずかしい。

特に相手は実の兄。そんな身分の人に恋をするのは恥ずかしくて、怖くて、迷っちゃいます。

だって、この恋は決して実現できないもん。

「……………えええええ!!マジ!?今更気付いたの!?!」

そして、美奈都がそれを聞いた反応はめっちゃ驚かされているが、その反応からまるで特に知っていたような。

「気付いた!?!お母さんは私がお兄ちゃんのことを好きと気付いたの!?!／＼／＼／＼／」

「うん、特に前から。」

うわあああああ!!恥ずかしい!!

まさか、前々からお母さんに気付かれるとは……うう……心臓がバクバクと熱くて、顔も熱い!

顔を両手に隠して、可奈美は人生一番恥ずかしい時が来た。そして、その乙女様子の可奈美に美奈都も思わず「今まで一番可愛いのか来たのね……」と感想をつける。

「まあ、可奈美も好きな人ができたから、それは良かった。」

「うう／＼／＼／!!お母さんは反対しないの?私はお兄ちゃんのことを好きなのよ。実の兄に恋をする妹なのよ／＼／」

まだ赤面でいられる可奈美はマジ可愛かった……そういう乙女のような顔は滅多に見えないから、あんなに可愛かったのかも。

「それはどうした？好きなんでしょう？彼のことは」

「うん……大好き／＼／＼／＼」

「なら、それでいいじゃん。恋したから、仕方ないと思う。それに……重要なのは、可奈美が彼と一緒にいることが幸せ？」

「幸せ！剣術と同じ……ううん、それ以上かも／＼／＼／＼」

美奈都の質問に可奈美は迷わなく答えた。しかし、すぐまた恥ずかしくて顔を隠す。

本当に何なのよ、この可愛い生き物は。

「なら、お母さんがやることはただ一つ。娘の恋を応援すること。まあ、と言つても、すぐ忘れられたし……」

「あ……そうだね……この会話も夢から覚めたら、全部忘れられる。」

「まあ、私だけか覚えれば、それはいいけどね。自分の幸せを掴め。可奈美。」

可奈美の頭をなでなでする美奈都。

なんだか……久々に頭が撫でられた気がする。そして、お母さんのその目もとても優しく、懐かしい……。

「そろそろ時間だね……。可奈美、絶対に都を取り戻して自分の幸せを取り戻すのよ、貴女は私の自慢のー」

白い霧がこの空間を包み込んで、そうしたら可奈美はここから目を覚ました。

「可奈美ちゃん、そろそろ時間だよ。可奈美ちゃん！」

「ん……おはよう……舞衣ちゃん。」

「そろそろ作戦実行の時間だよ。起きて」

「うん……」

何か良い夢を見ていた気がする……すごく気分が良かった。

それより、もうすぐお兄ちゃん奪還作戦が始まる。気をしっかりしなきゃ！

◇

「みんな、そろそろ横須賀だよ！準備はできた？」

もうすぐ目的地に着くところ、累はみんなの調子を確認する。

そうしたら、舞衣は「はいっ！」と鋭い目つきで答え、可奈美達は御刀を携えていた。

全員はいい顔をしている。

「ねえ！大荒魂を倒したらみんなで何処かおいしいもの食べに行かない？」

可奈美はこの戦いに勝利したら、みんなで何処かへ美味しいものを食べに行こうと提案した。

とても女の子らしい提案ですが、そういう死亡フラグのように聞こえる。が、累も薫もちちゃんと空気を読んで可奈美の提案に乗る。

「そういうことなら、私がご馳走してあげる」

「ホおお〜大人の余裕。」

「カツコいいデース！」

「ねっ！」

そして薫、エレン、ねね二人と一匹はとてもワクワクしている。無料のものは一番美味しいというのは彼女たちおかしいの偏見。

まあ、無料に反応するのは女子の本能でも言えるでしょう。

「やった!?和ちゃん、デザートはやはりチョココメントアイスだよね!?」

そして、同じくワクワクする可奈美は隣の？和と会話する。

「コース料理確定かよ。」

薫は可奈美の発言を聞いて、突っ込む。

「人をチョココメントアイスがあればいいみたいに言うな」

最後は？和が可奈美の発言に突っ込む。

別にチョココメントアイスがあれば、なんでもいいわけじゃないと主張する？和。

確かに、チョココメント以外のアイスも食べた気がすると思えばそう思い返した。

「ふふ……皆、無事に戻ってきてね。美味しい店を探しておくから」
そんな仲良い光景を見てた累は思わず笑って、こう言った。きつと
この子達なら大丈夫だろう。

「はいー」と全員は元気よく答えた。この人のためにも、朱音様やこ
の場にはいないみんなのためにも生きて勝つんだ。

「十条さん？」

ふいに姫和が近付いてきたことに気付いて姫和の苗字を呼ぶ舞衣。

「お前が全体の指揮を執ってくれ、お前の指示があればきつと都の
ところと折神紫のところとに辿り着ける。」

「え!？」

「お前にはその力がある。孝子先輩達もそう言ってただろ？」

「十条さん……」

「姫和でいい。『舞衣』、後ろは任せだぞ。」

「うん。姫和ちゃん!」

舞衣と姫和は楽しそうに談笑していた。

それを見て、全員は微笑ましく思う。だって、?和は珍しく人を頼
る。

ー舞衣、良かった。

そして、また何かを満たされていた沙耶香は舞衣と?和が仲良くで
きることにについて良かったと思ってた。

そして、間もなく。折神家急襲作戦ー別名・衛藤 都奪還作戦が
始まる。



今夜の横浜港はいつもより賑やかになっていく。

ここに住んでいる住人たちもマスコミの人たちと一緒にこの大事
態を見届けるつもり。

けど、よく見れば、周りで警戒している刀使たちとS T Tがたくさ

特別祭祀機動隊

んにいる。彼らはずっとある女性の出現を待っている。

「見ろっ！潜水艦だ！」

ある男性の叫びと共に、全員はあそこ……潜水艦の方へ向かう。ゆっくり横浜港に近づく黒い鉄の一部が水面に移動し、ある距離に止まった。

「どうやら計画通りに来たのね……折神朱音。これで、そちらも動き出せるでしょう。」

潜水艦が止まるところを見て、さつき叫ぶ男性はすぐある女性にメールで連絡する。

「見事に視線を転移させた。あつちは気をつけて、親衛隊の影を見えなかったから、恐らく折神紫の護衛なんでしょう。」

『うん、折神朱音様の護衛も頼みます。こっちは学院で機密情報を手に入れたあと、調査隊の人間と一緒に突入し、衛藤 都の身柄を確保する。』

「わかりました。朱音様の安全は我々に任せよう」

そう返信して、男性はスマホを収まる。

「さて、竹島依頼人の頼みで仕事をするか。人を救うのが得意ではないけど……相手を制圧するのは我々の商売武器です。」

ブツブツ言って、彼は狙撃手のところを探りながら、潜水艦から現れた若き女性をたまたま見た。

結構可愛い女性ですね……。なんか、今日はやる気が出せる気がする！

一目から折神朱音に惚れた男性は裏世界の人間。彼の腕はかなり有名で、だから彼は依頼されてこの女性を守りに来た。

さて、可愛い女性に手を出す野郎、俺がきちんと始末してやる。

黒夜に染み込んで、彼は行動し始めた。



「みなさんっ！私は折神朱音です、私の話を聞いてくださいっ！」
朱音は、報道陣にも聴こえるような声を出し。その声と言葉にマスコミは「折神朱音!」「本当か!？」という様々な反応をし、刀剣類管理局の局長である紫の妹が非人道組織と云われている舞草に所属していたことに皆が驚いていた。

「なぜ、マスコミがここにいる!」

ちょうどそのとき、鎌府の学長もここに到着した。

「どうやら一番釣れられそうなターゲットも予測より現れたと朱音が彼女に一目を見て、すぐ正面で演説し続けた。

「今、この国には大きな危機が迫っています!20年前、いえ、それ以上の災厄が起ころうとしているのです!」

「二十年前の災厄の元凶、大荒魂は再び蘇ろうとしています!…刀使のみなさんは感じていたでしょう?先程の不思議な現象を、それは大荒魂が現れる前兆です!最早一刻の猶予もない!!」

その言葉に雪那は眉をピクリと上げる。過去の経験から、もしや敵は他にいるのではと勘ぐり、鎌府の刀使達にも動揺が広がっていた。

「どうか皆さんのお力をお貸しください!!」

その言葉と同時に潜水艦のハッチが六ヶ所開いた。それに雪那は気付くが時既に遅く、六つのS装備のコンテナは打ち上げられていた。朱音には一筋の希望に見えたことだろう。

「これは攻撃ではありません!今飛び立ったのは私達の希望なんです!」

「クッ!やられた!急いで帰るぞ!」

自分が釣られたことを気づき、高津学長は怒りを呑んでヘリの方へ歩く。そして、急いで折神家に戻るとする。

「皆様、どうか…無事に戻ってきてくださいね。」

空に打ち上げたコンテナを見て、朱音は彼女たちの無事を祈っていた。



狙撃手を見つかるのが難しいではなかった。特に国家の軍人や警察にはいくつの悪い癖がある。

それを知っていれば、位置を判明することは難しくなかった。

だから、男性は息と音を最低限に消して、速やかに位置を確定し、狙撃手のあるところに向う。

「見つけた……お前らも指定位置にも到着した？」

仕事仲間を連絡し、男は麻酔弾を銃の中に入れる。

『我々を舐めないで頂戴。こういう暗殺……じゃなかった、始末は得意です。』

「言い直してないじゃん！殺すなよ！でないと、依頼の報酬は手に入らないから」

『それにしても、あれは折神朱音か……美人じゃん！』

「彼女に手を出したら、ぶっ殺すぞ。」

『わかったよ……ジヨル。お前、浮かれてない？』

『もしかして、好みのタイプ？うわあ……キモい。』

「うるせっぞ！仕事に集中しろ！」

仲間のからかいに頭が痛くなるジヨルは通信装置を閉じる。再び望遠鏡で朱音の方へ見つめる。

凄く綺麗で、冷静で、勇敢で、優しい人……。その先向くのはこの国の人たちが大荒魂に脅威されて、心配しそうな瞳だ。

そんな人間の目は長年に裏世界で生きているジヨルには初めて見た。

ジヨルにとって心配は余計の感情だと思ってた。だって殺される確率が上がるから。けど折神朱音を見て、その考えがなくなってしまう。

この世にはあんなに美しく、勇敢の人間がいるなんで……今まで一度は思ってたかった。

ジヨルにとって、彼女はキラキラした宝石みたいのものです。見るだけで、いい気分になりそう。

だから、彼女を守りたい欲望も現れた。

それから数発のミサイルのようなものが潜水艦から発射されて、よく見ればあれはS装備のコンテナだ。

「これは攻撃ではありません！今飛び立ったのは、…私達の希望―

―

彼女の宣言と共に、ジョルの銃は既に狙撃手の頭に狙った。

「……!?!」

「悪い、彼女の邪魔をしちゃいけないのよ。安らかに眠れ」

狙撃手がまた驚くところに、ジョルは既に麻醉弾を彼の頭に撃つた。

そうしたら、狙撃手は力を失い倒れていた。

「こっちはクリア。」

そして、彼は望遠鏡で折神朱音の方向を見ながら、仲間を確認する。

そうしたら「全部眠らせた」という返答が戻ってきた。

流石、裏世界のプロ掃除屋たち。頼りになる。

「にしても、やっぱり綺麗だよな……」

朱音の方へジロジロ見つめて、ジョルは胸がドキドキする。

彼女は初めて自分を惚れさせた女だ。けど、お互いの世界があまりにも違い過ぎで、彼はただ見ているだけ。

“それしかできないんだ”……。

「次、あんたを暗殺するやつが現れたら、俺は必ずそのやつを始末する……」

なぜなら、彼は人を始末することしかできないのだ。

これは刀使^{英雄}たちが世界を救う間に、名も知らぬ掃除屋が一人の女性に惚れた小さな話であった。

第26話：月下の一閃1

静かな鎌倉の夜に、大きな連続地鳴ちめいと共に折神家近くに大きな地揺れが起きた。

ドオオーン

音を超えたS装備射出用コンテナは、折神本家近くに落ちていた。着弾地点周辺は約数メートルの深さの穴が形成されていたことから、現代でもいかに質量兵器や砲弾が馬鹿にできない威力を持つ。まさに大規模破壊兵器である。

幸いのところ近くには民家や住人がいないため、死傷がゼロ。まあ、これも折神朱音が大部の注意を惹きつけたおかげとも言える。そして、着弾した一分立たずにコンテナからS装備を着用している六人の刀使が現れ。彼女たちはそれぞれ決心を持って、折神家へ走り出す。

刀使の歴史有名の戦略、折神家急襲作戦がここから始まる。

◇

折神家急襲作戦が始まると同時に、折神家地下施設――

一人の少女は大きな揺れから目覚まし、そして頭に纏う包帯を解かす。

髪の毛元から白く、先端近くだけは黒い髪。それを肩の辺りで綺麗に切り揃えている少女。感情すら感じない無表情の顔と死んでいるような目。

けど、彼女は糸見沙耶香のような感情を表に出すのが苦手なタイプ

とは違い、自己表現という概念が死滅したような雰囲気だ。今だに制服を着ていないが……彼女は親衛隊最後の一人——親衛隊第三席のさつきよみ皐月夜見。

彼女に関する噂はほとんどない。御前試合で上位の成績を修めた獅童真希や此花寿々花、至上最年少で抜擢された燕結芽と違い、彼女に関しては目立った話題はない。

……どうやら、敵襲のようだ。

さつきの異常の揺れから少女はそう判断した。これは地震ではない。地震なら、こんな短いではなかった……ならば人工的な行為だと思われる。

ベットから降りて、少女はすぐ着替えの準備をする。そのため、この部屋から離れなければならない。ここは病室、折神家地下研究所でもある。

数日前、伊豆の戦いで怪我した彼女はずっとここで休養中だ。そして、身体が大部分回復されたところに夜見は早く自分の務めを果たしたい。

これもあの人と、折神紫のためである。

「……………あれは」

病室から出ようとする夜見はたまたま視界に入ったあるものに目を惹きつけられた。

そつちに覗くと、もう一つのベットの上に一人の男が呼吸器を使つて、そちらに昏睡中です。

髪色と顔立ち……間違えなく、この人は親衛隊元第五席候補の衛藤 都である。彼はどうやらひどい怪我が受けられて捕まられた。そして、ここで治療しているようだ。

「……………」

夜見はずっと都の顔を覗く。だが、これは特別の行為なんじゃない。ただの好奇心による行為だ。

彼は確かに実力により折神紫に選抜された人材ですが、刀使ではないゆえ、弱いに違いない。

弱いか……まるで自分みたい……。

かつての夜見も弱いんだ。ごく普通にいられる彼女はただ目が立たない刀使だった。けど、ある日に高津学長から授かった力を受け入れられて、彼女はようやく普通から離れて、誇れ高くないの親衛隊に入らせた。

これは刀使の誇り、皆が憧れる地位である。本来普通の自分では到着できない場所なんだけど……あの人のおかげでたどり着いた。

親衛隊として選抜されたその日の夜に夜見は嬉しくて泣いた。だって、これは彼女が諦めた夢の場所なんだ。こうして実現できたのは夢みたい。

だから、夜見はこの力を自分に授かったあの方に大きな恩がある。その恩を返すために彼女は毎日一生懸命その力を使い、折神紫と親衛隊の仲間とあの方のために頑張り続けた。

「貴方も誰かのためにその弱そうな身体を使つて、我々と戦つたのですね。お互いの実力差が大きく離れたのに……勇敢な人ですね。貴方は。」

褒めるような、貶めるような言葉を表す夜見。一瞬だけ、彼女の瞳は羨ましいという感情が漂っている。

「……………少し待ってください。」

長い沈黙に夜見は何かを思い付き、誰かに話すような口調でここから離れていた。

それから数十分経ち、彼女は急ぎにここに戻った。よく見れば、彼女は既に制服を着換え終わった。

「……………少し遅かったのですが、目が覚めたら……これを食べてください。元気をつけられたら、良いのですか……………」

再び彼の目の前に歩いて、彼女は自作のおむすびを都の隣の机に置いていく。

これは彼女なりの関心なのか。彼女自身もわからない……けど、似た同士として夜見は少しでも彼に元気をつけたい。

「……………それでは、私はそろそろ行きますので……………ここでゆっくり休んでください。第五席。」

また彼を仲間意識をする夜見。彼女の心底はもしや、少し親衛隊が

もう一人が増えることに期待しているのかもしれない。

親衛隊は彼女にとって、居場所……家族だもん。

そして、彼女はこれを守るために戦場へと向かった。例えば自分は悪だとしても、この居場所を守り致します。

◇

夜の鎌倉は、もとい折神家本邸は不気味なほど静寂に包まれ、月の光だけが頼りだった。

そんな中、可奈美達六名はただひたすらに進む。目標は2つ、衛藤都の救出とタギツヒメの討伐。

それを実現するために、彼女たちは2つのチームに分ける。可奈美と？和は折神紫を倒す、他のみんなは衛藤都の救出を集中する。

そして、姫和と可奈美達が最初に出会った門の前まで進み、中に飛び入る。御前試合決勝戦の時に見た白州の光景が再び目に焼き付く。

「どうしたの？可奈美。」

「皆と出会ったこの場所、また戻ってきたって……」

目の前の光景に感慨した可奈美。確かに、ここは彼女たちが出会った場所である。

「そうだな……また戻られると思わなかった。」

？和も少し懐かしいと感じた。この場で可奈美と都に助けられて逃げられた。が、またここに戻っていくとは、本当に運命なんですかね。

……都。今度は私……私達が貴方を助ける。

「感慨に吹けるのが早い。」

「沙耶香の言うとおりです。ストームアーマーの活動限界は予備電池を含めても三十分。その間にタギツヒメの討伐とミヤマの救出をしなければ」

「時間はどうやら私達の味方ではないようですね。」

「まあ、ストームアーマーの設計はこうデスし。これはもう普通より一番活動時間が長い装備デスよ〜」

つまりこれはもう舞草最良の装備ということ。ならば、ちゃんと運用しなければと思っっている？和。

「では、まず手短かに確認する。朱音様の話により折神紫は恐らく祭殿の方にいる。」

「私のスペクトラム計もそっちに反応する。どうやら本当にそっちにいますみたい。」

「祭殿？」

「折神家一番深い場所。ご当主様しか許されない禁足地。」

舞衣の疑惑を解明する沙耶香。彼女はよく折神家に連れられて、このことはここにいますみんなより知っている。

「じゃ、大荒魂にいますのは……」

祭殿の方に見つめる可奈美と？和。そこにいるのは運命の敵、この世に一番強い存在。

あれを倒さなければ、世界が終わる。都を救い出しても無駄になる。

「……………そちらに行くぞ！沙耶香、都のことを頼む。」

「わかった。」

沙耶香に向かってそう言う？和。彼女の速度と実力なら最速の速度で都を救出することが可能だ。そして、彼女はこの場で？和を含めて三番目強い刀使。

「俺とエレンとねねは別働隊みたいなものだね。舞衣、指揮の方はよろしく」

「ねー」

「うん、任せて」

大体の方針が決まった後、全員はそれぞれの目的へ移動すると思っただけだ。後ろから凄く睨まれた気配が感じられた。

「……………ひー」

さつき可奈美たちが越えた大門の上に一人の女の子がそこに立っている。薄桃色の髪とその不気味な微笑み……その様子は舞衣が忘

れられるはずがない。

「あの子はー親衛隊第四席燕結芽！」

そのことを聞いた舞衣と沙耶香以外の四人は一瞬動揺しているが、すぐ警戒を最大限に上げる。

「えっと……フツ、決めた！」

可奈美たちを眺めている結芽はこの場にいる全員を見回る。そして、すぐ視線を可奈美に止まった。

確かに、あのおねーさんはおにーさんの妹さんですよ？どうにも強そうに見える。

獲物を決めた結芽はなんの予備動作もなく、迅移を使って、最速の攻撃で可奈美を攻撃する。

ーーー!?

ぎりぎり攻撃を防げた可奈美は結芽に本殿までに押された。

攻撃が早い！そして…重い！

やっと彼女の攻撃を弾けたところに、可奈美は距離を取った。手が痺れる……この子強い！

「あはっ！流石、おにーさんの妹さんだね。私の初撃を防げるのはあのおにーさんと千鳥のおねーさんだね。」

「お兄ちゃんのことを……まさか、貴女はお兄ちゃんと戦った親衛隊の人なの!?!」

「うん、そうだよ。確かに、おにーさんはとても強いけど、私にはまだまだだね。身体はどこにも私の刀で傷つけられて、肩も私の御刀に貫かれた。凄く痛そうな顔でも晒したのよ。おにーさんは」

相変わらず煽っている言葉扱いする結芽。彼女は早く本気の可奈美と戦いたい。そのために可奈美を怒らせる。

「……………許さない」

そうしたら、可奈美は凄く怒っている目で結芽を睨んで呟く。

可奈美は確かに都が傷つけられたことに怒っていた。が、最も許さないのは……その舐めた口で彼を舐めるところ。

お兄ちゃんはいつも強くて、尊敬できる人。そんな好きな人がそう言われて、妹としては許されない。

「お兄ちゃんを傷つくやつは……許さない！」
結芽の挑発に乗った可奈美は怒り任せて結芽を攻撃し始めた。それから、両方激しい攻防戦が始まった。

◇

数十回以上の攻防に、可奈美と結芽は最小の動作と最速の攻撃でお互いの攻撃を避け、防げて、攻撃する。

まるで流れのような動きを取る二人は各流派の真髓を引き出している。

この子は強いと戦いながら、可奈美はそう思っていた。今まで戦う相手より遥かに強かった。

都と稽古するよりも、激しい攻撃だ。どうにもお兄ちゃんは彼女に負ける……いや、そもそもこの子を相手に良くもそこまで戦った。

「うっ……！」

何回もぎりぎり攻撃を避けて防げた。見えるのに、結芽の反応速度と攻勢で可奈美は柳生新陰流の特性をうまく発揮できない。

多くの技も直感でうまく回避した。

すべての動作を読む余裕がなかった。お兄ちゃんみたいな自らの限界を自由に最大限にする異能技もないし……。

さらに数回の攻防で、可奈美は結芽の攻撃を避けて地面に倒れ込んだが、動き止まらず地面にくると彼女の追撃に避け、立ち直り構えを取って迅移で斬りかかる斬撃を避ける。

「やっぱりだ。おねーさんは誰よりも強い！」

一段攻撃を止まった結芽は嬉しそうな表情でそう言う。刀使を相手によほど楽しかった。

「ぐっ……！」

彼女の顔を見ると、可奈美はどうしようもないと思ってた。本来はお兄ちゃんのために怒った可奈美は彼の仇を取るつもりですが、戦いの最中に徐々冷静を取り戻した。

この子は全力じゃなきゃ倒せない……いや、対抗できない方が正し

い。

「だから、おねーさんを倒せば、私はー」

一方的の会話が終わり、彼女は再び可奈美を襲う。攻撃はさつきより激しい。

「……うあつー！」

結芽に抑えられて、可奈美は背中が柱にぶつけられた。

「……!?!」

けど、その瞬間漏れた隙に結芽が笑顔で可奈美の下から突っ込んできて、ぎりぎりの範囲で可奈美は頭を右に傾く、突刺攻撃を避ける。それから、また一連の短い攻防戦。

強いッ！これは天然理心流の極地！私も……！

結芽の強さに刻まれていた可奈美はどんどんこの戦いに楽しいんでいた。

目の前にいるのは天然理心流の達人。まだまだ自分の流派の免許皆傳を取ってない可奈美にとって、彼女は遥かに立っている存在。

彼女を追いつくために、可奈美も全力を出す。

結芽が左下からの攻撃を避け、可奈美はこの隙に全力で彼女を斬るが、彼女はすぐ後ろに飛んでいて、距離を取った。

「はあ……はあ……はあ……まだだよ。おねーさん。」

……この子、何を急いでいる？

結芽の息が急に荒れている様子を見て、可奈美も一時に攻勢を止めた。

「はあ……はあ……楽しいね。」

とても辛そうな表情でそう言っている結芽。

彼女はどうしたの？なんであんなに苦しそうなんだろう。……うん、彼女に同情の目をするじゃない。きっと何かしらの言えない事情がある。

どう見ても哀れの様子だけど、可奈美は彼女の言語に頷く。

確かに楽しい。彼女と戦うのは自分の魂が燃えてきた。もっと彼女と戦いたい……！もっと彼女の凄いところを見たい！

「……すう……はあ……」

呼吸を整う。結芽は再び体勢を立て直す。

「結芽ちゃん、もつと楽しもうね！」

「言われなくても……行くよ、おねーさん!!」

こうして、二人は次のラウンドが始まるのところ、

「横やりい！」

「ダイナミック！」

エレンは金剛身で結芽を抱きつく、彼女をここから連れて行く。そして、薫もその大きな御刀ねねきりまる袂々切丸で可奈美を野球みたいに振り撃ち出す。

「ひゃあああああああー！」

滅多聞こえない悲鳴と共に可奈美は飛ばされて、？和にキャッチした。

「行くぞ、可奈美。」

そして、そのまま片方の肩で彼女を抱きつき、舞衣と沙耶香と共に前へ進む。

「ちよっ……！待って……!?!和ちゃんっ！舞衣ちゃん！私はまだあの子とー！」

「いいから！今のは都くんとタギツヒメの方が重要でしょうー！」
まだまだ結芽と戦いたい可奈美ですが、すぐ舞衣に黙らせた。

一方その頃ー

「この……！」

白州までに連れ出されて、結芽はエレン斬りかかるのですが、彼女はすぐ結芽から離れて距離を取る。

その頃、薫も迅移を使ってここに来た。

「もう少しだったのに……！なんで余計な真似をするの！」

「その顔が見られただけで、残る甲斐がある。」

「傷ついた舞草の仲間たち。貴女に大きな貸しがあります！」

二人に邪魔されて怒っている結芽に対して、薫とエレンは少しスッキリした顔。

「だから、なに？そんなの、弱いのが悪いだけでしょ！知ってるよ。おねーさんたちは弱いから、ここに置いていかれたんだ。」

「それで、千鳥のおねーさんとおにーさんと違って、二人かがりできや私を抑えられないんだよね！」

結芽の責め言葉に二人は少しムカつくけど、彼女が言っているのが事実。一人だけでは彼女と太刀打ちができない。

「そうだな……まあ、ムカつくけど」

「事態を冷静に把握し、最良の判断を取れる指揮官が頼もしいです。」

「それと、俺たちは二人だけじゃない。二人と一匹だ！」

「ねねっ！」

けど、彼女二人と一匹なら最強の刃にもなる。

「だから、なに？いいよ、すぐ片付けて追いつけるんだから！」

そう言っつて、結芽はすぐ彼女たちを攻撃する。けどエレンに攻撃を弾けられて、同時に薫はその大きな御刀を上段斬り直面で振る。

「……！！」

ぎりぎり絶大の攻撃を結芽は後ろの方に退避した。あれに当たつたら、写しは絶対解除される。

「ちえ……避けられたか」

「すぐ楽しませてあげるので、ご安心クダサイ」

二人の余裕ふりに、結芽はさらにムカつく。

ぐっ……もう時間が……ないのに……！！

◇

祭殿に向かう可奈美達――

「………ないから。」

その途中に、舞衣は突然足を止まって、変な言葉をブツブツ呟く。

？和三人達は舞衣の異変に気づき、共に止まった。

「時間がないから……私達の最大の戦力は間違えなく可奈美ちゃん

と？和ちゃん。けど、私達の誰一人でもあの子を抑えられないのは知っている……うん、二人でもどうか……」

「だから、あの場の最善は連携が一番うまい薫ちゃんとエレンちゃんだと判断して……私は……」

自分の判断が間違わないかどうか迷う舞衣。彼女の優しい心は自分の指示で結芽を足止めする薫たちのことを心配している。

あの子が強い……お兄さん……都くんさえも勝てない相手。可奈美ちゃんも結構苦戦している。

そんな相手に薫たちは勝てるかどうかわからない……もしかすると、殺されるかもしれない。

そう思うと、舞衣はとても不安でした。

パアアアア

その時、響いた音が全員の注意を逸した。

「……………っ！」

可奈美は自分のほっぺを叩き、痺れた痛みが可奈美には少し耐えられない。

でも、これで目を完全に覚めたのだ。

「ごめん、もう大丈夫だから。もう頭が熱くて大事なことを忘れなから」

「可奈美ちゃん……」

「今の目標はお兄ちゃんを救って、折神紫様を倒すこと。舞衣ちゃんのおかげで、思い返したー」

「だから、ありがとう、舞衣ちゃん。そばにいてくれて」

笑顔でそう言ってくれる可奈美。そんな彼女を続いて他の二人も。

「そうだな。お前という指揮者がいることは凄く安心する。だから、お前の決断を信じる。」

「私も、舞衣の言うことを聞く」

「みんな……うん！ありがとう、みんな。」

危うく嬉しすぎで、涙が溢れ出す舞衣。彼女はずっと自分の実力を疑っている。

だって、今まではずっと助けられたばかりだ。

都くんもずっと私を信じていた。例えあの時は迫られた選択としても……そんな選択をした私に彼も一生懸命で戦ってくれた。

そして、可奈美ちゃんたちも私のことを信じている……ならば、私も自分を信じなきやね。

それに、私はもう迷わないと決めたから。

「……………ここから先は別れるところ。都くんは別の方向にいるから、私と沙耶香ちゃんはそちらへ向かいます。」

もう一度心を立ち直った舞衣は大丈夫そうな顔で、次の行動を説明する。

「ああ……………ここから先の直線の道は私と可奈美がやる。お前たちは都を頼む。」

「うん！任せー！」

そんなときに荒魂の群れが突然舞衣を飲み込み、彼女を隣の部屋に連れて行った。

「舞衣ちゃん……………！」

「舞衣……………！」

それを見届けた三人はすぐ心配に舞衣のところへ向かうのだが、沙耶香は突然？和たちを止まらせた。

「ここは私に任せて、二人は先に行つて！」

「え……………？でも……………！」

「行つて！舞衣は必ず守るから！」

必死な顔で伝えたいことを伝う沙耶香。彼女の瞳から強い意志を感じる。

「……………可奈美！」

「うん……………！沙耶香ちゃん、舞衣ちゃんを頼む！」

そんな彼女の意志に可奈美たちは次々ここに飛び込んだ荒魂を斬りながら前へ進む。

そして、沙耶香はそのまま舞衣のところへ行く。

「舞衣！」

「沙耶香ちゃん!？」

一人で荒魂の群れと戦っている舞衣を加勢してきた沙耶香。

「私も戦う……！」

「……………可奈美ちゃんたちはもう先に行ってるのね。」

「うん……………」

「なら、なんとかここから抜き出し、作戦通りに都くんを探さないと！」

「はい！」

二人かがりでゆっくり周りの荒魂を減らす二人。けど、そこに最悪の相手が現れた。

「やはり帰ってきたわね沙耶香、……………どう？この世に貴女の望んだ物が有った？それとも貴女が望んで得た物は何の価値も無いことに気付いて、捨てて来たのかしら？」

「……………高津……………学長……………」

二人の前に現れたのは高津学長と親衛隊第三席臯月夜見。その姿を見た沙耶香は怯えか、驚きか、あるいは嫌気か、複雑そうに顔を歪めて呟く。

「どちらにしろ。ようやく会えたわ。柳瀬の小娘！」

彼女の顔は狂っているように見える。

「ご無沙汰しております。高津学長。」

沙耶香を庇って、舞衣は御刀を彼女と夜見に向う。

「相変わらず、その無礼な態度ですね。いいでしょう、貴女たち二人がここにいることで、私もようやくあのカギを復讐できますから。」

「復讐……………？」

「ええ……………貴女を利用して、衛藤 都に死ぬほど絶大の痛みを与える復讐だよ」

瞳が狂っていて、顔も歪んでいく。彼女は衛藤 都への憎悪はもう彼女の理性をどこかに捨てちゃった。

第27話：月下の一閃2

「てつきり、貴女たちの目標は衛藤 都だと思っけどね。」

「それでも、待つ甲斐がありますわ。」

多くの仲間の助けによつて、やっと祭殿の入り口までにたどり着いた可奈美と？和ですが。そこで親衛隊の二人に待ち伏せられた。

「可奈美！」

「うん！」

親衛隊の二人を見て、？和と可奈美は戦闘態勢を取る。あの二人の実力は伊豆の時に確認したのだから、決して油断ならない相手だ。

「伊豆の続きをしようか」

「斬るか、斬られるかですわ。」

そう言つて、二人の目は赤くなる。あの目は皐月夜見と戦うときみたいな色。

「あの目は……！」

「何という禍々しい……そこまで荒魂化をして、折神紫を守るのか！」

「力のない正義はなんの意味がない。力なきでは守れないものもある。」

「時に力は人に幸せをする力があるですわ。」

親衛隊の二人、獅童真希と此花寿々花は写しを貼つて、それぞれの流派の構えを取る。

「………？和ちゃん。全力で戦おう」

「ああ……彼女たちを倒してこの前へ進む！」

そして、可奈美たちもそれぞれの流派の構えで親衛隊の二人と対峙する。

それから数秒後、彼女らの戦闘が始まった。



舞衣と沙耶香方面――

「復讐ですか」

荒魂の群れに囲まれていた舞衣は沙耶香を庇って冷静に高津学長の話聞く。

「ええ、そうよ。あの忌々しい男は良くも私の沙耶香を誘拐して、私の前に沙耶香を盗んだのよ！それから、良くも私を侮辱する……断じて許しませんわ！」

「そうですか」

けど、その理由を聞いた舞衣はただ冷たい返答を返す。

きっとこの人は都くんを怒らせて、そこまでされたのでしょうか。あの人は嫌いな人に容赦はしないのですが、それもちゃんとした正しい理由があると舞衣はそう信じている。

きつと沙耶香ちゃんを守るために……。

「だから、沙耶香は何にも悪くないと信じていますわ。悪いのはあの男です。彼さえいなければ、貴女はきつと紫様の力を受け入れようとするわ」

「……………」

「沙耶香ちゃん、大丈夫。私は貴女を守ります。」

「舞衣……………」

怯えている沙耶香を見て、舞衣は優しく微笑む。

そして彼女の内心は凄く怒っている。沙耶香がそこまで怯えているということは、散々酷いことでもされたのでしょう。だから、都くんは危険を犯しても、彼女を鎌府から連れて出した。

「邪魔しないでくれる？柳瀬の小娘。貴女は沙耶香の次です。貴女はまだ衛藤 都を傷つけられる重要な使命が残っているのですよ。」

険しい顔をする高津学長は舞衣に睨む。けど、それは今の舞衣には効かない。だって、彼女は舞衣の好きな人を傷つけようと企んでいるから。

故に、舞衣も彼女を睨み返す。が、高津学長に無視された。彼女はどうかやら沙耶香の勧誘に集中しているみたい。

「どうしたの沙耶香？ そんな顔をして。何も恐いことなどないでしょう？ あなたは私が見込んだ刀使だもの。あなたなら——」

高津学長は一旦言葉を区切り、夜見の背後に立つ。夜見の背中側から彼女の髪の毛を掴み、力任せに持ち上げて言った。

「こんな失敗作にはならない。だから安心して、私に全てを委ねるといいわ」

高津学長は沙耶香に見せつけるように夜見を掴んだ手を正面に掲げる。夜見は苦痛どころか嫌悪の感情すら顔に出さずに無表情のまま。それとも、そんな感覚や感情を感じていないのか。

とにかく、舞衣はもうこの人のことを大嫌いになった。女の子にあんな扱いするのは舞衣は許さない。

「私に従っていれば、あなたは紫様に仕える最強の刀使——いえ、最高の御刀になれるわ。それがあなたにとっての使命であり、幸せなよ、沙耶香。」

夜見を掴んでいる手とは別の手で、沙耶香を招き入れるよう下から手を伸ばす高津学長。それに応える沙耶香の表情は変わらず複雑そうなままだ。

しかし、その複雑そうな表情でも沙耶香は自身の学長に自分の意思を告げる。

そう、自分はもうあのただ黙っている人形ではない。

「もうやめて」

「あ？」

馬鹿にするような、呆けたような態度で高津学長は反応する。

「もうひどいことしないで。じゃないと、私は……」

「斬るのかあ!? 私を、お前が？」

今度こそ、明確に悪意と挑発の込められた答え方をする高津学長。

「ひひ、はははは、あははははっ!!」

汚らしい、下卑た笑いが高津学長の口から放たれる。数秒続いたその笑い声と笑顔は瞬間的に罵声と剣幕へと変貌する。

「出過ぎた口を聞くな!! 道具の分際であるお前に、私を斬ることなど許されないうが!!」

沙耶香も、舞衣も、高津学長に怯えはしない。だが、彼女の異常性の理解と彼女に対する敵意は固まった。

「御刀も、刀使も、荒魂も、刀剣類管理局も、全ては紫様に力を捧げるためにあるのよ。沙耶香、お前はその男に毒されたようですね。」

高津学長は夜見を掴む手を緩め、彼女を地面に放り出す。うつ伏せに倒れた夜見だが、普段と遜色のない無表情で地面から顔を上げる。

「もういいわ。だったら、武力でお前たちに痛みをつけたあと。最後はあの男にお前たちの虐めな様子を見せてあげよう。夜見、早く仕事をしろ!」

高津学長はうつ伏せの体勢の夜見の右腕を履いているヒールで思い切り踏みつける。ヒールの踵部分の突起が右腕の肉に食い込むが、夜見は表情の変化どころかうめき声一つ上げない。

「……………沙耶香ちゃん。私はもう我慢の限界よ。久々にこんなに怒っているなんで……………」

「……………私も。都に酷いこと……………彼女に酷いことをする高津学長は許さない。」

二人はもう目の前の学長に今までもない怒気が上がった。あんなに人を道具扱いしかない、大切な人を傷つけようとするその態度に沙耶香たちは見過ごせない。

「……………」

高津学長は顔をしかめながら夜見を踏んでいる足を退け、立ち上がった夜見は何事もなかったかのように御刀を握り、眼前の舞衣と沙耶香を見据える。

「沙耶香以外は殺せ。柳瀬の小娘の遺体をあの男に見せつけろ!」
「……………了解しました。」

冷たく言い放たれた高津学長の命令に少し遅く答える夜見。彼女は左前腕に御刀で傷をつけ、その傷口から荒魂を放出する。

それは彼女の能力。自傷することで荒魂を生産することだけはなく、操ることもできる。その能力のおかげで、夜見は親衛隊として選

ばれた。

「沙耶香、お前は紫様の道具なのよ？ あの方のために生き、あの方のために死ぬ。これ以上の幸せはないわ。なのに、あの男のせいでお前の脳に余計なことを入れたようだね。」

「……違う。私は都に救われた。」

高津学長の言葉に強く反論する沙耶香。彼女は都と出会ったことが良かったと思う。都も自分と出会ったことに涙が出そうくらいに喜んでいる。

そんな彼を見て、沙耶香は人間としての価値が見つかった。

「救われた？ いいえ、違う。あの男は紫様に反抗するもの！ あんな生きる価値がないやつに、くだらない思想をお前に教え込んだのよ！ 彼を殺した後はゆっくりお前を正しい道を戻せまー」

「高津学長、貴女はもう何も喋らないでください」

高津学長の言葉を遮断する舞衣。彼女の口から出している言葉はとても冷たい怒りが含まれている。

「……なんだと？」

「都くんを侮辱すること、彼を傷つけるつもりのこと、皐月さんにあんな酷いことをすることと沙耶香ちゃんにあんな痛みを与えたことを含めて、私は沙耶香ちゃんの代わりに貴女を斬ります！」

「私を……!? 君が……?？」

高津学長はさっきのと同じ反応ですが、舞衣は冷静で話を続く。

「ええ、殺しはしませんが……都くんの言葉を借りると、貴女を徹底的に踏み潰します。」

「舞衣……」

「沙耶香ちゃん。たまに、都くんの真似をしましょう。」

「うん……」

沙耶香は強く頷く。そして、舞衣と一緒にお互いの背中を守ろう陣形をした。

これは舞草の里に学んだ陣形である。

「ふざけたことを……！ 夜見、やれ！」

「はっ。」

大量の荒魂が舞衣たちを襲いかかる。

「背中には任せだ。」

「うん……!」

そして、舞衣たちの戦いが始まった。

◇

刀と刀がぶつけ合い音が響き。？和と獅童は二対一で戦う。

本来は可奈美と合力である二人を倒すつもりだが……全力を出せた親衛隊は強すぎで、いつの間に分断された。

そして、？和は獅童との戦いで抑えられた。荒魂の力を頼ったとはいえ、剣技も凄まじいくらいに強い。

「(っ)……!」

「……フツ」

「しまっ……!?!」

やっと思隙を見つけ出し、？和はそちらに突っ込んだが……すぐ防衛態勢を取り戻し、ぎりぎり獅童の攻撃を防げる。

わざと隙を……!?!

「うっ……!」

さっきの攻撃を防げて、飛ばされた？和は地面に倒れ。そしてギリギリの範囲に刀で自分の肩を守った。危うく肩が斬られるところだった。

「このまま押し込むぞ。」

完全に？和を押し込む獅童。彼女は今でも御前試合二連覇の実力が残っている。

あんな強い実力が持つというのに……。

「ぐっ……これだけの……これだけの強さがありながら、なぜノ口を受け入れる……!」

獅童の強さを良く知られていた？和は彼女がこんなに強い力を持ちながら、ノ口の力を頼ることに怒っている。

これだけの強さがあれば、あんな力を頼らなくても、十分なのに……！

「ふっ……僕は自分が強いだなんて思ったことは一度としてないよ。」

けど、そう言った獅童は少し悲しそうな表情を示した。

「……………っ！」

「目指す背中は彼方に遠く——見上げる頂きは遥かに高い。並び立てる力だけを得る……………目的のためならば、どんな手だって使う。君だってそうだろう!？」

？和に自分が望んだ答えを求める獅童真希。彼女はずっとあの二人——いや、最近は三人だと増えた。彼女はずっとあの三人の背中を見つめた。

史上最年少の最強剣士、世界最強の偉大なる大方——そして、あの少女に近づくほどの強さを持っている男。

最後の一人と戦わなくても、あの男は生身である薄桃髪の天才少女と長時間で戦った。自分ではそれができない……………だから、僕は弱いんだ。

故に悪魔の力を借りても、強くなりたい。これは獅童真希がノ口を受け入れる理由だ。ただ並べる強さが欲しかった。

「さあ、これで……………おしまいだ！」

もう？和の答えを待たずに、獅童は？和にとどめを刺す。

けど、？和は決心を満ちた瞳で獅童にさっきの質問を返す。

「……………お前の言うとおりかもしれない。目的のためなら……………お前にここで勝つためなら、どんな手だって使ってやる！こんな風に！」

「——っ!？」

そして、彼女は胸あたりのS装備の強制パージを撃ち出す。それを急ぎに回避する獅童は一時に？和から離れる。

そこに？和の勝機がある。

「ぐっがあー！」

獅童のお腹を蹴って、彼女の平衡を崩す。そして——斬る！

「ぐっ……………！」

写しが？和に剥がされて、獅童は地面に倒れた。

「結……芽……おま……すぐ……っ」

倒された獅童は最後の力で絞った言葉はある少女の名前。そして
気絶した。

「……………結芽……………親衛隊の……………」

獅童最後の言葉に気になる？和だが、彼女はそういう考えを後に
し、可奈美のところへ行く。

そこで、可奈美が此花寿々花を切り落とす前の光景。

「……………やっぱり兄妹ですわ。あの人もあんなに強いのかしら
？」

「遥かに強いよ。お兄ちゃんは誰よりも強い、誰よりも優しい。」

「そうですか……………いいお兄さんをお持ちですね。」

視線を上げて、地面に座り込んだ寿々花は最後に笑顔で可奈美に向
き合う。

「……………うん、一番誇れるお兄ちゃんなんですよ。」

そして、同じ笑う可奈美は御刀で切り落とし、寿々花は写しが剥が
れると共に意識が失った。

「なんか、こっちは結構平和そうな雰囲気だな。」

「？和ちゃん……………！そっちは終わった？」

近づく？和を気づき、可奈美はいい顔で彼女を向く。

「ああ……………さつき終わったばかり。それより、なんかいい気分だな。
お前は」

「うん！だって此花さんはお兄ちゃんのことを結構気に入っている
みたいなんだよ！これで、お兄ちゃんの良さがもう一人に知られたの
よ！」

「……………お前……………相変わらず、彼のことを好きなんだな。」

「うん！大好き！」

笑顔でそう答えた可奈美。

彼女がこんなに元気の姿を見て、？和も心が暖かくなる。

「……………そうか。それより、そろそろ行きましょう。活動時間もそ
ろそろ限界だし。」

「うん、そうだね。お兄ちゃんのごことは舞衣ちゃんたちに任せる。」
「……………みんなの為にも、貴女を討つぞ。タギツヒメ。」
そう決心して、？和は可奈美と一緒に大荒魂にいた祭殿の方へ向かった。

◇

再び、舞衣と沙耶香の方面――

舞衣と沙耶香は迫り来る小型の荒魂の群れを御刀で次々と切り払う。けど数は全く減らない、どう斬っても終わりが無い。

その原因は夜見が減った端から補充しているからだ。淡々と作業をこなすように自らの左腕に御刀の刃を突き立てる夜見に、舞衣は目を細めて言う。

「そんなに血を流したら、流石に死にますよ。」

「あなた達が果てる方が先です。」

舞衣の忠告も聞く耳持たずで夜見はいくつも左腕に傷をつける。なんで彼女は「あの女」にそんな忠誠があるんだ？散々虐められるのに…………。

舞衣は戦いながら、ずっと夜見の動機を探ろうとしてた。けど、見づからなくて。

「おい、早く終わらせろ」

「仰せのままに」

高津学長は苛立ちの表情をしながら夜見に命令する。次の攻撃を察知した舞衣は沙耶香に告げる。

「沙耶香ちゃん。少しだけ荒魂を抑えてて」

「……………舞衣？」

「私が……………あの人を斬る」

目線先は夜見。沙耶香はそれを察知し、「……………うん」と頷く。

そして、沙耶香は二秒ほど目を閉ざし、再び開く。その瞳は普段の薄紫色とは違う、虹の色に変わっていた。

「……………」

沙耶香が夜見の荒魂の群れに迅移を用いて加速し、突進。御刀で荒魂を斬り払う。

本来ならそのまま接近戦が続く、そのはずなのだが。

「あれは……………」

沙耶香は迅移の後の斬撃から、再び迅移で加速。後方から迫る荒魂を迎撃する。それからまた迅移で加速、といった具合に絶え間なく迅移を続けている。

「まさか、あれが《無念無想》……………」

可奈美たちと戦った時に使ったチート能力。本来迅移は一瞬だけを加速する技だが、沙耶香は持続的に迅移を行うことで超高速戦闘を可能としている。それが彼女の能力《無念無想》だ。

「割れる……………」

夜見を庇うかのように舞っていた荒魂の群れが沙耶香の御刀によって散らされ、ほんの一瞬だが人間が一人通ることのできる穴が開いた。

その一瞬を見逃さない舞衣は即座にその穴に飛び込み、その先に立つ夜見に向けて上段に御刀を振りかぶる。

「はっ！」

「……………」

だが、夜見はそれに気づかないわけがない。正面から迫り来る舞衣の御刀を同じく上段からの斬撃で迎え撃つ。一応彼女は刀使、剣の戦いでの知識が持っている。

しかし、夜見は上段からそのまま切り下ろすところに、舞衣の御刀を持つ両手が彼女から見て左側にずれる。

そして、舞衣は右薙ぎに御刀を振っていた。

「……………お見事です。」

舞衣の剣を受けた夜見は称賛の言葉を簡潔に述べ、写シが剥がれて倒れ伏した。その一瞬、彼女の顔が柔らかくなった。

でも、その表情は誰にも見せられなかった。

その直後、舞衣の髪を結んでいたリボンが解けて彼女の長い黒髪が重力に従って下ろされる。舞衣はあの一瞬の交錯の内に夜見の斬撃を回避しつつ一太刀浴びせたのだ。

「舞衣、お見事です。」

夜見の真似をしたのか、沙耶香も速やかに荒魂を斬り払い。舞衣のところへやってきて、彼女に称賛の言葉を。

「ありがとう、沙耶香ちゃん。それと、真似しなくてもいいよ。」

「……………？わかった。」

舞衣の言葉にわからない顔をしている沙耶香は頭を左の方へ傾く。その動きはとても可愛くて、舞衣も思わず微笑んだ……………と、その時——。

「くそっ！ 出来損ないの親衛隊どもに任せたのが間違いだったか……………！ 今度はこうは——」

「……………」

そこに親衛隊の悪い口をブツブツ言っ、ここから立ち去るつもりの高津学長。

そして、立ち去る高津学長の鼻先に何者かの御刀の鋒が向けられる。その者は沙耶香だ。

彼女は高津学長の行く手を阻むように立ち、両手に握り締めた御刀を向けている。

「さ、沙耶香……………!?!」

「……………」

沙耶香は何も言わず、ただ静かに高津学長に御刀を突きつけている。当の高津学長も自信に降りかかるであろう危害に怯え、冷や汗を垂らしている。

「……………」

舞衣はこの場を沙耶香に任せ、御刀を収まる。本来は自分がやるつもりだが、沙耶香ちゃんがやりたいなら彼女に任せる。都くんがこの場にいるなら、きつとそうさせるはず。

「熱い……………」

「?」

突然の沙耶香の要領を得ない言葉に高津学長は思わず困惑する。

沙耶香は辛そうに、瞼を伏せて言葉を連ねる。

「可奈美の剣を受けた手が熱い。舞衣に抱き締められた肩が熱い。都に優しく頭を撫でられた顔も熱い。でも、あなたに御刀を向けると……胸が苦しい。」

沙耶香の心の内、それを少しずつさらけ出す言葉だった。

これは彼女の本心なんだろう。沙耶香は元々優しい女の子。きつと彼女も多少自分を育てる恩がある学長に少しの感情がある。

しかし、高津学長は最後の一文に活路でも見出だしたのか、尊大な態度を取り戻して沙耶香に諭すように言う。

「ふ、ふふ……そう、ただの人形のお前にそんな感情があつたのね。いえ、芽生えたのかしら? まあ、どちらでもいいけれど。」

「……………」

高津学長の言葉に沙耶香の御刀を握る手が微かに震える。

「いい、沙耶香? お前が今抱いているのは罪悪感よ。お前は本当は私を斬りたくないのだから。さあ、沙耶香、私に泣いて許しを乞いなさい。そうすれば、私がお前を最強の刀使に——」

この人は本当に……っ!

高津学長の尊大な態度と言語に舞衣は完全に彼女を失望した。これは、例え沙耶香にやらせたとしても舞衣はそんな女を斬りたい。

「違う。」

そこで、静かな、強い声を発声する沙耶香は真っ直ぐに高津学長の目を見て続ける。

「私は、あなたの望む刀使にはなれない——なりたくない。」

「なっ、何を言っ……」

沙耶香からの拒絶に、高津学長は先程までの尊大な態度を再び崩されてしまう。

「都が背中を押してくれた、舞衣が私を抱き止めてくれた。空っぽで、人形だった私に心を育ませてくれた——私はこの熱をなくしたくない。」

沙耶香は高津学長に向けていた御刀を下ろす。高津学長は未だに目を白黒させて沙耶香の一挙手一投足に怯えている。

「私はあなたを斬らない。あなたは……かわいそうな人だから」
かわいそう、たった一言ではあるが、舞衣から見て高津学長にはその一言が深く突き刺さっているように思えた。

自分が使役し、支配していた相手に憐れまれている。尊敬や畏怖の対象ではなく、憐憫で見逃されたのだ。自尊心の高い高津学長にとっては屈辱でしかない。

これだけで十分だよね……。

「沙耶香ちゃん……」

舞衣は沙耶香の傍らに立ち、そつと彼女の左手の指を自分の指と絡ませる。

沙耶香もそれに応えるように指に力を入れる。

「……行こう」

「……うん」

沙耶香は舞衣の手を引き、高津学長に背を向けて走っていった。数秒もしない内に二人の姿は広間から消えていく。

「ま、待って……沙耶香」

高津学長は縋るように去り行く沙耶香に手を伸ばす。そこで誰かに、その手を横から叩き落とした。

「可哀想だね……高津学長は」

「おまえは……」

もはや恨めしく睨む気力もないのか、高津学長は呆然とこの場に出現としていた鎌府の制服を着ている竹島 雅を見つめる。

きつと、この人も自分の名前を覚えてないでしょう。雅もそう心得ている。

「糸見さんはもう貴女の所有物でも、道具でも、人形でもありません。彼女は一人の人間です。」

「……」

この人はもう死んだ人間と当然なのね。糸見さんにそう言われて、もう前の強い気がないでしょう……可哀想に。

哀れな視線で弱くなった高津学長に向う。けど、彼女に同情しちやいけない。だって、さつき糸見さんに散々言っている話は全部彼女に盗耳してた。

絶対に許さないんだ……この人。けど、糸見さんの意思も尊重したい。

だから、こっちからは彼女に警告をするしかない。

「もう、これ以上に糸見さんと衛藤 都さんと柳瀬さんと関わらないでください。でないと、私はあらゆる情報を使って、貴女を社会的に抹殺します。すべてのノロ実験情報はこっちに手を入れた……本当にクズだよ。高津学長は」

クズを見る目で彼女に横目をして、雅は気絶する夜見を背負う。

「臯月さん、もう帰ろう。帰って、貴女を治療して、暖かい食事とお風呂を用意しますから」

雅は微笑んで夜見をここから連れ出す。彼女はもう高津学長の顔を見たくない。

第28話：胡蝶の夢

誰かに呼ばれた気がする……………。

けど、声が全く聞こえてこない……………。

なんだろう？意識がないのに、誰かに呼ばれた気がする。

――また、来てくれたのね……………あまり歓迎しませんけど。

そして、唐突に目の前に一人の和風の女性が光と共に現れた。その女性は美しい美貌と黒色に近い桜色の長髪を持つ、身体は豪華の和服が纏っている。

なんか、何処かで会ったような……………。

――ここは隠世に近い質の世界、夢の世界を呼んでもいい。

夢……………？

――そう、貴方は愛宕の意識に選ばれた存在。ここはただあなたの意識を死者の世界へ向かわせないために作られた空間。

何かを言っている意味がわからない……………俺は死ぬの？

――いいえ、貴方の傷口はほとんど癒やされました。ここから離れると、貴方は無事。けど、ここでのことが忘れられる。何にせ、ここは貴方にとってただの『夢』ですから。

ここのことを忘れるの？

――しなきゃいけない。ここは貴方がいるべきじゃない世界です。あんまりこのこと関わらない方が良く……………でない、貴方の意識は永遠ここに囚われる。

女性は関心そうな口調で俺に近づき、そして柔らかい繊細の手で俺の手を触る。とても気持ち良い感触ですが、数秒後一つの剣が俺の手に現れた。

重っ！

――これは貴方の強い守護の意念により、貴方と繋がりはじめた御刀。本来神薙の巫女しか得られない力だけど、貴方の決意に感動されて、貴方を選びました。

女性は優しい口調で次々と話す。彼女の顔を伺うと、なんだか嬉しそうに見える。

ーけど、同調率がそんなに高くない故、この力はまだ使えません……が、貴方をここから連れ去る神力があります。本当に、いい子だね……この子は。

手に持っている御刀を優しく撫でる女性。まるで母親が子供を触ると同じ感覚。

彼女からそう感じた俺は、お母さん……と思わず口に漏れた。

それを聞いた女性はただ優しい微笑みで返す。

ーふつつ、私は母だけど、あなたのじゃないのよ。貴方の母の半分はずつと隠世にいる……今の貴方では会えない、行けない。現世は貴方を必要なの。

ータギツヒメはもうすぐ復活。それを払うのは千鳥と小鳥丸と我々に選んだ貴方しかない……だから、貴方を死なせじやいけない。

俺が大荒魂を……冗談だよ？俺はただの一般人だよ！

ー御刀に選ばれた一般人だ。さあ、最後の夢を見ましよう。これは可憐な少女の哀れな物語である。貴方は彼女を救うか、それとも世界を選ぶのか。貴方の選択に期待してます、神刀に選ばれし者衛藤 都さん。

額が彼女の指に触られた一瞬、俺という意識が再び閉じた。そして、再び夢を見た。



かつて、神童と呼ばれた天才少女がいた。

まだ小学生の年頃なのに、御刀に選ばれて、剣筋も年上の人たちより優れている。

彼女は無数の相手を倒し、最高の名誉をもらった。パパとママに褒められて、周りのおねーさんや同級生に認められて、彼女は凄く嬉しかった。

こういう幸福の環境で、彼女は毎日笑顔だった。

そして、刀使として五箇伝に入学していることも心が誇れ高くしている。だって、刀使は皆に好かれている憧れの存在なんだから。

当時の少女は目が輝いている、胸が高くドキドキしている。これらの日々はずっと幸せなんだろうと少女はそう思っているはずだった……。

入学当日にパパとママが笑顔で彼女を迎えてくる、彼女のことを誇っている甘い言葉は少女は好きだった……好きだった……。

あの日、彼女の体調が唐突に崩した。その後、彼女はずっと病院にいた。

最初は大した病気だと思ったのだけど。身体がどんどん痛くなる、呼吸も難しくなる。お医者さんの顔も絶望的に、哀れな目で少女を見た。

その時、少女は知っていた。もう、あの幸せな頃に戻れなくなる……。

「パパ……ママ……たすけて」

うわ言のように口から漏れた救いを求める声。けど、彼女の切に願われたその言葉に答えるものはもういなかった……。



「……………」

胸が痛む感覚と共に、都はベッドから目を覚ました。

「はあ……はあ……はあ……」

身体のどこでも冷やし汗でびしょびしょ。着ている病人用の服が身体に粘りしている。

「なん、何なんだ……あれは……」

さつき見た見た悪夢に都の心がとても辛くて、目からも無意識に涙がポロポロと落ちていく。

あれは一人の少女の悲しみの過去。本来人生が明るくなる彼女で

すが、突然の病気で彼女は手に持ちていたすべてが失った。

そして、彼女を支える大好きだったはずの両親も二度彼女の前に現れなくなる。こうして、彼女は一人で孤独の死亡を迎えていく。

「クソ……何なんだよーふざけるなー」

これは悪夢に対する責め言葉なのか、それとも少女の悲惨の運命に不満を示す言葉なのか……都は拳を強く締まって、指先に刺されて赤い鮮血がそこから溢れ出す。

「……………」

しばらく経つと、視線先は思わずに隣の机に置いているおむすびを捉えていた。

誰か置いていたのか知らないが、都はそれを取り食べ始めた。

味はもちろん美味しいが、身体が栄養を求める飢える感の方が重い。

「ありがとうございます。ご馳走様でした。」

このおむすびを置いていく人に深く感謝の意を示す都。彼は食べ終わった後、すぐ周りの環境から状況を掴む。

まず、ここは病室のような場所。きつと燕 結芽に倒された後、ここに送り込まられたのだろう。

ならば、ここは折神家の拠点の一つに間違えない。

「……最悪。早くここから脱出しないと」

速やかに最悪の事態を予測して、一刻早くここから離れたい気持ちが強くなってきた。万が一自分が可奈美たちを脅す用の人質にされたら、きつと可奈美たちは大人しく折神家の人間の前に現れるのだろうか。

それだけは避けたい。自分は彼女たちの荷物になりたくないから……。

「あ……江雪こうせつ左文字。」

ベットの隣に置いてある御刀を見つけ、都はすぐその名前を口に出した。

これは竹島 雅から借りた御刀だ。実はこの御刀はまだ使用者がいなくて、作られたばかりの御刀を都に貸した。

その刀身はその名のようにとても綺麗な刀。刀のことを愛する鍛冶師にとって、これは恋人みたいなもの。

……冗談を置いて、都がベツトから降りて、その御刀を持ち上げた。

「待たせたな、雪。」

御刀へ愛称を呼ぶ都。使用時間が長く持たないが、彼は結構この御刀を気に入っているみたい。戦友なのかな？一緒に戦ってくれたし。

まあ、ひとまず自己防衛の力が手に入れた。これがあれば、刀使だろうと対応できる。

「しかし……身体の調子が予測より良かったな。前回もそうだが……なんだろう？」

死ぬほどのひどい怪我を受けた記憶があった。けど、どうやって治療されて、身体が全調になるのかは都がはつきり覚えてない。

今回は折神家に救われたが、なんか「その前に治療された」気がする……。

「とりあえず、ここから脱出しよう。親衛隊の人間がここにいないのを祈ろう」

もし、ここでまた親衛隊の人間に出会ったら、間違えなく重傷されちゃう。その状況を避けたい。

故に、ここから先は今までより慎重しないと行けない……。

「……燕 結芽はここにいるのかな。」

病室から出て走る都は思わずその言葉を口に漏れた。別に彼女と出会いたいわけじゃない、むしろ彼女との戦闘を避けたい……。

けど、何となく彼女のことを気にしている。あの夢の少女は彼女と同じ髪色だった……。

まさかなあ……彼女は元気一杯のイメージだし、口も最悪。あの可憐な少女と似合わないイメージなのよ!?

……それでも彼女は可愛かった、強かった。敵じゃなかったら、彼女と仲良くなりたいと思う自分がいた。

そういう世界があるのかな……いや、考えるのをやめよう。重要なのは生きている今だ!

今このことを集中し、都は気配を気付いながら走った。

「それより……服も着替えないとね。」

外観もちゃんと管理している都は自分が着ている服を見て、早く何処かに服を盗んで着替えたい。

◇

一方、その頃――。

薫とエレン方面――。

「キエエエエー――！」

でかいな御刀を何回も振り回し、相手に攻撃する薫。けど攻撃速度が遅くため、簡単に避けられたが……結芽もその一撃必殺の攻撃を堤防しながら、軽く近づかない。

近づくとしても隣のエレンに邪魔されて、薫に隙を狙われて攻撃される。

代わりにエレンの方へ攻撃すると、もう一人に邪魔される。息ビツタリの二人の攻撃に結芽は珍しく苦戦している。

「クソ――！」

そして、この二人の高度の連携攻撃にイライラする結芽。彼女は一刻早く千鳥のおねーさんと勝負をつけたいのに、ここでこの二人に足止められた。

もう残る時間がないのに……！

「いやああああ――！！！！」

自分を中心に何回でも回転する薫はその大きな御刀をそのまま結芽の方向に投げ捨てる。回転した脅威が高くなる御刀は凄まじい速度で結芽を襲う。

「何これ――！！？」

もちろん、その新しい攻撃方にびっくりする結芽は身を地面に伏せて躲す。

「ねっね！ねっ――！！」

そして、後ろに姿を隠した荒魂はその御刀をキャッチして、薫たちの方に投げ返した。

けど、距離が足りない……と心の底から薫たちを馬鹿にする結芽。これで一人は攻撃手段が失うはず。

「3……2……1……ツ！」

「ゼーロー！」

でも、彼女たちはまだまだ連携動作を止まらず。薫はエレンの御刀を乗って、そのままエレンにすごい力で結芽の方向に振り出されていく。

いや、正確言うと……御刀の方へ。

「嘘!？」

「本当。」

薫は投げ捨てたはずの御刀を見事キャッチして、さらに回転する。まずいつ! 躲さなきゃ!

例え中学生の結芽でもわかる。あの回転数によって、作られた動力はどれほど脅威があるのか。

けど、回避するところが、結芽はその思ったより早い速度を予測できなかった。

「ぐっがあー！」

故に、彼女は回避できずにその攻撃に直撃されて、写しが解除された。

「ぐっ……!」

本能的に後ろへ退避した結芽ですが。写しが解除されたため、無力で両足と両手が地面に伏せた。

「あまりオレたちをー！」

「舐めないで欲しいデース。」

勝負はもうつけた。

けど、二人の声を耳に入り、結芽はとても悔しそうな顔だった。こんなところで写しが解除されたことは一度も思ってたなかった。今までも解除されていないのに……!

「!……のー!ぐっ……!げほっ、!ぐっ……!」

その時、御刀による自分を庇う神力が一時に失った結芽は喉からせり上がってくる液体を耐え切れずに口から吐いてしまった。あの液体は真っ赤な鮮血だ。

思わず口元を押さえていた手も血に塗れ、溢れた分が地面に染み込んでいく。

その光景に呆れられたエレンたちはこのような展開を全く予測しなかった。最強の少女はどうして急にこの状態になったのか……。

「……の……」

彼女の顔は苦しい、悔しいなどの怒りによって徐々歪んでいく。

あの二人を決して許さない、良くも時間をここまでに足止めするとは……！！

「……………の……………！！！！」

怒りの咆哮と共に、凄まじい力も結芽の身体から湧いてきた。あれは考えなくてもわかる、ノロの力だ。そして、その力の威圧は薫たちに恐怖を与えた。

夜見の暴走より遙か強い。あれは……ただのノロではない。恐らく、あれはタギツヒメの一部の力だ。

「うっ……………！！」

二人はそんな圧倒的な力に抑えられた。ただの気圧がこんなに重いななんて……。

「弱い癖に……っ！お前もだ！出てくるな！荒魂の力を使わない！」

結芽は自分の頭に強く叩く。彼女は暴走した状態だけど、夜見と違って、ちゃんと自己意識を持っている。

そして、自力でその力を抑えた。

「……………これはいいチャンスだ。エレン」

「ええ……あの忌々しい力がとんでもなく怖いのですが、あの子はその力を抑えている状態の方が、勝ち目がありマース」

まだ戦意が残っている二人は、荒魂の力を抑え終えて写しを再び発動する結芽と対峙。

「もう容赦はしないで。おねーさんたち……もう付き合う時間がな

いの！」

「……!!」

高段階の迅移を使い、エレンたちに襲いかかる結芽はさつきより攻勢が強く。

例え二人の連携がどれほどうまく、身体の対応が彼女より遅い。これはまるで、さつきの彼女は手抜きしたようだ。

「うっ……!!」

エレンより先に結芽の攻撃に写しが解除された薫は気を失って地面に倒れた。

「薫！」

そして、一人になったエレンは金剛力を使い、何となく結芽の攻撃を耐えたが。長く持たなくて、胸が結芽に貫かれた。

「うっ……」

そして写しが剥がれて、エレンも薫みたいに地面に倒れて気を失った。

「時間を取らせて……こんなのに……私が……!!」

御刀を高く挙げて、結芽は生身の薫たちにとどめを刺すつもり。

「ね……ねねっ」

そして、倒れた二人の前にねねが両手を広げて、まるであの二人を守ろうとするようだ。

「弱い癖に……どいつもこいつも……!!」

そんな弱いのに、勇気を絞り出した荒魂に結芽はとても不愉快だ。

弱い荒魂なのに、人を守ろうとするだと……笑いすぎる！

「ねね……」

「…………フン！」

御刀を振り、ねねの意識だけを斬る。ねねもあの二人みたいに息を失い、気絶した。

結局、結芽は斬る勇気がなかった。とてもムカつくけど、彼女は人を殺す勇気がなかった。

それもそうだ。彼女はただ中学一年の女の子だ。この年頃で人を殺すものか。特に彼女も悪い子ではなかった。

「……そろそろ、行かないと……はあ……はあ……」

薫たちを見逃し、写しを解除した彼女の動きがさつきよりフラフラだった。彼女も余った体力がなかった。

加えて、さっきの暴走で荒魂による侵食が加速された。彼女に残された時間はほとんど残されない。

「もっと……わたしの……凄い……ところを……見せないと……げほっ……げほっ……」

また鮮血が口から吐かされて、地面と制服を染み込んでいく。少女はただ一つの願いへの執着で痛みを耐え続けて、フラフラと歩く。

彼女の願い、ただ一つの願い。

あの日から今日までに続けてきた願い。

今でも鮮明に思い出せる。あの日からもう一度、燕 結芽という少女の終わりにかけていた人生に光明が見えたのだ。

折神紫に出会った、あの日から。



「……けほっ……けほ……」

寝返りを打つのも疲れるほどだった。燕 結芽という少女はもう何ヶ月も病院のベッドの上での生活を続けている。

両腕はまともになららない。両足は自分の体重を支えられない。

頭は真っ白で複雑なことは考えられない。肌は触れている物の感覚を教えてくれない。意識が朦朧として寝ているのか起きているのかさえわからなくなった。

「パパ……ママ……たすけて」

心の底から湧き出した願いが口から漏れた。あれは救いを求める声。けど、それを応える人間がいなかった、求める対象がいなかった……。

なんで、私と会ってくれないの？パパ……ママ……もう結芽を捨て

ちやうの……？

この数ヶ月ずっと考えていた不安の疑問。

結芽はもう長い間に大好きな両親の顔を見なかった。顔すらも時間によって朦朧になっていく、声も記憶も忘れ去ったような……。

彼女はずっとここで一人で苦しんで、寂しみと暮らしていた。

涙が出そうくらいに寂しかった、苦しかった。ずっと求めていた両親はずっと現れなかった。

「……いない」

もう諦めたのか、彼女は残酷の現実と向き合った。この病室には結芽以外誰もいない。

いや、強いて言えば、綾小路の相楽学長が定期に花瓶の花を替えに来たり、定期的に看護師が医療器具や部屋の掃除などの手入れに来るくらいだ。ノックが二回鳴らされ、見飽きた顔の看護師が入室してきた。テキパキと手慣れた動作で仕事をこなしていく。

ふと、片方の看護師が病床の結芽を見ながら言った。

「この子……ご家族は来てないの？」

「ええ……入院してすぐの頃は六、七回来てたんだけど。もう全然ね」

結芽の両親は入院が決まり、結芽が病院のベッドでの生活が始まって一週間から一度も来ていない。

一週間とは、結芽の病を治療することが不可能だと医師から説明を受けた日からだ。つまり、理由は明白。あの二人は結芽を見限ったのだ。

両親は結芽が綾小路武芸学舎に飛び級で入学が決まったとき、誰よりも喜んでいた。結芽本人よりもだ。だって自分の娘は有名になり、その名誉と共に両親も受け入れられるからだ。

あの二人は結芽が好きだったわけではなかった。あの二人は『天才の刀使という肩書きを持つ我が愛おしい娘』が好きだったただけだ。肩書きを失った今の結芽に用などあるはずもない。だから、彼女を簡単に捨てた。

——そうだ。誰も今の私なんて必要としてない。私はいらぬ子

だ。

ベットのの上に絶望する少女はどんどん近づく死亡を待っている。それしかできないのだ……。

「結芽、今日も……貴女を見て、嬉しかった。」

綺麗な花束を抱かえている黒いスーツを着ている黒髪の大人の女性。彼女……相楽学長は今日も来てくれた。

「……………」

けど、そこにいるのはなんの反応もしない結芽。彼女の目はもう絶望しか見えない。

そんな彼女を見て、相楽学長は一瞬苦しい顔を現した。

自分の学校に入学するはずの天才少女。入学式に彼女はあんなに活気が溢れた可愛い様子で自分と数回の話をしたのに、今は彼女からは何も感じなくなる……あるのは絶望だ。

両親の事情も彼女が知っている。だから、彼女の両親と代わって、忙しい仕事から抜き出して彼女と会って、色んな話をする。

せめて、彼女に寂しくさせたくないと思っていた相楽学長だが……毎回どんどん弱くなる彼女を見て、胸が痛くなる。

だから、彼女は決心してある実験に足を入れた。そして、今日はあの人物を連れてきた。

「選ぶがいい」

相楽学長と違う声が結芽の耳に入った。

もう数えるのも億劫になるほどの月日を同じ体勢で過ごしていた結芽を見下ろしながら問い掛けてくる女性の姿があった。腰まで伸びる黒い長髪に鋭い眼、腰に差した二振りの刀。

一目で誰なのかは見当りがついた。だが、今の結芽は声も出せない。

「このまま朽ち果て、誰の記憶からも消え失せるか」

彼女は握った左手を結芽に差し出す。ゆつくりと開かれたその掌中には赤黒い液体で満たされたアンプルがあった。直感的にわかった。

これは荒魂だ、と。

「刹那でも光り輝き、その煌めきをお前を見捨てた者達に焼きつけるか」

酷く甘美で、魅力的な、結芽の切望に対する最大限の提案だったと言えるだろう。

そこで、初めて結芽は反応してくれた。

ここで終わりじゃない。これからを切り開いていく。たとえ一瞬であっても、自分の生きた証をこの世界に刻みつけ、誰かの記憶の中で生き続けられる。

——私のすごいところ……見せられるんだ……

結芽は力なく笑うと、震える手で彼女の——折神紫の手に自分の手を重ねた。

これは親衛隊第四席が誕生の時——。

そして、これも彼女唯一の願いの生まれであった。

◇

驚くほど大量の赤い鮮血が結芽が歩いてきた場所と共に、その痕跡が地面に刻んでいる。

彼女は一步一步フラフラの身体で限界までに歩く。身体がどれほど痛いけど、苦しいけど……彼女は足を止まらずに進んできた。

途中で足が崩れても、力つくで立ち上がる。

それを支えるのはただ一つの願いだった……誰かの記憶に自分が確かに生きていた証を焼き付けたい。

「……………けほっ……………けほっ……………うっ……………」

そして、ようやく祭殿の直前に到着した結芽はここが限界だと知り。残念そうな表情で最後のところへ歩く。

「……………燕 結芽——」

だが、そこではもう先客がいるようだ。

「……………あれ……………お……………にーさん……………?」

一目で結芽はその人の顔を見知った。

「お前……………その身体と血は……………」

青年は彼女の様子を見て、心配そうな目でこっちに向かってくる。いらぬ……その目で私を見るな……。

「……また……きられたいの……？おにーさん？」

力なきの笑いに、結芽は最後までありのままに強かっていく。

「……ッー」

それを知った青年は悲しげな顔で彼女を見たが、すぐ涙を拭いて、決心した目で御刀を抜いて彼女と向き合う。

「結芽……最後の試合をしよう！今度こそお前を勝つ！」

「え……？」

青年の話が反応できない結芽はぼーと彼を見つめた。

何言っているの？この人……。

「……お前は自分の凄いとこを他人に焼き付けたいじゃないの？なら、最後は俺が相手をしてやる！」

「なに……を……わたし……よりよわいの……くせに……」

「ああ……だから、弱者最後のプライドをかけて、お前という最強を挑む！それが……俺の願いだ！」

本当に……何を言っているの。バカじゃないの？

「……いいよ。すぐ……わたし……のすごいところをみせつけるんだから」

けど、焼き付けたい。最後は誰かに覚えさせたいの……！このまま終わるのが嫌……もっともっと私のすごいところを見せつけたい！

キイイイイ——

「……！！」

その一瞬、につきり青江がまるで彼女の願いを聞いたような、彼女に再び御刀の神力をつけた。

その時、神力により結芽の身体の痛みが軽くなった。

「につきり青江……あなた……」

自分の御刀を見て、結芽はこのような現象に不思議と思ってた。本来、もう展開されるはずがない写しがもう一度彼女の身体を纏った。

それは、つまりー

「……………ありがとう……………私のわがママをずっと聞いてくれて」

結芽は素直に自分の愛刀を「ありがとう」と伝う。

本当に、ありがとう……………最後の時間を私にくれて。

そして、彼女は青年ー都と向き合う。

「おにーさん、すぐ私のすごいところを貴方に見せつけるんだから

！」

「ああ……………一緒に楽しもうね。結芽」

両方ともにいい顔で向き合う。今度こそは最後の試合になる。

そして、数秒経ち。両方は動き出す、この夢のような幕を挙げた。

第29話：夢（結芽）の果て

結芽と遭遇する一分前――

「ここは折神本家なのか……」

地下医療施設から出て来た都は早速着替え用の服を見つけ出す。それを着替えた。

幸い折神家でもちゃんと男性服があるようで、ひとまず安心した。

「それにしても、ちよつと騒がしいような……この付近に荒魂があるのか？」

少し戦闘の音を聞いた都はまだ現状のことを知らずに祭殿の近くまでに行ってしまった。

本来は折神家の一番奥の場所までに行くじゃなかったのが……彼は道に迷ってしまった。

ここは彼がまだ来ていない場所だから、このルートはわからなかった。

そして、彼はそこで倒れ込んだ獅童たちを見つけた。

「あれは……獅童さん………どうやら、気絶しただけのようだな。」

ひとまず息がまだあることに安心する都。

しかし、親衛隊の人間がここで倒されたということは………多分理由が一つしかない。

「可奈美たちはここに突入したのか……」

都の知り合いの中で親衛隊を倒せる実力者は二人だけがいる。ならば、可奈美たちはここに高い可能性が高い。

そして、第一席が倒されたということは、可奈美たちはもう折神紫のところへ参ったのかもしれない。

「理由はどうあれ、ここは決戦のようだな。ならば、俺もここにいられないな………可奈美たちのところへ――」

その時、都はなにか弱々しい気配を感じた。

「………燕 結芽！」

気配のところに向かうと、都は思わず彼女の名前を口に漏れた。
あれは――親衛隊第四席の燕 結芽!?なんて彼女はここに!
そう、彼が気付いたのはフラフラの身体で歩いて来た薄桃色髪の結芽。

折神紫以外の最強の刀使。けど、今の彼女はもう前の余裕が見えない。むしろ、死にそうな雰囲気か漂っている。

「……………あれ……………お……………にーさん……………」

どうやら、こつちの声に反応したようで彼女は都の方へ見た。意外……いや、もう彼女から顔の変化が見えない。

「お前……………その身体と血は……………」

そして、都は彼女の口元の血跡と血によって染まっていた制服から彼女の様子を覗う。どう見ても、あれはただの無事じゃ済まない……彼女は何か起こっているのか都は推測できない。

目当ての外傷が見えない。ならば、?傷の可能性が高い……………けど、刀使での戦闘はそんなダメージが喰らえないはず。

「……………また……………きられたいの……………おにーさん?」

力なきの笑い。都でもわかる。彼女は強かっていることを。

……………お前は、あの子なのか。

そんな強がりの彼女を見て、都は一瞬夢の中に現れた哀れな女の子を思い出した。同じ髪色、同じ辛い顔をしている、誰もいらぬ可憐な女の子。

あれは……………結芽……………なのかつ!

「……………ツー!」

さつきの悪夢を見たような感覚がまた都を襲ってきた。あまりにもの悲しみが表情で表し、危うく涙も出そうくらい。

ただ九歳という若さで御刀に認められた。そして僅かな期間で天然理心流の真髄を修得し、剣腕を振る舞った。その実力は他の追随を許さないほど卓越しており、神童と謳われるほどの天才。

その話を聞きつけた綾小路の学長によって、彼女は綾小路武芸学舎中等部に飛び級で入学。後には御前試合優勝、親衛隊入りもほぼ確定していたはず。

それを聞いた周りの友人やご家族は凄く喜んでゐる。皆は彼女をお祝いしていて、彼女は多くの幸せに包まれていた。人生が明るくなった彼女はそのまま入学して、有望の刀使として振る舞うはずだった……。

けど、入学式で謎の病気に襲われて、彼女は入院生活を余儀なくされた。病によつて内臓の機能が低下、筋肉が硬直して日常生活もままならなくなった。治療方法も見つからず、彼女はベッドの上で余命一年を宣告された。

そして、それを知っていた“彼女の名誉に目付けた”最低の両親は手の平を返すように貴女に関心を無くし、彼女を簡単に捨てた。こうして、彼女は数ヶ月に絶望のまま死を待ち続けていた。

何というふざけた人生なんだろう……なんて一人の少女にそんな人生を過ごさなければならぬのか！酷すぎないか!?

その後の話は、都の推測によつて加えた。

恐らく彼女はノロのアンプルによつて短い命が延びていた。そして彼女は親衛隊最強として、自分と四回の手合わせをした。

けど、ノロの力でもその病を完治してなかった……。それどころか、ノロの力は逆に彼女を侵食した。

ノロは人類が作った災い。神聖の御刀の力と正反対する力だ。今までは恐らく刀使の力でノロの力といいバランスができて、うまくこの命を救う力をコントロールができたと思う。

しかし、それも彼女の身体が病気でどんどん弱くなる度にそのバランスが崩せた。

ここで、都さえも知らなかったのは結芽が彼との数回の戦いに無理矢理身体を動かすことによつて、症状が更に悪化されることになった。

癒やされない謎の病とノロの侵食の下に……彼女はもう残す時間がないんだ。

ならば、せめて……夢の中に聞き取れた願いを叶えてやりたい。

「結芽……最後の試合をしよう！今度こそお前を勝つ！」

溢れた涙を拭き、都は御刀を鞘から抜いて結芽と向き合う。

「え……………？」

そうしたら、彼女は都の唐突の発言に反応が追われないようで初めての反応を示した。

けど、これは彼女が望んだ選択のはず……俺は彼女の最後の相手をしてやろう。お前の最後をこの脳に焼き付かれない！

「……………お前は自分の凄いとこを他人に焼き付けたいじゃないの？なら、最後は俺が相手をしてやる！」

「なに……………を……………わたし……………よりよわいの……………くせに……………」

ああ……………前回の戦闘ではよくわかった。お前は最強だって知っているよ。けど、お前を超えたいという心もある。

これは剣士の本能なのか、それとも小さい頃の教えなのか……………俺は貴女と戦うたびに胸が熱くなる。もつと見たい、もつと追い付きたい、もつとお前が持っているすべてを見てみたい。

これはただ彼女の願いを叶えたいだけじゃない。自分のためでもある……………。

「ああ……………だから弱者最後のプライドをかけて、お前という最強を挑む！それが……………俺の願いだ！」

迷わず、彼女に自分の思いを伝える。無茶するなのかもしれない、バカ的行為だと思われるかもしれない。けど、そうしないと彼女はそのままに終わる。それは決して嫌だ。

彼女にそんな悲しい結末を迎えさせたくない！

「……………いいよ。すぐ……………わたし……………のすごいところをみせつけるんだから」

彼女の返答と共に、彼女の瞳から少しの活気さを感じられた。彼女もきつと最後は誰かと戦って、自分の強さを刻み付きたいのだろう。いいよ、お前の最後を見届けよ。この一時は俺は決して忘れない。

キイイイイ——

「—————!!」

その時、結芽の御刀から耳障りでよく響く音が結芽の脳内で反応さ

せた。それと共に、彼女の身体は写しが纏わされた。

「にっかり青江……………あなた……………」

自分の御刀を見て、結芽はこのような現象に不思議と思う顔だった。

「……………ありがとう……………私のわがままをずっと聞いてくれて」

そうしたら、結芽は嬉しい顔で素直に自分の愛刀を「ありがとう」と呟いた。

なんだ、そのような可愛い顔もちゃんとできたじゃん。

「おにーさん、すぐ私のすごいところを貴方に見せつけるんだから！」

構えをとって、結芽の動きはさつきより良くなってきた。あれは御刀の神力による、守護の力なのか？すげえなあ……………

「ああ……………一緒に楽しもうね。結芽」

両方はともにいい顔で向き合う。今度こそは最後の試合になる。

ー雪、もう一度俺に力を貸してくれよ。今度こそは最後だ！

キイイイイ——

僅かに江雪左文字も都に反応した。

それから数秒経ち。両方は共に動く、この夢のような対決がこの決戦の地に幕を挙げた。

◇

刀と刀との激しいぶつけ合い。結芽は肉眼が追い付けない迅移を使って、一瞬で5回の斬撃を行った。

けど、その中の三回は都の刀で防げられた。

「にひっ！」

けど、結芽の攻撃はまだ終わらない。彼女は都を攻め続けた。

もちろん、前回ののように肌が斬られて赤い鮮血が傷口から流れ出したが……都はその痛みや傷口を気にせず、全力で彼女の動きを読み、防げる、避ける、反撃する。

「……」

けど攻撃は彼女に届かずに、都はただ一方的に防御に徹した。例え当たったとしても、それは刀以外の拳や蹴る攻撃。

それを作る効果はただ一時に撃退。それに、これも相手が距離から離れるところにすぐ迅移を使って一瞬に接近されたから、この技はできるだけ回避が難しいタイピングで使うしか……。

「だいぶに慣れてきたな……」

結芽の背後攻撃を防げながら、都は結構楽しんでる顔だ。

僅かだが、都は彼女との戦闘で少しずつ成長してきた気がする。母もかつて都に「戦闘で成長するタイプ」だと褒められた気がする。

「くっ……！結構やるね。おにーさん。」

「それはどうもー！」

彼女を弾けて、そこで両方は再び態勢を立て直す。

「おにーさん、少し本気出してもいいのかな？」

「本気でかかってこいよ！最後なんだから、お前の本気を見たい！」
都は不敵の微笑みで結芽を見つめる。彼女はずっと本気で攻めるじゃなかった……だって、彼女は本気を出したら、すぐこの勝ち目がない勝負を終わらせる。

本当にどうしようもない優しい、残酷の子供だね。

「へえくくじゃあ、本気で……行くよー！」

そう言つて、彼女は可奈美と戦うときに使う実力で攻めて来た。けど、都が得意なのはどんな初撃でも防げられる。

「……」

「うわあ〜!?なんちゃって……おにーさんは本当にあれが好きだね！……ぐっ!?!」

居合をするつもりだが、彼女に背後が回された。そこで居合のせいで大きな動きによって作られた隙だらけ都を斬る結芽。けど、そうはうまくいかない。

左足が後ろの方の蹴る攻撃を結芽が刀を持ってない腕に当たって、一時に彼女の攻撃を中断にした。

そして、都は急ぎに身体重心を収まり。彼女と向き合っただけで下段攻撃で彼女を切る。

「ー!?」

ギリギリのところ結芽は迅移で後ろの方へ退避した。

「結構ギリギリだね……」

「やっぱり出せるんだ。あの状態……」

「これは俺の勝機だからな。けど、もつと驚くことがあるよ。」

「へえ〜それは楽しみだ。」

小悪魔の顔を示す結芽。こういう顔は特に好きじゃないけど……彼女のそんな余裕ぶりの顔を見て、こっちも安心した。

それと、さっきの一撃で超集中モードに転移した。彼女と戦うときはこのモードじゃなきゃ勝機が見えない。

身体に大きな負担がかかるけど……この状態で『できることがたくさんある』。

「さてーそろそろ、こっちも攻めるか……!」

「あれは……」

都の構えが僅かに変えたところを見て、結芽も結構深刻の顔に変えた。

「ふっ……行くぞ。」

久々の《絶空》を使い、先に一步を取る都は初めて攻撃方になった。

そして、都はさっき『結芽の攻撃を自分の技にして』攻撃する。

「……嘘!」

もちろん、それを気付いた結芽も驚く顔しながら、攻撃を防げた。何にせ都は彼女の技を使ったのだから。

「だから、言ったのだから? 驚くって」

「……にひっ! やっぱり、おにーさんは面白いな! こりゃあ!」

「ぐっ……!」

彼女が攻められても、それでも力尽きて都を退けた。

手が痺れるほどの重攻撃……これは八幡力か？予測以上に対応しづらい能力だ。

「おにーさんを相手なら……全力で行ける気がする！いいよね？おにーさん。」

「ああ……もつと貴女のすごいところを見せてくださいな！」

彼女の息が僅かだが、荒れになった……彼女を支える御刀の力もそろそろ限界に近い。

なら、こっちは彼女の本気を耐えなければ……その終わりの時間までに耐え続けなきゃ……！

「……っ！」

ほぼ同時に二人は動き始めた。二人は手加減なしで戦った。

まず柳生新陰流で防御を固まる、たまに彼女の技をすぐ学んで使いこなし、彼女の攻撃を対応して、反撃する。

2つの流派を一つの流派に融合して使いこなす絶技。これは超集中じゃなきゃ実現できない絶技である。

特に、都は初めて結芽の天然理心流を使用した上で集中力が超集中の程度じゃなきゃ、うまく使いこなせない。

でも、そのおかげで結芽から受けたダメージ少なくなる。どんどん彼女に追いつける。

「おにーさんは別の意味で千鳥のおねーさんと同じくらい強いね！楽しいな！」

跳躍、都の背中を攻撃する。けど都が先に読み取り、体術で結芽の攻撃を妨害し、それから反撃する。

「俺も自分がここまでやれるとは、思わなかったよ！……やつぱり結芽はめっちゃ強いな！」

「当たり前じゃん！私は一番強いだし！」

「そうだね……そこは同感かな！」

結芽はそこまで強いから、遥かに強いから。彼女を追いつくため、都は驚く速度で進化する。

だかその代わりに、都の身体はどんどん傷が増やす。せっかく着替えた服も血によって染まれていく。

手と足も戦うほど重くなる、刀を挙げると腕から悲鳴のような音が聞こえた。

それでも見たい……！もつと彼女の剣を見たい！

純粹で何も隠さず、この斬り合いを精一杯楽しんでる彼女をもつと見たい！

それは昔の俺がずっとお母さんと可奈美から見ていた輝く光景であった。

だから、無意識に憧れていたかもしれん。

可奈美とお母さんと……お前だ。結芽。

剣の最高境地に至る貴女は何より輝く光なんだ。

「はあ……はあ……はあ……そろそろ……はあ……終わるね。おにーさんは……もう戦えないだよね？」

そして、五分ほど以上続いた激しい戦いの末、傷一つでも入れない結芽は荒れた息で、もうボロボロになった都に刀を指す。

これはもう第三回目の敗北だ。結局、全力を出しても、この子を越えることができなかった……。

主に彼女は刀使だから。その差は決して超えられない……ちよつと悔しい。

「うっ……！」

「……最後まで付き合ってくれて、ありがとう。最後の相手はおにーさんでよかった。……私の凄いところ、全部覚えたのよね？おにーさん。」

「ああ……ばつちりだ。最高に可愛かったし、強かったのよ」

冗談を言うつもりで結芽の不安を振り払う。それは戦いが終わった後、俺が唯一できることだ……。

「なにそれ、あはははーうっ!!」

「結芽？」

突然彼女から異変が起きた。それを気付いた都はすぐ彼女に関心する。もしかすると、また病気なのかもしれない。

「……や、やめて……出てくるな！私は……最後まで……人間のままだいたい！荒魂だなんて……！」

彼女はとても苦しそうに見える。何かを抑えている？

彼女に近づくと、

「結芽！」

「こっちに来るな！でないと……うあああああああ
あー！ー！」

彼女の瞳が一瞬に赤くなり。そして、禍々しいの何かが彼女の身体から漏れ出し、この場を支配する。

「なんだ……!?あれ……！」

わからない現象が目の前に起き、都は混乱と恐怖という状態に落ちてた。

あれはどう見ても、いいものではない。とても禍々しいものが結芽の身体から出てきた……あれはノ口なのか？何という禍々しい気配！

「ぐっ……おにーさん……逃げて……！私はもう抑えられない
みたい……」

「……………」

結芽は苦しそうな顔と辛そうな口で都を逃げて欲しいと願った。どうやらこれは体内にあるノ口の暴走みたい。

「…荒魂が……私の体が弱くなった隙を掴んで支配しようとした
……みたい。だから、おにーさんはここから離れて！」

「……………」

「何をするの!?早く逃げないと……私は……」

けど、その願いはどうしても聞き取れない……お前を二度と「見捨てるものか」！

「結芽……こっちに全力でぶつけて来い！俺がお前を解放する。」
重くなる身体を無理矢理に動かせて、居合の構えを取る。

「え……?無理だよ……刀使ではない弱いおにーさんはこいつを
どうしろと言うんだ……!?!」

「斬る。結芽、俺を信じてくれ！お前を見捨てはしない……!無理
でも写しと共にあいつをぶった斬る！」

「……なんて……私なんか……のために……?」

子供の様に泣きじやくりながら、この暴走の力を怯えている結芽は震えた唇でそう聞く。

彼女は荒魂になるのが怖い、自我を失うのが嫌。最後まで人間のままにいたい、怪物になりたくない。

けど、最も嫌なのは目の前にいるおにーさんを殺すことだ。彼は自分の願いを聞いてくれた人だ。

だから、そんないいおにーさんを自分の手で殺したくない！嫌そうな表情で泣き付く結芽を見て、都はさらに決心した。

ー彼女を救うと。

彼女はもう散々に見捨てられた。今更、彼女を見捨てるなんてできない……！見捨てたら、一生が後悔する！

「だって、貴女は苦しそうな顔をしているから！そんな顔をしているお前を『見捨てない』！必ずお前を救う！今度こそお前を救ってみせる！」

「……………本当に馬鹿なおにーさんだね。」

「自分を見捨てない」という言葉を聞いて、結芽の口角が僅かに上がった。

彼女はずっとこの言葉を待っていた。誰もいららない自分が必要だと……。

「……………信じるね。おにーさん」

彼女は都を信じて暴走した力を抑えるのが諦めて、こっちに突刺の構えを取る。

今の燕 結芽はさつきより遥かに強い。この攻撃もきつと今までのように防ぎれない、必ず都を殺すのだろう。

死の恐怖を知り、都の足と手が震えてきた。これは完全に命捨てとも言えるバカな行為だと都も自覚している。

けど、やらなきゃならない……。だって、彼女は自分を信じて自分を殺しに来たのだから。

そんな少女の信頼を裏切らない。彼女が受けた痛みがもう十分、寂しい気持ちも十分なのよ。

だから、俺がここで彼女を受け止めるしかない……。いや、しなきゃ

「あ……………」

「結芽！」

暴走した結芽を止まらせた後、彼女と同じく白い光が身体から消え去った都は急ぎに後ろの方へ倒れ込む弱き少女の身体を支える。

「……………おにーさん……………けほっ……………けほっ……………やったわね……………けほっ……………ガハア!!」

自分を優しく抱かえる都を見て、結芽は小さく笑ったが、すぐ大きく喀血した。

「結芽……………っ！」

それを見て、悲しみという感情を挟む心配する顔になる都は、彼女を止まっても、必ず起こる結末が変わらないと知った。

元々、彼女の身体の中に荒魂を宿していても、病気が完治した訳ではなかった。故に、荒魂が一時に払うとはいえ、その衰弱の原因がまだ続くのだ。

「そんな顔しないでよ……………けほっ……………けほっ……………」

「……………結芽……………！」

涙がボロボロに結芽の制服に落ちていく。都は本気で結芽のことを心配していた。

それで、結芽は凄く嬉しかった。だって、親衛隊のおねーさんたち以外に初めてそんなに関心されたから。

「もうくく泣かないですよ……………私を勝ったのに……………」

「違うー!あれは……………勝ったのではない!お前から一本さえも取れないのよ!」

「……………でも……………けほっ……………暴走、止めてくれたのよね?」

「……………それは、お前の力ではない。だから、あれはなし!」

「……………けほっ……………けほっ……………もうく悔しいよ……………いつも心が読まれて悔しいよ……………」

自分の望みのすべては都が見破った。確か、荒魂の力は自分の力ではない……………あくまであの力は命を延びるだけのもの。結芽は一度もその力を使うつもりがない。

だって、あれは燕 結芽の本物の強さじゃないもん。

「…………おにーさん…………私は強い？」

「強いよ…………いくら頑張っても追いつけないほど強かった！もう嫌でも忘れられないくらいだよ！」

「……………そうか」

そして、彼に覚えられて結芽も凄く嬉しい。自分の強さは誰かに覚えられるのが凄く嬉しい。

「結芽…………その木で休もん。俺もさつき力を入れ過ぎで手が疲れたよ。」

「うん……………」

都の提案に結芽は小さく頷く。

そして、弱まった結芽を抱きついて、彼は彼女を木までに運ぶ。

身体が軽い…………あんなに強いのに、身体はこんなに軽いんだ…………。

彼女の体重に都の胸がまた刺された。…………こんな弱い身体で自分と戦うんだ。

「……………ありがとう、おにーさん。色々とありがとう……………」

お互いが木に背中を伏せて座ると、結芽から咳と共に話をかけた。

「私は…………けほっ…………けほっ…………おにーさんに酷いことをしちやつたのに…………けほっ…………けほっ…………最後までに付き合ってくれてありがとう。」

「……………仲間だろうか？俺たち。一応俺は第五席(非公認)だし。お前の面倒を最後まで見るのはこの年上の責務だ。」

「……………仲間……………」

「ああ…………仲間だ。」

その詞を聞いて、結芽は少し昔のことを思い返す。あれは自分が親衛隊に配属初日の話だった。

あの時、ノロの力により病院から出ていた結芽は早速任職する場所折神家へ参った。そこで、彼女は数ヶ月に得ることもなかった久しぶりの太陽の暖かき、青い綺麗な空と白い雲、静謐な空気と大きな建物に新鮮感を覚えた。

世界は再び輝くなんて…………綺麗なだと思っ彼女が折神家に探険して、色々の部屋までに行き、鎌倉の町も眺めた。最後はおむすびを作って

今度はおにーさんを加えて六人で一緒に……。

「ああ……一緒だね！その時は結芽が大好きな好物を作ってあげるよ！お腹にいっぱいをするから！」

切ない声と辛い気持ちで、来世があるかどうかかわからない未来への約束をした。

「そ……………これは……………たの……………しみ……………だ……………ね」

「うんーその時、うちの妹もー」

どんだん遠ざかった都の声に、結芽もわかった……………自分はもうすぐあの世へ行つちやうことを。

真希おねーさん……………寿々花おねーさん……………夜見おねーさん、それと紫様。ごめんなさい、私は先に行つちやうね……………約束守れなくてごめんなさい。

けど、私はもう寂しくないのよ。だって、おにーさんは私を覚えてくれたから、私の手を握ってくれるから……………私はもう一人じゃないのよ。

ー最後、おねーさんたち、おにーさんたちと出会ってよかった。結芽は幸せだよ。

「……………」

「それでね、？和が大好きなチョコミント料理も出し……………たい……………と……………結芽？」

「……………」

「チョコミントが嫌いかな？歯磨き味でも言われたし。」

「……………」

「沙耶香は貴女と友達になれると……………」

「……………」

「可奈美も……………」

「……………」

「……………っ！」

もう何にも返答してくれない少女。彼女の手はもう生命の脈が感じない。温度もどんだん失われていく。

「……………結芽……………良い夢を……………」

彼女はもう動けない、呼吸も感じない、もう彼女の声が聞こえない。
燕 結芽は目を閉じて、安らかに眠るように亡くなった……。

ただ中学生一年生の年齢で、最強とも言える実力さを持ち。悲惨の
経歴も乗り越えて、さっきまでに自分らしく生き続けてきた。

これは……良い人生でも言えるのだろうか……。

本来、彼女は名高い刀使として良い人生を過ごせるはず。なのに、
最後は病で若く亡くなってしまった……。

この世界は理不尽だと、都は再び認識した。

この世界は甘くじやありません。なぜなら、生命はいつもこんな簡
単に奪われたのだから……。

それは誰も止められないこの世界のルールだ。

本当に残酷な世界なんだな……。

第30話：決戦

「……………」

十条？和に倒された獅童真希はようやく意識を取り戻して、目が覚めた。

「僕はここでどれくらい気絶したのかな……」

彼女はまず自分がどれくらいここで倒れ込んだことを確認する。時間が短いなら、もしや紫様を助けるチャンスがあるかもしれない。

せめて、三十分以内でお願いしたい。いくら紫様でも三十分以上の戦闘では疲れるのだろう。

そうならない前に——

「……………結芽？そこにいるのは結芽か!？」

立ち上がって、数十秒かからずの徒歩で彼女は遠くの木の下に結芽らしきの人物を見つけた。

そつちへ急ぎに走ると、彼女はある面識がある男とそこで眠っている。

「……………衛藤 都!?なんて病室にいるはずの君が結芽と一緒に——待て、これはっ!？」

地面に溢れた大量の鮮血と結芽の服の上にある外傷一つもないのに、大量の血痕を発見した獅童。

最初は結芽の服に付いている血痕に驚いたが、彼女は早速この状況を理解した。

少なくとも、結芽の状況が理解できた。

「……………余命僅かな命を繋ぐため、ノ口を受け入れたのに……………残酷の運命は変えられなかったのか……………」

彼女も結芽の過去を知っている人物。今までは知らないふりで彼女を接した。彼女が無事だと信じていたのに……………この結末はあまりにも残酷だ。

「結局、僕たちが得た力は何だったんだろう……………救いの力ではなかったのか——!？」

結芽の死によって悲しくなる獅童。彼女結芽はそんな結末を迎えられ
るはずがなかった……。

「結芽……そんな……!」

そして、彼女を続いて此花寿々花も意識を取り戻して階段から降り
て、結芽の結末を見届けた。

「……寿々花、もう意識を取り戻したのか……」

「ええ……それより、結芽はやはり……」

「うん……」

寿々花の予想に頷く獅童。そんな彼女の反応を見て、寿々花も危う
くシヨックで平衡を失うところ。

親衛隊最も年下、妹みたいな可愛い結芽は安らかな顔で亡くなっ
た。

「……そちらの衛藤 都は?」

「わからない……結芽を見つけた時、既にこの二人がここに……そ
れと、息がまだある。」

彼の鼻の下に指を置くと、確かに僅かな息を感じる。結芽と違っ
て、彼は生きているが……その怪我では長く持たない。

一体ここで何かを起こっている……なんて彼は結芽と一緒にいる
? ?

そして、その怪我は一体何なんだ……。

「真希さん……!」

その時、寿々花から急ぎの警告のところ、

「……親衛隊の!」

四人の刀使が彼女たちの前に現れて、構えを取った。

「お前たちは……紫様を逆らう逆賊か……」

「獅童真希さん……お久しぶりです。」

「……」

先頭にいる刀使——柳瀬舞衣は先に獅童と話をかける。そして後
ろにいる仲間たちも彼女たち二人を警戒している。

「……こつちで何をしている? 可奈美ちゃんたちは?」

「もう紫様の元へ行ったのさ。」

「そうですか……あそこにいるのは燕　結芽さん……と都くん!?」
視線が僅かに獅童から逸して、左にいる結芽と都の姿を確認した。
それと同じく視線がそちらに逸らす仲間たちも驚く顔だが、すぐ獅童の方へ敵意の目で睨む。

「都くんは何をした……」

「別に何も。ここに来る時は既にここで結芽と一緒にいた。」

舞衣の静かの怒りに対して、獅童は落ち着いた顔で彼女に真実を語る。

「……………嘘ではないみたいですね。なら、都くんを返してもらおう」
舞衣は真面目な目で、獅童を睨む。彼女はさつき沙耶香と一緒に地下施設に都を探し回ったのだけど、彼の姿が見当たらなかった。

一応地上に戻って対策を作ると思っていたが、すぐ薫たちと合流した。

「それは無理だ。我々はまだこの男がここで結芽と何かをしたとわからない限り、彼をお前たちに渡すわけにはいかない。」

「なら……………力尽くで返してもらおうよ。」

写しを発動し、舞衣たちは早速戦闘モードに入る。

「上等ー」

ドオオーンー!!

その時、大きな地鳴が起こり、六人は一時に戦闘態勢を解けた。

「これは……………!?!」

「地面から!」

「地面……………まさかー!」

大きな揺れに対して、獅童は何かを気付いたようだ。

「おい、これは何なんだ!獅童真希!説明しろ!」

薫は身体の平衡を何とか維持して、獅童に説明を求める。

「(ここでの地下にはノロの大容量貯蔵庫がある!そこで何かを起きたに違いない!」

「……………まさか、タギツヒメがー」

「舞衣……！」

「クソ！舞衣と沙耶香は都のことを任せる。俺とエレンとねねは可奈美たちの様子を確認する！」

「ねっ！」

「待て！君たちを紫様のところへ行かせるものか！」

「いや……真希さんと他の皆もそちらへ移動してください！」

「寿々花!?何を言っている……！」

こんな動乱の中で、寿々花は冷静で状況を判断する。しかし、獅童はその提案を受け入れないみたい。

「私はもう戦う体力がない……もし、そこで大量のノロが漏出されたら、多くの手助けが必要だと思います。衛藤 都と結芽のことは私に任せてください」

「……信用してもいいのかな？此花さん」

敵意を満ちた目で寿々花を睨んでいる舞衣。彼女は都のことを相当に大事しているみたい。

本当に羨ましい主従関係ですわ……。

「ええ、貴女の大事な執事に何かあってもお守りいたします。此花家の名誉にかけますわ。」

「……わかりました。沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃん、私達はこれから可奈美ちゃん？和ちゃんに加勢します。」

寿々花の誓いを聞いて、舞衣は敵意を下ろして、薫たちの方へ向かう。

「いいの？ミヤミヤを親衛隊の人に……」

「大丈夫。彼女は信用できる人。それより、早く行きましょう！可奈美ちゃんたちのことも心配しているし」

「舞衣の判断を信じる……」

「ねね！」

「仕方ないな……ねねもそう言ってたし。」

方針がほとんど決めて、四人の視線はすぐ獅童の方へ集まる。彼女はきつとそちらへ行く道がわかるはずだ。

「真希さん、結芽の処置は私にお任せください。このまま放置する

と、彼女が荒魂に――」

「荒魂……そうか！しばらくすれば、結芽はもう一度立ち上がって……」

まるで希望が拾ったように、獅童の目は結芽の方に移る。

彼女はもう一度生き返る！そうすれば、また四人で……！

「真希さん……！」

しかし、そこで獅童が寿々花に平手打ちされた。

「寿々花……？」

彼女に平手打ちされて、獅童は呆れた顔で悲しい顔をされた寿々花の方へ見る。

「お分かりでしょう。それはもう結芽ではありませんわ！」

「え……？」

「あれは結芽という器を苗床にした、ただの荒魂。そうならば、もう一度彼女を殺さなければなりません。」

「……！」

寿々花に気付かせられて、獅童はノ口を投入された時に聞いた話を思い返した。

彼女たちは……ノ口を受ける身。死んだら、荒魂に身体を寝取られて、完全に荒魂になる。

「此花さん……それって……」

「ええ……私達は貴女たちのように普通の死に方を選べられない。死んだら、放置されると強力な荒魂になります。」

「……！」

舞衣の質問を答えて、彼女は悲しい顔を表した。いや、彼女だけではない、その話を知った皆も悲しい顔になった。

普通の死が許されない。それは親衛隊の宿命。

「結芽……僕たちはもう普通に死ぬことさえ許されないのか……」

「元より、その覚悟をできていたはず。荒魂を受け入れた時から」

「……」

「さあ、お行きなさい。親衛隊第一席。もう悲しむ時間がありません」

んわ。」

「……………行ってくる」

寿々花に励まされて、獅童はやっと決心をして、舞衣たちに向かう。「道は僕が案内する。ただし、ノロが漏出される可能性があるからそうした。決して君たちに紫様に危害の行為を加勢するわけではない！」

「……………わかりました。獅童さん、道案内はよろしくお願いします。それと、都くんも……………」

「ええ、お任せしてください」

都の安全の保証を得て、舞衣たちは安心した様子で獅童の後ろに付いていく。

目的はこの地下、折神家急襲作戦の最後の戦場へー。

「……………何をしたのか知りませんが、結芽を救ったのでしょうか？ 貴方って男は……………感謝いたしますわ」

結芽が安らかに永遠に眠っている顔を見て、寿々花はそれを都のおかけだと推測していた。

何にせ、お互いは手を繋いだのだから…………。

きつと、結芽は最後までは幸せなのでしょう…………。



折神家急襲作戦開始した40分後——最終決戦地。

「どうやら、観客がすべて集まったみたいだな…………」

折神家の地下にあるノロの大容量貯蔵庫にて、もはや人と呼べる外見ですらなくなった物が彼女たちを待っていた。

「あれは……………紫様……………」

膝まで届く長い黒髪。上下に纏った軍服のような白い制服。左右の手に握られる二振りの御刀。あれは間違えなく折神紫——だが、彼

女の髪から伸びる物体が明らかな異常性を隠しきれていない。

それを目に映った獅童は信じられない顔であるの偉大なるあの大方を見つめる。

「あれはご当主様ではありません。タギツヒメ。20年前の大荒魂はずっと折神紫の身体でこの復活を待ち続けてきた。すべてはこの時の演技です。」

「そんな……！馬鹿な……っ！」

「本当だ。質問があるなら、張本人に聞け」

「それにしても、でかいデスね……勝てそうに見えないのデス。」

「あれは少し怖い……」

「ね……」

舞衣の回答に獅童はまだ信じていないのだが、薫たちに言われて、加えて目の前の光景はどんどんこの真実を飲み込む。

「……っ！僕たちはずっと彼女に騙されたのか……！」

辛い顔をしている獅童。折神紫の親衛隊である彼女は当然、このような真実を受け入れないのだろう。

「それはない。都くんは彼女をいい人だと思ってくれた。この20年前の出来事はもちろんタギツヒメの演技なのかもしれないけど……都くんはこれを折神紫自身のご意思だと指した。」

「紫様の……ご意思……あの男が……」

「そうだな。確信がないけど……彼がそう信じている以上、俺たちもそう信じる。」

「ねね！」

「ミヤミヤは頼れる男ですからネ。だから、体内にいるタギツヒメだけを払い、彼女を救いマスー！」

救う……紫様を……。

「さあ、早く可奈美ちゃんたちを助けに行きましょう！獅童さんはここでー」

「いや、僕も参戦する。」

舞衣たちは可奈美たちの助太刀へ行くとき、獅童はさっきの迷いを払い、覚悟ができた目を示す。

「いいのか？あれは一応お前のボスだぞ。」

「薫……言い方。」

それを反応する薫と薫の言葉扱いを注意するエレン。けど、獅童は迷いなく御刀を抜け出した。

「紫様をお救いなら、親衛隊の一員として当然です。それに……第五席である彼は紫様のことをそう信じるなら、第一席たる僕も彼に負けるわけにはいかない。」

「獅童さん……」

「柳瀬舞衣、指揮はお前に任せる。こつちも結構団体戦の経験が溜まっているので、お前たちの邪魔にならないように頑張る。」

「……はい！」

全員の意志は一つにまとめて、舞衣たちはすぐ可奈美たちのところへ手助けを。

「舞衣ちゃん、沙耶香ちゃんに薫ちゃんとエレンちゃんと……獅童さんも!？」

「おい!?なんて親衛隊の人がここにいる!」

タギツヒメと対峙している可奈美と姫和は舞衣たちの姿を見て喜んでいるが、その中に混ざっている獅童を見ると、驚かれて口が開いた。

「僕も手助けをする!紫様を救うため!」

「可奈美ちゃん、?和ちゃん。彼女は仲間です!」

「………わかった。?和ちゃん!」

「ぐっ……!わかった!いつものこれも多少に慣れてきたな。」

少し受け入り辛いのが、?和は獅童の参戦を認めた。

因みに、「これ」というのは可奈美の隣にいつも不思議のことが起こることだ。彼女といると、いつもそうだ。

「感謝する!」

こうして、七人は折神紫を囲んで彼女と対峙する。

「これは驚いた……まさか親衛隊の人間は折神紫に齒を向くとは……」

「荒魂だけに齒を向くんだ!」

タギツヒメの言葉に反論する獅童、彼女は折神紫の頭部に延びる大きな荒魂の一部の目を睨む。

あれは折神紫を乗っ取った化物。決して許さない。

「数はこっちに有利だね……」

頭上の塊から生えている四本の腕、そして紫にある左右の腕。合わせて、合計六振り。おあつらえ向きに、こちらは刀使が七人。数では有利ですが――

あれはそう簡単に勝てる相手ではないことは百も承知。だが、ここで勝たねばこの国の人々がタギツヒメの犠牲になる。

負けるわけにはいかない。

「皆、呼吸を合わせて。里での集団戦を思い出して」

「よく見る。よく聞く。よく感じ取る。」

「これまでの全部をこの剣に」

「母が授けた力でお前を討つ！」

「倒して、ハッピーエンドです。」

「今度こそは長期休暇だな。」

「結芽……力を貸してくれ。」

舞衣の指示に皆はそれぞれの状態に入り。特に可奈美は都の教えをこの身に焼き付く。

お兄ちゃん……もう少し、私に力を……！

「……………」

巨大の四本の腕を動かし、紫は彼女たち七人に攻撃し始めた。

そして、刀と刀との激しいぶつけ合いがこの場に響き、最終決戦の幕を挙げた。



「可奈美ちゃん、一度引いて。獅童さんは掩護を……！そして、エレンちゃんは後ろに気をつけて！」

「了解！」

「かしこまりマシタ！」

「はあ！」

戦場全体の戦況を見て、攻撃しながら舞衣は指示を出す。全員は何となくこの大荒魂と互角に戦う。

「優れた指揮者がいるようだな……邪魔だ」

巨大の腕を舞衣の死角に襲う。その時、獅童はその攻撃を止めた。

「……………っ！」

「獅童さん！」

「やっぱり、あの男は見間違えがなかったな。お前は優れた指揮者……いや、貴女能力を見抜いた上で貴女を侮辱した高津学長に喧嘩を売ったのだ。」

前のことを思い返し、獅童は舞衣と共に戦いながら呟く。

「それはそうかもしれないけど……都くんは見た目より相当に単純で可愛い人なんです。きっと私を守りたかったから、そうしたのです。」

「……………そうだね。」

舞衣の笑顔に、獅童も舞衣が都にどれほどの理解が持っているのかをわかった気がする。

これは彼が守りたかったもの。ならば、この場にはいない彼に代わって彼の宝物を守る！

「……………やっぱり邪魔だな。獅童真希！」

「そうは行かない！」

タギツヒメはずっと仲間を掩護で邪魔をしていた獅童にムカつく。そして、彼女の間隙を見つけて獅童を攻撃する。

けど、今度は？和に防げた。

「十条？和……お前……」

「勘違いすんな。ただ舞衣を助けた恩を返すだけ。」

驚愕の顔を表す獅童に？和は相変わらずツンデレな態度。

そして、次々に襲ってきた腕を獅童と共に対応する。

「ただの人間如きか……!!!」

「そこで怒っていいのか？タギツヒメ。」

「……!?!」

「はああああアア!!」

一時に？和に注意を逸らされて、可奈美はその隙に紫と接近戦している。

「ぐっ……!」

可奈美の攻撃をぎりぎり防げるタギツヒメ。七人を相手にやっばり未来への演算が追いつけない…… 〃可能性が多すぎだ〃。

「私も加勢するぞ！腕の方を頼む！」

「任せろ！」

そして、？和も可奈美へ加勢しに行く。獅童は彼女の位置を代わって腕の攻撃を防げる。

この勢いで何とか行ける気がする……!可奈美ちゃんど？和ちゃんは紫様を相手に、残る私達は五人は何か四本の腕を封鎖します。勝機が見える！

「薫ちゃん、近づきすぎないで！」

指揮を行う舞衣が隣で戦っている薫に叫ぶ。そうしながら腕からの攻撃を防げる舞衣だが、薫の方へと一瞬だけ注意がそれてしまう。

「柳瀬舞衣……!うぐっ……!」

「獅童さん……!うぐっ……!」

その隙がタギツヒメに突かれ、獅童は彼女を庇って攻撃を受けた。これで、彼女を守れると思った獅童ですが、大きな御刀は一気に二人の身体を貫く。写シが剥がされ、舞衣と獅童は共に地面に転がる。

「なんと……!八幡力だ?!」

「ぐっ……!」

二人を貫く力に獅童が気絶する前に驚いた顔でタギツヒメを見る。まさか荒魂の力を使い、御刀の力さえも引き出せるとは……バケモンすぎる！

「舞衣！……!うっ……!」

舞衣と獅童が倒れたことで、沙耶香は思わず彼女たちの身を案じてしまい、動きが止まった。その隙を見逃さないタギツヒメの御刀が迫

り、沙耶香を貫いた。

「きえー！」

舞衣、沙耶香及び獅童の戦闘不能に憤るように薫が上段の構えでタギツヒメに迫る。タギツヒメはそれを嘲笑うかのごとく薫を横風ぎに斬り払った。

「がっ……」

続けて、薫の横に立っていたエレンの身体にも御刀が深々と刺さる。御刀が引き抜かれると同時に彼女の身体に貼られていた写シが消滅する。

「舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん……獅童さんと薫ちゃんにエレンちゃんも……」

「クソ……！」

可奈美と？和は悔しそうに倒れ伏す五人を見つめる。

これで戦況が一気に逆転された。

「さて、篝の小娘よ。今この状況において、あの秘術を使うのか？お前の母がかつて我を隠世に送り込むつもりを……」

タギツヒメが不意に口を開く。彼女が余裕ぶり態度に戻った。ただの二人では神である彼女にどうしようもないから。

「……」

可奈美は横目で姫和の表情を見る。焦りや緊張感で張り詰めた――いや、一抹の不安を抱いた顔だ。本当に成功させられるか、という不安を。

「我は二十年前、その秘術をこの身に受けた。お前の母、柊篝の手によって」

「……っ」

姫和の顔がわずかに曇る。

「隠世の彼方へと消え行く寸前、我は折神紫に取引を持ちかけた。」

「…………！」

「我という自我が生まれたのは、暗く冷たい貯蔵槽の中だった。自らの半身を奪われた喪失感、取り戻さねばならないという衝動に駆られた。」

「半身……珠鋼のことですか？」

「ああ。私の進化してゆく知能、それを逸らせていたのは復讐心だ。そうして、私は禍神まががみとなった。」

話をしている最中のタギツヒメは無防備に見える。けど、可奈美と姫和は構えたまま動かない。タギツヒメの殺気は話をしながらも、一秒たりとも潰えていないからだ。

これは圧倒的な力を持ち、神の力。

「禍神となり、悟った。我はいずれ人の手により滅ぼされるとな。ゆえに、策を講じた」

「策だと？」

姫和が眉をひそめてタギツヒメに聞き返す。

「人々に災厄を振り撒き、我を唯一滅ぼす能力を持つ者共を仕向けさせた。そうして奴等は現れた。企て通りにな」

「それはどういう……」

「つまり二十年前、特務隊のメンバーに紫様と箒さんがいたのは偶然ではない、ということですね？」

？和がまだタギツヒメの言葉に理解していない時に、可奈美は代わってタギツヒメに聞く。

20年前、柊箒が鎮めの儀を行ったのも、折神紫の肉体がタギツヒメに乗っ取られたのも、そして柊箒と藤原美奈都が生還できたのもすべてタギツヒメの計算の通り。

未来視を持っているとはいえ、そこまでの未来を読むのは流石に怖い……。あれは人間では対抗できない絶対の存在。

「タギツヒメ、貴女はここまで読んでいたでしょう？ 二十年前から」

「……ああ」

タギツヒメは驚きも喜びでもなく、全くの無表情で肯定する。

「当時、紫様も箒さんもうちのお母さんも最強の刀使の一角に名を連ねていました。そして、箒さんの鎮めの儀があれば史上最大の大荒魂である貴女でも撃退することができると。そうならないため、貴女は折神紫様の肉体に乗っ取るために行動していた。」

今にして思えば大胆不敵な離れ業としか言えない。柀家の鎮めの儀の詳細な情報など、知らない者がほとんどだ。ましてや、世間からは最強の刀使である折神紫が何とかしてくれる、という期待があった。

『凶悪な荒魂を最強の刀使が見事斬り祓った』という新聞の見出しだけで人々は満足だろう。

そして極めつけは、そんな英雄である折神紫を誰も疑わないという点だ。

まさか、あの折神紫が荒魂に乗っ取られているわけがない。たとえ真実を言葉で訴えたとしても、こんな典型的な返事を浴びせられるだけだ。

「そうだ。『我と同化するれば柀籥と藤原美奈都の命は助けてやる』、そう言っただけで紫の心は瞬く間に傾いた。愚かな娘だ」

「……………やっぱり、お兄ちゃんの言う通り。悪いのはタギツヒメ……………貴女です！」

可奈美はタギツヒメが紫への侮蔑の言葉に声を低め、タギツヒメを睨む。

それと同様、？和もタギツヒメのことを睨む。

結局は都の言うとおりに、折神紫はただ母たちを救いたいため、タギツヒメと取り引きしただけだ。すべての悪は禍神——タギツヒメだ。

「神にその目とは……………不敬だ」

折神紫の頭上の腕がうねり始め、神速の刺突で二人共に襲う。回避するつもりだった二人は反応が少し遅れたため、可奈美の身体には三本、姫和の身体には一本の御刀が突き刺された。

「うぐっ……………！」

二人は写シを剥がされ、可奈美は地面に仰向けに倒れる。姫和はダメージが比較的少なかったのか、何とか立てているようだ。

「可奈美っー！」

姫和が叫ぶが、可奈美は軽く呻く程度でほとんど動いていない。倒れた可奈美を見下すようにタギツヒメは吐き捨てる。

「筋はいい。が、母親には遠く及ばぬ。どうやら、期待できるのはその兄のようじゃ」

「お前っ……!」

可奈美が倒されたところに、?和は怒鳴したが、残念ながら彼女はしばらく戦えない。それを知るのはこの場にいる二人だけ。

「さあ、残るのはお前一人。例え秘術を使っても、貴女は私を倒せない」

「ぐっ……!」

「消えろ、篝の娘よー」

巨大の腕が?和に襲う。今度こそは避けられない……ここで彼女の命が終わる。

ごめんなさい、母。私は貴女の仇と仲間を守るとどちらも達していない。私は……弱すぎた。

目を閉じ、?和は避けられない運命を受けるその一瞬、

「そうはさせんぞー!ークソ荒魂!!」

響いた刀とのぶつけ合い音が響いたと共に、誰かの怒鳴が耳に入れた。

この声はー。

目を開き、目の前にいるのは自分を庇う様子のあの人の背中姿だ。

「お前……なぜ……」

彼の背中姿が目映る?和は信じられない顔で呟く。

「お待たせ、?和」

「ほお……まさか、貴様が最後に来るとは思わなかった。藤原美奈都の息子よ」

そして、次に反応するのはタギツヒメ。彼女は予測外の人物の出現に驚く。

その人物は衛藤可奈美の愛する兄ー衛藤 都である。

第31話：《真の一つの太刀》

一人の少女は親友のために命の半分を捨てた。

一人の少女は親友の死で後悔した。

そして、最後の少女は親友二人を助けるために、世界を捨てた。

最後の最後に世界を捨てた少女は親友二人を失い、完全に絶望に染まれて、神と名乗る怪物に支配された。

生き残りの少女の名前は折神紫である――。

ただ親友を救うために、世界を滅ぼす存在と取り引きをしていた無力でこっそり泣いている少女。

みんなが死ぬ……私のせいで……くすつ……くすつ……。

怪物に乗っ取られた紫は怪物と融合したことで、彼女は“この先のことを見えた”。

この先にいるのは絶望の未来。

篝の娘と美奈都の娘も私タギツヒメの手で殺される……！彼女たちが残した子供だけは活かしておきたかった。もう……篝と美奈都を殺したくない！！

そんな無力で、絶望し、泣いている少女に夢を見る青年は彼女を救うことに決めた。

そして、ある意識はそんな青年を認めた。

――すべてを守りなさい。それは貴方が選んだ役目ですから。

――行ってくる。

青年は覚悟をできた口調でそう言い返した。



可奈美と？和がまたタギツヒメと対峙すると同時に――

「結芽の身体からノロの存在が感じませんわ。これはどういうことですか?」

「寿々花が結芽の処置を行った時、結芽の体内のノロが既に消え去ったことを気付いた。」

「これは本来ありえないことだ。ノロが体内から外れることはほぼ不可能とも言えるはず……だが、今の結芽は普通の人間として亡くなった。」

「結芽は一体何かあったのでしょうか……」

「寿々花が初めてこのような事態に戸惑っていた。何にせ、常識外れの事態が発生してしまったのだから。」

「……!!?」

「そんな時に、彼女は隣の近くにすぐ別の気配を感じて、抜刀の構えを取る。」

「いくら彼女がもう写しが貼ってないとしても、基本的の防身術が身体に刻んでおる。」

「……早く行かなくちゃ。」

「衛藤 都! 貴方はもう意識が戻ったのですか!」

「警戒しながら気配の方へ向くと、そちらにいるのは目が覚めた都。」

「ええ……って、此花さん!? なんてここに?」

「そして、彼はすぐ寿々花がここにいることを驚かされた。」

「なんて……って、同じく意識を取り戻したら、貴方と結芽がここに横になるところを見てたんですよ。それを放っておけなくてここにいたんですよ。」

「そうですね……って、ここでモダモダしている場合じゃない! ごめんなさい、此花さん。俺は早く可奈美たちのところへ行かないと!」

「何か大事なことを思い返し、都はフラフラの身体を無理矢理立たせた。」

「え……!!? ちよ……!! 衛藤 都、どこに行くのですの!?! わたくしからまだあなたに聞きたいことが……! それに、そのボロボロの身体では……」

「悪い！俺は早く行かないとだめだと気がする！このままじゃ皆が死んちやうから！」

「え……？死ん……？どういうことですよ！」

「説明する暇がない！お願い、俺を信じて！」

誠意を込めて、都は自分を止めようとする寿々花を見つめる。

そうしたら、数秒後に彼女は駄目息をついて、結芽の御刀を都に手を渡す。

「……わかりましたわ。あなたの理由は存じませんが、真希さんたちを助けに行くのですよね？ならば、これを持ってきてください」

「いいの？」

「何を、いまさら。貴方は冗談を言う男ではないことが最初の出会いからわかっていましたわ。だから、貴方をしばらく信じます。」

「……ありがとうございます！此花さん。」

寿々花に礼を言って、都はにっかり青江を受け取った。

「絶対生きて帰ってくださいね。貴方に聞きたいことがたくさんありますから。」

「もちろん！死ぬつもりがないですから」

寿々花にそれだけを言って、都はすぐにつかり青江を持って、この場から立ち去る。

その時、都が握っている結芽の御刀は彼と強く共鳴し始めた。



時は現在に戻った。

「……まさか、貴様が最後に来るとは思わなかった。藤原美奈都の息子よ」

タギツヒメは？和を庇った都を睨みながら、腕を回収し、再び臨戦状態に戻る。

「都……」

「……………？和。可奈美のことをしばらく頼む」

都はただそう言つて、折神紫に立ち向かう。

「ほお……神に挑むのか、人間」

「ああ……大事の妹を傷つけるのは神であろうと、俺は挑むつもりだ！」

天然理心流の構えを取り、この場に出現した衛藤 都は最初から超集中の状態に入った。

「やめろ、都。お前は殺されるぞ！」

？和からの心配しそうな声。その声は心に温めていく。

「大丈夫。だって、結芽が力を貸すから」

結芽の遺物であるにつかり青江を握って、都は深呼吸する。

「ふっ……愚かの人間よ。死ぬ」

さつきと同じ速度で腕が都に襲う。けど、彼は神速で軽くタギツヒメの攻撃を避けた。

「馬鹿な……あの攻撃を……」

さつきの攻撃を避けられた都に？和は呆れた表情でそう呟く。

「ありえん……人間ごときは私の攻撃を躲すなど……ありえん！」

「あり得るよ。だって、俺は衛藤美奈都の息子だもん！」

避けながら、都は燕 結芽のように一瞬だけ加速して、彼女の型で攻撃を防ぐ。

彼はただ一人で四本の腕の攻撃を対応していた。

「貴様……あれは一時の写しだど!？」

「写し……!？」

タギツヒメは都を攻撃する途中気付いたことを呟く。目の前の男は見た目のように生身であるが、実際は攻撃に襲われる一瞬に写しの状態になり、その攻撃を避けた。

それをタギツヒメから聞いた？和も信じられない表情だ。

「ああ……不思議のことですが、俺は二本の御刀に認められたみた

い。それを一瞬しか使えないのですけど」

「御刀に認められた……!?だが、それは女性……」

「なるほど……燕 結芽に宿っている我が分身との戦で覚醒したのか」

「あれはお前の仕業なのか……やっぱり許さないんだ。タギツヒメ」

都は紫の頭部上の荒魂を睨む。

「我を斬るのか？刀使の力を一時しか使えない貴様は私の相手にならない。折神紫を超える者はどこでもない。」

注意が完全に？和から都の方に逸す紫は戦闘態勢に入り、六刀流で都と戦うつもり。

もちろん、これは勝算がない戦だ。どう見ても、ただの人間ではこんな化物に勝てるわけがない。

「ああ……俺ではお前に勝てないのは心得ています。急いだせいで傷口もまだ残っているし、さつき激しい動きを取ったせいで出血もした。」

「なら、なぜ我を挑む……」

「お前が多くの人を傷つきすぎたから。20年前、うちのお母さんと篝さんだけではなく、折神紫もお前のせいで苦しんでいた。加えて、ここにいる全員はお前にボコボコされたことにイライラするのよ！」

につかり青江を強く握り、都はタギツヒメを睨む。

「その理由で神を挑むのか……頭が高いぞ、人間！」

四本の腕が同時に都に襲ってくる。

「お前の方こそ自惚れすぎなのよ。タギツヒメ」

「……!!?」

しかし、それらの攻撃は都に躲かれて、一本の腕が不思議に斬り落とされた。重力に従い地に落ちた腕は空気に溶けるように霧散する。

「貴様……何をした？我は『このような結果を見えぬぞ』！」

「さあ……俺もよくわからない。ただ『お前の動きを先に見ているだけだ』。」

「貴様が見えるだと……ありえん！」

都の言葉に驚愕するタギツヒメだが、すぐこのようにことを怒った。

ただの人間では自分の動きを見えぬはず。神の神速の斬撃に追いつける人間はいない！我を傷つける人はいない！

残る三本巨体の腕と紫自身が持つ両手を加える五本の御刀で都に向かうタギツヒメ。

どうやら、彼女は本気で都と戦うつもりだ。

「さあ……来っ……っ……！」

「都！」

突然、膝が地面に崩す都。

彼を心配する？和は彼のそばに走る。

「お前……その傷……ずっとこのような状態であいつと戦ったの!?」

都が滲み出す赤い血がどんどん服を染み込む。彼はさっきこのような酷い状態でタギツヒメと戦った。

どうやらそろそろ限界だろうだ。こんなボロボロの体であんな速度で繰り返すのは流石に身体に負担をかける。

「大丈夫だ……？和。これくらいの出血は大したことではないのだ。」

「何か大丈夫なのか！もうボロボロなのに、死にそうなのに……なぜ……！」

？和は凄く心配しそうな表情を晒し出す。涙もその綺麗な赤い瞳から溢れ出す。

「……幼馴染ってというのは本当に可愛いものだ。」

「守りたいんだよ。お前は俺の大切な幼馴染なんだ。見殺しなんてできません。」

「……お前……本当に馬鹿だな。少しでも自分のことを考えろよ！」

「ごめん、それは無理。」

「バカ……！」

苦笑いしながら都はこう言い出す。

何かを守りたいなら、何かを尽くしなけばならない。

俺が尽くすものは俺自身だ。全力を持って大事なものを守る。

それは衛藤 都という人間だ。大事な人のためなら、自身の命さえも惜しまぬ。

「どうやら藤原美奈都の息子と柊篝の娘はもう立ち上がる力がないようじゃな。」

一時に放置されたタギツヒメは都たち二人を見下ろしながら口に出した。

もはや、彼女を止めるやつはどこにもいなかった。

「ああ……残念ながら今の俺はお前を倒せる力がない。でも……あまり自惚れすんなよ。なぜなら、お前を倒せるのはうちの妹だから。」
都はタギツヒメを……いや、彼女の背後を見ながらそう言う。

「何だと……」

タギツヒメは直感的に何かを感じ取ったのか、背後を——そこに立つ人物を見た。

そこにいたのは、写シを貼り、御刀を構える都が最も誇れる妹——

衛藤可奈美。

いや、彼女は——

「紫、久しぶり！」

表情も、立ち振舞いも、声の抑揚も普段の可奈美とは違う。どこか大人びた、勝ち気な雰囲気。

そう、まるで別人になりきっているかのような——

「何故、お前がここにいる」

毅然とした態度は崩していないものの、タギツヒメは可奈美を見つめたまま固まっている。

「……藤原美奈都は死んだはず……」

「でも、ここにいるよ。どういうことかわからない？」

挑発するように可奈美は笑う。首をかしげながら尋ねる彼女は、その直後にはもう行動に移っていた。

迅移を用いての加速、そして神速の斬撃が彼女の腕から繰り出され

る。

「こんなことはありえない……!」

「ありえるよ」

一本。タギツヒメの腕が切り飛ばされ、宙を舞う。重力に従い地に落ちた腕は空気に溶けるように霧散する。

「あれは……可奈美……?」

「うん、昔の俺の技を真似……いや、母の技を真似た可奈美だよ」

次々目の前のありえない現象に呆れた? 和の質問に都は淡々と彼女に説明する。

「真似?」

「昔、俺と可奈美はよくお母さんの真似をして、お母さんを挑んだ。あの時はお母さんを真似したら、彼女のように強くなれるのかなと思っただけど、結果は一方的にボコボコされた」

「その後、俺と可奈美はお母さんの真似をやめて、別の方法で鍛錬し続けた。そして、今の可奈美はお母さんの真似でタギツヒメに挑発して、彼女の精神を乱す。それがうちのお母さんの戦法だ」

「それ、最悪じゃないか……」

「そう……? 結構いい戦法だと思うけど」

? 和のツツコミを適当に答える都。彼は一挙手一投足が母と同じ動作、口調、呼吸、剣筋の可奈美を見つめる。

自分より技の真似の完成度が高い。これも彼女が成長していく証だ、いつか彼女の剣技は自分を超えるのだろうか……。そういう期待を抱く都は? 和とこの戦鬪を見届ける。

けど、この余裕の時間は長く持たないー

二連、三連と続けてタギツヒメの腕は減り、最後には写シの貼られた紫の身体の左腕も切り飛ばされた。

これはもう勝機が見えるのだがー

「はっ!」

やられてばかりのタギツヒメではない。左腕が切られる瞬間に、すれ違い様に可奈美の胴体に一太刀浴びせ、写シを剥がす。

「可奈美っ!」

戦況が一気に変え、都は迅移を使い可奈美が地面に転がる前に彼女を抱きつく。

姫和も慌てて駆け寄る。可奈美の身体に目立った外傷はないものの、意識を失っている。もう戦闘不能に陥ってしまっている。

「……………」

可奈美に傷つけられたタギツヒメは目を大きく開き、空へと自分の一部を柱みたいに伸ばし、まるで空を侵食するように自分の部分を空で拡散する。

それを見届けた残りの二人はこのままじゃ、まずいと認識する。

残った紫は写シを貼り直し、失っていた腕を復活させる。そうして、？と都の方に向き直る。

もう打つ手がない。身体も特に結芽との戦いで限界にきた。超集中の副作用もすぐ来るだろう。

いや、例えそうじゃないでも、？と連携してもあの折神紫を倒せない。

「…………都」

「……………」

姫和は可奈美を抱きつく都に横目で視線を向けながら話しかける。そこで沈黙になる都でもわかる、？の瞳からある必死な決意を感じた。

「可奈美と舞衣のことを大事にしろ」

「お前…………そんなことしたら、俺と他の皆は許さないぞ！」

「ああ…………お前が私を大事にしてくれたことを感謝している。だが、私もお前と可奈美のことを大事したから、私はお前たちだけを守りたい。」

タギツヒメに向き直り、両手を背中側に下げた姿勢で御刀を握った。あれは——御前試合でも見てた技だ。

最強にして、最速の技。一振りだけの絶対必殺技《一つの太刀》

「都、さよなら。元気でね——」

「？和…………いやめ——」

全力で彼女を止めると叫んだ都ですが、？の姿が消える。

けど、それは走り出した瞬間を見逃したとかではない。文字通り、消えたと言えない速度で移動したのだ。御前試合の決勝でタギツヒメに奇襲をかけたときよりも速い。あの時が銃弾ほど速いとすれば、今回のものは天を翔る稲妻のようだ。

「……っ！」

神速を越えた速度の姫和の刺突。それは折神紫を刺し貫いてもなお止まらない。何も無い中空に円形の穴が形作られ、二人の身体はそこに向かっていく。

「クソ……このままじゃ？和が……ぐっ!!」

彼女を過去の母のように彼女を連れ戻すとしたい都ですが、都の超集中の副作用はちようどその時に起こり。身体と思考はどンドン停止される。

「ふざけんな！こんな時にー!!」

これでは写しさえも使えない。何もできない。

このまま？和が隠世の果てまでに見送るしかできない。もう打つ手がないのか……！彼女をここで失うのが嫌だ！

「？和ちゃん……！」

その時、いつの間自分の懐で目を覚ました可奈美は隠世の穴の方へ見て、？和の名前を呟く。

直感なのか、彼女は？和がそちらに遠くへ消え去ると感じていたのかもしれない。

「お兄ちゃん、私は行かなきゃー！」

写しを貼って、可奈美はそんな結末を許さなかった。閉じかけていた裂け目に飛び込み、姫和の元へと走っていく。

「可奈美……？和を頼んだのよ」

前々から感じていたのだけど。姫和には可奈美が必要。当然、可奈美にも彼女が必要。

ー二人からそういう運命を感じた。

お母さん藤原美奈都と？和のお母さん柊篝の御刀を継いだ二人なら、きつと断ち切れない運命がある。

だから、都は望んだ最後の希望を可奈美に託す。全員を救うには可

二人は再びノロの大容量貯蔵庫に戻れて気絶した。

「……………戻れて……………良かった」

二人がこちらに戻れた様子を確認したあと、都も二人の後に気絶した。

しかし、その時の彼はこれから先の光景を見られなかった。

この夜、隠世へと逃れるタギツヒメは自ら一部の荒魂を切り離し、空高く打ち上げた。

荒魂は飛び散り、関東全体に降り注ぐ。それはまるで流れ星のような光景だった。

けど、それは何の意味なのかは今のところは誰でも予測できない。けど一つ確認できるのは――

これは一つの物語の終結でもあり、一つの始まりでもある。



「これで『六人』の刀使の回収が完了した。しかし、まさか……………局長は大荒魂だとは……………このことはしばらく外部の人間たちに知られるわけには行きません！いいな。」

「はっ！」

部下に指示を送れ、織田防衛省の事務次官である織田正雄はわざわざすべてが解決したあとの二時間後に現場に参りました。

そこで、彼は先に現場にいた舞草のメンバーと共にこの場に倒れている英雄たちの処置や事後処置を行っている。もちろん、彼は指揮者たるものだから部下にやらせた。

「……………これでいよいよ折神家も終わるのか。ようやく国の権力は我々防衛省に取り戻したが、事後処置は面倒くさい。けど、これも折神家を椅子から引つ張る代償……………安いものだ。」

織田正雄はずっと折神家を敵だと認識していた。この20年間、折神家は大きすぎた権力を長年で持ち続けてきた。それを恐れるのは防衛省だけではなく、政府もそんな折神家を恐れていた。

特に折神紫は刀剣類管理局の局長であり、民の絶大の信頼が得ている刀使たちの長官。彼女がこの位にいる限り、日本は彼女のものだと言ではない。そうならないため、織田正雄もいくつの対策を打ったが、折神紫の前にはすべて失敗に終わった。

彼女は政治方面では優れた逸材だ。いくら彼女に無理な要求や面倒ことを彼女に任せようと、彼女は見事に達成し、さらなるの民意をもらった。

このままじゃ日本はいずれ本当に彼女のものになると正雄はずっと悩んでいた。が、今日が起きたことを彼はこれをチャンスだと思つた。いよいよ、彼女の手から権力を取り戻せる。頑張れば、民意もこちらに戻らせるはず……。

けど、現実はその思うのままにならない。主に、刀剣類管理局の存続が必要ということ。刀使を指揮する機関がいる限り、この国の安泰が確保できる。忌々しいが、権力はしばらくそちらへ預かってたほうがいい。

それもこの国を怪物の脅威から守れる唯一の手段である。

「とりあえず、刀剣類管理局を何とか保つのは今の第一目標か……ならば、次の局長はこちらの人員を派遣しなければー」

「織田事務次官、失礼します。貴方の指示のとおり親衛隊を探しているんですが、今だに親衛隊を見つけられません。」

織田正雄がまだブツブツとこれからはどう歩くのかを計算している時、部下の一人はこちらに敬礼し、任された仕事の結果を報告する。

「逃げられたか……もつと探せ！まだ鎌倉の何処かに隠しているはずです。」

「はいー」

指示を受け、部下はすぐこの場から離れていた。

「折神紫の犬め……逃げ足だけは早いな。」

彼はブツブツ言つて、険しい顔を晒す。

彼は親衛隊の人を掴むつもり。なぜなら、彼女たちは折神家の秘密情報が握っているかもしれない。それを利用して、彼女を局長の位置から引つ張ると計算している。

それを機に折神朱音にも威圧を与える。横浜港での宣言は間違えなく、舞草にある程度の知名度が上がった。何にせ、折神紫を倒す英雄たちは彼女の手によって、送られたから。

ならば、彼女と舞草は間違えなく英雄扱いされる。そうなれば、折神家の関連者たる彼女は局長代理として選抜されるかもしれない。

その事態はどうしても、避けてもらいたい。

「舞草の動きもこれからはしっかり掴まらなければなりません。我々の敵になれる前に、警戒しなければ……」

その後、彼はずっとここで指揮して、深夜2時までにならずと折神家で隠した機密を探していた。

第32話：新たな嵐の前兆

折神家におけるタギツヒメとの最終決戦から数日後。

世界を救う英雄たち六人は刀剣類管理局御用達の病院に入院していた。とは言っても、肉体に直接的なダメージを受けたわけではないため、疲労回復や精密検査という目的で身を置いているだけだ。来週には全員退院できると聞いているが……彼女たちはある人のことを心配している。

「彼」は彼女たちと違って、ある理由で別の病院へ送り込んだ。もちろん、これも朱音様の指示であるから、心配はならないと思うけど。それでも……彼の安否をずっと心配している。

「お兄ちゃんは大丈夫かな……」

「朱音様から命の別状がないと聞かれているけど、やっぱり都くんのことがか心配です。」

「都……」

「お前ら、そんな顔をしない。彼はきつと大丈夫だ。」

「そう言っているけど、ヒヨヨンの目はすごく泳いているよ」

「私もミヤマミヤのことが心配デス。あの時見た傷が大変そうに見えるカラ」

「ね……」

病院近くにいる健身用の地区に可奈美たち六人と一匹の荒魂が彼のことを心配している。一人はそう見えないけど、実際も心配している。

何にせ、彼がひどく怪我されてもこの病院では高レベルの医療技術が備えているため、わざわざ別の病院に行く必要がない。

ならば、何かしらの理由で彼を転移させた。

「やっぱりお兄ちゃんの居場所を朱音様に聞いてくる!」

「そうだね! やっぱりそうするしかない!」

「落ち着け、お前ら。朱音様は刀剣類管理局の代理局長に選抜されていた以上、そういう余る時間がない。」

「それは……」

薫にそう言われて、全員は落ち込んで見えるように見える。これだけを見てみると、あやつは相当に彼女たちに好かれている。

この中の三人は彼にとんでもない好意を抱かえている。

「……………とりあえず、朱音様からの連絡を待つしか。彼女も都に悪気がしないと思う。ひとまず、これをやる」

薫から直接に携帯のメール画面を他のみんなを見せる。

「薫、これは？」

これを見て、？和から尋ねる。

「皆は彼の連絡先があるだろう？彼に元気をつけられる言葉でも彼に伝えれば、きつといつか俺たちの前に現れるだろう」

「ワオオ！いいアイデアですネ！」

「確かにいいかも！」

「うん、きつと可奈美のために戻ってくるだろう」

「メールはどうやって使うの？」

「私が教えてあげるから、沙耶香ちゃんは携帯を出して」

五人は薫の提案に賛成し、早速携帯のメール画面を開いて何かを書くのか考え込む。

「なかなか難しいな……………」

「ね……………」

提案者である薫は軽く内容を書こうと思ったのだけど、いざの時になかなか書けられない。

エレンも結構悩んでいる顔。

沙耶香は舞衣にメールの使い方をおぼれている。

？和は重そうな表情で考え込む。

可奈美は一時に何かを書こうと決めた様子だけど、すぐ悩む顔に戻った。

「都のやつは一体俺たちに何の仕掛けをかけたのか？ねねはわかる？」

「ね？」

「お前に聞く俺は馬鹿だった」

「ねねっ!?!」

この後、二時間をかけても、全員はずっと携帯を見つめていた。彼に元気をつける言葉はなかなか決められないものだった。



「此花さん。俺、退院したいです」

あの戦いで唯一ひどい傷を負った衛藤 都は刀剣類管理局下にある病院の病室内で、ある理由で彼と同じ病室にいる元親衛隊の此花 寿々花に文句を言う。

因みに彼女は髪を下ろした状態で、病衣に身を包まれた格好だ。

「それは駄目です。あんな酷い怪我を負ったのに、目が覚めたらすぐ妹たちのところへ助太刀をした。その結果、貴方の怪我がさらに悪化してしまいましたわ。完全に治るまではここで大人しく傷を癒やしてください」

そうしたら、すぐ撃ち返された。

「それはそうだけど……ここで退屈なのよ。剣も没収されたし……つまらない」

「それは当然です。傷を癒やすには安らかな療養が必要ですよ。妹さんもきつとそう思っているのですわ」

「うっ……ずるいです」

因みに、ただの数日に寿々花はどうやって都を制圧する方法を見つけ出した。

これで、都が苦手な人はもう一人増えた。

幸い、相手は寿々花だから、それはいいですけど……。

「それより、結芽との話はまだ聞きますせんわね」

「……………」

その時、唐突に彼女からあの少女の名前が出した。その名前を聞いた際に、都の顔は曇っているように見えた。

いつ、彼女にそんなことを聞かれると予測していた。けど、実際に

聞かれると、胸が辛くなる。

寿々花もそんな彼の変化を察し「すみません、少し意地悪しすぎた」と謝ったが、数秒後に彼からも小さい声で彼女に謝る。

「ごめんなさい、此花さん。」

「なんて、そこで謝るのです？ 貴方は彼女に酷いことでもしたのかしら？」

「はい、したのです。彼女を見殺したのです。」

寿々花の意地悪な言い方に都は罪人のような言い方で返す。

「……………」

それを聞いて、寿々花が沈黙に入った。けど、そのせいで、都に余計の罪悪感を与えた。

彼は自分の無力に憎んだ。一人の少女の命を救えない自分を憎んだ。

「あの時、俺はいたずらに彼女と剣の立ち合いをした。できるだけ、彼女を悔いがない結末に迎えさせたいと思っていたが。――結局、俺は彼女を救うことを諦めて、彼女を見殺した。」

「……………」

「俺を憎んでもいい。此花さん。俺は貴女たち親衛隊大事な一員を見殺した……本当にごめんなさい！」

本心を込めた言葉。都は顔すらも寿々花の方に向けない。

きつと彼女は凄く怒っている顔でこっちに睨んでいるのだろう。それもそうだ、自分はその可愛い少女を見殺したのだから。

「はあ……貴方って人は、いつも自己責めが強いのです？ 道理で柳瀬さんは貴方を手放せたくないですわ……」

けど、そこで予測外の反応を取ってしまった寿々花は駄目息をついた。

「此花さん？」

やっと彼女の方向に向く都。こんな反応は予測外だ。

「衛藤 都、よく聞いて。結芽は最後までは幸せな顔でしたわよ。貴方が彼女の最後を見届けた者として、彼女はきつと満足だと思わ

「でも……彼女は死ん――」

「あれは病氣、貴方はお医者ではありません。そもそも、あれは癒やされるはずがない病氣です。我々もノ口の力を借りて、彼女が無事だと思っていましたわ」

そう言つて、寿々花も辛そうな表情を示した。

「けど、最後は病氣に敵わなかった。ノ口の力さえも彼女を救えなかった……私達も彼女に何もさしあげなかった……けど、貴方は違います。貴方は彼女の最後に幸せを与えたのよ。」

「俺が結芽に……」

「ええ……ですから。貴方に数えきれない感謝の意をこの胸に抱かえています。大事な妹を助けてくれてありがとうございます。 〴〵都さん」

辛い表情から満開の花が咲いたような微笑み。彼女は心の底から都を感謝している。

そして、そんな彼女の微笑みで都はドキドキさせられた。

あまりにも心が綺麗な人でした。外見だけではなく、心も凄く綺麗。

「……………名前通りか。流石お嬢様／＼／＼／＼」

顔が赤くなった都は少し彼女から視線を逸らす。これ以上見ると、熱でも出てくる気がする。

「なんの事ですか?」

都の言語に理解していない寿々花。

「此花さんは名前の二つの花のように綺麗な人だと思ってた。凄く綺麗だった／＼／＼／＼／＼」

「な……………!?!?!?!」

そして、都の不意の言語に顔が真っ赤になった寿々花。彼女はこんなロマンチックの褒め方で胸がドキドキさせられた。

本来、こういう言葉は社交パーティーで何度も聞かされて慣れてしまいました。彼の口から出てくると、心臓がなぜかバクバクと加速した。

「……………貴方って、偶に無神経ですわね／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

め言葉は容易く女性の前に言うじやないわよ／＼／＼／＼／

「え、なんて？俺は本心のままに言うけど」

「……………男性版の真希さんか……………危うく忘れましたわ」

恥ずかしい顔でそう呟く寿々花。

彼女はすごく可愛く見えるのですが、呟いた言葉は意味不明。

しばらくすると、寿々花は咳払いをして気持ちを落ち着かせてから（実際に落ち着けているかはわからない）都に向かって真面目な顔で話す。

「都さん、貴方を慕う女性が二人くらいにいますから。こういう言葉は今後とも控えていただきたい」

「俺に慕われる女性？ご冗談を。俺はモテ男ではないです。美濃関でも女性に嫌われていますよ（一部は自業自得）」

「なら、衛藤可奈美さんと柳瀬舞衣さんは？彼女たちは貴方に明確な好意を抱いているはずですよ」

あの二人の名前を聞いて、都の心は一瞬加速した。あの二人は彼にとって何より大事な存在。時おり彼女たちにドキドキさせられる。

都は何回の死ぬ直前の体験でこの感情を気付いているが、ずっと知らないふりをした。

「あれは俺を大切にする好意ですよ。ずっと一緒にいるから」

「本当にそう思っているの？」

「うん。俺のような男に恋をしても幸せにならない。可奈美は実の妹、俺とはありえないですよ。舞衣ちゃんもお嬢様だから、妹に夢中するバカには似合わない」

そうだ。それが俺の言い訳だ。

彼女たちは最高の女の子だから、俺のような者には似合わない。

「なら、貴方は彼女たちのことをどう思います？」

「命を替えても、お守りしたい大事な人。最近はちよつと増えているけど。……………結芽の件でもいい、？和の件でもある、沙耶香も放っておけないくらいに可愛かったから助けてあげたい。俺は彼女たちと知り合ってから、守りたい、助けてやりたいという欲がどんどん増えてきた。欲まみれなのかな？俺」

苦笑し、都は自覚がある。自分のこういう思いはただの傲慢だ。弱いのかせに、守りたい者を増やすというのは傲慢の一つだ。欲深いよ。

「そんなことがないですわ。これも貴方が彼女たちを大切にする証です。良いことです。ですがー」

「これは程々にしていただきたい。無理は禁物です。あまり心に心配をかけるのは良くないことですわ」

「でも、そうしないと、守れるはずのものは……」

「……全く、ますます真希さんに似ていきますね。貴方は」

小さい駄目息をついて、寿々花はベッドから降りて都のところ歩いてきた。

別に彼女は傷があるから、ここで療養じゃないらしい。他の理由でここにいる。

「二人で背負うつもり？」

都の前に来て、両手を胸に組んでる寿々花。上から目線をこつちに見下ろしている寿々花は少し魅力的だった。

「二人……じゃないけど。無理をするよ。」

「あら？誰と一緒に？」

意外な返答に、寿々花はちよつと驚きながらそう聞く。

「全員と一緒に。あの日のことは朱音様から聞きました。六人は俺を救うために、折神家に突入してきた。その話を聞いて、俺の命は俺だけのものじゃなくなる気がしてきた。」

「……俺なんかのために、危険を犯して折神家と喧嘩を売った。」

「なんかじゃないですわ……。彼女が危険を犯しても貴方を救いたということとは既に貴方が彼女たちにどれほど重要なのは示したのですわ。わかりましたか？」

「はい……」

軽く頷いて、都は寿々花の言葉が理解した。

自分がいつの間、彼女たちに大切されていた。そのことに都はとも嬉しかった。

だって、誰かに大切されたということは自分が相手にどれほどの価値

値があることを示す。

薫さんもエレンさんも俺のことを大切にしてくれたのか……交流が長くないのに、俺のことを友達だと思ってくれた。

本当にありがとう、二人共。

「……………それと、私にもその仲間の列に入れさせていただけますでしょうか？私も貴方の力になりたいですわ。これも一つの恩返しですわ。」

「いいの？」

「元とはいえ、貴方は第五席。先輩としては後輩の世話をするのは私の責務ですから」

花のような笑顔をする寿々花。

彼女は本当にどうしようもない魅力が満ちている女の子。見ているだけで、自分はこんな人と一緒にいることがいいのかを迷います。

「……………ありがとうございます？此花先輩」

「寿々花っていいわよ。私も都さんと呼ぶから」

「……………それは、少し時間をください。いきなり距離が縮まるとは、心の準備が……………」

「なんて、そこで逆に照れているのかしら？全く、可愛い後輩ですね。」

「うっ……………」

小さく甘い笑顔に都はこの人のことが苦手だ。心がつい彼女に奪われるから。

そういえば、彼女は俺より年下だと聞きました。見た目は俺より頼れる女性だと思っただけね。

◇

「やはり、この御刀はもう主がいるようですね。」

折神家急襲作戦からの一週間後、フリードマンは原宿から刀剣類管理局の局長室に戻って、その報告を行う。

「そうですか……………やっぱりこれは……………」

「ああ……間違えなく、刀使の歴史の中でも前代未聞の大事件だ。」
そして、彼の報告の対象はこの数日に刀剣類管理局局長代理として
選抜された折神朱音。彼女は横浜港の一件以来、英雄たちを送り出す
功績として、民間人に認められて、刀剣類管理局代理局長の位までに
至ったのだけど。

ほぼは内閣官房派の人間たちに強制されて、その鎌倉特別危険廃棄
物漏出事件の責任者としてこの事件を解決させると押さえられた。

この後のマスコミから迫る悪意が満ちる問題も答えなければなら
ない。ただ若い年で政治の闇を無理矢理受けさせられた朱音にフ
リードマンは心が痛む。

故に、できるだけ彼女を支えなければならぬ。幸い舞草の平穩派
は朱音様のために、各地の荒魂を討伐や情報収集を行っている。

その中にもいくつの人材も見つけた。一人は特に情報収集や整理
能力の腕が上手く、真庭部長に重用された。

さて、そろそろ本題に戻り。フリードマンは朱音の指示で都が持つ
ている御刀を刀剣類管理局に返すという命令を受け、まず御刀の保養
を送るつもりだが、その途中に不思議のことが発見された。

それは、持ち主がないはずの御刀には既に持ち主があることに発見
された。

さらに、竹島 雅の報告によると、この御刀は誕生されたばかりに
所属する刀使はいないはず。

今この段階でこれを使うのは英雄様ー衛藤 都しかいないらしい。
い。ならば、この御刀の持ち主の可能性は一つしかない。

「史上初の男性刀使がこの敏感のタイミングで誕生された。」

「……まさか、都さんは御刀に選ばれるとは……本来、これは女性
しか選べられない力なんです……」

フリードマンの推測を聞いて、朱音は重そうな表情でこの発見され
たばかりの事実に向かう。

彼の出現は意外だった。彼女たちにとっても、この国にとっても、
彼の出現は紛れなく歴史に記録される。

刀使の歴史は400年から始まり（実際、この前にも刀使がいるけ

ど、正式に刀使と呼ぶのは400年前から。今のところは男の刀使は現れていない。

故に、人々は刀使が女の子しかないという基本常識に脳内に刻んでいた。けど、衛藤 都の出現にこの常識が大きく変わるかも。

刀使はもう女性だけのものではなくなり、男性にもなれる。

これを機に男性が刀使になる流行れが国の中に起きてしまうかもしれない。そんな時はきつと大きな争いが起きるに違いない。

主に、男性と刀使の争いが現れる。この国は長年の間に男性はずつと女性に頭が上がらないという現状に落ちている。もし、彼らに自分でも希望があると信じていたら、その時は人間と刀使の争いが拡大される。

故に、フリードマンはこの敏感のタイミングだと言った。

それを知っていた朱音もこのことに沈黙している。本来は喜ばしいことですが、彼の出現によってさらなる争いが起こるかもしれない。

「それについては我々もわからないままだったが、この件はできるだけ隠しておきたいです。朱音様」

「そうですね……少なくとも、タギツヒメが各地に分裂されたノ口を先に回収してもらえなければ、それと『三女神』のこともきちんと考えなければ……」

フリードマンの提案に頷く朱音。今のところは彼のことを隠したほうがいい。

けど、そこで逆に英雄たちが余計に彼のことを心配させる。特に一人は彼の妹。

「フリードマンさん……衛藤さんのこと。妹の方はどうしましょうか？」

「可奈美くんのごことは私にも悩んでいますね。何にせ、彼はもう彼女たちにとって替えようがない存在になっている。我が孫娘も彼のことを気に入っているみたいだし……」

二人は沈黙していく。

衛藤 都はまだまだ学生の歳。普段は妹思い、仲間思いのいい人。

舞草にいる時、彼も皆と仲良くしているように見えた。朱音も彼から少しの快樂がもらった。

そんないい人に荒魂のような扱いたくない。

「とりあえず、彼が出院できるまでに観察しましょう。今は三女神のことを集中しなければ」

「はい……わかりました。それと、御刀のことはー」

「真庭部長に託します。念の為、刀剣類管理局に置かないほうがいい。」

「わかりました。ご報告お疲れ様です。」

「貴女こそ、あまり無理しないほうがいい。我々舞草はまだ貴女が必要です。」

「はい」

報告が終わり、フリードマンはこの部屋から出ていた。

「お姉さん……私はこれからはどうしましょうか」

不意に本心が口にくっつき漏れた朱音。彼女の顔はとても疲れたように見えた。

波瀾篇

第33話：次世代の英雄たち

タギツヒメとの戦いから、四ヶ月後――。

隠世へと逃れるタギツヒメは自ら一部の荒魂を切り離し、空高く打ち上げた。

そんな時に散らばっていく荒魂が流れ星のように関東一帯に注ぐ。この件は鎌倉特別危険廃棄物漏出問題と呼ばれる出来事以後、荒魂の出現が頻繁になった。

それを解決するため、我々刀使は忙しい毎日が送っていた。けど、あそこにはあの人の姿がどこにもいなかった。

四ヶ月続いて、向こうから一切の連絡がない。学長からも機密だから、口にも出せられない。

あの人がいない日常はとても寂しかった……一体どこにいるのだろう、お兄ちゃん。



輸送ヘリが空に飛ぶ音を聴きながら、次世代の英雄だと呼ばれた衛藤可奈美は今の現状を思い出していた。それと、ついでにあの人のことも思い浮かぶ。

「……………可奈美？」

「あつ、……………うん、大丈夫。少しぼつとしただけ。」

糸見沙耶香の声で気が付いた可奈美は、沙耶香と共に東京都湾岸線に出現した荒魂の対処のため、展開している特別祭祀機動隊の応援として現場に急行していたことを改めて思い返し、気を引き締め直していた。

けど、沙耶香から見れば、可奈美の顔は大丈夫じゃなさそう。この数ヶ月、可奈美はずっとこんな状態だった。理由は彼女も知っている。

「みやび都は、きつとこんな可奈美を見たくない。」

「え……？」

無口の彼女から出した言葉に可奈美の反応は一瞬に手遅れた。あの名前はとても懐かしいと感じた。

「都は、可奈美が笑ったほうがいいと言ってた。私もそう思う。」

「沙耶香ちゃん……うん、そうだね。お兄ちゃんはきつとこんな私を見たくないもんね。よし……！」

沙耶香に励まされて、可奈美は自分に元気をつける。

「沙耶香ちゃん、この任務が終わったら、手合わせお願いできないかな？」

「………うん、私で良ければ。」

「本当!? ヤッター!」

いつも通りの感じに戻った可奈美は早速沙耶香との立ち合いを求めていた。沙耶香は少し迷いながら軽く頷いた。

この時の可奈美はまだこの四ヶ月の変化が気付かれなかった。



東京都湾岸線沿い——。

橋の上に巨大なムカデのような荒魂が現れて、その荒魂が向かう先には臨時に結成された五人小隊の刀使と特別祭祀機動隊が待ち構えていた。

「………」

五人居る刀使の内つちぎとの一人、綾小路武芸学舎中等部一年の内里あゆむ 歩は初めての實戦の空気に気圧されていた。

「二斉射の後、斬り込む! タイミングを合わせろ、訓練通りやればできろ!」

その証拠に、自分よりも実戦経験が有るであろう副隊長格の鎌府の

刀使の指示を受けていても、御刀を握る手はまだ震え、いつもよりも御刀が重く感じてられていた。

「ハアツ……ハアツ……」

副隊長格の鎌府の刀使の他にも、美濃関の刀使二名、そして長船から上位の実力者が加わってはいるが、自分が上手くやらなければという不安に押し潰されそうになり、吐く息も妙に重かった。

「来ます……抜刀！」

彼女が悩んでいる内に、目標の荒魂が視認できるほどの位置まで近づいてきていた。そのため、事前の作戦通り、機動隊からの支援、もとい援護射撃が実施される。

「写し!!」

副隊長格の鎌府の刀使が刀使の基本戦術である写シを張るように指示され、意識を集中して写シを張る歩。

一斉射を受ける巨大な荒魂を見て、今からあそこへ飛び込むことになると思ひ、戦いに集中するためか御刀を再度強く握る。

「良し、斬り込む！」

機動隊の支援による援護射撃が充分効果が出始めたのか、荒魂は身体の上体を高く揚げていた。それを見た副隊長格の鎌府の刀使はそれを好機と判断して、今から斬り込むことを指揮下の刀使達にも指示を出していた。

遂に、あの大きなムカデのような荒魂の身体に飛び掛かるように斬り込むときが来たと思ひ、ゴクリと唾を飲み込み、必死に覚悟を決めようとする歩。

しかし、次の瞬間、自身が荒魂を斬り込むことはなかった。

突然、空から降りかかるS装備を着用している二名の刀使。一人目は荒魂の角と足を何本か両断していた。荒魂は、その斬られた激痛に苦しむかのように耳鳴りが起こるほどの大声を上げていた。

「沙耶香ちゃん、行くよー！」

「うんー！」

S装備を着用している刀使二名は楽々、荒魂の胴体を両断していき、徐々に荒魂の戦闘能力を奪い、遂には美濃関の制服を着たS装備

装着の刀使が八幡力で跳躍し、荒魂の頭部と胴体を両断する。

その一撃が致命傷となり東京都湾岸線沿いに現れた荒魂はノ口へと還っていった。

「……」

息を呑んで、？里 歩はあの荒魂に致命の一撃を与えた美濃関の制服を着ている刀使をじつと見つめて胸が高鳴り始めた。

この時、彼女は憧れる人ができた。そして、これも彼女と英雄——衛藤可奈美との初出会いであった。

◇

「応援しに来ました衛藤可奈美です。」

「糸見沙耶香。」

今回の荒魂事件の解決に出動していた刀使達に、S装備を解除し自己紹介する衛藤可奈美と糸見沙耶香。

「衛藤可奈美さん、ご無沙汰しております。それと……お久しぶり、糸見さん。」

副隊長はお二人を迎え、可奈美に挨拶をした後、すぐ沙耶香に優しく微笑む。

「雅……お久しぶり。」

そして、沙耶香も相変わらず無口で四ヶ月ぶりの知り合いに挨拶を行う。

「沙耶香ちゃん、知り合い？」

「うん。学園内で結構お世話されていた高等部の先輩。」

「私は竹島たけしま 雅みやびと申します。糸見さんの義理お姉さんと自負しております。この度、お二人のご協力を得て、私はとても幸福です！何より、糸見さんは元気そうでお姉さんは嬉しいです。」

「ありがとう。雅」

「あ〜糸見さんに感謝された!!この人生に悔いがありません！」

沙耶香の感謝に、雅はなんだか興奮しているように見える。

「えっと……私は退場したほうがいいのかな？」

それを見た可奈美は苦笑しながら、この場から離れるつもり。

「いいえ、貴女にも伝えたいことがありますー」

「あつ、あのっ!!お二人は四ヶ月前の英雄さんですよね?」

「……えっ?ああ、はい。……そうです。」

突然、入ってきた歩の問いかけに可奈美は少し困ったように答える。

「……………」

そして、空気を読んでいた雅は口を黙ったままに見届ける。彼女は恐らく衛藤さんに憧れていると思う。

無理もないか、彼女たちは四ヶ月前に大荒魂を倒した英雄なんですから。

「出向で特別任務部隊に参加しています!!綾小路中等部1年、内里歩です!」

「あ、歩ちゃんですね?」

「はい!私も、鎌倉の本部に居ます!寮で可奈美さんや糸見さんを何度かお見かけた頃があつて、その……本人を直接見られて、私は嬉しいです!」

「そ、そう……?私も歩ちゃんと出会って良かったと思います。」

「本当ですか!?!」

「うん!」

「嬉しいです!」

憧れる視線で自分に向かう可奈美は笑顔で頷く。そうしたら、歩も目をバツと開き、凄く嬉しそうな顔。

彼女は相当に衛藤さんに憧れますね。でも、そろそろ時間を取り戻さないと、現場の人たちにも迷惑をかけられる。

「?里さん、貴女の気持ちは凄くわかります。ですが、そろそろ控えたほうがいいです。撤収の準備は遅れていますよ。」

他の隊員に視線を移すと、彼女たちは既に撤収の準備を完了した。

「……はっ、はい!」

それも気付いた歩は慌てて、雅 副隊長に応じる。

「じゃあ、また後でね。歩ちゃん」

「あつ、……はい!!」

そして、彼女も可奈美に元気よく応じた。何より、可奈美は彼女の憧れる人だから。

そして、雅に促されて歩は急ぎ隊員の方へ戻った。

「それじゃ、一緒に撤収しながらさつきの話題を続けましょう。貴女の兄、糸見さんの英雄——衛藤 えとう みやこ 都の動向について」

「——!!」

「……………っ!」

撤収するための車の居場所へ歩く雅は平然に彼女たち二人にとんでもない情報を口に渡す。

それを聞いて、沙耶香と可奈美は目をバツと開き、胸が思わずドキドキした。

あの人のこと……四ヶ月ぶりにやつと彼のことを聞いた。

四ヶ月の間にずっと行方不明のまま。彼女の兄、沙耶香の英雄。

二人の少女は今までもないほど胸が高鳴る。ずっと聞きたかったこと。

「お兄ちゃんの居場所が知っていますか!?!」

「雅、教えて」

「……………うん。では——」



美濃関学院——学長室。

「米軍所属艦艇の奪取、都市部への不明機射出、……国民がどれほどの不安を抱き実害を被ったか、またどのよう^{おりがみあかね}に受け止めているのでしょうか?」

テレビで映った現場ライブにて、折神朱音は国会で四ヶ月前の出来事について、舞草の代表証人として出席した。

「折神証人。」

テレビの中で議長の声に応えるかのように、朱音は男性議員の質疑に答えるように毅然と壇上に立っていた。

「一部の特祭隊により20年前の大災厄のような事態は未然に回避することができました。また、管理局の一員として、我々は最良の手段を討てたと認識しております。」

「しかし、特別危険廃棄物の大量漏洩、漏出が起きました。管理局の責任、及び今後どのような対応をするのかお聞かせ下さい」

男性議員は狙い済ましたかのように、次の質疑を繰り出していた。

「折神証人。」

議長は朱音に男性議員の質疑に答弁するよう朱音を呼んでいた。

「漏出した特別危険廃棄物に関しましては、対策本部と特別任務部隊を設置し、全力で回収に当たっています。これにより、我々刀剣類管理局は、一年以内での収束を見込んでいます。」

「管理局内部で何が行われていたのか、国民は知りたいのです！当事者の前局長折神おりがみ 紫氏ゆかりからの説明を求めますっ!!」

「前局長は現在療養中でありませぬ。したがって、局長は証人喚問を受けられる状況ではありません。」

「はあ……」

駄目息と共に、現場ライブを見る女性――美濃関学院学長羽島江麻はしまえまはテレビを消した。

このライブは四ヶ月続けて同じ内容でした。国会はずっとこのやり取りで刀剣類管理局を攻め続けていた。本当に、嫌になる。

「朱音様の証人喚問ですか。折神紫様は療養中だと何度言っても、議員の方は「説明を求めろ」の一点張りですよね。」

そして、同じく学長室にいる柳瀬舞衣やなせまゐも複雑の表情で感想を述べる。

「今や刀剣類管理局は格好の的。新体制とか舞草とか言っても、世間には同じに見える。ノ口を大量に漏出し、土地を穢した、皆さんの組織……」

「……あの日、タギツヒメによって関東一帯に荒魂が流星のように

バラ回れた。いわゆる鎌倉特別危険廃棄物漏出問題。」

「刀使は所属に関係なくバラバラに編成されて、各地で対応に当たっている。その中にも、厳しい戦いを強いられている刀使も多くにいるのに……世間からこんな扱いを受け続けているのは納得がないのね。」

「仕方ないですよ。ノロを漏出されたのは事実ですから」

羽島学長に舞衣も仕方ない顔で同意する。この数ヶ月彼女はこの状況を十分見届けているから。

人を助けに行くのに、叱られた刀使もたくさんいた。それを影響されて、落ち込んでいる刀使も多数にいた。

それを慰めるために、鍛冶科の服部先輩も刀使応援会を成立し、彼女たちの文句を聞いてくる。

「……それに、希望があると思います。なぜならー」

「本学付近で、荒魂の出現が確認されました。刀使は、至急出撃準備をお願いします。繰り返しです。本学付近で、荒魂の出現がー」

そんな時に校内のアナウンスが舞衣の話の横断し、荒魂の出現に刀使たちの出撃を求められる。

「荒魂!?!どうしましょう。私も出撃したほうがいいでしょうか……?」

「そうね……柳瀬さん、一人で大変ですけど……お願いしー」

その時はさらに、ドアが軽く叩かれた音が響き。二人の刀使と一人の執事姿を仮装した仮面男が入ってきました。

「二人ではありません、舞衣様。」

彼の声が続いて、他の二人……元い、一人だけが自己紹介を行う。

「失礼します。綾小路武芸学舎、高等部二年、木寅きとらミルヤです。」

「4秒で支度しな!荒魂ちゃんをぶっ潰しに行くぜ!」

「七之里しちのさとさん、4秒では流石に短い過ぎます。せめて三十秒でお願いします。」

「珍しく、彼のことを同意します。」

そこで、執事服の仮面男はミルヤと呼ぶ少女と一緒に七之里と呼ぶ少女につっこむ。

「ミルヤさんと七之里さん……それと、ユメさん！なんてここに!?」
舞衣の視線が刀使の二人を見回った後に、仮面男のところ止まった。

「お二人のついでです。舞衣様、私は貴女の新たな護身用の執事ですから」

「それはいらないと何度もお父さんに言うのに、私はあの人……以外の執事が必要ない!」

なんか表情が悲しくなる舞衣。しかし、仮面の男は彼女に影響されずに答える。

「それでも、そばにいさせてください。舞衣様」

「……………っ!」

「おいおい、なんだ?あれ」

「七之里、少し口を黙ってください。我々が入れる間ではありませんよ。」

「……………とにかく、柳瀬さん。出撃をお願いします。」

彼女の事情を知った学長からも言い辛そうな表情で彼女達に荒魂討伐をお願いをする。

「……………はい。」

それを答える舞衣は悲しい顔で刀使たちを連れて現場へ参った。

この場に残された執事と羽島学長は無言で向き合う。

そして、数秒後に彼女から話をかけてきた。

「本当にいいのですか?彼女を騙して、この新たな身分で彼女と向き合うなんて……………」

「それは孝則さんとの契約ですから。羽島学長こそ、彼女に何も言わないでください。柳瀬家の事情もわかっていらつしやるんですね?」

「それは……………わかりますが。ここでの数ヶ月は衛藤さんと柳瀬さんも……………」

「これ以上を口に出さなくてもわかります。辛い役割を演じさせて、申し訳ありません。」

「それはいいですけど、あまり彼女たちを悲しませないでくださ

い

「もちろんです。羽島学長。」

彼から一礼をして、彼はすぐ「中間報告の予定がありますから、お先に失礼いたします。」とこの場から退場した。

「……………あまり無理しないでくださいね」

彼が退場した後、羽島学長が誰にも聞こえない音量で心配の口を漏れた。

第34話：妹がいない四ヶ月

二週間前ほど――

三ヶ月続けていた病院生活から離脱した都は真庭本部長直々の指示によつて各地に飛ばされて、刀使たちの指揮という役割を取る。

本来はずつと病院に監禁されたままだけど、寿々花の推薦によつて、やつと認められて外に放り出された。

これも元親衛隊軍師の此花寿々花の名声によるもの。本当に、この三ヶ月間ずつと彼女に世話された。

いつかこの恩を返さなければならぬと出院してから、都は文句言わずに各地の任務を果たしていく。

そして、彼は今日もある任務を見事にこなした。

「これで一応任務を完了と言ったところか……にしても、荒魂の出現がこんなに頻繁になっているとは……やっぱりの決戦は関東だけではなく近畿地区も影響されたのか……」

衛藤 都は撤収作業をしている刀使たちを見守りながら奈良市最近出現率が普通ではない量の荒魂出現に深く考え込む。

今だに控える範囲内で対処できるですが……数がもつと増えれば、ただ平城の刀使たちだけでは食いきれなくなる。

本来、自分も刀使たちの負担を下げるために参戦したいところだけど、本部長に禁じられた。理由もちゃんとわかっているつもり。

自分は異常の存在。史上初の男性刀使として誕生した自分は刀剣類管理局を攻撃している議会の汚い人たちに利用されるかもしれない。

特に鎌倉特別危険廃棄物漏出問題以来、女性の刀使は世間に不信用された。理由は大層に予想がつけられる。何にせ、問題は折神家からだ。

あの日、タギツヒメは折神家を中心にして関東一帯に荒魂を雨のように降り注いだ。つまり、この災害は折神家からの物。

政府も特に刀剣類管理局を目障りと見ているのだろう。理由も予想がつける。権利が持ちすぎた組織が国の脅威になる。だから、彼らは次々と朱音様達を攻め続けていた。

本当に嫌な国なのね……………。

さて、本題に戻り。俺という男性刀使という存在は恐らく新たな争いの種になる。なぜって？それは女性たちは不信用されたから、男性の方が信用できるなんて馬鹿な理由。

まあ、仕方ないよね。この国は特に20年前から腐っているから。大荒魂の誕生も彼らにも手を貸している。たとえば、それは本意だけと。

とりあえず、俺は真庭本部長の指示で各地で刀使たちを指揮していて、功績を積み上げるところ。

これも一つの策だ。俺という存在が刀剣類管理局のために必死に働いた姿を世間に見せつけて、「男性である俺」が最初から刀剣類管理局の側だったことを判明する。

そうすれば、俺の正体がバレ、利用されようとしても争いも最低限に抑えられる。ちなみにこの策を作ったのはフリードマンさん。流石、舞草の軍師さん（勝手に名付けた都）。

「…………今、未来のことを考えても仕方ない。俺もそろそろ戻って、次の任務を待機するか」

「今日はお疲れ様です。衛藤隊長！」

余計な心配をやめて、都は寮に戻って待機すると…………唐突に、誰かに呼ばれた気がしてきた。

そっちへ向くと、そちらに居るのは灰色ショート髪の女の子。彼女の制服からは平城の人であることを判明する。

そして、彼女は元気よく笑顔で都に向かう。

「おう、お前もお疲れ。確か、名前は岩倉さんだっけ？」

「はい！岩倉早苗いわくらさなえです。名前覚えてくれてありがとうございます。」

「それは大袈裟だ…………」

「いいえ、隊長がこつちに転移した数日に誰の名前をよく覚えていないと、皆はよく文句を言いました！ですから、隊長さんに覚えられ

て嬉しいですよ。」

「そういえば、俺はクラスメイトの名前もしつかり覚えていないなあ……まあ、重要じゃないから、覚えなくても仕方ない。」

「それは岩倉さんの剣筋があまり綺麗なもので、つい見惚れちゃったのかも」

「隊長は剣術に詳しいですか？」

「うん。だから岩倉さんの綺麗な剣筋を見て、つい見惚れた。」

「なるほど。だから、腰に刀がついているんですね。けど、その刀は御刀ですよ？それと、それは私達がつけていた御刀固定装置ですよ？」

彼女の視線は都の腰部位に移す。そこには刀を固定する装置と御刀がある。

「うん、俺は鍛冶科出身だから、御刀を便利に持ち出すため、これを作っちゃった。それと、御刀については機密ですから、気にしないでくれ」

「わかりました。鍛冶科出身ということは美濃関の方だよ？なら、隊長はもしや衛藤可奈美さんのご親族ですか？」

「うん、あの英雄のお兄さんだよ。」

気分が高ぶる早苗、彼女の目はキラキラしているのが一目でわかる。何にせ、可奈美は大荒魂を倒した大英雄だから。

それと、苗字も特に隠していないから、バレるのも予想中だ。それに、隠す理由もなかったし。

「凄いです！まさか、衛藤さんのお兄さんがうちの隊長だなんて……私は今日のことを絶対忘れません！」

「ハハハ、興奮しすぎるな。俺は妹と違って、全然凄い人じゃないですよ。」

自嘲するような行為を取る都。彼は自分と妹の距離を知っている。彼女は英雄、自分はただ彼女のような名声がない兄。ならば、両者の差はもうわかるんだよな？有名になったのは妹、俺はただの兄だ。

「いいえ、衛藤隊長は凄い人なんです！」

「岩倉？」

都に不意に近づき、彼女は真面目な目で彼を見つめる。

「貴方の指揮下で動くのは不思議にすごく安心します。ですから、皆はいつもよりやる気を出して荒魂と戦っていました。これも、衛藤隊長が私達を見守っているからだ。」

「岩倉……」

「ですから、もっと自信を持ってください。私は衛藤隊長に自信があります!」

早苗からの優しい微笑み。少し心が暖めされた気がする。彼女はきつと舞衣たちと同じいい女の子なんだろうね。

こういう人の心を温める笑顔はその証拠だ。

「俺はただ精一杯誰も怪我されたくないと思っているだけだ。……でも、ありがとう。岩倉」

「どういたしまして、衛藤隊長。」

照れ隠しなのか、都は彼女から視線を逸らす。ただ一週間の付き合いなのに、自己が部隊の隊員に認められたとは……素直に嬉しい。

「それより、衛藤隊長はこれから寮で待機ですか?」

「ああ……そのつもりだ。次の指示が来るまでに、ここで滞在するつもり。」

「なら、私は隊長の部屋に行ってもいいですか?」

「はあ?」

唐突、彼女にそんな話を聞かれて、都は呆れた反応だ。

部屋?女の子が男の部屋に?なぜ!?

内心で慌て始めた都。彼は一応異性を気にしている頃の男の子ですから、女性にそう聞かれていくら鈍感でもそういうの気にしている。

「衛藤隊長は出撃以外にずっと一人で過ごしましたわね?私達はまだ隊長のことがよく知りませんから……隊長が異動になるまでに、私は隊長のことをもっと知りたいです!」

「……………な、なるほど!! (汗)」

「……………」

少し勘違いしている自分をぶん殴りたい。

彼女の瞳はとても純粹、真っ直ぐで、少し可奈美と似ているが、似てない女の子。

しかもまだまだ中学生なので、男性に対する異性意識はまだ強くなってる（身近い異性を標準）から、岩倉がこういう提案を出したと思う……多分。

「……なんでもない、俺の部屋に来てもいい。言っておくけど、つまらないのよ。俺の部屋。」

「あ、はい！ありがとうございます！」

笑顔で元気よく答える早苗。彼女の元気さはとても魅力的だった。その後、軽く報告を本部へ送り出して、早苗と一緒に平城学館に戻る。

ちなみに、平城の五条学長は今頃にいないみたい。？和もある理由で学館にいない状態。

あれからの四ヶ月後、？和はどうなっているのかな？母の仇を取った彼女は今頃何をしているのだろうか？

学館に戻る道中に都はずつと？和のことを考えていた。



「ここが衛藤隊長の部屋ですか？なんか普通だね。」

都の部屋に到着した早苗は早速その感想を述べた。

「短期で滞在するつもりなので、部屋は元のままにしている。それでも、雑乱に過ぎないように、最低限の掃除も行っている。」

御刀を床の間に置いていく。平城の宿はすべて和式をメインにする設計らしい。最初はここに来るときはびっくりしたのだけど、この生徒は特に慣れていた。

それと、早苗も寮に住んでいる者らしい。

「さあ、適度に座っていい。俺は晩ごはんを作る。」

「は、はい！って、衛藤隊長は料理できますか!？」

少し口を開いて、早苗は立ったまま驚く反応だ。

「うん、前からは妹のために料理の腕を上げたのよ。男が料理をす

るのはそんなにおかしいですか？」

「いいえ！ただ衛藤隊長のために自分の手料理を振る舞うと思つて、食材を自室から連れてきたのだけど……」

彼女は苦笑しながら、手に持つ袋を見せつける。あの中にいるのは食材だったのか……。

それにしても、俺のために料理を作る女の子か……舞衣ちゃんの次に彼女は二番目。その気持ちが素直に嬉しい。

「ごめんなさい、余計のことをしちやって……」

「……いや、せつかくだから、晩ごはんは岩倉に任せる」

「え？それって……」

「二回言わせるな。俺の晩ごはんはお前に任せたぞ」

「………はい！」

故に、俺はその気持ちを踏み潰さないため、彼女に晩ごはんの役割を任せた。せつかくの気持ちだから、尊重したいんだ。

結果として、彼女はとても嬉しそうな表情で食材を連れて、すぐ台所の方へ移動した。

やっぱり女の子は笑ったほうが可愛いと都は再び認識した。

それにしても、部屋の中に台所を設置するのは中々の出来事だな。平城の学長も結構変わった人だね。

「さて、料理を待つ間にこれをやろうか」

そう思つて、料理を待つ間に都は床の間に置いた御刀を持ち出し、鞘から抜け出す。

「………」

全集中に至らぬ程度の力で、御刀を感じ取る。

そして、白い光が一時に自分の身を纏ったが、すぐ消し去る。

「やっぱり写しは一時だけに使うか……普通の刀使のようにならないのかな」

御刀を見て、都はブツブツと分析する。今のところは彼が刀使だけでなく、道半端の刀使だ。

何にせ、写しを一瞬しか使えないのはこの国には彼一人。理屈は知らないが、これはまだ御刀が完全に認められないと直感が彼にそう教

わった。

ちなみに、フリードマン博士に実験された結果に俺はどうやら連続写しを貼り直しても刀使たちのように疲れがないらしい。

写しが物理的に剥がれなければ、基本的に好きなだけ写しを貼り直すが可能だ。

ただ、一回写しが剥がれる実験で俺はすぐ立てられないような状態に落ちてしまった。

フリードマン博士から解析すると、多分これは訓練不足だからだ。何にせ、俺は刀使になったばかりに刀使たちの訓練なんて一度も受けたことがない。

身体の方はまだこの力を慣れていないから、加えて俺は文字通り途中半端の刀使なんだ。

御刀を鞘に収めて、床の間に置き戻す。これ以上試しても無駄だと思う。

「……………やっぱり、追いつくのが大変だな。」

男性刀使になる以上、できる限り可奈美たちのように写しを長く維持したい。そうすれば、彼女たちと一緒に戦える。

「この先の道もまだまだ長い……………現在の俺は可奈美達に何かをあげられるのか……………正直迷っちゃうわね。」

自分の無力さにならずと悩み続ける都。彼は四ヶ月間、最愛の妹と舞衣と？和と色んな仲間たちのことを思いながら、自分が何かをできるか悩み続けた。

そして結芽から学んだ（#実際は記憶で剣技を再現と本から彼女の剣技を自分の剣に溶け込む）剣技でどれくらいことをできるか…………。

「衛藤隊長、大変お待たせしました。」

しばらくの時間を経つと、早苗は台所からうどん料理を持ってきました。

「うどん料理か……………久々だな」

「はい、これは私の好物ですが……………衛藤隊長にも気に入ったら、嬉しいです／＼／＼／＼／」

うどん料理を都の前に置いていく早苗は丸トレーで赤くなる顔を

隠す。

その仕草はとても可愛くて、彼も思わずドキドキした。何より、彼女の平城の制服エプロン姿も彼女と凄く似合っている。

「お、おう／＼／＼／＼／＼それより、お前の分は？」

「あ……そうだった！衛藤隊長に早く食べさせたくて、つい……すぐ持ってきてます！／＼／＼／＼／＼／＼」

自分の分を思い返し、また台所の方へ戻っていく早苗。

本当に何なの？外観は普通なのに、可愛すぎだろう。何度も早苗の可愛いところにドキドキされた都はその感想を心の中に述べた。

今日からは正式に認識するなのに、都はもう彼女の良さをよくわかった気がする。彼女を嫁だったら、きつと死ぬほど幸せだろう。

それから、早苗が自分の分を用意した後。二人は「いただきます」と言い、水沢という名前のうどんを楽しく食べ始めた。

味の方は結構美味しかった。流石、彼女がお勧めの食物と言ったところ。

「えつと……味はどうですか？」

「お前の好物になる原因がわかるほどに美味しかった。後はレシピもコピーさせてください。妹達にもこれを食べさせたいから」

「……ふふつ、衛藤隊長は本当に妹思いのお兄さんなんですわね。わかりました、後はレシピを教えます。」

「助かる。」

お互いが仲良く笑い合う。こうして二人は楽しい食事を過ごした。



「馬庭念流か……」

「はい、まだまだ勉強中なんですけど……」

食事が終わり、食器も洗ったところに二人は軽く雑談してから、いつの間にお互いの流派を語る。

にしても、距離近くない？

都は隣に無防備で座っている早苗を気にしている。信頼されていたのは嬉しいことだが、女の子が男の部屋ではもう少し警戒した方がいい。

特に早苗は可愛い女の子。顔立ち、個性、仕草が可愛くて仕方ない。身体の方は豊かのタイプではないが、それでも十分に男を興奮させられる魅力がある。

まあ、都は手を出さないけど。彼女は？和の友達であり、部隊の隊員でもあるからだ。

「道理で俺の目を惹きつけますね。貴女の流派は主に足で力を出し、最速の速度で飛んできた矢を斬り落とすだと本で読みました。」

「私の剣はそんな大層なことじゃないですよ！！まだまだ途中半端ですし」

謙虚、それとも自信がないなのか。彼女は苦笑いながら、自分の御刀を優しく撫でる。

「十条さんにも遥かに届かないですし。御前試合で綾小路の人と相打ちなので、初戦であっさり淘汰されたのです。」

「御前試合に出たのか……気付かれなかった。」

四ヶ月前の御前試合の時、注意は完全に可奈美たちに視線が奪われた。

「あはは……私って十条さんより存在感が薄いだからね。彼女は強い、遥かに強い……ううん、違う。きっと彼女が十分頑張ったから、あんなに強いんだ。」

「毎日遅くまで、ずっと一人で稽古していて、真面目で鍛錬を積み重ねる。それは彼女の強さなんだから、私も頑張って彼女の隣に立てるように剣の腕を上がろうとしたのですが……結局、このざまなんだよね。」

再び苦笑している彼女、顔からは少し寂しく感じる。

「私は十条さんに何もしていなかった。御前試合決勝戦の時もただ見るだけで……」

この子は俺と少し似ているね。俺も？和の大事な時に助けられな

くて、ずっと悔やんでいた。彼女の幼馴染なのに……。

「誰もあの場でこうなるだよ。あまり気にするな」

「あつ、……衛藤隊長は優しいですね。」

「惚れたのか？」

「少しだけ／＼／＼／＼」

「……………／＼／＼／＼／＼」

冗談を言うつもりですが、早速彼女にドキドキさせられた。本当に油断ができない魅力がある人なんですね。

因みに、彼女の頭を撫でた。感触は最高でした。

「そういえば、衛藤隊長も同じなんですね……？」

「何か？」

「衛藤可奈美さんが十条さんと逃走しているときも、私と同じ不安なんですよね？」

ああ、確かに不安でしたね。けど、そんなことより行動を出すほうがいいと判断したから、こうしていい思い出がたくさんできちゃいます。

可奈美、舞衣ちゃん、沙耶香、薫さん、エレンさん、朱音様、結芽などの大切な方々と出会った。そして、寿々花と仲良くできた。

再び自分の人生を幸せだったと感じた。

「もちろん、不安なんだよ。けど、そんなことより俺は妹たちを手助けるために、真っ先に行動を出したから、たくさんの出会いがあった。」

「……………そう。ちよつと羨ましいな。隊長さんに」

羨ましい視線を都の方に投げた早苗。彼女は即座に行動を出せなかった人間だから、実の行動を出した人間にそんな視線なんだろう。

「代償がデカかったのよ。親衛隊と三回の死に合いの困境から乗り越えたから、今の出会いがある……そうだろう？ 結芽」

自分の御刀の鞘につけていたいちご大福ネコを見て、都はあの少女のことを思い返した。

自分の人生最も重要な目標好敵手、史上最年少の天才少女。彼女のおかげで、剣への熱意も取り戻した。

これも自分が天然理心流を真面目に学んだ理由。彼女の流派を使って、彼女の凄さをこの世に知らせよ。彼女ができなかつたことを俺が受け継ぐ。

しつかり見ていたのか？結芽。

「なんか、衛藤隊長は本当に色々あつた気がする。」

「そうだね……話せば、長くなるけど。聞いてくれる？」

「もちろん！私は最初それを狙ってやってきました。」

「よしよし、お茶を入れたら話そう。」

「私も手伝います。」

都がお茶入れようとするが、早苗も立ち上がって一緒にお茶を入れる作業に入る。

彼女の手付きが繊細で、手慣れている。

「なんか、岩倉はいい嫁さんになりそうだな。」

「え!?!?// // // //」

都の不意の言葉に顔が真っ赤になった早苗。そして、これを作る張本人はまだ自覚なし。



「……………すう……………すう……………」

少女の寝息が耳近くに響いていく。

14歳未成年の少女の匂いと柔らかい身体はどんどん俺の理性を奪っていく。

いつの間に、彼女――岩倉早苗は無防備で都の隣に眠ってしまった。

一応彼女を自分のベッドに運ぶつもりだが、色々まずいからやめた。

岩倉早苗は魅力がある女の子。都は何度も彼女のせいでドキドキしてしまった。

そして、今も彼女の寝息と匂いと肩だけの接触でドキドキしたのだ。

「これは流石にまずいよな。でも彼女を起こすのも可哀相だし……」

「……………すう……………すう……………」

横目で彼女の寝顔を覗く、とても穏やかな可愛い寝顔でした。

こんな顔を見てみると、なんか舞草に行く時に見た光景を思い返した。

あの時の沙耶香と舞衣は本当に可愛くて、尊く見える。そういえば、あの二人は今頃に何をしているのかな？忙しすぎて体調が崩れなければいいのだけど。

「ん…？」

その時、都の携帯端末に電話が入った。こんな朝早い時間は誰だろう、と発信者の名前を確認すると、『柴田さん（クソおじい）』とあった。

柴田さん？三ヶ月ぶりに本部長以外の電話が意外に彼だった。なんて、今更彼から電話を？自分はもう柳瀬家の執事ではないのに……。

とにかく電話に出よう。そうしなければわからない。応答のアイコンに触れ、端末を耳に当てる。

「もしもし、柴田さん？お久しぶりです。」

『久しぶりだな。最近はどうでしたか？刀剣類管理局の下で働くのが気持ちよかったのかな？』

こいつ、なんて俺が刀剣類管理局の下で働くことを知っているんだ？

「ああ……………少しブラックのところがある場所なんです、礼儀なんて気にしなくやっていいから、結構気持ちがいい職場でした……………多分。」

真庭本部長は労働基準法が知らない人らしい。出院してからはずっと各地で指揮をされていて、休める時間もほとんどいかなかった。

よく計算したら、休める時間は最大一晩の時間しかない。そこは唯

一救えるところなんですネ。

休めず働くよりマシだ。

『それは良かった。けど、こっちは悪いお知らせがあります。もしかしたら、貴方はこっちに戻ってくるのかもしれない。』

「どういうこと？」

『実は旦那さんがー』

第35話：柳瀬家の場景

「ようやく、来てくれたね。薫」

刀剣類管理局本部にある作戦指揮室に、真庭本部長はある人物を待っていた。その人物は桃色のツインテールの小柄な女の子――益子ましこ薫かおる。彼女は可奈美と舞衣と共に四ヶ月前の大荒魂討伐戦に参加した英雄の一人。

けど、彼女の顔からは英雄様らしく凛々とした雰囲気には見えな
い。むしろ、疲れと不満と怒りが混じった顔。

「そろそろオレに休暇をくれませんか？クソば……本部長、オレはこの四ヶ月で休みなしで各地に飛ばされたぞ！労働基準法はどうした！」

「移動中でちゃんと休んだらろう？」

「移動時間を休暇と呼ぶはおかしいだろう！あと飛行機が満席だからって高速バスに乗せるって……どこかのブラック会社よりひどいわ！」

「そんなことはない。それよりー」

「それよりだど!?オレを無視すんな！」

初頭から文句を言うばかりの薫に真庭本部長はお構い無しに本題を入れる。

「ここ最近、ノロの強奪事件が起きた。犯人は荒魂じゃない、刀使だ。」

「はっ？」

突然切り出された本題を聞き、今何と言った？という顔を表した薫。刀使がノロを奪うなど、鼻で笑ってしまいそうな冗談くらいだと思ってた。

しかし、真庭本部長は結構真剣な表情であるゆえ、薫も改めて真面目に聞く。

「ここ一週間で四件、ノロの輸送車両が一人の刀使に襲撃され、全てのノロが奪われた。犯人も、その動機も不明だがな」

「おいおい、だったら護衛くらいつけたらどうなんだ?」

薫は呆れてやれやれと手を振る。そんなもの、管理局の不手際ではないかと言わんばかりに、真庭本部長は間髪入れずにそれを返した。

「つけた。二件目以降はこちらが用意した腕利きの刀使を護衛に付かせた。だが、奪われた。」

「相手は一人なんだろう?」

「それでも、だ。相手はそれ以上の手練れらしい」

「……大体、ノロを奪ってどうするんだよ。『旧折神紫派』じゃあるまいし」

旧折神紫派とは、タギツヒメに憑依されていた折神紫とその親衛隊、そしてノロの人体実験を行っていた者達の呼称だ。

タギツヒメが隠世に追いやられ、旧親衛隊は解散されて、一人はまた刀剣類管理局の下で治療中。人体実験を行っていた研究者も更迭されたため、もはや壊滅状態のはずだ。

「まさか、そうだって言いたいのか?」

真庭本部長が否定しないことから、薫は聞き返す。しかし、真庭本部長はゆっくりと首を左右に振った。

「まだ断定はできない。とにかく、この映像を見てくれ。護衛の一人が撮影したものだ」

大型モニターに映像が表示される。そこには、横転したノロの輸送車両と倒れ伏す回収班の面々。そして、襲撃犯と思われる刀使によって護衛の刀使が斬り伏せられている光景が映っている。薫は犯人の外見を確認しようとするが、その姿は黒いフード付きのコートに覆われており、手元と口元くらいしか肌が見えない。

「このように、襲撃犯はフードを被っていて顔は見えない。」

「御刀の銘は?」

「調べたが、未登録だ。」

「剣術の流派は?」

「当てはまるものが多すぎる。」

「つつかえねー」

薫は心底つまらなさそうに頭をグルグルと回す。そこで彼女は突

然ある人物を思いついた。

「あ、可奈美に見せればいいだろう？ あの剣術オタクなら簡単に流派がわかりそうなもんだ。」

「ああ、近いうちに衛藤にも協力は依頼する。だがこの件は今だに少数の人間しか知らせていない。」

「管理局はまた内部を疑っているのか？」

「……否定はしない」

「……………」

真庭本部長は薄ら笑いを浮かべながらそう言った。刀剣類管理局内部の大まかな敵勢力は四ヶ月前に潰したが、それは完全ではないと理解している。

「それと、本来この件はお前ともう一人に依頼するが、残念ながら彼は別の件でしばらくこつちの手伝いができない。」

「ん？誰だ？」

薫がそう尋ねると、真庭本部長はだめ息を吐いながらその人物の名前を口に出す。

「衛藤 都だ。」

「都……………!？」

その名前を聞き、薫は驚いた顔を隠さない。あの決戦から四ヶ月、彼女たちは彼の情報を一切手にれなかった。そのせいで、薫以外の五人は心配で彼の手かがりを探すため、積極的に任務を受け取り各地に飛ばされた。

だが、それは薫が彼のことを関心しないわけではない。彼女はただ四ヶ月間休みなして働かさせられて疲れただけ。

「あいつは無事なのか!？」

「ああ、一ヶ月前では刀剣類管理局の所属になった。そして、お前みたいに各地で刀使を指揮する役割。」

「なぜオレたちに言わなかった!」

「機密だから。」

彼女が淡々と言い、隣のパソコンを操作する。そうしたら、薫の携帯は着信音が鳴いた。

「くれぐれもこのことを他の連中に知らせちゃいけない。最低でもお前が信用できるやつだけにこの情報を。いいな？」

周囲の近くは彼女たち二人にいないと確認した真庭本部長は薫だけか聞こえる声量で彼女に話す。

これはつまり相当に極機密の話だと薫が心得た。そして、ここでの大半の連中は信用できるやつが少ない。

「わかった。受けて立とう。」

「この任務を任せた。それと、彼のことは心配が無用だ。彼も自分の立場もよくわかってるやつだから」

薫はそれだけを聞き領いた後、退室した。



ジュワアアア

心地の良い、油の跳ねる音が厨房の中で鳴り響き。柳瀬家の新たな執事ユメは心の内に歌を歌えながら晩ごはんの準備をする。

「いい音！」

その時、小さい女の子が厨房に入り、鳴り響いた油が跳ねる音に耳が痺れたみたい。

「詩織様。使用中の厨房が危ないですから、身の安全を考慮して、リビングに戻ってください。」

「でも、でも。都お兄ちゃん”がうちに料理するのが珍しいもん！」

「私はユメです。都お兄ちゃんじゃありませんよ。」

詩織——柳瀬詩織の言葉に彼は優しく訂正する。今の彼は都じゃない、ユメという偽身分だ。

「でも、どう見ても都お兄ちゃんだよ。変な仮面をつけても、私にはわかる！」

「よしよし、詩織様。今日は何かを食べたい？お兄ちゃんの秘密を

守ったなら、いくらでも作ってあげるよ」

「唐揚げを食べたい！」

「わかりました。いっぱい作ってあげるから、美結様と一緒にリビングで待ちましょう。いい子だから」

詩織の頭を優しく撫で撫でしたあと、ユメは彼女をリビングまでに見送る。その途中は三回でも頭を撫でた気がする。

彼女はどうかやらこれがお気に入りみたいだ。本当にとっても可愛く、愛おしい妹さん。

とはいえ、浮気はだめと彼は心の中で常に反省している。いくら他の妹さんは可愛くても、最愛の妹はただ一人で十分。

それより、彼の身分を見抜いたのはどうかやら詩織と美結がいる。なぜでしょう？ 仮装は舞衣ちゃんさえも見抜かれなかったのに……。

それから、三十分経つところ、玄関から「舞衣お姉ちゃんだ！」という声が鳴り響き。ユメは誰か帰ってくるのがわかってしまった。

「よし、ちょうど料理も大部分完成したし。お迎えとするか」
エプロンを外して、ユメは慌てずにリビングの方へ帰ってきた彼女を迎える。

「舞衣様、お帰りなさいませ。」

「舞衣姉、お帰り。」

「お帰りじゃないでしょう？ また制服のままゴロゴロして……」

しかし、彼女——柳瀬舞衣はユメよりソファの上にゴロゴロしていた学校の制服姿の美結の方に注目する。よく見たら、美結はソファでだるく携帯を弄っている。

「これが終わったら、着替えるよ。」

「皺になるじゃない？ ユメさん、ごめんなさい。少し回避してあげて」

舞衣は美結の制服を脱ぐ前に、一瞬だけユメの方へ見た。そして、彼はただ「わかりました。」と目を逸らした。

「むう〜」

「そんな顔しないの。もうすぐお父様が帰ってくるから」

「え!? お父さんが帰ってくるの?」

「はい。旦那様と終子様が日が沈むまで戻って来るとおっしゃいました。ですから、今日は皆様の好物を用意しました。」

「おお!?やるじゃない!ユメ兄」

「唐揚げ!」

「ユメさん、あまり美結たちに甘やかしすぎないでください。彼女たちは一人前になれないですよ!」

妹たちの成長に心配する舞衣は近頃美結と詩織の世話を担当するユメに少し怒る態度。そんな舞衣はちよつと懐かしい気がする。

いや、柳瀬三姉妹の交流にユメは自分と妹もかつてそんな仲良く なった気がする。

そして、この両親がまだいたこの家庭に羨ましかった。

「わかりました。そこは程々にしておきます。」

ちよつどその時、扉が開けられた声が響き。全員の視線は声に引かれてそちらへ向かうと、

「お父様、お母様。お帰りなさい。」

「お帰りなさい。」

「お帰り。」

「旦那様、終子様。お帰りなさいませ。」

そこに現れるのは柳瀬家の家主とその妻。どうやら、予定通りに帰ったみたいだ。

そして、柳瀬三姉妹とこの場にいるユメはそんな二人を迎える。

けど、柳瀬三姉妹と違って、ユメは「喜んでいなかった」。

「はい、ただいま。」

「舞衣、少し話したいことがある。」

帰った直後、舞衣のお父さんは早速舞衣をお呼びする。そこで舞衣は「え?」という反応。

「旦那様、お先にお食事をどうですか?もう準備が済ませました。」

「話の後は食べます。美結と詩織のことを頼んだぞ。」

「……………はい」

自分の依頼主に気がない返事をするユメ。彼はこの日が来るのを待っていました。けど、ほしくなかった。だから、少し焦っていた。

「旦那様、どうか舞衣様のご意思を尊重してください……」

「……………部外者たる貴方に言われる筋合いがない」

柳瀬孝則に睨まれて、ユメは彼に黙らせた。

「ユメさん……………」

その後、舞衣は孝則さんたちに連れされた。ユメは最後までに舞衣のことを見ていた。

俺のことを最後までに心配してくれたその顔は忘れられない……………どんな相手に対しても、舞衣は優しく接する。例え、都が俺そばにいな
いせいで、彼女が悲しくても。

「……………舞衣様……………」

ブツブツと心配そうな口で彼女の名前を呼ぶ。

「……………心配しそうななら、見に行つてよ。舞衣姉のことが大好きで
しよう？この鈍感兄！」

「うん、都お兄ちゃんはいつも舞衣お姉ちゃんを特別に優しく接し
たもんね。」

その時、美結と詩織は彼の背中を押した。物理の意味ではない、精
神的に。

「いや、それはー」

彼女たち二人に言われて、顔が熱くなるユメ。

別に彼が舞衣のことをそういう意味の好きじゃない。ただ大切に
しただけ、それ以外がない……………はず。

四ヶ月ぶり顔が会ってないせいなのか。ユメーいや、都は最近ま
すます舞衣や可奈美のことを夢中になった。

彼女たちのことを思うと、会いたいという気持ちが強くなる。

そして、孝則さんとの契約により偽の身分で彼女舞衣と再び接触する時
も、胸が凄くバクバクしてきた。

その時、薄々気付いた。自分は彼女にどんな気持ちを抱いているの
か。

「早く行かないと、舞衣姉に都にいの正体をバラすぞー！」

「ー！?それだけはご勘弁をー！」

携帯をわざと持ち出した美結に都は慌てて彼女を止める。

「私はね、舞衣お姉ちゃんのことを大切にしていた都お兄ちゃんのが好き。いつも仲良くするところを見て、とても好きなの！」

「私も。舞衣姉に幸せをするのは都兄しかいっくらないから！舞衣姉のことをよろしく！」

「お前ら……」

美結と詩織と共に、都を部屋の外までに押し出した。

彼女たちの方に向くと、彼女たちはいい顔をしている。あれは自分を信頼している顔だ。

彼女たちは大好きなお姉ちゃんを都に託した。

「わかった……すぐ解決にならないと思うけど、全力で尽くすよ。」
そう言つて、彼は仮面をすっかり固定する。今だにユメという偽身分が必要なんだ。

「舞衣姉のことを頼んだわよ。鈍感兄」

「頑張つて、都お兄ちゃん！」

「はい！」

二人を応答し、都は走り出した。目の先は舞衣がいる場所。



「……舞衣、美濃関学院を辞めなさい。新しい学校は父さん達で決めているから、すぐにでも転入できる。」

両親に別室に連れられて来た舞衣は、「えっ？」とつい口に出すほど動揺してしまった。

朝は急に、彼女の父親柳瀬孝則から電話が来た時から、こうなることとはある程度は予測はできたが、真正面から言われると動揺するものがある。

「話が違います。高校卒業するまでは私の好きにしていると言つていたじゃないですか？」

「事情が変わったことぐらい理解できるだろう。任務中に怪我をす

る刀使も増えてるそうじゃないか、お前も随分と危険なことを潜り込んでいるみたいだな。」

確かに、鎌倉でのノ口漏出事件以降は荒魂事件が頻発し、任務中の刀使が負傷をする事例が増えているのは事実。それで刀使をやめさせた両親も娘の心配もあり、美濃関の学生も結構な数が学校をやめた。大半は刀使をやり続けたい生徒だが……。

そんな流行れの下、舞衣は刀使を辞める気が無かった。

彼女はまた親友である可奈美を追いつきたい、自分がいないと寂しくなる沙耶香を放っておけない。そして……あの人、都くんの手かがりも自分の手で掴みたいから。

それらを見捨て、刀使を辞めることなど舞衣はできなかった。

「……確かに、任務中に怪我をする刀使は増えていきます。……ですけど、この孫六兼元は私を選び、私は刀使になることを選びました。覚悟ならできています。」

「軽々しく覚悟なんて言うもんじゃない！」

「……………」

舞衣の『覚悟』という言葉に反応してか、それとも『覚悟』という言葉を使うほど必死になって戦う娘に何もしてこれなかったことに不甲斐なさを感じていたのを思い出してなのか、もしくは今の今まで刀使という職業が危険なものであることに気付いていなかった自分を恥じていたのか、孝則は語気を荒げて反論していた。

色々な物を背負い、刀使を辞める気などない舞衣。親として、刀使という危険な職業を辞め、平穩に過ごして欲しい孝則。

彼はもう舞衣を失うのが嫌なんだ。

「今までお前のわがままを聞いていくのはあの男、都くんのおかげなんだ。彼は必ずお前を守ってくれと、そう信じていたのだ……！だが、彼はもうお前の隣にいない。何かあっても、お前の盾にする彼はもう……」

「彼を道具扱いする口調をしないで！お父様は彼のことをそう見ているですか？だから、御前試合の時に彼のことを私の隣に送ってきたのは私の身代わりにするのですか！」

好きな人が道具扱いされることに舞衣は聞き捨てられなかった。彼女は初めてお父さんと口喧嘩をした。

「舞衣、落ち着いて。私とお父さんは彼にそのつもりー」

「そうだ。私は最初から彼をお前を守る物としか見ていない。彼ほどお前のことを思う人間は私達以外にいなかった。」

「……………いー」

孝則の口から出した言葉はなんと冷たいと思う舞衣。いつも優しいお父さんは人を利用する出来事は信じられなかった……特に都は彼女を助けた柳瀬家のヒーロー。

そんな人間に道具扱いするだと酷すぎます。彼はあんなにボロボロの身体で何回でも自分を助けた。周りの悪い口や実際にできた傷を全部受け入れて、自分と可奈美ちゃんと周りの人たちの無事だけを願ったのに……。

「お父様、さっきの話を取り消してください。都くんは道具ではありません……彼は人。私の大切な人なのです。彼のことに関したら、お父様でも許しません。」

「舞衣……………」

「……………」

父親を珍しく睨む舞衣。彼女はもう学校にやめさせることで怒ることがなく、好きな人のために怒っていた。

理由は言うまでもなく、都くん……あの自己犠牲しか知らない男。彼の存在はもう舞衣にとって家族と同様に……いや、それ以上重要なのでしよう。

これも彼が長年彼女のために色々していて、彼女の身の安全しか求めているないその自己奉獻の精神のおかげ。彼は愚かな男ですが、舞衣はそんな彼に惚れた。

「舞衣、私はー」

「失礼いたします。舞衣様、しばらくお風呂で頭を冷やしてください。ご両親にそんな言葉はいけませんから」

孝則は舞衣に何かを伝えようとしたとき、仮面の執事が突然入ってきて、舞衣の手を握って外へと連れ出す。

「待つ……！ユメさん、何をー!?」

「〃両方共は頭を冷やしたほうがいい〃と判断したのです。さあ、お風呂のお時間です。もう温かいお湯が用意しました。」

唐突の状況に理解が追えない舞衣。ユメは無理矢理彼女をこの場から連れ出す。不思議のことに彼から手を抜けない。けど、これは別に彼の力が強いわけではない。本能的に舞衣はそうしないのだ。

彼の手の感触が懐かしい……まるであの人みたい。

その後、この短い家庭争いの幕が降りた。

◇

「……私は、間違っていたのだろうか?」

舞衣がユメという偽身分を使う都に連れされた数分後、同じ室内に居た孝則はやつと冷静になって、不意に妻である柊子にポツリと言葉を漏らしていた。

「……何がです?」

「私は、柴田から都くんが執事をやらせて欲しいと聞いた時に、彼なら舞衣を説得できるかと思えば、彼にやらせたのですが、彼は突然偽の身分を求めた。その時の私は何にも考えてなく彼の要求を応じた。なぜなら、彼ならきつと私と同じ舞衣を危険から遠ざけると協力すると信じていた……」

「なのに……私は舞衣の前に彼を利用したと言いつつ、いや……それは本意なのかもしれません。私は都くんの自己奉獻性を利用して、舞衣の身代わりの盾をした。もしや、その腐った性根がこのような事態を招いたのかも知れない。……私は、結局のところ自分の都合でしか考えられない愚かな父親だ。」

ソファで孝則はそう言つて、猛省していた。

彼はいかにも衛藤 都が単純な子供だと知つた。好きな人のためなら彼はどんな犠牲を払える。そんな単純な彼を利用して、舞衣を納得させ、刀使を辞めることに同意させる。その後、残るのが平穩に過ごしてもらえる生活。これ孝則の望みであった。

だが、彼は衝動的に娘の前に彼を利用したと言い出し、このような父娘が決裂する結末を迎えた。

……このような大惨事になってしまったのは、自らが相手を利用しようとした天罰なのです。娘はもう自分を許すことができない。例え、刀使を辞めさせても意味がなくなる。

「……そうですね、そうかも知れませんが。でも、あの子は単純であるゆえ、貴方をいいお父さんと言っていましたよ。」

「私はそのようなやつじゃない……彼を利用してた彼が最も嫌いな人種だ。」

「……それでも、彼は貴方のことをいいお父さんと呼びます。貴方が心の底から舞衣のことを思ういいお父さんである限り、彼がどれほどひどくされても舞衣を愛していた貴方を嫌いなどをありえないですよ。」

「馬鹿か」

「はい、娘が選んだ世界ただ一人の大馬鹿さんです。だから舞衣は彼を恋にして、そこまでに彼を守ろうとしたのです。」

「彼にひどいことをした。」

彼の良さを知るほど、孝則の心が辛くなる。これほどいい男はこの世界には彼一人しかいない。

舞衣と妹の安全だけを求める男。権力、金、利益など彼が最初から求めてないんだ。

「まだ間に合うチャンスがありますよ。舞衣にあそこへ連れてきたら、どうですか?」

「……あそこ?」

「ほら、あなたが出資を決めた研究所ですよ。」

孝則は柊子にそう言われ、稲妻が走ったかの如く、ある事を思い付く。あの二人に出資をしている研究所の研究を見せれば、もしかすると……。

「困みに、彼は大丈夫ですから。問題なのは舞衣だけだよ。」

柊子は小さく笑って、彼女は特に都を自分の息子みたいに見ていた。

「……そうだな、それが良いかも知れん。濟まんな、いつも迷惑を掛ける。」

「ふふっ、良いですよ。でも、あなたって」

「何だ？」

「都くんに負けなくらいに舞衣のことをとことん甘いんですから」

あの研究所も舞衣のことを思っただけで出資した。結論だけを見ると、彼も都と大層の差がない。

第36話：親の愛

人生初めてお父様と口喧嘩をした。

自分はいけない娘だと自覚していた。ただ好きな人のために血が繋がる親にあんな態度を取るとは……本当に自分は駄目な娘さんです。すね。

鼻以下の部位をお湯に入り、舞衣はさつきお父さんと喧嘩したことに反省している。

都のことになると、頭が熱くなる。好きだからかな？彼が利用されたことはどうしても我慢できないのだ。

「……………都くん、今はどこにいるのかな？」

どんな時でも頼れる彼のことを思い浮かべながら、舞衣はこういう時に彼が自分のそばにいて欲しいと願っている。そうすれば、彼はきつと自分を導くのだろう。

小さい頃から、可奈美ちゃんと一緒にあの人に引つ張られて一杯遊んでた。あの頃は本当に懐かしくて、楽しかった。

あの時期に戻りたい……ううん、四ヶ月前に可奈美ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃん、？和ちゃん、都くんと一緒に舞草の里のお祭りに楽しく遊ぶ頃に戻りたい。

「……………なんか寂しくなるね。」

鎌倉特別危険廃棄物漏出问题から始め、皆はバラバラで各地で飛ばされた。顔を合わせる機会が少ないため、舞衣はずっと一人で美濃関地域を指揮している。

もちろん、ミルヤさんと七之里さんがいてくれたおかけ、お喋り相手が増えていてとても楽しかったのですが……それでも、皆と、もう一度会いたい。

「……………私はこれから、どうしよう」

再びお父様と喧嘩した件と刀使をやめる件に悩む舞衣。

お父様は自分の身の安全を考慮して、彼女に刀使をやめさせたいと要求した。その気持ちはありがたいですが、舞衣はまた刀使をやり続けたい。

また追いたい人、守りたい人、会いたい人がいるんだ。そのため、舞衣はこの守護の力がほしい。

それに、孫六兼元は自分の半身みたいなもの。初めて御刀に選ばれた時は既に誓ったのです。私はこの御刀と最後まで一緒に戦いたい。

◇

「舞衣様、少しよろしいですか？」

お風呂から出て、舞衣はタオルを巻いた格好で自分の部屋で濡れた髪を拭く時に部屋の扉が叩かれた。

「ユメさん？少し待っていてください。私はまだ服を着換えー」

「このままでいいのです。すぐ要件を済ませますから」

彼がそう言つて、扉の外から話をかける。

「舞衣様は、さつき旦那様と喧嘩する件で後悔しているのでしょうか？」

当たり前だ。舞衣は確かにずっとこの件を気にしていた。

「やっぱり見抜いたのですね……」

「はい、舞衣様は家族思いのいい主人でございます。私はそんな舞衣様を誇っております。」

「それはありがとうございます。ユメさんはなんか誰かと似ていますね……」

そう言つて、舞衣の口からは少し寂しいような感覚がしてきた。

「その誰かさんは柴田さんなのかもしれません。あの人も舞衣様が御前試合に選ばれたことに嬉しく泣いていましたと聞きました。」

「それは……うん、確かにあの時の柴田さんは特に酷い泣き方をしましたわね。」

ユメはわざと話題のメインを逸した。都身分の話は今の舞衣にとって敏感すぎます。

「あの方は本気で舞衣様のことを思ってくださいましたのです。旦那様もきつとそうです。が、舞衣様が刀使をやめる理由になりません。重要なのは舞衣様ご自身です。」

「私……」

「……貴女様がどうしたいのか、この思いを旦那様にしっかりと伝えましょう。これこそは家族です。時々人間という生き物は喧嘩しなければ、友達のように話し合わなければ、お互いの思いがわからないのです。」

「……貴女様も早くお旦那様と仲直りしたいと思うのでしょうか？」

ユメにそう言われて、部屋の中にいる舞衣は沈黙続ける。確かに、彼の言う通りにお父さんと仲直りしたい。

例え、彼は都くんを道具として利用するけど……舞衣はお父さんとこんな悪い関係が続けたくない。

「……ユメさん、私はどうしたら……」

まだ不安と迷いを抱かえていた舞衣の質問にユメは優しい口調で答える。

「答えは自分で探し出します。貴女様はもう子供じゃありません、

“立派な刀使さん”ですよ。」

「……………」

私は……立派な刀使……？

「……では、晩御飯は部屋の外に置いておきます。舞衣様、どうか食べたあとは元気をつけてください」

彼女に伝えたいことを伝えたあと、ユメは晩御飯を部屋の前の床に置いてこの場から離れると、彼は部屋の中にいる舞衣に「ちよっ……！待て！」と呼び止めた。

「なんででしょうか？舞衣様」

「ユメさんは……どうして私を励ましてくれるの？私はユメさんに何もしてあげられないのに……」

確かに貴女は“ユメ”に何もしてあげられないかもしれませんが、
“都”なら……それは別だ。

「……………ありますよ。貴女は私に勇気をくれた。地獄に立ち向かう勇気を……………」

「え……………」

「それじゃ、良い一晚を。舞衣様。」

それだけ言い残して、ユメは早足でこの場から去っていく。残るのはユメの最後の言葉を理解できない舞衣だった。

◇

翌日の朝

朝ごはんをいつもみたい振る舞って、柳瀬三姉妹から最高の評価をもらってきたユメは急ぎに外へ出る準備を行う。

理由は孝則さんは朝食中、唐突に舞衣をどこかに連れて行くと仰つて、ついでに自分も彼に舞衣の護衛を頼まれた。

その命令を従って、ユメは執事用の休憩室から護身用の刀……………元い御刀を黒いバックの中から取り出す。

「銃より刀の方が手慣れだよな。そうでしょう？雪」

黒いバッグの中に御刀以外に銃もたくさん用意してある。しかし、そんな物より使い慣れる物はやはり刀だから、彼は御刀だけをメインにして、補佐とする閃光弾いくつかを装備する。

「よし、舞衣様のところへ参りませうか。」

準備した後、ユメは高級そうな車の助手席へ座り、舞衣は後部座席の孝則の隣へ座ると、孝則の事前の指示の下、柴田さんはある所へ車を回す。

因みに、彼は銃らしいな物をスーツの中に隠した。本当にやばいよ、この爺……………。護身用とはいえ、堂々とP90マシンガンをもつの中に入れた。

この先は戦場なのかな？不安だわ。

それから、三十分が渡ったところに研究所らしい建物が見えてきた。

「ここは？」

「この前まで特別希少金属研究開発機構と呼ばれていた場所だ。聞いたことくらいあるだろう？」

「ええ。でも刀剣類管理局の体制が変わって閉鎖されたんじゃない……」

「国主体の独立行政法人としてはな、うちが資金を提供し民間の研究機関、特別希少金属利用研究所として再スタートさせた。」

「利用……？」

「そうだ、珠鋼に御刀以外の利用法がないか探ってる施設だ。」

孝則さんと舞衣の会話が続く。

そんな会話から都がさらに孝則の真意を探る。

ここは珠鋼を御刀以外での利用方法を探る施設だとすれば。つまり、御刀に代わる荒魂に対して有効な武器か、それとも刀使という職業に関わりがある研究が進んでいるのか。

どちらにしろ、このような研究が完成した際に紛れなく刀使の世界が変わるのでしよう。

最良の場合に刀使が必要ない世界が誕生する。そうすれば、刀使たちのような若い女の子達はもう「奈良会戦」のような危険の戦いに突っ込む必要がない。まさに、優しい世界だ。

だが、そんな世界で刀使という職業を誇る現役の彼女たちにこれがいいことなのか……正直分らない。

自分が知り合った刀使たちの中で、刀使として人々に必要されたことに喜んでいる人もいた。ある人もそれが唯一の取扱だと思っていた……。

そんな人たちは「刀使が必要ない世界」に喜ぶのかな？と思いつつむ都。

刀使と接触し始めてから、彼は常に刀使たちのために思い始めた。

◇

室内に入り。孝則は他の二人（柴田さんは外で待つておる）と一緒に観覧室みたいな場所へ行き、そこで舞衣は目の前に研究員らしい者が四角の物を何かしらの作業を行っているところを見て、思わず口から疑惑を漏れた。

「これは？」

「ここでは、現在珠鋼を媒介として隠世からエネルギーを取り出す研究が行われている。」

「そんな事が可能なんですか!？」

舞衣はそんなことが可能なのかと驚愕していた。

「理論上は可能です。珠鋼とは現世にありながら隠世に影響を及ぼせる特殊金属です。その特性を利用することで現世と隠世の境界を曖昧にし、この世に存在してなかった物質を現出させる。これが、可能になれば従来の物理法則を無視した無尽蔵のエネルギー源を手に入れられるんです。」

「ほお、詳しいわね。貴方」

ユメが舞衣に説明する時に、突然後ろから誰かに声をかけられた。そっちへ向くと、日本人らしいの研究員と外国人美女研究員二人がそこにいる。

「貴方たちは？」

「ああ失礼。……僕はここの研究主任をやっている古波蔵 公威といます。」

「妻のジャクリンよ、よろしくね。」

男は古波蔵 公威と名乗り、女の方は公威の妻でジャクリンと名乗っていた。

「（こちらこそ……えっ？古波蔵って……）」

公威とジャクリンに笑顔で応対する舞衣。だが、古波蔵姓で、外国人を嫁にしているというピンポイントな家族構成と姓名から導き出される答えは一つしかなかった。

「ハイ！エレンのパパさんとママさんデース」

「ふふっ、驚いたかな？」

「あ…フリードマンさん！どうしてここに？」

「君の父上に請われてね。ここの研究所の名誉顧問に名を連ねてるんだよ。」

それと同時にフリードマンも突然現れたことに、舞衣は驚くしかなかった。因みに、ユメはあの二人の正体を知ったときに、既に彼がここにいることを予想した。

「しかし、孫娘に続いて娘夫婦とも知り合うなんて『君たち』はよく私のファミリーと縁があるようだね。」

たち……？

フリードマンの妙な発言に疑惑を持っていた舞衣。そして隣のユメはただ黙り込む。

「あなたのこと聞いていますよー、マイマイ」

「……マイマイ？」

孝則はマイマイというのは、どういう意味なのだろうか？と疑問に思う。

……もしかして、最近の子はそういうマイマイとかという言い方が流行っているのだろうか？孝則は若者文化の流行れを頑張って理解したいところ、隣のユメはあまり気にしないと仰っていた。

「旦那様、あれは古波蔵家の小娘、『エレン』という女の子が人にあだ名を付ける悪い癖でございます。あまり気にしないでください……」

「そつ、そういうことなのか……」

「……」

そして、なぜが舞衣はそれを反応し、ユメの方へちらと見る。何かおかしいなことを言ったのか？

『主任、近接反応実験が終了しました。データの解析に移りたいのですが……』

不意に、珠鋼を使った何らかの実験をしていたのか、次の作業に移りたいという報告がされていた。

「分かった。ノ口は保管場所に戻しておいてくれ」

此処の研究主任を任されている公威は、二つ返事でそれを了承していた。

だが、ノロという単語に舞衣は反応する。

「あれは……何の実験なんですか？」

「珠鋼とノロを接近させることで、起こる反応を観察しているんだよ。」

「ここでは、実験にノロを使ってるんですか!？」

「ええ……そうだけど。」

舞衣は語気を強めて、公威等にノロを実験に使っているのかと尋ねる。

そんな舞衣に尋ねられて、少し困った反応をする公威はフリードマンさんの方に助け求める視線をする。

「どうやら、舞衣君は過剰にノロを恐れてるようだね。」

「恐れているわけではありません!敬っているのです。それを教えてくれたのはフリードマンさん、あなたじゃないですか!」

「確かに、ノロは分散させ社で祀っておくべきだと言ったね。だが、それはベターなやり方ではあるがベストではないんじゃないかな?」
しかし、フリードマンはここにきて、自身がかつて言っていた丁重に敬い祀るやり方はベターではあるが、最善の方法ではないと言ってきたのである。

そんなフリードマンの発言に、舞衣はその話を信じて良い物かどうか動揺する。四ヶ月前、ノロは丁重に敬い祀るべきと言っていた人物が、急にそのやり方はベストではないと言い出せば、誰もが動揺し、信ずるに値するものかどうか迷うものである。

「ノロには意識もあり意思もある。タギツヒメやねねを例に挙げるまでもなくね。」

「ノロが、祀られることを望んでないと言われるんですか?」

「放っておかれるよりかは遥かにマシだよ。でも、もっといい方法があるんじゃないかということさ」

「私はね、ノロの穢れの正体は寂しさなんじゃないかと思ってるんだ。」

「タギツヒメやねねを見ているとそう思えたんだよ。ノ口を祀るというのは彼らを忘れず感謝の意を持つているという意味表示に他ならないんじゃないかな。あの里でのお祭りのようにね」

フリードマンは何とか気を取り直し、さつきから黙って聞いているユメと舞衣に説明を続けていた。

「ノ口は……寂しいのですか？」

「彼らは、珠鋼を求めているんだよ。……人の手によって、無理矢理分離させられた母と子供みたい。」

突然、ユメはその実験を見ながらそう言い出した。仮面を被っていたが、なんか寂しさが感じる。

「お前はわかるですよね。えっと、名前はなんだっけ？」

「えと……ユメです。」

「ユメね……」

フリードマンさんは意味深の視線をユメに投げつけた。フリードマンは最初から彼の正体を気付いた、ただ彼はなぜ顔を隠しているのを観察している。

「ユメくん、貴方は素質があるようですね。この実験は珠鋼と近づくことでノ口の穢れが清められるのを実証するためのものなんだよ。」

「実際、距離と時間に比例して穢れの減少は計測されていマース」

「……それは、つまり荒魂の中にある穢れが清められることができるとも知れないという実験なんですね？」

「うん。それって、まるで母親に抱かれて安心する子供のようにだとは思わないかい？」

母親に抱かれて安心する子供なのか……。一瞬だけ母のことを思い返すユメは思わず実験をジロジロと見た。

「でも……」

「……そう、残念なことにノ口と珠鋼を再結合させる方法はない。」だが、フリードマンの話から、まだ研究は成功していないようだ。

「あの子はね、ニモと言うんだ。寂しがり屋のリトル・ニモ。」

実験中のノ口を見ていたフリードマン。彼はそのノ口を名付けた

らしい。

「夢の国のリトル・ニモ。アメリカで結構有名なあれね。」

「うん……私はね、あの子の声が聞きたいんだよ。本当に望んでいるものが何なのか、それを教えてもらうためにね。」

「そして、私はこの話を聞いてここへの出資を決めた。刀使を辞めなくても良い、できれば将来お前にも協力してもらいたい。」

「……そ、それは……」

フリードマンさんの続きに、孝則さんは舞衣に伝えたかったことを話した。

それは、つまり舞衣の刀使をやめる意志が無いのなら、戦線から遠ざけ、後方に回せば良いだけの話であり、フリードマンの研究を手伝え、刀使達に貢献できると言って納得させようとしていたのだ。

悪くない一手です。四ヶ月前の自分ならきつとこれを賛成するのだろう。舞衣を前線から遠ざけたら、危険からも遠ざけられる。これは都という人間の望みでもある。

ですが――。

「舞衣様。貴女様はどのような選択をしようとも、私はそれを尊重いたします。刀使をやるか、やらないか……貴女様次第です。」

舞衣は強かった。彼女はもう弱い刀使ではない。折神家急襲作戦のあの日から、都は舞衣が一方的に守られる存在ではないとそう認識したのだ。

「ユメさん……」

「急がなくてもいい。私と旦那様も貴女を待っていますから」

「ユメくん……やはり貴方は味方なのね。」

「私はただ舞衣様思いの執事です。それ以外の味方ではありません。」

少し加勢してくれたことに喜んでいた孝則にユメはただ自分は舞衣だけの味方と強調する。

「マイマミー！お久しぶりデース!!」

「エ……エレンちゃん!?!」

「……………」

そんなとき、元気が溢れた声と共に、ピンク色のフリフリの少女趣味満載な洋服で来たエレンの突然の登場に、舞衣は出かかった言葉を飲み込み、二人の女子はそのまま抱き合う。主にエレンが主導的に。

「マイマイは元気そうで何よりデース。」

笑顔で舞衣に向けるエレン。その後は孝則とエレンの両親やフリードマンはしばらく仕事の話で離席し、この場を三人の若者たちに任せた。

離席している途中にフリードマンさんに耳の近くに小さいの声で「なんの理由が知らないが、我が孫娘と仲良くしろね。都くん」と言われた。

ええ、この二人も俺の大切な仲間ですもの。



特別希少金属利用研究所のテラスで舞衣とエレンの二人でお茶会をしようとしていた。そこで、執事であるユメは二人の奉仕していて、いいお茶やデザートを用意する。

全てが整えた後、彼は執事らしく立ったままに二人を見守っているが、エレンに舞衣の何回も誘われた。最終的に仕事が大事だという理由で断った。

仮面を外しちゃだめだもんね。

「じゃ、エレンちゃんは任務で？」

「イエス、最近は何口が強奪された事件が多かったため、現在嚴重警戒中デース。」

そして、二人は今の現状を語る。

ノ口強奪事件。

自分も真庭本部長から詳細を聞きました。謎のフードを被った刀使は各地の刀使が荒魂を払った際に、ノ口を奪う事件。しかも、実力もなかなかのもので腕が立つ刀使でも彼女を止められないらしい。

鎌倉特別危険廃棄物漏出問題と近頃起きた奈良会戦が終わった以

後。やっと一時の平和が取り戻したと思ったが……また、新たな乱が起きてしまった。

「でも、ここなら美濃関に近いのに」

「それが警備の話聞いたグランパが久しぶりに家族水入らずだーって私を指名したのデース。公私混同ってやつですね。」

「それはあまりいい意味じゃない日本語と思いますけどね」
苦笑している舞衣。

ですが、彼女の顔は少し柔らかくなる気がする。これもエレンさんの力のおかけかな？彼女は不思議と人の心を穏やかにする暖かさが持っている。

ずっと黙って二人を見守るユメは思わず微笑んだ。

「それにしても、この格好ー」

話題を変わり、舞衣はエレンの服装を見て尋ねる。こういう彼女の趣味じゃ見えない格好では確かに気になる。

「そうデース！これパパからのプレゼントなんデース！戦闘の時は動きにくいと思うけど、折角だから着てみようと思ひまして」

「そうだったんだ、私はとっても可愛らしくて似合ってると思うよ。ユメさんもそう思うでしょう？」

不意に舞衣が話題をこっちに振られた。きつと、こっちを配慮しているのだろう。

「はい、とても良く似合っています。」

「ありがとう。そういえば、彼は新たな執事さんデスか？なんか声は何処かで聞いたような……」

声に反応し、エレンはそう聞く。

「それは気のせいです。私はユメと申す者です。」

「そうなんデースか？」

疑う態度を示すエレン。そこで舞衣は加勢しに行くことでうまく誤魔化した。

「そうだよ。彼は柴田さんの遠い親族みたいで、お父様の契約により、うちで働いています。」

「うーん、まあ、そうしておきましょう。それより……マイマイパ

パって素敵デスね。」

「す…素敵…?」

うまく誤魔化そうとしているところ、エレンは突然、孝則のことを「素敵」だと言って、舞衣は驚きで口に入れていたお茶を零しそうになる。

「舞衣様、大丈夫ですか?」

ユメは心配そうに尋ねるが、舞衣は平気だと答える。

「ここが閉鎖されていたらパパとママは路頭に迷う所デシタ。グランプはお金持ちデスから、その気になれば助けられたんデスけど、公私混同はよくないって」

「さっき言っている言葉と違うけど…」

確かに、後者のほうがこの言葉は正しく使う。

それより、エレンの両親が路頭に迷わずに済んだのだから、孝則のことを「素敵」だと言ったのだろうと理解していた舞衣は少し微笑んだ。

彼女はもしや、自分のお父さんがエレンの両親を助けたことに喜んでいるかもしれません。

「ところで、マイマイパパはどうしてここに資金を提供したんだと思いません?」

「それは…：珠鋼の研究はお金になると思ったから、かな?」

エレンの問い掛けに舞衣は少し迷いながら答える。

「それは違いマスネー。お金になる研究したら、そもそも潰れそうになんかなりません。珠鋼でノロの穢れを祓えるようになったら、多分刀使は必要なくなりマス。マイマイが危険になることもなくなる。だから何としてもその技術を手にもらうっと、そんな風に思ってるんじゃないデスか?」

「……………」

舞衣は俯きながらエレンの話しを静かに聞いていた。

舞衣は最初から薄々とわかっていった。金銭のためという理由だけで、お父様が特別希少金属利用研究所に出資するはずがない……。それに、父は柳瀬グループの代表とはいえ、父の意向だけで柳瀬グループ

プの出資を決めることなど不可能であることも……きつと企業の役員や幹部を説得するには大分苦労したであろうことを舞衣は容易に想像できた。

それら全てはエレンが言っていたことのように、舞衣が安全に生きられる環境を作るためにだ。

「うちの家族は特殊なん德斯。パパもママもグランパもみんな研究に人生をかけているような人で、今はこうして同じ場所に居ますケド、それってとつても珍しいことなん德斯！」

「……うちと一緒だね。」

「でも、パパは私の誕生日にはプレゼントを送ってくれるん德斯！顔を合わせる事はできなくても必ず毎年新しい洋服を」

「じゃあその服……」

「イエス！古波蔵エレン、16歳のバースデープレゼント德斯！子供っぽい德斯よね〜正直私の趣味じゃありませんけど……でもね、この服にはパパの愛がそれはもう目一杯詰まってるんだ〜って、それだけは断言できますよ。」

「マイマイ。あなたはどう德斯か？」

「私は……」

舞衣は、エレンの親の愛の話しを聞き、父孝則の思いを実感した今、父の話しに乗るべきだろうかと揺れ動きつつあった。

それを後ろから見守るユメも遠く昔、母が愛を込めたたまずい料理を彼ら兄妹たちに食べさせたことを思い返した。

あれも……母の愛なんですね……。

第37話：子供の成長

同時刻、綾小路武芸学舎——地下施設。

嚴重に複数の認証装置をクリアした先にその場所がある。

相楽結月はとある人物に呼び出され、尾行に警戒しながらその場所を訪れた。

「……………」

「お待ちしていましたよ」

相楽学長を出迎えたのはやけに得意気な表情に満ちた本来行方不明の高津学長だった。彼女は四ヶ月前の夜からは失踪したはずだが、彼女はここでその嫌そうな雰囲気をつぶや散らしておる。

それと、彼女がいるということは……あの人もいるだろうと、部屋の奥の方を見回ると、無表情でこつちを見つめる皐月夜見さつきよみの姿があった。

「では、こちらへどうぞ」

案内されるがままに部屋の中を移動すると、複数の機材と研究機材とコンピュータ機器。

その中でも一際目立っているのが、壁面に設置されている細長い保存用棚——そこ入れられているアンプルだ。

「これは全て完成品か？」

「ええ、勿論。」

高津学長は近くの机に置かれている注射器を手取る。中身は棚に入れられているものと同じ、赤黒い液体で満たされている。言われるまでもない、これはノロだ。

「夜見、来なさい」

「はい」

高津学長に呼ばれ、夜見は彼女の前に立つ。向き合った夜見の首に注射針を突き刺し、中身を注入する。その途端、夜見の瞳に紅い色が灯り、身体から黒い瘴気が立ち昇る。

「これは人をより上位の存在へと進化させるもの。これにより、人

は古い、病、肉体的損傷、才能の優劣、あらゆる苦悩から解放される！」

「……なるほどな」

淡々と無感情で反応する相楽学長。内心ではこれが馬鹿馬鹿しいと思っていた。あの力はあの少女^{結芽}さえも救えなかったのだ……。

「これを完成させられたのもあなたの資金援助があったお陰です、相楽学長」

ここまでの生産量、完成度は明らかに以前の結果を上回っている。高津学長が刀剣類管理局内に秘密裏に作っていた研究施設内では、現在の半分以下が関の山だった。

数ヶ月前に高津学長に話を持ち掛けられ、学院内の施設の一角と資金の提供を行ったのだ。

「……参考まで聞きたい、高津学長」

「何でしょうか？」

「これを何に使うつもりなんだ？」

この場にいる夜見もそうだが、親衛隊がノロを肉体に投与していたことは既に知られている。

今しがたの行為から見ても、高津学長の目的が公にできる類のものではないのは確実だ。そもそも、そうでないならこんな風にひた隠しにしたまま研究はしない。

「崇高な目的のためですよ」

「……？」

「私の手でこの世界は救われる。そう……全人類を全ての苦しみから救うのはあの大方の望みですから」

予感の中していた。彼女は冗談や妄言でこんなことを言っているのではない。

本気で自分が正しいと思ひ込み、実現可能だと信じているのだ。

「……『姫』なのか？」

「はい、あの大方は愚かな折神紫と違って、この世のために動いているんです！」

まるで神を称えているように、彼女はどんどんあの『姫』の信者に

なっていく。

「その姫は今どこに？」

「彼女なら、既に『外へと散歩しました』。」

高津学長の代わりに答える夜見。それはつまり……また被害が出るようですね。

◇

数時間後――特別希少金属利用研究所

「雪、俺はどうしたらいいのか？」

お茶会が終わり、その作業を行うユメは自分の御刀と対話している。

彼は柳瀬家と古波蔵家の事情を知った後、彼はここで止まることがいいのか、迷っている。

家族は何より重要な者。今は一刻早く妹のそばに行つて、彼女と再会すべきじゃないのかつて……迷っていた。

可奈美は母が自分に託した大切な妹。その妹を守る、可愛がるのは兄、俺の役目だ。

今でも寂しがっているのだろう。舞衣ちゃんみたいに……。

「ユメさん？ やつと見つけた！」

背後が誰かに呼ばれて、そちらへ向くと、柳瀬舞衣がそこにいた。

「舞衣様？ もう一人の方は？」

「古波蔵夫婦のところに行つたよ。それよりなんでここに一人？」

「そ、それは……少し悩みことです。」

苦笑い……って仮面を被ったから、相手も見えないか。

とにかくユメの顔はそういう顔でした。

「……よかつたら、私と相談しませんか？ 私もユメさんと相談したいのです。」

そう言つて、彼女いつもみたいに優しい笑顔で隣に立つ。

「舞衣様、あまりご家族以外の男性と近づくのは良くないことですよ。貴女は素敵な女性方ですから、もつと身の安全をー」

「でも、ユメさんは私に手を出さないのでしょうか？」

「それはもちろん！」

「なら、それは安心できます。ユメさんはちよつと私の知り合いと色々似ています。そのせいなのか……私はユメさんの隣に立つと、凄く安心するんだ。」

「それは大変な褒め言葉でございます。」

彼女に信頼されて凄く嬉しかった。けど、少しだけヤキモチのような気持ち燃えてきた。

「……では、相談の話に戻りましょう。まず、舞衣様からです。私のことより舞衣様の方が重要なんですから」

「私は……うん、そうですね……」

深呼吸し、舞衣は勇気を絞り出す。

「ユメさんは私が立派な刀使だつて言つたわよね？それで私は刀使の一面が認められたつていう意味ですよね？」

「はい。」

「なぜ、そう思うのですか？」

舞衣にそう尋ねて、ユメは数秒考え込む、やがて口を開いた。

「その御刀からです。孫六兼元は貴女を主人として認め、現在でも貴女の力になっている。それはつまりこの御刀は貴女を良い刀使だと見ているのかと私はそう思います。」

「先ほどフリードマンさんたちが言っているようにノ口は寂しさがある。対して半身である珠鋼もそのような感情が持っているじゃないのか？元々御刀は基本珠鋼で作られた物。そして、刀は主人を選ぶ特性がある。ただの物はなぜ主人を選べるのか不思議とは思いませんか？」

都の質問に舞衣は答えられなかった……この質問はずつと考えていなかった。

なんて御刀は持ち主を選ぶのでしょうか？例えば学校でもそのよう

なことを教わってない。

そして、ユメは話を続ける。

「そこで、私は思うのですよ。きっと御刀は私達のように感情があります……だから、選んで、力を貸すのですよ。孫六兼元はきっと、もつと舞衣様に使われたいと願って貴女に刀使の力を授けたのよ。」

「そう……なんですか。孫六兼元。」

無意識に自分の御刀を撫でた舞衣。そこで僅かに彼女と反応し、共鳴の音を響いた。それを聞いていたのは舞衣一人だった。

「刀使として前線で戦うのか、それとも刀使の力で研究を協力するのか。どちらにしろ、間違えなく前線で戦う刀使たちの力になります。私としては、どっちかいいのか助言できません。」

「……………」

「ただし、舞衣様がやりたいことがあったら、私は必ず貴女様の背中を押します。それは私の役目ですから」

「うん……ありがとう、ユメさん。なんかユメさんと話したら、気分が軽くなる気がする。」

「それは何よりだ。舞衣様。」

舞衣の手伝いができて、ユメは心の底から嬉しく思う。

自分はそのために生きていたのだ。彼女たちの力になるのがいつも守られたばかりの俺の責務ですから。

「さあ、次はユメさんですね。」

「私の？」

「うん、ユメさんも悩みがあるとさつき言ってるんじゃないですか？だからユメさんが私を助けるように、私もユメさんを助けたい。」

「私は……」

「なに？」

彼女が優しい表情で、ユメの返事を待っている。

この人は本当にどうしようもなく俺の心を惹きつけた素敵なお女性。そんな他人思い、優しいところに俺はずっとそんな舞衣ちゃんに魅了された。

だからいつも彼女の前でこんなにドキドキするのでしょう。

だから、一生懸命で何としても彼女を守るのでしょうか。
俺にとつて舞衣ちゃんは……。

「舞衣ー」

突然鳴り響いた警報がユメの話を遮断する。その時、この施設は一気に騒ぎ出した。

「これはっ!？」

「……いいことでは無いみたいですね。舞衣様、ひとまず皆のところへ戻りましょう。そうしたら、状況がわかるはずですよ。」

「うん、そうだね。」

警報が鳴り響いた直後、舞衣とユメは早速観覧室のところへ戻る。そうしたら、数分走ったところに観覧室へ戻り。そこにちょうどさつき見たメンツが揃った。

「一体何か起きた!？」

「マイマイ。あれを見て!？」

エレンが指差した先にはフードを被った人間姿の者が御刀を持って、ニモがさつきいた場所から離れる光景。

よくよく見ると、ニモがいたはずの場所は空っぽになった。

「御刀!？」

「あれは間違えなくノ口強奪事件の真犯人デス。」

「まさか、ここを狙うとは……」

「エレン、何を!？」

エレンが御刀を抜き出していた光景を見て、公威は驚いた顔。

「ごめんなさい、パパ。後でちゃんと縫いますから」

そして、エレンは長いスカートを御刀で綺麗に切る。

このようなエレンはまた別の魅力が満ちている。いや、むしろ彼女らしい魅力だ。

「パパ、ママ、グランパ。行つてきます。」

刀使らしく、彼女は早速犯人を止めに行く。

「待て、私も……!？」

「舞衣! 行くな!？」

「……!？」

それも一緒に行く舞衣ですが、孝則に呼び止めた。彼の顔は凄く心配している。

歩く足を止めた舞衣。今、この時に彼女を押せる人間が必要だ。

「舞衣様、それが貴女様のやりたい事なら……私は貴女様を応援します。家族を守り、皆を守り、それこそが貴女の役目です！」

「……………」

「自分のしたいまま前へ進んで来い！それが柳瀬舞衣という人間、刀使、女の子の人生なんです！後悔せずに行け！」

大声で、執事モードを解除した。彼女を押すのはユメではない。俺、衛藤 都だ。

「……………うん！お父様、私はやはり刀使です。行かなくちゃ……！」

顔を孝則に向かって、そこには覚悟を決めるいい顔を示した舞衣。

「舞衣様、ご武運を！」

「はい！行つてきます！」

「舞衣……………」

娘の名前を呟いていたが、舞衣はもうエレンに追いついて、視界から消え去った。

「孝則さん、彼女……舞衣ちゃんはまだ子供じゃありませんよ。彼女は大荒魂を倒す英雄の一人、俺を救うために勇気を絞って親衛隊の人と戦った強き女の子。その覚悟をした顔も惚れるくらいに好きなんだよ。俺」

「都くん……………」

「俺は何度も彼女に救われた。人を救える娘って最高じゃね？俺は高く誇れるよ！」

ユメという仮面を卸し捨てる、衛藤 都はそこにいた。

「彼女は俺に勇気をくれた、生きる意味の一つにもなった。だから、俺は彼女と共に戦うよ。」

「君は行くのか？」

御刀を抜いた都を見て、フリードマンは聞く。

「ええ、柳瀬舞衣は俺の……うん、舞衣ちゃんとエレンさんは俺の大事な仲間なんだ！助太刀しに行くよ。」

特に覚悟ができてきている顔を示す都。

「……………仕方ない、孫娘は頼んだぞ。」

「こちらもお願ひします！」

「はい！」

エレンのご親族に頼まれて、都は元氣よく答えた時に、孝則は迷う顔で彼に聞く。相当に舞衣のことを愛しているのね。

「都くん！……………舞衣は貴方の言うようにもう子供じゃないですか？」

「親の目ではいつも子供なんですよ。うちの母もそうでした……………ですが、彼女は俺の背中を託せられる勇敢の女の子です！そこは保証する！」

「わかった……………舞衣のことを頼む。都くん」

あの時……………鎌倉へ行く前夜みたいに孝則は誠意を満ちた顔を出した。ちよつと懐かしい。

「任せろ！」

両親たちに頼まれて、都は舞衣たちのところへ走り出した。

「全く驚きますな。子供っていうのは成長するのが速いですね。いつの間に大きく、強く成長するのだ。親が思っていた以上にね。」

「ええ……………そうですね」

都と舞衣の成長を小さい頃から見届けた孝則はフリードマンの話を同意する。

あの二人はどんどん成長していく、立派になって、お互いを支える光景を見て、孝則は子供の成長が速いのを理解した。

もうあの頃みたいに一人でやるじゃなくて……………舞衣と一緒に……………。

「こういう時に親はどうするのか、柳瀬さんもわかるんよな。」

「……………」



特別希少金属利用研究所――裏口通路前。

「止まらなさい！」

「抵抗するならば、斬ります！」

侵入者の前に、舞衣とエレンは抜刀する手前で、侵入者を警告する。しかし、侵入者は投降する意がなく、挑発の微笑みを二人に示した。

「マイマイ、どうやら問答無用デース」

「そうだね……」

写しを被って、御刀を抜き出す二人は臨戦態勢に入る。武力を使っても、ノロを奪う犯人を制圧する。

「……………」

フードを被った犯人は無言に迅移を使って、直接に舞衣を攻撃する。けど、舞衣も四ヶ月前のタギツヒメとの戦いで大きく成長し、その急攻撃を刀で防げた。

「それっ！」

その隙にエレンはフードを被った犯人を攻撃するが、避けられた。こうして、エレンと犯人は数回の攻防を行い。次に舞衣も混ざり、二人で一緒に犯人と戦う。

けど、犯人は余裕そうに二人と戦いながら、出口の方へ歩く。

強い……私とエレンちゃんが呼吸を合わせて攻撃しても、彼女を止めることができないなんて……………！

戦況を分析しながら、舞衣はエレンと途切れない連携攻撃を行う。しかし、相手はまだ余裕、しかも片手だけで応戦する。

片手だけの流派なのか？でも、聞いたことがない……………可奈美ちゃんや？和ちゃん、燕結芽でも片手だけの戦法はしません。余裕なのか？相手の強さはこっちの予測より遥かに上回る。こうして、二人はどんどん出口までに抑えた。

「エレンちゃん、このままでは……………」

後ろはもう出口までに至る階段。相手が外に逃げれば、追跡は難しくなる。

「これ以上は行かせません……！」

迅移を使つて、エレンは犯人を攻撃する。

けど、相手はただ刀で簡単に彼女の攻撃を滑らせる。

「しまっ……いぐはっ！」

彼女が身体の重心を失う隙に犯人は嘲笑うようにエレンの写しを剥がす。

「フツ………」

写しが剥がされて、武装も解除されたエレンに犯人はエレンにとどめを刺すため、上段攻撃で刀を振り落とす。

写しが解除されたばかりに、エレンの反応は遅れ取る、今では金剛力を身体に貼るのが間に合わない。

「ーごめんなさい、パパ、ママ、グランパ。」

生身で斬られる覚悟ができていたエレンは自分の肉を斬り開く攻撃を直視する、その一瞬――

「させるか！」

誰かエレンと犯人の間に入り、その攻撃を弾けた。

「――！」

そして、かの者は居合で相手のフードに僅かの傷口を作った。

「反応が早いな……」

「……衛藤 都。また貴様が……」

自分の服が斬られて、犯人はやっと口を開く。聞いた声は女性のようです。

「貴方は……」

「……み、都……くん？」

エレンの助太刀にする相手の顔を見て、舞衣は震えた唇であの人の名前を漏れる。

あの顔、瞳、髪は間違えない、あの人だ。ずっと会いたかった人。

「俺たちは知り合い？よかったら、俺が相手をしてやろうか？」

「……今は貴様と遊ぶ時ではない。また次の機会にしよう」

そう言つて、彼女は迅移を使い。入り口の方へ移動する。

「逃がすか！舞衣ちゃん！エレンさんは頼む！」

相手を追って、同じく一時の迅移を使う都は言い残して、彼女を追う。

「都くん！待って！」

「マイマイ、私は大丈夫です！彼を追ってクダサイ！」

「うん、ありがとう。エレンちゃん！」

エレンを残して、舞衣も都に続いて外までに追いつく。

◇

「流石にしぶとい。」

外までに追いつくと、フード刀使が彼を待っていたように、彼の前に立っている。

「もう逃げないのか？」

警戒心を維持し、都は相手と対峙する。

「すぐ貴様の答えを応答したいが、まだ我ふたりの遊ぶ時ではない。」

「遊び？」

「ええ、我が完全にお前たち人に勝利するまでの余興とも言える遊び。」

「何を言っている……」

「わからなくも良い。その変質した刀と残る二人の鳥たちと精々我を抗うといい。」

「………！待って！」

フード刀使はそうだけ言い残して、後ろの方へ迅移を使い姿を森の中に消した。

「……逃げられたか、逃げただけは早いな」

急ぎに森の方へ目で姿を探ると、もう既に姿が見えない。

「それにしても、さっき彼女が言っていることは一体どういう意味？二人の鳥と変質した刀とは……」

犯人が言い残した言葉を妙に気になる都はその意味を探る。

「……………都くんなの？」

そんな時、彼の後ろに追ってきたあの子がやってきた。

「……………お久しぶりです、舞衣ちゃん。」

第38話：再会と “ありがとう”

外に追いついたら、夕日の光が顔面に直面した。そして、追跡先にはあの人の背後姿がある。

「……………都くんなの？」

舞衣は写しを解除し、御刀も鞘に収めて、口が思わず彼の名前を呟く。

「……………お久しぶりです。舞衣ちゃん。」

彼女に呼ばれて反応する彼は、舞衣に向かって苦笑する。

四ヶ月渡って、やっと正式に会えた二人。

そして、ずっと我慢していた感情はまるで大浪のように彼女を飲み込んだ。

「……………っ！」

そんな感情に飲み込まれて、次の瞬間彼女は我慢できず、彼の胸に突っ込んできた。

「うおっ!? 舞衣ちゃん? どうしたの?」

彼女に抱かれて、彼は少し慌てた。

けど、その反応を含めて、舞衣は懐かしく感じる。

彼の温度、触感、息、声も全て懐かしい……………心臓もバクバクして、きつと抱かれることに恥ずかしいのだろう。

「ずっと会いたかった……………」

「うん?」

「私はずっと、ずっと都くんに会いたかった! この四ヶ月ずっと可奈美ちゃん達と一緒に都くんの手がかりを探しているのですよ!」

涙がボロボロに彼のスーツを滲みる、彼を掴む手もつよつよに掴む。舞衣がどれほど彼に会いたいのは誰でもわかってしまった。

一生懸命で彼を自分のそばに離させないような行いは十分彼女の気持ちを伝わった。

「ああ……………長く待たせてすまなかった。俺もずっとお前と会いたくて我慢していた……………こうして舞衣ちゃんの温度と感触を感じられて俺も嬉しいよ」

故に、彼も彼女を強く抱き返す。例え、舞衣の胸が彼と強く密着しても、両方がお互いのことを思う気持ちとその感触を超えた。

会いたい、触りたい、聞きたい、感じたい。両方はお互いのことを離さないように抱きつく。

これはまるで両地に分けた恋人同士はやつと再会したように抱き合う。

「私も。……都くんはこの四ヶ月間、どこで何をしたの？なんですか会ってくれないの？」

「色々あつてね。俺は男性刀使の立場になったから、色々面倒になって、刀剣類管理局の下で監視されながら功績を溜まっていくのよ。これも朱音様の配慮だから、あまり彼女を責めないでください」「うん……なんか凄いいことを聞いたけど、こうして都くんと会ったから、それでいい。」

そう、彼ともう一度会えたならもう何も求める必要がない。

「それから、俺は柴田さんから孝則さんが舞衣ちゃんを刀使にやめさせたいと聞いて、彼と秘密契約した。ユメという身分で貴女を見守るが、孝則さんは元々俺を利用して貴女を説得するよう計算しているみたいだけど……これも舞衣ちゃんのためー」

話の途中に舞衣は突然、都から離れ、彼の顔をじつと見つめる。

「やっぱり都くんはとても格好いいですね。」

「……………!／／／／」

舞衣の不意の言葉に早速ドキドキした都。

夕日の照らしのおかけなのか、彼女は普段よりもつと輝くて、美しく、可愛かった気がする。

「もつと見せて、私のもつと都くんのことを見たい／／／／／」

「お、おう／／／／／」

二人は見つめ合う、お互いに対する熱い感情はもう止まらなくなる。これも四ヶ月間、感情が溜まり続けたせいなのです。

「都くんはもう遠くへ行かないのよね？」

「本部長によるものです。俺の立場も危うくですから」

顔が舞衣に触られて、彼女は都の顔をしっかりと見つめるながら話

す。こうして、彼女と親しくなるのは初めて気がする。

「そう……なら、この後も可奈美ちゃんに会ってね。可奈美ちゃんもきつと貴方と会いたいと思う。」

「もちろん。その時は皆と一緒に……俺はこの四ヶ月にずっとみんなに感謝したいのです。俺を救うために折神家に突入することを「ありがとう」って伝えたい。」

「私も「ありがとう」って伝えたいよ。ずっと私を守ってくれた大事な人へ……／／／／／／／／／／」

「舞衣ちゃん……／／／／／／／／／／」

舞衣に大事だと言われて、胸の鼓動がまた強くなっている。

おかしいですね、昔はよくこの言葉を聞かれたのに……それでも彼女の大事な人になってもらうのは嬉しかった。

多分、心は自分がちゃんと誰かに愛されたのね……と思ったからだろ。

「それより、今度手を繋いでくれる？ 私は都くんともっと触れ合いたい。」

「いいけど……なんだか、舞衣ちゃんは急に甘え坊になった気がする／／／／／／／／」

「甘える女の子が嫌いですか？／／／／／／／／」

上目遣いでそう尋ねる彼女。

正直、こういうのずるいと思う。だって好きな人に普通聞かれたら、答えは一つしかないじゃない！

「嫌い……じゃないけど／／／／／／／／」

「……ありがとう、都くん。いつも私のわがまを聞いてくれた。」
「いいのよ。舞衣ちゃんに珍しく甘えられるのも嬉しいだし。」

彼女の我儘を聞いて、都は彼女と手を繋ぐ。その度に彼女の嬉しそうな顔を見て、都もこの再会が良かったと微笑む。

「ふふっ、……お帰り、都くん。」

「ああ……たがいま」

二人が手を繋いだまま、夕日が彼方へと沈むまでずっと笑い合う。その後、エレンとも正式に再会できたが……彼女にも強く抱かれ

て、隣の舞衣からの視線がとても痛く感じられたのはまた別の話であつた。



「そうか……ニモは行ってしまったか」

エレンと舞衣と一緒に孝則たちの元へ戻り、都は二人の代わりに結果を報告する。

あの謎の刀使は舞衣とエレンが呼吸を合わせても対抗ができないようだ。自分も刀使の力が弱くて、速度は追いつけない。

「ごめんなさいデス」

「申し訳ありません……俺の力不足で、犯人を逃してしまった。」

「私も都くんのことを夢中になって……その一瞬を……」

「いや、君たちのおかげで怪我人が出なかった。よくやってくれたよ。」

犯人を逃してしまったことで謝る三人にフリードマンは逆に三人のことを褒める。少しでも、気分が治った気がする。

「エレンー！」

「パパ……」

その時、公威さんがエレンの名前を呼び、エレンは申し訳ない表情で父と向き合う。

「ごめんなさいデス。せつかくのプレゼントを……あつ。」

そして、公威さんはエレンを強く抱き締めた。エレンもこの予想外のことで驚き顔を隠せないみたい。

「パパはね……服のことなんて、どうでもいいのよ。エレンが無事なら、それでね。」

「……うんー！」

そこで、さらにエレンのママもエレンを抱きつく。三人ともが笑顔で抱き合うその光景はとても尊く見える。

うちも……衛藤家もかつてこのような光景があった。いつか可奈美と再会するときはこうして欲しい。

「さあ、舞衣くんと都くんも」

「……え？俺も？」

「うん、柳瀬さんは貴方と舞衣くんに言い伝えたいがある。そうでしょうか？柳瀬さん」

フリードマンは孝則の方に横目で見ると、孝則は都と舞衣の前に立つ。

「昨日は言い方が悪かった……。舞衣、お前は私とお母さんの大切な娘だ。だから、お前を危険から遠ざけたかったのだ。」

「お父様……」

「それと、都くんにも娘の盾として利用してしまつて済まなかつた。」

頭を下げて、孝則は二人に謝る。彼にとって二人は柳瀬家にとって替えようがない者だ。

「……孝則さん、俺は別に気にしていないよ。利用されても、舞衣ちゃんを守れば、どんどん俺を利用すればいい。貴方はいいお父さんだから」

「……妻の言うとおりだね。舞衣のことを貴方に託すのは一番なのかもしれないね。」

苦笑の顔をする孝則さん。ですが、その言葉に都は少し不満そうな顔でこう言った。

「いいえ、一番なのは孝則さんですよ。だって、貴方はここを出資するのは舞衣ちゃんのためである。エレンさんからも聞いたけど、俺より孝則さんの方は苦勞したじゃないですか？孝則さんは立派な舞衣ちゃんを構える人間ですよ。」

「そ、それは……」

都にそう言われて、孝則はどういう反応を取るのかわからなくなつてきた。

「ですが、構えるのは程々しておきます。俺も四ヶ月間でよく考えました……舞衣ちゃんは俺が思ったより弱くじやありません。彼女

はもう立派な女性方です。少しでも彼女の希望を聞いても良いのでは？」

軽く笑って、わざと舞衣の後ろに移動する都。彼の意図、舞衣は特にわかっていた。

故に、彼女はお父さんの前に勇敢で自分が悩み続けてきて、ようやく出した答えを出す。

「……お父さん」、今日は色々ありがとうございます。私のためにわざわざこの研究所を出資する気持ちはとても嬉しいです。だけど私は、私は刀使を続けたい。それは、私の使命……ううん、したいことです！」

……したいことか。自分の意思で決める舞衣を見て、孝則は確かに娘の成長を見た。

いつの間に、大きくなって、強くなったな……舞衣。

「……そうか。都くん、これからも娘のことを頼めるのかな？」

「お父さん……それって……」

「ああ……そろそろ私も娘から卒業する頃みたいだ。いつも舞衣を子供扱うのはよくないしね。」

「孝則さん、俺だけではないですよ。可奈美、沙耶香、薫さん、？和……それと、エレンさんもだよ。俺たち六人は舞衣のことを大好き

なんだから」

「そうデース！どんどんマイマイをお任せクダサイ！」

いつの間に、こっちに来るエレンも舞衣の隣に立って、いい顔で孝則にこう言う。

「……そうか、良い友人を持ったな舞衣。これも、子供が成長した証か……」

娘を支えるのは六人にいることを孝則は凄く安心した。例え舞衣は危険に遭つても、彼女を助ける人間もいる。

「舞衣のことを何卒よろしくお願いします。」

「はいー」

再び頭を下げて、孝則は深くこの二人……いや、この場にいない四人のことも感謝している。

その後、彼は先に柴田さんに車の用意を伝うため、この場から離れると、エレンは軽く舞衣の耳に囁く。

「マイマイはお姉さんキャラなのはよく知っていマース。けど、偶に甘え方に回すのもいいじゃないデスカ」

「……………エレンちゃん」

「娘だから、どんどんお父さんに甘えるのもいいことですよ。それは娘の特権ですから」

そして、都も軽く彼女の背中を押す。

「都くん……………」

「行ってこい、舞衣ちゃん／マイマイ」

「……………うん！」

二人に押さえて、舞衣は再び二人から勇気をもたらった。自分はいつもしっかりしたお姉さんキャラを演じていたが……………娘キャラをずっと放置したままお父さんとお母さんに甘えることが少ない。

今日だけはいいですよね？娘として大好きな両親に甘えるのは。

「お父さん、ありがとう。」

孝則の方へ走り、後ろから彼をきゅつと抱き締める。娘の感触を感じた孝則もこの久々の感覚で危うく涙が出そうと気がする。

彼はずつとこれを待っていたのかもしれない。娘が父に甘えるのはどこの父でも望んでいたものだから。

——舞衣、私ほうこそ、ありがとう。私のようなお父さんに甘えるのを。

研究所から離れるまでに、孝則はずつと涙を溢れるのを我慢していた。娘の我儘はとんでもない威力があるからな。

「俺も家に帰ったら、お父さんに甘えるか」

お帰りの車を乗り、都は御前試合から会っていない父の顔を思っそうぶつぶつと呟く。

お父さんと色々あったけど、一応俺と可奈美を育つ親なんだ。偶に、彼に甘えてもいいのでしょうか？

その声はもちろん車内の皆も聞こえて、都が見てないところに思わず微笑む。

彼はどれほど我慢強くても、一人の息子である。両親に甘えるのは子供たちの特権、望みですから。

◇

その後、夜の柳瀬家――。

孝則と柊子は舞衣の転校が取り止めになったことについて話し合っていた。

「……そう、転校は取り止めになったのね？」

「随分とあっさり受け入れたな。お前は心配じゃないのか」

「もちろん、心配していたよ。でも、こうなるのを知っているのよ。」

「おん？」

「舞衣も都くんも私達にとって大切な子供。都くんはまたお父さんがいるけど、彼の成長を見届けた者としてつい息子を見るのです。」

優しく微笑む柊子。彼女の母性は相変わらず広くて、例え相手は他家の子供でも自分の子供として見ている。

「そう……でも、彼は婿さんなんだ。いつか舞衣の夫になる男。」

「それもそうですね。両方もお互いのことを大好きみたいです。」

本人たちはまだ気づいていないが、孝則と柊子は特に二人の気持ちを気付いた。好きだけど、素直じゃないのはあの二人らしいというか……。

とにかく、彼は舞衣のことを託せる男。いつか舞衣は彼の妻になるのだろう。そういう未来は悪くないと思う二人がいた。

◇

同一時刻――柳瀬家の厨房。

「そういえば、舞衣ちゃんはもうお兄さんと呼べないんだ？」

晩御飯の用意を終わって、都は隣にエプロン姿の舞衣に声をかける。

「うん……／＼／＼／＼そろそろお兄さん卒業と思ってね／＼／」

「そうか……寂しくなるな」

「都くんはお兄さんって呼んでほしいの?」

「妹が増えた気分で好きです。」

「………なら、都くん」

なぜかそこで拗ねた気がした舞衣であった。一体どうした?

「そういえば、さつき電話が来たのよ。本部長からだ。来月からは群馬に行く……」

「………また離れるのですか」

寂しい顔をする舞衣。せつかく再会するのに、また離れるなんて都も同じ気持ちだ。

「大丈夫。本部長から今回の任務が終わったら、長期の休暇が取れるって……それに、沙耶香もそちらに配属すると聞いた。」

「沙耶香ちゃんが……!?!」

「うん、薫もいるから心配いらないかも。俺もあそこで自分のために頑張ると同時に沙耶香の世話をするよ。」

「………そう。なら、仕方ないね。沙耶香ちゃんのことをよろしくね。」

沙耶香を優先に心配する舞衣。やはり仲がいいよな、二人共。

「はい。その前に俺はここで美結と詩織の世話を焼くから、家のこととは心配しないで」

「うん、……わかつ……ちよつと待って、もしかして都くんは美結と詩織の世話をするのですか?」

「ええ………そうだけと。」

「………都くんは程々という言葉は知っています?」

「うん?知っていますけど……」

あれ?なぜか舞衣の顔がどんどん怖くなってきた。何か不味いことでも言ったの?

「妹たちに可奈美ちゃんのような育ち方をしないでくださいね。美

結も詩織もいつまでも独り立ちできなくなるよ?」

「美結だけは程々しますから、大丈夫です。」

「詩織は?」

「……………」

「み・や・こ・く・ん?」

わかった! わかったから! そういう怖い笑顔にしないでください!

でも、これも詩織が凄く可愛いから。だってお兄ちゃんって言うでしょ? 大好きって言われるでしょ? ついお兄ちゃん本能を出すのよ!

「……………」

あ、すみません。控えておきますので、そういう怖い顔はもうやめてください……………」

その後、この間はずっと舞衣ちゃんの監視の下で二人の妹の世話をする。なんか刀剣類管理局の方が優しい気がする……………」

でもブラック組織で働くより、こつちの仕事の方がいいと思ってた。以後はいつそここで働くか。

それより、この間は舞衣ちゃんからも毎日自分特別に優しくする錯覚がしてきた。

特に彼女に甘やかされて、膝枕される回数が増えていて、柊子さんにも「夫婦みたいですね」とからかわれた。孝則さんも「舞衣はやつと本格的になったな…」と言われた。

一体どういうこと? 俺は舞衣ちゃんのが好きだけど、舞衣ちゃんはまだ俺に優しいするだけだよ?

「結婚したら、どうですか? 鈍感兄」

美結にもからかわれた。少し口が走り出す言葉が痛いのですが。

「舞衣お姉ちゃんの花嫁姿が見たい!」

俺も見たいよ、詩織。けど、その前に新郎の方をぶつ殴りたいのかも。もし舞衣ちゃんを泣かせたら、許さないから。

◇

「どうやら、うまく行ったみたいですね。」

「はい、舞衣ちゃんの両親から、舞衣のことをお願いします……つて言われちゃった。」

特別希少金属利用研究所の一件後、都は正式の身分で柳瀬家の執事として働くことになりました。そして、舞衣のご奉仕と同時に、その連続事件の結末を羽島学長に説明する。

「それは良かったですね。それで？ 貴方はしばらくこっちの手伝いをするのですか？」

「はい、舞衣ちゃんが刀使をやり続ける限り、俺は全力で彼女のそばでサポートするつもり」

「せっかく休暇中なのに……家に戻ってちゃんと休んでもいいのよ？」

そう言つて、心配しそうな顔をしている羽島学長。

彼は奈良の件以後、すぐ柳瀬家の件で執事として働く。そして、先日特別希少金属利用研究所で発生したノ口強奪事件に巻き込まれた。

また学生の身なのに、次々と事件に巻き込まれる体質。そういう点は美奈都と似ていますけど……彼にちよつと休んで欲しい。

何にせ、御前試合の件の前に彼は特に過労気味で鍛冶科に多くの貢献をしてきた。加えて、管理局に所属した後にも真面目に働きましたと紗南からも聞いた。

ゆえに、彼に休ませたい。

「お気遣いありがとうございます、学長。ですが、今現在刀使たちは関東にバラ撒いた荒魂の討伐に忙しい中、俺だけ抜いては行きません。何より、舞衣ちゃんも刀使としての使命を果たしていますから」
「でも休憩も大事なんですよ。貴方はもう管理局に所属しますけ

ど、またうちの生徒なんですから」

「はい……ありがとうございます。羽島学長」

深く母校の学長の気遣いに感謝する都。

鎌倉特別危険廃棄物漏出问题以後、彼は特別身分で所属は刀剣類管理局本部に転移されて、1ヶ月前ほど正式に管理局の下に働くことになりました。

また、学籍は美濃関のままとなっているが、そのままの流れで本部付きになったため、有名無実化している。

そんな立場に立つ彼に、羽島学長はまた彼を自分の生徒だと見ている。生徒としての勉強の権利も朱音様の許可下で彼のために残した。何にせ、彼はまた勉強を求める年齢だから。

「ところで、学長は昔うちの母と同級生だったんですか？」

「ええ、そうよ。紗南から聞いたの？」

「はい……病院にいた頃は、時々お見舞いしに来て、母の話をしてくれた。」

「そう……どんな話してたの？」

「迷惑製作者、剣術バカ、自称セクシー女(笑)など……それと、一番尊敬する先輩だと」

「どれも外れていないわね……美奈都は確かにいつも自分勝手の人で、いつも騒ぎを起こした人なのよ。その点、貴方たち兄妹も同じね。」

「なんかすみません……いつも迷惑をかけてしまつて……」

笑顔をしている羽島学長に対して、都は申し訳ない顔をしている。

在学の時、時々羽島学長に面倒を見られた。大部分は可奈美のため、無茶苦茶のことをしたこと。

「いいのよ。貴方たちが元気でこの学院生活を堪能していれば、私はそれでいい」

「学長……」

「衛藤さん、以後何かあったら私に助けを求めてもいいのよ。貴方は一人で戦うじゃない……美濃関のみんなはきつと喜んで貴方に力を貸します。」

学長席から立ち上がる羽島学長は優しい微笑みで都の方へこう言った。

「お互いのことを助け合い、それが美濃関学院なのよ。その点は決して忘れないでね。」

「はい……」

学長の話を心に刻んで、都は再び美濃関に来て良かったと思う。前の学校より美濃関の方が温かい……。

本当にこの縁を感謝しなければね……。

母によつて……ううん、妹によつて繋ぎ始めたこの縁を感謝するよ。

幕間：プールでの遊び（前編）

――ある日 美濃関教務員室――

「衛藤、これをくれてやる」

美濃関での雑務を終わり、都是自己分の教師である田中妙子先生に呼ばれ、あるチケットを渡された。

「これはなんですか？先生。」

「プールのチケットだ。ちやうど近くのプール施設が営業再開なので、お前は誰かさんと一緒に行きな。」

「なんて俺？それと、なんてこれを持っているんだ？」

先生の個性からすると、彼女は自分と同じ？楽施設に縁がなく、興味がない人間である。故に、プールのチケットを持つのがありえないことである。

「それは昔生徒から没収した物だ。アタシは使わないから、お前のような過労的、自己犠牲な生徒にちやうどいい物だ。」

「いや……俺もプールに興味ないし。しかも、今はもう10月だし。」

「言うだと思った。だが、お前には休憩が必要だ。この後も群馬に行く予定じゃないか？ならば行く前に身体をちゃんと休ませろ！」

「でも、仕事がまたあるんじゃない。」

「いいから！お前がバカみたいに働くのは教師として見てられないわ！早く休め！馬鹿野郎！」

なぜか先生にビシバシ叱られた。加えて教務員室から追い出された。

鍛冶科担当教師田中妙子先生は普段いつもこんな調子で都のことを関心している。

なぜなら、彼は自分の健康を重視してない生徒なんですから。昔は良く夜遅くまでに作業し続けていて、学長たちに良く関心された。

しかも、彼は美濃関刀使たちの剣術指導や荒魂討伐指揮、学院内の

手伝い、柳瀬家の執事仕事を全部担う。

彼は益子 薫と違い、嫌そうに過労されではなく、文句言わずに過労する人だ。

「さて……これからはどうしようかな」

追い出された後、都はブツブツと手に持っている二枚のチケツトを見て悩む。

自分は別にいらないし、誰かを誘うのも迷うし……。

「とにかく同性の知り合いから一人一人聞くか」

そう言つて、彼は早速電話をする。

そして、最初の人は最も親しい親友である。



―美濃関学院 グラウンド―

「あと三周！みんな、頑張つて走り抜けろ！」

体育教師の野太い声が響く。

刀使の体力向上を目的に、昔から執り行われているマラソン行事。走ることに、スタミナをつけることや自身にとって最適な呼吸法を理解でき、少しでも荒魂との戦闘での生存性を高める側面もある。

この前、荒魂の討伐により酷い怪我人が出たので、これ以後五箇伝は刀使たちが荒魂との戦闘において慎重に彼女たちを鍛え始めた。

「はあっ……はあっ……結構、きついね……」

任務がない時、いつも刀使の訓練を怠けない舞衣は、まさに今このグラウンド内で走っているところだ。

本部長の要請で、なかなか美濃関に戻つてこれない可奈美のことを思い起こしつつ、彼女も彼女でやれることをやっている。

……とはいえ、長距離走を行うことで体力がつくかどうかは、個々に依るところが大きい。

「舞衣、大丈夫？」

「ふ、ふたばちゃん……はあつ……はあつ……うん、まだまだ大丈夫だよ。」

彼女と並行走る同級生の長江ふたばは大きく呼吸している舞衣に
関心している。

彼女もかなり荒い息だけど、舞衣と違って胸部の負担がないため、
ふたばは舞衣より調子がいい。

「無理しなくてもいいのよ。私たちは舞衣が美濃関二番目強い刀使
なのはよく知っていますから。それに今だに強力な荒魂がまだ美濃
関地域に出現していません。」

「あ、ありがとう……ふたばちゃん。でも……私はもつと頑張らな
いと……いつも可奈美ちゃんに追いつけなくなるから」

そう言い、舞衣は辛いけど続く走る。その話を聞いたふたばも仕方
なく舞衣と同じ速度で走った。

舞衣と可奈美は仲良い親友であり、ライバルでもある。そんな二人
の関係はまるでふたばと美炎のような関係だ。

故に、ふたばは彼女を止めない。

誰かを追いつく気持ち、ふたばもよく知っているからだ。

それからしばらくして、授業としてのマラソンは一旦終わった。

「はあく。疲れちゃったなあ……」

「お疲れ、舞衣。」

「結構大変だったわね。」

更衣用のロッカールームで、ベンチに腰掛ける舞衣。そして、彼女
に水を渡すふたばと同級生の須原里香すはらさとかがいた。

「うん……そうだね。でもこの程度で疲れるなんて、私はまだまだ
だね。」

「何を言うー！あれほどのスパルタ課程は一般の生徒たちにとってか
なりキツイものよ！最後までに続いた舞衣はすごいものよ！」

「流石大荒魂を倒した英雄と言ったところかしら？諦めない心は刀

使として、とても大事なものよ。」

「英雄か……実際そんな感覚がないなあ。」

英雄という文字を聞いて、舞衣は自分がそういう偉いやつじゃ思えない。実際大荒魂を倒したのは？和ちゃんだ。自分たちはただ先に大荒魂に倒された。

だから英雄の名は舞衣たちには荷が重すぎるが……世間では彼女たちを英雄だと伝える。

これも世間から刀使への信頼を取るための政治操作である。でないと、刀使たちは今より人々に酷く晒される。

故に、舞衣たちはそのまま英雄という名を受けた。が、……やっぱりちよつと納得できない。

「そういえば、可奈美はまだ美濃関に帰ってこなかったっけ？」

「うん、可奈美は現在最優秀の刀使だから、荒魂一番頻繁に出現する鎌倉に滞在している。噂にすると、本部長もかなり彼女のことを重用していたそうですよ？」

「へえ〜あの可奈美か。」

可奈美の噂をしている二人に対し、舞衣は何も言わずに着替える中。

彼女に会いたいけど、非常時期にそうはいかない。それに、来週は彼女がいる鎌倉へ行けるから。

まあ……その時は都くんも群馬へ行くけど。ちよつと嬉しうな、寂しいような……。

「ん……？着信？」

制服に着替え終わって、ロッカーを閉まると、携帯が鳴った。

「え……!?都くん！」

携帯を取り出してみると、そこに表示されていたのは彼の名前であつた。

それで驚く舞衣はうつかりと声を漏れた。

「都くんって……確か、可奈美のお兄さん？」

「うん、衛藤先輩は可奈美のお兄さんであり、美濃関高等部最強の剣士なんだよ！」

「そうなんだ……私はあまり可奈美から聞かれなかった」

「まあ……悪名の部分は確か言い辛いですが。彼は尊敬できる先輩なんですよー!」

ふたばが自慢そうに都のことを紹介するところ。舞衣は心の準備をしている。

彼からの電話はなくはないが……それでもかなり珍しいことである。そのせいで舞衣はちよつとドキドキしている。

好きな人からの電話は一人の女の子にしては、かなり心がきゅーとするポイントなんだ。

そして数分後、舞衣はようやく通話ボタンを押した。

『もしもし、舞衣ちゃん?』

「都くん、私に何が用?」

『実はさつき近くにいるプール施設のチケットがもらってたけど……明日は“二人で”一緒に行かない?』

「え……、”二人で”プールに?」

二人で……つまりデートの誘い!?

二人と一緒に何処かで遊ぶと聞いて、舞衣は少しドキドキしてきた。

『うん、二人で。実はさつき服部先輩に酷く叱られたのですよ。舞衣ちゃんがこの間ずつと寂しがっているから、大切にしなさいって言われた。だから、改めて二人で遊ぼうと思って』

「そうなんだ……でもこの時期にプール?」

『その点はすでにつつこんだから、放つといて……。それより誘いの返事は?』

「うん……個人的に都くんと二人で行きたいけど、任務が……」

自分の仕事の分を他の人たちに任せると気が不味くなる舞衣。

柳瀬舞衣は優しく、責任感があるいい女の子。そんな彼女だから、皆に好かれて、慕われている。

だが、その点は逆に彼女を縛る。強すぎた責任感の時々人に一息ができないほどの圧力を与えられる。

だから舞衣と同質の都よりその点を早く見抜いた田中先生と服部

先輩はこうして二人に一息ができる時間をくれた。

『大丈夫だ。本部長と学長もそこまで鬼じゃないと思う。それに、舞衣ちゃんは皆のためにずっと動き続けてきたんだ。ちよつとくらい休んだって、罰は当たらんさ』

「……うん、そうだね。ありがとう、都くん」

彼女から感謝の言葉がちよつとだけ通話向こうの都の心を癒やした。彼女を助けたことは何より喜びなんだ。

『本部長には俺から話を通しておくから、舞衣ちゃんは明日の水着を用意してあげて』

「うん、わかった。明日は楽しみします!」

『うん、それじゃ……』

向こうとの通話を切り、舞衣は一息を吐く。

(……都くんからデートの誘い／＼／＼／＼)

さつきから胸のドキドキが止まらなく、顔もすごく熱くなった気がする。きつと今の顔が真っ赤だろう。

例え彼は“そちらの意”がないとしても、舞衣は二人だけの遊び

……通称“デート”というものを薄々期待していた。

これは彼と距離を縮めるチャンスだ。ちゃん把握しないと!

そう思い、舞衣は携帯を納めて、ここから出る時……。

「舞衣、放課後、一緒に必勝水着を買いましょう!」

「絶対最高にかわいい水着を選んで見せます!」

舞衣に忘れ去ったふたばと里香に止められた。

「まさか……さつきの話……」

「盗み聞きは良くないけど……衛藤先輩とのデートは何かしても成功させます!」

「せつかくのデートなんですから、一番じゃなきゃね!」

デートの話はどうやらこの場にいる他の二人に聞かれた。

うわあああー!! 恥ずかしい!

顔を両手で隠すくらいに恥ずかしがっている舞衣は心の中にめっちゃ叫んだ。

確かに聞かれたのは自身の配慮不足だけど、流石に知り合いにデー

トの話を知られて、死にそうくらいに恥ずかしい。

そのせいで、舞衣の顔は真っ赤で可愛い。

「舞衣は彼にいい一面を見られたいでしょう？可愛いと褒められたいでしょう？」

「……………うん／＼／＼／＼／」

素直に頷く舞衣。

好きな人に褒められるのは恋している女の子にとって嬉しいことだ。その点は舞衣より恋愛を意識しているふたばはよくわかつている。

舞衣は衛藤先輩のことを恋している。自分の親友美炎みたいに。

「なら水着のセンスは私とふたば二人で選びましょう。」

「ちょうど私も衛藤先輩の好みも知っているよ〜」

自慢げな顔にするふたば。彼女はよくよく都の協力で服部先輩を攻略していく、その途中に彼の好みも知ってしまった。

例え舞衣たち以外の人に興味がないけど、彼もちゃんとした男なんだから。女に興味がないわけではない。

そう思い、ふたばと里香は放課後すぐ舞衣を専門店に連れて行き、そこで水着を選ぶことにした。

ちなみに、その場で二人の親友は舞衣のサイズがまた大きくなったことに驚いた。



一方ー

「明日は舞衣とプールですか」

「はい、この件は既に管理局から休暇の許可がも下されたので、明日は休みです。」

しばらく日本に滞在する孝則さんに明日のスケジュールを報告す

る彼。一応舞衣のお父さんに雇われる身なので、娘さんとの何事も彼に報告しなければ。

「そうか……明日は思う存分舞衣と楽しく遊べばいい。」

「……反対しないのですか？舞衣様が執事とプールに遊ぶということ。」

「明日は休憩だろ？だったら、執事身分ではなく、都くんの身分で彼女と昔みたい遊べば？」

そうしたら、軽く同意した。

「……ありがとうございます。」

「お礼を言いたいのはこちら。しっかり舞衣を楽しませるんだぞ。」

「はい……」

雇い主から許可をもらい、都は伝うべくことをすべて終ったら、そのまま退室した。

「明日は娘とのデートか……本当に子供の成長が早いものだ。」

また在学中の男女がデートすることに少し早い気がする孝則。

でも、鈍感の二人がいよいよ近づくことが親としては嬉しいことだ。何にしろ、二人はあんなに相思相愛なんだから。

例え舞衣を止めようとしても、彼女は頑固に都くんを選ぶでしょう……。

「いつか詩織と美結もいい相手……。そうなった時は柴田に調べさせよ」

そして、舞衣のことを放心すると、他の娘の将来の相手を心配し始めたバカ親であった。



翌日

ー岐阜県 あるプール施設ー

入口で手荷物検査を受けた後、着替えのため彼と一度別れた舞衣。膨大な数の人間が着替えられるように、この施設では更衣室もかなり広めに取られている。

だが、初めて来た人間にとっては最早迷路である。地下にある多数のコインロッカーが方向感覚を狂わせ、目眩すら覚えさせるほどである。

「ビキニは…目立つっちゃうかな…?」

なるべく人目につくものは避けたいと考えている彼女。都くんの前では見せてもいいのですが、流石に彼以外の人前で曝すビキニ姿を恥ずかしく思う。

しかしながら、彼女の場合は年齢が中学生といえども、モデルと遜色ないほどの容姿を誇っている以上、どう足掻いても目立つ。最も、本人がそれに気付いているかどうかは別だが。

「それにしても、人が多いわね。」

ピンク色のビキニを着替えた舞衣は人にぶつけないように更衣室から離れる。

平日とはいえ、歩き回するには少し大変な量の人波が、彼女の視界に入る。

「…これ、はぐれないよね?」

再会すらも思わぬ程の人の数に気圧されながら、舞衣は都の姿を探る。

「お嬢ちゃん、一人?」

「結構かわいいね。名前は?」

「え…?」

そんな時、彼女はすぐ出口の近くにナンパ目標を待ち伏せるナンパ男二人組に狙われて声かけられた。

理由は言うまでもなく、舞衣はスタイルが抜群の美少女。可愛い顔をしながら、豊かな身体を持つ若い女の子。

そんな舞衣は当たり前のように男に狙いつけられた。

「良かったら、俺たちと一緒に遊びませんか？」

「絶対お嬢ちゃんを楽しませるのよ〜」

「えっと……………」

そんな二人のナンパに困惑の顔をしていた舞衣。彼女もこれがナンパだと知っている。

だが、目の前の男たちはどうにも舞衣より年上に見えるから、また中学生の舞衣では軽く敵う相手じゃない。

何より御刀も持っていないから、強引されたら彼女が間違えなく力で負ける。

「ビビるなよ、俺たちは優しいお兄さんたちだよ〜」

「そうだよ。何かあったら、お兄さんたちが守ってあげる。」

そう言いつつ、舞衣に迫ってくる二人組。

そんな二人の圧に少し怖っていた舞衣は後退しつつ、なんとかこの二人を断りたいと内心でそう決めると……

「あの……………」

「〃舞衣〃、お待たせ」

聞き慣れた声と共に、舞衣の視線先、二人の男の後ろにあの人がいた。

「都くん！」

「なんだ……………？てめえ。」

「お嬢ちゃんの知り合い？」

彼が現ると、舞衣がすぐ嬉しそうな顔を晒した。彼の出現に舞衣はとても嬉しかった。

そして、彼女をナンパする男二人は邪魔されたことによって不愉快の目で彼を睨む。

「ええ、一応〃彼氏〃だもの。お二人は俺の彼女に何か用？」

「ちえ……………彼氏がいるんだ。」

「こんな美人だから、いるのもおかしくないが……………こんな男と付き合うだとは……………」

「おっと、これは所謂名誉毀損罪かな？少し軽い発言問題なんだけど、本人のメンタルがかなり傷つけられた場合になると、裁判所に

打っても受けられる気がするよ。」

「てめえ……!」

「こんな証人がたくさんいる公共場所で俺を殴ったら、さらに罪が重なるのですよ。いいのか?」

「ちえ……!」

だが、彼はただ笑顔で一番手早い方法でこの二人を制圧しながら、この場から追い払った。

時に、単なる力だけは武器ではない。法律がある国では口論も凄い武器になれる。

彼はそれを利用して、自分より体格が大きい二人を無傷に追い払った。

それをただ立っただままの舞衣も呆れつつ、彼をじっと見つめた。

「舞衣ちゃん、改めてお待たせ。怪我がないか?何かされてない?」

そして、ナンパ男たちを追い払った後、都はすぐ舞衣を関心する。

彼女の呼び方も元に戻した。

「ええ、大丈夫です……。それにしても、都くんはさつき凄かったわね。」

「まあ、あれくらいは普通よ。俺より本物の弁護士なら、もっとやれると思う。」

「それはそうですけど、都くんはさつきとても格好良かったです／＼／＼／＼」

そう言い、舞衣の顔がまた赤くなってきた。そして彼女に褒められた彼も同じ色の顔だ。

だが、それは単なる褒められて照れてるわけじゃない。彼女の水着も凄く可愛くて、魅力的なので、男性としては彼女の魅力の前に正常でいられる者がいない。いや、……むしろ、見惚れない者がいないだろう。

「……そ、そう／＼／＼／＼。それより、舞衣ちゃんのも可愛かったわよ……水着／＼／＼／＼／＼」

「あ……／＼／＼／＼／＼」

視線の置き場が困っていた都は彼女から視線を逸らしながら、彼女

を褒めた。流石に女性の水着を見つめすぎるのは良くない。それに、視線も思わずとある豊かな部分の方に向かうから。

「……………かわいいですか／＼／＼／＼」

若干の上目遣いでもう一度聞いてくる彼女。そんな彼女の顔は赤くて、とても可愛い。

「あ、ああ……………凄く似合ってたてかわいい／＼／＼／＼」

「お、思ったより恥ずかしかったのですね……………でも、良かったです／＼／＼／＼」

わざわざ水着を買う甲斐があると感じた舞衣は僅かに微笑んだ。

そして、彼もまたそんな天使のような可愛さが持つ舞衣にドキドキした。

◇

「舞衣ちゃん、どんな感じだったか？」

「結構ゆったりできますね。……………でも、疲れませんか？」

浮き輪に乗る彼女に並ぶように追う彼。

現在、二人は流れる水道を遊んでいる。舞衣は浮き輪の上に乗っていて、彼はそのまま泳ぐ。

「いいえ、水は冷たくて気持ちいいですよ。それにこうしていると、自分が逆境という感覚がしてきた。」

「えっと……………それはどういう意味？」

「特訓にしては、ちょうどいいくらいかな？」

「特訓って……………なんか都くんはどんどん可奈美ちゃんになっちゃったわね。」

「まあ……………色々あったよ。それにお前たち刀使の力にもつとなれるよう、俺はもつと自分の腕を磨き上げなきゃ。」

泳ぎながら、彼は重そうな顔をしていた。

舞衣はこの四ヶ月間、彼が一体何かを体験したのか知らないが……………

でも、あまり彼を無理させたくない。

せつかく遊びに来たのだから、もつと気を抜かないと。

「もう十分になったわよ。一部だけど、美濃関中等部の子たちもあなたの指導を受けることに感謝しているよ。」

「……ううん、それだけじゃない。あなたの指示の下で動く刀使もきつと都くんのことを感謝している。だからあまり自分を攻めすぎないでください。都くんが充分みんなを助けたのだから」

「舞衣ちゃん……」

「たまには気を抜いてもいいですよ？ 私も今日で遊び気分です。都くんの誘いを受けたのだから。都くんは違いますか？」

「そうだね……悪かった。俺はあまり遊びなどを得意じゃないんだ。」

「なら、遊びというものを今教えてあげる！ えいっ！」

「わぶっ！」

彼の顔にかかる水。

「ふふっ。どうですか？」

舞衣が手の届くところから水を彼に掛けていた。

「水が冷たい。……これは遊び？」

「うん、都くんも私に水をかけてきて」

「……わかった！」

浮き輪に乗る舞衣目掛けて、水をぶっかける。

「きゃっ！ その調子だよ！ それっ！」

「ふっ！ そういう遊びなんだ……よし、お返しだ！」

そのまま流されながら、水の掛け合いがしばらく続いた。

彼は、彼女のおかげですっかり気持ちの切り替えができたのであった。そして、初めて遊びというものを少しずつ楽しめた。

幕間：プールでの遊び（後篇）

「ちよつとはしやぎ過ぎちやつた。……久々だな、こういうの」

「それは良かったですね。都くんも楽しんでいるようでよかったです」

二週ほど回った二人は、一旦プールから上がって休憩する。

二人は屋内施設にある休憩スペースに腰を下ろす。

「……そういや、もう昼か。昼食どうします？」

「あつ、それなら私作ってきましたよ。」

ここに来る前に一旦更衣室に立ち寄り、荷物を一部取り出してきた彼女。

その中から、二つのお弁当サイズの袋がテーブルに置かれる。

「舞衣ちゃんのお弁当か……久々食べてないなあ。」

「そういえば、御前試合以後はずっと都くんが食事を担当しているだね。……ちようどいい機会だし、都くんに久々の手料理を食べさせてあげる。」

微笑んでいながら、彼女はお弁当箱を袋から取り出し、都の前に開く。

中身は牛そぼろご飯（#基本は牛丼）と諸々のおかずであった。外見も非常に良い。

「見た目はなかなかいいな。」

「都くんにまだまだただけ……。どうぞ、食べてみてください」

「じゃあ、折角なので……。いただきます」

箸を弁当のおかずにつまむ彼。

「……やっぱりうまい！流石、舞衣ちゃん！」

「ふふっ……都くんはいつも私の料理を美味しい美味しいと言っていましたわね。」

「だって美味しいもん！」

「可奈美ちゃんみたいな感想になっちゃったわね。」

くすくすと笑い、舞衣が美味しそうに食べている都くんを見て、手料理をここに連れて来たことを良かったと思う。

「舞衣の料理の前だけに俺は可奈美と同じ素直になるのよ？いつも

の和食もありがとう。」

「どういたしまして。さて、私もいただきますか」
彼女も、箸を口へ運ぶ。

「うんく〜！これくらい的美味しさがあれば、将来はいい嫁さんになれそうだね。舞衣ちゃんは」

「…ごっほ、ごっほ！」

しかし、三口をした後、舞衣は早速都の無自覚の危険な発言で咳き込んだ。

「だっ、大丈夫!?!」

「…へっ、平気。ちょっと咽せただけですから」

彼に自分が平気だと伝え、舞衣の顔はちよつと赤くなってきた。これもこの人のせいだ。

いい嫁さんだなんて…それってつまり自分はもう彼の嫁になれるということなの？いやいや、彼のことだから、きつとそちらの意がないと思う。

胸の鼓動がドキドキしながら、舞衣はその発想をなるべく脳内から消したい。何にせ、彼の鈍感さは長い付き合いの彼女がよくわかつている。

彼はいつも無意識にそうやって、自分の心をドキドキさせてた。

「……本当にずるいよ。都くん」

「え……？なに？」

「ううん、なんでもない！」

その後、二人は楽しい昼食時間を過ごした。



午後、昼食の後、少し休んだら、都たちはまだ遊んでない施設に回す。

そして、最後はウォーターライダーという施設の前に足止めた。

「……舞衣ちゃんはどっちの方がいい？」

ウォーターライダーの使用説明を読み終わった都は舞衣に聞く。この施設は水の流れの滑り台。遊ぶ方法は滑り台と同じですが……これの方はどうやら二人で滑られるゆえ、遊びの初心者たる都はまず舞衣の意見を聞きたい。

「えっと……都くんはどっちの方がいいですか？」

「俺は……後ろでいい」

「なら、私は前ね。」

速やかにお互いの位置を決めた。そして両方は共に少し安心した顔。

これでお互いが触れ合わずに済む。流石に水着姿がやばいわね。肌と直接接触する面積が多く、特に彼としては舞衣の胸との接触を避けたい。

あれの柔らかさを何回食らった都がわかる。その柔らかさの下に理性を保つのが辛かった。

また彼女も同じ彼と触れ合うと、心臓が爆発くらいにドキドキするから、それを避けてもらいたい。

お互いのことを妙に意識しちゃう男女。この二人はまだお互いの思いを知ることがしなかった。

そして、いよいよ順番が回ってきたので、ライダーの係員が二人に声をかける。

「お待ちせしました！お二人ですか？」

「はい。」

「それでは、滑る姿勢をとってください」

「よっこいしょ、っと。」

先に入り口に座る彼女。

「これで……よし。」

その後ろに彼は座る。

そうしたら、係員は親切な顔で近づく。

「彼氏さん！申し訳ないけど、彼女さんの体を後ろから抱き締めてもらえませんか？なるべくしつかりお願いします。」

ビキニ姿の彼女を眺めつつ、彼女の頭を優しく撫でる。

「……気持ちいい。」

「そのまま寝てもいいのよ？俺は舞衣ちゃんと一緒なら、どこでも楽しい。こうして貴女のそばにいるだけで俺は満足ですから」

「またそう言つて……都くんは本当に楽しいですか？」

「うん、楽しいよ。舞衣ちゃんは遊びの楽しさを教えてくれた。だから楽しいのです。」

「……それは良かった。ふわあ〜……」

そこで疲れ過ぎであくびをしていた舞衣。

「どうやらそろそろ寝る時間のようなだね。遠慮なく俺の膝で寝てください」

「うん……／＼／＼／＼／＼」

答えた後、彼女の顔が再び赤くなってきた。が、彼に背を向けるような形で横に転がるだから、彼から彼女の顔が見えない。

「そうだ。寝る前に質問してもいい？」

「うん？なに？」

「都くんは私のことをどう見てるんですか？その……やっぱり友達なのか？それともただの妹友？」

「えっと……どうしたの、急に。」

彼女から唐突の質問に少し困っている都。

「聞きたいの……私のことをどう思っているの？都くん」

しかし、舞衣はどうかやらこの質問攻めを諦めないようだ。

「大切な……宝物なのよ。俺にとって舞衣ちゃんはキラキラしている宝石で輝いている素晴らしい女の子だと思う……だから、何かあっても守ってあげたいの／＼／＼」

「そう……／＼／＼」

彼から答えをもらえた舞衣は胸が凄くドキドキしていた。そして凄く嬉しかった。

(やっぱり、都くんに対するこの鼓動は本物なんだね……)

眠気が来て横になっていた舞衣は、ずっと踊っている胸の鼓動を気にしていた。

彼のそばにいと、この鼓動が止まらない。彼に優しくされると、嬉しいと幸せの気持ちも止まらなくなっちゃう。

だが、この想いは彼に容易く届かない。なぜなら、彼はいかにも恋愛に関心せず、鈍感の人なんだから。

加えて彼は自分のことも好きかどうかも分からない。だから、彼が自分のことを好きになれるようになりたい。

そうなる前に、この想いはまだ彼に伝えるわけにはいかない。



「……このままでいいのかな。」

眠った彼女を眺めつつ、都はブツブツとそう呟く。

舞衣への好きという感情を気付いた後、都はずっと彼女との距離をどう取るか悩んでいた。

自分は彼女の特別の異性だと知った。けど、軽くこの特別を利用して彼女に手を出すわけには行かない。

前も言ってたように、自分は彼女に似合わない。

柳瀬グループのご令嬢にして、精鋭刀使の一人。文武両道、非常に家庭的、人当たりも良く非常に温厚な娘。

自分と彼女は既に別の世界に住む人間なんだ。……ううん、多分これは言い訳なのかも。

彼女のが好きなんだから、大切にしていたからこそ自分が彼女に幸せできるかどうか迷っちゃう。

だから自分は、より優れる男はきつとこの世ではたくさんにいると信じていた。

彼女に本物の幸せを与えられる者はきつとこの世の何処かに存在しているはず。

自分は輝く彼女と絶対に似合わない。

(だが、やっぱり心の何処かで納得できない……)

彼女が誰かと付き合う光景を想像したら、吐きそうほどに嫌だった。

「…どうしたいんだろうな、俺の心は」

まだ恋の道から正しい答えを見つからない都是舞衣が眠い間にずっと彼女との関係をどう取るか悩む。

◇

その後、帰り時間になり。

着換えた後、舞衣の要求で彼女と少し寄り道をしていた。

「これ、かわいいわね。」

ある店の前に、舞衣は首のアクセサリをじっと見つめた。

「欲しいのか?」

「ううん、……欲しいって言ったら、都くんは絶対買ってくれるでしょう?そんなのあまり好きじゃないです。」

「可奈美のように甘えてもいいのよ?俺って結構稼いでいるから」

「だから余計に都くんの金を使わないの。もっと自分のためにその金を使って欲しい。」

笑顔しながら、彼女はすぐ店のガラスから離れた。

「別に変な気を使わなくてもいいのよ。どうせ金はほとんど生活費のため使うものだから」

「それでも『め』です!都くんはいつも自分のことを後回しにしたから、私と可奈美ちゃんはいつも心配してたのよ!」

「それは悪かった……。お前たちに心配をかけた。」

「そこはじっくり反省してくださいね。私はみんなと都くんが幸せになって欲しいのです……。いつも頑張っている都くんはその資格があると思うよ。」

「資格か……」

そう呟いて、都是自分が既に幸せだったと思う。だって自分には多くの縁と結びつけた。

どれも大事な縁であり、彼女といるだけでとても幸せなんです。

これ以上の贅沢の幸せは求めません。例えこの恋が実現できなくても現状だけで満足ですから。

「都くん、どうしたの？ぼっとしてて」

「ううん、なんでもない。」

そう、今のままでいい。あまり贅沢しすぎると、何かを失うから。

その後、少し寄り道したら二人は帰る方にした。

そして美濃関に帰るまで、二人は手を繋いだまま、暫しのデートを楽しめた。

幕間：騒ぎ出す恋心（エレン編）

――特別希少金属利用研究所――

「いや〜いいデータを取れたよ。ありがとう、都くん。君のおかげでS装備の進捗はますます進んだよ。」

エレンのパパ。古波蔵公威がテストを終え、S装備を解除した都に褒める。

彼は孝則の依頼によつて、偶にここでの手伝いをする。

第一は忙しい孝則に代わつてここを視察。第二は彼が不完全の男性刀使であるゆえ、非常に研究価値がある。

それどころか、本人も美濃関学長とフリードマンにいい評価ももらったことで公威も彼という人材を欲しかった。

何より、娘さんのエレンも彼のことを高く買った。あの襲撃事件以降、滅多に異性の話を盛り上がるエレンはとても楽しそうで、一人のパパとしては嬉しいもんだ。

「そんなことないですよ。俺はただS装備を着るだけなんだ。別に褒められるほどのことをしていない。」

「いやいや、ただS装備が君のような特殊刀使に反応があるかどうか確認しただけで充分研究価値があるんだよ。」

「そうでしょうか？」

「ええ、君からもらつてきた実験データからすると、S装備の効率は普通の刀使より低いですが……新たな可能性が見つかるかもしれません。」

「可能性？」

「ええ、君が元々一般人だ。だがある原因によつて本来ありえないことが君の体に起きた。それは君自身が御刀の力を得て、刀使になったことだ。でもその力はまだ完全ではないと観測してきた……非常に不思議の現象だ。」

公威が自分に関する現象を説明したところ、都も自分が何度も体験してきた現象を思いついた。

自分が三回の死を体験した。本来普通の人間では死亡が人生一回しかないけれど、都は三回ほど体験してきた。

しかも、体験した直後、身体の致命的な損傷が綺麗に消え去った。もちろんタギツヒメと決戦する時は、傷口がまた残っているんだけど……それでもぎりぎり戦える状態に戻った。

それと、刀使の力を覚醒したばかりなのに、自分はすぐ写しと迅移の応用を覚えてた。この感覚はまるで身体自体がこの力を最低辺程度を馴染んでいたようだ。

一体自分の身体が何か起きたのだから……。

「もしそれが解明できれば、刀使だけではなく一般人もS装備を適用になるかもしれません。そのため僕とこの施設の研究者たちは力尽くで君を研究対象として実験するよ。もちろん、君の自由意思を尊重する」

「ありがとうございます。古波蔵さん。」

「いえいえ、お礼を言いたいのは僕ですよ。君が来たことで色んな研究も大部進んできました。妻とエレンも君がここにいることを凄く喜んでるよ。」

「あの母娘か……ちなみに、エレンさんの個性は母親の方の遺伝が多かったんですか？」

「ええ、…よく周りの人たちに言われるのよ。妻の方に似ているって」

苦笑する公威。確かに父親の影があまり娘のエレンさんから見かけなかった。

にしてもあんな母親があつたから、娘も同じなのか……道理で俺のことを凄く歓迎しているようだ。

「ハーイー・ミヤミヤ！お疲れ様デース！」

「おうふうっ!?!」

そんな時、噂の娘が入室した。そして、僅か数秒ほどの時間で都に突っ込んでいて抱きつく。

「むふふっ、ミヤミヤは相変わらず抱き心地良いデスネ！」

「エレンさん！急に抱くなよ！あ、あたってらるだろか!!／／／／／

「／」
恥ずかしながら、都はすぐでも自分に押し付けた彼女を離させた
い。

彼女の胸は舞衣より大きくて柔らかい。加えて身体もいい匂いが
してきて、理性としてはやばい！

「慌てるミヤマミヤも可愛いデスネ。」

「からかうではない！エレンさん！！／／／／／」

「エレンさん」ではなく、もっと親しくエレンで呼んでクダサイ
！

「なんですか!!そんなのできるわけねだろ!それに公威さんも見て
いるよ!／／／／／」

「あはは、僕のことを気にしないで欲しい。無視してもいいぞ。」
なんて満開の笑顔で娘が他の男とイチヤするのを認めるのよ!早
く止めろよ!お父さんでしよう!?

「それともミヤマミヤはワタシのこと嫌いデスか?」

「……べ、別に嫌いではないけど。ただ親しく呼ぶのはちよつと……」

「でもヒヨヨンとサヤのことを親しく呼んだよね?なんてワタシに
そう呼んでくれないの?」

「それは……………んんああ!!わ、わかった。呼ぶよ……………え、

エレン／／／／／

「oh……………なんか思ったより恥ずかしいデース／／／／／」

「こっちのセリフだ!／／／／／」

彼に名前を直接呼ばれたせいなのか、エレンも滅多に平常心を失
い、照れ始めた。

普段は名前呼ばれても、彼女がそんなに動揺しないはずなのに……
彼女も多少都のことを異性だと認識している。

「思ったより親しいですね……」

そして二人の交流に公威は呆れた。何にせエレンが異性の前に失
態を現すなんて一度もなかった。

◇

「え、えつと……ゴホン、パパ。彼を借りてもいいデスか？」
それから、少し両方が落ち着いて離れるところ、エレンは公威にそ
う尋ねた。

「別にいいけど、どうしたの？」

「実は紗南センセイから連絡があつて、ワタシとミヤミヤは急ぎに
本部に戻らないと」

「なるほど、こちらも、後は確認作業くらいなものだから。安心して
彼を連れてもいいですよ。」

「うん。ミヤミヤ、早く行きましょう！」

「あつ、ああ。すぐ行く！」

エレンに返事して、彼女のあとに部屋から出る時、不意に声をかけ
られた。

「そうだ。出る前に、いくつか聞きたいことがある」

「もしかして、エレンさんのこと？」

「まあ…、そうだろうね。」

少し迷うところが公威の顔から見えた。もしかして意外に重い話
題？

「都くんはエレンのこと、どう思っているの？仲間方面ではなく、一
人の男として」

「……そうだね。元気で、明るくて、勝手に人懐く、心優しいかわい
い女の子かな？一人の男として彼女はとても素晴らしい女の子と
思っている。」

「そうか……」

都からエレンを素晴らしい女性だと褒めた口を聞いて、公威は
ちよつとだけ嬉しかった。

エレンの良さをよく知る人間は少なかつたからだ。古波蔵エレン
は我慢強い、例え親の前でも我慢を言わないとてもいい娘である。

だから彼女を理解するやつは少なかつた。

「それと、彼女はかなり我慢強い子なんだから、ちよつと放っておけ
なくて」

「……………よくエレンのことを見ているんだね。君は」

「まあ、人間観察は得意なんで。それに色々似ているんだ、俺たちあの里の祭りから、都はエレンがそういう人間だと察した。ですの
で、彼女のこととも一生懸命助けたいと思ってた。

「……………そう。都くん、私たちが傍に居られない間、エレンのことを頼めるか？」

真顔で都に娘のことを頼ませた公威。その目は都も孝則さんから何度も見ていた。

「言われなくても、彼女のことを任せろ。その代わりにちゃんと後ろで彼女たちをサポートしろよ。刀使なんだけど、背後から支える人が必要なんだから」

彼はそう言い終えると、部屋から離れてエレンの下へと向かった。
「……………思った以上凄い若者ですね。僕も彼に負けないよう、早く自分の役目を果たさないとだね。」

そして、部屋に残された公威は都の刺激によってまた研究に戻った。



―東京都千代田区 秋葉原―

「まさかの宣伝任務か……………」

「イエス！ 鎌倉特別危険廃棄物漏出問題発生以降、世間が刀使たちへの信用が下がってしまいましたゆえ、管理局は積極的に刀使の宣伝仕事を受けることが始まりマシタ！」

わざわざ愛知県から東京に飛んできた都とエレンはこのいつも賑やかなの街で観光しながら、任務の目的地に向かう。

本部から受けた仕事は刀使の宣伝。鎌倉特別危険廃棄物漏出問題

以降、世間が刀使への信頼が下げてしまいました。

それを改善するため、エレンの言うとおりに管理局は人々に刀使のこともっと知ってもらえる宣伝仕事を受けることになりました。

そして、エレンはその宣伝対象として選ばれた。

「そうか。お前ら刀使は大変だね……」

「そう言うけど、ミヤミヤも大変そうじゃないデスカ？美濃関でずっとみんなの剣術指導と指揮役を回しましたとマイマイから聞きマシタ」

「舞衣ちゃんが……まあ、あれくらいは普通よ。お前たちの力にもつとなれますように、後方にいる俺はそれくらいしかできないですよ。」

「そんなことないデスヨ。むしろミヤミヤがやりすぎたと思いきス！だって、ミヤミヤは後方で見守るではなく前線まで行って何度もワタシたちの力になりました。」

「あれは、当然のことさ。お前たちの助けになれるため、俺は何度も……」

「……お人好しデスネ。でも、そんなミヤミヤは素敵だと思いきスよ」

彼のその腕は、ギューツとエレンに締められる。

「エレン!?!」

そして当たり前のような恥ずかしい反応をする彼。

「えへへ、実は紗南センセイから任務中にミヤミヤに甘えてもいいと言ってもらいました。ちようどまた時間がありますし、このまま恋人ふりでデートしましょう♡」

「デ、デート!?!／／／／／」

「ハイ！それでもワタシと嫌デスカ？」

いたずらの顔でわざと腕をぎゅくと抱きつくエレン。

「いや、別に嫌いではないけど……／／／／／ただ、エレンが俺の彼女だと勘違いされる恐れが」

「ミヤミヤなら構いマセンヨ／／／／／」

「え……っ?」

「ううん、なんでもない！さあ、行きましょう！ダーリン♡」
「おい……！ちよつ……!? エレン！」

さっきの発言を誤魔化しているように、彼を強引に引っ張るエレン。

（やっぱりダメですネ。ミヤミヤはマイマイとカナミンとヒヨコンの者だから。仮デスが、彼の彼女になることを喜んでいる自分はダメですネ。）

そして、僅か彼の恋人に誤解されることに抵抗がない自分は反省しながら彼とデートすることにした。



ー某アニメグッズ取扱店ー

「うわ〜っ！凄いい！俺がずっと探してたグッズが沢山ある！」

「ミヤミヤは意外にそういうの好きなんですネ」

グッズの取扱店の中に入った都とエレン。一人はさつきと違う反応で興奮しそうにグッズを一つ一つ鑑賞する。もう一人は彼が楽しそうな様子を見て微笑む。

彼も子供みたいにかわいい一面もあるだと改めて認識していた。

「うん！だって、ずっと好きだもん！小さい頃から剣術以外にも好きな作品もたくさんあるから」

「そんなんデスカ」

「ちなみに、エレンは好きな作品がありますか？」

「うーん。ワタシの趣味では薰と同じですから、スーパー戦隊ですかネ？ちよつと古い過ぎたけど……」

「ううん、そんなことはない。古い作品だけど、今でも人気がある良い作品だと思う！」

「本当デスカ!? 薫は昔からヒーローが好きなの子なんデスカから、自分も薫と仲良くするため、見ていたら、完全にハマっちゃいマシタ！」

「そういう経歴があつたんだ……薫さんがヒーローが好きなんだ。」

「ハイ！ワタシと薫もそれが大好きデース！」

「楽しそうに彼に趣味を話す彼女。」

やっぱり好きなものが同じだった場合、話し合おうと楽しくなるわね。

しかし、薫はヒーローに憧れるんだ……これも彼女が刀使になるきっかけなのかもしれません。

「それじゃ、一緒にヒーロー戦隊のグッズを探しましょう！例えば古くても人気があるならば、きつと何処かに眠っているはず！」

「ハイ！」

彼に応じて、お互いは目当てのものを探す。

そして、間もなく二人が深いところから眠ったグッズを見つけ出し、買いました。

しかし、偶然なのかもしれませんが……二人が見つけたのは、ちょうど店内に唯一残してお揃いのヒーローグッズだった。



一ヶ所目の買い物を終え、路地を歩く二人。

「……気付かないうちに、たくさん買っちゃいますわね……。まあ、後悔しないけど。」

予想以上に買い物にお金を使っちゃった彼。右手にはグッズが入れた紙袋がいた。

「ふふっ、ミヤミヤは本当にグッズが好きなんデスネ。」

そして彼の左手はクスクス笑っているエレンに親しく組まれて、柔らかい胸の感触が半端なく感じ取れた。

(改めて見ると、エレンが笑っているところはすごく可愛いだな……まあ、外見は美人でスタイルも抜群の美少女だし。)

そんな美少女とデートをするのは、やはり周りの視線が凄い。

何より心が辛い。だって、彼女にはもっと相応しい相手がいるはず。

なのに、友達の俺にこんな親しく接触してくれているとは……少し異性と距離を考えて欲しい。

「そういえば、エレンは……俺以外の男の人に腕を組んだことがある?」

「……え? そう言われると、なかった気がしマスネ。ミヤミヤは初めての相手なんデス」

ふと思う質問なんですが……返ってきたのはかなり恥ずかしい答えなんだね。

「アメリカにもそんな相手がないの? 開放感がすごい国家だと思うけど」

「うーん、いないと思うけど……どうして突然そんな質問に?」

「……何となくかな? エレンは凄くいい女の子なんで、もっと自分を大切にして欲しいと願いたいんだ。ほら、相手は悪いやつだったらまずいじゃん?」

「心配してくれたの?」

「それは心配よ! エレンは俺の大切な友達なんだから!」

「そう……// // //」

ちよつと顔が赤くなってきたエレン。

彼に心配されたこと、大切されたことに凄く嬉しくて胸がドキドキしている。

「なら、ミヤミヤ以外の相手をしないようにする// //」

「いや、未来の彼氏さんにしろよ! いつかエレンにも素敵な殿方に会えるよ!」

「もし……出会わなかったら?」

「きつと出会える。エレンの魅力はこんなに溢れていることは、俺がよく知っているから」

「……………／／／／／」

問題なのは、そんな相手はちゃんとエレンのこと好きかどうかの話。もし相手はただエレンの身体を狙うなら、あ奴は決して許さん。こんなに素敵な女の子なんだから、もっと大切にしないと駄目だ。

「なんか……………ミヤミヤは時にずるいデスネ／／／／」

「ん？何か？」

「なんでもないデース。」

◇

――某メイド喫茶店――

秋葉原といえばメイド喫茶。故に二人はグッズを買った後、そこに立ち寄った。

しかし、これにはキチンとした理由がある。間もなく日本が学園祭という時期を迎えられる、例え五箇伝でも普通の学校のようにそういう行事があるため（特に美濃関は自由とした男女学校であり、他の五箇伝よりそういうイベントが重視している）、各クラスはそれぞれのテーマで店を経営しなければなりません。

でも刀使の学校だから、今までは刀や刀使と関わるテーマだったが……今年は鎌倉特別廃棄物漏出問題の件があり、管理局は刀使の柔らかいイメージを人々に宣伝するため、刀の展覧や立ち合いだけではなく、メイド喫茶、お化け屋敷などを関東以外の五箇伝に自由をやらせた。

そして、ふたばから彼女のクラスがメイド喫茶をやると聞いた。ちようにいい機会なので、後輩の代わりに現地調査をする。

エレンもどうやら日本のメイド文化に興味があるから、そのまま入店した。

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様。お席はこちらです」
二人が入店すると、すぐかわいいメイドが近づいていて、二人を席に連れていく。

そして、どうやら腕が抱かれたところでカップルだと勘違いされた二人は同じ席に案内された。

「これが噂のメイド デスカ？なんか新鮮ですネ」

「わからん。俺も初体験なので……」

「ミヤミヤはメイドに興味がないデスカ？ワタシはグランパから日本のオタクはメイドが大好きだと聞きマシタ。」

「まあ……俺はそういうオタクじゃないけどね。それと、孫娘に何を教え込んだ。フリードマンさん」

そもそも俺はシスコンだ。妹属性以外や気になる子と好きな対象以外に興味がない。

「ご主人様、お嬢様二人方ご注文は？」

「お薦めはなんデスカ？」

「お勧めなら、この一日メイド体験イベントがお勧めですよ！メイド姿で彼氏をご奉仕するこの店の特別イベントなのです！」

「いや、俺たちは恋人では……」

「ワタシは参加しマース！」

「エレン!?!」

彼女が唐突の参加意願にびっくりした彼。

「わかりました。それではお嬢様はこちらへどうぞ」

「ハイ！ミヤミヤ、ここでしばらく待ってクダサイネ！」

「いやいや、なんて参加するのですか!?!」

「なんてって……それは面白いから！日本の文化はもっと知りたいデースー！」

「そうか……じゃ、行つてらしゃい。」

「ハイ！」

彼女らしい返答に少し安堵の反応をする都。

彼女はそういう人なんだから、一緒にいると楽しかった。この度は任務なんだか、彼女とこうして遊ぶのも悪くない。

「それではご主人様、少々お待ちください」

そして、エレンがメイドに何処かへ連れられた。

「さて、待つ間に任務の時間を確認しよう。ついでに現場にいるフリードマンさんに事情を話しますか」

今回の宣伝任務はただの刀使の宣伝だけではなく、ノロの処置方法も宣伝するのが仕事のうち。

これによると、人々はもつと刀使の仕事や管理局の仕事を知られることになります。

まさに、一石二鳥の企画。

そして、一応スマホでフリードマンに今の現状を説明したら「ゆっくり我が孫娘とのデートを楽してたまえ」と変な返信が返って来ました。

だから、デートじゃないのよ……。

数分後、フリードマンに数回の解釈をメールで送ったら、突然背後から声かけられた。

「ダーリン！お待たせ！」

「おう！やっと着替えられ……」

声の方向に向くと、そちらに居るのはメイド姿のエレンだった。

「どうデスか？似合う……でしょうか？／／／／／／／／／／」

少し恥ずかしい顔をしているエレン。彼女の身に纏ったのは黒、白色をデザインをしたメイド服だ。

これはいわゆる正統の西洋メイド服ですが……元々彼女は金髪巨乳美少女なので、ある豊かな部分はともかく、全体的にとっても可愛く見える。

加えて彼女が恥ずかしい顔をしているところは最高だった。

「………と、とても似合う／／／／／／／／／／」

「本当に……似合うデスか？」

「ああ……／／／／／／／／」

「えへへ、嬉しいデース／／／／／／／／」

普段の彼女と違って、大人しく勝手にこっちの方に突っ込むことがない彼女。まるで本物のメイドが目の前にみたい。

照れているところも凄く可愛くて、こんな可愛い姿を自分に独り占めしてもいいのでしょうか？という考え方もした。

「ご主人様、こちらはオムライスです。お金はメイド体験コースから取りますから、心配しないでください」

さっきのメイドが注文していないはずのオムライスを机の上に置くと、エレンにケチャップを渡す。

「さあ、古波蔵さん。さっき教えたのをご主人様に示しましょう。」
「本当にやるのデスか？」

「ええ、これは日本のメイド文化なんです。どうぞ、ご主人様に自分の思いを伝えなさい」

「わ、わかりマシタ」

何か勇気を絞られた顔をしているエレンはケチャップでオムライスの上に文字を書き始めた。

「irreplaceable friend」……日本語だとすれば、替えようがない友達という意味。

正直、嬉しいよ。俺のことをそう思ってくれたのね、エレン。

「で、出来上がり。ダーリン……my mindうまく伝えたのでしょうか？」

「ああ……嬉しいよ。ありがとう、エレン。お前の気持ちは大切にいただけるよ。」

「うん……／／／／。でも、いただくのはちよつと待つて欲しいデース。」

「ん？」

深呼吸し、エレンはどうやら羞恥心を抑えて自分の隣に座った。手に持っているのはスプーン。

「この展開はまさか……」

「ダーリン、あ〜んしてクダサイ」
「やっぱりか……」

「エレン、そこまで無理しなくてもいいのよ。さっきの気持ちだけで俺はすごく嬉しいだから」

「無理してないデース。ワタシはミヤミヤにデートで楽しめさせた

いとこうしたんのデース。いつも美濃関で忙しいアナタに少しでも心を軽くさせたいと……それとも、ミヤミヤに迷惑をかけたのでしようか?」

そう言いつつ、杞憂の顔をになったエレン。

自分では彼に迷惑をかけたのかなと心配する彼女。

彼との面識が長くないため、彼の好みや嫌なことはあまり知らない。

こうやって甘えてもいいのかな? 彼を楽しませるのかな? 彼女は彼の腕を組んで一緒に歩く時、ずっとそう心配していた。

彼は唯一の異性友人であり、エレンは実際彼とどう正しく接触するのもわからない。

「あむっ」

「あ……」

そんな時、彼は一口でエレンが盛っていたライスを食べた。

「迷惑なんてない。エレンのような可愛い彼女とデートするのは幸福なことだと思うから、余計な心配は捨てろ」

「ミヤミヤ……／＼／＼」

彼の手がエレンの頭において、なでなでする。

「エレンがやりたいことをやってもいい。俺は暫くエレンの彼氏なんだから、どんどん彼氏に甘えてもいいのよ。それと、エレンの不安を気付かず済まなかった。」

「ううん、ワタシの方こそミヤミヤの意願を確認できずにアナタを引っ張って……」

「良いのよ。結構楽しかったし、それにそういうエレンが魅力すぎて好きなんですよ。」

「…………!／＼／＼／＼／＼」

「さあ、続きをしようか。俺はまたエレンにあく／＼んされたいしね。」

「…………ああ……うん／＼／＼／＼／＼」

さつきより顔が赤くなったエレンは軽い反応をして、さつきのを続いた。

（なんか……胸はさつきよりバクバクしている気がシマス／＼／＼）
彼の無自覚のずるい言葉で普段よりドキドキしている彼女。

「なんだ……このカップルは」

そして、ずっと傍観していたメイドはこのような可愛らしい暖かい光景に呆れつつ、ご馳走された気分になった。

◇

―神田神社―

東京都千代田区外神田二丁目に鎮座する神社。

震災や戦災も乗り越えたこの神社は、大黒様や恵比寿様、更には平将門を祀っており、商売繁盛を願ってここを参拝する経営者も多い。近年では、アニメを中心としたサブカルチャーや、日本の伝統文化の発信地として精力的な活動を行っている。

そして、今日はここで管理局の特殊イベントがあつて、都とエレンは一緒にここに来たが……。

すぐイベントの開催準備で忙しく回された。が、現場のスタッフと管理局の人たちの協力下で何とかこのイベントを無事に終わらせた。

主演のエレンの明るさも現場の大人と子供たちに安心感と笑顔をもたらした。やつぱり彼女も立派の刀使なんだな……と思う。

人々に安心させ、希望を与える神聖な巫女さん。それが刀使。俺たちのような無力な人間にとっては、輝く希望なんだ。

そんな立派な彼女を支えるため、これからはもつと頑張ろうと、エレンの笑顔を見ながら、そう決めた。

そして撤収準備をするところ、フリードマンさんはなぜか俺とエレンに二人きりの時間を与えた。

そこで俺とエレンはせっかくなので、ここで参拝することに決め

た。

一応神社は巫女たちと縁がある場所だから。

「ミヤミヤは何かを祈ったのデスか？」

「みんなの健康と安全を祈ります。それと、可奈美がうまく学校から卒業できるように……」

「ミヤミヤはいつもカナミンのことを思っていますネ。少し羨ましいデス」

「大切な妹なんだから。そういえば、エレンは？」

「秘密デスヨ。願いが口に出したら、無効になりますので」

「……早く言えや。可奈美が留年したら、まずいですよ。」

彼女は中学に進学しても、成績も相変わらず心配させるほどやばかった……。

お兄ちゃんとしては、何とか彼女を無事に卒業したい。

そして、二人は賽銭箱に金を投げ込んで参拝し終えた後、おみくじや御守りなどを売る場所へ移る。

「ミヤミヤはおみくじを引かないのデスか？」

「そういう運試しに興味がないから、俺は御守りだけを買うよ。」

「うーん、ミヤミヤとおみくじで運試しをしたかったな。」

残念そう思う彼女はおみくじの方へ引く、都は効果がいい御守りを選ぶ。

「これでよし！エレン、そっちはどうだった？」

健康、安全、学業の御守りを全部六人分を買う都。彼としてはみんなの健康と安全が第一なんだから。

特に荒魂出現が頻繁になった今は、もっと自分の安全を注意しないと。

ちなみに学業のは可奈美の一人分だ。六人の中で彼女の成績が一番危ない。

そして、彼はエレンの方に向かうが……彼女が開いたおみくじを持ったまま固まった。

「どうした？エレン？」

「な、なんでもないデース!!!
／／／／／／／／／／

都が近づくと、彼女が慌てておみくじを隠す。

「……………顔が赤いぞ？本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫デスツ!!心配しないでクダサイ!! // // // //」

「少し怪しいですが……………まあ、いいか」

「うん、ありがとう、ミヤミヤ // // // //」

慌てている彼女が大丈夫と言う以上、追及をやめよ。

にしても、おみくじの内容は少し気になるな……………彼女があそこまで慌てるなんて。

「それより、そろそろ帰るとしようか？美結と詩織の下校時間も近いですし。」

「……………あ、うん。そうだね、帰りましょうか // // // //」

「お、おう。」

やっぱりエレンの反応が気になるな……………。

こうして一日の秋葉原のデート及び仕事が終わえ、二人は電車に乗って美濃関の方へ帰った。

しかし、その途中にエレンはわざと彼と距離を取ること。



——美濃関学生寮——

一時滞在用の部屋の中にエレンはお風呂の後、すぐベットの上に倒れた。

一日の疲れが身体に溜まったからな。

「疲れマシタ……………」

ベットに身を伏せ、彼女は一刻も動きたくない。今日は身体だけではなく、心理にも凄く疲れた。

特に今日一日中、心臓がずっとバクバクしていて、頭も思考できないほど熱い。

自分が今日どうしたんだろうと思ってたら、無意識あの人の顔が脳内に浮かぶ。

「なんか……マイマイたちの気持ちがあった気がシマス」

彼の無意識の優しさと甘い言葉はあまりにも危険すぎた。女の子にそんなこと言ったから、彼に好意を抱く女の子はこんなに増えていた。

今は知る限り、また三人がいるんですが……彼が自分たちと再会する前に各地で刀使たちを指揮していた。

どんな子が彼に好意を抱くのもわからない。

そして、自分もまた危うく彼に落とされそうな人だった。

「おみくじを引かなければ良かったのデース……これのせいで、余計にミヤマヤのことを意識しちゃう。」

おみくじの結果を思い返す。

自分が引いたのは『大吉』。とても幸運なことだ。

そして待人は『待人まちびとがすぐ側に』。多分自分の待ち人は薫だろう。

だって彼女は一番大切な親友だもん。

最後一番気になる恋愛は『恋愛意識したくない人はあなたの支えになる』だと書いてあります。

そういう相手は知り合いの中ではほぼ存在しないけど……心当たりがある。

「ううん、ワタシと彼はただの友達。ただ彼は素敵すぎるんだから。」

顔を枕に埋めて、エレンは自己説得する。

いくら彼は素敵な彼氏さん（#偽だけと）なんだけど、自分の恋愛対象にはならない。

だって、彼は既に相応しい相手がそばにいたから。自分が介入する間がない。

それでもこの胸の鼓動は素直だった。

「ん……？」

そんな時、彼女の携帯がメールの着信が来た。読むと、その人からのメールだ。

『今日は楽しかった。明日も頑張ろうな。』

「……………まったく、こちらもだよ。ミヤミヤ」

エレンは彼の他意がない着信に少し気分が良くなってきた。

自分が彼に対する思いがどう変わっても、彼は今までのように自分を接するのだろう。

本当、カナミンたちに羨ましいデース。

そう思いつつ、エレンは微笑しながら、そのまま意識が夢の中に落ちてた。

第39話：群馬の任務

薫が群馬県に出動された前、刀剣類管理局下の作戦指揮本部にて。

「荒魂討伐任務終了したぞド畜生！じやない！本部長！！」

「誰がド畜生だ！誰が！」

荒魂討伐任務を終えた薫は、本部長の真庭紗南に報告を行う。しかし、二人の交流は相変わらず火薬がすごい。

「とにかく、ご苦労だった。では次の任務だ。」

「待て待て待て！あれから4ヶ月ほとんど休みなしで飛び回ってるんだぞー！少しは休ませろよ！」

「……次の任務だが。」

「くそっ！ここまで白々しい聞こえなかったフリは見たことがない……」

真庭本部長に無視された薫はぶつぶつと文句を言う。この間も彼女の依頼に此花寿々花を尋問しに行くところだが、成果はゼロだ。

あのノ口強奪事件に彼女は犯人が獅童真希だと思わないらしい。自分でも彼女を犯人だと思いたくない、何にせ彼女は折神紫との最終決戦の時に手を貸したから。

「お前には隊長としてチームを率いて、群馬に行ってもらおう。」

「いや、パスポート持ってないし。」

「群馬舐めんな。……まあ、現場はいわゆる秘湯ってやつがあるんだ。喜べ、早期に任務を片付けたらあそこには待望の休暇だ。」

「やっぱりド畜生野郎だな……そういう糞タレサービスはブラック企業でも採用しないんだぞ。」

「はあ？何言ったか？薫」

「なんでもありません！」

といった具合に、薫はチームを率いて群馬へと向かうこととなった。



一週間後、群馬のとある温泉旅館内ー。

「つーわけでだ、桐生副隊長。一週間は経ったものの目撃情報はあやふやで、フアインダーの反応もちっほけすぎて正確な場所を特定できなかつたため、ねねですら反応を追い切れなかつた。まさに糞タレの任務と言いたいところだが、ここの温泉旅館を使わせてもらってる以上、ちゃんと休憩……じゃなかつた。ちゃんと遊んで、荒魂を探すっていうポーズだけでも取ろうじゃねか！」

「……隊長。せめてもう少し本音を隠す努力をしてください。それと、言い直す必要がありません。」

問題発言をする薫にこのチームの副隊長の桐生は呆れつつも、そのことについてのみ注意する。

さつき彼女はどうかやらまた真庭本部長に叱られたばくで仕方なく仕事の方に戻った。

全く……なんて本部長は彼女を隊長として任命したのでしょいか。だがしかし、薫隊長の言う通り、スペクトラムフアインダーの反応が曖昧すぎて正確な場所を特定できず、目撃情報もあやふやで、目撃された荒魂の正確な場所を特定できなかつた。そのため、取れる手段は肉眼頼りの人海戦術しかなかった。こうして荒魂を発見できず一週間があという間に過ぎちやつた。

もしや、この地域は最初から荒魂がなかつたのでは？と、部隊の隊員たちも疑い始めた。士気が低落しているうちに頼れるはずの隊長はあんな調子だし……。仕方なく、桐生副隊長はだらだらの隊長の代わりにこの部隊を引き上げろと思って、まず点呼を取ろうとする。

「それでは点呼。」

「1。」

「2。」

「3。」

「4。」

副隊長である桐生の声に応え、点呼を取る隊員達。

「5。」

「6。」

「よし、全員いるな……。つて、増えてる!？」

ですが、そこで何となく隊員の数が合わず、むしろ増えたと気付いた薫は隊員たちの顔を見回すと、そこにいるのは糸見沙耶香と美濃関制服姿の衛藤 都だ。

「なんで沙耶香がここにいるんだ!?!それと、お前は都じゃねか!？」

「お久しぶりです。薫さん」

「お久しぶり〜〜じゃーねよ!なんでここで普通にいられるんだよ!四ヶ月ぶりの感動の再会を台無ししたじゃねか!」

「何言ってるの?お前」

薫の驚きとツツコミを無視する都。そこで、沙耶香は都の服を引っ張る。

「そろそろ説明したほうがいい。」

「おう、そうだね。」

沙耶香の意を理解し、なぜかそこで彼女の頭を撫でるといふ行為を取るシスコン。

そして、彼は薫たちに大声でこの部隊に配属することを説明する。

「衛藤 都と糸見沙耶香は真庭本部長の指示により、この部隊に配属することになりました。因みに、俺と沙耶香は途中偶然に会って、感動の再会を行ったせいで予定より遅く着任しました。申し訳ございません!」

「全然歉意が感じませんけど!？」

同じツツコミキャラに回す薫。ちよつと面白いな。

「衛藤隊員と糸見隊員ですね。私は副隊長を務めていた桐生と申します。以後はお見知りおきを」

「ごちらこそ、俺と沙耶香は能力の範囲内に副隊長の命令に従って働きます!」

「待て!なんて俺じゃなくて!？」

「何となく、副隊長の方は頼れるかと……」

「かぐっ!」

「賢明の人ですね。貴方と糸見隊員の期待を背けないように頑張る」

ます。」

本物の隊長を隣に置いて、二人は勝手に共識していた。因みに、薫は重傷のようだ。

「ん？どうしたの？後輩たち」

隣の視線を感じ、都は美濃関の二人の方へ向く。

「えっと、貴方は衛藤さんのお兄さん？」

「噂の刀使を倒した高等部最強のシスコンという人？」

「ええ、そうです。この度はお世話になりますから。どうぞ、よろしくお願いします。」

「は、はい！／＼／＼／＼／＼／」

笑顔で二人に向く都。そこで、彼の笑顔に照れてしまった二人の刀使。

そういえば、彼はイケメンの類にも入れる男性だと思い出した薫。

「……………」

「ん？どうしたの？沙耶香」

なぜか、沙耶香はちよつと拗ねたぼい顔で都の服を強く引っ張る（それでも大した力ではない）。

「……そろそろ、任務をしたい。」

「お、おう？そうだね。」

よほど任務がしたいのだな……。彼女の思惑をちつとも察しない都。

「薫、少し話がある。沙耶香以外の隊員にしばらく待機させてくれないか？」

「あん？なんで」

「真庭本部長のご指示です。」

そう言つて、薫はしばらく部隊の隊員たちに待機させ、都たちを人気がない部屋に連れて行った。

「早速ですが、俺は男性刀使です。」

周囲が人気がないと確認する都は単刀直入本題に入る。その話を聞いて、少し驚く反応を取る沙耶香と慌てがない薫。

「どうやら、薫さんは特に知っているみたいだ……。」

「きっかけは四ヶ月前の決戦で、俺は燕 結芽を操るタギツヒメの一部と戦って、刀使の力を覚醒した。そこで、俺の存在は新たな争いの種になり得る故、現在にはなるべく刀使の力は使えない状態で任務を遂行する身になった。」

「燕 結芽と二回やったのか……やっぱりすげえよ。お前は」
都の凄さに感服する薫。

あの最強の少女と二回ほどやり合えるなんて、例え刀使でも彼女と対戦すらもならない。

「……」

「大丈夫。新たな争いを起きないように注意する。それより、荒魂と遭遇したら、沙耶香たちに頼らせてもらうよ。」

そして彼が危険人物として見られることを心配する沙耶香に都は彼女の頭を優しく撫でながら、彼女を安心させる。

「うん……都は私が守る。」

「俺を忘れんなよ。一応俺はおめえの隊長だから、隊員を守るのは俺の役目。」

「……ありがとう、二人共。」

二人から返事をもらった都は再び彼女たちに出会うことが良かったと思う。今までの自分はただ可奈美と舞衣をメインに守るとするが、今はこの六人とお互いのことを守り合う関係になった。

この先の未来もこの六人と歩き続けるのだろうと、心の底からそう願っていた都。

「……あ、それと、薫がサボっていましたら、本部長にご報告下さいと本部長から直々の命令ですので、サボらないでくださいね。」

「何！マジ!?クソババアめ！」

そのことが都の口から聞いてた薫は再び本部長をババアと叱る。

「沙耶香も気をつけてくださいいね。」

「うん、わかった。」

「待て！沙耶香まではいかんだろう!?!」

「これもお前への対策です。」

「嘘でしょっー!!!?」
薫の悲鳴はこうして、旅館の中に響いた。

◇

「おお、ありや身の丈5mはあった。何十頭もの熊を手に掛け、その鋭い爪と牙から真つ赤な血を滴らせてなあ——」

荒魂の目撃者である、近くに住むご老人から情報を再確認する薫たち。ひとまず新入り隊員の沙耶香と都に任せた。

そして、沙耶香は老人の話を真面目……いや、無言に聞く。でも、ちゃんと聞くのだろう。

その後、情報の再確認を終えた都と沙耶香は薫の元に戻り、目撃者である老人の話しを報告していた。

「目撃者からの聞き取り完了。」

「……………それほどやべえ荒魂がいる群馬にいたとは…」

「いや、あのジジイは毎回提供した目撃情報が変わってるし、熊の死体なんて一匹も見つからない。あまり本気で受け入れ必要がないぞ。新入り」

薫の「新入り」というのは都のこと。彼は刀使になったばかりに刀使としての経験がまだまだ。荒魂に関する認識は普通の人間レベル。

「わかりました。これからはどうしましょうか？スペクトラムファインダーより頼れるねねも荒魂の気配を感じないと聞きました。」

「スペクトラムファインダーを信じていないですね。衛藤隊員は」

少し都の軽い発言に不満する桐生副隊長。しかし、彼はただ一言「舞草が襲撃された時に、これのせいで、何人の刀使は荒魂として見られて、銃で撃たれた」を言っつて、桐生副隊長を黙らせた。

都はまたあの時のことを気にしていた。同じ人間なのに、化物として見られて、無情に攻撃された。そのことは決して忘れません。

それを同じ体験した沙耶香と薫も特に何も言えない。何にせ、彼女たちも当初その気持ちだ。

「とにかく、これからはどうするのかを考えましょう……あまりスペクトラムファインダーを頼りたくないけどね。」

ひとまず、捜査の話に戻る。

「……目撃地点に法則性が感じられない以上は搜索範囲を広げる」

「しかし、あまり広げすぎると、逆に穴が大きくなりすぎませんか？」

「私が捜査範囲の二倍を担当する。」

「沙耶香、あまり無理しなくてもいいのよ。俺も一緒に探すから、二人で1倍ずつ分けましょう。」

「……うん、わかった。」

都に軽く頷く。自身の高い身体能力を活かして木々の中を飛び回って行った。それは、第三者から見ればニンジャのように見えたことであろう。

「俺もやるか……！」

沙耶香の真似を取る都も軽く木々の中を飛び回っていく。

「……あれは、凄まじいですね。あの二人は八幡力を頼らずに、あんな行動ができるんだ。」

「沙耶香はともかく、都は親衛隊の燕 結芽と戦ったことがある。

あまり彼を舐めんなよ。」

「親衛隊の人と……彼は一体何者なのですか？隊長。」

「ただのシスコンだよ。ちよつと異質な人だけど、とても頼れる人間だと俺は断言できるんだぜ。」

驚く身体能力を持つ沙耶香と都に対して疑問が生まれた桐生副隊長にそう答えて、薫も調査任務に加えた。



「ありがとうございます。衛藤先輩／＼／＼／＼／＼」

「助かりました／＼／＼／＼／＼」

捜査の途中にたまたまイノシシに襲われた美濃関の隊員たちを見つけて、手助けをした。

しかし、ここは野生の動物にも襲われるんだ……熊がないことに祈ろう。

「二人共はこれからも気をつけろよ。刀使とはいえ、貴女達は女の子です。自分の身体をちゃん気付かないと、お嫁に行きませんから」

「はい！／＼／＼／＼／＼」

「さて、俺は別のところに荒魂がいるかどうかを探します。二人は何か気付いたら、連絡してね。」

「あの……！」

「ん？また何かあるの？」

また木々の上に飛び上がるつもりなのですが、彼が突然呼び止められた。

そうしたら、二人は乙女の顔で都にある質問を尋ねる。

「衛藤先輩は好きな人がいますか？」

「それとも、彼女さんとか？」

「え……？」

都はそう聞かれて、一瞬反応ができなかった。何にせ、あの類に関する話題ですから。

最近の自分もそういうの気にしていた。4ヶ月ぶりに正式再会した舞衣に都は自分の気持ちを気付いた。

自分は恐らく彼女に恋していたと思う。恥ずかしいけど、自分は彼女にそういう感情を抱いていた。

なんて俺は彼女を好きになっちゃったのよ……どうせ、実現できない恋なんだろう。

「いや、まだないけど。今だにそういう気がないんだ。」

とにかく、適度に誤魔化する。ついては彼女たちに告白される可能性も途絶えよ。

見た目は可愛い、接しやすいのいい子たちに見えるが、心の中には

もう思う人がいたので……。

「そうか……」

そうしたら、彼女たちは残念そうな顔をしている。

俺のことを好きしてくれて、本当にありがとう。だが自分は思う相手がいたから、貴女たちの好意を受けるわけにはいかないのだ。

これも両方のためである。

その後、美濃関の後輩たちと別れ。彼が再び捜査の方に戻った。

◇

日が暮れ。今日の捜査は成果なしで終了した。

元々着任した日で任務を終わらせるつもりがなかったけど、一日走り回ってた成果が全くなかったのはやっぱり落ち込む。

せめて手がかりでも……

「んっ?」

「あっ?」

そんな時に、都と沙耶香の二人は廊下で予期せず出会ってしまった。そのことに互いが驚くが、すぐ平常心を取り戻した。

「沙耶香?こんな時間に御刀を持ってどこに行くの?」

平常心を戻した都はすぐ青いジャージを着ている沙耶香の手に握っている御刀を指して聞く。

「素振りの練習。」

そうしたら、彼女が淡々と答えた。

にしても、空振りか……懐かしいな。昔は可奈美とよくやってた。

あの時の可奈美（4歳頃）は本当に可愛かった。

「俺も一緒でもいい? ついでに稽古を」

「………うん、うん。」

うん? どうしたの? 何かを思い浮かぶような反応をして。

沙耶香の僅かな表情反応から少し違和感を感じた都ですが。その後、彼も部屋に戻って御刀を取りに行く。

因みに、途中でたまたま「ねね」と会って、勝手に自分の頭を特等

席にした。

なんの？俺はいつお前と仲良くなったのか？記憶がないですけど……まあ、特に嫌じゃないから、ねねの我儘を許す。

「ね〜〜……」

「見た目だけは可愛いだな。お前。見た目だけは」

胸に執着しなかったら、確かに可愛い無害のペットに見える。そういえば、ねねは荒魂だっけ？外見は可愛いから、ずっと気にしていなかった。

「あ、……ねねも来た。」

「ね！」

「勝手についてきたのよ。俺の頭を特に気に入ったみたい。」
宿から出て、沙耶香は先に待っていた。

「ねっねっね！」

「はいはい、お前の特等席だよ。」

「ねねの言葉わかるの？」

「いや、わかんない。でも何となくそう言ってた気がする。」

「そう……」

そう、こいつはわかりやすいタイプからな。声だけでも何か表示したいのもわかった気がする。

「それより素振りの方から始めよ。先に身体を暖まるのは筋肉にダメージがないからな」

「うん。」

沙耶香は頷いて、都と同様に御刀を抜け出す。

「……………」

「沙耶香？どうしたの？」

そうすると、沙耶香の視線はなんか都の御刀に注目している。

「その御刀は都の？」

「うん、名前は江雪こうせつ左文字。愛称は雪せつ。」

「その御刀は都に力を？」

「うん、お前を鎌倉連れ出す時から、ずっとそばにいた相棒だよ。本当に色々助けられたのよ……この子」

結芽の時も俺に力を貸してくれた。本当に大事な刀なんです。

「そう……」

少しこつちに微笑む沙耶香。きっと都と雪の絆を聞いて喜んで
いるのだろう。

「さて、口だけ動くではなく、手も動こう」

「うん。」

いよいよ空振りが始まり、都と沙耶香は同じペースで刀を振る。
こうしていると、まるで可奈美と空振りをしている頃に戻ったみた
い。

本当にとても懐かしく気がする。いつか可奈美ともう一度やろう
か……空振りを。

「ねねっ！」

その時、都の頭から飛び降りるねねも自分のしつぽを掴んで上下で
振る。

「ねっ！ねっ！ねっ！」

「俺たち／私たちの真似をするの？」

それを気付いた二人は刀を振りながらねねの方へ見る。

しつぽを上下に振るねねはちよつと可愛く見えるな。何より、その
姿はちよつと昔の可奈美と似ている。

昔、彼女も母と俺の動きを見て真似をした。動きが鈍く見えるが、
それでもそんな妹は可愛くて、俺と母はつい可奈美に空振りの正しい
振る方を教えた。

その後、俺、母、可奈美三人は毎日空振りをする。あの時も凄く楽
しくて、大切な思い出になった。

「ねね、それは違う。こう……です。」

「ねっ！」

御刀を収めて、沙耶香はねねに正しい振り方を教えようとしてた。
沙耶香も人……いや、荒魂に教える時が迎えたのか……。

これもまた一つの成長と言えるのだろう。とりあえず、都はしばらく
沙耶香とねねの交流に温かい目で見守る。

しかし、ねねは沙耶香に教えられた後、すぐしつぽを振り過ぎで倒

れた。

本当に何やってんだ、あやつは。

「平気?……気を付けないとだめ。」

「……………」

あんな表情も出るんだ……。

ねねの状態を心配する沙耶香。都は初めてそんな心配する顔を見た気がする。

本来彼女は無感情の人形だが、色々なことを経験してどんどん感情を得て、個性と顔は豊かになった。

それはとても喜ばしいことだ。これが糸見沙耶香本来得られる姿であった。誰の人形でもない、自分のままに生きる少女。

あの時の選択はやっぱり間違えなかったな……こうして彼女の成長を見るのが良かった。

「沙耶香はどんどん素敵な女性になったな」

「それはどういう意味?」

「なんでもない」

沙耶香に優しく微笑んで都は再びこのような光景を何としても守ると心の中に決めた。

第40話：荒魂と人の狭間

俺はこの世、一番おかしいの刀使だと自覚していた。いや……むしろ、うちはおかしかったのかもしれない。

刀使でありながら、荒魂と一緒だとは頭がおかしすぎた。俺は反抗期の時もそう思っていた。

荒魂は悪。人に危害する怪物。仲良くなどはありえない。

しかし、ねねのやつはいつも俺がピンチの時に助けてくれた。文句言わずに……いや、そもそも言葉が通じないからわからんが……それでも俺にはわかる。ねねは悪いやつじゃないんだ。

弱いくせに、力がないくせに、簡単にやられるくせに、それでもねねは当時暗い森に迷う小さい子供を見捨てなかった。

お前に散々小石を投げたのに、酷いことをたくさん言ったのに、お前の警告一つも耳に入れなかったのに、お前を化物だと見ていたのに……。

それでもねねはそばにいてくれた、膝のかすり傷も舐めてくれた。

なんてお前は人類と仲良くしようとしたんだ？怪物らしく俺たちを傷つけなければいいのに……なんでお前はいつも俺の隣にいたのだ？なんで俺の小さいヒーローになるんだ。

いや……ねねに答えを求めるのは仕方ない。あやつは荒魂、俺たち人類の複雑の思考を理解しかねない……いや、それも違う。あやつもあやつのペースで少しずつ俺たちに近づこうとしてたんだ。

この四百年はずっとそうでした。人類と生活するために、あやつは無害の生物になり。俺、俺たち益子家を守り続けた。

それは使命なのかは知らんが、いつの間になねは俺の大切なペットになった。

その後、俺はよくねねを連れ出し、一緒に遊んでた。しかし、俺はまだ他の刀使がねねのことをどう見るのか考えていなかった……。

「益子さん、なんで荒魂を連れてくるの!?!早く捨てなさい!」

「これから荒魂と戦うのに、そんな人と協力なんてできないよ!万が一その荒魂が私たちを攻撃したら、どうする!?!」

「そうです。これだって、何時私達に危害を加えるか分からないし……」

薫は正式に長船女学園に入学し、刀使となった頃。

他の刀使から、ねねへの批判が薫の耳に良く聞こえるようになっていた。

これが現実。荒魂を心の底から敵だと認識している正常の刀使の反応。

皆はねねの存在を拒否した。

「……ねねは俺達に危害を加えたりなんか絶対しない!!よく考えろ!こんなエロい荒魂はおっぱいに突っ込む以外に何か出来るか!?!こんな無害の生物はなんてお前らがこんなに怯えているんだ。ねねは友達なんだよ!」

クラスを決める際、それを言われることが多く、その度に反論し、よく教室を飛び出していた。そのせいでよくババア……真庭学長に面倒を見られた。

だが、その度俺は後悔はしていなかったと学長に言い伝えた。

彼女等はねねのことを何も分かっていないだけだ。ちゃんとこいつを分かれば、きつとこいつの良さがわかるはず。

ううん、頭が硬い連中にはきちんとかんがらせてやるしかない。

何を言われようが貫くだけ、それが益子の……いや、益子薫の生き方。考えて斬る、ということ。

俺はねねと一緒に過ごしたい。誰か反対しようとも、俺は必ずねねを守る。

あやつはもう十分俺を守ったから。今度は俺が守る番なんだ。

◇

「へいへい、沙耶香ビビってる〜」

挑発しか思わない挑発発言。

薫は卓球のラケットを叩きながら、挑発の顔と手付きで沙耶香を嘲笑う。

でも悪意のものではないから、別に嫌いじゃないが……どうして卓球を？

現在全員は隊長命令でお風呂のあとは卓球場に参った。そこで薫はラケットを持って沙耶香を指名して挑む。

何挑むって？卓球だよ。

「糸見さん、フアイト！」

「隊長なんでやっちゃえ！」

そして、何かなんだか皆のテジョン超高い。副隊長も何にも口出さない。

「えっと……なんで卓球？」

「どうも何も、温泉といえば卓球だろうか」

「そうなの？」

都是遊びなんて精通しないから、わからない顔で他の隊員に尋ねる。

「そうですよ！……ここ最近隊長はずっと卓球熱心で……できれば、その熱意を任務に置いていれば……」

「全くだ。」

「あはは……」

なんか薫はすげえ隊員たちに迷惑かけたよ。彼女は怠け者だと知っているが、そこまでか……。

「薫、今は任務中。」

「真面目か!? バカヤロウ! 遊びと休みも任務のうちだ!!」

「説得力があるな……流石隊長。」

「そうですね……毎回はその言い訳を」

「だめな一面は逆に尊敬します！」

尊敬すんな。ダメ人間になっちゃうじゃない。

「ねねっ！」

「ねね？」

その時、ねねは沙耶香の肩に乗せた。

「ねっ！ねっ！ねっ！」

「いっしょ？」

そうしたら、ねねはしつぽを右から左に振り回す。この様子はどうかやら沙耶香に卓球のやり方を教えようとした。

「ふっふっふう！ねねが居たところで貴様は所詮遊びの素人！本気の遊びというものを教えてくれる！」

「おい、あいつはフラグを立ったぞ。」

「はい、流れるように立ってますね。」

「はっ、はっ、はっ！行くぜ！沙耶香！」

大笑いした薫はまだフラグが立てたことを気付かずにボールを空に軽く投げ上げて、発球姿勢を取る。

沙耶香も迎撃態勢で薫の初攻撃を待機する。

「キエー！ー！！」

数分後ーフラグは見事に回収された。

「勝者、糸見沙耶香！」

沙耶香は見事勝利した。

「糸見さん、すごい！」

その勝利に盛り上がる隊員たち。

「意外に体力がないですね。薫さん」

「はあ……はあ……はあ……はあ……薬丸やくまる自顕流じけんりゅうは一撃仕留める瞬発力がある……いいん……だ……はあ……はあ……はあ……」

その逆方向に荒息を取り疲れた薫。彼女の敗因はただのフラグだけではなく、体力不足も主の敗因である。

「これもこの流派の弱点であるな……とりあえず、服をちゃんと着ろよ。見どころが困る。」

「おや？興奮したの？衛藤 都」

「ただみとめないから、勘違いすんな」

「ちエ……」

なんでそこでつまらなさそうな表情なんだよ！俺は？和のように軽くからかわないよ。

「……あつ。いいことを思いついた！ここで待つてろ！沙耶香！」

何か思い浮かぶ薫は早速この部屋から去った。最後は沙耶香の名前を口に出したということはまた何かをやらかすに違いない。

とりあえず、しばらく沙耶香の頭をなでなで褒めよう。

彼女は初めてやるのに、結構上手にやりました。これは褒めるしかないよね？

さらに数分後。俺は少し沙耶香と卓球を遊んだら、薫は大笑いを挟んで復讐のため、戻ってきた。

「ハッハッハッ！御刀さえいれば、お前のような小鬼こっこは敵じゃね！」

彼女の手を持っているのは彼女の御刀である。

「汚い……」

「卑怯……！」

「逆の意味で尊敬します！」

「糸見さん、ファイト！」

「下剋上よ！」

「部屋を壊さないでくださいね。」

薫の卑怯行為に都と平城の者はこのような汚い行為に認めない。流石の遊びで神力を使うのがないわ。

因みに、副隊長は冷たい口調……もう薫のことを諦めたのかな？とにかくだ。薫は最低の人間である。

「ねっ！」

「うん、頑張る。」

「いい度胸だ。覚悟しやがれ！」

おい、完全に悪人顔になったよ。薫。

「あ……そういえば、あの御刀の身長はかなり長いだっけ？狭いところに振ったら大変そう……」

ドーンー。

言ってる途端、薫は御刀を振ると、御刀は天井を破れ、そのままに挿した。

「……………あつ。」

全員は一気に同じ反応。

「隊長……………」

「はい！」

そうしたら、桐生副隊長は数秒後に薫を睨みつけ、薫はすぐ身体がビクツと正座する。

「本部長に報告しますね。」

「はあ…!?なにとぞお慈悲を！」

なんだ……………この短い茶番は。

薫が土下座する様子を見て、都はかなり呆れた様子。

さつきから彼女は何やってんだよ。

「ねっ！」

「(う?)」

「ねねっ！」

その一方、沙耶香とねねは勝利にお互いの手をキャッチする。実に微笑ましい光景だった。

ーどうやら、うまく行ったみたいだね。

その光景を見たのは都だけではなく、薫も少し沙耶香たちの方向に微笑む。

実は彼女最初の目的はこれだ。沙耶香とねねとの仲が良くなることは彼女の狙いだった。

だからこういうふざけた茶番を演じた。効果は絶好調らしい。

ーこれでねねの友達も増えて、沙耶香も一人の友達が増えた。これで良いんだよね。

ねねの本質を分かる者が増えれば、ねねに対する偏見を持つやつが減る。結構大変だった道だけど、薫は理解者が増えることにとても嬉しかった。

「……んっ……?」

「ねねっ!」

「おい、また俺の頭を……。そんなに心地よいのか?」

「ねへえ〜」

ねねが都の頭の上に飛んで、そこで身体を伏せる。表情からは気持ち良さそう。

「ねねは都に懐いている。」

「そうだね。別に仲良いことでもしてないのに、変なやつだな。ふっ……」

「……ふっ。」

「……なんだ……すっかりねねと馴染んでいたじゃないか。」

ねねが都に懐いて光景を見て、薫は少し安心した。

これで二人共はねねの友達になった。とてもめでたいことだ。

「……本当に良かったな、ねね。」

◇

綾小路武芸学舎——裏山にて。

相楽学長は朝っぱから花を持って、誰かを弔する。

彼女は毎回時間が空いたら、必ずこの地に参って、少数の人間しか覚えられない彼女を弔する。

しかし、そちらには先客があるようだ。

「皐月夜見……」

先客を見て、相楽学長は思わず彼女の名前を口に漏れた。

元親衛隊の一員にして、彼女の先輩でもある。

「……」

見た様子では彼女もあの少女を弔する。普段感情すらも感じていないのに……意外に情がある人なのね。

「……」

相楽学長は花を墓の前に置いて、夜見の隣に両手を合わせて弔す

る。その墓は「燕 家」両字が書いてある。

言うまでもない。これは親衛隊第四席燕 結芽の墓だ。

彼女が死んだあと、親族がない故、相楽学長は彼女がかつてここで通学するこの学舎の裏山で墓を作ってきました。

せめてここで安らかに眠ってほしいと彼女は祈っていた。

「相楽学長、燕さんはきつと幸福でした」

数分に至る沈黙が経ち。皐月夜見は唐突に相楽学長に話をかけた。彼女にしては珍しい挙動だ。

「雅から聞きました。燕さんは最後までに幸せだったと……」

「そうなのか……」

夜見の話に少し癒やされた相楽学長。彼女はずっと結芽が幸せにしてほしいと願っていた。だから、彼女にノ口を与えた。

なのに、ノ口さえも彼女を救えなかった。

「はい……燕さんは最後まで刀使らしく戦った。これも親衛隊に入ることができなかったあの方のおかげ……彼は燕さんに良い結末を贈れました。」

「衛藤 都か。」

「はい……あの場は敵同士なのに、彼は燕さんを救うことを選んだ。私たち三人より燕さんの近くにいました。」

「……いつか彼に燕さんを救うことに感謝しなければなりません。ですが、私達はまだ敵同士……刀剣類管理局の一員である以上、私の敵、あの大方の敵、〃姫〃の敵です。」

僅かだが、彼女の瞳は少し何か悲しむような感情を感じた。

「お前はどのような？ 皐月夜見。紫がない以上、お前はなんのために動く」

「例え紫様が居られないだとも、私の忠義は変わりません。」

忠義か……誰への忠義なんでしょうか。雪那^{ゆきな}? それとも姫? どっちなんでしょうか。

「そういえば、姫はどうしている?」

「またふらりと、いず何処かに」

「自由の人だな」

「はい。いつか飽きたら、この世を『本格的に滅ぶでしょう』」
「……………」

「それまでにはまだ時間がありそうだね」。

◇

「ねねっ！ねねっ！ねっっねね！」

翌日、また捜査を再開した薫たちは二つのチームに分けた。簡単に言うと、都と薫と沙耶香は同じチーム。

そして、ずっと都の頭にいるねねはなぜか調子がいいみたいだ。

このまま荒魂を見つかるといいなと思っていた彼。

「気のせいかな、俺よりねねは都の方を懐いている。」

都と沙耶香の後ろに歩く薫。彼女は体力が少ないため、彼女を後ろの方に置く。

そして彼女は朝っぱから都がねねに懐かれた光景を見て、少しヤキモチになった。

「気のせいですよ。ねねはただもつと高い景色を見たくて俺の頭にいるのよ…………多分。」

「待ってこら、お前は俺をちびびと言うのか？」

「いいじゃないか？小さくて可愛いですよ。薫さんは」

まあ、そのだるい性格のせいで台無しだけど。

「……………よくない！俺も時おり身長のせいで子供扱いされたよ！

まあ…………無料の食い物超美味しいだけと」

こいつ、少し黙ってもらいません？口を出したら、その可愛さが台無しされちゃうから。

「二人共、今は、任務に集中」

「いつでも集中しているよ。」

「あーもー、沙耶香は真面目だな」

前を歩く沙耶香は立ち止まり、薫と都の方を振り返って言う。常に

冷静沈着、与えられた任務は忠実にこなす沙耶香と無気力さを体現したような薫と外見は気楽ですが実は周囲の警戒を怠けず都。

三者異なるモチベーションの差はもはや語るべくもなかった。

「ねねっー!」

そんなところに、都の頭上に乗るねねは突然足を踏み切り、沙耶香の肩に乗り移った。

「ねね?」

「ねねえ……」

「? どうしたの、ねね……?」

ねねは、沙耶香の肩の上に乗ったまま顔を綻ばせる。今度はねねが沙耶香を懐いている。

「ほら、俺だけではないですよ。」

「はあ……ほんと、同じ真面目系でもエターナル・ヒヨコン・ザ・ナイペツタンならからかったりできんのかなあ……」

任務に真面目な都と沙耶香を見て、ここにはいない姫和の存在に嘆く薫。

彼女は、その薄い胸元についてイジリ倒す度に期待通りの反応を返してくれるのだ。やはり、会話での掛け合いを楽しめる相手でなければ面白くない。元は変人^{シスコ}に期待しているのに、彼は妹以外のことになると意外に真面目な優秀の人材だった。

「あ、そうだ。この写真を……」

「薫さん?」

薫が唐突に携帯で沙耶香と彼女の肩に乗るねねの二人の様子を正面から携帯端末のカメラで撮影するところを見て、都は好奇心で薫の隣に移って覗く。

そうしたら、薫はメッセージアプリを立ち上げて姫和に対して送る文面を入力し始めた。

「『ねねが沙耶香になついた。つまり、沙耶香はヒヨコンのホライズン胸より未来があるみたいだぞ☆』……送信っ」と

ついでに今し方撮影した画像も添付し、文章を送信した。どんな返しが来るかわくわくしていた薫に、直ぐ様姫和からの返信が届いた。

『しようちしたきさまはきる』

漢字変換も句読点もない簡素なものだが、それゆえに彼女の怒りがひしひしと伝わってくるのがわかる。因みに、薫が送信してから返信が来るまで、その間わずか1秒程度。

うわあ……怖っ。美炎でもそんな短期間で返信できなかつたのに……。

?和の怒りを確実に感じた都はちよつとビビってきた。彼女が元氣していたのは嬉しいが、彼女を怒らせちゃだめだとも理解してきた。

「やっぱこうでないとなー!」

そして、?和の反応に楽しむ薫。彼女は本当に命知らずの勇者だ。逆の意味で彼女のことを尊敬します。

「ねねっ?」

薫が姫和とのやりとりに楽しむところで、沙耶香の肩に乗るねねが何やら茂みの方を指差した。

「ねね、どうしたの?」

「何か感じたのか?」

「荒魂か?」

三人がそれぞれの反応にしていると、ねねが示した茂みからガサツと何か動く音が聞こえた。

「ようやくお出ましか」

「……」

薫と沙耶香と都は三人とも抜刀し、茂みの奥に注意を集中させる。もしや、荒魂なのかもしれない。

それと、都は二人と一緒にそうする必要がなかったが、この場にいる二人は幸い自分の秘密を知る人間であるゆえ、刀使としたの力がこの場に出せる。

まあ、このメンバーなら負けないのだろう。タギツヒメ戦より厳しい戦いがないだろうよ。

やがて、茂みに潜む荒魂の姿が明らかになり……

「へ?」

「え……?」

なりはしたが、その姿は敵と評するにはあまりにも小さく可愛らしいものだった。

「……これが荒魂?」

予測より遥かに外れて、都はその可愛らしいものを見て呆れた反応。

あれの大きさはねねと同程度。外形はリスに近く、とてもではないが凶悪な荒魂には見えないし、敵意も感じられない。遅れて反応したスペクトラムファインダーの通知音も馬鹿らしく聞こえてしまった。

「こいつか、この辺りを騒がせてる荒魂って。スペクトラムファインダーどころか、ねねでも察知できないわけか」

「熊を何匹殺したとは思えないな」

「またそれを信じていたのか!」

「ええ、何事も自らの目で判断するものなんで、てっきり大きなやつかど。」

薫は都にツツコムと同時に心の奥が安心もした。こんな荒魂なら脅威にならないだろう。これ以上人里に下りてこなければ特に問題はないしな。

「さて、さっさと山奥に返して——」

だが、薫の横を風のように駆け抜ける一人の影があった。沙耶香だ。

第41話：益子家のケジメ。

小さい頃から、わたしは親と名乗れる存在がそばにいなかった。あれはどういう存在なのかわからない、親が持つ他の子供の感覚もわからない。

ただ遠くで見たら、楽しそうに見える。ただそれだけ。

記憶以来、私はずっと五箇伝設置する保育所に暮らしていた。

生活が保証され、福利厚生もばっちりしている。例え金がなくても、管理局も私たちのような御刀の適正がある子供を保護します。

つまり幼いから有望の刀使たちを育ち上げる特別施設。

「は〜い！お菓子を食いたい人はこっちに来なさい〜」

「は〜い！」

「……………」

けど、そんな施設内でも私はずっと一人だった。

みんなが先生にお菓子を配られる時に、私はいつも部屋の隅で座って何もしなかった。

他人との交流がわからない、表情変化や感情表現もわからない。

そういうぼっちの私が自然に友達がいなかった。私に関心する大人たちも「この子が面倒そう。」という理由で私に近づくこともなかった。

私はずっと一人だった。

ぐうぐう。

「お腹減った…………」

空腹のせいで、彼女のお腹は耳も聞こえるほどの音を鳴った。

朝ごはんを食べたばかりなのに、彼女は既にお腹が減りました。

まあ、これも無理もないことだ。何にせ彼女が食べる量は他の子供よ

り少なかつたから。

そのため、彼女のお腹はいつも満足できない模様で彼女に「早く何かを食べよう！」と警告する。

「……………」

それでも彼女は動じてなかつた。先生からお菓子をもらえる甘え方も知らないし、いきなり子供たち集団に入るのも良くない気がする…。

それにいつも昼ごはんまでに我慢してから、別にお腹が減つても大丈夫。

「お前、なんて一人ここにいるんだよ？お菓子をもらいに行かないのか？」

「……………あつ。」

そんな時、彼女は誰かに話をかけられた。

その誰かはこの度、かつてお世話された保育園に様子を見に来た（初日はこれが強制されたと言うらしい）鎌府女学院の生徒。

身長では彼女とほぼ同じ、顔はちよつと不良ぽい女の子。

「お腹が減っているだろう？だったら、お菓子をもらいに行けよ。」

「……………」

「どうした？お腹は痛いのか？」

「ううん、どうして……………私に話をかけるの？」

「どうしてって……………変な質問だな。」

「他の子は私に話をかけることがないのに……………」

「虐められたの？お前。まあ、アタシも似たような経験もあるから、仕方ねえか。」

彼女がそう言って、お菓子を配っていた教師の方へ行った。どうやらその教師と何を話しているようだ。

そうしたら、彼女は教師からもらったお菓子を持ち帰った。

「ほら、食べな。」

「え……………」

先輩から渡されたお菓子里に少し間抜けな反応をする彼女。

なんでわざわざ自分のためにお菓子をもらってきたの？と疑問す

る。

「ちゃんと食べないと、身体は大きくなるよ。だから食べ！」

「……………いいの？」

「いいの、いいの。どうせ無料だし。それにお前たち将来も刀使になれるかもしれないから、ババア……………じゃなかった、学長はそのことにうるさいからな。」

まだ少し不安が残っているが、彼女は先輩の好意を受け取る。

「で、お前はいつも一人なの？」

「うん……………」

「友達……………いなさそう。……………ったく、うちの学院はそういうおかしいな連中の集まりかよ」

文句を言う口ぶりで呟きつつ、彼女の隣に座る先輩。どうして彼女はそこまで厄介な世話をするのか、本人もわからない。

「そういえば、お前の名前はなんだ？アタシは七之里呼吹、鎌府女学院中等部一年。好きな呼び方で呼ぶがいい」

「糸見沙耶香……………」

「じゃ、沙耶香で呼んでいいよな？」

「うん。」

お互いの呼び方を決めた二人。

「沙耶香はここで退屈とか感じたことがある？アタシは昔ここで住んだ時に、すごく退屈したんだ！どいつもこいつも、つまらない連中ばかり！」

「わからない……………そういうの、考えたことがない。」

何もかも空っぽの彼女は何も持ってない。

それもそうか。彼女は記憶以来、親族がいないからな。そのせいで彼女は他の子より何か欠けたようだ。

「そうか……………。今のうちに考えておけよ。自分の人生なんだから、もつと楽しまなくちゃ駄目だぞ！」

「楽しい……………？」

「ああ……………アタシも楽しむために刀使になったんだよ。まあ、ほぼ強制されたけど……………それでも今みたいに荒魂と遊ぶのは超楽しい！」

「荒魂と遊べるの?」

「うん! 荒魂と戦う遊びなんだよ! おめえにはまだわからないかもしれんだけど、アタシにとって遊びなんだ。」

すごく輝く笑顔でそう語る呼吹。彼女もまた異常刀使の一人であつた。

それを理解するやつは誰一人もなく、沙耶香さえも「よく、わからない。」と呟く。

「それより、おめえも刀使になったら、早く荒魂と戦う理由を見つけろよ。他の刀使のことに興味ないけど、誰も理由があつて荒魂と戦うはずだ。」

「よく、わからない……」

「今はわからなくていい。人生はまだまだ長え^{なげ}から、ゆっくり御刀を振る理由を探せばいい。」

「御刀を振る理由……わかつた。呼吹」

呼吹が言っていたことを軽く呟く沙耶香。この頃はまだその意味がわからないけど……それでも彼女のその言葉は多少沙耶香に影響を与えた。

「おう! それより早くそのお菓子を食べな。食べたくなかつたら、アタシが代わりに食べてもいいぞ?」

「呼吹も食べたいの?」

「いや、そこは突っ込めよ。」

「……?」

そして呼吹がわざと放つた突っ込めるところを真面目に応答する沙耶香。彼女にはそういうの不得意のようじゃ。

それから一年後、沙耶香は御刀に選ばれ、鎌府の刀使になった。そして刀使の教育と高津学長の歪んだ教育によって任務に忠実する人形に変わりました。

だがそれはあくまで刀使の義務を果たす行為。決して彼女の御刀を振る理由ではなかつた……。

◇

「っ!!」

森の中に鉄と鉄がぶつかる音が鳴る。

沙耶香は容赦なく、御刀を振り上げて荒魂に斬りかかろうとした。しかし、それに先回りして薫は荒魂を庇う形で沙耶香の斬撃を自分の御刀で防ぐ。

「勝手なことするんじゃないよ」

二人の動作は決して追いつけないわけじゃないが、都はただこのよ
うな展開に反応ができないだけ。いや、もしや薫が荒魂を庇うような
行動を理解できなかったかもしれない。

「どうして? 荒魂は討たないと。それが刀使の仕事」

「ああ、そうだな。確かにお前は正しいよ、沙耶香」

沙耶香の言っていることは世間一般どころか、刀使ですら認める共
通見解だ。今も昔も、刀使はそのために存在している。

それでも、薫にはそれが完全な答えだとは思えない。何にせ、彼女
の価値観は既に普通の刀使と外れたから。

「正しいけど、気に食わん」

「……え?」

「見ろよ、こいつを」

薫は沙耶香と刀を合わせながら、荒魂の方へと沙耶香の目を向けさ
せる。その荒魂の傍らには、すり寄り、笑顔で話すねねの姿があった。

「ねねはこいつに敵意を感じてない。それが何よりの証だろ」

「荒魂は荒魂、放置していたら人に危害を加えるかもしれない。だ
から、早く斬らないと」

「そうか、そうかもな」

薫は一步引いて沙耶香から離れる。そして、自分の御刀をねねに向
ける。

「だったら、お前はねねに同じことを言うのか?」

「それは……」

「お前たちは荒魂で、いずれ人に危害を加えるかもしれないから、問

答無用で殺されて当然だつて。そう言うのか？」

ねねは荒魂であつても、穢れではない。人を害さず、共に生きることのできる存在だ。それを深く知っているのは薫以外の二人である。

だが、考えていなかつたんだ……。ねねはその悪の荒魂の一人、つまり滅びすべく存在。なのに、今の自分と沙耶香はそんな存在と仲良く過ごしてきた。付き合いが短い、あ奴と楽しく過ごした。

ねねは荒魂に類する存在であることに違いはない。だが、同時に悪でもない。ねねと目の前にいる小さな一つの荒魂と一体何が違うというのだ。

「お前にねねを斬れるのか？」

「……」

沙耶香は口ごもり、御刀を持つ手を下ろす。そして、御刀を鞘に納めてゆつくりと首を左右に振つた。

「駄目。そんなことできない……。絶対に、やりたくない」

哀しげに、噛み締めるように沙耶香は呟く。己の価値観が正しいと思つていて、なおかつ薫の言葉に心から納得してしまつたがゆえの反応だろう。

俺も似たようなものだ。これが荒魂と生活する刀使と俺たちのような普通の人間や刀使との大違つた価値観である。

「ねえ、薫」

「何だ？」

「私は……間違つてたの？」

「いんや、刀使としては間違えてねーよ」

確かに、刀使としては間違えていたわけではない。恐らく、沙耶香があのまま荒魂を斬り祓つていたとしても誰も彼女を咎めない。むしろ、任務を達成した人物として評価されていたはずだ。

何にせ荒魂と刀使はお互いが長期的に敵同士なので、仲良くすることはほぼ不可能とも言える。

故に荒魂は斬るしか。それが刀使の仕事。

「ただ、刀使だからって何も考えずに斬るのを辞めとけ。よく考えて斬るといふことだ。」

「……まだ、よくわからない」

沙耶香は哀しげな目を伏せ、再び開く。その目にはもう悲痛の色は灯っていない。

「でも、考える。ゆっくり考えて決める。」

「おう。今はそれで十分だ」

薫は笑顔でそれに応える。そもそも、一朝一夕で完全に理解できる考えではない。理解しようと努力してくれるという姿勢だけで嬉しいのだ。

俺もよく考えろ。新人刀使としてはまだまだ未熟だ。だから、荒魂を斬る前によく考えて動く……。

俺は、何の為に剣を振るのかをもう一度考えたほうがいいかも。

「さて、こいつはどうするか」

「山から出られないようにする?」

「どうだろうな。まあ、まずは本部長に連絡して——」

薫は携帯端末を取り出そうとするが、それを甲高い声が制止した。

「ねねーっ!!」

ねねだ。先程とは打って変わって、荒魂を睨み、全身の毛を逆立てている。

「……! まさか!」

薫の嫌な予感的中した。荒魂の肉体がどんどん膨張し、リスくらいだった外見の印象はもはや感じられない。野生の象ほどの体軀は凶悪な荒魂そのものだ。

「嘘だろ……っ!」

「くっ……!」

「オオオオオオオオ——」

荒魂の振り上げられた右手は薫と沙耶香の頭上に影を作り、やがて二人めがけて降り下ろされる。察知した二人は後方へ跳んで回避する。降り下ろされた右手が地面を割り、土と砂礫が宙に舞った。

「何故、急に……」

「さあな。だが、こうなったらもう四の五の言ってられねー」

薫は写シを体表に貼り、両手で御刀を握って荒魂を突進する構え。

「薫さん。斬るのか？あいつを」

「ああ……お前たちにはまだ荷が重いだよ。お前にも刀使としての履歴がまだまだ若い。お前はあいつを斬れるのか？」

「それは……」

まだそれが迷う都はねねの方に視線を向く。さつきねねがあんなに懐く相手を殺すなんて……今になってはできない。自分でも説明できないが……荒魂に剣を振ることが突然できなくなる。

それは沙耶香も同じ。二人はまだまだ刀使としては若いから、決断など決めるのは難しい。

「よく考えて、信じて、それが駄目だったときは誰よりも先にそいつの牙を受け、剣を向ける。それが益子家の……益子薫のやり方だ。」

「俺が、ケジメをつける。そこで見届けるよ」

跳躍し、上段に御刀を振りかぶる。そのまま己の体重と御刀の重量を乗せ、一気に降り下ろす。

「きえー!!」

敵性荒魂が薫の攻撃によって両断されて、沈黙した。

これが益子 薫……いいや、この四百年益子家代々の刀使たちが伝わったケジメだ。



「隊長、糸見隊員、衛藤隊員どうもお疲れ様でした。」

荒魂を討伐した後、別働隊の刀使とノ口の回収班を呼んだ。現在はノ口の回収作業に入っている。

そして、桐生副隊長は三人に一礼する。

「後は我々で作業を済ませますので、隊長たちは先に戻ってお休みになられてください」

「お、いいのか？ よーし、行くぞ沙耶香、都。」

「……薫、切り替え早い。」

「休めるからな」

「俺が暫くここに残る。……少しこの手伝いをしたい。いいよね？ 薫さん」

「それはいいけど……あまり無茶するなよ。」

「はい、それはもちろん。」

彼女にそう返事したら、都は二人を見送る。

二人の姿が視線内に消えるまでに見送ったら、都は隣の桐生副隊長に向く。

「それでは俺が周囲の警備をする。ここでの警備を任せた。」

「二人で大丈夫ですか？ こっちの隊員一人を分けて……」

「それは必要ない。俺は逃げ足に結構自信があるし、それと……薫さんの話により、荒魂に関することについては一度考え直す必要がある。故に、一人にしたい。」

「……わかりました。くれぐれもお気をつけて」

薫隊長に何の薫陶が受け入れられるのかを知らないが、衛藤隊員にとってはきつと悪いことではないとそう信じる桐生副隊長は彼に周囲の警備を任せた。



薫はさつさとその場を退散し、下山を始めた。沙耶香と彼女の頭に乗るねねも、薫の後ろを歩く形で下山している。

「薫、大丈夫だったの？」

「ん？ 何がだ？」

「ノ口を奪う刀使がいるって……」

「ああ、それか。けどまあ、こんな山奥にあんな少ないノ口を奪いに来ないだろ」

犯人の正確な狙いはまだ不明だが、あんな少量を奪うにしてはリスクが高すぎる。放つておいても問題はないだろう。

「それに都もそつちにいるから、多分大丈夫だと思う。あやつも生身で親衛隊と戦った経験もあるしな。」

「でも本部長から、犯人の腕は上達したらしいですよ。」
相変わらず都の心配をしていた沙耶香。この二人は舞草に来る前には既に知り合っていた。

それに彼は沙耶香に異常の関心はともかく、沙耶香自身も彼のことを相当に重視していた。

そんな二人を見て、薫も思わず彼女も可奈美と同じあやつに好意を抱いているのか？と思っていた。

「それでも親衛隊の連中より手強い刀使は可奈美とペったん女しかおらん。万が一本当に存在していたとしても、他の刀使もいるし、副隊長もきつと態勢がまぶくなつた時に俺たちに助けを求めると思う。一応彼女も副隊長なんですし。」

「うん……」

「そんな不安の顔をするなって、……俺たちの手で必ずあやつを守ると昨日はそう誓っただろう？ならばそんな時には最速の速度で彼を助けに行ければいいんだ。」

不安の顔にする沙耶香を慰める薫。

彼女は実力方面で自分より強いですが…精神方面ではまだまだなので年上先輩として、彼女をちゃんと支えなければ。

「うん、ありがとう。薫」

「お礼はいいよ。さて、速く旅館に戻って休むー」

「ねねっ!!」

そんな時、沙耶香の頭の上に休むねねは突然何かを反応しているように彼女たちがさつき歩く道に全身の毛を逆立てている。

「クソ！次から次へと何なんだ！沙耶香、戻るぞ！」

「うんー」

そしてねねの反応から、薫たちはすぐ嫌な予感がつく。

◇

数分前。

一人で森の中に歩きながら周囲の警戒を怠けないようにする彼。

「考えて、信じて動く……今は可奈美と他の五人を守るように動くだけ。それ以外のことは全く考えてなかった……」

刀使と荒魂は敵同士。しかし、ねねと薫のような特例が存在している。ならば荒魂は必ず滅ぼすべく存在じゃなくなるってこと？

いや、そもそも荒魂は人類によって母と離れ離れになった被害者。タギツヒメもその一つに過ぎない。そういえば、舞草のお祭りの時も刀使の存在理由が聞いた。

荒魂を母の^神手により^刀払う。せめて彼らを母の手に鎮む。それは刀使が荒魂に対して、唯一できることだろうか。

ならば彼らを斬った方が彼らのため……いや、それじゃただの考えずに斬るといふ思考に戻っただけ。

考えば考えるほどわからなくなってきた……薫の言葉は結構奥深いだね……なんか、ちよつと尊敬するよ。

今まで考えてなかったことに悩む彼。

そもそも、元々彼はただの一般人から刀使に変わった者。本来普通に暮らし、平穩に生きられるごく普通の学生なのに、刀使の世界に乗り込んできた彼は荒魂と刀使の終わらない争いに巻き込まれた。

御前試合の時から、今になって多くの刀使たちと絆を結び、どんどん彼女たちの世界を知ることができた。

荒魂を斬る者、荒魂と暮らす者、荒魂を受け入れる者、荒魂によって短い命が延びた者……それら全ては^{刀使}彼女たち。

刀使たちが経歴した世界は思ったよりも複雑で残酷で理不尽な世界。そんな世界にて、自分は一体どの立ち位置に立つのが迷う。

最初、自分はただ可愛い妹を大事にしたいだけなのに……。今になって、もう刀使たちを放ってはおけなくなっちゃう。

「……とりあえず、今手にある仕事をちゃんと成し遂げますか。副隊長に叱られたくなー!?!」

一瞬だが、都は唐突に妙な気配を感じた。

「この気配は何なんだ……」

しかも、この気配はこの前にも感じたことがある。方向は――。

「まずい……！桐生副隊長たちは危険だ！」

妙な胸騒ぎが起こり。都は速やかに別働隊の皆さんのところに戻る。

これはただの勘だけど。あいつはまた現れた。

ノ口強奪事件の犯人が再びノ口を奪うために現れた。

第42話：群馬山の激戦

迫り着いた先では、刀使とノロの回収班が倒れ伏していた。さらに、先程倒した荒魂のノロは跡形もなく消えていた。

現在、そこに立っているのはただフードを被った刀使だけだった。速やかに、正確にこの刃で貫く！

「奇襲は無駄だぞ。」

「……………」

都の思いが見破られ、彼は目の前にいるフードの刀使を見つめる。

「また、会ったな。衛藤 都」

「ああ……また会ったな。フード野郎」

刀を強く握り締め。都は全集中に入る。彼女を相手に決して油断してはならない。

「我を斬るのか」

「奪ったノロを返せてもらう」

「ならば、力を示せ」

彼女は一瞬に距離を縮め、都を斬りかかる。しかし、都は先に予測して攻撃を防げる。

防げた後、都は彼女と交戦始めた。今は写しなしの状態であつたが、都は特に刀使との戦いに慣れていった。

これもこれまでの戦いから得た経験のおかげ。

刀と刀のぶつけ合い音が森の中に響く。彼は油断せずに相手の実力を探りながらわずか手抜いた状態で彼女と殺し合う。

どんな相手に挑んでも、その実力を探るのが最優先のことだ。

相手はどんな手が隠していたのか知らなければ。そもそも相手の流派もわからないままでは、対応策も立って辛い。

自流？ いや……自流にしては、これほどの使い手はそうそういないと思う。

「写しをまだ使っていないのに、これほどの腕とは……なかなかのもんだな。衛藤 都」

「それはどうもー」

彼女の攻撃に身を伏せて、隙を見て下段攻撃で斬る。しかしそれも彼女に避けられ、刀を振り、都を退ける。

そうしたら、両方はまた同じタイミングで接近戦する。戦況から見れば、例え本気を出さなくても両方は互角に戦っている。

その点において、都は既に普通の刀使より遥かに強い。なぜなら、普通の刀使なら特にただの数秒内でやられるから。

「はあー」

「……………体術か。面白い技だな。」

刀を振るふりをして、刀使の戦いにおいて絶対予想がつかない蹴り攻撃をしたけど、フード刀使はそれを見抜いて避けた。

ーおかしいな感覚だ……………さつき攻撃のタイミングはほぼ完璧だというのに、まるでこっちの動きが完全に把握されたように相手は俺の攻撃を見事対応できた。

戦いから違和感を覚えた彼。

今まで戦ってきた相手と違い、目の前の相手は彼に気持ち悪い感覚を身体中に走り回した。

それも自分が完全に見抜かれるのような感覚による気持ち悪さ。

「……………余興としては愉快だが、お主もまだ全てを出してないよな？」

「そっちこそ。まだ余裕ふりの態度でこっちはかなりイライラするぜ」

一旦距離を離れた二人が再び対峙する。交戦始めてから、彼だけではなく相手も本気で戦っていないかった。

そのことに都も十分わかっている上で、こっちも全集中と新陰流だけで戦う。

「ならば、少し程度のを見せしましょうか」

「……………い！」

消えたー!!?!いや……………背後だ！

後ろの気配を感じて、都は流れるように最速で刀を後ろの方へ横切

る。しかし、相手は特にそれを「読み取り」身を伏せて避けた。

「しまっー」

大幅の横切りにより、大きな隙が作られた。それを見逃す者がいない。

ここで彼女に斬られれば、間違えなく重傷だ。ならば、ここで一瞬の写しを！

「……………っ!？」

そう思った時、フード女は突然右の方へ跳躍し、もう一振りの攻撃を避けた。

もう一本の刀……………？

フード女が元にあった位置は御刀が降りかかる。そして、その使い手も同じくフードを被った人物だ。

「やっと会えたな……………」

「このノロの匂い……………なるほど、我を追うのは貴様か」

「もう一人の……………フード野郎……………？どういうこと？」

フードを被った人物はこの場に二人。そしてこの突発状況で都は一時混乱した。



「……………お前は下がってろ。僕とこいつは恩怨があるんだ。」

「我を楽しませるのか」

「……………!」

一步を踏み出し、都を救うフードの方はもう一人の方へ攻撃し始めた。

これは……………どうということ……………？お互いは仲間じゃないのか？

彼女らの対決を見届ける都はまだこのような突発状況を捉えない。

それにしても……………あの動きは神道無念流の型じゃないか！なぜ……………。

攻撃方の攻撃モードを分析する都は、それが神道無念流のものだと知った。そして、それを操るのはこの国にはただ一人……。

「元親衛隊第一席獅童真希……？あいつはフード野郎なのか……!?!」

それにしても……強い！相手はまだ本気が出してないことはわかったとしても、相手をそこまで抑えるのは自分でもできない。

そういえば、神道無念流の特徴は、「真を打つ」渾身の一撃を一本とした点で他の流派と比べて力の剣とされていたことがうかがえる。それをうまく發揮している獅童真希はすごいと思う。

特に刀使になってから、常人より数倍以上の力が出せられる今は、その流派の得点はもつと高く發揮できる。

力比べでは彼女に勝る人間はいないのだろう……。

結芽と違う意味の絶対の強さ……これが親衛隊第一席獅童真希。

「……ふむ、ならば——」

戦況が一時に変われ、獅童じゃない側のフード女はもう一本の御刀を何も無い空間から取り出し、構えを取る。

「……貴様、それは……!?!」

「……二天一流?!馬鹿な！あれって……!?!」

獅童及び都さえも目の前の光景に呆れた。二天一流、最強と呼ばれる流派。

それを操るのもこの世にただ一人……現世最強の刀使——折神紫だ。

なぜ、もう一人の使い手がいる?!それとも彼女は——いや、身長や胸あたりは折神紫と違い過ぎる。本人……ではない……。

一体どういうことだ？あの者は……。

「貴様の御刀から感じるぞ。これは憧憬？悲嘆？怒り？いや……悩みか。己自身の心内すらも定めないともいい。哀れな人なのね。貴様は」

「ぐっ……!?!黙れ!?!」

苦虫を噛み潰すのような顔をする獅童は感情に任せ、相手に突っ込む。

「獅童さん！感情で思考が影響されちゃ駄目だ！」

都の忠告が遅く。獅童はただ一瞬に攻撃が相手に弾けられて、もう一本の刀に後ろの方に飛ばされて、木に身体が当てられた。

そのせいで、獅童は今が隙だらけ。

「ぐっはー！」

「これで終わり。」

それを見逃さない相手は早い速度で獅童に突刺攻撃。

「グッ………させるかー！」

写しを身に纏い、八幡力を使つて、一気に獅童のところへ飛ばす。そして、獅童を庇うように身体で相手の刃を受ける。

「ぐっ………！」

肩が刀に貫かれた。写しを受ける状態は幸いだが………すげえ痛い！

「ほう………」

「衛藤 都！」

「この隙を逃すな！第一席！」

「………ああ！」

「くっ………！」

都が作った隙を見逃さない獅童は二天一流の刀使に攻撃する。だが、相手は後方に回避することでこっちの攻撃が全然当てなかった。クソ！どんだけ強いんだよ！あの二天一流の野郎！

「やばっ………」

写しが解除された瞬間、都は力を失い、片方の膝か地面に崩す。

「………！」

「………彼が貴様を庇うように、彼を庇うのか」

獅童は都の前に立つ、彼を庇うように御刀を相手に向かう。

「黙れ！もう大事な仲間が傷つけられるのをさせない！」

「獅童さん………」

頭部を隠すフードの一部が激しい動きによって、外した。そのおかげで彼の凜々しい顔がやっと見えた。

「これはなかなか興味深い。お互い、亡燕くなる者結を追う人間同士だ

ち」

彼女は獅童の御刀の方へ見る。そこにあるのはある少女の遺物。

その視線を感じて、獅童の目がさらに険しくなる。

「次に会う時は亡くなる者の剣で立ち向かうといい」

「待ってー!」

それだけ言って、二天一流の使い手は大ジャンプし、この場から逃げた。

「逃げられたか……逃げ足も得意なんだね。あいつは」

「……………衛藤 都。無事か?」

追跡不可能と判断する獅童は、まず都の方へ関心する。

「ちよつと疲れただけ。全集中も切れたし」

「そう……無事なら、それがいい」

都の無事に安心する微笑みをした獅童。意外にそういう顔と似合うな……いや、イケメンの故なのか?

「おい、お前ら大丈夫か!」

その時、聞き慣れた声が聞こえてきた。その声を尋ねると、薫と沙耶香が急ぎにこの場に戻ってきた。

そして、彼女らは真っ先に倒れた隊員の方へ関心している。

戦いの声を聞いて、戻ってきたのか……。

「……………あつ。……………都!」

「どうしたの? さやーお前は……獅童真希!」

二人はやつとこつちを気付いたみたいで、御刀を抜いてこちらに敵意を示す。いや……正確言うと、獅童真希にだ。

「都に何をした!」

「……………都を傷つけさせない!」

二人共は獅童の隣に片方の膝か崩れた都を見て、共に強い敵意を示す。

きつと、彼女たちは都が獅童真希に襲われて、殺される存前なんだと思うのだろう。早くこの誤解を止めなきゃ。

「違っーこれをやったのは獅童真希じゃー!」

「……………」

都が獅童のため弁解する時に、獅童は何も言わず、大地を蹴って跳躍する。そのまま目視できない距離まで瞬く間に消えていった。

「獅童さん!」

「逃げたが……」

「都、平気? 怪我がない?」

獅童がこの場から離脱するところ、沙耶香は真つ先に御刀を収まつて、都のところへ行く。

彼女は凄く心配そうな顔だった。

「ああ……写しが剥がれただけ」

「ねね!」

「ああ、お前にも心配かけたな。」

沙耶香とねねは俺のことを心配してくれた。本当に嬉しく思う。

けど、今では獅童真希と二天一流のフード女の方が気になる。あの二人は一体どういう敵対関係? そして、なんてノ口を奪うか……。

「都、聞く必要がないけど。平気?」

最後に薫も関心の言葉をかけた。本当に大事されたのですね……俺は。

その後、しばらく休憩した後、俺は他の隊員と共に旅館までに送られた。

◇

「ノ口を奪う犯人は二人にいる?」

旅館に戻って、少し休憩を取らせた後。都は薫に本部長に今回の件を報告するの時は自分もその場にいさせて欲しいと頼んだ。断る理由もないから、彼の要求を呑み込んだ。

そこで、彼は事件の証人として薫の報告に追加報告を加えた。ちなみに沙耶香もいる。

「ああ……正確には今回奪うのは獅童真希以外のもう一人だ。」

『衛藤 都、その件は詳しく説明する。』

電話の向こうから真庭本部長の声が伝わってくる。彼女は事件の証人とした都に説明を求める。

「俺が着くた時はノロが既に獅童真希じゃないもう一人のフード女に奪われた。彼女は先週、俺と舞衣ちゃんとエレンが遭遇したやつは同一人物だと思う。」

『つまりあなたは犯人が獅童真希じゃないと言いたいの？』

「少なくとも、俺が連続に会う犯人はそいつって間違えない。彼女と手合わせした……流派も知れた。」

『それって本当か!?』

「……ええ。ですが、ここで言い出したら、さらなるの混乱しか起こせないの、流派については言えません。」

『……わかった。お前の判断を信じる。ご苦労だった。』

「いいえ……俺は何も。犯人に逃げられたし。」

『自分のせいにするな。元々お前に刀使とした使命を果たすような命令を下っていない。それと、お前は刀使になったばかり、誰もお前のことを迫っていないんだ。』

本部長から関心の言葉は少し胸に暖かい感触を感じた。これは上位者が部下への関心なのだろうか。

「本部長……じゃなかった、おばさんの言うとおり。誰もお前のことを迫っていない。ゆっくりやっていいよ」

「薫さん……」

『……うむ、そういうこと。……待つて、今の言い直す必要なかったよな？何おばさんって!?お前もおばさんの時も来るのよー!!』

何かおばさんの年になる大人の悲鳴みたいな声が聞こえてきた気がする。まあ、確かに本部長は少しおばさんに見えます。他の学長よりも……すみません。

「うう……耳が痛い。沙耶香、お前も報告しろ」

「了解。もしもし、真庭本部長。」

『はあ……!?さ、沙耶香か。お前もいたか……取り乱して、悪かったな。』

「ううん、別に気にしていない。」

『そうか……お前と衛藤にも面倒なことを押し付けたな』

頭を左右に振り回す、まるで違うって表現する沙耶香。

「ううん、薫は私に刀使のことを一杯教えてくれた。考えて動く、それが大事なこと。」

「同じく、新人刀使として彼女から大事なことを学んだよ。自分はいかにも未熟であることも知らされた。今後とも、彼女から刀使のことをもつと身につけたい。」

沙耶香に続いて、都も自分がこの短い2日の感想を述べた。薫は駄目な人だけど、刀使としては尊敬できる人。

「お前ら……／＼／＼／＼」

そして、二人の褒め言葉に照れくさい薫。

『そうか……』

電話向こうの本部長はなんか感慨の息を吐いた気がする。きつと薫のことを見直したと思う。

けど、それはこの一時だけの考えだった。

「それと、遊ぶのも任務のうち」

『……あん？ちよつと、薫に代われ』

「ダッーシュー!!」

沙耶香の天然の裏切り行為によって、薫が変な知識を沙耶香に教え込んだことが真庭本部長にバレた。そのところ、薫は現場から逃げ出し、この場に残るのは本部長の叱り声だけだった。

◇

「刀と刀の勝負は相手より早く攻撃した方が勝つか……」

露天風呂場で都は体をお湯に染み込んで、二天一流への対策を作成中。

今までの対決は刀一本だけの勝負。刀一本だけなら集中しやすく、

対応しやすい。

けど、刀が二本なら面倒になる。守りは辛くなると同時に攻めしにくい。攻防一体の究極の剣。それが二天一流だ。

「今までの相手より厄介だな……にしても、あれは一体何なんだ？折神紫以外の使い手とは聞いていないぞ。折神紫と何か縁があるのか？」

少なくとも、表面上では折神紫は唯一の使い手。血の繋がりになら、朱音様しか。あの二人の両親はどうやらもういなくなつたみたい……。

それは置いといて、折神紫は圧倒的な強さが持っているのは確かだ。それを超える人間はただ一人しか……。

衛藤可奈美、自分の誇り高く可愛い妹。彼女はあの夜に母の剣技を真似して、折神紫から一本の腕を取つた。

最後は力尽きで倒れたが、折神紫から一本を取るとは非常に誇れることだ。彼女はもう高く飛んでいた……自分さえも届けないところまで。

もちろん、俺も自分なりに結芽の剣技をできるだけ真似して、その天然理心流の真髄も大体把握した。それところが寿々花の鞍馬流さえも勉強したし、自分はかなり強くなつた気がするけど……それでも、可奈美を相手にまだまだ足りない気がする。

あの子は強すぎた。元々彼女を倒せる人間は母以外にはいなかった……。

これで彼女……妹をちゃんと守れるのかな？お兄ちゃんなのに、妹より弱いなんて見ともない。

「はあ……思考がだるい。今日は早めに休もう」

お湯から立ち上がり、都はこれ以上続くと頭がぐるぐる回りになると思い、服を着替えた後は部屋に戻っていく。

そして、自分の部屋に浴衣を着る沙耶香の姿があった。なぜか彼女はベッドの隣に座っておる。

「沙耶香？」

「都、お帰り。」

「うん、ただいま。じゃなくて、ここで何を？」

「添い寝の準備。」

「……………なるほど、添い寝か。……………はい？」

彼女の唐突の発言に都は反応が遅れを取る。この天然の少女は今
回何かをしたいのかな？

「薫は言ってた。こうすると、都が嬉しい。」

「あの野郎、純粹の沙耶香に何かを教え込んだ！」

「聞いているぞ。人がいないと思って、人の悪い口を散々言っても
構わんと思つたら大間違いだ！」

その時、薫の声も背後から伝わってきた。振り向くと、彼女は枕を
抱かいて、都の発言に不満そうな顔。因みにねねが彼女の頭部にい
る。

「薫、お前もなぜここに……………？その枕は？」

「沙耶香と一緒に前と添い寝するための道具だ。」

「簡潔の説明をするな！なんで俺と添い寝を!？」

未成年少女二人と一つの部屋で、一つの布団で寝るとは、危ない匂
いがぶんぶんしてくるよ！

「それはもちろん沙耶香はお前のことを心配してたから」

「え……………？」

視線が思わず沙耶香の方へ向いて、彼女は確かにその表情だった。

「あの襲撃の件が発生したばかりだから、一緒に寝て安心したい。
ついでに俺はねねにそう言われて仕方がなくここに来たわけ。」

「ねね！」

薫の言葉に応じ、ねねは都の頭に飛び込んで、その上に座る。

「まあ、沙耶香にもどうしても3人で一緒に寝たいと頼まれたから、
仕方なくここに来たけど／＼／＼」

なぜか、そこで恥ずかしかつていた薫。つまりこの二人は自分と一
緒に寝たいか……………やっぱり危ながしい匂いしかない。

「都、一緒に寝てもいい？」

その時、沙耶香は都の服を軽く掴む。上目遣いで都を攻める。

そんな目に弱い都は少しこれがずるい思っていた。これも舞衣

ちやんから学んだ甘え方なのかな？ずるいよ。

「そ、それは……」

「やっぱり……だめ？」

ああ〜自分が捨てられた目でもずるい！元々沙耶香は動物みたいに可愛い女の子。今はそんな目でもとてもずるいよ！

「…なんか、面白いな。沙耶香は都の弱点つと。」

おい、ちよつと人が困っているのに、なにメモをするんだ！この野郎。

「ねねっ！ねっ！ねっ!!」

上の君も何か言っているのかはわからないけど、俺の頭を強く叩くな！急かすな！青春期の男の子は妹以外の女の子と寝るのは大量な勇気が必要なのよ！

「……………」

「……………わかったよ。一緒に寝るから、もう俺を急かすな！」

「うん！」

結局沙耶香に負けて、都は彼女たちの我儘に乗った。でも、これも都が沙耶香にとことん甘いんだから。

「それじゃ、決まりだな。沙耶香は前、俺は後ろ」

「うん、わかった。」

「ちよつと、二人共？何かを捻っている？」

「沙耶香は都の前方に抱きつく、俺は後ろ。」

「……………寝る時は抱かれるの？」

「ああ、これも沙耶香の提案だ。断れないだろ？」

薫は意地悪そうな顔をした。

確かに、これは断れない。相手は沙耶香である以上、都は彼女を断る勇気がない。

何より彼女も自分のことをかなり心配しているから。

「……………好きにしろ」

こうして、都は二人と寝る形で折れた。

幕間：調査隊との共同任務

「薫……隊長。今日もよろしくお願いします。」

「隊長、今日もしっかりしてくださいね。」

静けさが支配する群馬県のある森林の中に都、薫、沙耶香三人は今日も任務で出動している。先週は目標の荒魂を払ったが、またスペクトラムの反応が起こり、しばらく三人は共同行動を続ける。

「ああ、よろしく。で、その堅苦しいのもうなしにしよう」

「でも、これが大事。」

「いや、……隊長って言っても、この部隊は俺とお前たち二人しかない」

「他の隊員は怪我で離脱したから仕方ない。」

「思ったより重傷だね……」

「お前も危うくそうだったぜ。都」

「まあ……そうだな。」

一週間前、都はこの部隊に編成し、その二日目でノ口強奪事件の犯人と遭遇した。幸い、犯人の容疑者獅童真希の手助けがあり、大した怪我がなく、あの二天一流の犯人を退けた。けど、結果的にノ口が奪われた。

それを二度起こさないように、三人はできるだけ共同行動をする。

幸い、薫は火力特化刀使だから、何か強敵が現れても、それを一発で仕留める火力がある。

そして、他の二人は速度や防禦特化らしい。沙耶香は速度で、都は相手の攻撃を先に読み取り、誰よりも正しい対応ができる。彼が曰く：初撃なら、防げる自信がある。

そこで、彼は薫の援護役及び沙耶香のサポートや攻撃手を務めている。正直有能すぎると思っていたが、彼の刀使としたの力が一瞬しか出せないから、戦力としては期待しすぎないほうがいい。

「とりあえず、今日も任務を始める。隊員はねねを含めても三人しかないけど、一応点呼。」

「1。」

「2。」

薫の声に応え、点呼を取る二人。

「3。」

「4。」

「ねー!」

「よーし、全員いるな……。って、二人も増えてる!」

しかし、なぜか2以後の番号が出てきた気がする。そこがおかしいと思った薫は先週と同じ反応を取ってしまった。

とはいえ、隣にいつの間にか二人の刀使が増えていて、ちよつとびっくりした。服から見ると長船と平城学館の者……。にしても、一人は見覚えがある……。

「お前らは、確か……。折神家襲撃の時に加勢に来てくれたヤツらだよな?」

薫は驚かされた反応を取っているが、すぐ冷静を取り戻した。流石隊長。

「はい。人員補強のために派遣されてきました。長船女学園高等部三年、瀬戸内^{せとうち}智恵^{ちえ}です。」

ん?瀬戸内……。どこか聞いたことがある苗字だな。

「あ……」

「あ……」

たまたま青い髪の美人と視線が合った。

「衛藤さん、お久しぶりです。御前試合決勝戦以来ですね?貴方と再び会えてお姉さん嬉しいですよ。」

笑顔で彼に挨拶する智恵。彼女の笑顔はまるで女神みたいに輝く。しかし、それに対し彼の顔は優れない。

御前試合?決勝戦?うつ……。!何か嫌な思いが……。!!

「都、大丈夫?顔色が悪いですよ。」

真っ先に彼を関心する沙耶香。本当にいい子だなくく沙耶香は。

「大丈夫……。少し思い出したくないことが……。絶対嫌そうな何か……。」

「……………」

「えつと……………」

都の反応に苦笑していた瀬戸内智恵と自己紹介のタイミングを遅れたもう一人が現在どうしようかと困惑している。

「まあ、都のことをしばらく放置。次は君だ。遠慮なく言ってくれ」

「え？……………あ、……………はい！」

それを気付いた薫は平城の人に気遣う。反応から見れば、相当気が弱いタイプな刀使。そこはちゃんと気を付かなければ。

「お、同じく人員補強のために派遣された。平城学館中等部二年、むすみきよか六角清香です。」

「助かった……………うちの隊にまともな補充が……………」

人員補強の二人の到来に感慨していた薫。これで少しでも人員不足の問題が解決した。

「よし。今日の任務は全部中止だ！早速、二人の歓迎会をやる」

ならば、ここはお祝いしなければ。決して仕事をサボりたいわけじゃないよ!?ちゃんと正当の理由があるんだ！というサボリ邪念を主張する薫。

彼が珍しく気弱のところは彼女が見逃せる訳無い。彼と沙耶香は任務に真面目すぎで、よくサボ……………休憩の邪魔になる。

故に、ワン・チャンスは今しかない！

「薫さん、本気……………？任務中止されたのはちよつと困るのだけど」
「いいだろう？新人の歓迎会は何より大事なことだ。」

そんな邪念を抱く薫に智恵はちよつと困った顔。そんな時にねねは突然何かを警告しているように叫ぶ。

「ーね!!ーねね!!」

「ん？ねね、どうした？」

「薫、いくつの気配がこっちに向かって来た！」
ねねと同じく都も何かを気付いたようだ。

「グルルウウウ……………！」

そうしたら、数匹の犬型荒魂が茂の中から出現した。

「……………荒魂！」

「……………！」

「……仕方ない、歓迎会をやるにはこいつらを倒した後になりそうだな……。これくらいしっちゃ……。都、指揮モードに入ってくれ」

「わかった！薫は大幅の攻撃で荒魂を一掃する。沙耶香は敵を一箇所に集まってくれ。他の二人は薫の援護を！」

「はい！」

指揮権は都に移り、都はさっきの姿と違い。ちゃんと指揮を取る。「こつち！」

沙耶香は真つ先に敵を誘導する。他の二人は薫の援護。そして、薫は敵の殲滅。

確かに、これは良い作戦とも言えるのですが……。彼の隣には守れる盾がない。

もし彼がこの時荒魂に襲われたら、間に合わないかも、と不安する清香と智恵。だが、沙耶香と薫の顔から心配の気すらも感じ取れない。

これは信頼？いや……。彼を信頼しても荒魂に襲われたら、彼が必ず怪我をする。そんな時はどうしろというんだ？

「都、一匹がそつちに行つた。」

「わかった。結構生き生きした荒魂ですね。」

一匹の荒魂が都の方へ突つ込んできた。

「薫さん……。！彼が……。！」

「私が行く……。！」

「大丈夫。あれくらいじゃ余裕だろう」

「……。え？」

慌てた二人に対し、薫はかなり冷静だ。

そして、荒魂に襲われた彼は抜刀術の構えを取る。

「二天一流の野郎に示せなかつたけど、特別に使おうか……。実験台になってください」

「グルルウウウ……。！」

荒魂は都の方に跳躍し、その巨大な爪で彼に振り下ろす。だがその一瞬、その爪が彼を切り裂くより先にでかい体型の荒魂が両断され

た。

「え……？」

「え……？」

その光景を目で捉えた二人は思わず口を開いた。その反応に薫もわかる。なんにせ、都はいつも常識外れのことをしたのです。

「ふう……成功した！これでまた天然理心流の極地に一步進んだ気がする。」

そして、彼はまた妙なことで喜んでいる。あの剣術バカ……四ヶ月間に渡って、彼はどうやら剣術バカになったみたい。可奈美ほどではないが、剣術への熱情が取り戻したと沙耶香から聞いた。ついでに彼女に剣術指導をしたらしい。

「さて、後で説明するから、二人は戦闘に集中しろ！」

「あ、……は、はい！」

その後、全員の協力下で荒魂討伐はうまく遂行した。

◇

「おーし、全部片付いたな。」

「気配はもう感じないから、安心して」

「都、私は頑張った。」

「よしよし、沙耶香は頑張ったな」

荒魂討伐を完了したら、都は早速沙耶香の頭を撫で褒める。相変わらず沙耶香を甘やかしたな……と薫は仕方なくこの二人を見守る。

そうだ。この写真を可奈美に送ったらどうだろ？いや……彼女はヒヨヨンと違って、反応が面白くないし、ある意味で怖い(本能的に)。それに、可奈美は自分たちと違って、ずっと彼と会ってないまま。その精神ストレスがどれほど溜まったのがわからない。下手に爆発させたら、大惨事になるかもしれないから、やっぱり辞めよう。

「あの……衛藤さん、少しいいですか？」

「うん？」

そんな時、智恵は都にさっきの件で尋ねる。幸い彼は沙耶香の頭の癒やしがあり、さつきみたいにならないはず。

「実は貴方に聞きたいことがー」

「ねーへえ〜〜！」

そんな時、まるであの時の再現のようだ。ケタモノねは都の頭から智恵の豊かな胸の方へ飛び込む。

あれは大人でもなかなかないサイズ。その胸に目が吸い込まれない男性はいない。もう一度申す！おっぱいは男の夢！本能が求める母性の象徴。

そんな象徴に目を奪われることは仕方がない。だがしかし、ねねはそれを踏み越えた。なんにせ、あいつはおっぱい大好きな一匹のケタモノだから。

もちろん、それを誰よりも察知した都はねねを止める術がある。だが、彼は何もしまま、ねねの侵略を許した。

「ひゃあ!?!この子、私の胸に飛び込んできた……!?!」

おっぱいの着地を成功するねねは智恵の胸にその柔らかさを堪能できた。そして、その持ち主はねねに懐かれた……元い胸の方へ懐くところに驚く。

「やっぱり、ねねは智恵の胸が一番好きだな。まあ、この中でダントツで大きいから、当たり前だけど」

「な……!?!この子、せっかく可愛いのに……好かれても、あんまり嬉しくない……」

わかるけどな。ねねはその点がなければ、十分可愛いやつなのよ。

「胸がでかいのも立派の長所だろ。もつと喜べ」

「嬉しくないです!!」

「そういえば、七之里さんには『チチエ』って呼ばれてましたしね……」

「チチエ……?ーああ、『せとうちちえ』だからか。いいセンスだな。」

「確かにいいセンスだね……」

それに、胸もでかいから、そう名付けられるのも納得できる。

「薫さん、衛藤さん！簡単に納得しすぎ！それに、そもそもセンスよくないです！」

本人はどうやら気に入っていないみたいだが……。

「ん〜久々に賑やかになったな。ねねも喜んでいるみたいだし。

瀬戸内智恵、六角清香。二人の入隊を歓迎する。」

「ねねっね！」

「なんか素直に喜べないわ……」

「まあまあ、二人の着任には正直助かったのよ。沙耶香の負担も軽くなったし。」

「おい、俺は？」

「沙耶香は薫さんより働いていますよ。誰か重要なのか、一目でわかるじゃない？」

「うぐっ……！痛いところが突っ込まれた。」

今日の都も薫に容赦がしない。同じベッドで寝る同士なのに、彼は沙耶香だけに反応するのがムカつく。

まあ、あの五人（エレンと自分を除く）は前から知り合ったみたいだし。仲がいいのもわかるけどな……でもなんか心がモヤモヤする。

その後、今日は何もなく今日の任務を終わった。結局智恵はねねの件で、都に聞くタイミングを失った。



衛藤 都は謎だらけの男。

御前試合、十条さんたちの脱出に手を貸すことと決戦の夜にタギツヒメの注意を見事そらすこと。そして、美炎ちゃんの思い人であるこ

とに瀬戸内智恵が彼のことを前から凄く気になっていた。

何より、彼が荒魂を払うこともすごく驚いた。何にせ男性が荒魂を払うはずがない。唯一荒魂を払えるのは女性たる刀使しかない。

なのに、彼はその一般常識を軽く自分たちの前にぶつ壊した。彼は確実荒魂を切ったのだ。

「あまりにも異常な人だ」。

朱音様や真庭学長をメインする舞草の成員にも彼のことを高く買いました。彼は一体何者なのか、なぜそこまで特別な人なのでしょう……？

彼に対する疑惑がどんどん智恵の心を満たしていく。やがて、彼女は早くてもその真実を知りたいため、彼の事情を知る薫と沙耶香から彼のことを尋ねることにした。

「えつと……清香ちゃん。何しているの？それと、この状況は？」

お風呂の後、智恵は部屋に戻ったら、なぜか都が女子の部屋にいて、薫の髪を梳かしているところ。

「えつと……隊長は突然、衛藤さんに髪を梳かして欲しいと頼んで糸見さんもその後ろに並んで……私はその三番目です。」

「……つまり清香ちゃんも彼に髪を梳かしたいなの？」

「うーん、多分そうだね。誰かに髪を梳かされるのが気持ちがいいのです。瀬戸内さんもやったら、どうですか？」

「私は……そうね。彼に聞きたいこともあります。」

これで、流れるように衛藤 都のことをもつと知られるはず。ちょうど部隊の全員がここにいます。

そう考えて、智恵も髪を梳子かしてほしいと頼んで、順番が自分に回るまでに待つことにした。

にしても……薫さんの顔が赤いわね。やっぱり男の人にそうされるのも恥ずかしいのかしら？

それから、糸見さんの番になると、なぜか糸見さんは彼の膝に座っている。本当に仲良いよね……あの二人。

そして、清香ちゃんの番になると、彼女は薫さんみたいな反応をしながら彼と仲良く話している。

その光景はまるで兄妹とも言えるほど尊い。そういえば、清香ちゃんの前からお兄さんやお姉さんが欲しいと言っているわね……。私も一人っ子だから、その気持ちもわかるかもしれない。

それでお兄さんキャラの彼は妹を世話する経験でうまく年下の清香ちゃんと仲良くなつてたわけ。

それから、やっと自分の番になると……。

「とても上手はね。衛藤さんは……」

智恵は早速その感想を述べた。

彼の手はとても優しく、力が入れすぎないようにちょうどいい力で髪を梳かしている。まるで慣れているみたい。

「昔は妹によくそうしてくれたのよ。髪が短いけど、彼女は俺にそうされるのが好きらしい。それで、このような技術を身につけたのよ。」

「なるほど。衛藤可奈美さんも結構兄に甘える妹さんなんですよね？」

「まあなあ。妹に甘えされるのも兄としては何よりの喜びだ。」

「それはわかります。私もお姉さんだから、美炎に甘えされるのも凄く嬉しいわ。」

「実のじゃないでしょう？」

「それでも美炎ちゃんは妹みたいな存在なのよ。」

「なるほど。」

軽く雑談し、二人はいい流れでいい雰囲気を作った。それを見た他の三人はそれぞれの表情反応を取る。

「なんか俺達より仲良くね？」

「年齢近いだしね……」

「……………」

その中、沙耶香は胸苦しそうに都の方へ見る。彼が舞衣や可奈美、和、エレン、薫以外の人と仲良くするのはあまり好きじゃない。

なんだろう？この感情……。

「そういえば、衛藤さんのことはまだ知りませんでしたわね？良ければ、教えてもらいませんか？以後同じ部隊の仲間同士だし。今後と

も衛藤さんと仲良くやりたいです。」

そこで、いよいよ本題に突入する智恵。こういう自然の流れで本題に入るのは彼女の得意技の一つ。こうした方が情報も軽く得られる。

「……………最初はそれを狙ったのね。流石舞草のメンバー。」

「……………!?!」

しかし、その意図が彼に見抜かれた。そこで心が動揺された智恵ですが、数秒後にすぐ冷静を取り戻した。

しかし、彼女の同じ仲間の清香はまだ驚いた状態。つまり彼女も智恵が舞草所属ということが知っている。

「……………いつ気付いたの?」

「荒魂討伐の後は貴女からの視線が多く、加えて舞草のメンバーは長船の人間が多く。最後、俺が荒魂を払うことを見た刀使は必ず俺のことを気にしている……………違いがありませんか?」

「どうやら貴方を甘く見たわね……………ええ、全部正しいよ。ごめんなさい、私は貴方がなぜ荒魂を斬れるのを気にしていたわ」

降参したように智恵はだめ息をついた。この男は見た目よりしっかりしている。道理で学長も彼のことを高く買うわけね。

「薫さん、俺のことをこの二人に伝えてもいい?清香さんはともかく、俺は美炎が信頼している瀬戸内さんのことを信じたい。」

「いいのか?」

「今更何を言う?お前は最初からそのつもりで、わざと俺を女子部屋に誘ったのでしょ?」

「バレたが……………お前は時々怖いな」

自分の意図がすでに見抜かれた薫は彼に感服の顔をしている。ここ一週間、彼は薫のことをよく知っていたから。

「……………なぜ、私のことを信じるのですか?衛藤さん。私は貴方から情報を探すという不純の理由で貴方に近づくのよ。」

罪悪感なのか、彼女の口から申し訳ない気分が漏れた。けど、そういう思いを抱いたこそ、信用ができると思はそう思う。

「でも俺の秘密を気になるでしょう?誰だって俺の異常さを見れば誰でも気にするのよ。特に刀使。」

「ええ、だって衛藤さんは男性なのに……荒魂を」

刀使にとつて彼はあまりにも異常の存在。荒魂を斬れるのは御刀から神の力を授けられた巫女^{女子}。これは数百年前から流れ継いだこの世の常識たる物だ。

なのに、巫女^{女子}すらない彼は彼女たちと同じ破魔の力を持ち、異様な存在^{荒魂}を払った。

これは相当、数百年続いた常識をぶっ壊すと言うべく行為だ。

「だからその困惑を解けるため、こっちの事情を教えるよ。理由はさつきと同じ。」

「ただそれだけの理由……？そんな簡単に私のことを信用していいの？」

「うん、だって瀬戸内さんは悪者では見えない。むしろ責任感が強いお姉さんで感じ？」

「……なんか時おり衛藤さんは掴めにくいわね。考えが甘いというか、しつかりというか……わからないわ」

「まあ、こいつは可奈美のお兄さんだし。可奈美に似たような性格なんだよ。」

「甘い一面を持つ都是嫌いじゃない……」

話に加勢する二人は共にいい顔で智恵に向かう。それを見て、智恵も少し彼のことを疑う自分が馬鹿馬鹿しいと思いつつ始めた。

彼は人徳あり、人の支えになる。ただの男性だけど、彼女たちから得た信頼は莫大。

よく考えれば、御前試合の時から彼は既に自分を危険の中に投げ捨てた。それも家族^妹を守るため。

ならば、私も彼のことを信じてもいいのかな？ううん、きっといいはず。

「……そう。衛藤さん、私も私のことを貴方に教えてもいいですか？貴方が貴方の秘密を私に教える引き換えに」

「……え、そんなことしなくても」

「清香ちゃん、いいよね？私達調査隊のことをこの三人に」

「べ、別に構いませんけど……私も元々隠すつもりがありません。」

「ありがとう。清香ちゃん。」

清香から許可がもらえた智恵は笑顔で彼女に感謝する。

「衛藤さん、髪はそのままでもいいです。ありがとうございます。」

「どう、どうも……」

そして、彼女は都にも髪を梳かしたことで感謝する。彼の手によって綺麗になった髪はとても素敵なもの。

「それでは、ゆっくりお話ししましょう。お互いのことを」

智恵がそう言っつて、この部屋に小さな女子会（男がいるけど）が開かれて、深夜1時半までに続いた。



翌日――

「よし、今日こそ智恵と清香の歓迎会をやるぞー。と言っても、サボっていると思われないうよう、周囲の散策レクリエーションとする。」
薫たち五人はまた森の中に荒魂捜査を行う。この近くに荒魂もいるみたいだけど、スペクトラムの反応が弱いから、自分の足で捜査しかない。

「これなら、ただの山の中を歩いているだけでも、荒魂を探しているように見えるからな」

そして、薫は今まで通りにだるい口で仕事をサボりたいと思っつて、つい本音を隠す気もなくなつた。

「薫さんは全然本音を隠さないわね……」

「面倒くさがりの薫隊長が散策なんて珍しい。」

「そこは激しく同意するよ。」

「なんか二人共は凄く慣れていますね……」

清香は都と沙耶香の反応を見て、苦笑する。

「ここには温泉と卓球くらいしか？ 楽がないからな。温泉には毎晩

入ってるし、卓球は沙耶香と都に勝てないから、やりたくない。」

悔しいそうにほっぺを膨らむ薫。彼女は元遊びの初心者の都さえも負けることに悔やんでいる。

「いや、それはお前の体力が弱すぎから」

「うるさい！俺たちの相性が悪いのよ！」

都のツツコミに怒り返す薫。

実のところは薫の言うとおり、彼女の敗因は体力の差だけではない。都と沙耶香は生まれの天才だから、反応神経は普通の人間より早く取れる。何より薫の流派は一撃必殺なんだから、長期戦には不得意なんだ。

「……まあ、とにかく、散策を始めるぞ。どこも似たような景色だけど。せつかくだから、地形や湧き水の位置を覚えながら歩けよ。山の形を覚えておけば、いちいちスマホを見なくても現在位置がわかる。荒魂と戦った時に、スマホを見る余裕がないからな。」

「なるほどー！流石隊長ね！」

「勉強になります……！」

「ふふん、そうだろう。後で獣道を使った近道を教えてやる」

「……………」

「沙耶香、どうしたの？」

沙耶香がぼつとすると、ところを気づいた都は彼女に尋ねる。

「……………都。これって、レクリエーション？」

「……………」

「薫隊長、私達に山での知識を教えようとしている……………」

「やっぱり沙耶香も気付いたが、これは彼女特定の歓迎会だ。瀬戸内さんと清香さんたちにもっと早く山での行動を慣れるように気遣いをしたのだ。」

普段はあんなにだるい人なのに、ちゃんと周りのことを気遣う点は彼女の良いところである。いや、世話が好きと言うべきなのか？

「なるほど。流石、薫隊長。」

「そうだね……………彼女に感謝しない？」

「うん……………そうだね。」

都の案を応じ、沙耶香は薫のところへ行つた。

沙耶香を見送つた後、智恵さんがいつの間にも都の隣にいた。

「衛藤さんはいつもこの調子で糸見さんの面倒を見るのですか？」

「なんのことですか？」

「……衛藤さんはさつき、糸見さんを薫さんに会話させるきっかけを作つた。それで彼女と薫さんの仲をもつと深くさせようとしている行為なんじゃないですか？」

そうしたら、彼女が自ら沙耶香の件について自分の予想を挟んで話をかけた。

だが残念なことに、彼女の予想は半分しか当たらない。

「半分正解かな？ 沙耶香は特に薫さんと仲がいいので、別にそんなことしなくてもあの二人はきつと良い友達になれるはず」

「そうですか……じゃ、本当の正解はなんですか？」

「俺はただ沙耶香にもっと主動的に、他人に話をかけるチャンスを作るだけ。あの子は自分の感情を表すのは苦手なので、その方面を少しずつ改善して欲しい。」

「なるほど……衛藤さんは本当に優しい人ですね。」

都の気遣いに微笑む彼女。

昨夜でお互いのことを話し合つたら、彼女は都がどんな人なのか、よくわかつてしまった。

ただ一言で言うと、お人好しのお兄さん。

「……………衛藤さん。よろしければ、これからは私のことをお姉ちゃんと呼んでもいいのよ？」

彼女から何かを言うと思えば、結局不純の理由が……。やっぱりこの人は危険だ。

「悪いが、俺はちよつとお姉さんキャラが苦手ー」

「違うの、貴方は美炎ちゃんより相当無茶だから、お姉ちゃんとしては見逃せないの。舞草の件も貴方に感謝しなければ……孝子さんだけか助けられたけど、それでも舞草のため、燕 結芽の足止めをすることはやっぱり貴方に貸しが有ります。」

都は彼女を断ろうと思う時に、彼女は舞草の話をした。あの襲撃さ

れた夜、彼女も相当仲間のことを心配しているらしい。

「そ、それはただ妹たちが後ろにいるから、そうしたのよ。別に舞草のため……」

「それでも舞草に協力したことは本当にありがとうございます。」

「礼はいいよ。別に感謝されたくてやつちやうことじゃないから」

照れているのか、都は少し顔を智恵の方向から逸した。その可愛い反応にくすくすと笑う智恵。

「ふふっ……衛藤さんって案外可愛いですね。決めた、貴方のわがままを何でも聞くお姉さんになります。私ができる範囲なら、お姉さんに甘えてもいいのよ?」

「それは遠慮させていただきます!」

「ちなみに一回お姉さんって呼んだら、願いを二倍効果にするのよ!」

「清純の男を誘惑すんな!それより、今は二人が山を慣れなくちゃ。俺、沙耶香や薫はいつ、異動になるか、わからない。俺はともかく、二人は名がある刀使であることは知っていますよね?」

「それはもちろん。でも衛藤さんも結構有名な人だと思うよ?ううん、有名になるはず。」

剣の腕はともかく、指揮の腕も優れている。今はミルヤさんほどじゃ見えないけど、見事な指揮能力でした。

きつといつか名がある指揮者として五箇伝に広がるはず。

「お世辞はどうも。」

「……別にお世辞じゃないけど」

しかし、彼はそういうの関心してないらしい。ううん、自分のことをちゃんと見ていない。

昨夜で彼がいい人とわかっていると同時に、彼が自分のことを大事にしないタイプの間人だと知りました。

他人のためなら、自己犠牲でも構わないそういう人間に智恵は放っておけない。

故に、自分の能力範囲内に彼のことを助けたい。

それはただ舞草を助けた恩返しだけじゃなく、彼女自身の優しさに

よってしたいことです。

第43話：帰還

―11月―

今年の終わりまでは、あと1ヶ月。もうすぐ涼しい秋から厳冬に転換するこの時期。

日本各地はこれから迎える極低温の厳冬とインフルエンザなどの季節に易く流行れる病気を防ぐため、防寒用の服装や保暖用の器具を売り始めた。

そんな季節の下、刀使たちも自分の健康注意を忘れず、防寒用の冬服を用意しながらも普段の荒魂討伐を行う。

その中、ただいま群馬から帰還した彼らも防寒用の服装を先に用意してから、管理局本部に戻った。

「ただいま帰還いたしました。衛藤 都です！」

「同じく帰還いたしました。益子 薫だ。」

本部に呼び戻した薫と都二人は現在刀剣類管理局の廊下で二人の上司及び作戦本部の本部長を務めた真庭紗南に敬礼する。

「ご苦労。沙耶香は？」

「沙耶香なら外で待機しております。後で一緒に昼ごはんをする予定なので、早めに終わらせていただきたい。」

「わかった。まず、お前たち二人は私についてくれ。合わせたい人物がいる」

そうだけ言って、彼女は薫と都二人を連れてどこかに向かう。

そして二人は何も言わずについていく。

まあ、口に出さなくても隣にいる薫の表情からいかにも不満なのか、よくわかっている。

「それより、衛藤。この前のことだが……もう言えるようになった

か？フード刀使のことについて」

そして、自然に彼と群馬で起きたことについて話す真庭本部長。

そのことは前に混乱を起こさせたくない理由で、彼は口を出すのがやめたが……彼が本部に帰還した以上、彼は犯人特定捜査任務に加える。

現在、彼は五箇伝唯一フード刀使の正体を把握しているかもしれない人選だ。

「はい。今だに五箇伝に所属していた全ての刀使の流派は知りませんが……犯人が五箇伝の刀使ではない可能性が高い。」

「そうか……一応聞くけど、皐月夜見の可能性は？彼女もまた鎌府学長と共に行方不明中だ。」

「それはありません。皐月さんの流派は知りませんが、少なくとも……あの流派じゃない」

「うむ……じゃ、御刀は？」

「……」

「そうか……」

本部長は都の反応から見ると、それも言えないことだとわかった。彼は極めて混乱を避けたいのもわかりますが、それほどのことなのか？

「じゃ、質問を変えよ。フード刀使の実力はお前から見ればどのくらい？」

「………親衛隊と同等、もしくはそれ以上かもしれない。信じがたいが……自分も危うく斬られるところだった。」

「そうか……本当にご苦労だったな。衛藤」

「いいえ、二回くらいに犯人を見逃した自分は特に何も……犯人に関する情報を知っていても本部長たちに教えなくて、本当にすみまーうぐつー！」

「………まったく、あまり自分を迫りすぎるなよ。言えないことだから、言えないって言うんだ。だから、あんまり気にするではないぞ。都」

「薫……」

そして彼の表情から彼が管理局の力になれないことで自己責めて

いることを先に気づく薫は彼の背中を叩きながら、ちよつとだけ優しい口で慰める。

彼は真面目な人なんだから、責任感も強い。それはとてもいいところだが、時に自分を迫りすぎた時もある。

「それにその言い方だと、隊員たちを守れきれないことは俺の誤りでもあるんだぜ。」

「そんなことは……!」

「いいんだ。隊員が背負う責任を背負うのも隊長の務めなんだ。お前が背負うのが俺が背負う。」

「……」

「それが友達と言うんだ。俺とお前は特に友達なんでしょう?」

「友達……。そうだね。ありがとう、薫」

「いいんだ。俺とお前は友達なんだから、気にすんな」

故に隊長……いや、友人として彼のことをちゃんと注意しなければ。

「………薫も結構変わったな。」

そして、そんな二人の交流をこっそり覗く真庭本部長は小さく微笑んだ。

◇

数十分後、三人はとある一室で足を止める。部屋のプレートには『此花寿々花』の文字が書いてある。

「彼女に聞くのか?」

「ああ……お前は獅童真希が犯人ではないと報告したが、ただ二回の事件遭遇回数では彼女の無罪を証明できない。」

「そう……」

「不思議そうな顔ね。お前と獅童真希は特に仲良いわけではないのに、お前は彼女が犯人ではないと希望している顔だね。それとも同じ

親衛隊の仲間という故なのか？いや、お前は候補だったな……すまない。」

都の反応を見て、真庭本部長はすぐ口を言い直す。

「いや、それは事実です。俺は親衛隊と特に仲良くはないが……それでも、獅童さんは悪者ではないと思う。」

そう呟いて、都は他の二人と室内に入る。

入室すると、部屋の奥に備え付けられたベッドに一人の少女が眠っていた。髪を下ろし、病衣に身を包んだ此花寿々花だ。

「……ん」

三人の入室した音で目を覚ました寿々花は重たげな瞼を開いた。

「……今日はどういったご用？」

「ちよつと聞きたいことがあつてな。その前に……」

真庭本部長は横に移動し、都たちを寿々花に見せつける。

「あら、珍しいご来客ですわね。益子さんと都くんまで」

そうしたら、彼女はなぜか都だけに甘美の笑顔をする。

「ねーっ!!」

突然、今まで静かだったねねが薫の頭に乗し、寿々花を睨み付けながら吠える。

「かなり抜けた、って聞いたんだが、まだまだみたいだな。ねねが言ってる。『まだ荒魂の匂いがする』ってな」

寿々花は五ヶ月前の戦いの後、舞草との取引に応じた。刀剣類管理局の新体制に協力する代わりに自分たちの側につけ、と。そのためには彼女の肉体にノロが残っているのは駄目だ。

一応、数ヶ月かけて治療を行い、現在はほとんど元の状態に回復したらしいが、それでもまだ荒魂の残滓は消し切れていないらしい。

「薫さん、それが事実ですけど。言い方は少し控えてください」

「チエ……」

都に発言を訂正されて、薫は舌打ちする。この二人はそんなに仲が悪いのか？

「寿々花、まだまだ大変だけど。出院したら、何かを奢るよ。」

「……相変わらずお優しいですね。ええ、その時はぜひお願いし

ますわ」

「…………と、とりあえず、今回も聞き取りに来たんだよ。これを見てくれ」

少し二人のメロメロ雰囲気に引かれた真庭本部長は持ってきた写真を寿々花に見せる。そこには例のフードの刀使が映っていた。

「……間違えありません。これは真希さんですわ。」

一目で獅童真希だと見出す寿々花。流石同じ親衛隊の人間と言ったところか……。

「ならば、こいつは？」

もう一つの写真を彼女に見せつける。そこに映ったのは間違えなく二天一流の使い手だ……。

「二人はどういう関係だ？仲間もしや協力者？」

「ありえませんが。真希さんは自分の過去に決着をつけるために飛び出していたはず……今更、他人に共同行動なんて……」

そう言い。寿々花さんの顔はとても複雑の思いが浮かれていた。無理もない。獅童さんが犯人として疑われるなど、嬉しいはずもない。ましてや、そんなことはないと心から言いきれない自分がいることも。

そんな彼女は少し放っておけない。

「本部長、薫さん、申し訳ないが。少し席を外してもらいませんか？」

「どういうことだ、衛藤？」

「寿々花と話したいことがあります、俺でなければ少々話にくいことなので」

嘘ではない。これから話すのは二人の中でしか共有できないからだ。

「……わかった、お前の判断を信じる。だが、後で何の話をしていたのかは聞かせてもらう」

「わかりました。ありがとうございます、本部長。」

「都、あまり浮かばないですよ。でなければ、可奈美と舞衣とヒヨヨン三人に会う顔がないからな」

「誰か浮かぶか！それと、なんてあの三人？」

「はあ……………」

ちよつと、寿々花までため息!?なんで？

自分の鈍感さを完全に気付かっている都。いや、彼が舞衣のことを好きなのは自覚しているが、向こうも同じ気持ちなのかは知りません。

そもそも、彼も自己犠牲な人なので舞衣が他の人と付き合っても、彼はきつと介入しない……………はず。まあ、前提としてはいいやつならば。

その後、真庭本部長と薫はそそくさと退室する。都は寿々花のベッドの隣に置かれた椅子に腰掛け、会話を切り出した……………と。その前、寿々花にドジ目された。

「鈍感。」

……………だから、なんだよ。

「…………ゴ、ゴホッ！や、やり直すとして、俺は獅童真希がこの件の犯人に思わない。関係者であるが、犯人ではないと断言できます。」

「なんでそう言いきるの?」

よし、やつと本題に入った。

「会ったからだ。」

「真希さんに会ったの!?!」

驚く顔で都に尋ねる。彼女のこの反応を見ると、この二人の関係は相当に親しいに見える。

「ええ、10月のある日に俺は群馬でもう一人のフード野郎と交戦した。危ういところに、獅童さんに救われた。」

「なるほど、やっぱりいつもの真希さんですね。」

「ええ、彼女に救われたことに俺は凄く感謝している。が……………感謝の意がまだ伝えずに俺たちは予測外のことに驚かされた。」

唾を飲む。都はこのことを彼女に伝うため、かなり勇気が必要。

都の目からそう感じた寿々花も彼のことを待つ。やがて、彼は口を出す。

「…………俺たちが立ち向かう相手はもう一本の御刀を何も無いところ

から取り出した。そこで、二天一流の構えを取った。」

「二天……一流だど?!馬鹿な、あれは!!」

そうしたら、寿々花は予想内の反応をした。

「気持ちが変わります。俺と獅童さんは結構驚かされたのです。寿々花……折神紫以外にあの流派の使い手がありますか?」

「ありえせんわ。あれは紫様だけか使える流派なんですわ。あの方以外の使い手はいないはず。」

「それもそうだね……だから、このことは俺と貴女、獅童さん以外、誰にも伝えられません。伝えたら、ただ混乱を増す一方です。」

「……賢明な判断ですわ。で、なんで私にこのことを?」

「だって、貴女は元親衛隊の人間ですから。折神紫様のことを俺たちより詳しいはず。」

「なるほど、貴方らしいですわ。いつも冷静に正しく、より効率的な判断をします。流石、元第五席ですわ。」

候補です。俺はお前たちの仲間に入れなかったのですよ。

「それと、これからはただの推測ですが。獅童さんは何らかの方法と理由でこの件の犯人を追跡していると思う。顔を隠していたのは、多分親衛隊がこの件に関わっていると思わせないため、というのは俺がこの間に考えた推測です。」

「……なるほど、それならば辻褄が合いますわね。」

あくまで推測でしかないが、これまでの経緯や状況証拠、獅童さんの性格から考えるとこれが最も自然な形だと思えた。だとすると、彼女は無罪で間違いない。

ただ、彼女が二天一流野郎を追う理由が今だにもわからない。

この五ヶ月間、獅童さんは何かあったのでしょうか……。

「さて、確認したいことが確認できたし、真庭本部長に今の話を伝えてとするか。この後も沙耶香と昼ごはんの予定がありますし」

「あら、もう行くのですか。少し寂しくなりますわ。」

都が立ち上がると、寿々花は少し寂しい顔をした。

彼とただ三ヶ月ほどの付き合えだが、彼女は既に都のことを友達……元い親しい仲間だと認識していた。

そして、彼は獅童さん以外に寿々花唯一の味方である。家族なんて親衛隊より薄い関係でした……。

「大丈夫。貴女が出院したら、必ず色んなところまでに連れて遊ぶ。その時……獅童さんも一緒だ。何かあっても彼女を貴女の前に連れて戻す！約束する。」

「…………お世話焼くのが好きですね、貴方は。ええ、真希さんのことはよろしく頼みますわ。」

「はい、お任せください。…と、出る前に。これを」

「あら？これはマフラー？」

出る前、彼は寿々花に新品のマフラーをあげた。

「はい。ずつと室内とはいえ、身体が冷えてしまう可能性があります。故に、これを寿々花に送る。ついでに、この前お祝いできなかった誕生日プレゼント。」

「私の誕生日は特に過ぎてしまったのに……いまさら」

呆れるふりをしたものの、寿々花は彼がプレゼントしたマフラーを大事に受け取る。

何にせ、これは今年。彼女が初めてもらった誕生日プレゼントなのだ。

「お気に入らなかつたら、捨てでもいいぞ？」

「貴方はわざとそう言いますの？貴方からのプレゼントは当然大事に扱うわ！此花の名に賭けて」

「あはは……それはちよつと嬉しいかな？それじゃ、俺はそろそろ行くから」

「ええ、くれぐれもお気をつけて」

「あつちこそ、ノ口が完全に体内まで抜け出す前まではちゃんと休養してね。」

関心の言葉を挟んで、彼はこの部屋から去っていた。

「はあ……本当にずるい方ですね。でも……ありがとう、都くん。」
彼が部屋から出た後。

マフラーを大事に抱く寿々花。
今年がもうすぐ終わったこの頃、彼女は既に誰から誕生日お祝いされたことに期待していなかった。

バラバラされていく親衛隊はもちろん。自分の実家である此花家も漏出問題以降、娘への関心の言葉が一度も来なかった。

お誕生日のお祝いの一言も何も……故に、彼からのお祝いはとても嬉しかった。

血が繋ぐ、自分をただ政治の道具として利用した家族より、彼女はこっちのほうが好きだ。

「貴方から頂いたマフラーはとても暖かいですわ。」

そして顔をマフラーの中に埋め込む彼女。

マフラーのせいで、今の顔が隠されていたが……それでも彼女の顔が真っ赤であることは隠しきれなかった。



「ごちらはK。目標二人は昼ごはんを買い出し中。E、そちらの状況は？」

『問題ないデス。カナミンとヒヨロンはまだ計画を気づいていマセン。現在二人は道場で立ち会いをしていマス』

此花寿々花に尋問したあと、薫はエレン……代号Eという人物に話中。現在、彼女たちはある理由で可奈美と？和、都と沙耶香を監視中及びこの2つのチームを会わせないようにする。

「ならば、M。そちらは？」

『ケーキはまだですけど。雅ちゃんの手伝いがあって、早くなりま

す。』

「そうか……とりあえず、計画は絶賛進行中だ。ねねもあの二人についていて、時間稼ぎをする。」

『ねねちゃんに？大丈夫ですか？』

「まあ、大丈夫だろう？沙耶香は結構ねねのことを気に入っているみたいだし、都も大概ねねのこともお気に入ったみたい。」

そう言つて、薫は遠くからあの二人のことを見ている。二人はまるで兄妹みたいに普通にお買い出し。この光景は絶対に可奈美にバレちゃだめだ。

「それにしても、今日はたまたますぎやないか？この日に大事なことが3発にあるなんて……」

『薫、文句を言わずに！これもミヤマヤ、サヤ、カナミンとヒヨコンの大事な日なん德斯ヨ！薫はお祝いたくないのか？』

「まあ……それは、もちろんお祝いしたいよ。何にせ、どいつもこいつも頑張り過ぎだから、こういう日だけふわふわの気持ちで過ごさせたい。」

『やっぱり薫ちゃんは優しいですね。』

『薫はそういういい子なん德斯から』

電話の向こうから少し甘い言葉が伝えてきた。別に自分はいい子なわけじゃ……ただ偶に、あいつらを軽くしてほしい。

「そういうえば、可奈美は今日が何の日なのか、知っていますか？それと、都も……」

『それは大丈夫德斯。ヒヨヨンがいるおかげでカナミンは剣術熱心德斯』

『都くんなら、〃自分の誕生日〃を気にしないと思う。彼はいつも自分の誕生日を忘れる癖があるの……それも重い理由がありますけど』

「……重い理由か。……とりあえず、この話題を置いて。今日のことのために朱音様もわざと俺たちの任務を取り消した……というか、俺たちの案をよく賛成しているな。」

『学長たちもこの計画を賛成していて、私達の任務を他の刀使をや

らせた。』

『皆はミヤマミヤたちのこと好きなん德斯ね。』

まあ、それもきつと俺たちが折神紫を倒したからだ。ただの子供たちに世界の運命に任せるとは、きつと二十年前の件を参加する学長たちも相当辛いだろうな。

特に刀使すらないあいつさえも巻き込まれた。本来彼が後方で俺たち刀使を支援する役なのに……色々あって、あの決戦の地で親衛隊と決着をつけるだけではなく、俺たちが倒れた後も、可奈美たちを助けに来た。

色々と頑張りすぎるんだよ。あいつは。

『あ、私はそろそろ作業に戻るね。それじゃ』

『ワタシも監視に戻しますね。薫、サボじや駄目だよ』

「サボらないよ！ 全く……エレンと言うやつは俺のことをどう思っ
てんだ。」

通話を切って、薫は文句を言いながら都たちの後ろにこっそりついていく。

今回の作戦は絶対に成功させないと、彼女……ううん、計画を入れる者たちはそう祈っていた。



数時間後――

「……………」

「……………」

御刀を構え、対峙する二人の少女。衛藤可奈美と十条姫和は刀剣類管理局に併設されている剣術道場にて、手合わせを行っていた。

二人の実力はほぼ互角であるゆえ、勝負がほぼつけられない。でも、最大の理由は可奈美がもっと？ 和の剣術を見たくて、わざと手抜きしてた。

それでも、？和は油断しちゃいけない相手であった。

「ねえ、もう一本する？」

「……いや、もうそろそろいいだろう」

これでもう五回は打ち合った。それに、今日は皆で集まる約束になっっているのだ。道場に差し込む陽光が夕焼け色に染まってきた。切り上げるには丁度いい。

御刀を鞘に収まり、？和は戦闘体勢を解けた。それを見て、可奈美は少し残念そうな顔だけど、立ち会いはいつでもやれるし、今日はここまでにするのも悪くない。

それに、今日は久々に皆と会えるし。そちらもわくわくするんだ。

「カナミン、ヒヨヨン。迎えに来マシタよ」

「エレンちゃん！お久しぶり！」

可奈美の後ろから聞き慣れた声が飛んでくる。振り返ると、道場の入口にエレンが立っていた。

「いつ来たの？」

「たった今デスよ。」

「もう、皆揃っているのか？」

「イエス。皆はもう食堂で集まってイマス。残るのはカナミンとヒヨヨン二人デース。」

この六人が揃うのは五ヶ月前の夏祭り以来だ。可奈美は勿論、姫和も楽しみにしている。

けど、あの時はもう一人がいた。とても大切な人。あの決戦の夜から全然顔が会ってないし、そのことに可奈美はもちろん、？和もかなり寂しかった。

付き合うのは短いが、？和はあいつとの日々は楽しいと思う。あの決戦の夜にも、自分を助けるためにやってきた。

この恩はどうしても彼に返しておきたい。…ううん、どうしても彼にお礼を言いたい。

「皆に長く待たせちゃ悪いので、？和ちゃん。行こう？」

「うん、そうだな。」

「……と、その前にヒヨヨンとカナミンにいいお知らせがあります

よ！」

「いいお知らせ？」

珍しく二人の前にわくわくする顔をしたエレン。可奈美と？和が、もしかして良いことでもあったのか？と推測したけど……違うようだ。

「実はもう一人がここに来るのデス。とても大事な人なの！」

「うん……？」

「なんだ……？早く言え、エレン。」

「彼」に会ったら、すぐわかりマス。さて、ネタバレはここまでにしましょう」

嬉しい顔でそう言ったエレンはすぐ道場から出て、その後ろにはエレンの言葉を理解しない二人。

彼、つまり男。だが、それは一体誰のことなのか？自分が知り合う男性はお父さん以外にエレンのグランパしか知り合っていない。

だったら、私達にとつていいお知らせは一体……まさか！

可奈美より先に気付いた？和。彼女は少し横目で可奈美の方へ覗いたが、このバカはどうやらまだ気付いていないようだ。

にしても、自分の推測が当たったら……またあいつに会える。

少し彼との再会に楽しみにしていた？和。彼女はまだ顔が赤くなることが気付けなかった。

第44話：誕生日会

「マイマイ、薫、サヤ。カナミンたちを連れて来たよ！」

「みんな！」

「ただいま。」

「うん。」

「おいつす。」

鎌府の食堂に到着したあと、あそこは既に残るメンバが一番遠い位置に座っている。薫、沙耶香、舞衣三人だ。

「みんな、お帰り。舞衣ちゃん、美濃関の皆、元気だった？」

「うん、相変わらずだよ。それと、可奈美ちゃん分の課題はこちらに預かって来たから」

「うええ〜課題あるの……？」

課題という名詞を聞くと、可奈美はすぐ皆に会える喜びが凹んちゃった。彼女たちが刀使の前では学生だった……。普段は荒魂討伐という重大の任務があるけど、学生方面もちゃんと気を締めないといけない。

「当たり前だ。私達はまた学生だぞ。」

「そうだった……！」

そのことを思い出した可奈美はすぐ泣きそうな顔。彼女が勉強不得意ということは？和もこの間の付き合いに知られた。

「頑張れよ〜」

「薫、ワタシ達の方も長船から届いたのデスよ〜」

「こつちもかよ……。俺たちを散々使われるんだ。それくらいは免除しろ」

「それとこれは別。」

面倒臭がりの薫もどうやら宿題から逃れられないみたい。この場で宿題を嫌いな人間は可奈美と薫くらいだ。

ちなみに、薫の成績はまあまあ普通の程度。ただ普段はやる気がなく、エレンがない時は勉強もしないまままでテストは大惨事になる時

もある。

「また騒がしくなりそうだな。」

五ヶ月ぶりの六人との交流に？和は懐かしく、暖かく思う。また六人と一緒にいることは彼女にとって何より温かい日常である。

「そういうえば、エレン。あいつはまだ来てないか？」

「あいつ？ああ……ミヤミ……もうすぐのはず」

危うく彼の名前をバラすエレンは急ぎに言い直した。可奈美と？和にサブライズするのはこの場全員の共識である。

「そういえば、エレンちゃんは今もう一人がここに来そうと言ってたよね？誰なの？私たちでも知った人？」

「それはちよつと言い辛いですケド……」

「……？」

「まあ、会えばすぐ分かるぞ」

……と、薫が可奈美にそう言う間、ちよつと噂の彼が帰ってきた。

「六人分のクラッカーを買ってきたぞ〜。ていうか、なんで六人分なんだ？エレ……」

「……え？」

「……」

その声に引き寄せられ、全員の視線は彼の方へ集中する。そして、六人の一人は彼の出現に見動きが固まった。

それと同じく男の方も固まっている。意外の再会にこの二人はお互いを見つめ合う。

絶対会いたい、抱きしめたい相手がそこにいる。五ヶ月ぶりにこの兄妹はやつとお互いのことを会えた。

だが、双方は動かないまま……いや、誰か先に反応するのを待っている。だって、これは幻だったら、きつと失望するのだろう。

けど、このままじゃ固まって見つめ合うのも気まずそうなので、彼から先に反応をした。

「……お久しぶり。可奈美。」

「……おにい……ちゃん？」

「……えつと……ただいま？」

気まずそうな顔で最愛の妹に言う都。彼もこの場でどうすればいいのかは知らない。可奈美のことになると、頭が多数の選択が現れて、どれにしようか迷ってしまう。

抱きたい、頭を撫でたい、お喋りしたい、妹の声を聞きたい、彼女の顔をしっかりと見たい、彼女の元氣ふりの笑顔を見たい。それらは都が五ヶ月間、ずっとやってみたいことだ。

「……………」

ただ一瞬。その一瞬、彼女が彼の方へ走っていた。そして、彼のことを強く抱きつく。

懐かしい匂い、懐かしい感触、お兄ちゃんの匂いだ。これはお兄ちゃんだ。幻なんじゃない、大好きなお兄ちゃんなのだ。

ずっと会いたかった。都が思うことは可奈美も思ってた。これは兄妹……いや、兄妹関係を超える兄妹愛である。

「お兄ちゃんだ！本当に……お兄ちゃんだ！幻覚なんかじゃない！」

強く彼を抱きしめる。ずっと会いたかったお兄大好きな人ちゃんがすぐ目先にいる。

彼女の囁きは都の胸あたりによく伝わってくる。正直とてもなく恥ずかしいけど、お互いを思う気持ちは理性すらも遠くへ吹き飛ばされた。

何にせ、五ヶ月ぶり会えない家族大事な人がここにいるから。

「ああ……まさしく本物のお兄ちゃんだよ。長く待たせだな、可奈美。」

「うん、そうなんですよ！ずっと……ずっと寂しかった！私はずっとお兄ちゃんのことを……ずっと会いたいよ！」

彼女が顔を上げた瞬間、彼女が泣いていること、身体が震えていることがわかっていった。舞衣と同じく、彼女も自分のことを同じレベルと想っていた。そんな思いに都が嬉しかった。

「そうか……本当に悪かったな。もう離れないから」

「うん……絶対だよ。絶対！」

「ああ……約束する。」

彼女を抱き返して、頭も撫でる。まるで恋人再会のようなシーンがこの食堂広まる。

それを見届けた五人は、もちろんこの兄妹に超える親しさに呆れたが、誰もあの二人の間を邪魔しない。

彼がどれほど妹のことを思うのか、この場にいる？和たちはよくわかってる。

「もう少し抱く？」

「うん……このままにいたい／＼／＼／＼」

「わかった。」

ずっと都から離れないわがままの可奈美。これはずっと強がっていた可奈美の本性だ。それを知っているのは沙耶香と薫以外の全員である。

彼女はかつて都を失う絶大の悲しみからエレンのことを叱ってた。その時の可奈美はとても冷たく、理性が失う状態。幸い？和がいたこそ、可奈美はやっと立ち直した。

けど、その時に晒す一面は間違えなく可奈美の一面の一つである。彼女はずっと都がいたからこそ、その感情を抑え続けた。

それは親友たる舞衣でもできないことだ。何にせ、可奈美を真っ先に支えるのは確か他でもない、彼だった。

「可奈美ちゃん……良かったです。」

「良かったデスね、カナミン。」

「良かった。」

「めでたいじゃないか。」

「……………おめでとう、可奈美。」

五人のお祝いの下、この兄妹は五分ほど抱く体勢を続けた。この間は周りから色目やコメントが流れてくるが……多くにいるのは「おめでとう。」というコメントでした。この場で、この兄妹にお世話された刀使たちもいるらしい。

数分後――

「皆、悪かったな。長く待たせてしまった。」

「……………／＼／＼／＼／＼／」

激動した感情を少し冷めた後、可奈美と都はやっと離れ、皆に向かう。だが一人は平然とした顔、一人は真っ赤な顔。

「こいつは羞恥心がないのか？と全員は一斉に思った。」

「別にいいんだよ。せつかくの家族の再会だ。他の連中の感覚を気にする…………いや、気にするよー！」

「薫、そこはツツコミいらないデース。」

「でも薫ちゃんの言う通り。こうして再会できて良かったです。」

「そ、そうだな／＼／＼／」

「うん…………ありがとう。舞衣ちゃん／＼／＼／」

なぜか舞衣に照れた都。彼と舞衣はどうやらある程度に進んだらしい。

「むふふ、ヒヨヨンもミヤミヤに言いたいことがないデスカ？」

その時、エレンは？和の近くにこう囁く。何の目的があるかは知らないが、確かに言いたいことがある。五ヶ月前のあの夜から。

エレンに精神的に押されられて、？和は都の前までに立つ。五ヶ月前りに二人もようやく会えた。

「……………和…………」

さつき可奈美と再会するときも同じく、都も？和に何かを言うのが迷う。そのせいで、彼は？和の前にかなり落ち着かない様子。

「都。」

「は、はいー」

？和に呼ばれ、都はさつきよりも緊張している。なぜか？和の前に冷静になれない。

「ひとまず、お帰り。それと、今後とも勝手に可奈美や舞衣の前から消え去るな」

「……………は、はい」

「はい、しか言えないのか？」

「そ、それは……」

「まあ、とりあえずお帰り。ずっと待ってたよ、都。」

「……………た、ただいま」

そう言い、？和の表情はさつきより柔らかくなった。そんな？和に彼はちよつと胸がぎゅつとした。

それと同じ、？和も再び彼と会うことに嬉しく思いながら胸の鼓動が止まらない。きつとこれは喜びの表現だと彼女はそう勘違いしていた。

「……………それじゃ、やっと七人が改めて集まったところで……………エレン。」

「ハイ！ミヤミヤ、サヤ、ワタシ達と一緒にきてクダサイ」

「……………え？」

「私も……………？」

「ハイ！とっておきのサプライズがまた残っていますから」

そう言い、都が正式に七人の行列に帰還したあとは、沙耶香と二人でエレンに薫、舞衣と他の二人に沙耶香の部屋までに連れていた。



「……………ハッピーバースデー！……………」

六人が鳴らしたクラッカーの弾ける音と発射された色テープが沙耶香と都の頭に降り注いだ。二人の肩には『本日の主役』と書かれた襷たすきが掛けられている。

それを驚いた二人は同じ反応だった。

この二人は誕生日会とあまり縁がない仲間同士。特に都は母がなくなつた後は、父が仕事の件でよく彼の誕生日会に参加できないせいで、彼は凄く寂しい誕生日を過ごしました。

妹の可奈美がずっとそばにいるけど、親がいない誕生日はやはり寂しく思う……。それ以後、彼は自分の誕生日に関心しなくなった。誕生日の日にも毎日のように普通に過ごす。

誕生日は一体何なんだろう？と、彼は時おりそう思ってた。

「今日、糸見さんと英雄様の誕生日だって聞いたから皆でパーティー開くことにした。ちなみに提案者は柳瀬さんです。」

今回のサブライズパーティーの計画者の一人。竹島 雅は今回の主旨を話す。

今日は俺の誕生日だったんだ……。

本日、11月17日は沙耶香の十三歳の誕生日また衛藤 都の十七歳の誕生日でもある。この二人の誕生日はたまたま同じ日であるため、沙耶香以外の六人は少し前からサブライズのバースデーパーティーを計画していたのだ。

ちなみに、可奈美は剣術に夢中で完全に都の誕生日を忘れた。それでも沙耶香の誕生日に手伝いをしたのだ。

「都くんは普段から誕生日なんで気にしない人なんだから、こちら側から誕生日のお祝いを行いたいと思います。もちろん、沙耶香ちゃんも誕生日もお祝いしたい。」

「糸見さんは確かに誕生日なんで全然関心しないから、聞くときも「……？」って反応でした……誕生日という情報を探すのも結構大変だった。」

「にしても、まさか沙耶香と都は同じ誕生日だったとは……運命しすぎるだろ。」

「うん、私もびっくりした。でもおかけで一緒にお祝うことができた。」

「そうだな……って、可奈美はどうした？」

「あはは……お兄ちゃんの誕生日を忘れるなんて……妹失格だ……」

「都の誕生日をすっかり忘れたことに自責め中。まったく、このくらいで落ち込むなよ、可奈美。」

そして自分の兄の誕生日をすっかり忘れた可奈美はちよつと泣き

そんな顔。何にせ、自分の家族の一番大事な日を忘れたから。

？和も薫に説明しながら、可奈美を慰めている。

「でもお兄ちゃんの誕生日を忘れたのよ……私。」

「だから、そのくらいのことには気にすんな。都も気にしないと思う」

「そうだけ。なあ、都もそう思うだろう？」

「まあ……うん。」

薫は都に意見を投げたが、彼はただ無力に返す。

正直、こういう時にどういう反応を取るかわからない。お母さんがいなくなつたあと、俺は特に誕生日のことを忘れた……妹の誕生日でも、ただ妹のことを夢中に祝うだけ。

自分のを祝うなんて……わからない。自分を祝う誕生日はもう過ぎたことだ。

「……なあ、可奈美。これが普通なのか？」

「……多分。お兄ちゃんは誕生日の日にずっとそういう反応です。お祝いしたいけど、いつも避けられた……一年中、その日だけは私のことを見てくれない。」

「誕生日恐怖症なのか？あいつは」

「それは……多分そうです。都くんはその日に可奈美ちゃんだけではなく、私のことも避けてた……都くんにとって誕生日は辛い日なんだろう。だから、ずっと自分の誕生日をお祝いしたい私達のことを避けたのです」

「意外に重症なんだね……重い過去があったの？」

「それは……」

都の暗い反応を見てた薫が可奈美に聞くと、周りの仲間たちも密かにその話をした。

その時にエレンが元気つけの言葉を持って、部屋に入り、その手に持っているのはケーキです。

「ハイ、ケーキの登場デース！」

エレンがテーブルに置くと、その四角い箱を開く。

そこには『さやかちゃん&みやこ おたんじょうび おめでとう』と可愛らしい字が書かれたチョコプレートの板と、それを乗せている

ショートケーキタイプのホールケーキがあった。

「これは、店に特別頼んで特製ケーキなん德斯ヨ！」

「……うん」

「俺の名前も書いてあるんですね……本当に誕生日なんだ……」

微笑んで頷く沙耶香に対し、都は驚く顔。彼がまだ自分の誕生日だと自覚していない。もう久々に自分の名前を書いてある誕生日ケーキを見なかった。

「やはり誕生日となればチョコミントケーキの方が良かったんじゃないか？」

都の反応を少し覗いた？和はわざと不満そうな顔でこう言った。

「いや、これ沙耶香ちゃんと都くんの誕生日用だから……」

「チョコミント好きなのは、お前だけだから」

「ねー……」

苦笑いする舞衣とは打って変わって、薫とねねは姫和のチョコミント案をバツサリと正面から切り捨てる。

「む……そんなことはないぞ」

「大体、誕生日に歯磨き粉食わされる身にもなれ」

「ねねえ……」

「だから、歯磨き粉じゃないと何千回言わせる気だ！」

「まあまあ、俺は結構チョコミントが好きなんだよ？チョコミントとケーキの味が合うかどうかわからないけど……」

？和の味方をしたのか、それともこういう対話の雰囲気引いたのか。都はその会話に入った。

「じゃあ、次の誕生日はその味のケーキをしよう。お前のお気に入りになるはずだ。」

「え……次の？」

「ああ……絶対お前をチョコミントの素晴らしいさをわからせてやる。そして、堕ちろ」

「？和……」

「えええくく!!それじゃお兄ちゃんの味がおかしくなっちゃうよ！歯磨き味の誕生日なんて嫌よー！」

「そうだ！都をおかしいの道に導くな！」

「ねっー！」

「だから、チョココミントは歯磨き粉じゃないと言ったのに!!」

「もう〜、可奈美ちゃん、薫ちゃん。もう？和ちゃんのことをいじめないの！確かにチョココミントは歯磨き……」

「だから、チョココミントは歯磨き味ではない！」

そんな姫和と薫&ねね&可奈美のやりとりに舞衣は止めに行つたが、禁断の言葉をつい口に漏れたことで？和はさつきより怒っているように見えた。

「……ぷっふふ、さつきから何やってんだよ。」

「都が笑っている……」

そんな時、都はなぜかそこで笑つた。少し声を抑えているが、さつき元気がない様子よりマシになった。

「なんか今まで寂しい誕生日と違った気がする……皆と一緒にいるかな？とても賑やかな感じ。」

そして、彼は早速自分の感想を現場の人たちに伝う。

正直、こんな温かい誕生日はお母さんがなくなつた以来初めて。今になって、もう一度こんな暖かさを味わえるとは……本当に不思議な気分だ。

「そう……なら、次の誕生日会は逃げるなよ。逃げたら、私は3段階迅移を使うからな」

「そこまで……!?!」

「私も使います。都くんを何度も捉えます。」

「私も。同じ誕生日同士。逃さない。」

「私もお兄ちゃんのためなら、全力でお兄ちゃんを捉えます！」

「こっちもだ。だから諦めろ」

「ワタシもデース。逃げるのは諦めてクダサイ！」

「ええ……??」

皆の本気さを感じて呆れた都。

だが、それは彼女たちは全員、都を誕生日に少しでも楽しませたいと思っっているからだ。

それを見た雅は、少し都のことを凄いと想ってた。こんな大勢な女の子に関心されていることは五箇伝でも見れない光景だった。それって、つまり彼はそういう魅力がある。皆を集まる力が持っている。これこそは『英雄』なんですね……。

その後、パーティーは何もなく順調に進んでいた。

◇

「真庭本部長、お話ししたいことがあります」

パーティーを終え、七人は管理局指揮本部に足を運んでいた。ちなみに、雅は別件で来なかった。あの人はいつも忙しいだな。

とりあえず、今は例のフードの刀使について、情報をもらうために管理局指揮本部に参りました。

誕生日パーティーが終わる時はたまたまフード刀使の話題を振った。もちろん、都はその情報を皆に知らせていない。何にせ、二天一流という特徴では、折神紫を打倒した？和に刺激が強すぎから。

それで、その情報を気になってた都以外の皆はこうして指揮本部へ参ったのだ。

「何だ、お前たち。騒々しいぞ」

「それについては申し訳ありません。ですが、早急に解決したい問題ができて。お時間をいただけませんか」

「……わかった。話してみろ」

「二人のフードの刀使。獅童真希ともう一人、この二人について掴んでいる情報を教えていただきたいのです」

都の質問に朱音がほんの少しだけ反応したのを都は見逃さなかった。どうやら、何かを知っていたみたいだ。

「都さん、真庭本部長から、貴方は既にもう一人と手合わせをしておたのですね？そして、流派のことも」

「はい。ですから、折神家の貴女にどうしても聞きたいことがあります」

ます。」

「いいでしょう」

朱音は重々しく了承した。

「あなたたちにも伝えようと思っていたところですが」

「やっぱり知っているのですね……」

「はい。ですが、知ることができたのは昨日のことです。それは、信用してください」

「……それはもちろん。貴女は大局を見る大物です。〴〵そのようなこと〴〵は軽く部下たちに伝えませんと思う。」

「貴方もそうです。衛藤 都。的確の判断です。」

「ありがとうございます。本部長。」

本部長からの褒め言葉を受けた後、全員は局長室に移動した。何にせ、内容的には管理局内では極機密のことだから。

「二人は獅童真希ということは貴女たちは既に知っていますよね。そして、彼女の動機と目的も知っていたのですね？」

「先程は皆に伝えました。」

都の話に頷く他の六人。彼女たちは最初都の口からそれを聞くと、驚いたが、獅童と手合わせする可奈美と？和はすぐその推測を信じていた。

「ならばもう一人の話をしましょう……と言っても、彼女は刀使ではありません」

「刀使……では……ない？」

朱音の答えに都だけでなく、六人も疑問符を浮かべる。犯人は刀使、という前提の元に考えていたため、この言葉は意外だった。

「刀使ではない……では一体誰のですか？」

「タギツヒメです。」

「……!？」

またもや七人の顔に動揺が走る。だが、先程の比ではない。

何にせ、隠世に送ったはずのラスボスがまたこの世に存在している。

「タギツヒメが復活したと言うのですか？ こんな短期間で……」

「タギツヒメを隠世に追いやったのは五ヶ月前、デスよ?」

真つ先に舞衣とエレンが朱音に詰め寄る。

姫和が放った『一つの太刀』は相手を隠世の彼方に葬り去る技。いずれ現世に復活してしまうものの、その時間は極めて長い。

少なくとも、数ヶ月程度で復活するなど絶対にあり得ない。

「原因については後日説明します。長い話になりますので」

「……………誰に憑依したんですか?」

姫和が青ざめた顔で朱音に尋ねる。無理もない。自分の命を賭して葬った相手があつさりと戻ってきたなど、彼女にとっては最大級の衝撃だ。

「誰かに憑依したわけではありません。今回のタギツヒメは荒魂自体が人の姿を成して現世に現れています。」

「人の形を成す……………ありえない、とは言いきれませんが」

そもそも荒魂の外見がどのような形状になるのかなど、不明な点が多い。

大荒魂だからといって、天を衝くほどの巨体になるとは限らない。

コンコンー

そんなときに扉が叩かれて、朱音は「入ってください」と言い、黒スーツを着る、間違えなく政府側の人間が入ってきた。

「局長代理に市ヶ谷から連絡が……………」

そして、彼は朱音にある資料を渡した。

さつき市ヶ谷つて……………つまり防衛省の人間?

「……………ようやく、許可を降りましたわね。」

その資料を真庭本部長と一緒に見た後、朱音からは何かを待たせた顔でこう言い、都と可奈美と?和の顔を見る。

その目は結構深刻な目だ。

「衛藤さん、十条さん、都さん三人。明日、私と一緒に市ヶ谷の織田防衛省に同行してください。護衛任務です。」

「……………ひとまず、聞きたい。なんて俺も一緒に行かなければならな

いのですか？」

「……貴方の力が必要なんです。男性刀使の力……ううん、衛藤^異 都^様の力が必要なのかもしれません。」

「……………」

「無理な要求だと存じております。ですが、これから会う人物は二人だけでは押さえきれないのかもしれないかもしれません。」

彼女は誠の誠意が含めたその目で都の方へお願いする。彼女は決して悪意ではないのも知っている。

「都くん……………」

「ミヤミヤ……………」

「わかっている。朱音様、申し訳ありません。さつきはちよつと貴女をからかいすぎた。」

舞衣にエレンに名前を呼ばられて、都も彼女たちは何か言いたいなのもわかる。だから、彼女をからかうのをやめた。

「朱音様、俺で良ければ、ご一緒にさせてください」

「……………」協力ありがとうございます。都さん。」

もう一度頭を下げて、朱音は本心で都のことを感謝している。本当に可愛い人なのね。

「……痛っ！何すんのよ！二人共。いや、三人!!」

都は朱音のことを思うと、？和は左腕をつま先でめり込む、それと同時に可奈美は右腕、舞衣は背後。

「朱音様をからかうな」

「そうです！」

「都くんは少し痛みが必要ですね。」

なんか三人からすごい圧力が感じます。どうしたのだろう？ただ可愛い大人の女性にからかうだけなのに……。

三人の気遣い全然わかっていない都。彼女たちが嫉妬していることは彼が永遠にわかる日が来ないだろ。

それを見た沙耶香以外の人もだめ息をついた。どうやら、ここから先はまだ長いようだ……。

第45話：女神の会見

市ヶ谷方面高速道路にて、白い車が走っていた。その中に乗るのは刀剣類管理局の代理局長とその護衛たち。

静かな車内で四人は沈黙を保ち、都は朱音の隣に座っており、窓側の景色を見る。

そして、発車してから一時間後、可奈美は我慢できず朱音に今日の任務について訊く。

昨日は唐突朱音に頼まれて、全然理由を聞いていませんでした。

「あの、防衛省での護衛って、一体何かあるのですか?」

「これから、とある重要な相手を面会します。」

「重要な相手?」

「はい。とても、とても重要な相手です。正直のところ、何か起こっても不思議ではない……だから、貴女たちに同行してもらいたいです。」

可奈美の質問に答える朱音は目を細く。彼女の手は少し震えたように見える。

「私たちは役に立てるのでしょうか?」

「〃貴女たちでなければ、駄目〃なのです。」

「私達って……まさか……」

何かを気付いて、?和は自分の御刀に視線を向ける。〃つまりそういうこと〃……。

「あそこにはタギツヒメと関わる存在があるのでしょうか?」

「……………!」

俺の発言に?和と可奈美は共に驚いた表情。そして朱音はただ「流石です。」と褒める。

その後、しばらく沈黙が行い。朱音はあれ以後に何も言わなかった。

一体、この先は何かを待つのだろ……。



しばらくの時間を経つと、市ヶ谷防衛省に到着した。

外だけではなく、中にも多くの軍人が嚴重の警備を行う。

日本の一大事なところとはいえ、このような警備は異常だ。

何かを防げたいのか？しかも、刀使もいる……。

数が少ないが、所属分別なしの刀使が軍人さんたちと同じく警備をしている。

思っていた以上に異常だね……気を引き締めないと。

「お待ちしておりました。代理局長。」

車が止まり、車内から降りたら、すぐ二人の政府らしい人がお迎えた。

「そちらの方々は英雄様方ですね。お会いできて光栄です。」

一人の男は笑顔をする。その顔はなんかムカつく……そういう偉いさんを作った偽の笑みが嫌いだ。

「そちらの方は？」

「衛藤 都と申す者です。彼も私の護衛です。」

「英雄様のご親族ですか……刀使ではないのに、護衛という重大の任を……」

「……………」

もう一人の男は少し、都をなめた口で呟くと、可奈美と？和二人は不愉快な表情をになっている。

だが、それは一步先に二人の前に立つ彼に止められた。

「はい、この度は刀使たちの指揮者として朱音様の護衛を務めた衛藤 都と申す者です。まだまだ不束者ですが、何卒よろしく願います。」

「ふん……自分は織田孝雄と申します。」

織田孝雄……つまり防衛省事務次官か。テレビで名前くらいは知っていた。

「…………それは御刀だよね？」

都の腰につけた御刀を睨むと、都はただ平然の微笑みで答える。

「護身用のものです。銃より剣のほうが使い慣れているのです。」

「御刀には刀使しか配属されない物だと聞きましたけど？」

「それは昔の旧観念ですね。御刀の力が刀使しか引き出せないから御刀を持っていても、それはただの日本刀に過ぎません。そして、俺も正式の刀剣類管理局の者でしたので、いつ身が狙われるかはわかりません…………このように朱音様を護衛するのも彼女を狙う人間もいるだろ」

「元々この仕事はいつも命の危機が関わっているのですから、それくらいの護身はお許しください」

最後は身を下げると、一応朱音代理局長もいるから、管理局の顔を泥まみれには行きません。

「…………思っていた以上大した男だな。代理局長は良い口論が優れる者がお持ちですね。よろしかったら、彼を防衛省に譲ってもらいませんか？」

「彼に過大の評価をありがとうございます。ですが、彼は我々大事な一員ですので、彼を譲る気ありません。」

「そうでしたか。とても残念だ…………」

事務次官は少し残念そうな顔を示す。彼は政治才能を持つ娘がいるけど、個性はちよつと衝動的なものなので、できれば継承人（もちろん、日本の憲法に従う）はもっと冷静な人に任せたい。

「それじゃ、改めて管理局の方々に歓迎する。お待ちしておりますぞ」

「こちらこそ、防衛省がこの度の面会の許可を通してくださって、本当にありがとうございます。」

「いいえ、中にいる“ヒメ”もそろそろ刀使の代表たちと話したいと仰っていました。」

その後、彼は暫く朱音と表面話をしてたら、部下たちと一緒に朱音様たちを中へと連れていた。

そして、中にはすごく広い空間だった。もし、ここはゲームならば

ス戦の戦場でも思われるほどの広さ。

それにしても……中にも軍人がいるのか。しかも、刀使もいた。

「なんかビリビリしているね……」

周りには銃を装備する軍人たちがたくさんいる。可奈美は多分初めてこんなたくさん軍人さんを見たことで心がビリビリしている。

まあ、気持ちかわからなくもないが……こういう場所は平民風情の俺たちには見慣れない景色であり、一生接するはずがない場所でもある。

にしても、これほどの警備……俺でも手が折れるぜ。連発ができる銃はやはり刀より強い武器だ。

「……………あつー!」

「……………孝子さんと聡美さんだ!」

そんな時、可奈美たちの視線先が見知りの人物たちがそこにいた。

「お久しぶりだね。衛藤、十条……そして、都くんも無事でよかった。」

目の前にいるのはかつて舞草の拠点でお世話された先輩方々。

「お前たちは、なんてここに?」

「昨日つけて配属されたんだ。それにしても、お前たち二人が来るのを大概予想がつくけど、都くんも来るのが驚いたよ。」

「五ヶ月ぶりに格好良くなつたわね。美濃関の制服凄く似合っているよ。」

「ありがとうございます。」

都に優しく微笑む聡美さん。彼女は相変わらず舞衣ちゃんと同じ雰囲気が発散していますね……。とはいえ、舞衣ちゃんは一番なんだから。

「聡美、少し控えろよ。」

「あら? そうでしたわね。」

孝子さんに注意されずつ、聡美が都の後ろにいる二人の顔を少し覗くと、意味深の笑顔でそう言う。

なんか舞草の時もそうされる気がする。何なの?」

「それより、貴女たちは気をつけてね。」

「中にいる者はこれほどの警備がいても足りないくらいだよ。」

「それって……つまり」

唾を飲んで、都たちは孝子さんたちと短い会話をしたあと、すぐ防衛省の一番奥のところへ行った。そんなところで事務次官が「ここから先は、貴方たちしか入らない神聖な場所。」と言い、外で待ってた。なんか胸が騒いでいるな。

扉の前に都の胸が騒ぐ。今更気付いたけど、この中に何か不思議なものがある。

◇

都、可奈美、？和及び朱音合計四人が中に入る。室内の空間には真っ白しか言えない光景だった。そして、その中心にいるのは長い階段がある祭壇のような物が建てられていて、何とも言えない荘厳さが溢れる。

ただ見るだけで神聖感が感じ取れる。それにしても、なんか御刀も妙に騒ぐな。

この空間に入ってから、雪はずっと自分しか聞こえない音が鳴いた。何かと反応したのか？

キイイイイ――。

そんな時に他の二人の御刀も雪と同じく反応し、共鳴の音が脳内に響いた。

「……………」

「……………っ！」

無意識に抜刀の予備行動を行う二人は神社の方へ向く。もちろん、彼も戦闘態勢に入った。

「三人共、構えを解けてください」

「……………え？」

「どういうことだ？朱音様。」

しかし、そこで朱音は構えを解けるといふ命令をくださった。それを理解不能の三人が朱音の方へ一瞬に見たが、すぐ祭壇の方へ向く。あの中には何かいる。しかも御刀も反応する存在。

「拝観を賜り、光栄でございます。タギツヒメ」
タギツヒメ!?

その名を聞いた三人は同じ驚く反応。何にせ、タギツヒメはこの三人に縁が深い大荒魂。仇の敵とも言えるほどの存在。

まさか、彼女はずっとここにいる!? いや……………別人だろ。朱音様の反応によると、犯人側のタギツヒメではなく、別のタギツヒメ……………?
「その名前を指すものが別にいる。」

そうしたら、祭壇の奥から女の声がこの空間に響く。その声に全く怯えてない朱音は発音を失う都たちに代わって、もう一人のタギツヒメと会話する。

「では、なんと？」

「タキリヒメと呼ぶことをさし許す。」

「承知しました。では、私はー」

「折神朱音、そして、衛藤可奈美、十条？和、衛藤 都。」

「……………」

朱音が自己紹介を行う前に、タキリヒメが先にこの四人の名前を口に出した。

事前に俺たちのことを知っているのか……………流石、神というべきか。いや、折神紫に通じて、俺たちのことを知っているかもしれない。どっちにしろ、彼女は間違えなく人智を超える存在である。

「タキリヒメ、直接に伺いたします。貴女は我々に仇なす者でしようか」

「質問は許さぬ」

「……………」

一瞬身体が何かに抑えられた。これは圧力……………彼女……………神からの圧力だ。

「『イチキシマヒメ』を我に差し出せ。お前たちの手にあることはわかっている。」

イチキシマヒメ？もう一人のタギツヒメってこと……？

次々に出る情報を脳内で整理する都。彼はどんな状況でも冷静に分析できるが……彼女から発散する圧力は凄まじいものでして、危うく思考が中断されるところ。

そして、？和にも同じくイチキシマヒメという言葉が気になる。二人目のタギツヒメからもう一人の名前を聞くと、イチキシマヒメもタギツヒメの一つであることを薄々察した。

「人にとって真の災いがタギツヒメ。そして、イチキシマヒメの理想に人は耐えられぬ。」

「……故に、貴女に従えと？」

「我はタキリヒメ。霧に迷う人に導く神。人よ、我はお前たち人に最良の価値を持ったらそう」

最良の価値か……人の価値は神に決められるものじゃない。神の時代は既に終わっているんだ。

拳を握り締めて、都は朱音の前に立つ。

「最良の価値？ただの大荒魂が我々に価値を与えるのですか？お前は人類のことを憎まないのか？」

「お兄ちゃん……!？」

「都さん……その口は……」

都の不敬の発言に朱音と可奈美は慌てた反応。彼はまた上の者に恐れぬ態度を示した。

「……人。さつき、質問を許さぬと言っていたな。」

「ああ……言ったな。けど、一方的の交渉は面白くないんで、俺が相手をしてやる。」

「神と取り引きとは……命知らずに」

さつきより圧力がさらに強くなったが、都は勇敢で……いや、命知らずに立ち向かう。

「どうだろう？俺は別に命知らずなんじゃない。ただ『お前が我々と顔を会わず』に一方的の交渉は気に食わないのよ……そもそも、あれ

は交渉なんじゃない！」

「……………」

「交渉したいなら、あの祭壇から出る！そうしたら、大人しくお前の要求を考えてやれ」

「都さん…………それは」

朱音は都の不敬の態度に頭がフラフラしてきた。相手は確かに大荒魂だけど、神でもある。その点は少し大人しくしていれば、よかつたのに…………。

「…………タギツヒメは既に力を得ているはず。時間は限られている。」

「だからこそ、会えて対策を整えましょう。貴女も彼女と会いたくないでしょう？」

「……………不思議な人。が、おまえの提案を乗りませぬ。ここから去れ」

「……………返答を待ってます。」

ここまでだと判断し、彼女に礼をする彼。

今のところは神に強引する手段がない。例えここで戦っても、勝機がいくらあるかもわからない。

故にここは仕方なく引いた方が良くと思う。

それから三人に向かうと、そこにいるのは呆れた三人。

まあ…………あれだね。神に喧嘩を売ったんだ、俺は。

多少自分のご無礼に自覚がある都。神に対するその態度は自然に良くない。だが、これも相手が悪いじゃない？お前もそう思うよね？

その後は朱音様に滅茶苦茶叱られた…………。

◇

タギツヒメはあの夜、隠世に送られる運命から逃れるため、体内の荒魂を関東一帯に注いだ。けど、それはあくまで付き物でした。

彼女が分けるのは三体の分身。人に仇なす神タギツヒメ、人を支配

する神タキリヒメ、自らの理想が人は耐えられぬ神イチキシマヒメ。荒神が三体に分けて、それぞれ自分の意識に動く。朱音様の口によると、これは分ける前より超危険な状態。

まあ、それも心得ている。世界を滅ぼせるラスボスが三体にいた。そういうリスクの下にこの国はいつ滅ぼされても不思議ではない窮地に落ちている。

それを管理するため、政府の人は手に入れたタキリヒメをあのよう
に祀っている。けど、彼女は人間の話を聞かずに人を支配しようと思っていた。

なら、彼女は一体過去の神々と何が差があるのでしようか？

過去の神々も人類の全てを飼い慣らすように管理・支配してた。そういう支配の下、人が神になる伝承も少数あるが、不幸の伝承もたくさんあった。

神のわがままと愛は人には耐えられぬ。だから、人は神と別れようとした。そういう恐怖支配では誰の心も買えない。

そしてタキリヒメと言う支配は……おそらく荒魂も含まれている
だろ……。荒魂と人を家畜のように管理・支配するのは、多分タキリヒメにとって、最も理想とする世界なんだろう……。

それじゃ、誰とも幸福にならない。そういう独裁支配は認めない。
それと、一応なぜ彼女はタギツヒメのような行動を出せない理由を
探っているか……：出た結論はタギツヒメは三体の中に一番強いと三
体はお互いが敵同士ということ。

政府もタキリヒメを他の二体への切り札として使うつもりなん
でしょう。けど、あの籠城じゃ、いつかタギツヒメに攻め入れられる。

そして、最後の一体はどうやら朱音様たちの手にあり。彼女は絶対
安全なところに隠されているが……：慎重な俺としては一度確認して
おかないと、安心ができない。

何にせ、敵はあのタギツヒメだ。決して油断ならないやつだ。

しかも、二天一流への対策もまだ完成していないし。唯一考えた対
策は学んだ流派をもっと精進しないとイケない。

「にしては、あの技はまだ名前がないんだね。」

自室のベットのの上に横になる都は今日が得た情報を整理しながら、今後ともどう動くかを考えている。

そして、自然に必殺技でも呼べるあの技のことを思い出した。あの技はかつて結芽との決戦で使った強力な融合技。最後は負けたが、それでもあの技のおかげで彼女と楽しい時間を過ごした。

二つの流派を一つにする絶技。それが自分や可奈美しか使えない技である。……いや、多分可奈美が大部分は柳生新陰流をメインにするだろ。

彼女は自分と違って、お母さんから伝わった流派を真剣に鍛えて上げるつもり。

そして自分は結芽との一戦後、天然理心流をかなりの練度へ上ることにした。そのおかげで、二つの流派をどっちでも使いこなせた。それでも可奈美に勝つ気味がない……自分の妹は今どれほど強いのが、兄としてはよくわかってる。

「さて、名前はどれにしようか……」
名前をつける話を戻るか。とりあえず……格好いい名前を。

コンコンー。

そんな時に扉が叩かれた。

誰だろう？こんな時間？

現在時刻はまだ夜になってないけど、それでも自分に来客とは……珍しい。

「お兄ちゃん、いる？」

あれ、可奈美？

まさかこの時間で俺の部屋に……とはいえ、これは借りた部屋だ。鎌府に滞在する期間で自由に使っていていいって本部長はそう言った。

まあ、当初の五条学長も俺が平城に滞在するときも、部屋を借りた。美濃関のように男性の部屋がないけど、泊まるだけなら使ってもいいって。本当にいい学長なのね……女子だらけの学校で俺のような

男性を暮らせるとは。

さて、本題に戻る。まさか、可奈美は俺の部屋の前に来るとは……。

「どうしたの？可奈美」

「少しお兄ちゃんと相談したいことがあるのだけど……入ってもいい？」

相談したい……防衛省のことか。まあ、きっと迷うよね。

「いいよ。入ってくれ」

気軽に自分の妹を室内に入らせた。とはいえ、俺の部屋は男らしくない部屋だ。滞在している期間はあまり後この部屋を使う刀使たちに迷惑をかけたくないため、部屋はほとんど元のままだった。

でもそのせいなのか……平城にいた頃は隊のみんなによく部屋を使われた。早苗もよく部屋で料理をする。

本当に男性との距離を遠慮しない女の子たちだね…。

「お邪魔しま……って普通！」

はい、ツツコミありがとう。

可奈美が部屋に入ると、早速このほとんど装飾がない部屋をツツコミ。

「これはお兄ちゃんの部屋なの!?家より酷い！」

「どうせ長期に滞在しないから、部屋を元のままにしたほうが次の

使用者にも使いやすい。」

「でも、お兄ちゃんはずまらなくないか？」

「雪がいるから、つまらなくもない」

「雪？」

「俺の御刀の愛称だ。全名は江雪左文字。」

「……お兄ちゃんは刀使になったことは本当なのね……」

「意外しないのね……」

「前からは薫ちゃんから聞いたから」

薫か……まあ、別に可奈美に知られるのは悪いことじゃない。

「そういえば、お茶は何にする？相談したいことがあったから、お茶しながら話そう。」

「じゃ、リングー！」

「わかった。用意するからベッドで座ってくれ」
「うん！」

こうして俺はお茶の用意をする。可奈美は俺のベッドで俺を待っている。

……後でちゃんとベッドを洗おう……妹の味がするベッドは夜に眠れない効果がある（妹の味に眠れないバカ兄）。

それから、数分後に俺は熱いリンゴお茶を可奈美に渡す。

「熱いから気をつけろよ。」

「うん、お兄ちゃん。ありがとう／＼／＼」

両手でコップを受け取る可奈美は湯気のせいなのか、顔が少し赤い……多分湯気のせいと思う（鈍感）。

「それで、相談したいことはなんだ？」

「……………お兄ちゃん、私たちのしたことで無駄だったのかな？」

そう言い、ベッドに座る彼女は凄く落ち込んだ表情。いや、迷う顔だった。

「どうしてそう思うの？」

「だって、前より混乱した状況になっちゃって……なんだがわかんなくなってきた。」

まあ、結論だけを見れば、確かになあ。あの時、？和を救わなかったら、タギツヒメは今頃隠世に封印されると思う。

関東一带は今のよう大量な荒魂がいなくなるし、日本は三体の大荒魂の脅威に脅かされることもない。まさに平和のエンドだ。

けど、その代わりに？和もこっちの世界に戻れなくなる。そんな日々は俺には耐えられん……ううん、俺だけではなく、皆も、可奈美も……。

「じゃ、可奈美はあの時、？和のことを見捨てられる？」

「それはない！絶対に見捨てない！」

「なら、それでいいじゃん。俺もきつとあの子のことを見捨てることができない。可奈美は間違っていないよ。」

「……………そうかな」

まだ元気がつけられないのか……。

「可奈美、よく考えて動くんだよ。」

「え……？／＼／＼／＼」

彼女の頭を優しく撫でる。

「これはある友人が俺に教わった大事な教えなんだ。何かをする前に、まず考える。それでも、答えが出さなかったら、戦ってわかるんだ。」

「それって……」

「俺もまだまだ道中だ。今でも結構悩むんだよ。だから、俺も自分の成すべきことを一生懸命考える。」

「お兄ちゃんも……」

ああ……刀使になったこそ、悩むんだ。力が得るから、できることが増えたから、それで今の自分は可奈美たちのためにどれほど役に立っているのか。

それは俺の課題。元一般人、可愛い妹のお兄ちゃんとして俺もこれから先に進む道を見つけないと。

「うん、だから一緒に考えよう。悩むのも修業の一つなんだよ。」

「……うん、わかった。お兄ちゃんと一緒ならきつとうまくいけるよ！ありがとう、お兄ちゃん」

少し明るくなる笑顔を見て、俺は彼女の役に立てることに良かったと思う。今の俺でも彼女の背中を押せられる。

「なんか、いつもお兄ちゃんに助けられたばかりだね。」

彼女は苦笑し、スツスツとお茶を飲む。そのたびに赤くなるほっぺは可奈美の可愛さを増えてて、どうしようもなくそんな彼女に、にやけてしまう。

「そんなことはない。俺も可奈美に一杯助けてもらったよ。鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の夜は特に……可奈美がいないと、俺は特にタギツヒメに殺されるかもしれない。」

「えへへ……あの時は無心というか、無意識というか……。自分でもよくわからないけど……お兄ちゃんとか？和ちゃんを守ることができてよかった。」

「ああ……そうだね。」

あの時は本当に可奈美がいなかったら、自分と？和は特にこの世にいない……うん、この世界自体もいなくなるかもしれない。

毎回ピンチの時、可奈美は何度も奇跡を起こした。お母さんの剣術を見事使うことも、写しが剥がれても？和を助けに行けたことも、自分の生きる意味になったことも……。全てが可奈美が引き起こした“希望”だ。

そんな輝く希望に助けられたばかりなのは他ではない、俺だ。

お前がいたからこそ、今の俺がいる。大事な妹のためなら、俺はなんだってやる。

「そういえば、お兄ちゃんはその時タギツヒメと戦ったわね？あの時からはもう刀使になったの？」

「うん？ああ……結芽との戦いで覚醒したみたい。今は一瞬しかこの能力を使えないけどね……」

「あの結芽ちゃんと……戦うんだ。やっぱりお兄ちゃんは強いよ。あんな強い子に勝てるなんて……」

「勝てないよ……一度も。今の俺じゃ多分全力の彼女と引き分けかな？結構ギリギリの戦いと予想したけど。あの子はとても強いんだ……母ほどになるとかは知らないけど。」

「そうか……私は彼女ともう一勝負をしたいなあ……」

可奈美はブツブツとそう呟いて、天井を見る。けど、それはもう叶えられない願いなんだ……。

いなくなった人間を蘇る方法はどこにもない。例え、タギツヒメの力でもあの子を病から救えないんだ。

結局、神を名乗る大荒魂もただ荒魂。命を救う力がない、ただ人類を支配するだけの力。だから、止められる。

万能ではない以上、彼女はきつと弱点がある。それを探せば、神さえも人間に殺せられる。

——俺は神を殺す。大事な物を守るためなら、神だって殺す。

第46話：襲撃

綾小路武芸学舎に設置された道場にて、内里 歩は力を入れて空振りをする。

あの日……衛藤可奈美に出会ったから、歩は今まで以上に鍛錬を重ねて、できるだけあの人に近づきたい。

もっと強くならなきゃ。あの人に認められて、褒められたい。そのため、歩は強くなりたい。

「歩、そろそろ休憩だよ。」

空振りの途中に親友が関心の口でやってきました。

どうやらもう既に休憩時間のようだ。

「いいえ、私はまだまだ行ける！休憩する暇がないんだ。」

空振りを続ける。彼女の身の動きが前より良くなってきた気がする。

これも彼女の努力の成果だ。親友としては彼女の成長に喜ぶ。

「歩、最近凄く頑張っているね。」

「だって、衛藤さんと約束したから。いつか一緒に戦おうって」

「そのために、もっともっと練習して強くならなきゃ！衛藤さんみたいに」

「歩は本当に衛藤さんのことを尊敬しているんだ。」

「うん！」

衛藤さん……あの大荒魂を倒した英雄——衛藤可奈美のこと。歩は彼女と出会った日以来、ずっと彼女を憧れの対象にして、毎日誰よりも頑張りを続けた。

最近、実戦の成績も良くなるみたいだ。やっぱり歩はできる子つて、最近そう思う回数が増えた。

「初めての实戦、本当に駄目駄目だね。私たち。」

「そうだね……何もできなかったしね。」

その話題になると、二人は共に苦笑う。お互いは緊張で初の実戦でうまく実力を発揮できない。

歩と別の実戦場所だけ。結局、強い先輩たちに助けってもらった。

その時はもちろん悔しいけど、隊長さんに「これからの経験を積めば、きつと山になる！」と言われた。

あの人は男の人だけど、刀使の先輩たちと同じく経験が豊かの人で、ちよつと尊敬しちゃう。

「でも、今度は違う。ちゃんと戦えるようになったから！」

すぐ思考を明るく回す步。彼女は衛藤さんから得た勇氣、それとも憧れにもつと前へ進める力をもらった。

そんな明るい彼女を見て、自分も負けられない。何にせ、親友というのはお互いを支え合つて、共に成長する素敵な関係。

入学の時も彼女に引つ張られたし。こうして学舎生活に入れられるのも彼女のおかげ。

「よし。今日はどことん付き合つてあげよう！」

御刀を抜き出す。彼女の明るい一面に染まれた自分がここにいた。

「ありがとう、美弥。」

こうして、二人は体力が限界になるまでに稽古をやり続けた。

◇

一方、綾小路武芸学舎学長室。

「候補者選抜状況は一体どうなっているんだ！」

机を強く叩く、怒りの声がこの部屋に広がる。相楽学長は目の前にいる元鎌府の学長――高津雪那に極冷静の態度を示す。

「審査中だ。」

「そう言つて、私をいつまでに待たせる気なんですか！ 姫はもう動き出しているんですよ！」

「わかっている。」

いつもその冷たい態度で彼女^{雪那}を接する相楽学長。そんな彼女に高津学長はとても気に食わん、あれはまるであの男のようだ。

自分を目に入れなく、嘲笑つて、無視する。さらに沙耶香をさらつ

て、彼女を人間に変えようとするんだ。そのせいで沙耶香はあの時に自分を拒否した。

全ては衛藤 都のせいだ。必ずアイツに復讐しなきゃ。

その前に、姫の役に立てなきゃ。自分こそは姫のそばに相応しい人間だと。

「まさかこの後に及んで怯えているじゃないですよ？」

「……………」

また無言の返事。この女はいつまでもそういう冷血の態度だから、昔からも鬼の結月だと呼ばれた。

しかし、相変わらず相手をイライラさせる才がある女だよね。とても気に食わないが、彼女はノ口投入実験の主権者の一人に五箇伝の中の唯一の同盟者でもある。

彼女のおかげでノ口はより完璧になった。これを投入すると、人類は病、戦争、苦しみから逃れられる。あの方の理想が実現できれば、この世は幸せな世界になれる。

なのに、この女はまだ投入実験を行わない。刀使たちはただの道具にすぎない、あの方の兵であるというのに、またつまらない感情に縛られるとは……愚かな女だ。相楽結月。

「これ以上は待たせませんからね！行くぞ、夜見。」

「はい。」

もう相楽学長とこれ以上付き合わせたくない高津学長は夜見を連れて、ここから出る。彼女の顔を見ると、またイライラしているようだ。

「相楽学長……………」

「なんだ。皐月夜見。」

「貴女ってずるい人ですね。」

夜見が出てくる前に相楽学長にそれだけ言い残す。その後、彼女はここから出て、扉を閉まる。

「はあ……………」

騒がしい愚かな者と何かしらの忠誠を尽くす者がこの部屋から離れた際に相楽学長は駄目息を吐いた。

ずるいですか……確かに自分はずるい女だ。両手が既に汚れるけど、またいい人のふりを被るとは……みつともない。

「……………」

自己嘲笑いしながら机の上に置いてあるノ口との相性がいい選抜者の資料を見届ける。その中に載る者は内里 歩と木寅ミルヤ、その他にも山城由依やましろ ゆい、鈴木葉菜すずもとは な、山崎 穂積など上位の実力者たち。彼女たちはもうノ口を受け入れる資格があると判明している。が、相楽学長自身は自分の生徒たちを結芽みたいにならない。

もう犠牲者が一人にいるから、相楽学長はもう後戻りができない物を愛するべく生徒たちに投入したくない。

それと、彼女たちに仲間たちと戦わせたくない。あまりにも残酷だ。

コンコンー。

そんな時に扉が叩かれた。

「……………入れ」

「失礼しました。」

「国頭か……どうした？」

入っているのは銀色ショート髪の女の子。彼女も資格者の一人であり、遠征しているはずの彼女を呼び戻されるのもその資格があるかどうかの確認。

「さつき五箇伝からの連絡があつて、向こうはどうやらうちらを疑い始めました。」

「早いな……………」

そう言いつつ、相楽学長は結構悩む顔。もしこの時期に綾小路がノ口実験を行うことが刀剣類管理局に察されたら、間違えなくこの前の美濃関、長船、平城のように強制捜査される。その時になったら、名誉とやらもぶち壊される。

自分の名誉は構わないけど、生徒たちが色目されたら耐えられん。「ちなみに連絡する相手はわざと、うちを脅威するのよ。」証拠がま

だにないけど、これから探し出す。」とそう言い、皐月夜見の居場所を求めている。」

「皐月夜見……？まさか、相手は親衛隊の？」

「違います。竹島という鎌府の学生です。彼女は五ヶ月前からずっと皐月夜見のことを探るのです。今はちようどうちらを疑っている。」

「そうか……最近刀剣類管理局で情報科を作った生徒ですか……この件をお前に任せても良いか？」

「元々うちの仕事なんですよ。」

彼女はそう言い、その普段から生き生きと感じない顔で小さく笑う。

「任せだぞ。」

「はい。では失礼します」

彼女は礼をしたあと、この部屋から出てくると……その時、彼女の動きが止まった。

「……学長、うちにはやはりこの実験のことを嫌いなんす。燕さんのことがいい、親衛隊たちもその力のせいでバラバラになっていくつすよ。この力は一体我々刀使に何か利益があるのでしょうか？」

「それは……」

答えられない。確かにこの力は刀使たちに親衛隊に負けられない実力を与えられるかもしれませんが、これを投入すると、普通の死に方に許されない。

そこで、さらにタギツヒメの忠実の兵に変えられて、もう二度と五箇伝の刀使たちと一緒に戦えない。むしろ殺し合うかもしれない。そう思うと、相楽学長の心がとても痛むくて、なかなか決策が決められん。

「よく考えてほしいです。うちはここが大好きなんです……どうか、良い判断を」

最後の言葉を言って、彼女は扉を閉めた。

「大好きなんですか……私もそろそろ決断を決めつけなきゃ。」

あたえ与の最後の言葉を呟いて、相楽学長は長く考えに落ちた。



市ヶ谷、織田防衛省ー

「やっぱり獅童さんが来たのだね。」

防衛省の警備任務があつて、ここに集まる都と他の二人、可奈美と？和。

そして彼はスマホに届いた写真を見て思わず呟いながら、情報提供者にどうやって返信するのを考えている。

そうしたら、隣の？和は距離を気にせずに都のスマホをじっと見つめながらそう呟く。

「やっぱり狙いはタキリヒメなんだね……」

「ヤツが何かする前に止めなきゃ」

？和の反対側には可奈美も距離を気にせずに近づけてくる。そのおかげで都は二人に挟まれた状態である。

別にやましいことではないから、気にする必要がないが……距離が少し近いぞ、？和。

妹はともかく、家族ではない青春期の少女では男との距離は少し考えて欲しい。こつちも少しドキドキしたじゃない。

まあ、？和への理解においては、彼女は任務だから、別に気にしないだろう。

「まさかこんなことになるとはね……」

「ああ……」

「大丈夫??和ちゃん」

「正直なところ、まだ気持ちの整理がつかない。」

そう言い、？和は少し都から離れる。顔は昨日の可奈美と同じ迷っていた顔だ。

「折神紫をタギツヒメから引き離れたところで終わると思っ
ていたからな。」

「……………」

「まあ…………それは仕方ないことですよ。俺もそれが最良の選択だと思っ
ていた。折神紫を救い、タギツヒメを隠世へと送り込むことで全
てを終わらせると甘い考えをした。だから、自分だけを責めないで欲
しい。」

「都……………」

「責めたいなら、俺や他の皆を責めろ。同じ船を乗る仲間でしょう
？」

「……………そうだね。ありがとう、都。」

少し気分が良くなる顔をしていた？和。やっぱり？和はそういう
顔に似合う。

「なんか、お兄ちゃんは？和ちゃんばかり見てる」

そんな時、可奈美から痛い視線を感じる。

「そんなことはないぞ？」

「そうだぞ！私はただ都に慰められただけだ。」

「……………それはいいけど。」

顔をそう向け、拗ねた顔をした可奈美。どうしたんだろう？まあ、
後で頭をなでなでしよう。毎回それをやったら、妹に許されるから
な。

「そういえば、お前たちはどう思う？タキリヒメを……………斬れるのか
？」

「え…………？」

「お前は斬れるのか？和。」

「斬る。が、お前たちの意見を聞きたい。」

「そうだな…………まず考えたら斬るかな？相手は知能を持つ会話でき
る相手だ。相手のことをよく知って、その後のことはどうするのか考
える。それでも、答えが出さなかったら、戦うよ。」

そうだ。俺たちは昨日タキリヒメと会ったばかり。彼女は何かを
しようかよくわからない。それと同じく彼女も俺たちと対等で会話

したくない。

お互いのことをよく知らない状況で相手を斬るのは良くない。これである時……沙耶香が迷わなくリス型の荒魂を攻撃するようになる。

俺は同じミスを犯したくない。ねねを悪い荒魂だと思いたくないから……。

「そうか……なら、可奈美。お前は思う？」

「私？私……昨日のことをちゃんと考えたけど、うまく言えないけど……タギリヒメは戦ったタギツヒメと違う感じがしたなって違う感じか……。俺はあの場で何にも感じないけど……きつとこれは可奈美しか気づかないことなんだろう。」

「よく考えだな。可奈美。えらいくえらい。」

「お兄ちゃん!?!和ちゃんの前にやめてよ／＼／＼」

妹の頭を撫でた。そうしたら、彼女が恥ずかしくて顔が赤くなる。うん、可愛い。

「相変わらず、仲いいよね。お前たち。」

「兄妹だしな。？和、前も言っていたが、お前はどんな選択をしても止めない。けど、自己犠牲などを考えたら、何をしても止めるよ。俺はお前たちを失いたくないから」

「………うん。」

ただ一声で応じて、？和はなんだか嬉しい顔をしてた。彼女は都に大切されたことを喜んでいられるかもしれない。

「さて、警備の仕事に戻すか。孝子さんにバレたら、面目ないからー」

そんな時に警報が全域に響き。三人は一気に現状を知れた。

タギツヒメがタギリヒメを襲撃するために、やってきたのだ。

◇

「何という強さ……」

「ただ……一撃で……」

この場に残す一番強い長船の刀使二人、米村孝子と小川聡美は地面で横になる。ただ一秒の間に刀使上位者たる二人はフード女に瞬殺された。

最初は五分ほどに耐えられると思っていたが、相手の強さは彼女たちの想像より遙か高い。

本当に化物レベルだ。

それを見届けた他の長船の刀使たちは顔が恐怖に染まれて、震えた手で御刀をフード女に対峙する。

最強の次にある二人がやられた。残る雑魚とも言える彼女たちは決して目の前のフード女に太刀打ちができない。

長船の中に最強の実力者は何人がいる。その中に連携能力が優れたトップ刀使の中に益子薫と古波蔵エレンは最も優秀な二人組だ。その次にあるのはさつき倒された孝子と聡美。

あの二人の連携攻撃から一手を取るのには長船の中にできる者が少ない。

なのに、目の前の襲撃者はただ一瞬であの二人を倒した。これからの状況はさぞ絶望的な状況なんだろう。

けど、この敗戦から逃げるわけには行かない。長船の誇れ高く刀使である以上、倒されるまでに戦い続ける。これも舞草と長船のため、あのおつと私たち刀使のために頑張り続けた朱音様のために戦おう。

死ぬ覚悟をできた長船の刀使たちは自動扉を壊して入ってきたフード女に立ち向かった。

と、その時、

「……………」

フード女の両側に二人の刀使が現れて、ほぼ同じタイミングで上段斬りでフード女を斬る。

しかし、その攻撃は当然のようにフード刀使に防げられた。

「大典丸と鬼丸……！タギツヒメか！」

平城制服を着ている刀使はフード女が持っている御刀を見て、驚いた顔をしている。

あれは折神紫の御刀。天下五剣の二振りである。

「千鳥と小烏丸と……………」

「……………」

「……………」

タギツヒメが二人の刀を弾けて、背後にある無声無息の攻撃を簡単に防げる。

「江雪左文字…………幾度も会うとは、よほど貴様と縁があるの。」

「そうだな。こっちも驚いたよ。」

攻撃が防げられて、二人の後につけた男がすぐ後ろに迅移を使って、距離を取る。

「……………私の敵を全て揃ったというわけか」

「今度こそ、お前を倒す！一緒に攻めるぞ!?和、可奈美！」

「ああ……………」

都の指示に？和と可奈美は三人かかってフード女を攻める。

数回の刀と刀とのぶつけ合う音がこの空間に響く。

「左！右！前！左！後ろ！」

簡単な指示に二人は都の言うとおりに動く。しかし、この三人はまだタギツヒメから一手を取れないが…………タギツヒメの攻撃も、先に読まれて、可奈美たちからも一手も取れない。

「貴様…………その目は。」

「前、左……………そして、てりゃあ！」

？和は正面を突刺攻撃、そうしたら可奈美は左から攻める。二人の攻撃はもちろん、タギツヒメに防げられたが、都は背後から上段振りで斬りかかる。

「……………」

初めてタギツヒメは斬撃によって退けた。

「不愉快……………」

都の何も見通す目にムカつくタギツヒメ。あれに見られると、まるで自分と戦っているみたい。

すごい……あの三人は！

そして、三人から随分距離を離れた刀使たちは口が閉まらないくらいに驚く。

三人の連携は孝子さんたちより上回る。二人のことはもちろん。が、男の方も彼女の足を引つ張らないくらいにタイミングを正確に掴んであの二人のサポートをする。

これは長期の付き合いがないと、できるはずがない連携である。これだけ見ると、あの三人は相当にお互いのことをよく知っている。

「はあ！」

「てりやあ!!!」

「はっ！」

「……………」

「もらっ……………くっ！」

それから数分の戦闘で、三人かかりでタギツヒメを抑えると、？和はタギツヒメの重撃で退けられる。それを見逃さないタギツヒメはすぐ追撃する。

「させない！」

「はあああ！」

しかし、可奈美にその攻撃が防げられた。その隙に左側は都が攻めてきて、タギツヒメはもう一振りで防げる。

「なぜお前たちがタキリヒメを守る！」

「……………」

唐突にタギツヒメからの質問に驚く可奈美たち。確かに、刀使が荒魂を守るのをおかしいこと……いや、別におかしくないんだ。

だって、自分のそばには一人の女の子は特に荒魂と一緒に過ごしてきたからな！

「さあ……俺もよくわからないだ。ただお前なんか先越えられることを嫌なんだよ！」

「人間風情か、我々の間に入るのは許さん」

「……………くっ！」

「……………可奈美！」

可奈美はどうやら刀との力比べに抑えられたみたい辛い顔をしてた。この野郎、うちの妹に何をしやがる！

妹が辛くなつたことにより怒っている都ですが、彼も手を抜けて可奈美を助けてはいけない。

何にせ、こつちも彼女と力比べ中だ。勝手に離れたら、その一瞬斬られるかもしれない。

もし自分の写しは一瞬だけではなく、可奈美たちのように長く維持できれば、一回斬られてすぐ彼女を助けるかもしれない。

本当に忌々しい状況なんだよ！これは！

「可奈美！すぐ助けー」

「……………」

そんな時、何かを感じたタギツヒメは可奈美と都から急に離れ。そして、見覚えがある御刀が都と可奈美の間に入った。

「さぞぞー！タギツヒメ！」

そうしたら、聞き覚えがある声も二人の間に響き。もう一人のフード女が地面を強く踏んで、その刃を確実にタギツヒメの胸を当たる。

「……また貴様か、獅童真希。いいところを邪魔したな。」

先に後退したのか、獅童に与えられた傷が浅く、間もなくの間に傷口が自然治療により治った。

「獅童さん!？」

「獅童真希！」

この場に登場するもう一人のフード刀使いー獅童真希の唐突の登場で三人は驚く。

「今度こそ、逃がさんぞー！タギツヒメ！」

しかし、彼女は可奈美たちを気にせず、瞳が赤くなり、タギツヒメを攻撃し始めた。

「……………」

そこで、荒魂の力を使う獅童さんに抑えられたタギツヒメは後退しつつ、獅童と慎重に戦う。やがて、二人は外までに行った。

「……………追うぞー！二人共！」

「……………あ、うん！」

「うん！」

そんな突発の状況が目の前に起きてしまうのですが、都はすぐ獅童を追うために、連続写しを使い、迅移で追う。

彼に続け、反応が遅れ取る可奈美と？和も彼の後にした。

◇

「しつこいぞ、獅童真希。」

防衛省から離れたある神社の境内に、タギツヒメは獅童真希と対峙する。

「ほお……やっぱりお前たちも来たのか。十条？和と衛藤 都。」

獅童の後に続け、都と？和がやってきた。

「……………」

突きの構えをして、都はタギツヒメの方へ注目する。

「すぐやるのか？来っー！？」

完全に予想外のことが起こり、都と戦うつもりのタギツヒメは構え取る一瞬、背後が千鳥を持つ可奈美に一本捉えられた。

何か起きている！未来視さえも捉えられないだと……………！

「……………！」

驚愕の最中に彼女の兄もその隙にタギツヒメへ一本を取る、その刀が胸あたりに結構深い傷口を与えた。

「……………おのれ……………」

こっちも同じく彼女は全く見えなかった。……………やっぱり藤原美奈都の子供たちは忌々しい！

致命傷を受け取ったタギツヒメは、再びこの兄妹に身体が傷つけられたことに忌々しく思う。

これも藤原美奈都の血という故か……………。

「待って……………！」

「消えた!？」

タギツヒメが衛藤兄妹に斬られた後、すぐ姿が消えた。

消滅……………？いや、あれくらいの傷じや致命傷に至らないはず。ならば逃げたの？

「……………これは、どういうことだ。もう一体がいる……………？」

タギツヒメが消えた際に、獅童の目がまた赤くなる。そして、彼女は防衛省の方向へ見た。

もう一体……………あそこには……………。

そんな獅童さんに都は彼女の言葉の意味を探るが、可奈美は先に何かを気付いた顔だ。

「……………」

「待って、獅童さん！」

けど、獅童は今度も可奈美たちの存在を無視して、防衛省の方へ歩く。

あそこには何か……………まさか、タキリヒメの存在を気付いたのか!? いや、そうだとしたら、彼女もタキリヒメの存在が知らないということ？

「待って、獅童真希！」

「十条……………」

都は獅童の真意を探る途中に、？和が彼女の道を防げる。

「あそこから退け」

「……………」

「仕方ない……………」

二人共は同じく構えを取る。どうやら獅童は力尽くてもあそこへ向かいたらしい。

「待って！二人共！」

それを止めに来た可奈美。彼女は？和と獅童が関係悪いことを知っている。放っておけば、戦うことが避けられないだろう。

全く、一戦の次にまた一戦か……………。

「？和、ここから先は俺に任せてくれないか？俺もちょうど彼女に用事がある。」

「都……………」

「どういうつもりだ？衛藤 都。」

「都は獅童に御刀を向かう。」

「会わせたい人がいるからね。大人しく、降参させてもらうぞ」

「お前が？笑わせるな、衛藤 都。お前は確かに強いが、お前だけじゃ僕を止められないよ。」

「いや、止めるよ。今のお前なら、倒せる。」

「なに……？」

「獅童は今度に都の方へ向かって睨む。」

「お兄ちゃん……」

「大丈夫。お兄ちゃんを信じて。？和も俺を信じよう」

心配する妹と？和に自信な顔を見せつける。大丈夫、もう無茶をしないから。

「………わかった。無理をするな」

「お兄ちゃん、信じているからね。」

「ああ。」

？和と可奈美は共に写しを解除する。

「衛藤 都。お前を仲間だと思っていたが、僕を甘く見たな。」

彼女の目が細く、彼女は明らかに都に甘く見られることに怒っている。ほとんどは挑発側が悪いが、軽く挑発を乗る側も悪い。

「遠慮はいらん、獅童さん。結芽と戦う時も生身ですし、斬られる自体も大体慣れてきた。」

「いや、慣れては逆に怖い。それと、やっぱり無茶をするよね!？」

「そうなの!？」

？和、少し黙ってくれる？可奈美も心配かけられたじゃない!？」

「もう一度聞く。お前は本気?」

「………本気だ。どうせ、平城の人に口では説得できないと思う。」

「おい、それはどういう意味だ!都」

また地雷を踏んだ……だから平城の人は面倒なんだよな!早苗は例外だが……。

「とにかく、全力でかかっても良い。」

「後悔するなよ。衛藤 都!」

二人は戦闘態勢にし、そうしたら二人はただ一秒に至らない間に戦い始めた。

第47話：ノ口を受け入れる者の話、と対決

古の都、奈良。

この街の一角に、伍箇伝の母校である平城学館は立地している。現学長である五条いろはが就任して以降、御前試合で優勝する刀使を輩出するなど、刀使の質という点からでも優秀な少女達が揃う。その中、御前試合大会二連覇とする少女が当時の平城に輩出していた。

「真希さんっ!!お帰りなさいませい!!」

「あつ、うん。…おはよう」

平城学館中等部三年の獅童真希はただいま任務を出迎えたら、すぐ平城の刀使たち……通称、真希ファンクルのファンたちに囲まれた。

「真希さんっ!お疲れ様です!飲み物買って来ましたっ!!」

「ああ、うん、済まない。頼んでもいないのに買ってきてくれて……」

同期、後輩、先輩から好意が満ちている何か貰って少し申し分ない獅童真希。

彼女はまだ親衛隊に入っていない頃は、すごく気遣うイケメンなので、学館ではすごく人気があった。

「真希さんっ!こちらは私が手作りのカップケーキです!良かったら、これを糖分補充にしてくださいませ!」

「ああ、ありが……」

「こちらは私のメール番号です!!以降出撃する時はぜひ私と!!!」

「こちらは私の気持ちです!ラブレターです!」

「こちらはうちのカギです!待ってます!!!」

「ええ……??ちよつ、待つ……」

「真希さんっ!!」

「真希さんっ!!」

「真希さんっ!!」

「……………」

だが、人気しすぎて恋をしている女の子に囲まれ、一時間ごとに同校の刀使から何かできないかを聞かれるのが、彼女の日常となりつつある。

特に大会二連覇した彼女は、五箇伝の中で彼女を知らぬ者がいなかった。

時は過ぎて、平城学館女子寮。

「……………小池さん、疲れた〜」

「モテモテですね。まあ、頑張ってください」

真希と彼女の先輩に当たる小池彩也は学長から重要な知らせがあるとされ、速やかに任務を終わらせて学館に戻ったが、他の刀使も使用し混雑している食堂にて待ち、テールに突っ伏した状態で彩也に助けを求めているのであった。しかし、当の彩也は口に手を当て、そんな真希の姿をニヤニヤしながら見ていた。

「いやいやいや、これ以上は無理だよ！四六時中何所に居ても見つかってそんなこと言われるのは流石に辛いよ!!」

だが、真希は引き下らず、待遇の改善を求め抗議し、救いを求めていた。

「…………何が不満なの？後輩たち及び先輩たちにも慕われることは理想的で良いことではありませんか？…それに貴女だったら、すぐハーレム状態に慣れると思うよ。」

真希が学館の刀使達に多数慕われている状況を彩也はハーレム状態とって茶化する。

「僕は女だぞっ!!」

「女なのに、鈍感イケメン風情で一気に多数の女を攻略する貴女は文句を言う資格がないです。」

そして、よく彩也にそう叱られる獅童。

二人はただちよつと馴染む先輩と後輩の関係だ。実際小池彩也は刀使の実力が平均？ですが……平城の大先輩である。

彼女が在学している時に、多くの後輩たちは彼女にお世話された。例え万能のハーレム王獅童真希でもお世話されたことがある。

「で、私の部屋に来て……何か用？まさか学長が言つてた親衛隊の誘いに関することですか？」

「あ、ああ……そのことだ！」

本題に戻し、真希は最近の悩みを先輩に伝おうとする。

彼女が御前試合で二連覇を取ったら、すぐ折神家から親衛隊の勧誘が来た。そのこと自体は問題ないが、親衛隊に入るには強化薬の投与が必要らしく、それに戸惑いがあった。

彼女はまた若く、刀使に誇りを持っていた。それ故に少しだけ考える時間が欲しいと言つて、少しだけ時間を貰つた。

その時間を先輩に聞くとする真希。彼女にとって、これはなかなか決められないことだから、経験が豊かな先輩に意見を聞きたい。

「僕は親衛隊に入る自体に抵抗ないが……それでも少し戸惑つていたのだ。」

「何かで戸惑つていたの？折神紫の近くにいるのは誰も懂れたことじゃないか？まあ、私としてはそんなことに興味がないけどね。」

「それはそうですけど……ただ皆を守るため、邪道の力までに借りる必要があるの？」

「え？それはどういう意味？」

「……いや、こつちの話だ。小池さん、貴女から見て……私達刀使はまだ力が弱いかな？」

危うく機密のことを話すところ、真希は早く言い直す。大会二連覇とする彼女は間違えなく折神紫以外の最強刀使だ。

だが、そんな真希もまだ力が足りぬと直接紫にそう言われた。実際彼女も紫と立ち合いにし、ボコボコされた。

無論、大英雄である紫に負けるのは当たり前のことだが。それでも負けた時はすぐ悔しかった。

「そう聞かれても私も一時に答えられないけど、でも人はいつも弱

いから強くなりたいと願って、今の地位に立ってた。獅童さんだつて、そうでしょう?」

「まあ……確かに僕も最初からは強くないんだ。ただもつと周りの人を守るため、自分の腕をここまで鍛えてあげた」

「大会二連覇までに強くなってきたもんね。多分五箇伝の中ではもう獅童さんに敵う者はいないと思う。」

「よせ、照れるではないか。」

少し恥ずかしい反応をする獅童。この頃の彼女はまた単純のところがあつて、時に少女みたいな反応をする。

一応彼女も彼女が言つてたのと同じ、彼女も女だ。少し性別と違う性格してたけど……。

「うふふ、恥ずかしいんだ。」

「当然でしょう!先輩に褒められたもん!」

「先輩か……刀使としたの先輩ならもういないかな」

「……小池さん、刀使をやめたのは本当?」

「うん、やめた。私の御刀はもう小さい後輩に譲っちゃった。私よりあの子はもつと扱えると思う。」

そう言い、彩也は今日買った教科書を獅童に見せつける。

「それに、私は前から警邏科に志望したの。父も警察なんですし、刀使になる前は一時警察になろうと思つてた。だから、これは私が望んだの選択です。」

「先輩の選択ですか……なんか寂しくなるね。先輩が前線にいなかったら」

「寂しくないよ。五箇伝も警察機関の一つだし、私はいつでも貴女たちと戦っているよ。」

笑つて、そう語る彩也。彼女はいつもその樂觀ふりをしたから、彼女に救われる子もいる。

真希もそのうちの一人である。自分より彼女こそが平城の光なんだ。

「それと、獅童さんが親衛隊に入るかどうか……その件について私としては何の良言も与えられないですけど、今の獅童さんならきつと

どんな選択をしようともうまく行けると思う。だって、貴女はその力がある。」

「力……」

「うん、今の獅童さんなら皆を守れる。だって大会二連覇なんだから、その実力と努力を悔れないでね。」

「はい……」

先輩からの深く信頼を受け取る真希。彼女が頷いた顔からはちよつとそのことに気分が舞い上がっていた。

それもそうだ。僕、大会二連勝したもん！この実力があれば、皆をちゃんと守れる。

ノロの力を借りて自分を強化する必要がない。

この薄緑と一緒にいれば、僕は誇れる正義の味方になり続ける！そう思っていたその時の自分は……本当に甘かった。

ー平城山山中ー

「ーきやああー!!」

「誰か、誰か助けて……!!」

悲鳴が山の中に響き渡る。あの日、僕は自分の小隊を連れて荒魂討伐任務に出撃したが……大型サイズの荒魂と遭遇した。

僕と隊員たちは直ちに援軍を求めていながら、謹んで目標荒魂を対応しているが……長く持たなく、何人の仲間が命の危機に落ちた。

「待ってるー！今、僕がすぐその荒魂をー！ー！」

剥がれた写しを貼り直し、僕は再び目標の荒魂と戦うことにする。

けど、巨大の身体でありながら尋常じゃない速度で襲いかかる爪がそう易くそいつを斬ることができない。

「クソー！」

危うくその致命の攻撃を避ける真希。あれに振られたら、写しは必ず剥がれる。

これが大型サイズの荒魂。記録におけば、大型は非常に強力なので、二つ以上の精鋭部隊がない限り討伐しにくい。

「獅童さん！あの荒魂が巨大すぎて無理です！今すぐ撤退したほうが……！」

「それはできない！そいつの足下にまた怪我している仲間がいるんだぞ！隊長の僕が皆を置いて逃げられるわけがないだろ！」

「冷静になってください！あの荒魂に襲われた刀使たちはもう手遅れです!!」

認めたくない事実ですけど、あの化物に傷つけられた仲間たちはもう戦う力が失っている。その上、彼女たちは荒魂の攻撃により酷い怪我がある。

その状況下で彼女たちを救ったとしても、あの荒魂から逃げられる可能性がゼロに近い。

そいつはそれほど恐ろしい荒魂である。大型はまさに理不尽の強さを持つ悪夢そのものだ。

「獅童隊長……ここで撤退を決断しないと、被害が拡大し、部隊が全滅します!!」

「……クソッ！僕が……皆の隊長なのに……!!」

絶大の絶望の前、僕は自分の無力さに憎んだ。もし自分もつと力があれば、こんなことにならないはずなのに……!!

何か大会二連覇なんだ！皆を救えなかつたくせに！なんて自分の強さをそんなに信じていたの!!?

僕が弱すぎた……無力なのだ。あの方折神紫の言うとおりに僕は無力の刀使だ。

僕は仲間の誰も救えなかつた自身の強さを過信しすぎた愚かな娘だ。

きっとこれは僕への傲慢の罰だろ。

現実はその甘いものではない。力が足りぬ者が今みたいにそう安く潰される。

――それが現実^{現実の世界}。甘い夢がない残酷なもう一つのリアル^{現実}だ。
その後、綾小路からの援軍が来て「僕一人」と一緒にあの荒魂を討伐した。

――その日、僕は自分の部隊から多数の負傷者が出した。
将来有望だったのに再起不能となり、引退を余儀なくされた刀使も少なくない。

自分の非力さを思い知らされたあの日を忘れたことがない。事後、自分のせいに思わさせたくない優しい隊員たちが無力な微笑みを僕に見せたことも忘れる一瞬もない。

あの子たちはあんなに刀使をやり続けたというのに……僕のせいでそれが叶えることがなかった。

……僕はこの自分の過ちで失った。

一人の戦友も――。

一つの誇りも――。

一度の誓いも――。

全て失ったように感じた。だからこそ、僕は決意した。

「どうしたん、真希ちゃん？急に相談なんて……」

学長室にて、いろは学長は優しく微笑みながら、聞いてくれた。その声が僕を不思議なほど落ち着かせてくれた。

「学長、……お話が、紫様に連絡したいのですが」

「決意したのですか……」

「はい、僕は親衛隊に入ります」

そして、僕はノ口を受け入れることにした。荒魂となっても悔いは無い、それ相応の事をしてきたのだから。

力無き正義は無力――。

毒には、毒を。

力でなければ守れないものがある。
もしそれが仲間を守れることが叶える力であれば、例えその力は神でも鬼や悪魔でも構わない。

荒魂全てをこの世から斬り消せれば、僕は人ならず存在になってもいい。

それが――僕、獅童真希の決意である。

◇

――防衛省近辺にいる名も知れぬ神社――

真つ先の一閃が都の前に放ったが、都はギリギリそれを防げる。
重っ！

「お兄ちゃん……！」

「都……！」

獅童の斬撃で後ろの方へ飛ばされたが、彼はすぐ体勢を立て直す。しかし、獅童の攻撃が途切れずに都を攻めてきて、都は防禦を徹するしかない。

一撃一撃で重くて、手が痺れるくらい。タギツヒメはずっとこのように重い一撃を受け止めるのか……やっぱりレベルが違うよ。

「どうした！衛藤 都。その程度か！」

「………ッ！」

再び重攻撃で都の平衡を壊すが、彼はすぐ立て直して、次に襲いかかる攻撃を防げる。

だが、時間が続くほど攻められ側はどんどん劣勢に落ちていく。それを見てヘラヘラするはずの二人はなぜか異常に冷静で見届ける。

彼女たちが都への理解では、獅童の攻撃は別に避けられないわけじゃない。彼ならこの場の誰もより彼女の攻撃を避けて彼女に攻撃を与えるはず。

何かしらの理由で彼は彼女の攻撃を受け止めた。

……何か策があるのか？

「うつつがあー！」

「よく僕の斬撃を耐えたね、衛藤 都！」

「ぐう…、うつつ…！」

獅童の斬撃に吹き飛ばされた都は背中が神社の柱にぶつけられた。常人の力で常人を超える力で振る斬撃を防げるのは流石に無茶すぎだ。

これが八幡力を加えた神道無念流の威力か……流石、親衛隊第一席！

「だが、もうそろそろ終わりにしよう」

ゆつくり都に近づくと獅童。彼女はもう都が勝算がないことを察した。

「はあ…はあ…、そうだね。でも終わる前に聞きたいことがあるんだ。獅童さん、お前はなんの為にその剣を振るんだ？」

「なに？」

「貴女との戦いで、貴女の剣から自分自身への嘆きを感じた……。貴女はなんの為にその刀を振るんだ？」

「……………お前には関係ない話だ。」

「そう……………なら、その答えを聞けるまでにお前を叩くよ。」

獅童の攻撃で息が荒れている都。彼の様子だと、そろそろ身体が限界だったのに、また御刀を強く握っている。

「また戦うつつもり？ どうやら第五席への期待が高すぎたのかもしれない」

「俺もだよ。第一席がただこの程度とは失望したよ。道理で？ 和に勝てないというわけ！」

「……………その口を今すぐ止まらせてやる！」

彼からさらなる挑発。獅童は今度手加減なしで、都へ攻める。

その突刺の構えは必ず都の防禦を解き、第二撃で一本を取る。

ああ……知っていると。〃全集中使わなくても、お前次の動きが全部知っているさ〃。

「……………」

その一瞬、可奈美は都の意図をようやく察した。彼はさつきから全集中状態じゃなくて、一般の状態で写しを貼る獅童と戦っている。

そして、彼は〃この時を待っていた〃。

「……………!?!」

初めて彼女の攻撃を避ける都。

獅童は彼がきつとこの一撃を止めると思っていたが、彼が避けることで獅童は大きな隙を彼にバラした。

これはまずいと察した時はすでに遅く、手に持っている御刀は彼に奪われて、地面に捨てられた。

「……………!!」

そのような結果、都以外の三人は予想がつかなかった。まさか最後は無刀取りで終わらせるとは……しかも、あの獅童真希から御刀を…。

「獅童さん、これで俺の勝ちだ。俺がお前を甘く見るように、お前も俺を甘く見た。それはお前の敗因だ。」

「僕が……負けた……?もう一度……?」

「俺の勝ち。お前の負け」

この場で一番ショックを受けたのは間違えなく負けた張本人だろ。彼女は自分が絶対に勝つと思っていた。けど、その過信により軽く相手の思う通りに落とされて、このような結果が導いた。

「お前……まさか、わざなのか?僕を甘く見るのも、わざと僕の技を全て防げるのも……この時を待っていたのか」

「理解が早いな。お前が俺の挑発に乗る時は既にこの結果を見れたのよ。まあ、これもお前に勝てる率が一番高い戦法だけだ」

彼は笑い、獅童の刀を拾う。

「僕の負けたね……これが第五席か」

無力の笑い、獅童はしばらく立ち上がらない。

自分はまた過信しすぎた傲慢によって、刀使すらもない彼に負けた。

それはいかなる屈辱なのかを少し感じていたのですが、そんな感情より彼女は何も変わらない自分を自嘲する。何にせ、彼女は同じ過ちを踏んだのだから。

例えノロの力を得ても、自分は自分の傲慢さにより、ずっと負けばなし。

「二応言っておく、俺はただお前の弱点を最大限に発揮させただけ。お前と真正面で戦ったら、俺は特に負けるよ。真正面でお前の流派に勝つ者は多分ないだろ」

「それは……慰めなのか……?」

「可奈美を含めた六人以外の人間にそうしないよ。俺は六人のことを守るだけでいつも精一杯なのよ。」

「酷い男だね……」

「最初から俺はいい人だと名乗っていない」

「お兄ちゃん……また……」

「自分に悪役を回すのがそんなに好きなのか? お前」

なぜか? 和と可奈美に見透された。本当、この二人に敵わない。

「……あはは……ちよつとお前に羨ましいよ。いい仲間が持つのはいいことだ」

彼が可奈美と? 和との関係を見て、獅童は思わずにやけてしまう。これは第五席が持つ宝。

それを守るために、彼は傷だらけでも精一杯やっている。弱い僕と違って、彼の方は凄いや。

「お前もそんなものを持っていると思うよ。寿々花はずつとお前のことを待っているから」

「寿々花か!? 彼女は大丈夫なのか!」

「朱音様を悪人だと思わないでくれ。彼女は俺たち二人に良くしてくれました。」

「そうか……無事だったか。」

仲間のことが無事だと知り、彼女は安心した顔をした。

「獅童さん、俺と一緒に寿々花を会いに行きませんか？」

「いいの？」

「最初は力尽くでも、お前を彼女の前に連れて行くって彼女と約束したし。それと、お前が俺に負けだから、拒否権がないぜ」

「……………わかった。一度負けた身だし、お前の言うことに従うよ。ありがとう、都。色々…」

彼女の御刀を返し、彼女を引っ張り上げる。

そうしたら、獅童は柔らかい顔で都に感謝する。負けたというのに、不思議と軽い気持ちだ。

「意外にその顔に似合うね。やっぱり獅童さんも女の子なんだね。」

「僕は元々女なんだぞ。」

「そうだね。イケメンだけど、ちゃんとした女の子なんだね。」

「なっ……………!!／／／／／／／／」

また無意識に危険発言をする彼。そこで獅童も珍しく顔が赤くなった。

「どうやら要件は済ませたな。」

「お兄ちゃん、お疲れ様。」

そして、可奈美と？和二人はこっちに近づいてくる。なぜかちよつとだけ威圧を感じる。

「待たせて済まなかった。これからはー」

「付き合うよ」

「え……………？」

「そうだね。今更、私達を捨てて獅童さんと仲良くするのが私は許さない。」

え……………？今、一瞬寒気が……………気のせい？

「可奈美との理由が違うけど。今更、私を部外者扱いされるのも気に食わない。」

ちよつと？二人共、凄い圧力だけど……………!!!?

「えっと、これは噂の修羅場なのか？」

違います。獅童さんは偶に変な知識をお持ちですね。

都より先に察した獅童。実のところ、お兄ちゃんを恋している可奈

美はともかく、？和も少し都を無意識にそういう思いを抱かえた。

都が薫たちと親しくは構わないが……他の女の子になったら、ちよつと受け入れない。そこは彼女さえもわからない現象である。

その後、都たちは一応防衛省に戻って事務次官に事情を説明する。説明した後、彼女たちは刀剣類管理局に戻り、獅童真希のことを含めて報告した。

第48話：面会前の一時

平手打ちの音が病室内に響き。

このような光景は正直予想しなかった……。

防衛省から本部へと戻って、防衛省のことを本部長に伝えた後、朱音様と同行してもらうことにした。

そして、都を含めた五人は此花寿々花の病室へ参ったが……。

獅童さんがこれまでの全てを寿々花にバラしたら、まさかの平手打ちが来た。

そのおかげで、現在獅童の左頬が赤くなった。とても痛そう……。

「ただ一人で戦って、英雄になるおつもりですか！」

「違う、僕は……」

「結芽のこと、紫様のこと、タギツヒメのこと……憂^{うれ}えていたのは貴女だけと思えますか！」

そう大声で叱るけど、最も痛いなのは寿々花なんでしょう。彼女はこの五ヶ月ずっと獅童のことを思っていた。そこで獅童が独走している理由を聞き、さらに悲しくなっていた。

基本推測した通り、彼女は一人でタギツヒメを追って戦うことにした。それを追加したりスクは管理局に犯人だと見間違ひされ、危うく五箇伝の敵になるところ。

これは愚かなのか、それとも英雄行為に称えられることなのか……正直、俺もそれを理解分けるほどの人間ではない。

昔の俺だって、自分一人で何事も片付けようとするから。

「獅童、此花も戦っていたんだ。体内に融合した荒魂を除去する様々な研究に協力してくれた。」

「おかげで研究は飛躍的に進みました。時間はかかりますが、いつか貴女たちの荒魂を除去できるのでしよう。」

そこで真庭本部長と朱音様はこういう獅童さんを見てられなくて、寿々花が暗躍にやっていたことを彼女を伝う。

俺もそれを知っていたから、彼女の味方になることを決めた。

「荒魂を……」

「獅童さん、此花さん。貴女たちの戦いは無駄にしません。もちろん……燕さんの戦いも」

「……………っ！」

結芽の話を聞いて、ほぼ全員は同じ悲しい顔をした。彼女の最後の結末は都が直接……ううん、寿々花が彼に代わって伝えた。

彼は結芽の最後を見届ける者として、彼女のことを誰よりも気にしていた。その剣も燕 結芽の魂が宿っていた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「都、私では満足できないが……どこまでも付き合おう」

「……………ありがとう、二人共。俺は大丈夫。」

うん、既に彼女の死を受け入れられたから。それに、お前たちがそばにいないことで俺は泣けない……。

泣いたとしても、三人きりの空間であってほしい。

「……………ずっと一緒に戦っていたのね。」

「……………っ！」

寿々花は悲しい顔で、獅童が御刀を握る手を両手で優しく包み。

そこにいるのはいちご大福ネコという萌キャラぬいぐるみがつけていた。彼女……結芽のそれを受け継いだのか……獅童さん。

「この薄緑は我が鞍馬流と縁が深い御刀。ですが、このようにされると、しばらく貴女のところに置いてしかありませんわね。」

「寿々花……」

つまり獅童は結芽、寿々花を精神的に連れて戦った。ある意味は俺とちよつと似ている……。

まあ、俺は剣技だけを受け継いだけど。

「あと夜見さえも戻れば、元の四人……ううん、〃五人〃が全員揃いますわね。」

笑顔で獅童さんにそう言い伝えた寿々花。とても良い話ですが、五人とは俺のこと？それとも折神紫？

「五人？」

そこで俺と同じく反応をした獅童さん。

「ええ、候補者とはいえ。結芽の最後を付き合ってくれた都くんも

我々の一員です。違いがありませんか？」

「……………そうだね。僕も彼に連れ来られた。既に一員ですね。」
獅童と寿々花は一斉にこっちに見る。

「えっと……………」

「いいじゃありませんか？ 実際、都さんも姉に選ばれた親衛隊の一員ですし。」

「そこに関しては特に問題がない。」

「お兄ちゃんは第五席の話を聞いたときに、びつくりしたけど。絶対似合うと思っていた！」

「まあ、親衛隊のことは特に憎んでいないから、受け入れたらどうですか？」

皆はどうやらそれを賛成したようだ。まあ、俺としては喜ぶかな？ 別に親衛隊と仲が悪いとかじゃなく、ただ結芽から大切な物をもらっただけ。

本当にこの縁を感謝している。

「……………獅童さん、寿々花。俺で良ければ、第五席としてお二人の間に入れさせていただきたい。」

二人にお辞儀する。そうしたら、二人はすぐ返事をしてきた。

「もちろんですわ。以後お見知りおきを、都くん。」

「こちらこそ、ずっとお前を仲間にしたくて考えていました。お前がいると、心が強いよ。」

「ありがとうございます。お二人の期待をそう向けぬよう頑張ります！」

「あはは、大袈裟ですわ。」

「そうだね。」

こうして、都は名だけの親衛隊に入ることにした。そのことを喜ぶのはこの場にいる全員。

「そうだ。衛藤、早速ですが……………貴方にもう一つ伝えておきたいことがあります」

「え……………」

そんな暖かい雰囲気の中、本部長から話をかけてきた。

「妹の方の衛藤さんと十条さん、此花さんと獅童さん。貴女たちにもこのことを聞いて欲しい。」

「何のこと？」

「僕たちにも？」

「ええ、とても重要なことです。」

◇

翌日の夜

―横須賀港―

米海軍第7艦隊が置かれている在日米軍横須賀基地、及び海上自衛隊第1護衛隊群が籍を置く横須賀地方総監部の施設等が置かれる、軍都横須賀。

浦賀水道の出入り口を目前に、諸外国艦の動きをも睨む場所だ。

そこから出港した海上保安庁の巡視船は、海域パトロールとお遣い・・・を兼ねて太平洋に繰り出した。

冷たい夜風が肌に染みる。海が船で騒ぎ出す音が聞こえる。けど、こういう寒さこそ、自分の高ぶる思いが冷やせると思う。色々考えることが多くて、正直のところはとても悩むんだ。

「あいつもこういう風に悩むのか……ううん、きつとそうだよ。ずっと自分一人を犠牲にして、周りの人を助けると思ったから……彼がこうして刀使という世界に入って来れた。」

これはいいことなのか、悪いことなのか。彼は他の人と同じ平凡な生活を過ごせられるのに、自分の件で丸投げにこっち側に参った。

本当に馬鹿なんだな……彼は。

でも、これも彼らしいと言えるだろう。昔からずっと私の手を勝手に引つ張って、色んな遊びをした。

例えば私は隠れても、すぐ私を見つけ出し出してくれる。彼はそういう人なんだ……。困った人が目の前にいたら、迷わずに手を差し伸べる。私もその一員だった。孤独の私に暖かさをくれた……。友達になつてくれた。

今でも私のことを大切にしてくれた。そのことに私はとても嬉しかった。

辛いことがあっても、悩むことがあっても、彼がそばにいたら、何となく安心ができる。

とても不思議な気持ち……。彼のことを思うと、冷たくなった顔が勝手に熱くなっていく。

「私はもしや、彼がこっちに来ることを喜んでいるかもしれない。ハハ……。彼を巻き込まれたくないと、最初から決まっているのに……。全く、私の思う通りに行かないなんて……。半分はお前のせいなんだぞ。都。」

？和がそう言っているのですが、内心はとても嬉しかった。彼がこうして自分のそばに居ることを何よりの喜びだと。

「？和ちゃんく〜」

そう思うと、突然、背後から聞き覚えがある声で自分を呼んでいる。

「はい、おミルティ。お砂糖が多め。」

「ありがとう。」

彼女、衛藤可奈美が二つの熱いおミルティの一つを？和に渡す。そして自分が残る一つを持つ。

彼女の手からもらったミルティを一口に飲むと、甘い感覚が口に広がる。身体もポカポカと暖かくなってきた。

「やっぱり悩んでいる？紫様のこと」

？和の顔を少し伺って、可奈美はそう尋ねる。

「うん……」

「朱音様が言ってた。紫様はもうタギツヒメじゃない、元の彼女

だつて」

「わかっている……」

「納得ができてないだね。」

「……………」

それもそうだ。折神紫はタギツヒメに操られただけ……ううん、一人であの大荒魂を十八年間抑え続けた。結局、意識が占拠されても……あの決戦の夜も意識が一瞬に取り戻した。

少し話がズレていた。とにかく、？和はかつて折紙紫のことを恨んで御前試合の時までに一人で頑張り続けた。

そんな彼女を支えるのは復讐心。折神紫への恨みである。

それを軽く消すのは易いことではない。特にイチキシマヒメと折神紫を会いに行く今は、？和にとつてそれが重いことだろう。

それにしても、まさか朱音様から紫様が私たちに会いたいと言い出したなんて……これからは本物の紫様に会うんだ。

「？和らしいなあ。心が正直で言うか」

「お前だつて人の前に言えないだろう？剣術に妙に拘るし、兄の前にならずと甘えているように見える。」

「？和ちゃんだつて、お兄ちゃんの前に妙に素直になつたじゃない！照れてるし」

「はあ!?どこか!／／／／／」

「ほら、今も顔が赤くなつたじゃない！お兄ちゃんのことになると、？和はずつと可愛い反応を取る！」

「そ、そんなことがない!／／／／／」

「なら、？和ちゃんはお兄ちゃんのことを好き？」

「す……………!／／／／／」

「……………ごめん、さっきのは冗談。そんな真面目な反応をしないで!!」

慌てて、何も無いふりをする可奈美。彼女も少し冷たい夜風が必要のようだ。

兄への恋心が可奈美をそんな話題が続けたくなってきた。それどころか、彼女も？和から聞くのが怖くて。

だって、？和ちゃんは自分より何倍がいい女の子。料理や家事ができるし、とても優しいし、お兄ちゃんのこともよくわかつているし……私のようなわがままの妹より？和ちゃんがお兄ちゃんによく似合う。

舞衣ちゃんもそうだった。私よりしつかりしてて、お兄ちゃんはきっと舞衣ちゃんと一緒にいたら、幸福なんだろう。

……私はただお兄ちゃんの実の妹。最初から希望がないんだ。……ないけど、諦めたくない。お兄ちゃんのことをどうしようもなく好きになつたから。

私って想像より自己本位の女の子なんですよね。だからお兄ちゃんのこと……お、お嫁さんになれない。

日本の法律でも兄妹って結婚できないから、お兄ちゃんと結べない。こういう運命だからこそ、私はずっとお兄ちゃんを隣に縛っていたのかもしれない。

「なんだ……冗談か。でも、私は都のことを何とも思っていないから、貴女のお兄さんを奪わないよ。」

「……………」

またそんな態度……お兄ちゃんのことを結構好きなくせに。私のせいで、自分を騙すなよ……。

「可奈美……？」

無言になった可奈美に？和は彼女の名前を呼ぶ。

「ううん、少し考え事。二天一流ってどうやって破るのか」

「全く……お前らしいな。」

そして、？和にそう誤魔化している可奈美。

彼女はそのままじゃだめだと自覚していた。

お兄ちゃんは幸せすべきだと、彼女はずっとそう思っていた。が、彼を縛るのは自分……つまり彼が妹の可奈美の関係でずっと単身のまま。

それを少し喜んでいる汚い自分がいた。お兄ちゃんのことが好きだから、つい独占している自分はずるいと、この恋を気付いた時から、ずっとそう思っていた。

お兄ちゃんの幸せを奪うのは自分……私だった。それを手放せた

くない自分もいた。

「すう……すう……味がしないなあ」

いつの間にか手に持つているおミルティは味がしなくなる。きつとこれも心境の変化による短い現象なんだろう。

◇

―海上保安庁の巡視船

艦尾デツキー

「やはり、紫様に会うのを緊張してらっしやるんですか？」

「寿々花……！」

彼が「ぶこう」の艦尾に一人で夜の海を眺める時、親衛隊の制服を着替えた寿々花は船内から出てきました。

「冬の夜、特に海風が寒いですから、船内に戻ってください！身体が冷えちゃいます！」

「心配をしてくれてありがとうございます。ですが、私は大丈夫です。それより、都くんこそこんな寒いのに、一人ここで何を悩んでいますの？」

「それは……」

「やはり、紫様に会うのを緊張していますの？」

「……はい。」

自分の心が見事彼女に見抜かれて、それを素直に答える彼。

正直、自分は正式に折神紫に会うことがない。御前試合の時はただ遠く眺めていただけ、折神本家での戦いも彼女のことをただの大荒魂しか見ていない。

故に今回会うのは、多分初対面だと思う。だから少しだけ緊張してきた。

「正直、自分はあまり紫様のことが知らないので……どんな態度や顔で向くのがわからないのです。その上、親衛隊の一員になったん

だ

「いつもの都くんがいいですよ？紫様もきつと素の都さんを見たい
だと思えます。」

「そうなんでしょうか……」

「ええ、…少し無礼なところもありますが、私はそういうところが
嫌いじゃありません。だって貴方はどうしようもなくお人好しで、優
しい方なんですから」

隣に来て、優しく微笑んでくれた彼女。

「……そんなことはない。俺は仲間だけに優しく人だ。誰でも優
しくするつもりがない。」

「それでもいいのです。私も親衛隊や知り合いの友人だけに優しく
する女なんです。血が繋ぐ家族のことは一度も思ったことはありません
わ。」

「……家族と何かあったんですか？」

「……大したことではありません。そういえば、まだ貴方にうちの
ことを話しておりませんわね？」

「……うん。」

軽く頷く。

寿々花の実家のこと。正直、表面だけの話しかわからない。

此花家は京都府ではめっちゃ有名な上流階級層のお金持ち。その家
がやっている仕事がよくわからないが……財界や政治家などの要人
はよくその家と取り合わせをしている。

柳瀬グループも例外なく、此花家と交流している。つまり此花家は
相当大的な事業をやっている家だと確かだ。

「それでも話せるほどのことではありません……私は確かに此花家
大事なお嬢様なんです。実際お父様はただ私を政治の道具しか扱っ
ていませんでした」

「……それはどういう？」

「ほら、こんな顔や身体が優れている娘さん。しかも刀使という誇
れ高く仕事をやっている以上、それを狙わない男性はいないでしょ
う」

確かに寿々花の素質では超美少女の類に入れるレベル。きっと舞衣ちゃんと同じ告白されたことも多いのでしょうか。

「お父様はそれを使って、たくさんのお偉いさんたちを引きつけて商売をしました。もちろん、お見合いもたくさん来てしまいましたわ」

「寿々花……」

「相手は全部お父様を選んでくれた。全員は商売価値がある人間。此花家の跡取りとして、結婚相手はそれほど身価値がある人間でなければなりません。貴方もそれくらいことがちやんとわかるでしょう？」

「ええ……」

舞衣に告白をする男の中には、柳瀬グループを狙う人もいた。その娘さんの旦那になれば、もう人生が勝利とも言える。

権力が持つ家の娘はいつもそういう運命だった。高貴の姫だから、多数の人に求められている。

時にその姫が政治の道具として政治婚姻される。それが遙か過去の時代から現代に流れ込んだ人類の文明である。

寿々花はまさにその姫だった。高貴な花からこそ、求める人間や勇者もたくさん現れた。

「それで、私は此花家から逃げ出したの。親衛隊に入る主因ではなかったのですが……家から逃げるのはその“ついで”とも言えるのですわ」

「じゃ、親衛隊に入るのは……やはり」

「ええ……真希さんです。2回の御前試合の時はずっと彼女に負けっぱなしで、すごく悔しかった。どうしても水をあげられたくないため、衝動的に荒魂を受け入れようとしたの。まあ、当時暗い顔をしていた真希さんを放っておけない理由もあつたんですわ」

そう言つて、寿々花はまた自分の髪の毛を弄る。これは彼女の癖だ。

しかし……やはり獅童さんと関係が良かったのね。さつき船内でも獅童さんとイチャイチャしていた。まあ、鈍感の彼女は当然寿々花の

気持ちに気付かるわけがない

「なるほど。寿々花はとても優しい人なんですね」

「……私を褒めても、何も出ませんよ?」

「わかってる。俺も寿々花から何かを得るため、言うつもりがない。俺はとて正直な男なんですから」

「……それは自分で言うの? 今まででは散々柳瀬さんたちに黙って一人で無茶をするくせに」

「そ、それは……あの時はそうするしかないもん!」

「ふふつ、…都くんは本当に時々甘い反応をしてくれましたね。弟がいたら、こんな気分なのかしら?」

「寿々花も俺のことを弟だと見るのか…」

「ええ、確かに都くんは私より身長が伸びていますし、とても頼れるように見えますけど……からかわられ易い点はとても可愛いなのよ? ふふつ……」

クスクスつと笑い、寿々花はまた俺に甘い微笑みを投げてくれた。この人は偶に人弄りの悪い点がありますが、基本何をしても可愛いと思われる人だ。

舞衣ちゃんと同じ高貴なお嬢様なのに、俺という平民と普通に接してくれた。……本当に、そういう自分がずるいと思っているよ。

「そういうえば、寿々花は最近実家のことで困らせたことがある? お見合いのこととか」

「全くないですわ。鎌倉の夜以降、実家から一つの連絡もなかったのです。恐らく私は捨てられたのと思います。」

「捨てられた……なんで?」

「折神紫が貴方たちに倒されたから、厄介ことになっていた。それで実家も暫くこっちに関わりたくないと思っただけでしょう? 全く、血が繋がる親族は所詮その程度……」

叱るような口でそう言うけど、寿々花の顔はとても悲しく見える。

お嬢様生まれだけど、実家は自分のことをどうでもいいと思っただ。それはそれで悲しい。

これが柳瀬家と違って、全く暖かくない上流階級の家。そんな家だ

から、寿々花は今の寿々花になったということか……。

「……少し貴方たちのような温かい庶民家庭に羨ましく思う。本当に幸せなのね？ 都くんは」

「ええ、…可奈美のようなかわいい妹ができて、俺はとても幸せだ。ただ厄介ことに巻き込まれる体質もなんとかしないとね。」

「確かに（苦笑）。……私もひと早く貴方たち兄妹を平穩の日常に戻させるように頑張らないとね。それは私が貴方に唯一してあげることだわ」

「………寿々花」

「ちゃんと今の幸せを大切にしなさいね。でなければ、許せないから」

小さい微笑みでそう忠告した彼女。実際彼女もどうしようもなくお人好しなのでは？と思わずそう思ってた。

その後、俺は彼女と一緒に船内に戻って休む。これから会う相手は最後の女神もいるから、体力もちゃんと温存しないと。

そして俺もこの間、寿々花のことをどう助けてあげることについて考え始めた。

彼女はとても良い女の子なんだから、男として彼女に力を尽くしたい。

特に自分は彼女からたくさんのお世話をもらった。その恩返しとして、彼女に幸せをしてあげたい。

あれから数分後経ち、海面から米軍所属の潜水艦が浮上していて、船と同行している。

最初は驚いたが、外見から見れば、あれは舞草襲撃事件に使った逃走用の潜水艦だった。

そして、浮上していた一分後、潜水艦から一人の女性が艦上に現れた。

その人物は白い軍服を着ている女性、膝までに延ばしている黒髪と

覇気がある細い目付き。これだけの特徴があれば、彼女の正体はすぐわかるはず

——彼女は、刀剣類管理局局長の折神紫である。

第49話：罪と最後の女神。

―米軍所属 舞草用潜水艦内―

可奈美、？和、都と他の二人の親衛隊。五人は折神紫に続け、潜水艦の中に入った。

そして、目的部屋に到着したら、親衛隊の二人はすぐ折神紫のそばに立つ。

「病院で療養中はずの局長が武装している潜水艦の中とはな」

部屋に入ってから、初の一言は？和が先に取る。しかし、その言葉は紫に対して皮肉染みた事だ。

「医療施設も完備していますから、嘘というわけではないですよ。」
そんな？和の言葉に苦笑している朱音は彼女の言葉を訂正している。

まあ、言葉のあやですし。確かに、嘘ではない。

「紫様はもう荒魂じゃないですよね？」

「衛藤さん……」

「お前……」

次に可奈美の言葉にも呆れた親衛隊の二人。こういう場合ではこういう質問は流石にだめだと思う二人。

しかし、紫はただ「ああ……」と答えただけ。

「何度も検査しましたが、局長の体内に荒魂を検知されていませんでした。肉体も十七歳のまま」

「十七歳……!?あれか……!!?」

この場にもいる累さんの話を聞いて、都は凄く驚いた反応。

だって、あの体で十七歳ですよ！あれはどう見ても30代くらいの身体じゃないですか!?しかも、あの胸は……エレンより大きいではないか！

あれって十七歳？もう成熟の大人じゃないか！

「お兄ちゃん……なんてそこで驚くの？そして、どこを見ているの

？」

「やっぱり巨乳派か？そうか、わかった」

二人は都が紫の胸にじろじろ見ているところを気付き、共に都の腰を指で強く握り締める。

「いたたたたたたたたたたー！！二人共、どうしたの!?!めっちゃ痛いんですけど:!!」

二人に攻められた都はみつともない弱音を吐いた。

彼は二人が嫉妬していることが全く察していなかった。

「これは懲りしめだ。反省しろ、馬鹿者！」

「え:…なんで怒るの??和さん？」

「?和ちゃんの言う通り、お兄ちゃんは少し反省してください！」

「可奈美!?!すげえ怖い顔していますけど!!」

そして、二人が怒る理由をわからない都はこうして二人に懲りしめられた。

それを会見早々見届けた紫と獅童は呆れた顔。他の人は共に「乙女心がわかっていないですね:…この鈍感男」と言いつけた。

それから数分の茶番が終わり。都はよくやく二人に解放された。

:…が、可奈美と?和は都を二人の間に挟んで席を座る。

二人に挟まれたままの都は、今でも二人から不機嫌なオーラを感じて、とても気まずそうな顔。

「都さん、これからの発言は控えてくださいね:…特にこの二人や柳瀬さんの前に」

やっと懲りしめ劇が終わるところに、朱音は汗をかいた顔で都に良言を与える。

はい、これからは控えております。もう懲りしめられるのがごめんだから。

「:…:…ゴホン、少し本題に戻る。まずタギツヒメと同化しているはずの私がなぜここにいるのかを説明する。」

そして、いよいよ本題に入り。紫はそれについて説明する。

「あの夜、大荒魂と同化していた私はお前達に討たれた。諸共滅びる寸前だったが、奴はこの肉体を捨て、隠世へと必死で逃れて行った。

荒魂を巻き散らしたのは追跡されないようにするためだ」

「トカゲの尻尾切りみたいですね」

「衛藤、お前……」

「もう少し言葉扱えを……考えてくださいな」

「え……？」

可奈美の失言に呆れた親衛隊の二人。この兄妹は次々と紫の前に茶番や失言をどんどん現した……。

だが紫はただそれを聞き、「そうだね、私はその切られた尻尾だ」と自嘲する。

「だが、今はそう言ってられない事態となった。」

「三女神ですか？」

「ああ……、かつてタギツヒメだったものが3つに別れた。お前たちもイチキシマシメ以外のと出会ったな。」

「はい。」

「その中、都さんはタギツヒメと三回ほど会って、二回ほどに戦った経験者です。」

「ほお……それでどうだった？タギツヒメは」

「とても強かった。局……紫様……」

「好きな呼び方で呼ぶが良い。それを許す。それと、私の前ではそんな緊張しなくてもいい、今の私はただ隠れるしかない小娘だ」

「は、はい……」

紫に好きな呼び方を呼ぶことが許可された彼。やっぱり衛藤都はとても不思議な男だと思ふ獅童。

ただ直接面会の回数は二回しかないのですが、もう紫様に気に入られた。昔、紫様も彼のことを妙に買って親衛隊候補に入れた。

かつての友・藤原美奈都の息子であるゆえ、気に入られる可能性も考えていたが……彼、個人も不思議の魅力が溢れている。

まず糸見沙耶香から舞草まで、それどころが平城の刀使や寿々花から信頼や絆を得るカリスマ性。それを見抜いて紫様は彼を親衛隊に……なのか？

そうと、考えているうちに都は再び勇気を絞って言い出す。

「正直、局長に憑依する状態より今のタギツヒメはめっちゃ強かった。まるで鎖の縛りから解放された猛獣みたいな強さだったけど……やはり、あの夜が勝てるのは局長である紫様がタギツヒメを妨害するおかけだよな？」

「……………いや、そうとも言えない。お前たち三人はタギツヒメの予想以上に強かったから、一時に勝てたんだ。いくら私でもお前がそこまで御刀の力をうまく扱える未来が『見えなかった』。」

「しかも使うのは今付けた刀ではなく、結芽の御刀。二本の御刀に認められること、刀使の歴史では例外でもないので……男性である貴方からそのことが起こるのはとても信じられない話ですわ」「俺でもわからないよ。ただ『御刀から使って欲しいと聞かれた』、それでそのままタギツヒメと戦うことにした。」

「そのところ、フリードマン博士とその協力者である刀工技師に見てもらった結果、その御刀の所有者はすでに衛藤さんになりました。」

「結芽の刀が……………」

「ある意味ではいなくなった燕の意志がその御刀に宿っているように見える。彼女は貴方を選んだのかもしれない、衛藤 都。」

「俺を……………」

結芽のことを再び思い返す。彼女とはまともな会話をしなかったが……十分彼女との戦いから彼女の心を知った。

彼女は本当に寂しく、わがままのいい子なんだ。俺や可奈美と同じく剣術の腕が立つ、剣の立ち合いも大好きな女の子だった。

なのに、彼女の命は無情な運命に奪われた……それでも最後は安らかに行った。これが良かったのかなと思うのは最近のことだった……。

……………ずっと一緒に戦ってくれたのね、結芽。

握ったのは彼女の刀ではないが……彼女の剣技は既に自分の剣に溶け込めた。ある意味では彼女の意志が江雪左文字の中にもいるのかも。

そう思うと、段々と気持ちよくなる気がする。

「それと、燕の話は朱音から聞いた。彼女の最後のワガママに付き合っただけがとう。」

お礼を言う紫は頭を下げ、感謝する。

「紫様……!？」

「顔を上げてください……!？」

それを見て、慌てた親衛隊の二人。

「正直のところ、お前に……いや、お前ら三人に謝りたいことがたくさんある。その前に燕の件を感謝したい。お礼を言う」

頭をずっと下げたまま、誠意を表す紫。

彼女は結芽のことを他人予測以上重視していた。……いや、もしかして親衛隊の全員にもそう思うかもしれない。

「……そのことはもういいって、自分も自分の欲望に従って結芽と思う存分に戦いました。……最後は勝てなかったのですが」

「そうか……」

それだけ応じ、紫はどうやら何か理解しているような顔。彼女だけではなく、寿々花と獅童も同じ顔だ。

結芽のことをよく理解している人たちからかな？何かわかっていのか、わかっていないが……少なくとも俺はただ自分なりに結芽の最後を最高の結末としてプレゼントにした。

「……十条、衛藤とその兄、衛藤 都。少し良いか？お前たち三人と話がある。朱音と他の者は少し席をはずしていただきたい」

「……は、はいー」

紫が姫和と可奈美と都、そして自身を含む四人だけで話したいことがあると言っただけで朱音と累、そして寿々花と獅童を退室させた。



「お前たちは私を恨むのか？」

他の者が退室したら、紫は早速三人にそう聞いた。その表情から別

に罪悪感など感じませんが、彼女がこの質問をする時点で、既にこのことを気にしていたことがバレた。

そして可奈美が恨むことを否定すると、?和が迷いなく「はい。」だと答えた。

「あなたが荒魂に憑依された二十年。母がなくなるその時までには悔やみ続けていた。例えタギツヒメから貴女の事情を聞いても、そのことは今でも許せなかった……………」

「?和ちゃん……………」

「……………」

「十条、衛藤、すまなかった……………」

紫の口調から深い歉意を感じた。顔から感じられなくても、彼女は俺たち三人にどれほどの罪悪感を抱いたのもわかる。

この人は、うちの母がいなくなった日々も辛かったと思う。何にせ、彼女は世界より二人の親友の命を選んだのだ。

その事実だけを見ると、心は何となくそんな彼女を許せる……………いや、最初から憎んでいなかった。

「私は二十年前、篝と美奈都を失いたくない故、何千人もの犠牲者を出した荒魂の提案を受け入れた。だが命を半分に分けたせいで、美奈都と篝も長く生きられなく、この世から亡くなった。結局私一人だけ、一人で死に損なつたままだった」

「紫様……………」

「十条みたいに、私を恨んでもいい。お前たち兄妹もその資格がある。」

言葉の一つ一つから悲しい、悔しいと後悔が感じる。彼女は誰かに恨まれることを望んでいたのかもしれない。何にせ、彼女は二つの家庭を破壊したから。

三人の母たちの命を奪う罪人……………彼女は自分にそう認識している。

そして、二十年前のことを自分が何をして、何をしてかしたか、何を遺していったかを……………心が許した友人を失うことを恐れた紫は、何千人もの犠牲者を出した荒魂を受け入れたのだと手を強く握り締めながらそう言い出した。

さぞ、その罪悪感に潰されて辛いだろう……。

「恨まないよ。例え真実を知ったとしても、俺は紫様のことを恨めない」

「うん、私も。それに、うちのお母さんは死ぬまでに幸せそうだよ。……死ぬまでってなんか変な言い方ですけど、剣術だつていっぱい教えてくれましたし、刀使の仕事を誇りに思うって」

「可奈美と都のお母さんが……」

「美奈都が……そうか、彼女らしいなあ。」

何かを思い浮かべた紫は、なんか納得したようだ。きっと記憶にある母は紫様の記憶にある若い時の母と全然変わっていないと思う。

「紫様、最後に一言を。俺、紫様のことを感謝しています。貴女様のおかげで、俺はこうして多くの仲間と出会った。可奈美、？和、舞衣、沙耶香、薫とエレン……そこにいる親衛隊の二人と結芽にも大切な縁を結びました。だから、ありがとうございます。」

「……………」

都の感謝に紫を含めた全員は呆れた顔だ。まさか、逆にこの場で感謝するとは……彼らしいというか、救えないほどお人好しというか。？和もこの縁を深く感謝しておる。こうして、可奈美たちと騒がしい日常を過ごすのも悪くないと思う。

まったく、本当に仕方ない奴だな。彼は。

「……………まさか、逆に感謝されるとは、まったく思わなかった。そして、ようやく反応を取り戻した紫。

「でも………そうか。少しだけ、その御刀がお前を選ぶ理由はわかっていた気がする……」

「その理由は、なんですか？」

「いや………言えるほどもない理由だ。いずれわかる時が来るだろ。」

「は、はあ………わかりました。」

少し、紫の言っていることがわからなかった都。自分はどうして御刀に刀使として選ばれたのか、その理由がずっとわからなかった。

その後、篝さんとお母さんは刀使の力を半ば失い内側から大荒魂を封じたものの、本来篝さん一人が背負うはずだった半分をお母さんが

受け持った影響で篝と美奈都の二人は現世と隠世という二つの世界に、同時に存在する稀な存在となり、その際に持つていた御刀千鳥と小鳥丸にも同じことが起こったと紫様は話していた。

紫の話聞いた可奈美と姫和の二人は、時々ある共鳴はそれが理由だったのかと驚くと同時に妙に納得してしまった。

……しかし、そこでまたもう一つの疑問が生まれた。

なぜタキリヒメとの会見をした時に、俺の御刀が勝手に共鳴していたのだ？それと、前々から何回も彼女たちしか聞こえない共鳴が聞こえるようになったのかは新たな疑問になった。

その質問について紫に聞いたが、彼女も答えてなかった。結局自分に関する不可解の現象は今でも判明できなかったという。



「この中ですか？」

「うん。」

都の問いに紫は軽く返答する。

今はイチキシマヒメと面会するところ。都を含む八人はイチキシマヒメがいるらしい部屋の前が集まっている。

「スペクトラムの反応がない。」

「特製なんですか？」

「うん、タギツヒメに察知されなかったため、特別に作ったのよ。」

「政府の人たちもそういう小細工で作ればいいのに……」

「………都さん……」

つつい政府の文句を言いつける都に、朱音は彼のこういう性格に困っている様子。

しかし、彼の気持ちもわからないわけではない。真正面の防衛より

隠したほうが奪われたリスクが低い。

それに先日件の件から見ると、衛藤さんたちのような実力者じゃなければ、あのタギツヒメと戦えない。軍にもただ犠牲されるだけ。

このまま長期対抗になれば、いつか戦力がタギツヒメに全部消費される。その前になんとか対策を出さないと。

「それじゃ、開けるよ。」

そう言い、累は扉を開く。その瞬間に三人の御刀が同時に反応した。

「……………」

「……………」

「……………」

都さんにも同じ反応……………？

背後から都の反応を覗く朱音は、彼も大荒魂に反応したことを気付いた。

これはどういうこと？千鳥と小鳥丸以外にタギツヒメに反応する御刀がないはず……………。

江雪左文字。この御刀は一体……………。

「やっぱり来たか……………衛藤可奈美、十条？和と衛藤 都。」

朱音がまた都の御刀に視線で探る時、部屋の中に座っている真つ白人人物が既に視線を都たち三人に向く。

彼女の外観はほとんど真つ白。目や口を遮るもの以外、服装らしい身体も荒魂の目みたいなものがある。

こいつは三女神の最後の一人イチキシマヒメか……………見た目は弱そうだけど、きつと凄まじい力が持っているに違いがない。

可奈美と？和は既に臨戦状態に入った。ここで戦うつもりがないけど……………本能的に、こいつは危ないだと認識している。

「そうか……………我はここで滅ぼされるのか。我という異なり、短い生涯だった……………短い……………」

だが、身を伏せ、彼女は悲観というオーラを放つ。その口に出す言葉は既に生きることが諦めた。

「……………は？」

「……………え？」

「……………あれ？」

三人は同じ反応だった…………。

こいつは大荒魂、イチキシマヒメ。人類の敵、神でもある。そんな神に都たちは既に彼女を人として見ないのだ。

しかし、彼女のその悲観的な考えは流石に都たちの予想外だ。これは本当にタギツヒメの分身なのか？と、彼女と初対面する人たちは一斉にそう疑ってた。

「短い生涯……………」

「滅ぼすと思ったら、お前をここまで保護しない……………」

彼女の隣に行く紫はなんか同じ反応をする…………いや、頭が痛むという反応だ。

「これは大荒魂？どう見ても……………」

「気持ちがわかるから、言わなくてもいい」

寿々花の反応から、累さんも結構微妙な顔をしている。

こっちはタギツヒメとタキリヒメと会話した経験がある。彼女たちからの個性を考えていると、神とした視点で人に命令をするという印象が強い。

しかし、こいつはあまりにも悲観すぎた…………。大荒魂は悲観という負面感情が持っているのか？

神を名乗るなら、もっと自信を持ってよ！

「この人はなんかタキリヒメと雰囲気が違うね。」

「お前たちは既にタキリヒメと会ったのか……………」

こっそり？和と耳嚙む可奈美。しかし、その話はどうやらイチキシマヒメに聞こえた。

「タキリヒメが既にタギツヒメに一回襲撃されました。幸い、衛藤兄妹と十条と獅童のおかげでぎりぎり退けた。これからもタキリヒメの護衛を集中する」

イチキシマヒメに事情を説明する紫。ついてに、俺達にタキリヒメを守るという任務を与える。

「そうか…………お前たちはタキリヒメ側につくのか…………我はまた人に

求められぬ。」

しかし、そんなところでイチキシマヒメはまた身を伏せて悲観する。

「なんだろう……この荒魂。」

「我々は欲しいのはこの3つ分かれる現状だ。できれば、このままに維持したい……」

紫はやつと片手で痛む頭を支えた。彼女の悲観に大英雄さえも耐えられないのか……。

「まあ、そうだな。本来もそうするべきなのだろう。我は元々奴らに切り捨てられた存在なのだから」

「切り捨てられた？」

イチキシマヒメの言葉に気になる獅童に、紫はちよつと言い辛そうな表情で説明する。

「そのことについては、なんで大荒魂が三体に分かれる話になる」

「ノロのスペクトラム化。ノロ同士をお互いに融合することで脳のような組織が結成し、高い知能を有していきます。その過程で感情が芽生えて荒魂となる。全ての荒魂が最初に生まれたのは喪失感だと言われている」

「喪失感……」

「なるほど……ノロは元々珠鋼が御刀に作られた過程で分散された廃棄物。珠鋼という母から無理矢理分散された子供のようなもの、故にその喪失感か」

累からの説明に都はすぐ理解できた。前々から特別希少金属利用研究所でその話をわかっていた。ノロが寂しがっていた子供だとのこと。

「そうです。その飢えに似ている喪失感を埋めるために、荒魂は本能的に結合を求めます」

「荒魂を取り込んだ僕たちにはよく理解できる。その乾きは抗え難い。」

「……………」

そして獅童から辛そうな表情でそう言っている。隣の寿々花も理

解している顔だ。

これが親衛隊同士が共に経過する痛み。……やはりノ口を取り込んだことは多少の対価を支払いしなればなりませんね。……結芽もかつて体内のノ口が暴走していることで辛がることがあった。

「結合を繰り返し、より高い知能を発達すると、喪失感は怒りに変わります。自分の一部である珠鋼を奪った人間への怒りです。」

「それが荒魂が人に襲う根本的な原因だ。荒魂に唯一対抗できる武器が荒魂を生み出すそもその原因……皮肉の話ですが」

「そうだ。全てはお前たち人間が強欲に私たちから神の力を盗み取ったのが原因だ。この長く続ける荒魂と刀使の戦争を引き金するのはお前たち人間なのだ。故に我々に襲われて殺されても、お前たち人間は文句を言う資格がない。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……話を戻す。私と一体化した大荒魂が3つに分かれた真の理由だが……」

イチキシマシメがこの場にいる“人間”を責め指すこの重い雰囲気の中、紫はそのまま話題を続けた。

「私の知能が高速進化し、やがて論理矛盾に落ちいた。人に対する思考が3つに分かれ、それぞれ対立し始めた。怒り、怨嗟など原始な感情から生まれたのがタギツヒメ。ヤツは人への報復を望んでいる。」

報復。負の連鎖においては最も危険な段階である。古来の人間はよく報復するため、死ぬまでに殺し合う。

人類が最も醜い争いは報復と尽きが無い欲望である。

時にその感情は人に力を与える。そう、母を失う？和はまさにその一人だった。

折神紫への復讐心は彼女をここまで連れて来れた。

これが報復の力だ。その原始な感情を持って、タギツヒメもこれ以上強くなつて、やがてこの世界を壊すでしょう。

そう思うと、怖くなる。

「一方、人を支配、管理し、導きに行くのはタキリヒメ。奴はこの世の神としてこの世界を君臨するつもりだ。」

「……だと思ったよ。だが、お前は？お前は何をするつもりだ？」

「我は我をこの世に存在する意味を求めた。この世界は本当に我々という荒魂が必要だろうかと模索し、答えを探し続けていた。やがて、我は見つけた。」

そう言う彼女は突然生氣がない両目を大きく開く、両手を開き、自分が見つけた答えを堂々と宣言する。

「荒魂と人間の融合によって、人類という種を進化させること！それが我がずっと求めた我がこの世の存在意味である！」

これが三女神の最後の一人、イチキシマヒメの望みである。

第50話：悲劇の夜。

綾小路武芸学舎――学長室。

「面談、ありがとうございます。では、失礼しました。」
鈴木葉菜は面談が終え、相楽学長に一礼をしてから、学長室から離れる。

扉が閉じる音を聞いて、相楽学長は安心する顔で息を吐いた。

「鈴木葉菜……ノ口との適合率は高く、“近衛隊”への入隊も希望している。素材としては、申し分ないが……彼女が舞草の者である以上、不適合にするしかあるまい。」

不適合する理由を見つけたことで、彼女は内心では喜んでいる。

なぜなら、この面談は近衛隊のメンバーを選抜するための面接である。このため、学舎の生徒を全部呼び集めた。

そして、近衛隊として選ばれた者はタギツヒメの忠実の兵士になる。つまり彼女のためなら、死ぬことでも良い、仲間と戦うことにもなる、世界と共に滅ぼせる。

結論を言うと、選ばれた者はもう明るい未来がない。これは親衛隊たちより酷い状況に向かわれる。

自分の生徒にそんな希望がない未来を向き合わせたくない相楽学長は何とか理由を見つけ、資格者に辞退させる。

そんな計算をしていた相楽学長は「次の者、入れ！」と、次の候補者を呼び入れる。

「失礼します。中等部二年、山城由依です。」

次に入ったのは黒い髪の女の子。彼女は外見ではかなり可愛い人ですが……内面はとても残念な変態おっさんである。

彼女に関する噂はほとんど警察に易く注意されるほどの変態な出来事。例えば毎日彼女は生徒たちの部屋を勝手に忍び込んで、生徒の匂いを嗅ぐんことで朝っぱから女の子の悲鳴が学舎の独特の目覚し時計になるくらいに多くにしていること。学校内に設置した風呂場でもかなりの大騒ぎになって、被害者側がお嫁に行きませんと証言もたく

さんあります。

そして彼女もそれらの行為で警察によく「またこいつか……」と言われて局内に連れ出されることも多い。そんな彼女変態ですが、刀使とした実力は疑われないほど強かったので、五箇伝としても彼女ほどの刀使が必要だ。

それともう一つの理由もあった。

「かけたまえ、早速だが本題に入ろう。君は近衛隊への入隊を強く希望していたな。」

「はい、たくさんお給料がもらえるって聞いたので！」

迷わなく金という理由をバラす由依。彼女はいかにも嘘をつかないタイプの人間らしく、本音は隠せずに言い出す。そこは本来いいことなんです……時々キモイなセクハラ発言も口に出したことで、また彼女の名誉が一層に汚れた。

彼女の問題について、感情表現が薄い相楽も滅多に頭が痛む。それでも山城由依はその変態性格のおかげで、膨大なストレス環境で生き来られた。

「妹さんの治療費は、そんなにかかるのか？」

「……………!!」

そんな環境の主因が相楽に言い出されて、由依の元気が溢れる笑顔が一気に驚く顔に変わってしまった。

きつと、こっちが彼女の事情を知ることにならなかったのだろう。

「何を驚いている？君は近衛隊候補なんだ。身辺調査くらい済ませておいて当然だろう。」

「……………事情をご存知なら、話は早いです。妹のために、お金が必要なんです！だから近衛隊に入隊させてください。お給料分はしっかり働きます!!いいえ、それ以上の働きをしてみせます！」

彼女が必死な顔で相楽学長にそう頼んでいた。

山城由依の妹は病弱の体質があつて、常に病院の常客になった。それにかかる治療費は半端ないくらいに必要なので、両親の稼ぎでも足りなかった。

そこで山城由依は、御刀に選ばれた上で刀使になることを決めた。

その理由はただ刀使という仕事の福利厚生が豊かということ。もちろん、可愛い女の子を放っておけないという理由もありましたが、主に妹が何より大切な存在である。

彼も……五箇伝内で噂の人物衛藤 都もそうだったらしい。彼の身辺調査の結果からは、とんでもないシスコンタという事実が知れた。つまり彼も妹のために自らを危険に投げ入れるほどの人だ。

因みに、彼を調べ始めたのは単なる結芽と関わったから、彼がどうい人物なのかは気になる。

今のところは山城由依と同じく妹思いのご親族でした。妹のためなら、どんな困難でも立ち上がる勇氣がある。

「やる気があるのは結構なことだ。その上、ノロとの適合率も高い。」

そんな彼女のやる気に、相楽は肯定の態度を示す。が、彼女はわざとリスクのことを彼女に教えようとした。

なぜなら、妹さんは姉たる彼女にしかないだ。彼女の稼ぎだからこそ、今は順序に進んでいく。決して近衛隊に入ること、そんな平穏な状態を壊させはしない。

「ノロとの適合率も高い……？どういう意味ですか？」

ノロという単語を聞いて、由依は予測通りに疑惑の反応。

「近衛隊への入隊条件は、その身にノロを受け入れることだ。」

「そんな……ノロを体の中に受け入れるなんて……危ないじゃないですか！」

「そうか……燕 結芽の顛末を知っていたな。いや、他の親衛隊もか。ならば、不安に思うのも仕方ないことだ。」

そう冷徹に言いつつ、相楽学長は次々と説明する。

「だが、君に投与することになる強化薬は最新型だ。親衛隊たちのような従来型に比べてリスクは、極端に『低い』。」

「低いってことは、ゼロじゃないってことですよね？」

「そうなるな。それを理解した上で考えて欲しい。無理なら辞退してくれて構わない。」

「……………辞退します。」

相楽学長からそのリスクを明白した由依は長く考えてた後、辞退することに決めた。

「お金は確かに欲しいんだけど、あたしに何かあったら、ミクのー姉の治療費を稼げませんから」

「そうか……………、では下がっていい。」

「……………ありがとうございます。」

彼女の理由を聞いて、相楽は心中に気軽になった。これでもう一人を辞退させることができた。

正直、彼女はこの長時間の面接にずっとハラハラしてた。例え一人が入隊を強く希望しても、その一人はこの国の敵になる、死ぬことになる。

それだけは嫌だ。自分の生徒を結芽のような犠牲者が出るのは、もうごめんだ。

自分にはもう耐えられないのだ……………愛する生徒を失うこと。

そして由依が退室する音が響き。相楽は息を吐いて、残された面接者を確認する。

「……………残るのは木寅ミルヤと内里 歩か。」

二人の資料を見て、相楽学長の視線はノ口との適合率欄の方へ向く。

そうしたら、両方も99%との結果が示している。

「当然といえば当然だが、ここまで残っているだけあって、全員とノ口の適合率が高い。誰か選んだとしても、優れた『冥加刀使』になるだろう」

冥加刀使とは、タギツヒメの近衛隊に選ばし者の名だ。

その意味は敵を冥府に導く刀使い。そしてその敵は荒魂だけではなく、神タギツヒメたる姫に反逆する者のことも指している。

つまり人でも斬れる刀使ということ。その意味から名付ける者のセンス……………いや、どれほど狂っていることもよくわかっている。

「しかし……………学長として、やはりこういう計画を認めるわけには行かない。雪那は怒るだろうが……………な。」

一人は人道外れ、一人はまた学生のことを案じている手が汚れてい

る。二人の学長の歩み道は既に外れていた。

そのきっかけは結芽の死から。

あの日から、相楽は自分の生徒が結芽みたいに犠牲されることを恐れていた。なぜなら、彼女は心の底から自分の生徒を愛していたから。

◇

「これで全員不適格か……」

最後二人の面接が終わって、相楽の顔はとても疲れているように見える。

数時間継続で全員の面接を行うのもかなり無茶な挙動でした。でも、流石に自分の生徒を雪那に任せられない。

彼女は生徒を生徒だと認識していないからだ。糸見沙耶香の脱出もそれなんだから、舞草に入り、鎌倉の決戦に英雄として成り上がった。

詳しいことはあまり知らないが、彼女は沙耶香きつと自分の意思で雪那から逃げ出したと思う。

「この後は理由を雪那に押し付けて、その後も紫に任せよ。そちらも充分の戦力が整っているでしょう。」

戦力とは衛藤可奈美たちと親衛隊と調査隊三組の実力者が集まる連軍とのことだ。この三組の刀使たちは五箇伝の最高戦力が集まっている集団。

これほどの実力者たちがいれば、タギツヒメもタキリヒメを簡単に奪われないだろう。こちらの計画を阻止していれば、面倒ことにならないはず……。

「……………あ、ふふっ……………」

窓外から見えた生徒たちが寮に帰る途中で、楽しくお喋りするところを気付いてしまった相楽が思わずにやけてしまう。

こういう当たり前の日常光景ですが、彼女にとっては何よりの宝

だ。自分の生徒たちはこうして平穩で学校生活を満喫するのは、学長としたの最大の利益である。

少しおかしいな思考ですが、きつと江麻はこういう気持ちで自分の生徒を守ろうとしたのだろう。少しわかった気がする。

金や地位、権利などは別にいらぬ。ただ自分が育ち上げた生徒たちは幸せにいれば、それが充分だ。

「……………う？あれはー！！」

その時、相楽の視野内に一人が生徒たちの前に現れた。

その人は親衛隊の制服を着ている。手に持っているのは水神切兼元すいじんぎりかねみつという御刀。

これほどの特徴。彼女が親衛隊第三席臯月夜見だということがわかる。

臯月夜見……………なぜ、こんなタイミングでここに？

こっちからよく彼女の顔がよく見えませんが、でもあの抜け出した御刀を見ると、嫌な胸騒ぎがしてきた。

これからのことは彼女は簡単に予測していたが、実現したくない。その、して欲しくない欲望が言葉に転換して、彼女は怯えた唇で出す。

「止せ……………止せー！！！！」

しかし、その言葉は彼女を止められなかった。

彼女は無情に無防備な生徒たちを襲う。誰一人も……………彼女の御刀から逃れられなかった。

この夜に赤い鮮血が学舎内を染まる、悲鳴がこの学舎内に響く。

それを見て、聞いた相楽は急いで外までに走る。これは彼女が最も嫌な結果だった。

自分は特に予想していたはず……………こういう最悪の事態を。いや……………ただそれを考えたくはない。

だって、それをやったのはもう人間の所業ではない、あれは「ただの鬼だ」。

「遅くなりましたわね。相楽学長。」

数分後、現場に行き、相楽の視線先は血泊に倒れていた生徒たちと

血まみれた皐月夜見。

「貴様ツ……!!」

怒りが満ちる怒り声。相楽は自分の生徒がこんな惨状になるのが許せない。

「これで、もうあれを使えお得不いでしよう」

しかし、彼女は別に怒っている相楽を気にしていなかった。例え人を斬っても、彼女の感情が一切動じない。

「急いたほうがいいですよ。まだ生きているうちに……私は、これから木寅ミルヤと他の調査隊のメンバーを追跡しに行く。止まっても無駄です。」

彼女に最後の警告をして、夜見はそのまま先に撤退するミルヤたちの追跡をする。

「……………ぐっ!」

その背後を睨む相楽の顔は無力と絶望と怒りに染まれている。

「……………あ、ああ……」

「……………!」

その時、彼女は僅かに足元から声が聞こえた。

あれは死ぬまでの呻き。

致命傷を受けた彼女たちはまだ生きているが……呼吸はどんどん弱くなる、瞳も色が失っていく。

「……………ごめんなさい。貴女たちを巻き込んでしまった……」

後悔と悔やみが混じる声。相楽はこの場に止まるのがただの二秒だった。

この場で悲しむ、後悔するより彼女たちを救うことは最優先だ。故に彼女あれを取りに行くため、走ってきた。

◇

数時間後——あるところの森。

「いずれ追手が来るとは思っていましたけど……まさか、貴女とは思いませんでした。」

ミルヤたちは先に事態がまずいと気付き、学舎から分別にそれぞれのルートで逃亡した。が、進む先はもう追手がそちらに待っていた。

「親衛隊第三席、皐月夜見。」

「あなたには、冥加刀使になつてもらいます。」

その追手は親衛隊の皐月夜見。彼女は自分の能力を使って、ミルヤの居場所を見つけた。

でも、その能力は刀使が持っている能力ではない。あれは荒魂による能力である。

以前伊豆の夜にも拝見した非常に面倒な能力でした。あれは本人を倒せない限り、荒魂はほぼ無限に生産される。加えて、体型も非常に小さいため、消滅するのも面倒なことだ。

「冥加刀使？ノロによつて強化された刀使のことですか？その件については、お断りしたはずです。」

「あなたの意思とは関係ありません。あのお方の駒になつてもらいます。」

「改めて、お断りいたします。」

御刀を抜くミルヤを写しを被る。

「どうやらそちらも戦う意思があるようですね。まあ、致命傷が与えれば、嫌でも生き残るためにノロを受け入れるでしょう。他の刀使たちと同じように」

「他の刀使と……まさか、刀使たちを斬つたのですか!？」

彼女からの言葉でその可能性を探り出すミルヤは思わず彼女にそう聞く。

あまり考えたくないですが。いくら何でも刀使を斬る刀使は……いや、同じ親衛隊の獅童真希と此花寿々花もかつて伊豆で我々をそうするつもりだった。

だが、あの時はただ我々は戦う気があるから……まさか、学舎の皆

を全部斬ったわけじゃないよね？

「それが、何か？」

しかし、夜見はただ一言でミルヤの推測を認めた。

あの言葉は一切の感情を感じない。彼女が人を斬ることに何も感じていないのだ。

「何ということをして……！」

あまりにももの怒りがミルヤの心の底から燃え上げた。仲間……一緒に学舎内で過ごす皆が斬られることにミルヤは珍しく怒った。

これで少しでも瀬戸内さんの気持ちをわかった気がする。これは決して軽く許せることではない。

「お喋りは、ここまです。」

自分の腕を斬り、荒魂が夜見の傷口から溢れ出す。その量は今まで見たより多かった。

「どうやらこの戦いが避けられないみたいですね……」

御刀を構えて、ミルヤは苦戦するかもしれない覚悟ができて、目の前にいる無感情の兵器に立ち向かう。

「さあ、行きなさい」

そして、夜見は荒魂に意識で操作して、ミルヤを襲う。

荒魂の群れはそのままミルヤに襲ってきて、ミルヤもそれに対応するために移動しながら荒魂を斬る。

これほど大量の群れがあり、数ではミルヤに絶対不利。

あれだけの群れに飲み込まれたら、戦闘能力が奪われる可能性がある。それを想定して、ミルヤは飲み込まれないように移動しながら月夜見の隙を見破るしかない。

しかし、流石に私との相性が悪すぎる。この場では、私の『鑑刀眼』が全然効かない。

『鑑刀眼』はミルヤの固有能力。刀と刀を打ち合わせればその御刀の全てを知ることができる分析能力で、これを発動すると目に炎のようなエフェクトが灯る。

しかし、相手の攻撃はほとんど荒魂。つまり刀を振る機会は接近戦になる場合しか。

つまりミルヤは何とか臯月夜見が作った荒魂軍勢を突破しかなければならない。とはいえ接近戦になつても、彼女を一撃で仕留める剣技が必要だ。

彼女が一応親衛隊の者。剣の腕はある程度に持っているはず……。クソ、これは詰んだじゃないのか？ いや、考えろ、木寅ミルヤ。きつと何かこの状況から抜け出す戦法があるはず……。

「はあ……はあ……はお……」

それから数分が経ち。

斬つても斬つても、終わりが見えない戦いの末に、ミルヤは荒息で荒魂の群れを次々と仕留めた。

しかし、何度も何度も仕留めたところで、また新たな新手が現れる。このままじゃ、こつちが先に体力が尽きる。

「さあ、終わりにしよう。木寅ミルヤ」

夜見はミルヤの体力がどんどん消耗されるところを見て、無表情でそう言い、また荒魂を呼び出した。

「……くっ！もう打つ手がないのか……」

また増えてきた荒魂の群れにミルヤはどんどん勝機が見えなくなる。身体にもボロボロになった。

いつの間にか、もう写しが一回しか使えない。

「さあ、安らかに眠れ」

荒魂の群れが一気にミルヤを襲つて来る。それを覚悟するミルヤは最後の写しを被るとする、その時――。

爆発が目の前に起こり、荒魂の群れが散らかされた。

「うっ……！何か起きている?！」

その爆風にミルヤは一時に前を直視できなくなる。

この匂いは……火薬？爆弾？

空気に漂っている匂いに、ミルヤはすぐこれが爆弾攻撃だと理解していた。

しかし、なぜこんな森の中に爆弾が……？

「ミルヤ、お待たせ」

その時に、ミルヤの前に一人の刀使が空中から降りた。その人物は

銀髪で、元気がない顔を持つ少女。

「国頭!? あなたは無事なのか!」

その少女の顔面を見ると、ミルヤはすぐ彼女が誰なのを知った。

「見ての通り無事です。まあ、元々うちが学舎にいないですよ。」

「そうでしたか……それは良かった。それより、さっきの攻撃はあなたか……?」

同じ学舎の人間の無事を確認できたミルヤは少し安心できた。

「いいえ、あれは盟友の友達の援護射撃というものです。」

「盟友?」

「………国頭 与。貴女の姿がずっと見つかりませんから、探しましたけど……あなたもここにいることがちよほど良かった。木寅ミルヤと一緒にここで冥加刀使にしてもらいます。」

爆発で一時に混乱に落ちる荒魂をもう一度整う夜見は攻撃態勢を取り戻したみたいで、荒魂を二人に襲う。

「それはお断りします。ジョルさん、お願いです」

そこでまた爆発が目の前に起こり、荒魂を散らかした。

「外部からの攻撃?」

「援護射撃を感謝いたす! ミルヤ、今です!」

「……え……? あ、……は、はい!」

さっきの爆発によって、夜見に通す道が開かれた。それを見逃さない国頭はそのままに突っ込む。

それを遅れ取るミルヤも彼女に続け、夜見を挟み撃ち。

「………!」

けど、夜見もそう甘く見られない。彼女は一部の荒魂を国頭に襲う。

そして自分はミルヤの攻撃を防げる。

「ちえ………!」

「木寅ミルヤ、それは残念ですね。」

まるで彼女を嘲笑うような口。ですが、ミルヤは逆に夜見を嘲笑う。

「いいえ、残念なのは貴女です!」

「なに？うつ……！」

背後が峰打たれて、夜見はそのままに気絶されて、地面に倒れた。「うちを甘く見ないでほしいっす。あれくらいの荒魂はうちを止められないよ。」

「流石、国頭さん。お見事の連携です。」

夜見に最後の一撃を与えた国頭にミルヤは彼女の見動きを褒める。彼女がさつき荒魂を速やかに鎮圧するところ、すぐ気配を消して、迅移でミルヤに注意を逸らせた夜見の後ろに峰打ち。

彼女は綾小路少数の上位刀使。普段は学舎にいないため、彼女と接触する機会も少ないが……彼女の噂に関しては、どんなチームでもうまく連携を取り入れる能力が持っているらしい。

その原因で、彼女は常に任務で各地で荒魂討伐や機密任務を行っていると聞きました。

その実力をこの目で見ることは、ミルヤにとって光栄なことだ。

「あのミルヤに褒められて、なんか照れるな……でも、これくらいは当然です。」

少し照れてた国頭は顔を逸した。

「それより国頭さんはここで現れるのが偶然ではないですよ？例え逃亡したとしても、これほどの備え……盟友でしたっけ？あれは一体……」

「あ……それに関しては……」

「その盟友はワタシだ。」

ミルヤは国頭に聞くと、森の中に黒い装束を着ている外国人の男性が現れた。

その男性は金髪、碧い目で。見た目はアメリカ人のように見えますが、フリードマンのような正統なアメリカ人の顔では少々違います。

そして、彼が手に持つのはM32 MGL。南アフリカ産の連発のグレネードランチャーだ。日本語では複数手榴弾ランチャーと呼びますが……それは呼びやすいための通称だ。

「木寅ミルヤさんでしたっけ？初めまして、ワタシはジヨルと言います。この度は依頼主の依頼で、この方とあなたの撤退を援護させて

いただきます。」

「あなたは……いいえ、ありがとうございます。さつきの爆発はそのグレネードランチャーから発射するものですね?」

「はい、コイツはミルコウ MGL。ワタシの普段の装備ではないが……こういう場面ではコイツが最適だと思う。ほら、効果がパーフェクトですね?」

ジョルはそう言い、ミルコウ MGLをミルヤに見せつける。

回転式の弾倉を持ちグレネードランチャー。引き金を引くたびにグレネードが発射される。弾倉の中央部に設置されている軸を前方に引き、フレームの上部を軸にして上にスイングさせると弾倉およびバレルを開くことが可能。

弾倉上部には、大きく仰角をつけられる小型光学サイトが装備されている。

平均400mほどの射程を誇る対人榴弾・対戦車榴弾、警察で使用する非殺傷のゴム弾・催涙弾・発煙弾などが使える。

これほど多用途の武器だからこそ、他国の軍隊に採用されている。しかし、まさか日本ではこういう武器が見られるとは……。

因みに、日本の自衛隊にはこういう武器を使っていない。

「確かに、あれくらい荒魂を散らかす威力が助かります。それにしても、貴方の日本語がうまいですね。」

「当国に相応の言葉をうまく扱うのが生存の基本です。うまく学べれば、暗殺、情報収集、暗殺対象の家に潜り込むことなども易くやり遂げます。」

「暗殺……貴方は暗殺者ですか?」

「いいえ。ですが、これも仕事のひとつでございます。」

そう言い、ジョルさんの顔は一切の変化を感じない。つまり彼はこういう質問に動揺されません。

これだけ見ると、彼はよっぽどあっちの世界でのプロだと理解します。

「裏社会の人間ですか……さつき依頼主と言いましたわよね?で、?その依頼主は私とどういう関係なんですか?」

「……………それに関する内容は、契約によって言いません。が、その依頼主は刀剣類管理局の人間ですので、刀使である貴女を助けるのが普通のことです。」

「刀剣類管理局の人間か……………まさか、裏社会の人間と関わるのか」ある程度の心準備がありますけど、五箇伝が闇社会と関係することは、真面目のミルヤにはちよつと受け入れられない。

「そんなことより早くここから離れる方がいいですよ。親衛隊以外の新手が追ってくる可能性もあるかもね。」

「……………そうですね。申し訳ありません、少し乱れてしまいました。」
「いいえ、ワタシの身分に関しては、それくらいの反応も予想済みです。お気になさらないでください」

そう言い、ジヨルは相変わらざるの無表情ですが、彼の言葉からこれが仕方ないと気がします。

……………まあ、私達より社会の闇を接触する方なんですから、光の人間とのコミュニケーションも大体予想がつくのだろう。

「それでは、ジヨルさんはさつきと同じように援護役を回してください。うちはミルヤと共同行動をします。」

「わかりました。」

「……………ジヨルさん。短いですが、どうぞよろしくお願いします。」

まだ闇社会の人間を受け入れないミルヤですが、彼が一応刀剣類管理局側に雇われる人間ですので、ミルヤもその偏見を卸して、しばらく彼のことを受け入れた。

こうして、ミルヤは二人の護衛の下で、安全で刀剣類管理局に帰還した。

しかし、そこで一緒に逃走する由依と葉菜の姿がどこにもいなかった……………。

第51話：戦前の準備

―市ヶ谷防衛省―

当事者しか知らず、綾小路での惨劇が起こした日から数日の間が経った。

管理局はこの間に防衛省の警備を強化した一方、タキリヒメとの交渉回数も増やした。

そんなある日――。

「近衛隊ですか。……はい、わかりました。こちらでもすぐ緊急用の対策を行います。それじゃ」

本部からの連絡を聞き取れた後、都は電話を切る。

現在彼は本部からの指示で、しばらく市ヶ谷防衛省方面の刀使部隊の主力部隊隊長を務めている。とはいえ、この部隊にはただ六人しかない。

それでも戦力としては親衛隊に負けないほどの強さが持っていますから、彼も結構の荷が持っている。

「……………近衛隊か」

通信を切った後、彼は思わず口でさつき電話で聞いた話を呟く。

本部からの話によると、綾小路側は近衛隊という部隊ができていた。そして、その近衛隊はタギツヒメを守るために存在する親衛隊に似たようなものだ。

負傷していたミルヤからの情報にもよると、近衛隊はノ口を投与している強化刀使。その正式名称は冥加刀使。

さらに、敵側から確認できた注意すべき人物の中で元親衛隊の皐月夜見がいる。彼女の能力は寿々花とミルヤからも確認できた。

非常に面倒な能力なので、例え一流の刀使でも彼女と一対一で対抗できない。

どうやら今の事態は予想以上にまずくなってきました。

「都……隊長、お帰り」

「都くん、お疲れ様。どう？本部からの連絡は」

本部からの連絡の後、都は敵の侵入用道で警備中の舞衣と沙耶香のところに戻る。

そして二人は都の姿を見て、彼に話をかける。

「少し大きなことを起きてしまった。あとで総司令の寿々花とその対策を作りますから、舞衣ちゃんと沙耶香はそのまま警備してくれ」

「はい！」

「了解。隊長。」

二人はそれぞれで都に返答する。しかし、そこで都は沙耶香の返答に少し意見がある。

「沙耶香。都でいい。俺は今度お前らの隊長だけど、隊長より名前が呼ばれるのが好きなんだ」

「……うん、わかった。都」

うん、やつぱり沙耶香にそう呼ばれるのが凄く気持ちいい。何とていうか……親しい感じ？

最近俺の名前を直接呼ぶ女の子も増えていたからな。でも、やつぱりこの六人の方が一番気分がいい。

特に舞衣ちゃんに「都くん」と親しく呼ばれることに、心が素直に嬉しい。

彼女のことを好きだから、恋人みたいに親しくされて喜んでいたりとは別に変ではないですよ？

それに、彼女と恋人になる夢くらいを見るのもなんか許される気がする。

なぜならー

想うだけならば、罪ではないのだ。

「都。」

「ん？どうしたの、沙耶香。」

また夢を見る都に、唐突に沙耶香は彼の名前を呼ぶ。それを気づいて、都は彼女に振り返る。

「都は来ると思う？タギツヒメ」

「……それは来るだろ。そのために俺たちはここにいるのだ。」

「じゃ、またあの時みたいなの戦いが……」

沙耶香は御刀を抜刀する前の構え。本来ここは覚悟を決めたシーンなのですが、沙耶香の表情は少し迷っているように見える。

タギツヒメと戦うのを嫌なのか？沙耶香。

「沙耶香ちゃん、はい。」

「……うむっ!？」

都は沙耶香にどう返答するのか、考えている途中で舞衣はクツキーを沙耶香の口に塞がる。

それをちよつとびっくりした沙耶香ですが、すぐ左手でクツキーを支えて、もぐもぐと食べる。

そのような可愛い沙耶香を見て、舞衣は優しく微笑む。

「紫様のところから戻ってきた可奈美ちゃんとか？和ちゃんと都くんが言ったでしょう？確かに、タギツヒメはノ口を吸収した分に強くなっただけ、また対処が可能性だつて」

「まあ、そのために俺たちはここにいるからな」

舞衣の言葉に頷く都。

対処が可能だから、ここにいたという訳。紫様も勝てない戦をしないう主義だと思う。

「うん……」

「まだ気になることがあるの？」

まだ迷っている沙耶香に聞く舞衣。

しばらくこの場を彼女に任せられた方が良かったのかも。

「タキリヒメとイチキシマヒメが味方になれば、タギツヒメと対話できる？」

「え……？」

「薫が言ってた。戦う前に、よく考えろつて」

なるほど……。俺だけではなく、沙耶香もちゃんと考えたのね。

「なんて頭を撫でるの？」

「なんてかな？ふふっ」

沙耶香の頭を優しく撫でる舞衣。こういう光景はちよつとだけ尊く見える。

「でも……本当にそれができれば、戦わずに済むかもしれないね。」
「舞衣ちゃん……」

「もちろん、理想すぎるのも良くないね。私もわかっている……この世は甘くないって」

そう言い、舞衣は苦笑う表情をした。

彼女も五ヶ月前に起きたあの事件からこの世はどれほど理不尽なのか、良く身体に刻んでいた。

ただ中学生なのに、この世界の理不尽を知るのは、やはり何かの間違えだ。

以前の自分……ううん、今の自分でも舞衣ちゃんを永遠の夢見る少女にいたい。

辛いことは全部俺が何とかする。二人はただ幸せを堪能すればいい。

それが俺の願いなんだ……。

「それでもお前たちは夢を見る資格がある。夢を見るのは悪いことではない」

「あつ……／＼／＼／＼／＼／」

「あつ……／＼／＼／＼／＼／」

同時に二人の頭を優しく撫でる都。

都にそうされた二人も同時に顔が赤くなって、とても可愛く見える。

「夢と希望があったこそ、人は前へ進む力が生み出せる。沙耶香の言っていたことも本当に起きたらいいなって俺もそう思っていた。少なくとも、タギツヒメ以外の二人の女神にね。」

「都……」

「タギツヒメは無理と思うけど、他の二人の女神なら、まだ味方になる可能性が残っている。その可能性がゼロじゃない限り、俺は諦めない」

「都くん……」

「……………」

「少し理想過ぎませんか？ちよつと馬鹿みたいだね、私」
苦笑いながら、都は手を二人の頭から離れる。少し甘く言い過ぎだ
ようだ……………」

「ううん、そんなことがない。私はそういう都くんのが好きだ
から／＼／＼／＼」

「私も、そういう都が好き。」

「……………！／＼／＼／＼」

二人に同時に告白されて、胸がちよつとドキドキする。もちろん、
彼もこれが本物の告白ではないだとわかっているが……………それでもド
キドキする。

二人は彼にとって勿体無いくらいに最高の女の子。可奈美と？和
がまだ逃亡していた時、この二人に力強く抱きしめられて大事されて
いた。

特に沙耶香は汚い自分を受け入れたのだ。今でも沙耶香のことを
感謝している。

「そ、そう……………ありがとう／＼／＼／＼」

少し恥ずかしい反応をする彼。けど彼の目の前にいる舞衣もかな
り恥ずかしがっている。

感情が表情に表していないが、実際彼女もドキドキしているんだ。
何にせ、彼に好きと言った。

これはもはや告白と言える愛の言葉なのですが、鈍感の彼は当然、
彼女の気持ちを気付くわけがない。

それでも、舞衣の心臓が凄くバクバクと動いている。彼のが大
好きなんだから、好きという気持ちが欲望に変わって強く思ってい
る。

彼とキスしたい、デートしたい、手を繋ぎたい、恋人らしく付き合
いたい。それらは舞衣がずっと都にしたかったことだ。

でも、今は……………そうする場合ではない。タギツヒメという脅威があ
る現在では、彼の注意を逸すわけには行かない。

彼は強い。何度でも自分やみんなのことを助けた。

タギツヒメと戦うには、彼の力が必要だ。だから、彼の目を自分に留まるだけじゃなく、その力でみんなを助けてもらいたい。

——そして、今度は私が彼を支える番だ。

そんな思いを抱かえて、舞衣は自分の幸せより彼を支えることに決めた。



「近衛隊か……」

「ノ口を投与するなんて……何かをお考えですか、綾小路の学長は……！」

昼頃に、都は親衛隊用の拠点でコンビニの弁当を食べながら、この話を進む。

そうしたら、二人はとても怒っている反応を示した。まあ、ノ口は親衛隊たちにどれだけ苦しみを与えるのもわかる。

結芽もその力で苦しむんだ。そんな彼女を解放するため、俺も死ぬ覚悟で無理やり彼女を止めたからな。

「いや、多分彼女は悪くないと思う。……ちよつと二人に言い辛い話がありますが」

「なんですの?」

「そんなに言いにくいことなのか?」

「ええ、とても……ね。何せ、この件は親衛隊第三席、皐月夜見と関わっていたのですから」

「……!」

夜見の名前が都の口から出てくると、二人は共に驚く顔。そこで彼は一旦彼女たちを落ち着かせてから、その説明を行う。

木寅ミルヤの証言から聞くと、皐月夜見は綾小路の刀使たちを斬った。しかも、生身で斬る。

ミルヤも昨夜で彼女に襲われた。そして同じ綾小路の仲間助け

られて、刀剣類管理局にこの報告を行った。

今だに生存する綾小路の人間は木寅ミルヤとその仲間とノ口の適合率が低い生徒たち。他の生徒多分はもう……近衛隊に入れさせた可能性が高い。

山城由依と鈴木葉菜も多分……いいえ、ミルヤに衝撃を与えないため、ここで彼女たちの無事を祈ろう。

とにかく、都は聞いた情報を隠せず、親衛隊の二人にそう伝えた。

「夜見さん……」

「夜見……」

その話を聞いていた彼女たちはとても悲しい顔をしている。多分、皐月さんがこんなひどいことをしていたから、そんなに悲しむのだろう。

これも彼女たちが皐月さんのことをどれほど重視する証である。ならば――

「ひとまず、攻められた時に近衛隊のこととタギツヒメのことは調査隊と俺たちに任せましょう。皐月夜見はお二人に頼みます。」

――皐月さんのことを彼女と関わり深い二人に任せた方がいい。

「それって……」

「二人の方が彼女のことをよく知っています。なら、彼女のことを二人に頼んだ方が効率がよく、二人にも集中し易くなるでしょう?」

「すまん……僕たちのことを考慮してもらって……」

申し訳ない顔をしていた獅童。本来はここで親衛隊仲間と一緒に戦うつもりだけど、流石に夜見のことを放ってはおけない。

夜見はかつて親衛隊の一員だ。同じ親衛隊の一員として放ってるわけにはいかない。特に彼女の歩く道がずれ始めたから、手遅れる前に正したい。

それに、全面的なことを考えると彼女はきつと遠いところで荒魂を使つて刀使に妨害する。荒魂が現れたら、刀使も荒魂を退治するために動かなければなりません。

何にせ、荒魂を退治するのが刀使しかいない。軍隊の人たちはどれほどの重火力武器を持つていても荒魂には一切ダメージが通用しな

い。

軍の人たちはせいぜい時間稼ぎしかできない。時間が経てば経つほど、被害も増やす一方。

しかも無尽蔵の荒魂の群れは、刀使たちにも荷が重すぎるのだ。いくら斬つても、荒魂の数も減らない。

人類の歴史も大人数で少人数の国を滅ぼすことがよくある。

つまり荒魂を生産する皐月夜見を倒さない限り、いずれ刀使たちも数の暴力に抑えられる。

ならば、この問題を解決するために誰か彼女を倒しに行かなければならない。

つまり都の言うとおりに、ここは戦力を分散し、彼女を倒す。

だか、戦力を現時的には分散するのも良くないことだ。特に近衛隊は強化された刀使だと聞いた。

ならば、ここでは彼女を良く理解している親衛隊の二人に頼んだ方が最適な方法。

これが良い策だと思つたが……結局一番重い荷を彼と衛藤たちに任せた。

「いいえ、これは一番適切な策なのですから、謝らないでください。それに、彼女と色々話したいことがあるだろう?」

「確かにそうですか……本当にすみません。わたくし 私たちは貴方の先輩なのに、貴方に頼つたばかり……」

「いいえ、気にしないでください。俺は親衛隊の新人後輩ですから、少しだけ二人の前にも格好もつきたいのです。それにタキリヒメの護衛は二人を除いても、平城、鎌府、長船三校の総力と調査隊と可奈美たちがいます。総力戦ではこつちが絶対有利なのだ!」

近衛隊の戦力はまだ底知れませんが……こつちも結構手慣れた刀使もいるので、多分なんとかなるはず。

「うん……そうだね。僕たちも夜見を倒した後、すぐ戻って加勢するよ」

「それは助かる。」

「うまく行けば、夜見も親衛隊に戻るかもしれない。そうなった時、

親衛隊全員が再び揃えます。四人ではなく、今度は五人で」

「でも、きつとうまくいけないわね。タギツヒメ側に立つ時点で」

「あれだけやったのですから……」

タギツヒメのために、人を斬ったのだ。あの一線を越えた人の説得は決して易いことではない。

「それでも夜見は僕らの仲間だ。例え彼女は敵だとしても、僕は……」

寿々花と都はあれだけ言ったけど、獅童の瞳はまた仲間を連れて帰る決意を感じた。

「ならば、絶対に連れて帰るわよ。親衛隊第一席。」

「ああ……絶対に夜見をこっちに連れて帰るよ。寿々花、一緒に頑張ろう！」

「ええ、当然ですわ。」

「……………」

やっぱりこの二人の絆が深いよな。改めて見ると。

「なにぼつとしているのですの？都くんもこっちに来て」

「え……？な、なに？」

突然寿々花に引つ張られて、都は二人の近くに来た。

「貴方も私たちの一員ですから、除外された風にしないでいただきたいですわ。そうですね？真希さん。」

「うん、色々助けられたし。結芽の件も、僕を寿々花のところに連れて戻すことも、恩に着るよ。衛藤 都。」

「そんな大層なことをしてないですよ。俺は」

「それでも私たちをこういう風集まることは、貴方のおかげでも言えますわ」

二人にそう感謝されて、ちよつと恥ずかしい。俺はただやれることをやっただけだ…。

「だから、貴方は私たち親衛隊欠けようがない大事な仲間なんです。」

「うん、僕もそう思う。改めて、これからも頼りするよ。都」
「いいえ、こちらこそ。」

二人に仲間されたことに、都の心が少し花のように咲かせた。
仲間……仲間か——少し胸が暖かくなった気がするよ。本当に。



真白の部屋、その中心に建てた木造の神社。都たちは再びここに参つて、タキリヒメとの交渉を始める。

そして四人の中で一番年長の朱音は先にタキリヒメと交渉する。

「今一度お願い上がりました。お力を貸しお願いませんか？」

「……………」

「タギツヒメに対し、我らの共闘が叶えば、それ即ち、人と荒魂の共存という貴女の願いに近づくための第一歩となりますよう。」

「不遜。」

「……………!!」

ただ一言で、四人は初回より強烈な圧に抑えた。

この言葉からの意味によると、神が人の言動に少し怒っているように感じた。

「我がお前たち人に求めるのは、共闘ではなく『隷属』。」

「……………」

「イチキシマヒメを差し出せ。さすれば、我が庇護下で生きることが許そう」

「それを共存と言うの？完全に主人と家畜の関係じゃないか！」

「然り。人という未熟な種は所詮虫や獣と同じ。それを我が良い方向に導いてこそ、真の共存とも言えよう」

「共存という言葉調べて来い！」

神の言葉に毎回ムカつく男性、衛藤 都は今回も我慢できずに神へ反論する。

それを毎回その不遜な言葉に、はらはらする朱音。いくら説教で

も、都は相変わらずその態度でタキリヒメと接する。

「相変わらず不遜な態度ですな。我を恐れぬ人よ」

「不遜というのはお前のことだ！ずつと俺たちと向き合わず、対面もせず、対話すらも成立していないじゃないか！」

「我は神。神如く我はなぜ人と平等に対話するのか……これは傲慢だ。人よ」

「完全に見下されている……これだから、お偉いさんが嫌いなんだよ!!」

「都、ここまでです。これ以上はもう話す意味がない。」

都はそろそろキレたところ、？和は彼を止めに行った。

「？和……まだ諦めではー」

「いいえ、さつきは確信した。こいつも所詮は、タギツヒメと同じ荒魂だ。共に有るなど、叶わないのです。」

「……………」

さつきの会話から確かに？和の言う通り。人を平等的に見ない者は、もう交渉する意味がない。

自分もそろそろ諦めたいところだが、タキリヒメはタギツヒメと何か違うと薄々と察した。

数回に渡ってやっと気付いたことなんだけど、これは可奈美が言っていた違和感なのかな？

「……………あの、タキリヒメさん。私と剣の立ち合いしませんか？」

その時、唐突に可奈美はタキリヒメにそんなお願いをした。

「なっ……！可奈美、お前こんな時まで、何を……………」

「……………」

もちろん、可奈美の唐突の発言に呆れた三人なのですが……都は何となく可奈美の行動に共感した。

彼女を小さい頃から見守っている兄として、時々彼女の唐突な言動や行動にびつくりされたことがあります、そういう可奈美こそ何かをできるという直感が都にそう伝う。

「ほう……何のつもりだ、千鳥よ？」

「さつき、お兄ちゃんの言う通り。あなたは一度も私達を見てない。

直視さえも……それじゃ、お互い歩み寄ることもできません。」

「それで……、その……、お互いによく見れば、人間のことも、荒魂のことも、よく知り合えるんじゃないかなあって……」

「それには、正面から御刀を合わせての立ち合いが一番手っ取り早いと？」

「うん……」

軽く応じた可奈美。

彼女はタキリヒメに会う初日の夜に俺の教えをちゃんと吸収してから、その結論を出した。

本当に立派になったな、うちの妹は。

「お兄ちゃん……？」

「そういうことで、彼女の願いを聞いてくれる？タキリヒメ」

妹の頭を優しく撫でながら、都はそんな妹に誇っている。

「ふん、兄妹ともがくだらぬ考えだな。もう、よい。………下が
れ」

……しかし、そこにいるのは、衛藤兄妹を見下しているタキリヒメだった。

第52話：開戦の時

都たちがタキリヒメとの交渉が終わった数分後。防衛省のあるところ。

「むう。タキリヒメとか、もう切っ散ればいいじゃないかな」

「こらこら、これでいいんですか？益子家の刀使がこんな短絡的なことを言っても」

「冗談だ。だが向こうがこつちを少し応じないから、そう文句を言いたくなる」

タキリヒメとの交渉から帰ってきた都たちからいつもの結果を聞いたら、薫はとても不機嫌そうな顔。

その原因は彼女が言っていた通り、タキリヒメは都たちの口を聞かずにずっとこのような僵直状態を続いた。

それはそれでムカつくけど……。

「まあ、確かにワタシも少しミヤマヤたちが無視されたことで結構不満が溜まったのデス。けど、ミヤマヤと朱音様たちが諦めず交渉し続けた姿を見てたら、その不満を飲むしかない」

「そうだね。また手が取り合える可能性がある限り、こつちも諦めずタキリヒメと共にタギツヒメと対抗するようにする。……けど、もうそんな時間がないってあいつも^都そう言ってた。」

「近衛隊デスネ。詳しい話が知りませんが……タギツヒメはどうやらそれを使って攻めに来るみたい。」

「攻めに来たから、きつとその近衛隊にかなり自信があるだろ。…都のやつもその近衛隊に警戒しているみたい。」

「もしかすると、かなりの難敵かもしれませぬ。近衛隊というやらは」

何より、彼女たちに残された時間もない。近頃、タギツヒメは必ずその近衛隊とやらを連れて防衛省に攻めてくる。

その事実を知り、エレンは珍しく難しい顔をする。普段はずっと

笑って楽観的な表情で周りの人たちに安心させるんだけど、今回は不安定要素が多すぎだ。

特に一度タギツヒメと手合わせした薫とエレンはよくタギツヒメの強さを知っている。エレンだって、一度人型の彼女と戦ったことが経験していた。

とても強かった。……あの頃は彼がいなければ、今みたいに薫と喋らないと思う。

「それでも、こっちは大人しくタキリヒメを渡す訳にはいかない。人間を四百年守り続けた益子家の歴史を舐めんな」

「薫は強いですね。……ワタシは薫みたいに家の歴史が長くないですが、それでも愛する皆のためなら戦います。それはワタシの刀使としての拘りなのデース！」

「そうか。いいじゃないかな、その拘り。……あ、そういえば、都のやつは今どこにいるんだ？」

「ミヤミヤならヒヨヨンと別れた後、カナミンと一緒に晩食の食材を買いに行ったんデスヨ。」

「そうか。……今日はアイツが担当しているんだ。……今回は少し手伝うか」

「おや？ 薫は料理ができるんですか？」

「簡単なものならできる。オレも一応女の子だから、男を満足させる料理も大概できる……多分。」

「ミヤミヤのために特別作る料理デスカ？」

「……少し、口うるさいぞ！ エレン。」

そして、重い話題から今日の晩ごはんの話に変わると薫はエレンにからかわれて珍しく顔が赤くなった。

時に薫は乙女の時があった。



一方 防衛省本庁舎。

「よく見る……よく知る……」

折神朱音たちとタキリヒメの謁見から数分後、タキリヒメはさつき可奈美が言つてた言葉を何度も思い返す。

なぜ彼女はそんなくだらぬことを気にするのは、彼女自身もわからなかつた。もしかして、これが単なる好奇心なのかもしれません。

神を名乗る以前に、タキリヒメは他のヒメもそれぞれ思考で人と荒魂の価値を探っていた。

そして、彼女が紫の身体を取り憑いた二十年。その肉体から人間長年の行いをじっくり見極めていた。

人間は生きていくうちに、ずっと闘争や戦争から離れていなかった。特に同胞殺しは何千回以上続いた。

なぜ人間はそのような行いをしたのか、なぜ止めていなかったのか。

……タキリヒメはずっと理解できなかった。

この世界では弱肉強食という理論でできているのを理解しているのだとしても、同胞殺しなんで流石に理解できない。

確かに多くの生命は生きるためなら、自らの手足を斬る行為があつた。だが、人間のようになだの欲望で自らの手足を斬るといふ愚かな行いをしない。

本当にわからない。なぜ人間は自らの滅亡を望んでいるんだ？なぜそこまで権力と地位、お金や感情を拘っているんだ？

それらの原因で人間は無数の戦争を引き起こし、無数の人はそのせいで亡くなったのに……なぜ止まらなかった。

お前たち人間は我々荒魂より先に智慧をもらったのに、なぜ智慧がない低等荒魂のように仲間殺しをするのだ？

人に対する疑問は湖に流れ込む川みたいにどんどん増えていく。だが、それを解決する人間はどこにもいなかった。

例えあの折神紫でも、彼女にその答えを教えていなかった。

そして、最終的に出した結論は神としてこの世界を君臨することだ。

このまま放置すれば、人間はいずれ自らの手で滅ぶ。それだと、いかにも惜しい。

故に長く自由しすぎた人を管理することで哀れな人間とこの星を救おうとタキリヒメはそう決めた。

とはいえ、現在彼女の力が限られている。彼女が持つ力はあくまで元の半数に過ぎないのだ。

隠世にいる本体を手に入れば、人と荒魂の全てを飼い慣らすように管理・支配する世界が叶えられる。

それがタキリヒメが描いた最も理想の完璧な世界だ。

争いが無い、誰でも傷つかれることもない真なる理想郷。

今だにその理想、我が宿敵たる三人はずつと理解できなかったが……。いずれわかる時も来るでしょう。

何にせ、他のヒメの理想は人にとって害しかないから。

「……………う……………出てくるが良い。」

また可奈美の言葉意味を気にしているタキリヒメは唐突にある存在を気付いた。

そうしたら、鳴き声と共に一匹の荒魂が彼女の前に現れた。その荒魂の外見はまるでモフモフの小動物みたい。

「荒魂……………いや、本来荒魂にあつてしかるべき穢れが失せている。荒魂であつて荒魂でない、お前は何者か？」

小さい荒魂から何の穢れさえも感じられない。そのものは確かに荒魂である……。だが、どうしてなのだ？ 荒魂は穢れで組み合わせているじゃないのか？

荒魂は基本穢れであるノ口に仕込んでいる。それは神である彼女でも逃れられない宿命である。

だから、彼女はこの荒魂がなぜ穢れがないことを不思議と思つていた。

「ね……………う……………ねっ！ ねねー！」

最初はタキリヒメの質問がわからない反応を取れた荒魂ですが、突

然荒魂はあるところに視線を集中して、そこへと飛び込んでいく。

もちろん、そちらの意図を簡単に読み取るタキリヒメですが、彼女はそいつの侵入を許した。

何にせ、目の前にいるのは脅威すらもない無害な荒魂だから、神たる彼女がそんな小さいな荒魂を目に入らない。

「私の胸元に何用か？」

「ね〜ね〜！」

そして、彼女の胸の中に潜り込んだ荒魂。そいつはその柔らかいおっぱいに包まれてとても幸せそうな顔をする。

本当に不思議な荒魂。

「……………しかし、穢れがないとはいええ、なぜ人はお前を放置している？」

「ね？」

わからない顔をする荒魂。こういう反応はまるで人みたい…………。

「お前もまた人の無知と愚かしさによって生まれた災厄の獣。だが、なぜお前は穢れを持たぬ。」

しかし、そこはまたわからないという顔。恐らくこの荒魂は知能がないだろう。

穢れがなく、知能もない荒魂…………少し気になる。

「お前の記憶、少しのぞかせてもらおうぞ」

そう言っつて、タキリヒメは荒魂を手で掴む。もちろん抵抗しているが、それは無駄な動きであった。

そして、タキリヒメは荒魂の額と彼女の額と触れ合させて、——ねえという荒魂の過去を覗き始めた。



さらに数分後、タキリヒメとの面会が終わってから市ヶ谷の街中に買い物をする衛藤兄妹たち。

「お兄ちゃん重くない？手伝おうか？」

夕食に使う食材を両手で運ぶ都は、すぐ隣に歩いている可奈美に關心された。

何にせ、彼が持つ袋は重そうに見えるから。見るだけでちよつと申し分ない気持ちだが可奈美の心底から生み出した。

「大丈夫大丈夫。これくらいの重さは大したことがないよ。」

「でも、これは七人分の食材だよ？お兄ちゃん一人で大丈夫なの？」

「平気平気。俺は皆の隊長だから、皆の食材をちゃんと運ばないと」

「それは隊長の仕事ではないと思うけど……」

正直、都は隊長としてはやり過ぎだ。もちろん、これはいい意味で。

彼は今日の晩ごはん作る担当だけではなく、市ヶ谷の防衛戦略、見回り、他のチームと織田事務次官などの人間との取り合わせなども一人で背負っていた。

こんな頑張っていたバカに、可奈美たち六人は結構悩んでいた。

故に、彼女たちの毎日の課題は彼が疲れすぎないように定期的癒やしや手伝いをする事だ。

基本、膝枕や料理当番交代するくらいの出来事だ。

ちなみに、沙耶香と薫は一度都と添い寝するつもりだが……すぐ？和とエレンに止められた。流星に未成年二人が一人の男と一緒に寝るのはいけない。

「ねねっ！ねっ！」

「うん……？ねねちゃん、どうしたの？」

そんな時、ある生き物の声の後ろから伝わってきた。

可奈美と都が軽く振り返ると、黄色の生き物がそこにいた。

「ねね？なんて一人でここにいる？薫は？」

「ねっ！ねねっ！」

ねねは特有の叫び声をしながら、さつき来る方向に戻す。そして数歩渡ったところで、ねねは再びこつちに頭を振り返って叫ぶ。

「こつちに来いっていつ？」

「ねっ！」

応答しているように頷くねね。どうやら、我々をそいつについていてくださいと言っているみたい。

「お兄ちゃん、どうしよう?」

「可奈美は先にねねについて行って行ってくれ。きっと何かしらの用事があるんだと思う。晩ごはんの前に戻ってきてね」

「うん、わかった。」

軽く頷いて、可奈美はそのままねねの後ろについていく。

そして、その可愛い背中を暖かく見守るバカ兄は、妹の姿が消えるまですっと見守っていた。

「ねねのやつは俺や可奈美に何か用があるのを知らんけど、きっと害を与えることではないと思う。さて、俺もゆっくりと戻るとすー」

「—————」

そろそろみんなの所に帰るその時、突然彼はある謎の気配を感じた。

「……………っ!?!」

都は咄嗟に振り返りつつ、床を蹴って距離を取る。

いない……………?

しかし、視界の先に誰もいなかった。

おかしい……………確かに気配を感じたはずだった。

自分の気配察知に結構自信がある彼。今回は珍しく外れだった。

「気のせいなのか……………?」

「—————」

またその気配が感じて、都はしばらく荷物を地面に置いて、御刀を構う。

周囲をじっくり見回すと、そこにいるのは彼の異様に色目を投げてる人々しかいない。

「何なのさっきのは……………」

さっきのよくわからない気配でしばらく困惑する彼。……………気配が一瞬感じていたのに、身姿は完全に見えない。

「なんか嫌な予感がしてきた……………。早く皆のところへ戻ろう」

地面に置いた2つの重い袋を無理矢理に片手で持ち上げる、もう一手を御刀に置く。

うおっ！重っ！

袋を持つ片手はかなりの重量で危うく手放しそうだった。だが、流石に気配の正体を捉えるまでに、無防備でいられない。

少なくとも、警備が嚴重中の防衛省に戻るまではこの体勢で襲来するかもしれない攻撃を備えなければならない。

それから防衛省に戻る道中に、都はずっと警戒し続けていた。だが、その気配はあれ以後に現れなかった。

あれは一体何なの……？



夜、六時四十九分。

とある高層ビルの上に、元親衛隊の皐月夜見が屋上に立っている。

彼女は無表情の顔で残る時間を確認している。

作戦開始まであと十分くらい。時間切れまで、彼女はしばらくここで待機することになる。

「……………」

普段はほとんど静かな彼女は無言のまま、冬の冷たい夜風を体当たせられる。もちろん寒さを感じますが、そんなことより彼女は目の前のことを集中している。

ここから先は自分が荒魂を使って、刀使たちの妨害や囮を務める役だ。主力部隊ではないけど、自分に渡された任務は何よりも大事な任務である。

そして、親衛隊の二人を惹き付けるのもこの計画の一部だ。実力がトップの親衛隊たちを防衛省から離させれば、敵の防衛戦力は大半に

減ります。

そうすれば、ヒメたちの行動もより易く行けるのでしよう。戦力でも冥加刀使の方があつちより遙か回っているし、一人では数人の刀使を相手でも特に問題がないはず。

それに、警戒すべき人物はただ七人しか。数ではこつちのほうが絶対有利だ。

同じ脅威度の調査隊にも別働隊の「山城由依」たちが止めさせる。決して彼女たちを衛藤可奈美たちの加勢にさせません。

これほど有利な作戦に夜見は本作戦が必ず成功すると信じていた。けれど、内心ではある不確定要素でかなり不安だ。

なぜなら、敵側の衛藤 都という男は常識外れの人物である。不確定要素としては十分脅威がある男だ。

彼は生身で刀使を倒せる実力者にして、親衛隊最強の一席の燕 結芽と戦える者にして、刀使という力を覚醒する初の男性刀使だ。彼に対するコメントはただ異様しか名付けられない。

彼はこれからどう進化するのか、夜見は考えたくない。『予測できないんだ』。

それでも本作戦の成功率が高いのも揺るぎがない事実だ。ヒメという反則級の戦力がいれば、それを対抗するために必ず衛藤可奈美と十条？和二人が必要だ。この二人を封鎖すれば、ヒメを止める者がいない。

例え衛藤 都でも一人で未来視を持つ相手にどうしようもないだろう。

そういえば、彼と話す機会がほとんどいかなかったなあ……。元は御前試合の時におむすびだけの歓迎会をやるつもりなのに、紫様暗殺未遂事件のせいで、彼が親衛隊から除外された。

ちよつとだけそれが惜しいと思っていた。彼女と獅童は同じく隊の新入りを心の底から歓迎したいと思っていた。

だが、それはもう叶えない夢だった。今はお互いが敵同士。

自分は悪、向こうは正義。闇と光はもう交じり合うことができない。

……本当に運命のいたずらは酷すぎる。しかし、これは私が選んだ選択だ。後悔することはない。

例えこの後は此花さんと獅童さんたちと戦うことになっても、私は忠誠の道を最後までに尽くします。

だから手加減はしません。悪役として、全力で振る舞います。

それは――私の、元親衛隊第三席の拘りです。

「そろそろ時間ですね……………」

考えているうちに、作戦開始はもう既に一分足らずになってしまった。

「さあ、あの人のために世界をより混沌になりましょう」

御刀を抜き出し、夜見はあの人が授かる力を使う。

こうして後世に市ヶ谷防衛省防衛戦と呼ばれる戦の幕がここで開いてしまった。

◇

夜、七時十分頃。

「はい……………わかりました。」

本部からの連絡を受けていた都は重い顔をしていた。どうやら町中に大量の荒魂が発生してしまった。

もちろん舞衣たちのスペクトラムファインダーも特にそれを反応しているが、すぐ出撃しなかった。

なぜなら都は事前でこのような状況を予測していたから、彼が指示を下すまで全員待機という状況だ。

刀使としてはとても心苦しい待機命令だが、高戦力である彼女たちは荒魂対峙で、タキリヒメの警備を諦めるわけにはいかない。

行けないだが……………。

「ミヤミヤ、これからワタシたちはどう動きマス？」

「タキリヒメの警備は何より大切なのもわかっているが……」

「刀使の役目は人を襲う荒魂を対峙すること。」

「本能では流石にそれを無視できません。」

隊員たちはそれぞれ狼狽える顔で焦っている。その気持ちは今だにわからないが……荒魂から人々を守るのは彼女たちの役目。

彼女たちがいなければ、荒魂による被害もどんどん広がるでしょう。故に、この状況は彼女たちが必要だ。

けど、そこは敵の狙いだったかもしれないので、軽く主戦力を派遣しちやいけない。

「とりあえず、荒魂の処置は他の刀使部隊に任せましょう。急いでいるが、事前に同じく警備役の苗場なえぼと綿貫さんたちと相談しました。彼女たちは荒魂を出現する場合に荒魂を優先に対峙します」

「とても失礼な質問ですが、彼女たちの実力は？」

「苗場さんと綿貫さんお二人はとても優秀の刀使です。指揮能力の腕もかなり優れているので、実力方面は心配無用でしょう」

「じゃ、彼女たちに任せてもいいってこと？」

「ああ……俺たちはただタキリヒメの警備を集中するがいい。むしろあっちのほうが陽動……」

「陽動……？」

都の言葉に少し気になる舞衣。彼がこれを陽動と言うならば、本命は……。

「都、それはまさか……！」

舞衣より先に察した薫は結構真面目な顔だ。

「そのまさかだ。荒魂の襲撃は恐らく元親衛隊の皐月夜見が放った攻撃なんでしょう。大量の荒魂の出現はどう見ても普通のことじゃ見えない。ならば、これは人為的の攻撃である。しかも――陽動攻撃だ。」

「陽動……それって本命はまだ来てないってこと？」

「……本命、タギツヒメと噂の近衛隊か……。」

都の言動からそれを察した？和。彼女たちにも近衛隊のことを話

した。

もちろん当场で一番激動する？和を慰めていた。彼女はどうしても荒魂の力を受け入れる人間を受け入れないみたいだ。

まあ、それも仕方ないことだ。同じく親衛隊と手合わせした経験者として、その気持ちが変わる。

それに加えて、俺は結芽と寿々花がそのものに苦しんでいたことを知った。ノロによる特性で時々自分を抑えなければならぬ。

だから、近衛隊の話を聞くとときに俺も少しだけ皐月さんのことを心の中で叱っていた。

あれはどれだけ危険なものなのか。後者はともかく、前者ならよくわかつてはいるはず……なのに、彼女は殺ったのだ。

理由は今でも知らない。彼女は一体何のために今までに戦ったのだ？

とにかく、皐月さんのことを獅童さんたちに任せよう。俺たちは近衛隊とタギツヒメへの対応を集中すればいい。

「うん、敵の本命は間もなく何かの方法でここに突入するのだろう。その前に、全員は一旦S装備の用意！俺は周囲にいる平城と長船の刀使たちを一旦正門に集める。」

「死守するつもりデスか？」

「ああ……守備戦力を各地に分散するより、一箇所に集まった方がいい。」

それに、近衛隊の戦力はまだ無知数なので、力を集めて迎撃したほうが効率がいい。

それと、タギツヒメが現れる次第、こつちも近衛隊のことを他の刀使たちに任せて、タギツヒメと戦う余裕が作られる。

うまく行けるといいんですが……。

「なんかミヤミヤは戦略家みたいデスね。」

「そんな物騒なことを言うエレンに都は少し困る。だって、彼は自分をただ普通のお兄さんだと思いたい。」

例え今は刀剣類管理局と親衛隊の一員に入ることだとしても、彼は

一人のお兄さんをやりたい。

「でも、確かに隊長としてはお前は頼れるな」

「うん、都はいい隊長。」

「そうだね。都くんは私より優秀な指揮者ですから、きっと私たちに正しい判断を下しますね。」

「まあ、私もお前の隊に入れることを良かったと思う。」

「皆……」

エレンに続いて、他の四人も都のことを褒める。正直めちや恥ずかしい気分ですが、凄く嬉しい……。

やっぱりこのメンバーたちといると、少し浮かれてしまいましたわね。俺は。

この後、全員にS装備の用意をさせた。俺も自分が成すべきを成すために動き始める。

市ヶ谷防衛省防衛戦の夜はまだまだ始まったばかり。

第53話：防衛省の戦い

山崎穂積は礼儀正しいお嬢様のような女の子。

実際彼女の家庭もお金持ちなんで、ある意味では確かにお嬢様のよ
うな人。

彼女は両親の顔を泥まみれぬよう、お嬢様ふりで毎日を楽しく過ご
しました。

そのお嬢様雰囲気のおかげで友達も結構作りました。結論だけを
言うと、彼女は幸せ者だ。

毎日剣を振り、友達と買い物や昼食、カラオケなど幸せの日々。一
人の女の子にして極普通だけど、普通だからこそその幸せだ。

彼女もこれ以上贅沢な生活を求めていない。このまま刀使として
人々や友達を守れば、それが十分だ。

ある日、綾小路は御前試合に参加するため、選抜試合を行っている。
そこで穂積は親友と共にそれに参加し、見事に御前試合に出ることに
なりました。

そのことに喜んでいた彼女はこれ以上ない名誉を感じた。何せ自
分が学校の代表という身分で、刀使たちが憧れている御前試合に出る
ことになりました。

彼女の両親もそのことで泣き出すくらいに喜んでいた。皆は彼女
を祝福していた。

幸せに包まれた穂積は自分が誰よりも幸せな女の子だと思ってた。
うまく進めば、もしや御前試合の優勝も取るはず。

そうになったら、きっともっと多くの幸せを取れる、もっと褒められ
る。

そういう感覚はとても気持ちがいいから、”もっと欲しい”です。
そのために穂積は御前試合の前夜でも剣の素振りをしていた。

もっと褒められたいという純粋な欲望がこんな単純な少女に前へ
進む力を与えた。

きっとこの先はうまく行けるはず。だって自分は頑張ったから。

神はきっとこんな頑張っている子を見捨てないはず。

——そのはずだった。

「勝者——平城学館、十条姫和。」

勝負宣言とともに場内が大きく……主に平城学館の歓声が上がった。

圧倒的、華麗とも言える試合。自分に勝ってた相手は歓声に浴びて、速やかに休憩区に戻る。

その反対に穂積は惨めな様子で地面に横になり、斬られた痛みにより呻き声さえも出した。

なにか起きた？自分が負けたの……？

反応さえも追いつけなく、相手に斬られた。一瞬つけた勝負に彼女の反応が追いつけなかった。

しかし、多様な歓声が耳に入れば入るほど、彼女は嫌でも残酷な現実に向けられた。

自分は初回戦で負けた。しかも、あっさりと負けたのだ。

これほど屈辱は彼女が耐えられない……いや、誰でも初回戦でこんなあっさり負けた結果を受け入れるはずがない。

だって、これだと自分の学校の顔に泥まみれになる。自分に期待している人たちを裏切ることになる。

こんなのありえない。受けるものか！

その後、彼女はスタッフに休憩区までに連れ帰された。自分の親友に向ける顔がなかったので、顔をずっと彼女を避けたままだ。

彼女もまた自分を応援する一人だった。きつと彼女に失望させたのだろう。

しかし、彼女がまず自分を優しく抱き締めてくれた。自分の耳近くに「お疲れ様。」と何度も言ってくれた。

あの時の自分は気付いた。例え自分が失敗しても私を優しく接する人がすぐそばにいること。

そのことに、私は我慢できず負けた悔しみを涙に変えて、彼女の胸の中にいたずら泣いた。

本当に悔しかった。自分はとても頑張ったのに、あっさり負けたなんて……努力家である自分はどうしてもそれを受け入れなかった。

その後、自分の親友も私を倒した相手と同じく平城の娘と相打ちの形で負けた。

彼女も相当悔しかったのだろうと思って、彼女が私を慰めるように、私も彼女を慰めたい。

しかし、彼女はただ「これで同じだね。」とそう言いながら、苦笑う表情をする。

その時の私はやっと気付いた……彼女は弱い私より強かった。剣術は私より弱いけど、精神的に私より強かった。

本当に自分は弱い人間なんだな……。

その後、あの事件が起きた。

決勝戦で私に勝つ相手は折神紫様の刺殺失敗で、同じく決勝戦に進むもう一人の相手と一緒に逃亡した。

この事件を見届けた私はこのような唐突の事態に反応が追いつけられなかった。なんで彼女は御当主様に刃を向けたの？せつかく私を勝って、決勝までに進んだのに……なんで優勝というチャンスを見逃したの？

それ以来、彼女はずっと十条？和のことを思い続けていた。だが、これは別に特別な感情が含まれるわけじゃなく……ただ彼女がなぜあの時に御当主様を刺殺するような真似をするのか気になる。

彼女の剣は一体どんな思いを込めて、私を倒したのだろう……。

さらに二週間後、穂積がずっと心をかけた相手十条？和は鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の件で大荒魂を倒した六人の一人のヒーローとして名響いた。

こうして彼女は罪人からヒーローに昇華。とても不思議な転換だ。その話を聞いた穂積はとても複雑な気持ちだった。だって本来罪人であった十条？和は一気に英雄になったのよ！その過程は彼女が知らないけど、穂積は十条？和という不思議の女の子を受け入れなかった。

自分より人々たちに憧れられることに、穂積は受け入れない。罪人は罪人らしく嫌われていいのに、なんて英雄として皆に慕われるのよ！

その十条？和への嫉妬という気持ちは穂積が自覚しなかった。そしてそれを作った原因は十条？和の話題になると、自然に自分に向けられた友達の話題素材。

十条？和に負けたことは友達に何度も何度も話題されて、穂積はとても気に食わなかったが……いつもお嬢様ふりで縛られた彼女はその場で偽の笑顔で我慢しかできなかった。

なんで私は十条？和のせいで、こんな風にされるの？私は確かに彼女に負けたが……それはもう五ヶ月前のことだ。自分も確かにその時より成長したはず……。

なのに、自分はずっとその人と比べられた。いくら頑張っても周りの人たちはもう自分だけを見ることがなく、彼女たちの視線すべてが十条？和に奪われた……。

何せ、彼女は英雄だ。自分のような名がない刀使と格違い、新たな刀使たちの憧れである。

……ふざけんな！なんで私はただ御前試合で彼女に負けたことで、私はすべてを失ったの!?理不尽だ！私は一体貴女に何かをしたの！なんて私はただ普通に生きていたいの、なんて逆に貴女に奪われたの！返せ……私が本来持っていた誇りを返せてよ!!

彼女が一生懸命叫んだ声は誰も聞こえなかった……この世界への理不尽に叱る声と十条？和への恨む声を。

その後、彼女は近衛隊のことを聞いて、その入隊を強く希望した。

◇

夜、七時二十分――

？和たちは都の指示通りにS装備を装着し、防衛省最終防衛線である正門に集まっている。

けど、感心の隊長がなぜかこの場にはいない。その妹もさつきからずっと行方知らず。

「おい、都と可奈美は？」

それに関心して、皆に尋ねる薫。

「都なら、もうこの中に入った。何かを企んでいるかは知らんか……」

「きつと個人的の考えがあるでしょう。ちなみに、可奈美ちゃんから連絡があった。もうすぐ戻るって」

「そうか。」

？和と舞衣の話聞いて、少し安心する薫。あの二人は間違えなく？和と同様こっちの最強戦力。タギツヒメと対抗するならば、この三人が必要だ。

しかし、天然役の可奈美はともかく都はなぜ中に……？彼の思いは時に当たらない。

「みんなく〜！お待たせ！」

ちようどそんな時、可奈美も皆と合流してきた。

「遅いぞ、可奈美！」

「ごめん！って、なに？この音は？」

そんな可奈美を叱る？和。そして彼女に謝るつもりだった可奈美ですが、空に妙な音に注意を逸した。

「この音は……ヘリコプター？」

「嫌な……感じ。」

「……………ちえ、そう来たか！」

上空にヘリコプターを見た一瞬、薫は苦虫を噛み潰す顔でこう言った。あのヘリに乗るのは必ず「奴ら」がいる

「何か、降ってきマスー！」

薫が言った途端にヘリから降ってきた数十人超える人影。着地したと同時に、彼女たちはすぐ立ち上がり御刀を抜き出し、写しを体に被る。

「あれは……綾小路の刀使……!?!」

「あの赤いのは……S装備!?そんなものも用意しているのか!」

薫たち以外の刀使たちは近衛隊の到来に驚いた。彼女たちは事前に綾小路が敵だと知っていたが、冥加刀使であることを知らなかった。

これも事前に駐在している刀使たちを混乱させないための仕掛けだ。

「来るぞー！お互いのことを援護せよ！チームの連携を絶えるな！」

敵がそれぞれ迅移で襲ってきて、刀使たちの小隊長はすぐ指示を出す。

「……………ぐあっ！」

すぐやられた味方が複数にいたが……それでも第二波の攻撃は敵の思うのままに行かせない。

各小隊は連携を重視する戦法を使い、何とか敵の攻勢を止めさせたが、かなりギリギリだ。

敵の実力は予測より遥か上回っていく。一対一ではすぐやられちゃうくらい。

とはいえ、今進行中の連携陣形もかなりギリギリの範囲内で敵を一時抑える。

「これが衛藤という男が言った。連携しないと、やられる一方か……彼の意見を聞いて良かった！」

ある小隊長はブツブツ言って、相手刀使の攻撃を防ぐ。攻撃を他の隊員に任せる。

しかし、相手をうまく倒せこないみたいだ。

ただ一人の敵を対応するため、一つの小隊の高レベルの連携が必要だ。しかも、致命的の隙も見つからないから、トドメもできない。

「……………かなりまずいわね。私達も参戦します！都くんがいないけど、私が代わりに指揮します！」

戦況の厳しさを見破る舞衣はいずれ味方がどんどんやられちゃうと判断し、しばしこの隊の指揮を取る。

「うん！このままじゃ味方が危ない。」

「早く助けてい。」

「都是一体中で何かを企んでいるか知らないが、俺たちを舐めんなよ！冥加刀使とやらー！」

「舞衣、背後は任せた！」

「マイマイとミヤマミヤを信じマース！」

そして全員は共識し、戦場へと突入した。

こうして、刀と刀がぶつけ合い音がこの夜に響く。可奈美たちはそれぞれの相手と戦う。

彼女たちは相手と一对一の実力があるから、少しでも仲間たちの負担を減らせる。

そして、可奈美は戦場の中で早速見覚えがある人影を見つけた。

「歩ちゃん……………」

「衛藤さん……………！本物の衛藤さんだ！」

自力で一つの刀使小隊を殲滅した冥加刀使ー内里 歩が可奈美の声に気付く、嬉しそうに彼女を見た。

だが、その目はもう前のような憧れてキラキラした目ではなく、あの狂気が染まる目だ。

「なんて……………なんで歩ちゃんが……………」

そして彼女、歩がここにいることを信じられない可奈美。

彼女がここにいるということは、あまり想像したくないが……………彼女が冥加刀使。

「見てください、衛藤さんが私たちに教えた技は私もできるようになっただですよー！こういう風に……………！」

「……っ！」

迅移で可奈美を襲って来る歩。

「何なの……この力は……?! ストームアーマーを装着したとはいえ、こんな……」

彼女の剣を受け止める可奈美は歩が振った斬撃がとても重く感じた。前はこんなじゃなかった…。

「どうですか？ 私はとても強くなったのよ！ 衛藤さん！」

無邪気の笑顔……いや、何処かに間違っている狂気に染まる歩は可奈美に連続攻撃。彼女の笑顔とその剣はとても怖い。

そんな凄まじい異様な剣に珍しく抑えられる可奈美は一方的な防御に落ちた。

「ぐっ……！ 歩ちゃん……ねえ、どうして……?」

「もつと……もつと見せてください、衛藤さん！ 貴女の強さを！」

「ぐっ……！」

どんどん強くなる斬撃に可奈美はどんどん抑えられている。

彼女の攻撃ははつきり見えているけど、可奈美はまだ混乱から戻って来ないようだ。

ずつとずつと自分を懂れていた子がこんなに恐ろしくなるなんて……。

「可奈美………待って、今助けにー」

戦い最中に？ 和は早速相手を仕留めて、可奈美の方へ関心する。今の彼女の精神状態では、多分元の実力が出せないかもしれない。

ならば、私が彼女を助けー

「ーっ!？」

殺意が満ちていた斬撃を急に防ぐ？ 和。さっき一瞬に寒気が背中を走り回ってた。

あれは間違えなく自分を殺すための攻撃である。

「やつと……やつと……見つけたよ！ 十条？ 和！」

「重……！」

歩と同じ……いや、それ以上の狂気が纏う敵性刀使。彼女の刀と瞳から、完全に殺気というものが感じる。

まずい状況になっていく。
こういう時、あいつはどこに行ってやがった！



ほぼ同一時刻ー！。

市ヶ谷近くのビルの上に、親衛隊の二人は同じく親衛隊の皐月夜見と対峙している。

「久しいな、夜見。」

「お元氣そうで、何よりですわ。」

古馴染に対しても、御刀を構える獅童と寿々花。周囲には蝶の形の荒魂の群れがフラフラと飛んでいる。

「…………やはり、来られましたか。」

そして元同僚の二人に対し、夜見も顔を一切変化なく、無表情で二人に向かう。

そして、彼女は一時に荒魂生産を止めた。つまり彼女こつちと戦う意識がない…………？いいや、彼女は戦えずに降参するような者だと見えない。

でも、これもいいチャンスだと獅童と寿々花はそう思っていた。彼女とゆつくり話せれば、彼女を連れて帰れるかもしれない。

「戻って来い。もう、高津学長の言いなりになる必要もない。」

「紫様は健在ですわ。再び親衛隊として忠義を尽くしましょう！」
彼女は親衛隊の中で一番忠義が尽くす人間。なら、紫様の無事を彼女に伝えれば、きっと彼女はすぐー！。

「……………ふっ。」

二人の発言に冷笑している夜見。

その笑いはまるで二人を嘲笑っているように見える。とても不気

味な微笑みだ。

「夜見が……笑った？」

「……………何かおかしいのですの？」

「だって、獅童さんも此花さんも……………何もわかっていないから」
その言葉に妙な寒気が感じる。

何もわかっていない……………？何のことなのだ？

そして、彼女はポケットからノロのアンプルを自分の首に注射する。

その動作を止められない二人はこの時、夜見の覚悟を知ってしまった。

「……………ならば、遠慮はいりませんわね。」

「夜見、僕たちは君を止める」

親衛隊同士の戦いは、もはや避けられない。武力で彼女を大人しくさせましょう。

「……………」

これでいい。計画通りに貴女たちをここで足止める。

これもあの人のため、世界をより混沌への道なのです。

こうして親衛隊同士の戦いも防衛省での戦いと同時に開いてしまった。

第54話：激闘の夜

夜、七時三十分

―防衛省本庁舎―

外からの戦闘音が本庁舎の奥まで届いた。

(どうやら敵が防衛省に攻めてきたようだ。暫く、外のことを可奈美たちに任せた。こっちも、そろそろラスボスを迎える心構えをしないと)

そう思い、彼は天井の方へ見つめる。

もし予想が外さなければ、アイツは必ず近衛隊を囮に使って、自らそこから来るはず。

「……後で、きちんと可奈美たちに謝ろう。自分がまた無茶なことをしたお詫び」

そして数秒後、予想通りに上から何か割れた音をする。割れたガラスの残骸がそのまま天井から落ちていく。

「……………」

全集中で軽くガラスの破片を避けながら、彼はガラスと共に上空から落ちていく黒い人影を見つめる。

やがて、その黒い影が地面に着地する時、
「彼女」は都と視線が合った。

「我を待っていたのか？」

「来ると思っていたよ。『タギツヒメ』。」

御刀を鞘から取り出し、構えを取る。

彼は最初から彼女と一騎打ちの形を望んでいる。

「ふっ……貴様一人か。大した自信だな。」

「ああ、可奈美たちは大忙しいからな。悪いが、俺がお前の相手をしてやる」

「ただの半人前の刀使は如何に我を止めるか」

「それはやってみないと、わかんないだよ！」

「……………ふんっ、愚か！」

ほぼ同時に二人は迅移で最初の一撃を放った。刀と刀のぶつけ合う音がこの空間に響く。

この音と共に、二人は戦い始めた。

(最初は全力で行く！リスクを考えず全力で斬る!!)

「ふむ、なかなか良い気迫が含めた一撃じゃ。だがその程度の力は
我を倒せん！」

「ぐっ……………」

剣がタギツヒメに軽く弾けられた。それで大きな隙が現された彼にタギツヒメは右手の刀で突刺する。

幸いのことには彼はそれを読み取り、上手く回避できた。

しかし、回避するところ、タギツヒメはさらに左手の方を都に斬りかかる。

「ぐっ……………」

急ぎの最中に写しを貼り、彼はぎりぎり迅移で回避する。

(流石天下無双の剣術……………手強い！)

ただ極短い手合わせの中、彼は相手の剣法がそんな簡単に見破れないものだと知った。

「一瞬の写しと迅移か……………これは刀使の中でもなかなか高難易度の操作だな。」

「俺は一瞬しかこの力を出せないからな。強引に斬られて解除されたら、それはおしまい。だから、そうならないように特訓したのよ！」

「ふんっ、神我の前に何秒持ち耐えるか！人間！」

激しい攻防戦中、彼は次々とタギツヒメの攻撃を防ぐ。

そして後ろの方へ一時退避する都を追うタギツヒメが再び迅移で接近すると、都はタイ捨流を使い、刀柄という部分でタギツヒメの攻撃を受け止めた。

これはかつて御前試合の時、エレンが？和の斬撃を受け止める技だ。

「ほお……………」

その技に少し驚くタギツヒメ。彼が燕 結芽以外の流派も使うのが想定外だった……。

「はあー！」

攻撃を防いだ後、都はすぐタギツヒメへ上段斬撃で斬る。しかし、未来視の前ではそれくらいは攻撃はそう簡単に彼女を届かん。

最も彼女にダメージを与えるのは、ほぼ不可能なことだ。それでも、まだまだ終わってないつと彼は確信している。その未来視は必ず弱点があるはず！

彼は型を変え、踊るように天然理心流の剣技を引き放す。

まず柳生新陰流の基盤で慎重に彼女の攻撃を読む。そして猛攻撃する時は天然理心流に交わす！

これは、彼がこの五ヶ月間ずっと鍛え上げた技術。多数の流派を一つにする絶技。

その名は「流水」。

水はすべてを飲み込み、受け入れる。そして、硬い石でも破壊する力がある。

「ほお……これは……」

都は自分が学んだすべてをこの場で運用する。何とか刀使の力と合わせて、タギツヒメと引き分ける程度になった。

そのところ、タギツヒメもかなり驚かされたようだ。まさか彼一人で自分とここまでやり合えるなんて……思わなかった。

「うぐっ……いー！」

しかし数十回攻防の後、都は一瞬隙取られて腰がそのままタギツヒメの攻撃を食らった。いくら避けようとしても未来を見える相手にどうしようもならん。

「さて、この余興もそろそろ終わりにしよう。所詮、貴様一人では私の相手にならん」

「ちえ……いー！」

まるで都を嘲笑っているようなタギツヒメ。その表情はとても腹立たしい。

完全にこつちを見下している。

(クソ！とてもムカつくか……。お腹が貫通したせいで集中力は維持しにくい！)

熱い鮮血と痛みが段々と傷口から溢れ出していく。このままじゃまずいと大腦からよく警告してきたが……。ここでは諦める訳には行かない。

何せ、この場から退けばタギリヒメがタギツヒメに吸収され、実態が今より悪化する。

そうなったら、可奈美たちにもっと負担をかかる。それだけは避けたい。

「痛みを気にせず、我と戦うつもりなのか……。ふっ。」

都は刀を握って攻めに来るのを見て、タギツヒメは小さく嘲笑った。これほど命知らず、愚かな人間は彼が初めてだ。

そして彼女は都が斬りかかる攻撃を軽く対応する。都も彼女の動きを読み、躲す、防ぐ、隙を見つけて攻撃する。

「…………刀使と人間の間には挟まれた存在とはいえ、人間の範囲から離れてない貴様は、所詮弱き人だ。」

「ぐっ…………！」

ぎりぎり迅移で首に振り込んだ斬撃を回避する。

負傷をおった彼は劣勢に落ちつつ、ただ防御を徹するしかない。さつきは何とか彼女と引き分けたのに……。

「貴様はどうやらまだわかっていないようじゃだな。さつきの我は全然力を入れていなかったのだ。少し本気を出したら、貴様もこの惨めな様だ。」

「なるほど、これが未来視というやつか……。相手の可能なる未来を見て、そのうちから最善の行動を取る。可能性がある限り、俺を押しやる方法もいくつがある」

彼女の二本の刀を弾けて、彼女と一旦距離を取る。

「よくやく神と人の差を知ったか」

「ああ…………ついでにお前の未来視の弱点も大体わかった気がする」

「なに…………？」

自分の能力を弱点があれと言われ、少し不愉快な表情をするタギツ

ヒメ。

「貴女は未来を知ることができる。だが、お前ができるのは、ただそれだけのことだ。」

「……………」

「お前が持つ未来視が捉えるのはあくまで、“可能性の範囲”での未来しかない。自分が好きに思い描いた未来を選んでいるわけではない。」

「……………」

一度に百個の可能性を見ることができても、その中に自分に都合の良いものがあるとは限らない。つまりそれは見ることはできても、“干渉はできない”のだ。

「未来を掌握できるのならここまで俺とやり合えないはず。タキリヒメの吸収を優先にするお前は俺と無駄な戦いをしているのは、そうできないからではないか？」

「……………ふむ。」

タギツヒメは押し黙ったまま、数秒——二秒ほどではあったが、意外という反応の素振りを見せた。

「…………まさか貴様如きの人間にここまで見抜かれるとは、実に不愉快なことだ。確かに貴様を相手に少々手強いと思っていたが…………それはあくまで“手強いだけ”。我を勝てぬわけではあるまい」

「…………そうだね。俺も全然お前に勝てる気がしない。」

「では、なぜ我を抗る？やはり千鳥の娘と小烏丸の娘が貴様の戦う理由なのか」

「実はもう一人がいるけど…………まあ、最初から俺はずっとあの三人のために戦い続けてきた。今は人数が増えたけど、あの三人のためなら神でも斬る覚悟があります。」

「それが自らの死を導くとしてもか？」

「残念ながら、俺は殺されても死なぬ男だ。」

「なら、我が貴様をあの世に引導してやる」

「それはごつちのセリフだ！タギツヒメ！」

お互いがまた動き出し、戦闘を再開する時——。

「ぐっ……しつこい！」

「歩ちゃん……」

「さあ、もつとやりましょうよ。衛藤さん！」

「十条？和！今度こそ貴女を殺す！」

ガラスが割れた音が響き、数人が唐突に完全壊された自動ドアから中へと入っていた。

「どうやら、邪魔が入っていたようだ。」

「あれは……可奈美!?ここまで戦ってきたのか！」

二人は同時に動きを止めて、突然入ってきた可奈美たちの方へ注目する。

「お兄ちゃん……!?それと、あそこにいるのはー」

「タギツヒメ!?なんてここにいる！」

そして彼女たちも都の声を反応して都たちの方へ向くと、そちらもタギツヒメの姿を確認できた。

◇

一方・防衛省まで約2キロの地点ー

調査隊は荒魂を斬りながら、急ぎに可奈美たちと合流する。しかし、その途中に彼女たちは荒魂に襲われて、かなり足止めされた。

「はあ……はあ……これで最後？」

最後の荒魂を斬り払った安桜美炎は荒れた息で、調査隊のみんなに聞く。

「疲れた……防衛省に着く前に、体力使い切っちゃいそう。」

「こうも邪魔が入り続けると、たどり着けるかどうかも怪しいわね。」

そして、みんなも美炎と同じく体力がかなり消耗されている状態だ。

まあ、あれだけの荒魂の数を倒したから疲れるのもおかしくない。……だが、荒魂がこんなに湧くのは尋常ではない。

これほど量の荒魂は一体どこから湧いてきたのか……。

「これほどの荒魂がうちに襲うということは……よほど、うちらを防衛省に近づけたくないようですね。はい、水。」

「ありがとう、国頭さん。」

臨時的に調査隊に編成された国頭 与が清香に水を渡す。この中、清香は一番体力が弱そうな女の子だ。

とはいえ、彼女の実力は平城でもかなり上位の刀使い。

かつて伊豆の山で彼女は一人で仲間を守りながら、獅童と寿々花と戦った経歴があった。その戦績があつて、彼女も調査隊に所属したまま。

「流石に鬱陶しいな……。さつきと先へ行かせやがれ！」

そして、長時間で荒魂に足止めされてかなりイライラする七之里呼吹。彼女にしてはかなり珍しい態度だった……。

「あれ？ふつきー。荒魂とたくさん戦えて、喜んでいいると思つた。」

そう、彼女は荒魂と戦うのが大好き女。荒魂がいる場合、必ず遊び……退治しに行く。

おかげで彼女は鎌府ではかなり活躍を稼ぐ刀使。同じ鎌府の糸見沙耶香と実力がほぼ同等らしく、仲も良さそうに見える。

しかし、彼女はプリンと荒魂以外に興味がないゆえ、御前試合選抜戦はパスした。でなければ、今年の御前試合は彼女が必ず出るはず。

そんなところ清香とミルヤも同じだ。彼女二人も腕が優れている刀使なので、御前試合に出ればいい成績が取るはず。……けど、それぞれ個人的な理由で彼女たちは御前試合に出ることがなかった。

多分美炎以外の調査隊メンバー全員はそうだったのかもしれない。

「何を言っているんだ！みほっち（#美炎のこと）。タギツヒメが来るかもしれないんだ！雑魚を相手にするより、そっちのほうが面白そうじゃーねか！」

「ああ、そういうことか。やつぱ、ふつきーはふつきーだ。」

「そこは安心する場合なのか、安桜美炎。それより、本気にタギツヒメと戦うつもりなのですか、七之里呼吹。」

呼吹の発言に呆れたミルヤ。いくら何でも大荒魂と「遊ぶ」のは無茶すぎる話だ。

「でも南無薬師景光がいないと、タギツヒメは倒せないと思うんだけど……」

そこで清香は最も重要なことを話した。大荒魂を退治するためにかつて大荒魂を退治した御刀が必要だ。その南無薬師景光はその御刀だ。

しかし、調査隊は最後までその刀を手に入れることができなかった。

「そりや、いくらかダメージが与えりや、逃げ帰るだろ。可奈美たちも言つたらう？タギツヒメは彼女たちにより、負傷して逃げ帰ったからそれで十分じゃねーか」

「……確かに、今回の任務では護衛でしたわね。タギツヒメを撤退させれば、こちらの勝利ということ。」

「意外ですね。七之里呼吹。」

「ほらな。アタシだって、ちゃんと考えてんだよ」

自慢しているみたいにドヤ顔をする呼吹。

「ふつきーが頭を使つてる!?!」

「ただタギツヒメと遊びたいだけじゃ……」

「おーい。お前ら、あとで体育館裏な。」

そんな二人に舐められたことをムカついた呼吹。笑顔のままだけど、目が全然笑っていない。

「あはは……いつものような雰囲気ですわね。」

「そうですね。だが、これこそ私たち調査隊だ。」

「なんか面白い小隊ですね。うちもちよつと入りたくなっー誰か来るー!」

戦いが終わった後の茶番に再び楽しむ雰囲気になった調査隊の面々ですが、そこで国頭が良からぬ気配を感じて戦闘態勢に入った。

「あれー?バレた?かわいい女の子たちにサプライズにしたかっ

たのに……」

「それは残念ですね。あと一步のところにとくに一人を取れるのに……まあ、どっちにしる貴女たちをここから先に行かせはしませんけど」
声と共に、高層マンションから飛び降りた数人の集団。その全員は綾小路の制服を着ている……つまり彼女たちは噂の近衛隊に所属する冥加刀使。

「そんな……あなたたちは……」

「……………」

そして先頭にいる二人の刀使の顔を見て、同じく綾小路のミルヤと国頭は信じられない顔をしている。

その二人は元調査隊所属の山城由依と鈴木葉菜。本来ミルヤと一緒に綾小路から脱出するはずの行方不明の二人。

「でも、これもアタシたちの実力をアピールできる大チャンス！」

「そういう訳です。皆さん、お覚悟を」

二人がこう言って、何処か狂気に染まる目で調査隊に睨んで御刀を抜き出す。その後ろにいる冥加刀使も御刀を抜き出した。

それだけの動きを見ると、彼女たちが敵だと一目でわかる。そして“その意味”、ミルヤと国頭も心が痛むほど理解している。

「どうやら、うちらだけが脱出成功みたいです……ミルヤさん。」

「くっ……どうして……どうして……」

「ミルヤさん……気をしっかりしてください。もう起きたことだから」

ミルヤはとても辛い顔をしている。その顔はとても悲しくて悔やんでいる。

そして国頭もとても辛そうな顔でかつての同僚に刃を向きながら、ミルヤを慰める。

「……………」

「まさか、これって……そんな……嘘、ですよ……？」

「……信じたくないけど、どうやら現実みたい。相楽学長……、悪趣味が過ぎますよ。」

「ちえ……！」

調査隊のみんなもこのような事態もよく理解していて、同じくこのような事実を受け入れたくない辛い顔をしている。

「ねえ、二人共……その冗談をやめよう？お願いだから……、ねえ！！」

その中、最も仲間を大事にする美炎は特にそんな現実を受け入れたくなかった。昔の仲間と刃で向き合うなんて……そんなのありえない！

「そんな悲しそうな顔しないでくださいよ。せつかくの可愛い顔が台無しじゃないですか。ほくら、スマイルスマイル。」

「新しく手に入れる力を試すのに、これ以上の相手はない。僕たちは、全く運がいい。」

しかし、彼女たちから漏れた戦意が消えることなく、増したように見える。

「……由依……葉菜……」

「安桜美炎さん、戦意がないなら、後ろに下がってください。いや、戦意がない人は戦わなくていい……これはうちのミスだ。ミルヤだけを助け、他の二人を信じたうちのミスだ。」

「国頭さん……それは……」

「……相楽学長が犯した罪はうちが償うよ」

国頭が既に御刀を手に構える。彼女は今まで以上の本気さを感じた。恐らく一人で全員と戦うつもりなのでしょう。

「一人でやるの？僕たちは甘く見られましたわね。」

「うん、国頭さんはとくでも可愛いけど、ヒメに逆らうつもりなら、あたしでも手を抜きませんよ。」

「うちも……心苦しいけど、同じ綾小路出身であるうちがここで貴女たちを止める！」

「待つて！由依ちゃんも葉菜ちゃんも、正気に戻って！私たちが争う理由なんてどこにもないでしょう？」

それを止めに来た智恵。彼女も美炎と同じ、かつての仲間と戦いたくない。

「おかしいのと言いますね。理由なら、あるじゃないですか」

「タギツヒメ様は、『理想郷』を創造されるお方。それを邪魔にしようとする者は、万死に値する。」

「理想郷……?」

「嘘も偽りもないー。一切の醜さも存在しない世界だ。」

「どうせ、そこには人間も存在しないってオチなんだろう?」

「なんの問題があるんです?」ヒメが決めたことなら、それが正しいことなんですよ。」

「ちえ……正気じゃねーな、ったく。」

舌打ちをする呼吹。そういう正気がない理論上での話し合いは好まない。

「ねえ、二人とも。ホントにどうしちゃったの?……二人も消えちやうよ!死んちやうわよ!」

「安桜美炎さん……」

美炎が由依たちのことを凄く心配している。

「それもいいのよ。僕は、『偽りだらけの生き方』に疲れ果てたんですよ。嘘を嘘で塗り固めるスパイとしての生活。『本当の僕は、一体どこにいる?!』」

「鈴木さん……それがあなたがずっと隠していた悩みなのね。」

さつき彼女の口から出すのは鈴木葉菜の本心だ。

彼女はずっとスパイとしたの生活を疲れていたんだ。ずっと嘘を嘘で自分を塗り固める……そういう生活はもうどれが本物の彼女なのか、わからなくなってきた。

そういう封じていたストレスはノロの力によって増大させ、彼女はこのような欲望が暴走している。

「そんな何もない僕を近衛隊として認めてくれた。ありのままの僕を、認めてくれたんだ!」

「タギツヒメは救いの神。神のために戦える幸せを知らないなんて、可哀相。」

「救いの神って……そんな神が山城さんは、何か救われたの?」

「貴女たちに言ってもわからないから……あたしは救えない。何もできないんだ。」

「予想以上に強力な洗脳ですね……高津学長、こんな危険な産物を作っちゃって」

ブツブツと国頭は特に知っていた話を調査隊の皆に教える。

ノロの影響による洗脳能力。絶対服従、死ぬまでに戦う非人道的の実験産物。それが近衛隊が使っているやつだ。

「洗脳……なんて国頭さんがこんなことを……」

「……色々と相楽学長から聞いた。ううん、反応から覗いたのよ。」

相楽学長も結構悩んでいた。自分の生徒にこんな危ないものを使わせるのか……。

「さて、長い話をしたた気がするので、そろそろ始めましょうか？手加減なんかしたら、死んちゃうだから。真面目にやってね。ねえ、みんな？」

殺意満々の二人に対し、全員は抜刀……いや、美炎と清香以外に。彼女たち二人はまだ迷っているようだ。

「……やるしかないの？」

「向こうはやる気満々だ。それしかねーよ！」

「……」

「ちえ……！後ろにちゃんと隠れるよ！おい、国頭、チチエも手伝え！それと、ミルヤもだ。」

「私は……」

「……ミルヤ、お前は俺らの隊長なんだろう？しっかりしろ！」

「……ミルヤさん、無理は言いません。ですが、隊長である故に、やることはちゃんとやる！それが隊長としての勤めなのですよ！」

呼吹に続いて、智慧も落ち込んでいるミルヤを叱る。こういう状況こそは、ミルヤが必要だ。

敵は非常に強い……特に由依と葉菜二人の実力は綾小路の中でも優れている。そんな敵を撃破するのは戦術方面が優れているミルヤが必要だ。

今まで彼女がいるこそ、どんな状況もうまく乗り越えたから。

「隊長としての……ありがとうございます、瀬戸内智慧。それで

すね……、私はこの調査隊の隊長なので、こういう状況こそはしっかりとやらなければなりませんね。」

「ミルヤさん、指揮を頼めますか？」

「はい、もちろんです。」

智恵に答えるミルヤは前のように迷いがなく御刀を抜いた。

今度は本当に昔の仲間と戦う。心は今でも彼女たちと戦うのを迷っていて恐れているが……調査隊の隊長としての役目を果たさなければなりません。

「調査隊、戦闘開始！」

第55話：連れて戻せぬ者

―刀剣類管理局作戦指揮本部―

日々、刀使達への討伐任務を指示するこの部屋。言ってみれば、荒魂討伐においての指揮中枢にあたる。

刀剣類管理局の職員のみならず、伍箇伝各校からオペレーターとして多くの少女が派遣され、配属されている。

「市ヶ谷全域、戦闘形跡発見!」

「荒魂の出現率は普段の三倍以上に上がりました!退治するため、防衛省に駐在している八割の刀使たちが出撃しました!」

「南東の方は一般人が荒魂に追われています!至急、機動部隊のみんなさんをそちらに!」

「防衛省内、刀使たち同士の戦闘が発生!」

そして現在は、市ヶ谷に唐突発生された荒魂大量発生を対応するため、現場の刀使たちや機動隊の隊員たちに命令を下す。

「かなり大きな動きをしてみましたね。雪那。」

『うちの学長がご迷惑をおかけてしまって申し訳ございません。』

「いや、君のせいではない。ただ雪那が一般人まで巻き込むのをこつちが想定していなかったのだ。」

この指揮本部最高権力者、真庭本部長が若い歳で管理局内部に情報科を作り上げ、旧折神派を潰す作戦に大きく貢献した彼女と通話している。

こんな至急の状況なんだけど、真庭本部長は暫し現場の指揮を各オペレーターに任せた。

『それでもあの決戦の夜で彼女を見逃した罪は、やはり私が償うしか……』

「そう全責任を自分一人に押しんじやない。お前はもう十分頑張った。ここにいる皆も、調査隊の子たちもお前の独断行動に感謝してい

る。大体は、表に出せない行動なんだけど」

『そうなんですか……そう聞かれると、なんか心は少し楽になった気がします。』

「それは良かった。それより、お前は本当に行くのですか？確かに
お前は刀使で、現場に行っても問題ないと思うけど……お前が探す相
手は悪すぎたぞ」

『それでも私は皐月さんのことを連れて返す。あの人は多分覚えて
ないけど……私は彼女に救われたから刀使になったのです。』

「そうか……。お前といい、獅童と此花もいい、皐月夜見のことを妙
に拘るんだね。」

『はい。だって彼女のおかげで私はパパから、あの暗闇の世界から
離れることができた……私を普通の人間に変えたのだ。あの人。』

パソコンの通話機能の向こうにいる彼女からそう聞き、彼女の事情
を知る真庭本部長は感慨の息を吐く。

「なるほど。それじゃ、本部長の権限を持ってお前の独断行動を許
す。ただ決して無茶をするな」

『わかりました。それでは電話を切ります。そろそろここも危険に
なりますので』

「ああ、お前もよく気をつけろ。今作戦はタキリヒメを第一優先だ
けど、お前たち刀使の安全も大事だ。」

『はい、本部長。』

向こうから通信が終え、真庭本部長は暫しの間、パソコンから離れ
なかった。あの子も本来普通の刀使として生きられるのに、事情が
あつてタギツヒメとの争いに巻き込まれた。

普通に生きることは、彼女が望んだ生活だけ……今は再び日常か
ら離れた。そのことに真庭本部長は自分たちの無力に悔やんでいた。

二十年前から続いた恩怨が多数の子供たちを巻き込んだ。それが
刀使の宿命だけど、あの子達に背負わせすぎだ。

「今悔やんでも仕方ない。とりあえず、自分がやるべきことを果た
す。それがオレたちがあの子達に唯一手助けることだ。」

彼女は注意を目の前にいるモニターに戻す。そこには市ヶ谷の全

貌地図と荒魂の出現、移動場所を映っている。

ほぼ全域は荒魂の目撃情報があり、刀使たちの支援をするため、市ヶ谷付近の機動隊も出撃させた。

これほど大量な荒魂は見たことがない。もし混同学校の刀使部隊が事前に市ヶ谷に駐在しなければ危害はもつと酷くなる。

幸い、今だに現れた荒魂は中型サイズではない。そのレベルの荒魂なら刀使たちもまたまた楽に対応できる。

けど、これも時間の問題だ。

長時間の消耗戦になると、刀使たちの体力や集中力も段々と下がって、やがて戦況は不利になる。故に、今はなるべく早く無限の荒魂を生産したその源を止めなければならぬ。

(頼んだわよ……獅童、此花、竹島。皆の命がお前たちにかかるんだ)

彼女が耳や目に入れた情報を受けながら、そこで指揮能力が持つオペレーターと適切な命令を現場に下す。

今は何とか現場の刀使たちと共に、この厳しい防衛戦から乗り越える。



大量の小型荒魂の群れは高層ビルの先端を飲み込んでいたように密集で飛び回す。

その中、夜見の指示で一部の荒魂は獅童と寿々花二人に襲いかかる。

だが、二人が連携した斬撃によつて荒魂の攻勢が簡単に斬り散らされた。

「流石、此花さんと獅童さん。ですが、まだまだ終わっていません。それを見た夜見は動揺せず、続きに自分を傷つくことで荒魂を補充する。」

無限数の荒魂の自殺攻撃に、二人は軽く対応するけど、あの人……夜見に近づくことができない。

彼女が操る荒魂の個体戦力はとてもとても弱いけど、その荒魂の危険性になるのはその数である。

刀使の頂点に立つ二人でもほぼ無尽蔵量の荒魂を相手に時間がかかる。しかも全部飛行型なので、攻撃距離から逃げたら斬り払うことができない。

「クソ！このままじゃ夜見に近づくことができない！」

「昔より荒魂の数が増えてしまいましたわね……どうやら、夜見さんがさつき注入したのは親衛隊用より強力なアンプルらしい。それにしても、改めて見ると夜見さんの能力は想像以上に厄介ですわね。」

「ああ、全くだー！」

次々襲いかかる荒魂の数に獅童は寿々花の話に同意する。今まで夜見の能力はとても頼れると思ったのですが……敵になるとこんな厄介になるなんて一度も思っていなかった。

しかもこのまま僵直していると、夜見を連れて戻すところか、今近衛隊とタギツヒメと戦っている都たちの支援すらもできない。

これも夜見の狙いなんだろう……。

「これはあの方が私に授けた偉大なる力。そんな力の前に例え此花さんや獅童さんでもどうにもなりません。このまま荒魂の群れの中で永眠になりなさい。」

夜見はさらに荒魂の数を増やす。その様子だと、どうやら本気で獅童たちを潰すつもりだ。

そしてさらに追加された荒魂の量に少しだけ負担が重くなったと感じた獅童と寿々花は攻撃速度を維持しながら、この状況から乗り越えるための対策を捻る。

「寿々花、何か策があるか」

「あるなら特に実践しますわ！このッ！」

九字兼定を振り、華麗の剣法で荒魂を斬り散らす寿々花。今彼女も獅童と同じ変化がない戦況にイライラする。

いくら斬っても荒魂の数が減らない。しかもこの数の荒魂は決し

てただの自殺攻撃用ではない、毎回の攻撃は確実死角から狙う。それを防ぐためにはもう手一杯だ。

「ぐっ……！夜見はかなり本気で攻撃して来るみたいだ。……てつきり、ただの時間稼ぎだと思った。」

「そうですね。私たちの死角ばかり襲いかかるなんで！……よほど私たちのことを観察しますね。」

「ある意味は嬉しいが、今は喜ばしい状況ではないなあ！」

全力で振りかかり、獅童は一気に目の前の荒魂を斬り散らす。そこで一瞬に穴が開けたが……すぐ他の荒魂に塞げた。

「荒魂の反応速度が昔より上がった……!!？」

「はい。私はただ荒魂の力を上げるだけではありません。皆さんと離れている間、私も自分の弱点をきちんと埋めました。」

「なるほど。夜見さんもこの間に強くなりましたわね……！」

「ええ、ですのでもう無意味の抵抗はやめてください。そうすると、良い夢を見せます。」

「悪いが、お前を連れて戻すまでは倒れるわけには行かない！」

「そう。諦めが悪い人ですね。」

包囲網を解除させ、ビルを囲む荒魂は急に夜見の後ろに移動した。

「真希さん……！」

「うん、わかってる！」

それを見ていた二人はそれがチャンスだと思い、それぞれの剣技で何とか自分たちに襲った荒魂すべてを斬り伏せる。

「……何とか見えた！」

「ええ、彼女が後ろにいる海量な群れをこっちにぶん投げる前に早く彼女を倒さない！」

そんな予感を気がしてきた寿々花は最高速度の迅移で一気に夜見に近づき、この一撃で決着すると思っていたが……。

「良いご判断です、此花さん。ですが、私もただ貴女たちの後ろからじっと見つめる刀使ではありません。」

「……………ッ!？」

その一瞬、大量な荒魂が地面を破って寿々花を飲み込んだ。

「寿々花!!」

彼女が飲み込まれ、獅童は彼女の名前を叫んだ。

「事前に下に荒魂を置いて良かったです。さあ、次は貴女です。」
けど夜見はただ冷徹な声で背後にいる荒魂を指示し、獅童の方に突撃させる。

「獅子ーぐああああ!!」

技を使いできず、同じく荒魂に飲み込まれた獅童は悲鳴を出された。一体の攻撃が弱いとはいえ、これほどの数が一気に身体全体を攻撃するとその痛みは絶大。

「おわかりでしょうか?これが成長してきた私の力……いいえ、あの方が研究してきた成果です。冥加刀使……それが刀使たちの次なる段階です。」

「夜……見……さ……」

写しが剥がれ、獅童より先に倒れた寿々花。幸い写し剥がられただけで身体は無事。だけど、しばらく身動きが取れない。

「ここで貴女たちの命を取るつもりがありません。今後とも、私たち……いいえ、ヒメの邪魔に入らないでいただきたい。」

「ぐう……」

「おや、また立てられるのですか。それにしても、よほど見苦しい姿ですね。親衛隊第一席」

夜見の攻撃が終わり、獅童は傷だらけの姿で立ち続ける。親衛隊の服と普段肩に被った白いコートもボロボロになった。

その姿を見て、夜見は煽り口。

「なぜだ……夜見。お前は……僕たちの仲間ではなかったのか!」

「……何かと思えばこの質問ですか。私はただあの方に忠義を尽くす者です。誰の仲間になる覚えがありません。」

「なら……親衛隊は……お前にとっては何なんだ!僕たちと過ごす日々は……お前にとって無意味なのか!」

「……」

「答えるー!夜見!!」

感情に揺るがせ、獅童は吠えるように大きな声で夜見に質問を投げ

る。仲間のことを第一にする彼女にとって、今お互いのことを殺し合うのは間違っているんだ。

彼女はかつて親衛隊同士と過ごす日々を思い出せると、その気持ちがどんどん強くなっていく。

昔、親衛隊四人で紫様の護衛や温泉旅行、熱い風呂我慢大会、誕生日会、花見などをした。どれも大事な思い出でした。

寿々花と結芽がどう思うのは知りませんが……きつと同じ思いを持っているはず。だって、みんなは親衛隊の仲間だ。

「……愚問ですね。もちろん無意味です。親衛隊はただのお仕事。私にとって何の意味もありません。」

「……そうか。じゃ、結芽の死もお前にとって無意味なんですね?」

「……ええ。彼女はただ不運で犠牲になった実験物です。」

「……だったら、もうお前に情けは必要ないみたいだね。夜見!」怒りの声と共に、獅童は御刀を夜見に向く。彼女の瞳は赤くなっ

た。「ええ……最初はそのつもりです。敵になる以上、もうくだらない情けは必要ない。」

「真希さん! 駄目です! 夜見さんにそんな力を使ったら、もう……」両方が本気でお互いのことを潰すと感じた寿々花は悲しんでいる。

獅童と違って、彼女は仲間を傷つくことを覚悟していなかった。だって、夜見さんは――。

「――もう意味がない殺し合いをやめてください! 二人共!」

「――っ!」そんな時、唐突三人以外の声がこの場に割って入った。夜見は予想外の者が入ることに驚きながら、その声主の方向へと身体を向ける。

「貴女は本当、仲間との殺し合いを望んでいないよね。臯月さん。」

「貴方は――雅。」

「はい。お久しぶりです、臯月さん。」ピルの最高層外側の階段から登ってきた少女。彼女はずっと夜見の行方を探している元鎌府所属の管理局情報科の生徒、竹島 雅だ。



「雅、なぜ貴女はここに？」

「貴女を止めに来た。もう高津学長の命令を聞かなくてもいい。」

「そんなふざけた格好ですか？」

「ええ、友達の交渉には御刀が必要ありません。」

夜見と真正面に対峙する雅。

しかし彼女は御刀を持たず、ただ空手で荒魂を操る敵とお見合う。

「友達……私は貴女と友達ではありません。今は敵同士です。」

「それでも間に合います。今管理局に戻ってくれたら私はすべての資源を尽くして、貴女に一定の自由を与えます。」

「そんな必要ありません。私はもうそちらに戻ることができません。」

「またその忠義を尽くすということですか。あの人……高津のバアは貴女が尽くす忠義をなんでも思っていないのです！貴女もよく知っているでしょう！あの人は慈悲の心がありません！」

「それでもあの方は私が尽くす方です。あの方が望んでいるなら、私は悪魔になっても構いません。」

心の底からそう叫んだ雅ですが、彼女の声は夜見に届くことができない。

「貴女は死にますよ。このままあの人に付くと、ノロの力を使い続けると、いつか貴女は燕 結芽の末路に歩きます。」

「それでも私は自分の忠義を尽くすのみです。」

「夜見……」

「夜見さん……」

いくら言っても彼女の答えは変わらなかった。それで悲しい顔になった親衛隊の二人と雅。

もう彼女をこちらに呼び戻すことができないのかって悲しむ。

「だったら、もう口説くをやめます。武力を使っても貴女を管理局

に連れ帰ります！」

「武力？その拳で私を倒すのですか？」

「いいえ、拳だけではないですよ。」

雅はそう言ったあと、下から何かしらの雑音がしてきた。

「この音は……ヘリ？」

「はい。管理局から一時『借りた』ヘリなんです。」

「管理局から……わざわざそれを……」

「うん。許可が取れませんけど、貴女を連れて帰せますならどんな対価を払っても構いません。」

雅が呼び出したヘリがビルの最高層に登り、ヘリから強い光が彼女たちを照らす。

「ただ一台のヘリで、こんな大量な荒魂を操る私を制服すると思っ
たんですか？」

「はい。だって貴女を倒せる切り札はそこに載っていますから」

「……っ!?!」

ヘリが横に回転して、ヘリの横側には数人の男たちがロケットラン
チャーを持って、夜見たちが立つ場所に狙う。

「さあ、花火の時間ですよ！ジヨルさん。」

「まさか直接こっちに攻撃するのですか!?!」

流星の夜見もロケットランチャーを見て慌て始めた。あれに当て
られると、いくら写しがあっても身代わりが足りない。

だが、ヘリコプターに載ってる男は狙う目標を夜見から離れ、荒魂
の方に変えました。

彼らの狙いは、最初そこだった。

「まさか……!!?!」

数発のロケットランチャーが発射されて、それで上空で散らされた
大量な荒魂の群れ。その機に生まれた爆風はちょうど夜見の周りに
彼女を守った邪魔荒魂がぶっ飛んだ。

「夜見さん、これが私のやり方です！」

「……っ!?!」

夜見が爆風から反応が取り遅れた隙に、雅は誰よりも早く隠した武

器を夜見に攻撃する。

その隠し武器は電撃棒だ。

「……っ！」

「逃さないよー！」

夜見は一瞬その奇襲攻撃を避けようとしているけど、彼女は夜見の次なる行動を予測し、確実その武器を彼女に当たる。

「~~~~!!?!」

そして威力は暫く行動を失うほどの電流に調整した。

ビリビリという感触で夜見は電撃によって倒れた。夜見のコンドロールから解放された荒魂も散らされてどこかに行った。

「これで私の勝ちです。皐月さん。」

「……」

「凄い……あつという間に、あの夜見を倒した。」

「しかも御刀を使わずに倒した……」

この場にいた獅童と此花も雅の所業に驚く。まさか御刀を持ってずに元親衛隊の者を打ち倒すなんて……。

確かに彼女は小技を使ったけど、それでも夜見を倒すのは凄いことだ。

「……貴女は、昔みたいに不意の突きが好きですね。」

「それで勝てるなら刀使らしくない戦法なんでいくら出します。」

「……だから貴女はいつも立派な人間になれないよ。雅。」

「ええ……よく知ってます。」

地面に伏せられた夜見に睨まれ、雅はただ彼女が口に出した言葉を受け取る。彼女は不正当の人間だから、ずっと刀使として出世してなかった。

「これでこちらの戦いも終わった。残るのは調査隊と本命かな?と
りあえず夜見さんと親衛隊の二人を回収すー」

『依頼人!何者が地面から直接飛んできた!』

「え……?」

いよいよここでの戦闘が終わると思っていた雅ですが、ヘリコプターからの警告に彼女は一時に反応できなかった。

そして、数人がビルの下から飛び上がった冥加刀使が参りました。

「お前たちは……！」

「綾小路の……」

「親衛隊の獅童真希とかつて高津学長に噛む反逆犬か……困めえ！
奴らに皐月夜見を連れて返すんな！」

「「はい！」」

陣形を整えて、雅たちを囲む冥加刀使。

「なんで近衛隊の刀使がここに来るのよ！皐月さんは捨てられた囚
ではなかったのか！」

「ええ、その通りです。でも万が一皐月夜見が倒される場合にその
撤退に協力にしろと相楽学長からの直々のご指示です。」

「……………」

近衛隊の人がこう言ってる間、数人の隊員が一時に麻痺された夜見
を抱かえ上げた。

「ふざけんな！夜見をお前たちなんかに入れて行かせるか！」

「親衛隊の獅童真希。その調子が乗る口でいいのか？仲間の安全を
気にしなくてもいいのか？」

「……………っ!？」

「真希さん……………」

「……………チツ、こんなことになるなんて予想外だった。」

剣に向けられた寿々花と雅。二人は近衛隊に人質にされたため、獅
童と雅が連れ出す彼らも軽く手出すことができない。

「お前ら！卑怯だぞ！それでも刀使か!!」

「ヒメの理想が叶えるなら、私たちは構いません。それにあなた達
のような神を逆らう巫女は刀使ではありません。私たちこそが世界
に有意義する刀使です！」

「なんだと…?!」

「いくらなんでも詭弁過ぎます！市ヶ谷の全市民たちを巻き込んで
これが正しいと言うのですの!」

「ええ、貴女たちは所詮折神紫、政府に飼われた犬ともだ。この国を
より良くするには、神であるタギツヒメ様が必要です。あの方は今で

も我々の理想を叶えるために戦っているんだ。」

「何か……言っているんだ。こいつら。」

「これが報告通りの洗脳能力ですが……学長は本当にとんでもないやばいものを作っちゃった。」

かつての学長が作り上げた非人道的結果を見て、かつて学生の一員の雅は心が苦しむ。だって優良な鎌府の生徒たち及び彼女自身もあの女に育てられたのです。

そして彼女は罪がない綾小路の生徒たちを巻き込んで、皐月さんの忠誠を利用して、非人道的の軍隊を作った。

五ヶ月前と同じ、彼女は誰の心を理解せず、ただ大切すべき物を道具として使った。

「さあ、皐月夜見のことを大人しく私たちが回収させてもらいますわよ。」

「グッ……」

悔しい顔をし、獅童、寿々花及び雅は無力で近衛隊たちが夜見を連れされた光景を見届けた。

本来連れ帰れる者はまた遠くへ行ってしまった。

第56話：敗北と悲鳴。

「あ、ありがとうございます！何だか、あなたのことを見えた気がします！」

時は戻り、可奈美はねねのお呼びで防衛省本庁舎最深部へ行つてしまいました。そこで彼女は正体を現したタキリヒメに会えて、お互いは剣で通じ合った。

「我は、初めからここにいます。」

「そ、そうじゃなくて！ええと、ええと……何かあなたの剣は穏やかな海みたいだなあ……って」

「……海？」

可奈美が口に出した感想がわからないと頭を傾くタキリヒメ。

元々剣でどうやってわかり合えるのがわからないから、こうやって試しに彼女と立ち合うことにするのはタキリヒメの意図だ。

これもわけがあつて、彼女にこうさせたのだ。

「はい！大きくて広くて、何もかも受け入れるような感覚です！上手く言えないけど……それこそ、人間も荒魂も受け入れる海！……っていう感じ」

「……ふう。」

「あ、あの……、タキリヒメさん！私の剣は……私はどんな風に見えますか？」

少しわくわく期待している表情をしていた可奈美。彼女もタキリヒメと同じ自分がどんな風に見えたのを気にしている。

正直、彼女のことは今でもよくわからない。だけど彼女から、確かに何かの可能性を感じた。

「千鳥の娘。そうだね、貴様は――」



夜、七時四十五分。

市ヶ谷襲撃が起きてから、もう半時刻以上に過ぎ、各地で奮戦していた刀使たちのおかげ、荒魂による被害は何とか最小限までに抑えた。

加えて皐月夜見の撃退により、戦況も少々好転になった。

けど、防衛省内部は近衛隊の突撃によって酷い被害が出来ていてしまった。

刀使だけではなく、自衛隊の隊員たちも酷く斬られて、いつも命が落とされそうな危険性がある。

どっちか勝つても、管理局は間違いなく社会に責任を問われるのだろう。けど、その前に彼女たちの戦いがまだまだ続いていく。

―織田防衛省 本庁舎―

「なんてタギツヒメがこの中にいる!」

? 和から迫ってくる質問。

なぜなら、彼女たちはずっと正門で近衛隊の人たちと戦っていた。タギツヒメがこの中に入れる隙間がないはずだ。

「都くんはタギツヒメと……戦っている?」

「おい、都! 無事か?」

「ミヤミヤ、大丈夫デスカ!」

「都……!」

そして、薫たちはすぐ都へ心配をかけた。

彼はタギツヒメと剣でお互いに向き合ってる。つまりこの二人は今戦っているに違いない。

「俺は大丈夫だ! そっちの戦闘はまだ終わってないのか!」

「無茶を言うな! この人たちは滅茶苦茶しぶといのよ!」

「そうデース！とてもしぶとくて、ずっと決着をつけられないのデース。」

そこまで強いのか……近衛隊は。

「都はタギツヒメと戦っている。すぐ助けに……うっ！」

「ヒメのところに行かせません！」

沙耶香が迅移で都のそばに行くとき、彼女の相手に止められた。幸い沙耶香はその攻撃を防げた。

「こつちもだよ。ヒメの邪魔にさせません！」

近衛隊全員は同じことを言つて、可奈美たちの足を止めさせた。

「歩ちゃん！行かせて！私はお兄ちゃんを助きたい！」

「駄目です。衛藤さんはずっと私と手合わせしなきゃ！もつと衛藤さんの強さを私に見せてください！」

「歩ちゃん……」

可奈美は悲しげな顔で歩つていう女の子を見る。どうやら彼女と知り合いのようだ。

「どうやら、邪魔が入れないようだな。またやるつもりか、衛藤都」

「ああ……そのつもりだ。」

「ふん、これは貴様の返事か……良からう」

可奈美たちの介入が不可能だと知り、タギツヒメと都はそれぞれの構えを取る。

「お兄ちゃん！」

「おい！都！」

「都くん！」

「チエ……！」

「ミヤミヤ……！」

「……！」

都が一人でタギツヒメと戦う姿を見て、全員は彼のことを凄く心配している。

あれほど恐ろしい敵は、彼一人では太刀打ちできない。彼自身や彼女たちもよくわかっている。

このままじゃ、都がいずれタギツヒメに殺される。

「さあ、行くぞ」

「……………」

二人は同時に迅移を使い、お互いに刀で斬り合う。その時――

「久しいな、タギツヒメ。」

一つの声で、タギツヒメの方は急に後方へと跳躍し、都との距離を開けた。

「え……………」

タギツヒメの唐突の動きに一時におかしいと思った都。そこで、かなり距離を開けたタギツヒメは口角を上げて笑った。

「まさか自ら迎えするとは……………驚いたぞ。我が分け身よ。」

「タキリヒメ！」

タギツヒメの次に可奈美が驚いた声を上げた。その口に出された名前は最近聞き慣れた名前だ。

タキリヒメ……………!?なんでこんな場所に！

都が視線をタキリヒメらしい人物の方へ向くと、そちらにいるのはイチキシマヒメと同じ真っ白の女性だ。

しかし彼女と違い、外観は大人っぽい女性だ。……………というか、外見は折神紫とちよつと似てる。

「……………」

この人がタキリヒメ……………?意外に美人スタイルだな。

「……………」

「……………?」

なんか、さつきタキリヒメが一瞬でこつちを見て笑った気がしてきた。いや……………気のせいなのかな?

「……………」

「……………っ！」

タギツヒメの方向にタキリヒメは突然迅移を使い、タギツヒメに強力な突刺攻撃で彼女の身体を貫く。

「これが貴様の答えか……………」

しかし、タギツヒメはただ平然そうな表情で自分を貫くタキリヒメ

にこう応じる。

「人の可能性……失うには惜しいと判断したまで」

「愚か！」

一旦距離を離れ、二人の大荒魂がそのまま対戦し始めた。

「これはどういうこと……なんで、いきなり戦い始めた？」

二人の唐突の対戦で一時に呆れた都。そして可奈美たちもそんな二人の戦いにただ見るしかない。

「……………」

「……………」

「……………っ！」

しかし、時間が経てば経つほど、タキリヒメがどんどん劣勢になっていく。

最初、両方が互角に戦っていたのですが、タキリヒメはなぜかタギツヒメに抑えられている。これはお互いのノロの量の差なのか？それとも別の理由？

「タキリヒメ！」

「はあ！」

可奈美がタキリヒメを助けようとした時、歩はそんな可奈美を止めさせた。

「どいて、歩ちゃん！」

「やっと一緒に戦えるんですよ？衛藤さんの剣に、私、やっと届いたのですよー！」

「ぐっ……………！歩ちゃん……………」

「さあ、もつと戦いましょう！衛藤さん！」

彼女は狂気になる程の執着に可奈美はとても悲しい表情。こんなの、可奈美が知る自分を憧れている内里 歩じゃない。

「おい！邪魔するではない！」

「行かせませんよ〜十条？和。貴女の相手は私だけなんだから！」

「……………」

そして可奈美だけではなく、みんなも近衛隊の人たちに足止めされ

た。

現場に唯一動けるのは都だけだった……。

「……………クソ！」

迅移を使い、都は両手が斬り落とされたタキリヒメに助太刀をす
る。

「はあ!!」

刀と刀とぶつけ合う綺麗な音が響く。都はタキリヒメがタギツヒ
メに刺される前にタギツヒメを斬る。

「衛藤 都……………なんて……………」

「また貴様か……………我の間を邪魔するではない！」

「悪い。タキリヒメを守るのは俺の任務なんですから！少し付き合
え！この野郎！」

いくつかの御刀と御刀がぶつけ合う音が響き。都は再びタギツヒ
メと再戦する。

彼女の動きを最大限までに読んで予測する。そこで対応によつて
流派を切り替える！

「はあ！」

「ちえ……………」

都の斬撃を避けたタギツヒメは彼の隙を見つけ、そこに突刺すると
彼は再びタイ捨流を応用して攻撃の軌跡を変える。

だが、そこでタギツヒメはもう一振りの攻撃をする。

「……………ぐっ！」

しかし彼はその攻撃を避けて、素手でタギツヒメの左腕を強く叩
く。彼女の御刀はそのまま叩き落とされた。

「はあ！」

「ちえ……………」

一瞬、隙がバラされたタギツヒメに刀を振り下ろす。
そこで彼女は迅移で後ろへと回避する。

「貴様は実に目障りの虫だ。何度も何度も人間の分際で我に命の危
機を感じさせた。」

タギツヒメはこう言いながら、落ちた御刀を隠世から再召喚する。

流石に反則だな……あれは。

にしても、さっきの一瞬の連鎖の動きだけでかなりの集中力を使っちゃった……。でも未来視から逃れるためなら、これくらいの消？が必要だ。

「あはは、……だから、言つたろう？未来視は弱点があるんだ。お前は万能の神ではない。」

「…………千鳥と小鳥丸以外の最大の脅威か。認めよ、貴様は早めに排除すべき虫だ！」

「…………っ！」

都を脅威だと見た彼女がもつと高段階の迅移で都を一瞬に近づいて、そのままに斬る。

都も迅移で回避するところだが……。

「ぐっ…………！」

斬られた。

彼女の迅移はこつちより早く…………ううん、都が使った迅移はあくまで最低段階の迅移だ。

迅移の加速は写しが貼る状態で迅移を段階的に加速するもの。しかし、都は写しを一時しか使わないものだから、使う迅移は第一段階に止まった。

故に速度的には、都が負けた。

「うぐっ…………！」

幸い、写しが貼っているから剥がれただけで肉体に何の影響もなかった。

でも剥がれた副作用が大きく、彼は一時に力を失われて後ろに転んでしまった。

「さあ、終わりにしよう」

上段切りの構え、タギツヒメはさつき言つたとおりに都を斬り殺そうとする。

「ぐっ…………！」

身体を動かそうとするが、身体が動けない…………！写しが剥がれた影響か！

「お兄ちゃん！」

「「都！」」（？和、沙耶香、薫）

「都くん！」

「ミヤミヤ！」

みんなが心配する声を聞こえた。

可奈美たちが動けなくなる都を心配しながら、近衛隊の攻撃を耐え続ける。

特に可奈美と舞衣は泣き出しそうな声で、聞いただけで心がとても痛い。

ぐっ……………！ここまでか……………！

「ーごめん、みんな……………！ごめん、可奈美、舞衣ちゃん、そして？
和！」

心の中で最も大切な三人に謝って、都は自分に襲ってきた無情の刃に大傷が負われる覚悟ができた。

しかし、そこでとある人影が刃と都の間に介入して、都を庇う形でタギツヒメの斬撃を受け取った。

「え……………？」

「ほう……………」

予測外の介入に都、及びタギツヒメもかなり驚いた反応。…………いや、この場にいる可奈美たちもあの人が都を庇うなんて思わなかった。

「本来であれば、我らの間には差がない。だが、人如きを必要とした貴様と、不要とした我……………それがこの結果だ。『タキリヒメ』。』

「……………」

都を庇う白い女性、タキリヒメは致命傷を負った。彼女は都を庇う形でタギツヒメを睨む。

「な……………なんて……………」

タキリヒメの後ろ姿を見て、都は震えた唇で彼女に訊く。彼は彼女が自分を庇うのを予想しなかった。

なんて俺を庇うの……………？そんな理由がなかったはず。なんて？

「……………無事か？」

「え…………？」

一瞬、彼女からかけてきた関心の言葉を理解できなかった都は、すぐ答えていなかった。

「くはっ…………!!」

次の瞬間、彼女の身体がタギツヒメの無情の御刀に貫かれた。

「あ……………」

彼女が貫かれたと共に、思わず驚愕の声を上げた。

「さあ、我が身へと還れ」

彼女がこう言つて、タキリヒメと接吻という行為を行う。しかし、それは決して人が知る接吻ではない。

恐らくこれは吸収なのでしょう…………。

「……………ふっ」

接吻行為が終え、タギツヒメはタキリヒメを貫く刃を抜き、彼女の顔面にさらに一閃で斬る。

「タキリヒメ！」

彼女が無力で地面に倒れた光景を見て、俺はやっと反応を取り戻して急ぎに弱き彼女を抱きつく。

そしてさっきの斬撃によって、彼女の顔面につけた仮面も崩れて彼女の素顔はやっと見れた。

「ああ…………そんな顔をしていたのか、若き鳥よ。」

「タキリヒメ…………！」

都はとても悲しそうな顔でタキリヒメに向く。彼女の身体を支える手も震えている。

これは二度目…………ううん、 “三度目”。人が自分の前に死ぬのを…………。

「どこまでも…………飛ぶ姿が見えた…………」

彼女が悲しむ都の顔を見て、さっき見た光景を呟く。

彼は千鳥の娘と同じように、空へ高く飛ぶ鳥。

さつきタギツヒメとの戦いを見届けたタキリヒメは、都から人という新たな可能性を見つけた。

神すらも恐れず、さらなる高みへと飛ぶ鳥。それがタキリヒメが衛

藤兄妹から見出した人という新たな可能性だ。

だから、彼が斬られるときに彼を守ろうとした。彼ならこの先にもっと飛べるよう、彼女はそう信じて自己犠牲した。

「人よ、飛べ……速く……高く……遠く……」

最後の言葉と共に、彼女は光の粒となり、身体が消えていた。

「……………っ！」

手から感じた彼女の重量感が感じなくなり、都は再び喪失感という感覚を覚えてた。

別にタキリヒメと仲良くわけじゃない。けど、すごく……悲しい。人の命がなくなるのを感じた一瞬、何かを失う感覚はとても悲しくて怖い。

お母さんも自分の前に亡くなって動けなくなった。その日以来、俺は何かを失うことにずっと恐れていた。

だから可奈美たちと結芽のことをそんな一生懸命していた。ずっと何かを失われぬように命を懸けた。

「タキリヒメ……………」

口から漏れたのは彼女の名前。

ほぼ全員……ううん、可奈美たちもタキリヒメのことを何となく悲しいという気持ちになった。

彼女は都を救ってから亡くなった。ある意味で彼女はいいことをしたから、最後の死に方はとても有意義でした。

「心地良し。」

そこで彼女を殺したタギツヒメは今の空気を読めずに取り戻した力を楽しんでいる。

「そんなやり取りを取る彼女はどうしても許さない」。

「……………タギツヒメ……………」

「……………タキリヒメの仇を討つのか？それは無理だ。我はもう半分の力を取り戻した。」

立ち上がって、構えを取る都にタギツヒメは舐めた口でこう言う。

今のタギツヒメは自分のことを無敵の神だと思っていた。

しかし、都はそれを冷静に思考する余裕がなくなった。彼は怒りによって理性が完全に消えなくなった。

自分の前に彼女の命を奪うタギツヒメのことが断じて許さない。

周りの？和たちの警告も聞こえなくなる。今、考えられるのはタギツヒメを斬るのみ。

「タギツヒメー！！！！」

迅移を使い、都は自分の全力を持ってタギツヒメへ最強の一閃を放つ。

「愚か……死ね。」

「ごっ……がはっ……」

しかし、神の前に何もかも無意味であった。

いくら努力しても、いくら強くなっても、いくら自らの限界を超えようとしても……あの神の前では全てが無意味と化した。

大量な赤い鮮血と共に都は糸が切られた人形みたいに地面に倒れた。

赤い鮮血が喉からせり上がって口から吐き出される。

彼を中心に彼の血が床に流れ広げる。

「おに………ちゃ………ん？」

「み………や………こ………くん？」

「………」

「ああああ………！！」

「………都………おい！嘘だろ！」

「………ミヤミヤ………！！」

それと共に起きるのは――。

「いやああああー！！」

少女たちの悲鳴と絶望だ。

第57話：古き約束

「さて、邪魔虫もいなくなった。次はお前たちだ。」

御刀を大きく振って、その上についた血を振り落とすタギツヒメ。彼女は彼を斬り殺した後、次の標的を可奈美たちに決めた。

「お兄ちゃん……そんな……」

血泊に倒れていた都を見て、可奈美の精神がすり減らしていき、遂には嗚咽混じりに声を上げ、止めとこなく涙が溢れさせ、心が張り裂けていった。

結局、彼女は何もできなかった――。

一度も大好きなお兄ちゃんを守れなかった。彼に伝えたいことも、感謝の意も、何も伝えなかった。

自分とお兄ちゃんなら、どんな困難でも乗り越えられるという考え方が甘かった。

お兄ちゃんは死なない、当たり前のように自分のそばにしていると勝手にそう思っていた。

本当に甘かった……衛藤可奈美という女の子は本当に甘くて馬鹿な小娘だ。

そんなだから、大好きな彼は自分の前に命が奪われた。そして、自分は永遠に彼という兄を失った。

可奈美は力が抜け、ただ膝を地面につけて咽び泣いていた。

「都くん……うう……」

舞衣も同じく膝が崩れて咽び泣いた。

大好きな人が死んだ。

自分が彼を守れなかった。

心の中で彼を守ると誓ったのに……まだ自分の気持ちを彼に伝えていないのに……どうしてこんな結果になってしまった。

「……なんて……なんて……お前も！」

可奈美と同じ、自分の考えの甘さにすごく後悔していた？和。こういう結果は特に予測がついたのに……それでも彼が死なないと信じ続けていた。

だって、彼は御前試合の日からずっと危険を犯して彼女を助けた。あの決戦の夜もただ一人で自分を助け、折神紫に取り憑いたタギツヒメと戦った。

自分が迷った時も、自分の迷いを振り払うように優しく自分の道を示していた。

いつの間にか、?和は彼のことを頼ってしまった。彼がそばにいと、不思議と安心する。

だがその甘えた結果、彼は死んだ。

もし自分が彼をこっちの世界に迎え入れなかったら、彼がこういう結末になれないはず。

母と同じ、彼は大荒魂に命が奪われた。

許せない……よくも私のそばから最も大事な二人を奪った！

許せない！絶対に許せない！！

「おい！ペツタン女！何をやる気だ！」

?和がタギツヒメに向かい、突刺の構えをする様子に薫は嫌な予感がする。

きつと彼女は都の仇を取るつもりだ。

「ヒョヨン、やるのデスカ？」

「ああ……私はタギツヒメを殺す！都の仇を取る！」

「?和ちゃん……私も一緒にいい？私もお兄ちゃんの仇を取りたい」

大切なものが奪われた可奈美は、?和の行動に賛同する。

「おい！可奈美！正気か!?あいつは前より強くなったのよ！気持ちちがすぐくわかるけど、落ち着け！」

?和の話聞いた可奈美は泣くのをやめて、同じ御刀をタギツヒメに向かう。今はとても悲しいけど、タギツヒメに復讐する気持ちの方が強かった。

彼女はお兄ちゃんを自分のそばから奪ったタギツヒメのことを許せない。もちろん、タキリヒメの分の気持ちも含めている。

けど、何より大好きな人が殺された怒りはこの年頃の女の子にとって簡単に操るものじゃなかった。元々彼女たちは薫のような特に世

間に洗練された内が大人ぽくじゃなかった。

「舞衣！彼女たちを止めろ！このままじゃ死に損ー」

「二人だけに任せられない。私も都くんの仇を取ります。」

「なー！？」

可奈美と？和に感化されたのか、或いは都が殺された怒りなのか、舞衣も徐々に正気を失って、二人の提案に賛同した。

「舞衣……………」

沙耶香は怒りに取り憑かれた舞衣を見て、悲しい顔になっている。都を失ったことで彼女の胸もとても痛くて仕方ない。けど、舞衣はきつともっと悲しい。だから彼の仇を取ることに沙耶香は止められない。

「薫、ごめんなさい。ワタシもカナミンたちを放っておけないのデス。」

「エレン…………お前……………」

そしてエレンは可奈美たちだけに任せられなく、タギツヒメに刀を向けた。彼女はあくまで可奈美たちに死なせたくないから、できる限り彼女たちの勝算を増やしたいということ。

もちろん、彼女の瞳から涙らしいものが見えた。彼女も都のことに泣いていた。

「クソたれか！」

薫はなぜかこっちに動きがない近衛隊のことを無視して、可奈美たちと共に戦うことを選んだ。例えば都の仇を取れなくても、せめて可奈美たちの生還率を上げりたい。

あいつが最も大切にして三人を守るのは自分…………うん、あいつの友達とした最後の義務だ。

「私もやる！舞衣を一人にしない！」

「沙耶香ちゃん。ありがとう。」

舞衣が沙耶香も都の仇を取りたいから、仲間入れると思っていて彼女に感謝する。が、沙耶香はただ薫とエレンと同じ、舞衣たちだけをあの化物と戦わせたくない。

「……………これは面白い。お前たち、手を出すじゃない。彼女たちは

我の力を試す獲物だ。」

「はい！」

近衛隊はタギツヒメの命令を聞いて、全員は出口の方に移動し、逃亡ルートを封鎖する。

「さあ、あの夜の再戦を始めようか」

「貴女を殺す！」

「今度こそ、お前を殺す！」

「都くんの仇を！」

可奈美たちは一気にタギツヒメを攻めていく。六人は成長していた実力と息が合わせた完璧の連携攻撃でタギツヒメを攻撃する。

しかし――。

「うっ……………」

「ぐっ……………かあ！」

「ぐっ……………」

「……………やあつ！」

「がっ……………」

「がはあ……………」

タギツヒメはただ一瞬で圧倒的な力で六人を瞬殺した。

「ふむ……………なかなか馴染むな」

自分の圧倒的な実力さに満足しそうなタギツヒメ。彼女は以前より遙かに強くなった。

「クソ……………何なの、この強さは！」

「鎌倉の夜より遙かに……………」

「S装備を装着したとはいえ、全く歯が立たなかった……………」

「バケモンすぎだろ……………」

「カナミンとヒヨヨンも倒された……………うっ、写しはもう……………」

地面に倒れていた六人。彼女たちはタギツヒメの動きを全く見えなかった。ううん、対応ができなかった。

「あははは！刀使たちよ、この愚かな男の仇を討てなかったことに悔しかろう？すまぬ、我は強すぎた」

自分の強さに自慢するタギツヒメ。彼女は恐れるものがない

なったことに喜んでいる。

「クソ……！」

ほぼ全員はタギツヒメのでかくなつた態度にむかついた。そして？和、舞衣、可奈美たち三人は特に悔しかった。

都の仇を討てなかつたことに彼女たちは自分の弱さに憎んでいる。

「彼女たちが弱いから、都は殺された」。

お兄ちゃん……私はやはり何もできない妹です。お兄ちゃんの仇さえも討てなかつたなんで……私って本当に駄目な妹です。

小さい頃からずつとお兄ちゃんの後ろに隠れていて、お兄ちゃんに守られたばかり。私、何一つもお兄ちゃんにしてあげられなかつた！

何か大荒魂を倒した英雄よ！自分の家族さえも守られなかつた私は英雄に名乗る資格がない！

結局、私の剣はお兄ちゃんに越えられなかつた。

「私は彼に甘えすぎたのだ」。

「さて……我に刃向かう羽虫どもをいかに潰してやるか」

「………ねっ！」

薫たちに一歩一歩つと近づくとタギツヒメ。彼女はそろそろ目障りの薫たちを排除しようとする。

そして現場でタキリヒメの指示で姿を隠していたねねは都を殺したタギツヒメが今度薫たちの方に歩く姿を見て、古い記憶が記憶の奥から再び浮かび上げた。

——あれは奇跡とも言える、人との古い約束だった。

◇

時、遙か400年ほど前。

我々は人によつて母と強制的に分離されたいらない子達。

捨てられた我々は本能的に集結し、融合する。やがて、我々はさらなるの知能と力を得た。

その時、体内に生み出されたのは人への憎しみ、憎悪、怒りという感情だった。そんな感情に支配された我々は人への復讐を選んだ。里を焼き尽くし、視界に入れた人間を殺す。ただいたずら大暴れる。

これは我々を無理矢理母から離させる悪人たちへの報いだ。精々後悔するがいい、死んでもらうといい！

「グオオオオオオオー!!」

大型荒魂からの咆哮。その咆哮に含めるのは人類への憎悪と怒りだ。

「ふん、派手にやってくれるじゃねーか。荒魂野郎。」

そんな巨大な怪物の前に巫女服の女性が恐れずに超でかい刀を持って怪物の前に現れた。

彼女の名前は益子玲子。代々この地を守る益子家の現当主である。

「益子の縄張りで、でけえツラしてんじゃねぞ、荒魂野郎！どおりやああああああつー！」

「グオオオオオオオオー!!」

我々を殺すための巫女か。我々の復讐に邪魔すんじゃねー！

双方が戦い始め。この対決は数十分以上に続けた。

やがて、荒魂の腹が御刀に刺されて重傷を受けた。

そして刀使の方は少し疲れただけ。武器が手にない以上、荒魂に反抗する力がないはず。

この機に荒魂は玲子を攻撃するつもりですが、御刀に刺された影響が大きくて、しばらく身動きが取れない。

ここまでか……我々はここで消滅されるのか？

既に結果を見てしまった荒魂は生きる希望を捨てた。動けない自分に対し、また動ける相手にどうしようもない。

故に荒魂は大人しく自らの死を待つ。

「はあ……はあ……荒魂のくせに、手こずらせやがって……。ふ

ふっ……暴れたきや相手になつてやるからよ。」

「ねー……………」

「……………また、やろーぜ？」

しかし、玲子は笑顔でねねに友好の手を差し伸べた。

この人間、何言つてんだ？我々を殺せぬか？

「さあ、御刀を返せ。お前も疲れたろ？とつと山へと戻りな」

「ねー……………」

「またやりたいなら、オレとやろう？いつでも相手をしてやるから」
彼女がこう言つて、荒魂の腹に刺さる御刀を抜き出す。その後、彼女は自分を殺せずに自分を見逃した。

なぜ彼女は人類の敵である自分たちを見逃していたのかわからな
いけど、我々に傷を癒やしす時間をくれたのがありがたいことだ。

それ以後、その荒魂は毎度に傷を癒やして人の里に降りて里のこ
とを襲撃する。そのたびに彼女及び彼女の子孫たちと殺し合い続け
てきて、それから数百年の歳月があつという間に過ぎてしまった。

いつの間に荒魂は彼女たちとただの殺し合う敵関係じゃなくなつ
た。我々はライバルであり、友達であり、やがて我々は彼女たちと家
族になりました。

同じ屋根下で暮らしたり、昼寝にしたり、食事をしたり、お風呂に
したり、遊ぶなど荒魂にとつてありえない生活ですが……我々はとて
も「楽しかった」。

「ねー！」

「どう？美味しい？」

「ねー！」

「そうか、いい子だね。ねねは」

「ねねっ！」

いつの間に荒魂の体内に存在していた穢れが消えされ、本来持つべ
く知能も何処かに消えた。こうして荒魂はねねという知能と元の自
我がない無害な荒魂になった。

自我がなくなつたけど、これでこの人たちと未永く暮らせられる。
これはねねという荒魂の選択だ。

人と暮らせるために、ねねは荒魂をやめた。ペットになってもいい、この人たちと一緒にいられるならそれでいい。

「ねね、数カ月後に私の娘もこの家に誕生されます。小さい私を守るように、あの子も守ってね。」

「ねっねっ、ねね！」

まるで私に任せようと示す自分の胸を叩くねね。そんな小さいな守護獣に益子の刀使は優しく微笑んでねねの頭を撫でる。

「じゃ、任せだよ。小さい騎士（ナイト）さん。」

それから数カ月後、益子家は新たな子供が生まれた。彼女の泣き声はとても大きくて、ねねはすぐ心配で彼女のそばに行く。

「ねね！ねね！」

「ああ……？」

「ねね！」

――泣かないで、私がそばに付いていくから、もう泣かないで。つとねねがベットにいる赤ちゃんにそう言った。

「あはっ、はははははっ」

やがて、彼女は安心したように笑う。

そんな笑顔、ねねはもうたくさん見てました。この者たちの笑顔をみると、ねねも嬉しくなる。

ここから先、長くでもこの者たちの笑顔を守り続ける。だって、自分には彼女たちの守護獣なんだから。

――だから、死なせない。

例え元の化物の姿に戻っても、この者たち………薫を守る。

そう決意し、ねねは体内に消えたはずの穢れを呼び帰る。再び災厄の獣の姿に返った。



時に戻り。現在――

「グオオオオオオオー!!」

咆哮と共に、ねねは元の荒魂姿を取り戻した。

「ホお……これはタキリヒメ記憶にあつたあれか……」

少し驚いたタギツヒメは冷静な態度でねねの方に見る。まさか、これほどの荒魂が人に飼われるとは……。

「グオオオオオオオー!!」

「大型だど!?みんな、気をつけーひゃああアア!!」

しつぽで近衛隊たちが一掃されて、写しも剥がれた。

「ねねちゃん……」

「ねね……」

可奈美たちは信じられない顔で怪物になったねねの方を見つめていた。あんなに可愛く小さいねねがあんな禍々しい姿になるなんて……。

「グオオオオオオオー!!」

「ふん、我を抗るのか?」

ねねの一撃を軽く防ぎ止めたタギツヒメ。彼女にとってこれくらいの攻撃は大した程度ではない。

故に、タギツヒメはねねの攻撃を弾けて、一旦距離を取る。

しかし、ねねは攻撃を中断せずにあらずらタギツヒメを攻撃する。

「生意気な荒魂よ。誰か主人なのか、教えてやる!」

ねねの攻撃を躲して、神速で何度もねねの身体を斬り刻む。

「グオオオオオオオー!!」

ねねの叫びは痛みによって辛そうに聞こえた。ねねは一方的にタギツヒメに何度も斬られた。

「おい……やめろ……!」

その光景を目に焼き付く薫は、これ以上ねねが傷つけられることに耐えられない。

これ以上ねねを傷つけないで!お願いだから!やめろ!!

「グオオオオオオオー!!」

「まだ倒れないのか。あの愚かな男と同じ痛みが知れず愚かな荒魂よ！」

再び痛みで叫んだねね。ねねの苦しそうな姿を見て、この場にいる可奈美たちも心が辛く願う。

「もうこれ以上、ねねを傷つけないで、もう戦わないでと願っていた彼女たち。」

やがて、ねねは力尽きで倒れた。

タギツヒメも攻撃を止めて、ボロボロになったねねの頭を踏んで嘲笑う。

「所詮この程度の荒魂……。だが、主である我の前ではすべてが無駄だ。ペットはペットらしく我の前に平伏せ」

「ねー……………」

「ねねちゃん……………」

「ねね……………」

ねねがタギツヒメに踏まれて、可奈美たちはもちろんそんな行為をするタギツヒメを許さない。

しかし、身体が動けない以上、助けはできない。例え止めに行くとしても、ただやられる一方だ。

「さて、我が元に戻れ。我に不従する者には用がない。」

そう言つて、タギツヒメはねねからノ口を奪おうとする。

「おい……………やめろ……………!!」

その光景を見て、大きく叫ぶ薫。

しかし、タギツヒメはそんな彼女の声を無視して、ねねからノ口を奪おうとする。

「……………俺のそばからあいつを奪わないで……………!お願い!ねねを……………見逃して……………!」

心の底からそうお願いする薫。彼女は嗚咽混じりに声を上げ、止めとこなく涙がボコボコと地面に落ちた。

彼女はねねという大切なペットを失いたくない。ねねは小さい頃からずっと自分を守ってくれた初めての友達、家族なんだから。

だから薫は何度も叫んで願っていた。

誰かねねを助けて！誰でもいいから、あの子を守ってくれ！

――そして、その願いは確かに「誰か」に届いた。

第58話：覚醒

九年前――

「むくくまた負けた!」

家の小さいの庭でほっぺを膨らんで、都はまた母に負けたことで拗ねている。

いくら母の技をコピーしても、母から一本を取れない。毎日はあるなりに頑張っているのに……。

「ふふっ、師匠から一本を取れるなんて甘い考えだね。」

「くぬぬ」

「にい! つぎはかなみのばん!」

さつきまでずっと観戦していた衛藤家の可愛い妹担当の可奈美は兄が負けたのを見て、すぐ木の剣を持ってきた。

この時の可奈美はまた五歳。お母さんの教えの下、彼女は兄のような剣術バカになりました。

「ぐぬぬ……」

都はまた拗ねているが、最後は大人しく妹に母との稽古権を譲れた。

元々交替制で母と稽古すると約束したから。

そしてまた幼い可奈美と交代した都を見て、美奈都は微笑む。いつも幼い妹に優しくする息子は美奈都の誇れだ。

「さあ、次は可奈美だね? よし、かかってこい!」

「はあー!」

都が退場した後、美奈都と可奈美は早速手合わせをする。もちろん身長差と体力の差があるから、美奈都も手抜いて可奈美の攻撃を次々と解かす。

もはや子供対大人……いや、実際にそうでした。

「お疲れ、都。」

「お父さん! 聞いてよ! またお母さんに負けた!」

お父さんの隣に座って、都は早速自分のパパに文句を言う。

「それは気の毒ね。お母さんは若い時……いや、今も若い。とにかく、とても強いのです!! お父さんも一度も彼女から勝ってなかった。」

「お父さんはお母さんに勝負を?」

「うん。こう見てないでお父さんは学生の時、よくお母さんと手合わせしたの。同じ流派だしな……」

昔話を語って、都のお父さんは都に氷水を渡す。今頃は夏だし、こういう天気には水分の補給は大事。熱中症で死ぬ人もたくさんいるし、そこはちゃんと注意しないと。

「あの頃のお母さんは滅茶苦茶強くて、勝負に拘る私はずっと彼女に何度も挑戦していたが……ずっと負けばなし。……正直悔しかった。」

「お父さんでもお母さんに勝てないの……?」

「うん……恥ずかしいですが、お母さんの前にお父さんはずっと負けたままで。先にお母さんに恋を落ちたのもこっちの方だし。」

そう言つて、お父さんは少し照れくさい顔をする。正直気持ち悪いが、お母さんのことを真剣に愛するお父さんが嫌いではない。

「それで、お母さんに恋した私は卒業前、彼女に最後の挑戦を挑んだ。が、結局ボコボコされた一方だ。」

「うええ……」

お母さんの強さにまたキモく感じた都はそれらしい顔をした。お母さんは何もかも強すぎた。

「でも、その戦いの末に私はあることを悟った。ねえ、剣の最高の境界って、どうやって辿り着くか知ってる?」

「えっと……えっと……わかんない!」

お父さんから投げつけられた質問に都が悩む顔をしているが、最後は誠実にわからないと答えた。

まあ、この年頃の子供たちに剣の最高の境界を聞いても、わからせるのも無理の話だ。特に都と可奈美はまだまだ幼い子供だ。

「剣心一如。剣は人なり、剣は心なり。人の心と剣は、同じもの。剣は人の心によって動くものである。それを悟れば、己の剣をさらに高

く上の段階に行く」

「えつと……えと？」

頭を傾く、都はお父さんの言っていることをさっぱりわからない反応。

「アハハ、理解するにはまだまだ早いかもしれないね。でも剣の道を歩き続いたら、いずれわかる時が来るだろう」

都の頭を優しく撫でるお父さん。彼は自分の息子もいつかあの境地へ辿り着くのを楽しみしている。

何せ、都は彼と美奈都の子供だから、きつといつか悟るだろ。

「ま〜〜け〜〜た〜!!」

遠くて可奈美の負ける声が聞こえた。今日もお母さんにボコボコされたのね。

「……………」

「もう行くのか？」

「うん、かなみを慰めた後に私の番だ。そして、日が沈むまでにやるのです！」

そう言つて、都は急ぎに可奈美の方へ兄らしく妹を甘やかす。可奈美が誕生した後、都はずっと妹の可奈美を大事していた。

まあ、時々剣で妹をいじめめるのですが……それでも兄妹の仲がとても良くて、見ただけで微笑ましい。

「きつと辿り着くのよ……『ゼロの境界』に」

自分の子供を見守るお父さんはそう呟いて、あの日のことを思い返す。

「守りたいものがあつたこそ、人が強くなる。私も剣以外にすべてを失った美奈都を救いたくて、彼女に挑戦してプロポーズをした。」

都に言えなかったのは、自分が実は美奈都から一本を取れたこと。

……いや、あの時は運が良かっただけだ。

ただいたずら彼女の心を救いたくて、自らの意識を無にする。そこで何となく彼女に当たることができた。

本当に奇跡のような一時だった。

◇

剣心一如……昔、お父さんが俺に教えた剣の最高の境界。

あの時の俺はまだその言葉を悟れなかった……ううん、今でもわからなかった。

魂と自我意識がないものは、どうやって心を通じ合うのか……。そもそも、ああいうのはアニメや小説などしか出ないシーンだ。本当に現実で剣と感じ合えるのか？

いいや、今はしばらく現実向きの疑惑を捨てろ。そんなことを拘ると、前に進むことができず、何もできない自分に戻ってしまう。

そういうの嫌いなんだ。もうあの時みたいに剣を怯えて、可奈美たちを救うことに迷うな！

——だから感じるんだ、剣を。

もしお父さんが言っていることが本当なら……俺はさらなる高い境界へ行く！

もつと強くならなくちゃ、可奈美たちの力になれるよう俺は何度でも立ち上がる。

——もう失うのがごめんだから！ 応えろ、雪。俺の思いを知れ、俺に答えろ！

キイイイイ——。

自分の思いを剣の方に集中させ、耳障りでよく響く音が脳を反応させた。

「……やっと私の声を応じたのね」

しかし、その次に聞こえてきた声は聞いたこともない人の声だ。

「……………!?!」

その声の方向に向くと、元は何もない、光もない空間は一瞬に真っ白の空間に変化された。

そして白い霧の中から一人の少女の姿が現れた。

銀色の長い髪の少女。彼女の身体に纏っているのは美濃関学院の制服。そして彼女の首辺りは青いマフラーが纏っている。

「あなたは……?」

「雪。あなたの御刀。」

「えっと……はい?」

少女の言葉に都は一瞬反応ができなかった。

俺の刀? どう見ても一人の少女しか見えないのですが……それに刀なら持っているよ?

「その反応は……私のことを疑っていますね。……でも、それも人として極普通の反応ですので、仕方ありません。」

「え、あ、そのー?」

少女は勝手に納得する顔をして、都はさらに混乱してきた。

「なら改めて説明します。私は江雪左文字、あなたが持っていた御刀です。この姿はより安く対話するためにあなたの心層意識から私への幻想を取り上げ、作り上がった姿です。」

「幻……幻想!? この美少女か?」

「うん、多少自己改修のところがありますが……ご主人の前に自分のいいところを示したい思いも確かにあります。……どうですか? ご主人。」

都の前に少し自己展示のような動作をした少女。正直美少女という形容が現れた時は、既に滅茶苦茶似合っている。

「すごく似合っているけど……」

「そう……」

都の褒め言葉を聞いて、僅かにマフラーで顔を隠そうとしてた少女。よく見れば、彼女の顔が少し赤く見えます。

これは照れる反応だね。……やっぱり普通の女の子にしか見えないな。

「それより、あなたは本当に俺の御刀なの?」

一旦本題に戻って、俺は江雪左文字を自称する女の子に再び聞く。流石に刀が美少女になるとは現実から離れすぎた。

「うん、間違えなく私は江雪左文字。あつちは本体だけど、こつちは意識の集合体と言ってもいい存在。そして、これはこの空間（隠世に近い質の世界）だけにおいて起こす奇跡のような現象。」

「この空間……。ねえ、今更だけど……この空間はなんですか？なんで俺はここにいる？」

それと、なんだかもう何回もここに来た気がする。ここに来た覚えがないはずなのに……。

「その話については、あちらの方に聞いたほうがい解明できますよ。」

「バレたのですか。……流石、神の力を宿っている神聖の刀。」

雪の視線に追うと、そこにはもう一人の女性が白い霧から現れた。

彼女は桜色に近い黒い髪の毛の女性。何か何処かで見たとような顔だけで……全然思い出せない。

「ここは愛宕の意識世界。お久しぶりです、衛藤 都さん。それと、初めまして江雪左文字さん。まさかこんな不思議の現象が起こるなんて……史上初の男性刀使の名は伊達ありませんわね。」

「あなたは……俺と初対面じゃないですよ？」

「多少……私のことを覚えてくださっただけですね。ですが、貴方の安全のために私のことをあまり気にしないでください」

和服の女性はそう言って、なんか寂しそうな表情が顔に写っている。

「さっきこの子のことを江雪と言ったな？やっぱりこの子は俺の刀なの？それと愛宕の意識の世界ってどういうこと？俺のこともよく知っていますよね？貴女は誰？」

一気に思い浮かんだ質問を彼女に投げる。こういう行為は良くないと思っていたが、分かっていたいことがいっぱいある。

それと、この世界に来る前のこともうまく思い出せない。そのことにとっても気に食わないのだ。

何か大切なことを忘れた気がする。

「まず、前回……前々回が説明した通りにこの世界は貴方の意識を死者の世界に送らせないように作られた世界です。それと、この会見

はもう何回でも起きたもので、私が单方面であなただけが知っています。なぜなら、貴方がここから出ればこのことを忘れてしまう」「色々と凄惨な情報を湧いてきましたけど、まず俺はまだ死んでいないですよ？」

「ええ……かなり危ない場面になったけど。私の力によって命の別状がないのです。」

「そうか……ひとまずありがとうございます。」

「いいえ、私に感謝するのも早いことです。まだ危機が解けません。特に貴方が倒れた後に千鳥と小鳥丸と他の四人たちもタギツヒメに倒された。このままじゃ全滅されちゃいます。」

「千鳥と小鳥丸……まさか、可奈美と？和のことか!？」

一瞬二人のことを思い出した都はやつとここに来る前のことを思い出した。

自分がタギツヒメの消滅によって衝動的にタギツヒメに挑んだが、結果はタギツヒメの一振りを浴びられた。

そこで自分が大傷負われたことによって可奈美たちは必ず何かをしようとする。最悪の場合は、俺の仇を討つ為にタギツヒメと戦うのだろ。

それはだめだ！自分が言うのは馬鹿馬鹿しいですが、タギツヒメはもうとんでもなく強くなっている。可奈美たちは危険に遭われるかもしれない。

「ぐっ……早く俺を可奈美たちのところに返してくれ！俺は一刻早く彼女たちを助ける！」

妹たちのことを心配している都は女性の方に願う。けど、彼女は頭を左右で振って都の願いを断る。

「なんで返してくれないの！可奈美たちは殺されちゃうよ！」

「駄目です。今の貴方じゃ生き返っても全員を救えない。タギツヒメとの実力差もよくわかっているんですよ？」

「それは……」

確かに全力かかっても瞬殺された。だが、このままじゃ可奈美たちは死んちゃう！それは絶対に起こさせたくない！

もう誰を失われたくない！

「…………その誰も失われたくない気持ちもよくわかっています。けど、今の貴方は無力なのも事実です。」

「それでも……………」

都がどうしても彼女たちを助けたい顔を見て、女性は少し昔の自分の影が彼と重なっているのを見た。

彼女も仲間たちを救うため、何度でも危険の戦場に入って何とか踏破したけど…………最後の戦いで彼女は自分の無力を知った。

それはどれほど辛い思いなのか、彼女はよく知っている。

だから彼女はこうしてこの少年を導き、彼に自分がかつて歩いた道を歩かせたくない。

「彼女たちを見殺しなんて耐えられませんのね…………でも、これも貴方と彼女の繋ぎがまだまだなのが原因です。」

女性は雪の方へ指差し、より明白にこう言う。

「はつきり言わせていただきます。貴方はまだ彼女の力をうまく発揮できないのはタギツヒメに敗れた敗因です。」

「え…………？どういうこと？」

「本来刀使の力…………写しの継続さは精神力に決めるものです。精神が強ければ強いほどに刀使の力をもっと発揮するものですが…………貴方は違います。精神力がいかに強靭でも、あなたの写しは一瞬しか発揮できません。」

「それは……………」

確かにこの弱点がいなくなったら、タキリヒメも私を庇ってタギツヒメに吸収されないはず…………。

俺はタギツヒメの前にもう四連敗になった。それは刀使としての力が足りなかったからなのか…………。

俺は自分が五ヶ月前より強くなったと思ったんだけど、実際はまだ弱い人間だ。

刀使も最低の階段に留まっている。つまり俺は最弱であることはずっと変わらない。

「けど、それは決してあの子が貴方を認めてないわけではないです

よ。」

「え……う？それはどういう……」

「あの子は貴方を完全に認めているから、こうして人としたの姿で貴方の前に現れるのよ。そうでしょうか？江雪左文字さん。」

女性の言葉に頷く雪。

てつきり彼女は俺のことを完全に認めてないから、ただ一部の力を貸していると思ってた。

「ご主人は私のご主人。今でもご主人のことを誇っています」

「雪……」

「これこそは御刀と刀使としたの絆です。御刀は主人への忠誠は戦国時代の武士に負けません。」

「とはいえ、御刀との同調率が完全じゃなければ、いくら絆が強いでもその力が発揮できません。それは貴方が刀使の力をうまく発揮できない主因です。」

俺と雪の同調率……。

「でも、それも貴方の身にしか起きないことです。男性の身だったのか……御刀との同調率が女性より低かった。」

なるほど、つまり俺は男だからこういう欠点が生み出されたのか。

……まあ、そりや納得する。

元々刀使は女性がやるものなので、俺のような男性はまさにイレギュラーのような存在。

「それを上げるため、都さんは彼女をもっと感じるんです。自分の御刀のことをもっと知れば両方の同調率も上がります。」

「それって……」

「ご主人がさつき私にしたことです。強い思いを私にぶつかってください。そうすれば私も自分の思いをご主人にお伝えいたします。」

「古来の人々ではこれを一心同体と呼びます。ただ今度は刀と同体しますね。」

つまりこれは剣心一如ということ？俺と雪の同調率を上げるためにそのような境界が必要ってこと？

俺、できるかな……。

「大丈夫です。ご主人。」

「雪!？」

雪は不安の顔をしていた都の手を握る。そしたらとても柔らかく冷たい感触が伝わってきた。

冷たっ!?これは雪の体温?雪みたい……。

「私は必ずご主人の思いを応えてみせます。貴方の御刀として思い存分にご主人の力になってみせます。今度こそ私をうまく扱ってください。ご主人の思いを応えるのは我々の存在意味ですから」

「……………存在意味……」

荒魂と違って、御刀は人々との共存を望んでいる。…………ううん、荒魂も多分そうだ。ねねという特例がある。

…………タキリヒメもきつと本物の共存をわかっていたから、俺を手助けに来て犠牲になった。

彼女が最後で言っている言葉も人という可能性を信じていた。

…………そうか。タキリヒメの遺言をようやくわかった気がする。本当に気付くのが遅いわね、俺は。

「ご主人?」

都がぼつとしているところを見て、雪は頭を傾く。

「なんでもない。雪、俺たち二人はもつと高く飛ぶわよ。高く、遠くへ飛ぶ!母の御刀千鳥に負けなくらいに」

「……………?ご主人の望みなら、どこでもついて行きます」

彼女は淡々と都に応える。流石に自分が望んだ燃える反応が返って来ないのか……。

「雪、改めてよろしく」

「よろしくなのです、ご主人。」

その後、二人は当场で同調し始めた。

最初はただちようどいい暖かさを感じたけど、段々と共鳴の鳴り音が脳内に響き回していく。

最初はうるさい音だと思っていたけど、不思議なことにはいい音に変わった。

これが御刀と同化していく感覚なのか……。

「…………どうやら、上手くいたみたいですね。」

都の身体が白い光に包まれていく光景を見て女性は微笑む。

彼は色々と凄い異性だ。最初は彼の強い意志を感じて彼を選んだけど…………どうやらそれは間違っていた。いかなかった。

彼は驚く才能を持つ、揺るげない信念を持つ、人思い、他人のために自分の安全を危険に晒し出す。そういう人だからこそ「三本」の御刀に認められた。

どこまで成長していくのか、女性も思わずに期待してしまう。

「…………頑張れ。あなたならきつとできるはずです。誰でも幸せそうな未来をその刀と一緒に斬り開きましょう。」

そう期待して、女性は彼を元の世界に帰らせた。



現在に戻るー

「……………」

「……………っ!!」

刀と刀がぶつけ合う音がこの空間に響く。タギツヒメは本能的に急ぎに御刀で防御する。

しかし、タギツヒメに襲いかかってきた攻撃は途切れずに彼女をねから離させる。やがて、彼女は一旦相手と距離を離れる時、胸あたりが確実に斬られた。

「……………我は斬られただど!? いや……………それはありえない! それより、貴様は……………」

驚かされた反応を隠れできず、タギツヒメはその者が今日の前に立つのを信じられなかった。

これは未来視さえも予知できなかった未来。そいつは生きるはずがない! その人間は確実に死んだと確定したはずだ!

「ねね、ゆっくり休め。これからのことは俺に任せろ」

「ねー……………」

元の小さい姿に戻ったボロボロのねねが彼に一声で応えた後、気絶した。

本当によく頑張ったな……………今夜のMVPはお前だ。

「ありえぬ、貴様は死んだはず！」

「ありえるよ、こうして対話するのが何よりの証拠でしょう?」

「……………!?!」

迅移を用いての加速、そして神速の斬撃が彼の腕から繰り出される。

「早い……………!?!」

「俺はもうさっきの俺と違うのよ!タギツヒメ！」

神速の斬撃を繰り返す都。彼はタギツヒメと激しい戦いを当场で広がる。

その一方、倒れた可奈美たち共々が目の前に起こす奇跡に信じられない反応。

「あ……………あれは……………」

「う……………そ……………」

「……………!?!」

「み……………や……………こ……………?」

「……………生き……………てんの……………か?」

「……………ミヤ……………ミヤ……………」

あの人は生きていた。死んだはずの傷を負われて、致命量の血が流されているのに、彼は再び立ち上がりタギツヒメに挑んだ。

非常にありえない、常識外れた現象だけだ。

「お兄ちゃん……………生きて……………いる……………」

涙が止まらず、可奈美はそのまま泣き出した。大好きな彼が生きていたことに可奈美は良かったと思う。

本当に……………本当に……………良かった。

その他の皆も思わず涙がボロボロに落ちていて、彼が生きることに歓喜している。

「都くん……………くすくす……………」

「お前……」

「(無言に泣いている沙耶香)」

「馬鹿野郎、俺たちに心配しやがって」

「ミヤミヤ……! (泣いている)」

そして戦闘はまたまた続く。

「ありえぬ!なんで貴様は私の速度に追いつける!」

タギツヒメは連続迅移で後退する。しかし、都は同じように追いついて斬る。

「はあ!せつ!どや!」

「しつこい……!我はタキリヒメと融合しているはず……なんで貴様ごときの人間に……いや、待つて!その状態は!」

迅移を連続使用しているタギツヒメは数十回以上の攻防の途中にあることを気付いた。

「彼の身体に纏う写しは一回でも解除されていない」。

「貴様、刀使の力をうまく扱えるようになったのか!」

「ああ……お前のおかげだな!やっとなり刀と一体になった気がするよ!とりやああアア!」

「ぐっ……!」

都の攻勢はさつきより激しくなる。

そこでタギツヒメは少しだけ苦戦していると気付いて、ムカついている。

やっとなりヒメを吸収したところ、いよいよ宿敵たる千鳥と小鳥丸を簡単に倒せたというのに、現在は死んだはずのあいつに抑えられている……?ふざけるな、我は禍神だぞ!

「金色の目……龍眼を使うのか」

タギツヒメの目が金色になっているところを見て、都はタギツヒメの動きを読みながらそう呟く。

「そうだ。二度私の前に現すんじゃない、邪魔虫!」

「なら、こっちも本気で行くぞ!」

超集中の状態に入り、都は未来視を使ったタギツヒメに立ち向かう。

彼女の動きを先に読むため、都は自らを極限の状態に入り、次々とタギツヒメの攻撃を解かす。

もつと先のことを見る！見なくちゃ！無数の可能性がある未来を見て選択する相手が選択する一瞬に彼女が何かをするかを見破って、最良の対応を最短の速度で実現する！

「バカな……これはありえぬ！」

未来視を使っても自分と互角で戦う都を見て、タギツヒメはさつきから驚きが止まらない。

彼の成長速度がびっくりするほど早い。しかも、タギツヒメが彼の身体から見えたのは――

「……ッ！」

物凄い突刺攻撃により、タギツヒメが遥かに退かれた。けど都は動きを変え、さらに突いて彼女を迫る。

「あれは……うぐっ！」

床を強く踏んで強力な正面斬撃攻撃でタギツヒメをぶっ飛ばす。

ねねに倒された近衛隊も衛藤 都がタギツヒメを抑えたことに驚く。

彼の剣技はとんでもなく強い。しかも……あの型は。

「あれは、此花さんの技だ……」

近衛隊より先に言ってしまった可奈美。彼女はさつきまでは泣いていたけど、都がタギツヒメと同様速度の迅移を使うと同時に剣技も使うところを見て、いつの間にか泣くのを止まった。

「可奈美、それはどういう……」

涙を拭いて、？和は可奈美に聞く。

「お兄ちゃんは親衛隊の此花さんの技を自分のものにしたのよ。」

「なに？」

可奈美の言っている言葉に？和はちよつとわからない顔をする。

でも、可奈美は寿々花と実際に戦ったからわかっていたんだ。此花寿々花が持つ特有の技を……。

相手が迅移を使うタイミングを読む。それが寿々花が現役の刀使の中でも個人戦闘では最強クラスの衛藤可奈美とある程度渡り合う

だけの実力を持つ理由だ。

まさか、お兄ちゃんはそれを習得していたなんて……ううん、それだけじゃない。

「それだけではない……結芽ちゃん、沙耶香ちゃん、獅童さんと私とお母さんの剣技もお兄ちゃんの剣に含まれている。」

「それって……」

「おいおい、そんな馬鹿な!」

可奈美の口からそれを聞いて、みんなは信じられない反応をする。いくら才能があるとはいえ、多数の流派を持ちながらタギツヒメという未来を見通す化物を抑えるだなんて……普通の人間では到底できない挙動のはずだ。

なのに、彼はそれを成し遂げた。本当に、この妹チートにしてこの兄かよ。「……これをうまく運用するのは、かなり高難易度の出来事。」

「沙耶香ちゃんの言う通り。あれは恐らく、都くんしかできない絶技だと思う。」

常人を超えた集中力があるなら、ある程度にできるかもしれない。しかし、同時に脳は大きな負担をかける。

あれほどの集中力を消費したから、きつと精神力も大きく削られるでしょう。

そのリスクを第一時間に理解するのは彼の異能をよく理解している可奈美、舞衣、沙耶香三人しか。

「なるほど、我と戦っているのは貴様一人ではないのか……面白技だ。」

「……」

「だが、これを運用するために膨大の計算も必要だったら、貴様もこの状態を長く持たないだろ?人間である以上、貴様たちは限界というものに縛られている。」

戦いの最中にタギツヒメも都の剣が多数の流派が含まれていることを気づき、そして都の弱点も気付いた。

「だから、なに?お前も限界があるじゃないのか?今みたいに俺を殺せなかったのは何よりの証拠よ!」

「チツ……すぐ貴様を冥府へ送ってやる！」

両方が再び激しい攻防戦を何度も繰り返す。両方の戦意は今までもない高ぶっている。

今のタギツヒメとここまで戦えるのは恐らく刀使の力を覚醒している都しかない。

かつて折神 紫はこう言った。彼はもしや刀使だったら全力の燕結芽と戦えるって、その話はまさに今の体現だ。

そして折神紫もタギツヒメを倒すため、わざと彼という異質を放任した。

二人の鳥と同じ、折神紫がわざと隠した対大荒魂用の切り札であった。

「紫……!!」

そのことをいよいよ察したタギツヒメは怒り起こし、凄まじい速度の連続斬撃を繰り返す。

けど、それも彼に次々と解かされて反撃された。しかも、不思議なことに彼の刀に斬られたら、千鳥と小鳥丸のように自分に修復不可能のダメージを与えた。

これはどういうことなのか、タギツヒメはもう考える余裕がなくなった。目の前の人間は確かに折神紫を超えた。

「……けど、それも戦いが長く延びることで戦況が大きく変わった。

「…………ぐっ！」

「やっど……限界のようじゃだな。」

腹の部分が痛みが走る。

急ぎに後ろの方へ回避する都は腹が貫かれた痛み辛い顔をしている。幸い写しがあるようで無傷であったが……それでも前で受けた傷はまだ残っている。

「お兄ちゃん！」

「都！」

「都くん！」

皆の心配の声が後ろから聞こえてくる。後ろには最も守りたい人たちがいる。

彼女たちを必死に守って、ボロボロになったねねもいる。

ここまで来て、この場から引くわけにはいかない！

「ほお……写しはまた保つのか。何という強い精神力だ。そこにいる千鳥と小鳥丸はただ一撃を受けたあと、あの様になっていたぞ。」

「黙れ！お前は可奈美たちの悪い口を言う資格がない！」

タギツヒメが可奈美たちを舐めた口を聞いて、都は怒りの声を口から放つ。

でも、これも仕方ないことだ。タギツヒメはいよいよ彼が限界になつたのを待つてましたから。

「人を守りたいからこそ、人をお前に見せてやる……人の強さを！」

「勝てるさ。すぐお前に見せてやる……人の強さを！」

刀を突刺の構え。都は全身全霊でこの技にすべてをかける。

「ふん、この一撃で終わらせてやる」

同じくタギツヒメもそろそろ決着をつけるため、二天一流の構えを取る。

「……すう……はあ……」

雪、結芽。力を貸してくれ。今ならこれを完成させるかもしれない。超集中により、さらに一体になった「私たち」ならあの伝説の絶技を再現させるかもしれない。

深呼吸し、都はこの三ヶ月絶えずに鍛え上げた天然理心流最高極致に至る心得を心中に読み返す。

「行くぞー！」

一歩音越え、二歩無間、三步絶刀。

「天然理心流奥義・無明剣『三段突き』！」

両方が高段階の迅移で同時に姿を消した。そして勝負はこの一瞬で決まった。

「……………ッ！」

「……………」

タギツヒメの左腕が空中から地面に落ちる。彼女の腕は都に突き飛ばされた。

「お兄ちゃんが……」

「タギツヒメの腕を……」

「突き落とした……!」

それを見届けた可奈美たちは驚愕の顔を収まらない。だって彼がタギツヒメに重傷を与えた。

「と……届いた。」

「……これは驚いた。まさか我はここまでやられるとは想定外だ。」
重傷を負われたタギツヒメは失われた腕を抱いている様子。今の彼女はもう前の余裕が見えない。

「認めよ……貴様は我が理想を阻む最大の脅威だ。次に会った時はイチキシマヒメを吸収して、貴様とまた決着をつける」

「逃げる気か!お前はここでーうぐつ!」

都はタギツヒメにとどめを刺すと、突然写しが解除され、片膝が地面に崩した。

「ふん、あれほど大脳に大きな負担がかかっていたから、ただ無事じゃ済まないと思わないぞ」

「クソ……!」

「ヒメ!無事か!」

「ヒメを守れ!誰にもヒメに近づけさせるな!」

「「はい!」」

そんな時、歩たち以外の近衛隊もこの場に来て、タギツヒメを守ろうとした。

「増援か!」

「クソ、またこんな数があるかよ!」

「タイミングが悪すぎマス」

そんな数を見た薫たちもどうしようもならない顔をしていた。

「この度は私の負けだ。この屈辱は次で返すぞ、衛藤都」

「ぐつ……!」

そう言い残して、タギツヒメは近衛隊の護衛下でさっさとこの場から撤退した。

防衛省での長き戦いもここで幕を降した。が、タキリヒメを吸収したタギツヒメを討てなかったことに悔やんでいる可奈美たちがいた。

第59話：戦いの後、変わっていく関係

―市ヶ谷での戦いから4日後―

市ヶ谷防衛省に起きる人為的における被害は市ヶ谷全域発生した荒魂事件でまとまった。

世間には大荒魂の存在を知られてはいけなかったため、防衛省事務次官の織田正雄はすべての責任を天災如くの大荒魂事件に押し付けた。

一方、防衛省が大荒魂を世間に隠した事実を闇に掘り込む。一方は唯一荒魂を対応する機関刀剣類管理局の面子を保つこと。

大荒魂タギツヒメが優勢を手に入れた今、管理局はより重要な存在になった。何せ、荒魂による被害を阻止するのは刀使しかない。

荒魂が一日存在すればするほど、刀使たちの存在は不可欠になる。特に鎌倉特別危険廃棄物漏出問題で発生した大量荒魂発生事件は刀使たちの奮戦のおかげで関東一帯の被害が何とか抑えた功績があった。

織田正雄も馬鹿の男ではない。彼も今の日本が必要なのは政治権利の争いではない、日本の脅威から守ってくれる刀使だ。

確かに折神紫の絶対統治時代から、管理局のことを目障りと思うことがあったが……タギツヒメという大脅威が現れた以上、もう内部争いごっこをやっている場合ではない。

そして今は、管理局と共に市ヶ谷襲撃事件の後片付けしながら、タギツヒメへの対策を練る。

その中、防衛省襲撃事件の中心における英雄たちは別の動きがあった。



刀剣類管理局下におけるある病院――

可奈美は仕事の余りに、管理局御用達の病院内のある病室に足を運んでいた。その部屋のベッドには安らかな顔で眠りについている青年の姿がいる。

彼――衛藤 都はあの夜、タギツヒメが防衛省から逃げたあと、突然糸が切れたように気を失ってしまった。

そして、ずっと昏睡の状態で眠っている。

お医者さんから聞いた話によると、彼は極度の疲労、肉体の損傷と驚くほど肉体の自然再生を行うせいで肉体の恒常性を維持することが難しくなったのだと聞いている。

彼が病院に運ばれたときに、既にタギツヒメに斬られた刀傷が治った。その話を聞いた可奈美一行は不思議だと思っている。

彼は明らかに斬られたのに、身体の外傷はもうなかった。彼の身体が何か起きているのか可奈美たちは一時に理解できなかったが、この話はしばらく六人の秘密にしておいた。

これも彼のためでもある。彼にしばらく平穏の時間を与えたい、というのは六人の共同意思だ。

「あの……彼はすぐに目覚めるんですよね……？」

可奈美は不安げな声色を隠しきれないまま、部屋に居合わせている女性看護師に尋ねる。

「ええ。先生の話ですと、このまま安静にしていればすぐに意識を取り戻すそうです。不安になられるかもしれませんが、今は……」

「あ、大丈夫です。命に別状がないなら、それで……」

お互いに愛想笑いを浮かべつつのやりとり。看護師も可奈美と都の関係性を何となく理解しているのか、励まそうとしているのがわかる。

「よろしければ、側にいらしてあげてください」

看護師が会釈しながら病室を後にすると、可奈美は都の眠るベッドの脇に椅子を置き、それに腰掛ける。

「お兄ちゃん……」

紫髪、細身で整った顔立ち。世の男性なら大抵はこういう容姿の同

姓に嫉妬や羨望やらの感情を抱くのだろう。だが、彼が背負うものを
知れば羨ましいなどという考えには至らないと断言できる。

彼は頑張りすぎだ。大切なものを守るために色々と無茶しすぎた。
彼は自分よりも自分の大切な人たちのために行動しなければならな
いと考えてはいたが、それでも心は確実に磨り減っていた。

彼の痛みは、彼の苦しみは彼自身が心の奥底に追いやっていただけ
なのだ。

「もしも、私がつと強くなったら、お兄ちゃんは無理にタギツヒメ
と戦わないのだから……」

あの夜、可奈美は危うく彼を失うことに何回でも泣いた。普段は泣
かない彼女ですが、お兄ちゃんの前だけは素直になる。……うん、彼
が失われるかもしれないから素になるんだ。

彼を愛している。家族の愛もあるが……一人の女としての愛も含
まれている。

しかし、可奈美は彼とは実の家族だ。恋しちゃいけない対象だ。彼
と恋人同士どころか、プライベートで交流を持つことすらほぼ不可能
となってしまう。結婚など夢物語だ。

しかし、欲しかった。お兄ちゃんが自分だけ見て欲しかった、自分
を選んで欲しかった。

「やっぱり最低な妹だね、私……」

可奈美は右手で胸元を抑え、悲痛な面持ちで俯く。彼女は自分がい
かにも自己本位の汚い女だと知った。自分の幸せのために愛する人
が苦しむ選択肢を選んでしまうことに、激しい自己嫌悪を覚えた。

彼の不幸につけこんで、彼の可能性を奪ってしまったのではない
か。

間違えたのは、精神と実力も弱い自分の方ではないのでしょうか
……。

「起きてよ……お兄ちゃん。」

そう思っていた可奈美は辛そうな表情で都の手を握り、彼の目覚め
を祈っていた。



同一時刻、鎌府女学院女子寮のあるお部屋。

「そうか……今日一日、可奈美がずっと都先輩の隣にいたんですか……」

美炎を含めた調査隊のメンバーと？和たちは数日前の市ヶ谷での戦いについて情報交換を行っている。そして美炎は？和から可奈美が都のそばに彼を見守っていたことを聞いた。

「うん、今日は可奈美ちゃんの番。最初の見舞いの番を彼女にやらせようと思ったんですが……タキリヒメの件も可奈美ちゃんにかのりの衝撃を与えたので、しばらく彼女に気持ちを調整する時間を与えました。」

「これもあいつのためだ。都は彼女の一番大事な家族だもんな。まあ、俺たちもそうだが……」

「ミヤミヤは既にワタシたち大事な仲間と友達だからネ。」
「そうなんですか……」

薫とエレンの話から聞いて、智恵は元気がない声で返答する。調査隊の方も二人の仲間が敵に回したし、ミルヤと美炎と調査隊に臨時的に配属した国頭さんもかなりショックを受けたみたい。

自分もあの二人の件で精神的にやられたけど、みんなのお姉さんとして調査隊をちゃんと支えないと……。

「まさか、衛藤さんもあの戦いで……」

「死んだような言い方をやめろ。彼がただ頑張りすぎで、疲れて倒れた。少し休めば元通りになる！そうだろう？」

「まあ、お医者さんもそう言ってたし。可奈美からも、都が身体に大きな負担がかかる技を使ったらしい。」

「それで、ずっと眠ったままなのか……」

「あれほどのチート技を使ったし、それくらいの副作用も普通だろ。」

ゲームの話で都の異能を形容する薫。

「それより、そっちも大変だったよね？……仲間の二人が近衛隊に」
「……………それに関しては、私のせいです。」

舞衣が不意に話題を変えようと、ミルヤは自己責め始めた。彼女はあの夜、冥加刀使になってしまった由依と葉菜を見て、ずっと自分の判断に後悔している。

もし、あの時は分断行動しなければ彼女たちは冥加に……。

「ミルヤさん、あんまり思い詰めちゃだめ。悪いのが綾小路の刀使を利用したタギツヒメです。近衛隊が使ったノロもタギツヒメから取り出したものです。」

「……………ですが……」

「私も同感だ。タギツヒメを憎んでいる理由もあるが、あいつが次々と私の大切なものを傷つけようとしている。私は絶対にタギツヒメを許さない！」

国頭が言ってることを賛成する？和。彼女はタギツヒメと切れない縁がある。

かつて調査隊は青砥陽司あおとようじから聞いた話によると、？和の母は間接的にタギツヒメに殺された。だから彼女は御前試合の時、ご当主を殺そうとした。

？和たちと別の場所で彼女たちのことを知ってしまった調査隊も？和の気持ちをすごく理解している。

特に智恵と清香は群馬で都からも直接聞いた。彼と可奈美も？和と同じ、お母さんが間接的にタギツヒメに殺されたことでもかなり辛い過去を経験した。

本人は今が気にしていないが、でもそれは現場にいる薫と沙耶香がいるおかけなのかもしれない。この二人はずっと都のことを大事にしていたからなのだ。

本当に見るだけで微笑ましい関係だ。

「私もタギツヒメを許せない。理由は？和ちゃんと同じです。」

「俺もだ。ねねも彼女にボコボコされたからな。ねねと都の仇を討つって決めた。このまま好き放題されて、足蹴にされて黙っていられるか！」

そして？和に賛同する舞衣と薫。市ヶ谷の戦のあと、彼女たちもウタギツヒメのことをどうしても許さない。

主因はやはり都さんのことだよね……。とそう思ってしまう智恵。彼が薫たちにどれだけ影響を与えたのは彼女自身もわかる。

彼と接触して、彼の本質を分かれば、彼のことを自然に放っておけないのです。

「でも私たちだけでは……。今のタギツヒメとまともに戦えない。」

「サヤカの言う通り。ワタシたちはミヤミヤのようにタギツヒメとまともに戦えないのデース。」

「そういえば、さつき貴女たちの話によると、都さんはタギツヒメから一手を取れたという話をしたよね？あれは？」

エレンの話に少し引つかかるミルヤ。

戦力的にトップクラスの衛藤可奈美以上の刀使は存在しないはず……。いや、燕 結芽はそのうちか。なのに、彼という男はタギツヒメを撃退した。

管理局内、一番腕利き刀使の衛藤可奈美と十条？和さえも成し遂げないことを成し遂げた。相当に不思議な話だ。

「都くんは昔……。ううん、今でも剣技が可奈美ちゃん以上の剣士です。都くんは多分対等の力を得て、タギツヒメとまともに戦えたと思う。」

都の実力を昔から見てきた舞衣は都の実力さがよく知っていて、ミルヤにそう伝う。

彼は可奈美より強い剣士。可奈美さえも対等勝負で勝てない人だ。

「なるほど……。理屈がわかった。」

「ほのちゃんがわかるの？」

「うん、都先輩は学校にいた頃は生身で三人の刀使を倒した。だから、私も都先輩の強さを納得するよ。」

「へえ〜興味ないけど、あいつはそんなに凄いだ。ずっと後ろでミルヤみたいにいるさくて指揮しているから、てつきりそっち向けかと……」

「七之里さん。あとでゆっくり話しましょうか？裏で」

「げっ！それは勘弁してくれ！」

ミルヤや智恵の説教に嫌そうな態度を示した呼吹。？和たちは彼女たちの関係をよく知らないが……呼吹はいつもあの二人に叱られそうだ。

「とにかく、今は都さんの目覚めを待つということですよ？」

「……………」

無言になる？和たち。彼女たちの反応からどうやらそうしたいらしい。

「……………わかりました。私たち調査隊もしばらく近衛隊のことを調べます。何か起きたら、私たちは貴女たちの代わりにやります。」

「……………それは……………」

「今、貴女たちにとって一番大事なのは都さんの復帰。一応彼は貴女たちの隊長ですし、私たち側の切り札です。彼の安全を確保するのも大事な任務です。」

「……………だから、十条さんたちは彼の目覚めを集中してください」

？和たちを説得するように、智恵はこう提案した。今、彼女たちの状態では彼なしではかなり不穏だ

だから、今だに彼女たちを都さんの隣にいさせるのが一番だと判断した智恵。

彼が目覚める前に、自分たちは由依ちゃんと葉菜ちゃんのことを何とかしないと……ついでに朱音様たちにこれからどうするのかを聞かないと。

「感謝する、瀬戸内。」

「智恵でいい。私たちは同じ管理局所属の仲間でしょう？」

「……………わかった。智恵。」

そうして、？和たちは都が昏睡している間に調査隊と一歩ずつ信頼関係を築き上げた。



「はあ……」

薄暗い病室の天井が視界に飛び込んでくる。上体を起こそうとしたものの、全身が鉛のように重い、頭もくらくらする。これは超集中を使い過ぎて、及び長時間の戦闘を加えた症状である。

今までは「運良く」その症状から逃れましたが……今回は見逃されなかった。多分毎回死にそうな状態だから、不思議と全快する時、ついでに疲労も解かれた。

本当に不思議な現象だ。……今回は起きなかつたみたいだけど。……まあ、毎回死にそうになるのもおかしいのですが。

……うん？　そういえば、ここは病室だね？　タギツヒメと戦ってから何時間経つてた？

あの技を使った後、俺は気絶してしまったから、この間のことは全く知らなかった。

気合いを入れて上体を起こし、寝ぼけ眼を左手で擦り、意識を覚醒させる。

「ええと……携帯は」

そして左手側のテーブルに置かれた携帯端末を手に取り、日付と時刻を確認する。タギツヒメとの戦いからは4日後……いや、時刻は既に深夜だから5日後か……。

「こんなに寝ていたなんて……初めてですね。」

寝ていた、というより厳密には気を失っていたのだが。これは初めて超集中という技を開発する時期より酷かった……あの時は丸一日眠っていたからな。

そのせいで、可奈美に心配をかけた。……本当にあの頃の彼女に申し訳ない。けど、あの技を開発するおかげで色々助かった。

結芽の時も、決戦の時も、タギツヒメと戦うときもあのリスクが高

すぎた技のおかげで自分は何とかここまで歩いてきた。

正直、あの技は自分の必殺技なんだ。弱者でありながら、圧倒的な力を持つ強者に対して唯一逆らう、弱者のために存在する技。それが超集中。

まあ、リスクが高すぎますけど。でもあれのおかげで、できることもたくさん増えますからいいことだよね？

「ん……？」

鼻腔をくすぐる魅惑的な香り、そして右足あたりに伝わる温もり。それらの元を視線で探ると、そこには美濃関学院の制服に身を包んだ少女——都の最愛の妹、可奈美が静かに寝息を立てながらベッドの端に突っ伏して寝ていた。

見舞いに来て、長い間待っていたせいで寝落ちしてしまったのだろうか。

「可奈美……」

彼女を見て、口が思わず彼女の名前を呟いた。

まさか自分が気絶している間に彼女は自分のお見舞いでこんな疲れていたとは……兄としては心苦しいですが、彼女の優しさに胸あたりが温まっていく。

可奈美は昔から優しい子だ。自分が一番辛い時も自分に気遣ってくれた記憶がある。

自分の手を引っ張ってくれて、無理矢理彼女と一緒に彼女が大好きな番組を見させ、俺に学校で起きた楽しいことを全部教えた。彼女の笑顔を少し覗くと、まるで太陽のように眩しかった。

しかし、あの時の俺は彼女に一切心を向けなかった。母を失った痛みは、あの時の俺にとって一生治せない傷だ。

だから、あの頃の可奈美は俺にとって眩しすぎる存在なんだ。

あの誘拐事件が起こす前に、俺はずっと眩しい彼女のことを避けていた。

ここで少し残酷な話を言いますと、あくまで可奈美は母が俺に託した妹に過ぎないのだ。俺は彼女のことを今みたいに大事ではなかった……。

彼女を失われるかもしれない恐怖に落ちなければ、彼女がどれほど大事なものはわからなかった。

そんな恐怖を味わった日以来、俺は可奈美の大事さを知り、彼女を今みたいに大事していた。

ただ一人の妹なんだ。兄としてちゃんと大事なないと……。

「……………このまま可奈美が風邪に引いちやうのかも」

回想から戻り、都は可奈美を見てそう呟く。

このまま疲れた可奈美を眠らせておこうかと思ったが、もう冬の季節だから、布もなしに眠らせておくのは健康的には良くないかもしれないと判断して、彼女を揺すり起こすことにした。

早速、可奈美の左肩に右手を乗せると……。

——小さい。こんなにも……

可奈美は同年代の女子と比べてもそこまで小柄ではないが、都には触れた彼女の肩も体も小さく感じた。

今更だけど、彼女はずっとこんな身体でここまで戦っていたのね……。

心苦しいというか、嬉しいというか。……………彼女が危険ことに丸投げするのは心苦しいのですが、彼女がここまで強くなることも嬉しい。

そして何より彼女は自分のために戦っていたのも知っていた。そこはちよつと……胸がぞわぞわしてしまう感覚。なんてだろう？

とりあえず、彼女を起こしますか。胸の変な感覚はしばらく置いておく。

「可奈美、起きて。風邪を引いてしまいますよ」

少し強めに肩を揺する。

「ん……………んんん」

「ほら、起きて。寝ぼけないで」

もう一度揺らすと、可奈美はふらりと寝起き、自分を目覚めさせた相手を確認する。

「おにい……………ちゃん……………?」

「おはよう、今日の寝顔もとてもかわいいー」

「ーっ!!」

都が冗談を言わんばかりに視界が一瞬で真っ白に染まった。そうしたら、肌触りの良い滑らかな感触が彼の顔面に襲い掛かってくる。次に感じていたのは柔らかい何か彼の顔を押し付ける。

ーこれは!?

先程までとは比べ物にならないほど豊潤な香り。顔を押し付ける優しい温かさと柔らかさ。ここまですれば結論はただ一つだけ。都は現在、可奈美自身の手によって、彼女の胸元に顔を押し付けられているのだ。

「可奈美……!?!」

身体の倦怠感、不意打ちの動揺、そして何より妹の匂いと胸の感触にここまでのはつきりと接触していることの羞恥心。シスコンの彼は珍しく狼狽していた。

ただ匂いを嗅ぐだけで、一夜は眠れないというのに……ここまで彼女と密着していると、自分は多分……抑えられないと思う。

対象は妹とはいえ、彼女は十分魅力がある女の子だ。彼女に欲情しないと言うならば、それが嘘だ。

舞衣の胸に目が吸い込まれたと同じ、都は時々可奈美の太ももに視線のやり場が困っている。

簡潔に言うと、美濃関の制服がヤバイすぎる。とはいえ、学院内ですべてにそう感じさせた対象は大体いつもの三人しか。好感がないやつはどうエロくでも都は決してときめきしないのだ。

そして、自分の妹が素敵すぎるのも大きな問題だ。何せ、可奈美は彼の誇れる対象なんだから、自然に彼女への好感を抱かえる。

特に最近可奈美のことを意識しすぎる。

「お兄ちゃんが目を覚めて良かった。私はお兄ちゃんが何処かに行っちゃういそうだから、ずっとそれを怖くて……」

「可奈美……」

可奈美はより一層強く、都を抱き締める。息苦しさが増すが、そんなものは可奈美の柔らかさと温もりによって掻き消される。

いや、……これはもはや、可奈美の不安の言葉はそういうのを掻き

消されるかもしれない。

彼女はとても不安でした。自分がこのまま意識が戻せなかったという可能性を恐れていた。

そんな不安そうな妹にちゃんと向かわないで兄としてはどうする！

「……お兄ちゃんはもうどこにもいかないのよね？」

「あ、ああ……何度でも言うけど、俺はどこにも行かないのよ。そのために、こうしてあの戦場から生きて戻ってきたから」

彼女を安心させるため、都は顔が胸に押し付けられた状態で彼女の髪をワシヤワシヤと撫でる。とても可笑しい姿勢になるのを予想がつくけど……。

「うん……」

彼女を安心させるなら、いくら恥ずかしくてもおかしくても構わない。い。

そして、可奈美は小さく頷いたら、都の頭を離さないまま抱き続けていた。

◇

「……」

「……」

数分ほど可奈美に抱き締められ、今になって解放された。

我に返って自分の行動に羞恥心がこみ上げてきたのか、お互いに顔を真っ赤にした状態でそわそわと目を泳がせていた。

「その……色んな意味であります。」

「私も……」

両方もがお互い意味不明の話を出した。一人は妹に抱かれて妹成分を補充するシスコン。もう一人は大好きな彼をたつぷり感じて恥ずかしがっていた。

それから数秒の沈黙、両方は恥ずかしい熱くなる顔で互いの視線を避ける。

やがて数秒後、都は先に話題を開いた。

「……………えっと、その……………この後はどうなっているのかな？俺が気絶している間は」

「……………えっ？そっち？」

「……………ん？」

可奈美の意外の反応に少し呆れる都。

そっちとは……………？そういう返答はまるで期待外れの質問だね。なら、本心は何か聞きたいのか？

「なん、なんでもないです！聞かないで！」

「お、おう……………」

そうしたら、都がそれを聞き出す前に可奈美は先に聞く道を封鎖した。

何？兄でも知らせたくないことなのか？

彼女の恥ずかしい反応から、ちっとも彼女の思いを見当たらない都。

彼は恋に関する点は相変わらず鈍感。今だに舞衣の気持ちを気付かず、この恋を片思いだと思っている。

「すう……………ふう……………」

少し深呼吸をして、気持ちを落ち着かせたら、可奈美は都の質問にきちんと答えた。

簡単に言うと、タギツヒメが撤退したあの日以来タギツヒメ側は姿を隠し、何の動きもなかったようだ。俺もその日以来昏睡したままだそうだ。

そして可奈美たちはずっと意識が戻れない俺の世話をしている……………いや、世話というか、見守るのほうが良い。

だって、看護師の仕事は怪我人である俺の世話にすることだ。流石に可奈美たちはやらせられない。

それでも可奈美たちはこんな俺の面倒を見てくれた。本当に優しすぎるんだ、皆は。

「タギツヒメたちはしばらく動きがないということは……………多分イチキシマヒメの居場所を探しているのだろうなあ……………」

可奈美から教えた状況からすぐこの先のことを推測する都。

「やっぱりお兄ちゃんもそう思ってたのか……」

「うん、タギツヒメはタキリヒメを吸収した後、残った狙いは最後の女神イチキシマヒメになるのでしょうか。彼女を吸収すれば、隠世にある本体を手に入れる。そうなったら、この世は何もかも終わる」

「……………」

「可奈美？」

何かを考え込む顔をしている可奈美。彼女が急に沈黙するところに都は尋ねる。

「私たちは勝てるのかな？タギツヒメは前より強くなっている。タギツヒメを相手に私はちっとも勝てる気がしない」

そうしたら、可奈美はまた不安そうな顔に戻った。まあ……：それもそうだ。彼女たちはタギツヒメにやられたし、不安になるのも仕方がないことだ。

「大丈夫。相手はいかにも強くても万能ではないのだ。彼女を一度倒したから、二度目も倒せる。だから、可奈美のことを信じているよ。」

「私……？お兄ちゃんは？あの時、お兄ちゃんはタギツヒメと互角に戦っているんですよ！私たちと違って……」

「もちろん、俺も頑張るさあ。けど、俺一人だけじゃだめだ。俺の剣を見たでしょう？皆が俺の力になっていたからこそ、タギツヒメとそこまで戦っていたのだ。」

「でも……あれはお兄ちゃんの剣で……私にはそれが届かない。それに、防衛省の戦いでタキリヒメのことも、歩ちゃんのこともお兄ちゃんのこと……何もしてあげられなかった。……私、こんなに何もできなかったという感覚が初めて……」

さらに落ち込む可奈美。普段の彼女なら俺が強くなるのを知ったら、きつとわくわくして稽古を申し込むはず。

なのに、彼女は自分の弱さで悩んで落ち込んでいる。こんなの、可奈美らしくない。

「……何もできなかった、って可奈美は言うけどな。俺はそれ、違う

と思う。」

「……えっ?」

「あの時はタギツヒメと戦う最中だけど、俺は見たのだ。可奈美は、あの時、あれ以上の被害を出さないように立ち向かった。？和たちはS装備を着て近衛隊と対峙したのに、可奈美は空のまま近衛隊と打ち合って迎撃にあたったんだろう?それでなお、押し返した。……それだけでも、可奈美が凄い刀使だっということが俺には分かる。」

「でも、お兄ちゃんのことタキリヒメのこと……どっちも助けであげられなかったのですよ!私」

「それでも、お前はやるべきことをやり遂げた。近衛隊たちを抑えたおかげで俺も邪魔されずにタギツヒメと戦えた。まあ……一度斬り殺されたけど、それでもお前はちゃんと自分の役割を果たした。」

「……」

「やっぱりまだ納得いかないのね……」

「うん……」

顔を下げたまま、また落ち込んでいる可奈美。正直彼女はもう最善を尽くした。近衛隊の強さも予想以上に強かったし、自分も可奈美が無力なんて思わない。

自分の妹は自分より遥かに強い剣士だと思う。毎回の立ち合いは予想外の攻め方で攻めてきて、危うく負けられるところだった。

そして御前試合以来、可奈美の強さは段々と強くなっている。その剣の完成も近い……いずれ彼女もお母さんみたいな強さになると俺は思う。

ならー

「よし。俺が出院したら、俺と稽古にしようか?可奈美。久々二人でやってないから、今の俺と今のお前がどっちが強いのがお互い試してみようか」

「え……?お兄ちゃん?」

「そんなに自信がないなら、俺との戦いでお前が持つ真の実力を分からせてやる!今度は真剣勝負だ、こっちも刀使の力を完全に手に入れたし。」

「いいの？それより、今はタギツヒメの方がー」

「いいや、そちらの調査は朱音様たちも時間がかかるだろう。その前に、俺はお前の自信を立て直す」

「なんて……」

「だって、俺はお前のお兄ちゃんだから。お前が不調の時、元気を付けるのは『兄の役目』だ！」

「……ッー」

都は格好よく自分の胸に叩く。

そうすると、可奈美は目を大きく開いて都を見つめる。これで彼女も安心で自分の提案を受けて、気分も良くなるのだろうと思っていたら、彼女はちよつと嬉しそうな……いや、悲しそうな顔をしている。

「……やつぱり、ずるいですね。そうやって、いつも私を優しく甘やかして……そんなのずるいです。お兄ちゃん。」

「可奈美？」

「ううん、お兄ちゃんに悩みを意図的に放り出す私が悪いかも。お兄ちゃんの関心をもらえなかなと思つて、そうやって自分の弱みを晒し出した。本当に……私って、性格悪い女ですね。」

「急に、何を言つて……おい！」

立ち上がり、可奈美はとても辛そうな顔で隣に置いた鞆を持ち上げた。

「ごめんなさい。私はもうこれ以上、お兄ちゃんと一緒にいけないの。でないと、私はもつと自分のことが大嫌いになる。……帰るね、お兄ちゃん。」

「おい、可奈美……！待って！」

俺の叫びを聞かず、可奈美はすぐ後ろに向いて走つてこの部屋から逃げ出した。

残された俺は彼女を追う力がなく、彼女が俺から逃げ出すことを見るしかなかった。

どうして可奈美は急にこうなってしまったのは分からない。わかるのは彼女も辛がつているんだ。

「可奈美……お前はどうした。なんて……そんな悲しい顔を」

彼女の顔が俺の視線から離れる際に見せたのは涙が目から溢れ出している表情だ

その悲しい表情は、俺が一生忘れられないかもしれない。

そして、俺が思っていないなかったのは、この日から俺たち兄妹の関係はもう元に戻れないほど壊れてしまった。

それを壊したのは俺の不自覚の一言だと……今の俺はまだそれを気づいていなかった。

第60話：出院、そしてより騒乱の時代へ

「都、身体の調子は平気？」

俺に関心の言葉をかけて来た、白髪の少女。

俺が病院で休養を取ってからもう一週間くらいの時間が経った。そして俺の出院日に合わせて、彼女たちは鎌府の食堂で小さな出院お祝いパーティーを行う。

しかし、これをパーティーと呼ぶには規模があまりにも小さすぎた。「お茶会」と言った方が正しいのかも。

とにかく、机の上には舞衣の手製クッキーと？和手製の日本茶がある。

簡易なものですが、俺のためにわざわざ作ってくれたんだ。その気持ちは素直に嬉しい。

「身体の方は大丈夫。心配してくれてありがとう、沙耶香。」

「それは良かった……私と皆はずっと都のことを心配してた。」

「それは……本当にごめん。みんなに心配をかけちゃった。」

「それはいいって。俺たちは友達だから、心配するのも当たり前のことだ。」

「ミヤミヤは大事なフレンドデス！何かあってもミヤミヤはワタシたちの一部なんデス。ヒヨヨンもそう思いますよネ？」

「まあ……一応お前は私たちの隊長だし。お前がいないとすごく困る。」

「うふふ、？和ちゃんは素直じゃないよね。」

「うるさいー！」

顔が赤くなって、恥ずかしかっている？和はすごく可愛かった。

「それにしても、可奈美がこのお祝いに参加できないのは凄く残念だな。あいつもきつとお前がピンピンしている姿を見たかった。」

「可奈美が……」

「ワタシも凄く残念だと思うけど、最近頻繁に現れた荒魂討伐任務は流石に無視できマセン。」

「毎日、あんなに心配かけていたのに……」

「仕方ないよ、任務なんですから。」

そして皆の視線はこの場にいない可奈美が本来座るべく空席に移った。

こここのところ可奈美の姿が見えない。舞衣たちの話によると、可奈美は荒魂任務に忙しいから最近は姿を見れないらしい。

今回のお祝いパーティーに参加できなかったのもその原因だと。

けど、俺は知っている。

可奈美が俺から逃げたあの日以来……彼女はまるで俺を避けているみたいにならぬと姿を隠した。

きつと俺があの時、何か言うべきではないことを口に出してしまい、彼女を怒らせたと思う。でないと、彼女はここまで俺を避けるじゃなかった。

とりあえず早く彼女を見つけ謝らなければ。俺だって最愛の妹とこのまま仲割れしたくない。

「ねねっ！」

「うわあ!?!ねねー！」

そんな時、黄色の生き物が唐突に落ち込んでいる彼の頭に着地する。

「ねっ、ねねっ、ねー！」

「お前、無事だったのか！」

「ねねっ！」

ねねは都の頭に立っていて、大丈夫だというポーズをする。

「ふふ、ねねのやつもお前のことを凄く心配してたんだぜ」

「そうなんだ。…心配をかけさせて悪かったな。」

「ねねっ！」

頭の上で笑顔をする小さい荒魂。そんな元気そうなねねを見て、誰も良かったと思っている。

特に市ヶ谷での戦いで、皆を守るため、ねねは巨大化してタギツヒメと戦って酷くボロボコされた。

いつも元気溢れる小さい可愛いエロ魔があんな酷い目に遭わされるのは……誰もそのような結果を望んでいなかった。

例えねねに散々と胸のことをいじめられた？和でも、自分たちを守るため、ボロボロになるまで戦っていたねねのことをすごく心配していた。

だから今のねねを見て、？和もそいつの無事に微笑む。

都がいて、ねねがいて、皆がいるこの光景は彼女にとっては何よりの宝物だ。

もちろん、そう思っているのは？和だけではなく、この場にいる全員も同じことを思っている。何せ、この場にいる彼女たちはお互いを出会ってからはもう友達、仲間なんだから。

「ね、へえ。」

「お前は本当に俺の頭が好きだな。まったく生意気な奴だ。」

そう言うけど、ねねの甘えを軽く許した彼。

群馬の件と市ヶ谷の件以来、彼はねねとの仲はもつと深くになった。ねねは荒魂であっても、重要不可欠の仲間でもある。

故に、ねねのこともきちんと守らなければならぬと彼はそう決めていた。

「なあ、都。これから私達はどう動く？」

「え……？どうって？」

お茶会は数分ほど経つと、？和はそこで真面目な質問を都に投げ付けた。

けど、そこには一時に？和の質問意図がわからない反応を取る彼だった。

彼は時に妹みたいな天然の部分がある。そういうところは彼のいいところであるが……？和はこれからどう動くか聞きたい。

なににせ、タギツヒメは今も健在している。流星に仇なす大荒魂タギツヒメをこれ以上放置できない。

「タギツヒメのことだ。あれ以来一週間タギツヒメの動きがないぞ。」

「そういうことか……しばらく放置かな？」

「……はあ？」

しかし、都から意外な返答をもらった。

「おい、なぜ放置なの？防衛省の襲撃に、綾小路の刀使たちの離反。あいつらの足取りは簡単に追えるはずなんだろう？」

「日本の警察は優秀だとパパからも聞きマシタ」

？和に続き、薫もエレンも少し不満そうな顔で聞く。

これほど大きな災害を起こしたから、政府側もきつと無視しないはずだ。

「……確かにお前たちの言うとおりで。けど、市ヶ谷の戦いから既に一週間くらい経ちました。彼女たちの行く先は今でも掴めず、刀剣類管理局の情報科にもその捜査が引つ掛かっている。警察側と政府側も最初で捜査していたけど……突然停止した。妙とは思いませんかね？」

「……それは」

都の言う通り、政府は最初から積極的に捜査に加えたが、ここ数日やめた。それ以後、情報科からの捜査進度も引つかかったようだ。

都の口から聞き出した事実には、？和たちは不気味な感覚がしてきた。

ちなみに都が知っていることは出院する前、雅から伝わってきた現状に関する情報だ。

彼女はとても有能な情報屋なのだ。こういう時は彼女の情報が凄く頼れる。

「多分なんだけど、？和が折神家に追われていると同じ、何者か警察の調査介入を拒んでいる。あるいはタギツヒメと近衛隊を匿うのだろう。」

「なに？」

「そんなやつがいる……いや、まさか綾小路の学……」

「いや、それは違うと思うよ。管理局は特に市ヶ谷の第二の襲撃の後、綾小路をじっくりと捜査していた。ですが、肝心のタギツヒメと近衛隊を見つからなかった。」

「それに学長とはいえ、相楽学長も本部の許可なく本部の敵を匿う力や権利はありません。」

「なら誰かそんなことを……！」

「わからない。けど、狙い先が全く見つからない状況下で動いていくより相手が何かをしてから、動いた方が対応しやすい。俺たちも暫く相手の次の行動を待つしかない。」

「でも、それって手遅れになるぞ！」

「その時はその時だ。防衛省の作戦が失敗した俺たちは特に劣勢になっていく。今の戦力じゃ、タギツヒメと近衛隊に敵わないだろう……相手側も俺がタギツヒメとの一騎打ちを許してくれないだろう。」

相手はあのタギツヒメだ。一週間の猶予を経て何にもしないはずはない。

きつと何かしらの準備をしている。

「……………都くんはこういう時でも冷静ですね。凄いです。」

「お前たちのことに関わらないなら、俺はいつだって冷静だ。」

「それは自分で言うの？」

「だって大事だもん。お前たちは俺の大事な隊員であり、仲間であり、友達なんだ。何かあっても必死に守ると決めた。」

皆を見回し、都は決意する顔。

(自分が入院する間、彼女たちは各々一晩自分の側で見守ってくれた、無事に祈ってくれた。そんな彼女たちの思いは大切にしたい。だから可奈美だけではなく、ここにいるこの娘たちを守りたい！それは俺が出院した当日決めたことだ。)

「お前……………」

「都くん……………」

「うん、私も。」

「なんか…そう言われると照れるぜ」

「とてもカッコいいデス！心臓がやばいデス……………」

そんな都の発言に皆はそれぞれの反応をする。その中、特に薫とエレンの顔が赤い。

「うふふ、相変わらず無節操な発言を口に出したわね。」

「やあ、出院おめでとう。都」

そんな時、食堂の出入り口から聞き覚える声があった。

「獅童さん、寿々花！」

その声を尋ねていたら、親衛隊の獅童真希と此花壽々花が食堂に入ってきた。

「お元気そうで何よりですわ。体調の方はもう大丈夫かしら？」

「もう大丈夫です。寿々花の関心をもらえて嬉しいです！」

「うふふ、相変わらず口が甘いだね。」

「それよりこれは遅れたお見舞いだ。済まなかった…。最近の僕たちはずっと夜見の行方を追っていた。」

「……皐月さんのことか……やつぱり……」

「うん……あの夜、彼女に逃げられた。」

視線を下げ、獅童はかなりやられている顔だ。大事な仲間を取り戻せなかったことに悔やんでいて仕方ないと感じたのだろう……全く責任感が強いな、獅童さんは。

「なら次こそ、彼女を連れて戻す。親衛隊第一席なんだから、こんな程度の失敗で落ちるな！なあ？寿々花。」

「……都くん。ええ、そうですね。ただ一回の失敗で私たち親衛隊は崩しません。」

「お前たち……うん、そうだね。都、寿々花、礼を言う。」

「いいって。ただ次は手合わせしてくれよ。今度は小技を使わずお前と戦いたい。」

「……ああ、もちろんだ。僕もお前との立ち合いも楽しみしている。」

「やれやれ、血の気が強い二人ですね。でもこれこそ親衛隊ですわ。」

二人に励まされて、獅童は間もなくの間に立ち直った。

(これも都の力か……)

励まされた獅童の方を見た？和。彼女は改めて都のこういうところがすごいだと思っている。

どんな時でも、彼は確実に刀使たちを支え上げた。？和もかつてそ

んな彼に支えられて、ここまで戦いに来た。

ううん……自分だけじゃない。ここにいる皆は彼のおかげでここに集まって巨大な絶望と立ち向かう。

(本当に凄いやつだよ、お前は。…昔からはずっと私の手を引いて、進む道を示してくれた。私にとつてお前は輝く光なんだ。)

だからと言って、彼に過度に頼っちゃいけない。あの夜、彼女は彼を失うことを恐れていた。……彼を頼りすぎだから、彼を守りきれなかった。

そういう甘い自分に？和は許せなかった。だから今度こそ彼を守ると？和は改めて誓う。

例えば自分の命が失っても、この母から継いだこの剣で一番大切な幼馴染を守る。それが十条？和の新たな覚悟だ。

もう二度と誰かを失うのがごめんだから。

けどそんな時、学食につけたテレビは突然ある急報を入った

その急報によって、刀使たちは波瀾の時代を迎えた。

◇

同時刻、刀剣類管理局作戦指揮本部ー。

「予想より動き早いですね……」

竹島 雅は大きなモニター画面に映っていた現場配信を見て呟く。

そして彼女の隣にはテレビの配信を見て唾然になった折神朱音と真庭本部長。

「タギツヒメ……なんて……」

「まさか、こうも堂々と姿を現すとは……」

彼女たちの反応は普通だ。高津学長が裏で政府と絡むという情報を事前にもらった雅も例外なく同じ反応。

何せ、政府の緊急記者会見ライブは大荒魂タギツヒメを映ってい

る。

『我が名はタギツヒメ。お前たちが言うところの荒魂である。』
テレビが映る現場で偉そうに座っている禍神・タギツヒメ。

彼女は二十年前のあの大地震以来、初めて日本国民の前にその姿を現し、自らの存在をバラした。

『我らは人間との共存を望み、それを実現するためにここにいます。』
「人間と……共存……？何の冗談だ……タギツヒメは人間を滅ぼす
じやなかったの？」

「まさか、これはタキリヒメを吸収する影響なのか？」
「それは違います。朱音様。」

朱音の推測をあっさりと反論する雅。彼女は確信の瞳で朱音の方へ見る。

「私は多少裏社会の人と接触しているおかげで、人の瞳からその人はどんな人なのか知ることができます。…なのに、あの荒魂の目には
“人を見ていない”。」

タギツヒメは本心で人間と共存するつもりがなかった。高津の学長も同じ、最初から生徒たちのことを目に入っていなかった。

だから、彼女はあんな平然の態度で非人道実験を行った。途中で失敗者が多く、荒魂化した対象もいる。

それを片付けるため、雅は鎌倉特別危険廃棄物漏出问题の日からずっと秘密にそれらの実験危険対象を探し出して処置する。

幸いのところ、今だに調査隊が遭遇していた『スルガ』という特殊個体の第二体は見つからなかった。

あれの強さは既に大荒魂レベルに近い。普通の刀使では相手にならない。

『しかし、人間の中には荒魂との共存を望まぬ人がいる。荒魂の討伐を名目に、大いなる力を手にしている者たち。――刀使だ。』

目を細め、タギツヒメはまるで仇なす者を見ていたみたいにそう語っている。

『彼女らは、対話を求める私の声を無視し、言葉を解さぬ荒魂と同様に討ち滅ぼそうとした。我はただ、身に降りかかる火の粉を払おうと

したにすぎん。それが二十年前の真実だ。』

「よくもこんなデタラメを……！」

机を強く叩き、真庭本部長はタギツヒメが言っていたことを凄く怒っている顔だ。

まあ、二十年前の真相を知る彼女がこういう反応を取るのも仕方ないことだ。あの戦いで彼女たちは二人の大事な友を失い、もう一人は二十年の苦痛を續いて大荒魂を体内に封印し續けていたのだ。

重大な犠牲を払った彼女を罪人扱いだと……真庭本部長は断じてそういうデタラメなことを国民たちに教えたタギツヒメを許さない。

紫と篝先輩、美奈都先輩の犠牲と……あの子たちが彼女たちの過ちを償うために、命をかけて大荒魂と戦ったのも……全てかこの荒魂のデタラメの話によって世間に悪だと認識されている。

「市民の多くは大災厄の真相を知りません。タギツヒメの狙いは国民たちを利用して我々刀剣類管理局を潰すということなんですよ。」

「けど、その前に政府は……」

「政府は何もしません。むしろタギツヒメたちの助力になり、我々という脅威を消し去るつもりなのでしよう。」

真庭本部長の話を反論する雅。

「それはどういう……」

「まさか、この前に言っていたことと何の関連があるのでしようか？」

「はい……政府は既にあちらの手に……」

『これから先は私からご説明いたしましょう。』

そんな時、放送が続き。西装を着ている、顔から結構歳を取っている男が何かを話そうとしている。

その男は――。

「内閣官房長官?!」

「そんな大人物がなんてあんな場所に……」

「……………」

二人が再び啞然するところ、雅は口を閉じた。これから先のことは

説明しなくても……この放送を見ている管理局の者は薄くても、このまずい事態を理解するだろう。

二十年前、米軍と裏取り引きをした日本政府は極めに大災厄の真相を隠そうとした。

なぜなら、この件が国民に知られたら日本政府は大災厄で亡くした命や建物損壊と国民たちの精神的な傷という責任を問われる。

当時、常任した内閣官房長官をメインにする政府官人は自然にその責任から逃げられない。最悪の場合、政府は国民たちの信頼を失うことになるのだろう。

それを回避するため、政府側はずっと折神紫がいる刀剣類管理局を尽くした。

全ては真実を国民たちに知らせたくないためである。

そして高津の前学長はまさにその件を利用して、政府を脅かした。とても悪意すぎる一手だ。

『――そして、今日はもう一人詳しい話をできる方をお連れいたしました。――鎌府女学院学長、高津雪那氏です。』

「……………!!!」

その名前がテレビに出すと同時に、あの女の顔が久々にこの目を焼き付けた。

よりによつて、またあの嫌な顔を見られるとは……………。



―同時刻 鎌府女学院食堂―

あの女の登場に、まず驚いた。

まさか、彼女の顔を二度とこの目で見えるなんて思わなかった。

高津雪那。鎌府の学長であり、俺と特に腐れ縁が深い人物。

五ヶ月前……………ううん、一年前から俺は沙耶香の件から彼女と何度も

敵対した。

彼女が沙耶香にしたこと、皐月さんにしたことや非人道実験を行うことに俺は許せなかった。だからボコボコにした。

あんな容赦ができない、駄目な教育者は初めて見た。彼女に対するのは哀れと怒りだけだった。

「学長……」

「沙耶香……」

沙耶香が高津学長を見た一瞬、まず驚いていたが、すぐ視線を下ろした。

その様子はとても悲しく見える。

（またあの女に感情があるのか……やっぱいい子だよなあ、沙耶香は。）

そして、モニターが映っている白いスーツの高津学長は演説を始めた。

『たしかに二十年前、タギツヒメは大災厄をもたらしました。しかし、彼女はそれ以上の被害を望まず、刀剣類管理局による拘束を受け入りました。』

偽りで作り上げた真実を聞き、マスコミたちは急いでシャッターを押す。

このようなデタラメなことに記者たちは疑うことなく、ただいたずらに嘘まみれな言葉を記録する。

これは彼らの仕事だ。善悪と関係なく、国民たちが興味を引き上げられるなら、どんな偽りの真実でも本物みたいに被る。

それがマスコミ。人そのものを潰せる悪意の力だ。

『その後もタギツヒメは暴力に訴えることなく、ただ静かに対話を求めました。その姿を目にし、刀使の中にも考えを改める者が現れました。』

『人は対話することにより、文明社会を築き上げた。ならば、対話を求める荒魂との間にも信頼関係が築けるのではないか……と、私もその一人です。』

まるで自分の神を称える信者みたいに高津学長はそのことを皆に

伝えようとする。

『しかし、折神紫は違いました。タギツヒメの声を無視し、監禁を続けたのです。……そして、イチキシマヒメが生まれた。人間への疑念から生じたもう一人のタギツヒメ。』

おいおい、あんなに大好きだった折神紫をこんな簡単に切り捨てるのか……やっぱりお前は最高のクズ女だな！

かつての高津雪那は折神紫に慕う狂った女。そのせいで沙耶香と皐月夜見は酷い目をされた。

そして、今はこうも大好きだった偶像を貶めている。本当に気持ち悪い最悪の女だ。

『タギツヒメから分裂したイチキシマヒメは、鎌倉からの脱出を試み、結果として関東一帯に大量のノロが撒き散らせてしまった。』

タギツヒメが持ったらす災厄をイチキシマヒメのせいにする。全く気分が悪いデタラメだ。

『しかしその混乱の中でも、我々は綾小路の相楽学長の下、綾小路の刀使たちを中心に編入した『近衛隊』と共にタギツヒメをお救いしたいのです。』

「近衛とは、また仰々しいものですね。」

「タギツヒメを女王にても担ぎ上げるつもりか……」

獅童さんたちの不満は良くわかる。自分たちに正当な理由を付けながら、人間の敵であるタギツヒメを神として崇る……全く恐ろしい発想だ。

『鎌倉から脱出失敗したイチキシマヒメは、今も管理局の手の内にあります。しかし、イチキシマヒメの目的は人間への復讐。そのみです。もし彼女が力を解放すれば、これまで以上の災厄がもたらされるでしょう。そんな危険な存在を折神紫は今でも手放そうとしないのです。』

「これは完全に狙い先をイチキシマヒメの方に投げましたわね……」

「ああ……タギツヒメがしたことをイチキシマヒメに投げれば、彼女は正当性がもらえる。自分を正義の味方にするつもりなのね……」

あのババア。」

「……………」

口が悪いのはすまなかった、沙耶香。けど、あの女がすることは完全に俺たちを悪者だと押ししている。

俺だけならそれでいいのですが…………お前たちにも悪い評論をさせられたくないのだ。

『それを阻止するためにも我々、刀剣類管理局維新派はここ、東京を拠点に決起します！』

「刀剣類管理局維新派だと…………!?」

「刀剣類管理局を分離するつもりか…………!」

高津学長からその話を聞いた仲間たちは驚愕や唾然の反応をする。自分たちが所属する組織が二つに別れることに誰でも驚かされた。だが、この場でただ一人が冷静に考え込む。

その人は都だ。高津学長が自分たちを正当化にする時点で、彼はこのような結果を嫌な予感がしていた。

あの女がすることはあまりにもわかりやすかったからだ。しかし、流石に今回はまずい…………国民たちは真実を知らない、政府側もあちらの側に立つ。

それはつまり、これから管理局と自分たちはこの国と敵対するかもしれない…………マジ最悪。

その後、高津学長は刀剣類管理局にイチキシマヒメをさし渡すと要求した。

これから先、刀剣類管理局は二つに分けて、動乱の時代へと突き進んだ。

第61話：波瀾の中、新たな可能性をもたらす者たち。

夜、東京都世田谷区にて――

少数人の足音が世田谷区に鳴り響く。ただ少数人しかない刀使部隊は急ぎに任務の指定地点へ移動している。

「今回の任務は俺と？和と沙耶香が組み立てた小隊。これくらいの面子だとすると、目標も相当の脅威があるのでしょうか。二人とも油断しないように」

彼女たちより前へ走る男性は二人に任務の危険性を警告しながら、最近いよいよ使う機会があったスペクトラムファインダーで荒魂の詳細位置を確認する。

「お前こそ、私たちよりも自分の身を心配しろ。お前はいかに強いのを知っているが……対荒魂の経験がまだまだだと薫から聞いたぞ」

「うん。無茶は良くない。」

そうしたら黒き長髪の娘、十条？和は彼のことを心配するよう助言する。続いて二人より年下の糸見沙耶香も同じことを言う。

「それは……なぜなる？」

「他人の座右の銘をバグるではない！お前に何かあったら、私と沙耶香は可奈美たちに向ける顔がない！」

「心配性だなく。でも、心配してくれてありがとう。」

「べ、別に心配しているわけじゃ……」

「？和、顔が赤い。」

「なっ……いき、気のせいだ！」

沙耶香の助攻の上、顔がさらに赤くなった？和はいつもより狼狽えていた。たぶん本当のことが言われたから照れてるのだろう。

（それにしても……あの日から随分と経ってしまったな。向こう側はまた大きな動きがない……まあ、こっちも同じですが）

あの放送からもう5日が過ぎ、刀剣類管理局は二つに分かれた。そんな荷重い態勢の下、俺たちは前と変わらず荒魂討伐を行う命令を受け取った。

作戦本部からの伝達によると、しばらくイチキシマヒメの位置がバレることがないから、いつも通り荒魂討伐を続行するとお願いされた。

正直、またタギツヒメ側がこれから何かをしようとするかは心配したけど、朱音様から折神紫は何かしらの策を用意していると言っていたから、信じて任務を外向するわけだ。

それでも心のうちにはまだ僅かな不安が残っている。相手は政府すらも利用する怪物だ、もっと用心しなきゃ。

「都、何をポーとしている？今は任務中だぞ。」

「え……？」

回想から現実を引き出され、いつの間にか？和は俺と並走し、俺がポーとしているところを見た。

「…あ、ごめんごめん。ちよつと考え事。」

「……考え事？隠しことだったら早く白状しろ。もうお前に相談なしで無茶しているところを見たくない」

「……本当に心配性だな、？和。」

「お前はいつも一人で体がボロボロになるまで無茶しているからだ。それを見て心配する人間も大勢いるから、あまり何事も自分一人で背負うではない！特に防衛省の件のあとは」

そう言い、？和は今度心配する顔を隠せず俺をじっと見つめる。

防衛省の件以来、みんなが妙に俺のことを気に掛けている。特に討伐任務の時は俺より先に荒魂を討伐してくれる。あれはまるで俺が荒魂と直接戦うことを避けさせるように見える。

たぶんあの防衛省の夜、俺がタギツヒメに殺されかけたことが原因だろう……。

「……ごめん。」

「ふん、本気に謝りたいなら、もう私達に心配させるな。あの子…沙耶香もずっとお前のことを心配しているぞ？あまり口にしないけど、お前のことをずっと見ていたぞ。」

後ろに振り返ると、沙耶香は確かに心配しそうな表情をしていた。

「沙耶香だけではなく、エレンも薫もみんながお前のことを関心し

ている。だからもう防衛省の時みたいに一人でタギツヒメに挑まな
いてくれ」

「……わ、わかったよ。」

「……本当に理解したのか？ 誤魔化するような答えは許せないぞ」

「う、うん！ わかった、本当にわかってるから！」

？ 和から迫ってきた言語の圧力に俺は仕方なく頷く。彼女の性格
だと、俺がそうするまでずっと迫ってくるだろう……。

しかし、今の現状では？ 和たちと一緒にタギツヒメと戦う可能性は
あまりにも非現実的だ。敵もきつとそうさせないだろう……。
なら、やはり俺がタギツヒメをなんとかするしかない。

ビシユーン

「……………ん？」

「都、急にどうした？」

「なんて止まるの？」

そんな時、妙な音が起きていて、都が急に足を止まった。
それを見て、二人も止まってその理由を尋ねる。

「さつきスペクトラムファインダーの反応が消えた……」

「え……？」

「荒魂の反応が消えた……？」

都の話しに二人も呆れる反応。

さつきの音はスペクトラムファインダーの反応が消える音だった。
画面内の荒魂反応はその一瞬なくなった。

これは討伐されたのか、それとも何かしらの理由で消されたのか
……。

「俺たち以外の出動部隊がないよね？」

「いないと思う。」

「うん。」

念の為、二人に確認する。そうしたら、彼女たちは自分たち以外の

部隊がいないと返答した。

これはちよつと変です。他の刀使部隊じゃなければ荒魂は自動消滅するわけではない。

「……………二人とも、警戒を上げてそのまま現場に確認するぞ！」

「はい！」

「わかった！」

とりあえず、警戒して現場で確認する。流石にノロの回収に放っておく訳にはいかない。

◇

「はい、ノロの回収を始めてください」

荒魂討伐を先に処置した内里 歩は維新派のノロ回収班に連絡する。

「フフツ、もう一人前の隊長なのね。歩ちゃんは。」

「山崎先輩！来てくれたんだ！」

同じく近衛隊仲間の山崎穂積を見て、歩は嬉しそうな顔で彼女に近づく。

「うん、少し歩ちゃんのことを心配しちゃって。歩ちゃんは初めて部隊を率くでしよう？」

「はい！少し緊張したけど、何とかできました！」

「それは良かったです。」

小さく優しく笑う穂積。彼女は市ヶ谷での作戦を遂行する前に緊張する歩を励ました。その件があつて、歩は彼女への好感が結構高かつた。

そしてその日以来、彼女のアドバイスがあつて、歩は近衛隊での生活も何となく慣れていた。

「それじゃ、用事が済みましたので私は貴女の隊員たちと少し世間話をしますね。その中にはちよつと私の知り合います。」

「なるほど。なら、ごゆっくりしてくださいね！ノロ回収班はもう少し時間がかかりそうです。」

「ふふっ、わかりましたわ。」

礼儀正しく、穂積は隊員の方へ行き、歩を後にした。

「さて……私も次の任務を確認するか。先輩にも、あの人にもっと褒められたい！」

そう言っつて、歩はスマホを弄り、次の指示があるかどうか確認する。そんな時――。

「綾小路の人……!?!」

「……近衛隊か！」

「この人は……」

歩との立場が違い、旧刀剣類管理局の刀使たち三人がこの場にやってきた。

「あ……！貴方は確か……衛藤さんのお兄さんですよ？そして、糸見さんもいる！」

「歩……」

久々に知り合いの顔を見て、歩は嬉しそうな表情をしていた。が、その表情から何かしらの狂気が取り憑いている。

沙耶香もそんな歩にドン引かれて、都の後ろに隠れる。

「もう――遅かったじゃないですか！こっちはもう終わっちゃってますよー！」

「……ここで何をしている？近衛隊！」

「？和、少し落ち着け。交渉は俺に任せろ」

最初から敵意満々の？和が明らかに不正常の歩に尋ね、抜刀前の動作もしたが……すぐ彼に止められた。

「………わかった。」

抜刀態勢を解け、？和は都の指示に大人しく従う。

「ふう……。さて、改めて聞きますが、貴女たちは一体ここで何をしている？」

「何^{なに}っつて……荒魂討伐ですよ！荒魂を倒すのは刀使の務めでしょう？」

「タギツヒメも荒魂。」

「タギツヒメ様は別ですよ！あの方は神ですから！」

「神……」

歩の口からタギツヒメを神だと称えると聞いて、都の顔は一瞬で曇りなくなった。

タギツヒメは単なる神の名を騙る大荒魂だ。しかも、人を滅ぼすつもり。彼女の本性を知る都たちは自然とタギツヒメのことをただの化物だと認識している。

「それより、衛藤さんのお兄さんはあの時、ヒメと戦ったんですよ？私は見てたんですよ！とても強くて、私、凄く気になります……！」

「そ、そうか？」

「ええ、衛藤さんとどつちが強いのか！」

「……」

ただ狂気と不気味しか形容し得ない表情。本来、ここにいるのは単純でワクワクしている、普通に可愛い女の子なんだけど……今、彼女の顔は引かれるほど不気味だ。

これほどの狂気を都の本能が彼にこう伝えた。彼女は危険だと……。

「あらあら？こんな夜に十条？和さんと会えるなんて幸運ですわ。」
もう一人近衛隊の刀使がどうやら都たちのことを気付いたようで、こつちへと歩いてきた。

「お前はあの時の……！」

彼女の顔を見ると、？和はすぐ声を上げた。

「知り合い？」

「防衛省で私と戦った刀使。」

「なるほど……」

「あら、私のことを覚えてくださって光栄ですわ。そちらにいるのは糸見沙耶香さんと衛藤 都さんですね。この場で要注意対象たちに会えて光栄です。」

彼女はスカートを少しだけ捲り上げて、お嬢様のような気品がある挨拶をする。

「山崎先輩、どうしたんですか？もう友達との話が終わったんですか？」

「ええ、それと『ノロ回収班』がもうすぐ到着するから、そろそろ撤収したほうがいいですよ。歩ちゃん。」

「わかりました。衛藤さんのお兄さん、また今度会うとき、ぜひ私と戦ってくださいね！私も貴方と戦いたいです！」

「十条さんにも覚悟してくださいね。次に会うときはどっちか上なのか、必ず証明して見せますから」

「和だけに敵意を向く苗字が山崎らしい冥加刀使。彼女はどうか？和と何かあったらしい……。」

「そうそう。次に会うとき、あなたも覚悟してくださいね、衛藤都さん。ヒメを脅威する人間はこの近衛隊が排除いたします。」

「……………」

「それじゃ、ご機嫌よ。皆様。」

そう言い残して、二人は撤収の方へ向かった。

どうやら事態はますます悪い方向に進んでいたようだ。



翌日、朝。

鎌府女学院、食堂――

「歩ちゃんたちと出会ったの!?!」

沙耶香から昨晚の話を聞いて、可奈美は驚く反応をする。

「うん。昨晚、現場で会った。」

「彼女は可奈美と沙耶香の知り合いだよね？俺のことも知っていた。」

昨晚、歩っていう子は俺のことを衛藤さんのお兄さんだと名付けた。それってつまり、彼女は可奈美のことを知っているはず……。

もちろん、単なる防衛省の戦いで俺のことを知る可能性もあるが……俺のことを衛藤さんのお兄さんと名付けた以上、やはり可奈美のことを知っている。

「……………うん。ある荒魂討伐の任務で出会って、それから一緒に剣の立ち合いをしました。」

「可奈美のことを凄く憧れているな。」

「……………」

「これで可奈美も一人前の刀使になったのだなく。」

「……………」

「ふん、自分のことを憧れる後輩か……それはいいことではないか？ 敵側に回したけど、都の言うとおり立派になったな！ 可奈美。」

「……………」

都との対話をほぼ無視する可奈美。それどころが、彼女は一回も彼と直視していない。

あの日以来、衛藤兄妹はずっと冷戦のままにいた。そのこと舞衣たちも知っていた。薫もさつき助太刀したけど……可奈美は相変わらず何の返答もしてくれなかった。

そんな可奈美を見て、都は更にどうしようもない気持ちになった。自分と可奈美のことはともかく、彼女を憧れた後輩が冥加刀使になってしまった。ノロの力を使う以上、彼女は親衛隊のような末路しか残されない……。

もちろん、寿々花のようなノロを体内から排除する希望があるが……その前提に彼女たちを倒すしかない。

そう思うと、可奈美がさらに元氣ないのも仕方ないことだ。特に刀使同士の戦いは元々刀使本来の役目でもないし、戦い自体も立ち合いでない。

もしやこの状況もタギツヒメの思い通りなのかもしれない。憎むべき刀使を刀使で排除する……何という気性悪いことだろう。

……………ひとまず雰囲気を変えよう。可奈美をこのまま落ち込ませた

くないから。

「そ、それより歩っていう子以外にもう一人の冥加刀使に会った。彼女は山崎穂積と言うんだ。」

「誰だ？あいつ」

薫はエレン手製のかんぴよう巻き（朝ごはん後のデザート扱い）を美味しく食べながら、そう聞く。

「御前試合の第一試合で？和に負けた子。彼女はどうかやらその件で？和のことを恨んでいる。」

「よく覚えていたのね。都くん。」

そうしたら、舞衣は意外そうな顔をする。

だって彼は興味が持たない人の名前を覚えられない悪い癖がある。今だにもクラスメイトの名前も誰一人も覚えていない。

「いや……実は、雅から送ってきた情報です。情報を受け取る前に俺はちつとも彼女のことを覚えていないんだ。」

「なるほど……いつもの都くんですね。」

舞衣は苦笑う。都はいつもこれだから、友達が少ない。

幸い、彼のそばには彼のことを大事にする美少女たちがいる。友達のほとんどは刀使なんですが……。

「？和ちゃんが恨まれたのか……」

「私は大丈夫だ、可奈美。別に恨まれても、私は気にしていないから」

可奈美に余計な心配をさせたくない？和。彼女は相変わらず人思いだ。

でも？和が誰かに恨まれることは、やはり心がどうしても受け入れない。彼女はあんなに可愛く優しい女の子なのに……。

「しかし、その理由でベツタン女を恨むのか……けっこう器が小さい人なんだね。」

「そうですね。例え御前試合で負けてもワタシと薫は別に気にしていません。」

「あれはただお前たちが手抜きしすぎたじゃないか？特に薫が一番やる気がないように見える。」

「…………バレたか」

「当たり前前だろ！当场でじつくりと鑑賞しているから」

「え…………？それだと、薫ちゃんはわざと私に負けたの!？」

当時、薫に勝ち取った舞衣。その反応からすると、彼女は薫が本気ではなかったことを気付けなかったみたいだ。

「まあ、そうだよ。何にせ、俺たちの仕事は荒魂の討伐だ。こんな余興みたいな試合に興味がない。…それにあの時の俺とエレンは潜伏中だから。」

「そうなのですか…」

薫の理由を聞いて納得しようとする舞衣ですが、彼女はもうやらそれを軽く受け入れない。

刀使での戦いで相手に手抜されたら、それは自分のことを舐めていること。優等生である舞衣は当然不満なんだろう。

「あまり落ち込まないください。マイマイ。貴女の実力はワタシたちはよく知っていますから！これからも頼らせてくださいネ！」

「うん…………ありがとう。エレンちゃん。」

エレンに慰められる舞衣は気分が少し回復されたみたい。

「あ…………それと、ノロも彼女たちに回収された。」

「ノロが回収された…………？」

「でも、彼女たちの拠点が東京駅のホテルのはず…………」

「そのはずなんですけど…………どうせ、高津…………学長の命令なんですよ。彼女は政府の応援が得ているから、行動範囲を拡大しても不思議ではない。」

「ノロを社に祀るのも想像つらいですネ…………」

「それじゃ…………」

「沙耶香の思った通り、集まったノロはタギツヒメに吸収されるのでしょう。祀るより自分の力を増幅させた方がいい。」

「タギツヒメはこれ以上強くなっていくってこと？」

あまり想像したくないが、舞衣ちゃんの言う通り、タギツヒメはさらに強くなるって望んでいるだろう。

その理由はやはり……

「恐らくミヤマミヤを脅威だと認識したのでしよう。」

「今だに彼女と対抗できるのはこいつしかないしな。」

薫とエレンは都の方へ見る。彼はあの夜にタギツヒメの腕を斬り落とした。

今まで誰でもタギツヒメにあれ程のダメージを与えられなかった

……特にタキリヒメを吸収したタギツヒメは滅茶苦茶強かった。

そんな彼女を撤退させたのは都だ。

彼は間違えなく刀剣類管理局の切り札だ。

「そのための力の増幅か……なら彼女が都を倒せるほど成長する前に彼女を倒さない」と

「でも今の私達では……」

「何なら、特訓してあげようか？」

そんな時、食堂の入り口に二人の男がそこに立っていた。

あの二人は――。

「「お父さん!?!」」

可奈美、?和、都が同時に驚愕の声を上げた。あそこに立っているのはこの三人の父親である。

その叫び声と共に、薫たちも驚愕の声を上げた。

◇

数日前、刀剣類管理局局長室。

「お久しぶり、紗南と朱音ちゃん。」

「今回の面会を受けていただいております。」

二人の男は朱音たちの対面に座り、熱いお茶を一口にした後、カッブを机の上に軽く置く。

彼ら二人は朱音たちの旧識であり、彼女たちと縁深い人物だ。

そんな二人は今日、わざわざ刀剣類管理局に足を運んできた。

「お久しぶりです。『衛藤刀也』さんと『十条一樹』さん。」

「二十年ぶりだね。どんな風がおまえ達をここに連れてきたの？」

真庭本部長が両手を胸の前に組んで、懐かしい顔で二人に訊く。彼ら二人は衛藤兄妹と？和のご親族。

そして衛藤刀也は鎌府女学院の前身、鎌府高等学校の卒業生であり、学生時代の紫たちとは古馴染関係であった。

因みに十条一樹も十条家分家という繋がりで二人と面識があった。

「どんな風か？それは親心かな？自分の子供が所属する組織がバラバラになっていて、親として見てられないですよ。」

「こつちも同じ理由だ。今の刀剣類管理局はかなりまずい状況に落ちてしまったのですね。」

「申し訳ありません、私たちもこのような事態を予想できなくて……親であるあなたたちに心配をかけさせてしまった。」

「私からも、アンタたちの子供たちに安心できる職場を作れないことに謝る。加えて危険事もたくさんやらせた。すまない。」

朱音は歉意を持って二人の父親に謝る。その隣の真庭本部長も同じ歉意を示す。

これは古い知り合いとしてではなく、彼女たちの長官として彼女たちの親たちに謝罪する。

「それはもういいって、貴女たちを謝らせるため、ここに来るじゃない。」

「私達が関心しているのは子供たちの方です。それと、本来消えるはずの大荒魂タギツヒメがなぜ正々堂々と東京にいることと政府はなぜタギツヒメ側に立つなのか」

「それは……」

「……………貴女たちの事情も大概理解しているつもりだ。大変だと思うけど……………これから貴女たちはうちの都と可奈美に何をやらせてこの事態を平和に終わらせることについて説明して欲しい。」

「刀剣類管理局はこれからどうする？『折神紫』はこれからどう動く？」

「……………姉が潜伏しているのをご存知ですね。」

「それはもちろん。タギツヒメと対抗するならば、折神紫が必要なんだ。」

「そしてうちらの子供が必要ということも知っている。千鳥と小鳥丸は唯一タギツヒメに致命傷を与えられる武器だ。うちの息子もその追加の一つなんだろう?」

「……………お見事と言うべきなのでしょうか」

「それより、どこからその情報を手に入れた?」

真庭本部長は目を細く刀也の方に訊く。別に彼を疑うじゃないが、衛藤 都に関する情報は全部封鎖されたはず……………。

「どこでもない。ただ自分の息子を信じているだけだ。妹のためなら、なんでもできる可奈美のお兄さんだぜ。」

「……………ふう、君らしい答えだね。昔と変わってないね、アンタは」彼の答えを聞いて、一息を吐く真庭本部長は刀也が昔のままに維持していることに懐かしく感じる。彼は昔から美奈都先輩と気が合うから、いつも仲良くように見えた。

まあ、喧嘩の数は多いけど。彼と一緒にいる美奈都先輩はとても楽しそうに見える。バレンタインの時も……………いや、その回想はやめておく。

「それで?…これからはどう動く?」

「手先が見つからないなら、私たち二人の方法を試してくれない?」
「方法?」

「ああ……………いよいよ私たちの経験を子供たちに教える機会が来るよ
うだ。」



現在に戻る。鎌府女学院食堂。

「「なんてお父さんがここに!?!」」

三人が一斉に発音する。

「なぜって? あれ程の騒ぎを起こしおいて、父さんはただ家で子供の帰りを待つと思う?」

「私も? 和のことを心配で、わざわざ鎌府に来ました。大変な状況になってしまったわね、? 和。」

「お父さん……」

自分の娘である? 和に優しい目付きで見た彼女の父親。それをちよつと不慣れている? 和は自分の親にどういう顔で返すのが迷う。こうして親娘として向き合うのはもう「一年ぶり」だから。

「可奈美と都もこの間、かなり苦勞をかけたみたいだけど、お互いもちやんと成長したようでお父さんは感動するよ。」

「お父さん、なんてここに? それと、特訓っていうのはどういう意味?」

さつきお父さんが言った「何なら、特訓してあげようか?」という言葉を気になる可奈美。

「字面的の意味ですよ。お前たちは今のタギツヒメに勝てないと紗南から聞いた。だから、これから私と一樹はお前らを徹底的に鍛え上げようと思っっているんだ。」

「鍛えて……本気?」

「ええ……本気です。もちろん私達では写しを貼る君たちに勝てないですが……剣で戦う経験は君たちより多く持っている。お互いが生身なら、多分君たちに負けないと思う。」

「生身……」

「そんなに心配せんでもええよ。一樹はんはともかく、刀也はんなら、生身での試合で美奈都先輩以外に負けらへん。」

「五条学長!? それと羽島学長も……」

学食の入り口に現れた平城学館の学長と美濃関学長の登場に驚く刀使たち。

そこで羽島学長は五条いろは学長に続いて補充説明をする。

「衛藤兄妹は特にご存知なのかもしれませんが……衛藤さんたちのお父さんは美奈都先輩以外の人に負けたことがない。生身とはいえ、紫もそんな彼に勝ったことが一度もない。まあ、負けたこともないですけど」

「あの紫様も……!?!」

「マジかよ……家族揃ってチートかよ、衛藤家の遺伝子はどうなってるんだ?」

「oh………」

「都と可奈美が凄いという理由……」

「お前たちの異常の強さは遺伝か……」

「違うよ!?!和ちゃん!?!」

「誤解しないで!」

そして羽島学長からそんな事実を聞いて、皆は再び衛藤兄妹のチートのような強さにエグいと認識した。

そしてこの後は本部長からの直接の命令によって、可奈美たちはイチキシマヒメが見つつけられる前に可奈美と?和のお父さんの特訓でさらに戦力を強化することになった。

第62話：特訓開始。

――私の記憶にある妻はいつも楽天的な思考で日々を楽しく過ごしていた。

よく考えれば彼女はずっとそうでした。結婚する前も後もずっと曇ることのない太陽みたいに笑い続けた。きっと自分は彼女のそういうところに惹き付けられたと思う。

彼女が笑っているところが好きだ、彼女が目の前で好きな食べ物を食べて幸せそうになる顔が好きだ、彼女が馬鹿みたいに振る舞うところも好きだ。

恋ってというのは本当に不思議なことだよ。相手の動きはどんな馬鹿になっても、それを好きだと心が素直にドキドキと教えてくれる。

――私は彼女のことを好きだ。

だから、彼女に関するすべてを愛している。娘のことや息子のことはもちろん自分の大切な宝物にしている。

私と彼女の子供だもん。愛するのは当たり前のことだ。

彼女と子供二人と一緒に幸せそうに暮らしていれば、私はそれが十分だ。最愛の妻と子供たちと楽しく過ごす日々は人生で最も幸福な時期だと私はそう思っていた。

「なにニヤニヤしているの？ 気持ち悪いな。」

ある日の午後、私は彼女の膝枕を堪能しながらそんなことを考えたらつい、にやけてしまった。

そんな私を見て、妻が容赦なく毒口で返した。

「いや〜あはは、美奈都の膝が最高と思ってつい、にやけてしまった。」

「もう……そんなに好きなの？」

「何もかも好きだよ。美奈都。」

「……………ったく、いつもこういう甘い口で私を狂わせるんだから」

いつも私の愛が満ちた言葉に照れてしまう妻は、この世で一番可愛い女だと私は自負している。

彼女以上の女がない。彼女と夫婦になって、私はとても幸せ者だ。

「あはは……そういえば、篝は最近どう？息子を連れて彼女の家に行ったのだろう。元気にしてた？」

「え……？それは、もちろん元気にしてたよ。私達と同じ結婚したし、可愛い娘もいる。」

「あの篝ならありえるかな。美人だし、可愛いし、真面目だ……いてえ！何するのよ！美奈都。」

「別に……ただ篝のことを結構買うわね。うちの旦那は！」

話の途中、美奈都は突然私の耳を強く引っ張り始めた。彼女の顔をちよつと覗くと、怒っているように見える。

「いてえ……悪かった！愛しているのはお前しかいないんだ!!」

「なら許す。お前は私の夫だから……私だけを見ればいいのよ。」

私の耳を引っ張るのを止めた美奈都はちよつとほっぺを膨らんだ。

正直滅茶苦茶かわいい……。嫉妬している彼女はもちろん怖いけど、その独占的な一面も堪らないくらい愛おしい。

「いてて……しかし、あの頑固の塊である篝さえも人の妻になったとは……対象も相当やるみたいだな。」

「ふふ、篝から聞いた話によると特に子供の頃から世話になったお兄さんだそうです。」

「え？親族?」

「いや、血の繋がりが無いよ。ただ兄のように慕っていた方だと聞いた。」

「へえ、あの篝が紫以外の慕っている対象がいるなんて」

また鎌府にいた頃、美奈都と特に仲がよかった柊篝は常に生真面目な性格で恋愛など無縁のほどの美人だ。

そのだいは折神紫の護衛を勤まるのが原因だ。篝の家は折神家に代々仕える家系だったらしい。

ゆえに女の子らしく振る舞う姿はあまり見たことがなく、彼女の全てはまるで折神紫のために生きて仕える使用人のように見えた。

そんな彼女も普通の女の子と同じ、誰かと恋に落ち、結婚までもし

た。かつての友人として彼女の幸福に祝う。

「驚いたでしょう？ 私も驚いたよ。あの篤が恋愛するなんて……あんな幸せそうに暖かい家を作るなんて……本当によかったよ。」

「美奈都……」

「ねえ……刀也。先に私と約束してくれないかな？」

「うん？ 約束？ 別にいいけど。私の能力範囲内なら叶えてあげる。何にせ、愛^妻おいしいお前の要求だ。」

唐突に、妻は私の頭を優しく撫でながら私にいつものおねだりする。

そんな妻の要求に自分はいつも躊躇うなく頷いた。何せ結婚する時から彼女を幸せにするため、彼女の願いを何ても叶うって決めたから。

「何かあってもこの家を、可奈美と都を守ってね。」

「……おいおい、お、おかしいな言い方だな。まるでお前はもうすぐこの家からいなくなるって聞こえるみたいだけど？ 笑えない冗談はよせてくれ。美奈都。」

しかし、彼女が今回頼んだことに私は不安しか抱かれなかった。いつも樂觀だった妻は今笑っているかのもわからなくなってきた。

「刀也、あなたは昔からいつも私の不安を追い払ってくれた。剣術しか持たない私にたくさんの幸せをくれた。だからこのおねだりはあなたにしか託せないの。」

「美奈都……」

「あなたに申し訳ないことをしたと思っっているわ。でも、一度私に希望をもたらしたあなたならきつと私の期待を応えてくれると心の底から信じている。あなたの返事を信じて待つてるわ、私の愛おいしい刀也。」

自分勝手に話を進んだ美奈都はどこから安心を得た表情をした。その表情から自分への信頼を満ちている。

当時、その表情や言葉の真意を全部知ることが得なかった自分です……。その数ヶ月後、彼女の体調が崩れたと共に彼女が言っていたことを知ることができた。

それはあまりにも悲しい頼みであった。

◇

現在 鎌府女学院、道場――

「可奈美、糸見沙耶香と舞衣ちゃんは私が担当する！他の三人は一樹に任せよ！」

運動ジャージを身に纏う衛藤家の主人衛藤刀也は、同じ運動ジャージを着る可奈美たちに大きな声で発声する。

今、彼女たちの実力を更にするため、剣術の指導を行う。無論写しの使用は禁止されている。

「お父さんと戦うんだ……」

「うん……まさか、早速実戦だなんて……」

「……………」

緊張しているのか、可奈美たち三人はなかなか落ち着けない。何にせ、相手は可奈美のお父さんなのだ。刀使の力が禁用されたとはいえ、守るべき人間に剣を振るのはやはり刀使としては慣れないことだ。

その一方、薫たちも同じだ。彼女たちは一般人と戦う経験がないから、どうやって戦うのか迷ってしまう。

「オレたちはベツタン女のお父さんか……大丈夫なのか？」

「おい！人のお父さんの前で私のことをベツタン女って言うな！」

「でも、学長たちに止められないということは相当の実力が持っているですよネ？ヒヨコンのパパは」

竹の剣を振って、重量を確かめるエレン。その中に相当の鉄が入れたおかげで、持つ感覚は剣を持つと同じ感覚だ。

これも彼女たちにこれが実戦だと感じさせるための小細工だ。

「それはわからない……お父さんはかつて特別祭祀機動隊に所属していたことを知っているが、それ以外のことは知らない。」

「なんだ？お父さんと仲が悪いのか？」

「それでも……いや、そうかもしれない。私はお母さんが亡くなった後、一度もお父さんと話すことがない。昨日は久々なんだ。」

「ヒュヨン……」

？和の過去をよく知っていた薫たち。彼女^{姫和}はきつと自分のお父さんが自分の復讐に巻き込まれたくないから、わざと実の親と距離を取ったと思う。

何にせ、姫和は都と同じ人思いの自己犠牲型のバカなのだ。だから薫はずっと彼女のそばでくだらない茶番を演じ続けた。

……まあ、一部は彼女自身の悪趣味だけど。それでも？和を守るため、彼女も自分なりに？和の精神を支えるつもりだ。

「心配するな、エレン。家のことは流石にお前たちを巻き込むつもりがない。私のことは私一人で解決するから、お前たちは鍛錬のことだけに集中すればいいのだ。」

「まあ……面倒だけど、オレは最初からそのつもりだ。ペったん女のお父さんの実力方面は心配だが、それでもオレはこれ以上強くなりたい。あいつだけ、タギツヒメのことを任せられないからな。」

「そうですね。ミヤミヤは無理屋さんだから、誰か彼のことを見てもらわないと駄目だからネ。」

「うん……そうだね。私もいつも彼を頼ったばかりじゃられない。もっと強くならなきゃ……」

？和の目には強い意志が宿っている。

彼を守りたい。もうこれ以上彼に守られたばかりじゃ嫌だ。

「……………」

そして、？和たちの対話を偶々耳に入った一樹。彼は自分の娘の成長に喜んでいると同時に、罪悪感が心の奥から湧き出した。

娘の力になれなく、彼女は自力で成長した。この事実には彼は自分が不器用な親だと自覚し始めた。

数分後、稽古が正式に開かれた。

一番手取り早く行動を出していくのは可奈美の方だ。彼女は速やかに自分のお父さんに攻撃する。

「へえ！せい！やあ！」

「悪くない攻撃だ、流石我が娘。だが、動きが単純すぎる！そんなじやタギツヒメに届かないよ！」

「うぐうっ!!」

しかし、可奈美は攻めに徹するあまり、動きが読まれ反撃を食らい吹き飛ばされた。

「可奈美ちゃんが……」

「吹き飛ばされた……」

それを目にした舞衣と沙耶香は共に驚いた。可奈美は舞衣たちが知る人の中で一番強い剣士なのだ、そんな彼女が相手の攻撃で吹き飛ばされた光景は初めて見た。

それところが、攻めに入った可奈美を軽く吹き飛ばすのが更にあり得ないことだ。

「痛い……さっきの動きが読めない？」

地面に転んだ本人もどうやらこのような状況が読めなかったらしい。

「さて、糸見沙耶香と舞衣ちゃんも一気にかかってもいいよ？例え一対二でも若者たちに負けはしないぞ！」

「沙耶香ちゃん。」

「うん！」

刀也からの挑発に乗る二人は呼吸を合わせて、刀也の方へ攻めていく。しかし、まるで攻撃が見抜かれたようで二人は可奈美のように反撃され、吹き飛ばされた。

「強い……！」

「……………」

「みんなの剣筋がいい。だが、技術はまだまだ……だぞ！」

「……………」

可奈美の奇襲を防げた刀也。彼はただ竹の剣を持つ片手で横から襲ってきた可奈美の全力込めた斬撃を受け止めた。

「足音が大き過ぎだ！奇襲っていうのは無声無息で相手に攻撃することだ！」

可奈美の剣を弾けて、可奈美のお腹に軽く直撃する。

「うぐっ！」

それを受けた可奈美は危うく後ろへと倒れ込むところだった。

「お前たちは刀使の力を頼りすぎだ！ただ封じられただけでこの様……美奈都に見せる顔がないぞ！可奈美！」

可奈美の心の中にあつた、普段優しいお父さんのイメージがほとんど消えかけていた。今日の前にいるのは、例え相手は娘であっても剣の立ち合いにおいて容赦がない鬼である。

だけど、ここを退くわけにはいかないと可奈美は自らの意志を固まらせていながら、崩れそうな体勢を取り戻す。

（もう弱いままの自分じゃ嫌。もうあの人に守られたばかりじゃ嫌だ！）

「もう一回！お父さん！」

立ち直り、可奈美は再び自分のお父さんに構えを取る。

「いい目だ。それでこそ私と美奈都の子供！さあ、来い！」

「せやあああああー！！！」

可奈美がまた刀也の方へ攻撃する。二人は同じ流派で互いの技を読み解かず。

それでも、技の技量から見ればお父さんのほうが高いようで、可奈美はかなり苦戦している。

「舞衣、私も行く！」

「沙耶香ちゃん……？」

二人の戦いを見て、沙耶香は竹の剣をしつかり握って立ち上がる。「私は、可奈美に手遅れたくない……それに、この状態をなるべく早く慣れたい。」

「沙耶香ちゃん……うん、私もだよ。」

沙耶香の次に舞衣も立ち上がって、再び刀也の方へ攻めていく。

三人は一斉に刀也を攻撃しているが……それでも舞衣たちは優勢ではなかった。

彼一人で可奈美たち三人の攻撃を対応できた。三人はどれほど攻撃しても、刀也から一本を取れなかった。

これは二十年前の折神紫と互角戦った実力者。可奈美と都の実の父親。

「剣の腕は長い歳月が経っても全く劣っていないみたいだね。」

「ふふ、ちよつと懐かしいかもしれへん。」

そして、壁際で刀使たちの実戦訓練をじっくりと見守っている美濃関学院学長羽島江麻と平城学館学長五条いろは。

彼女たち二人は特訓の進展がうまく進んでいくかどうか確認しに来たのであった。何にせ、刀使たちのご両親が刀使たちの剣術指導を行うのが五箇伝の歴史上では前代未聞のことだ。

「にしても、衛藤さんたちは明らかに圧倒されてますね……うちの学院で最も優れた刀使二人組なのですが」

「刀使としては優れ者やけど、その力が禁用された今、かなり圧倒されている。」

戦況を分析し、二人の学長は可奈美たちがどうしてこんなにボロボロされる原因を探る。

「やっぱり刀也さんの言うとおり、衛藤さんたちは刀使の力を頼りすぎたのかな？」

「多分ね。刀也はんたちが彼女たちに教えられるのは剣術……御刀が授けた力と関係ない技術なんや。」

「つまりこれは……」

「刀使としたの実力は十分なんやけど、剣の実力はまだまだ足りなかった。都はんもそうやけど……彼女たちと違い、欠けたのは技術ではなく、力なんす。」

「それを見抜いて、彼らは……」

「ええ、一般人しか気付かない問題。江麻ちゃんところの都はんも特にそれを気付いて、刀使に挑むやもしれん。」

答えを見つかり、いろは学長は今回？和たちの方を見る。？和以

外、エレンと薰は十条一樹の攻撃速度をついていくにはかなり手遅れしている。

いや……ただ二人より少し早かった？和は少し追いつけているだけで、彼女も自分の父に抑えられている。

十条一樹、特別祭祀機動隊歴代最も優秀の隊員。荒魂討伐現場で刀使たちの動きをよく見る男、加えて柀箒から剣技を教わっていた唯一の男性。

噂によると、彼は既に箒先輩から鹿島新当流免許皆伝をもらったらしい。

どっちの父親でも剣の腕は現役の刀使たちにちつとも劣っていない。もしか、都と同レベルなのかもしれない。

「？和ちゃんたちの相手には相応しいかもしれないな。」

「そうですね……」

この場で可奈美たちが努力する姿を見守っている二人の学長。

彼女たちはこの鍛錬においては更に強くなるとそう信じていながら、それぞれ視線を可奈美と？和の方に向く。

親族から直接剣術を教われることにより彼女たちはこれから先に強くなるのだろう。しかし、二人の家には少し問題があると学長である彼女たちは知っている。

この機において、その問題が解決できればいいのだけど……。

「そういうえば、本来ここにもいたはずの都はんはどこに行ったん？どこにも見当たらないやけど……」

「彼なら親衛隊と共に出かけましたよ。詳細はあまり知らされてないんだけど……」

「そうか……真希ちゃんと一緒か」

「いろは学長、どうしたんですか？」

いろは学長がぼつとしている姿を見て、羽島学長は関心する。

「なんにもありません。ただ都はんはんに少し貸しがあります。彼はうちの真希ちゃんを無事に連れて帰ったんや。それだけではなく、うちがいない間にも早苗ちゃんと平城の子たちも彼のおかげでいつもより元気に溢れたん。学長としては感謝せなあかん。」

「そうなんですね。それじゃ、全てが終わったら彼を平城に預かりましょうか。」

「え？江麻ちゃん、それええの……？」

「はい。元々彼を美濃関だけに留まらせるつもりがありません。それに学生を自由に選ばせるのが美濃関特有の学風です。」

いろは学長の困惑に羽島学長は爽やかな笑顔で頷いた。

彼がもたらした影響は美濃関だけでなく、平城にも彼の影響で少しずつ良くなっていく。彼と共に歩けば、これから先の五箇伝はうまく行くのだろうと彼女は心のうちにそう期待している。

「……そう。江麻ちゃんはずっと変わらないやね。むくかしからずっと他人に優先で自分がどうでもええところはまったく変わらなかった。……あの時も手にいれるはずの幸せをあつさり手放した。」

「だって、あの時の私は特に負けたんだもん。それにその方があの二人に一番の幸せを与えられるとあの頃はそう思っていたのです。」

「江麻ちゃん……」

そう言つて、彼女の視線は可奈美たちの方へ向けた。可奈美があんな元気がいい子に育てたのも、きつと両親の愛が含まれたからだ。

そして娘たちがピンチになったとき、わざわざ助けに来た彼もきつと今でもあの人のことを深く愛するのが決まっている。

「美奈都さんは幸せな人生を過ごせたのでしょね……」

なら当初の選択は間違っていないと羽島江麻は自分にそう言い聞かした。



折神本家敷地内における北西方面にある建物。ここは遙か昔、折神家が代々渡って積み重ねてきた古い遺物や古い文献を保存するために使われていた場所だ。けど二年ほど前、折神朱音が折神家に反旗を挙げた舞草を創立したことにより現当主折神紫は折神家の秘密を守るため、即刻に書蔵庫が保存しているすべての文献を別の場所に移送させた。その際、この書蔵庫はずっと廃棄されたままだった。

折神紫が表の舞台から消えたあと、この場所は昔みたいに文献や書類を保存する用途ではなく、管理局の改革と共に別の用途として再利用された。

そして、この場所は管理局が新たに設立した刀剣類管理局特別捜査情報科という部門の拠点として選ばれた。

刀剣類管理局特別捜査情報科は管理局の改革と共に設立された管理局に直属する新たな部門であった。主の目的は荒魂に関するあらゆるの情報捜査及び管理局に背ける違法ノ口実験の情報捜査。それを創立させたのは他ではない折神朱音本人である。

折神本家突入作戦が成功した日以来、旧折神派残党及び高津雪那が率いるノ口研究チームを一掃するため、舞草折神朱音派はあらゆる対策を出し尽くしていた。しかし、旧折神派の情報があまりにも少ないことにより、全部捕まることができなかつた。そんな時、ある情報提供者が提供した情報を手元により旧折神派掃討作戦は前より順調に進んでいた。

その後、情報の重大さを理解した朱音は管理局内部で情報科という新たな部門を作り、その部門の運営を旧折神派掃討作戦に大きく貢献した謎の情報提供者に託した。

そして謎の情報提供者である彼女も朱音の期待を背向けなく、この五ヶ月間で情報科を大きく育ちました。今だにメンバーが少ないが、新米を含めた優秀な人材がこの部門に揃っている。

「ようこそ我が職場へいらっしゃいました。親衛隊のみんなさん。」

「ふむ、ここは管理局内部で噂とされている新たに設立していた情報科なのか？立派なところだな。」

「……なるほど。折神家がかつて使い捨てたこの場所を最利用した

「んのですね？よく同意してくれましたね。」

「はい、朱音様のおかげでこのような立派な拠点を手に入れることになりました。今だに人員が少ないけど、これから大きくするつもりです。」

「立派な志だ。朱音様に見出したお前ならこの部門をうまく率いるだろう。」

「真希さん、あまり褒めすぎないでいただきたいのだから。重大の役割を背負う人間は常に己を厳しくしなければなりません。あまり褒めすぎると傲慢という悪い感情が産み出してしまいます。」

「寿々花……もしかして機嫌が悪い？」

「気のせいです。私はただ真希さんが褒め口を容易く出していく悪いところを訂正していただけです。ええ、何せまた親衛隊にいた頃から真希さんはいつも手下の刀使たちにそんな甘い口をしたあげく、何人の刀使は真希さんにメロメロされて自分の役割を忘れていたことがあります。」

「そ、そうか……？なんかすまないことをしてしまった。」

刀剣類管理局特別捜査情報科、略して情報科に足を入った獅童真希と此花寿々花及び衛藤 都三人は部署の隅にある簡易テラスにて客人招待用のお茶を嗜みながら情報科課長の竹島雅と少し世間話をしている。

とはいえ、彼女らがこの場に來たのはただのんびりと茶を飲むだけではなく大事な要件があつてここに來たのだ。

「あはは……そういえば、さつきからお茶を口にしたことがないですね。もしかして口に合わないのですか？英雄様。」

「いや、そんなことはないよ。ただ大事な要件があるのに、ここでのんびりとお茶を飲んでいいのか？可奈美たちは今頃も頑張っているし、倒すべきタギツヒメも日々強くなつていくことに……心がどうしても落ち着かないんだ。それに……お父さんの件も。」

「……あはは、確かにこの情勢の下ではなかなか落ち着かないですもんね。私もこのような情勢の下で冷静を抱いていられない……。それでも上に立つ者は部下たちにそんな弱い一面を見せられちゃ

いけない。私はこの位置についていたからわかったんだ……上に立つものの苦勞というものを」

そう言い、雅は苦笑いながら茶を飲む。よく見ると彼女の目元に少々隈ができている……。たぶんここ最近は本当に疲れているのだろうね。

「それで？竹島さん。私たち親衛隊にいったいどのような要件でですか？私たちは管理局の指示でタギツヒメの次なる行動を防げるために準備万全の状態を維持して出撃命令を待機しております。その価値を堪えられる要件なんでしょうか？」

「……はい。少なくとも私たち刀使にとって無視できないほどの要件です。」

そしていよいよ物の本題が入る。

「もしかしてタギツヒメがいよいよ動き出していくということなのか？」

「……はい。私たちが得た情報が確実なら、近いうちにイチキシマヒメを保護する絶対安全の庇護所は消えることになる。そうなった時、タギツヒメはタキリヒメを取り戻す時みたいに直接奪いに来るでしょう。」

「つまり私たち親衛隊にイチキシマヒメの護衛という重大な任務を任せますの？」

「いいえ、この度折神紫様が考案していた作戦はイチキシマヒメを保護しながら安全地点に撤退させる作戦ではなく、タギツヒメを誘い出すための殲滅作戦です。」

「殲滅……作戦。」

「紫様が自ら考案した作戦……。それはどういうことですか？」

両手を胸前に抱いて、真剣な表情で質問をする寿々花。とはいえ、彼女は別に紫のことを疑うわけではなく、ただこんなリスクが高い作戦は本当にあの折神紫が考案する作戦なのか？って疑っている。

その思惑を抱いている寿々花に雅は冷静に説明する。

「今の情勢では、タギツヒメは近衛隊や政府に保護されており、タギツヒメを接近し討伐するのは不可能だ。その一方、高津雪那が裏で妙

な動きで米国に手を回している情報が手に入れました……。そんな情報を受け取った私たち情報科はすぐその情報を情報科が所有する独自通信回線を通じて折神紫様に知らせたのですが、そこで彼女はその作戦を私たちに伝えたのです。それは――ただ一度きりのチャンスしかないタギツヒメを打倒する作戦です。」

「つまり紫様はイチキシマヒメが奪われるリスクを賭けても、イチキシマヒメを吸収しに現れるタギツヒメを打倒するということなのか？」

「たぶんご当主様はそのようなつもりです。タギツヒメを管理局が干渉できない拠点から誘い出す絶好のエサはイチキシマヒメの他ならない。紫様も乾坤一擲の決意でこの作戦を作ったのでしよう……」

「紫様が……」

「どうやら僕たちに残されている選択もそう多くはないか……」

そう呟いて、寿々花と真希も今情勢の厳しさに痛みを感じる。世界を救うためには世界を危険に晒すリスクを背負わなければならない。それはノ口を体内に注入する親衛隊の二人がよく理解していることだ。

「雅、それで俺たち親衛隊は何をすればいい？ わざわざこの事を私たちに知らせようとすると、何かしてきて欲しいことを私たち親衛隊にやらせたいんじゃないか？」

「……………」

自分が狙っているところが都に論破されたようで、雅は口と目を閉じる。やがて数秒後、彼女は真面目な顔で寿々花と真希の方へ向く。

「…実は、私、この重要な作戦を伝えること以外にあなたたち親衛隊に私的な用件があります。前回防衛省襲撃された時、此花さんと獅童さんに伝えられなかった皐月夜見の過去についてこの機において親衛隊のみなさんにお伝えしたいと思います。」

「……………」

「やっと話す気になったか……竹島。」

「はい。あの夜、皐月さんとの戦いが終わった後、私は真つ先に負傷している獅童さんと此花さんを病院へと送らせた。本来お二人が出

院した後、皐月さんのことを話すつもりだったのですが……その後、朱音様からの命により真つ先に近衛隊の行方を追跡することで、お二人にゆつくりと話す機会がなかったのです。」

「それは構いませんわ。当時の大局を考えればタギツヒメを率いる近衛隊の行方を追うのが最優先事項なのはです。ですから私たち親衛隊はあなたが私たちに何も告げないことに何とも言いません。」

「……はい。お気遣いくれてありがとうございます。此花さん。」
改めて寿々花に礼を言う雅。

「それじゃ、改めて場所を変えて夜見さんのことを話しますね。」

「待った。寿々花と雅が仲直りになったのはとてもいいことなのですが……俺も皐月さんの過去を聞いてよかったのか？俺、彼女と一度も会ってないし、名前と能力しか知らない。彼女が秘めた秘密を聞いてよかったか？」

「あ、はい。それは構いません。何せこれから話す内容は私の過去の一部でも関わります。本来この事を永遠に胸の奥にずっと隠しておきたいのですが……皐月さんを助けるためならば、私も勇気を絞り出し自分のことをあなたたちに話します。それに私も自分のことを話すきっかけに新生親衛隊のみんなさんともっと良い信頼関係を築きたいです。」

「……なるほど。だったらじっくりと聞きましょうか？都。」

「そうですね。乙女がこんなに誠意を出しきったのであなたも相應の覚悟を出してください、都くん。」

「わ、わかったよ。ただ皐月さんの話を聞くのを遠慮したいと思うのだけど、なぜか叱られる気分になった気がするよ……つたく。」

「ふふ、英雄様は本当に良い仲間が恵まれたんですね。……本当に羨ましいかきりです。」

ぶつぶつと小さい声でそう呟いて、雅は改めて都たちに自分と夜見の過去を全て話した。